

奈良県桜井市

史跡 纏向古墳群

# 纏向石塚古墳

発掘調査報告書

2012. 3. 30

桜井市教育委員会





桜井市埋蔵文化財

発掘調査報告書 第38集

奈良県桜井市

史跡 纏向古墳群

# 纏向石塚古墳

発掘調査報告書

2012. 3. 30

桜井市教育委員会





縄向遺跡と縄向古墳群全景（2011.4 北西より）







整備事業前の纏向石塚古墳（1986.11 北東より）







纏向石塚古墳全景（1992.3 右が北）









## 序

私達の桜井市は大和平野の東南部に位置し、市域の約2割を占める平野部の中央には山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流を集めた大和川がほぼ東西に横断し、この大和川を挟んで南は桜井茶臼山古墳をはじめとしてメスリ山古墳、安倍寺跡、上之宮遺跡、坪井・大福遺跡、北では芝遺跡、箸墓古墳、纏向遺跡など全国的にも貴重な文化遺産が数多く知られています。

桜井市ではこれらの遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力をいれておりますが、ここに報告させて頂くのは平成17年度に纏向古墳群の一つとして国の史跡指定を受けた纏向石塚古墳の調査報告であります。

纏向石塚古墳については調査主体が奈良県立橿原考古学研究所と桜井市に分かれており、これまでも各機関から数冊の調査報告書や概要報告書が刊行されておりますが、この度桜井市教育委員会では各機関によって行われたこれまでの調査成果を総括する形で本報告書の作成を計画したものであります。

本報告書の作成にあたりましては指導・助言を頂いた県立橿原考古学研究所をはじめとする多くの関係機関の方々や遺跡の重要性を御理解いただき現地調査に協力していただいた地主及び地元協力者の方々に深く御礼申し上げます。

この多くの皆様の御協力のもとに成った本書が桜井市の文化財の普及・啓発の一助となり、また研究者の方々の資する所となれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

平成24年3月30日

桜井市教育委員会

教育長 雀 部 克 英



# 例 言

1. 本書は桜井市教育委員会および奈良県立橿原考古学研究所が実施した纏向石塚古墳の発掘調査報告書である。調査は35年の間に9次と長期にわたって行われており、報告の作成にあたっては調査回数ごとに行うこととした。

なお、第1・2次調査については既に正式な調査報告書が刊行されているため本書への掲載にあたっては原則として本文は誤植の訂正と体裁を整えるための編集に留め、遺構図については橿原考古学研究所の御協力のもと原図より新規作成したものと、再トレースを実施させていただいたものがある。また、第3次調査報告は本書が初出となるが、今回本報告の刊行にあたり奈良県立橿原考古学研究所より格別の御高配をいただき、本書に掲載することができたものである。

2. 発掘調査主体：桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
3. 本報告書の作成にあたっては平成17年度より整理作業に着手し、平成21～23年度には国・県による補助事業の採択を受けて奈良県立橿原考古学研究所の御協力のもと桜井市立埋蔵文化財センターおよび纏向遺跡調査事務所において調査資料の再整理と報告書の作成を行ったものである。
4. 記録による調査期間・体制は以下のとおりである。纏向遺跡の調査の中でも初期の調査も含まれており、記録を完全に確認できなかった部分もある。遺漏もあると思われるが御容赦願いたい。

なお、所属はいずれも調査当時のものである。

## 【昭和46年度 纏向石塚古墳第1次調査（纏向遺跡第6次）】

調査期間：昭和46年12月6日～昭和47年3月18日

調査主体：桜井市教育委員会 教育長 西村司

教育委員会総務課長 森岡靖次、学校教育課長 増田寛和、

庶務係長 浦西照正、松田清吾

調査担当：奈良県立橿原考古学研究所 技師 石野博信、技師 河上邦彦（古墳測量担当）

## 【昭和50年度 纏向石塚古墳第2次調査（纏向遺跡第8次）】

調査期間：昭和50年5月15日～昭和50年6月4日

調査主体：奈良県教育委員会 教育長 池田武夫

奈良県立橿原考古学研究所総務課 東森正文・畠山直久・松田真一

調査担当：奈良県立橿原考古学研究所 技師 久野邦雄・嘱託 関川尚功

なお、纏向石塚古墳第1・2次調査では以下の方々の協力と参加があった。

調査補助員：中野正敏（関西大学工学部）、三浦寿夫（甲南大学）、関川尚功・長生修三・中野雅世・加古千恵子・清原弘美・岡みどり・上田善美・滝山恵美・入江文敏・山本哲也・小口由利子（関西大学考古学研究室）、折井千枝子（関西学院大学考古学研究会）  
整理協力者：辻俊和（榛原高校教諭）、泉武（立命館大学文学部）、花岡皚子（橿原考古学研究所）

調査作業員：松下駒蔵、山口京一、松下由太郎、松下ミツエ、吉田チエノ、谷口チエノ、谷口秋子、山口千代子、中川芳子、中川慶子、前田百合子、山口勝儀、藤田宝昭、松下明博、藤田清平、松下俊秋、溝口勝、溝口茂夫、溝口タミエ、中川ヒサエ、竹内静子、  
整理作業員：竹内美栄、岡田照子、杉田八重子、南ヨシエ、  
写真協力：光画園 金塚尚士

**【昭和51年度 纏向石塚古墳第3次調査（纏向遺跡第10次）】**

調査期間：昭和51年7月12日～昭和51年8月12日  
調査主体：奈良県教育委員会 教育長 池田武夫  
調査担当：奈良県立橿原考古学研究所 技師 久野邦雄・嘱託 寺沢薫  
調査補助員：山本哲也・入江文敏・上田喜美・大岡まゆみ・南前千尋・文殊省三・山口徳夫・川崎裕之（関西大学）、吉村律三（近畿大学）、真鍋昌宏・今尾文昭・小山田宏一（同志社大学）、小口由利子・横尾幸枝（奈良文化女子短期大学）

**【平成元年度 纏向石塚古墳第4次調査（纏向遺跡第55次）】**

調査期間：平成元年4月17日～平成元年6月17日  
調査主体：桜井市教育委員会 教育長 南正直、教育次長 坂本昌弘、  
社会教育課長 小山剛、文化財係長 萩原儀征、主任 清水眞一  
調査担当：桜井市教育委員会社会教育課文化財係 係長 萩原儀征、主任 清水眞一  
奈良県立橿原考古学研究所 主任研究員 寺沢薫  
調査補助員：竹林加奈子（橘女子大学OB）、江浦至希子・桜井恵（奈良大学OB）、白沢崇（関西大学）、木場幸弘（国学院大学）、桐山智義・橋本輝彦（奈良大学）  
整理作業員：岡村佐智子、吉崎文子、大西静子、青木久子、藤井妙子

**【平成3年度 纏向石塚古墳第5次調査（纏向遺跡第62次）】**

調査期間：平成3年9月17日～平成3年11月17日  
調査主体：桜井市教育委員会 教育長 南正直、教育次長 平野和男、参事 北島和典、  
社会教育課長 高松隆司、主幹 萩原儀征、文化財係 主任 清水眞一  
調査担当：桜井市教育委員会社会教育課 主幹 萩原儀征  
調査補助員：岩橋孝典・松宮昌樹（奈良大学）  
調査作業員：植田光男、植西靖治、平岡高雄、植西キヨ、辻カズ子、嶋岡道子  
整理作業員：青木久子、佐々木聖子、嶋岡由美、藤井妙子、阪本美鈴

**【平成3年度 纏向石塚古墳第6次調査（纏向遺跡第66次）】**

調査期間：平成4年1月21日～平成4年3月11日  
調査主体：桜井市教育委員会 教育長 南正直、教育次長 平野和男、参事 北島和典、



社会教育課長 高松隆司、主幹 萩原儀征、文化財係 主任 清水眞一  
調査担当：桜井市教育委員会社会教育課 主幹 萩原儀征  
調査補助員：岩橋孝典・松宮昌樹（奈良大学）  
調査作業員：植田光男、植西靖治、平岡高雄、植西キヨ、辻カズ子、嶋岡道子  
整理作業員：青木久子、佐々木聖子、嶋岡由美、藤井妙子、阪本美鈴

**【平成 5 年度 纏向石塚古墳第 7 次調査（纏向遺跡第77次）】**

調査期間：平成 5 年12月 2 日～平成 6 年 2 月20日  
調査主体：桜井市教育委員会 教育長 南正直、事務局長 澤井和彦、  
社会教育課長 高松隆司、主幹 萩原儀征、文化財係 主査 清水眞一  
調査担当：桜井市教育委員会社会教育課 主幹 萩原儀征  
調査補助員：松宮昌樹・立田理（奈良大学）  
調査作業員：植田光男、植西靖治、平岡高雄、植西キヨ、辻カズ子、嶋岡道子  
整理作業員：青木久子、佐々木聖子、嶋岡由美、藤井妙子、阪本美鈴

**【平成 8 年度 纏向石塚古墳第 8 次調査（纏向遺跡第87次）】**

調査期間：平成 8 年 7 月30日～平成 8 年11月22日  
調査主体：桜井市教育委員会 教育長 南正直、事務局長 渡辺実恵、事務局次長 峯嘉秀、  
社会教育課主幹 萩原儀征、文化財係長 清水眞一、主任 井上紀美、  
技師補 橋本輝彦、臨時職員 岩崎大介  
調査担当：桜井市教育委員会社会教育課文化財係 技師補 橋本輝彦  
調査補助員：村上薫史・松本紀代乃・小川裕子・小湊久美子・小畑佳子（奈良大学）、中村真理  
調査作業員：植田光男、平岡高雄、佐野圭造、植西キヨ、辻カズ子、嶋岡道子、荻谷俊介(土舞台)  
整理作業員：嶋岡由美、阪本美鈴、藤井妙子、奥田佳代子、木下理恵、  
なお、本調査では調査前半期にあたる 7 月30日～8 月 9 日の調査を以下の者が担当し、これ以外  
はすべて上記の体制で調査を実施している。  
調査担当：桜井市教育委員会社会教育課 主幹 萩原儀征 文化財係 臨時職員 岩崎大介  
調査作業員：松本喜久雄、杉田栄一、山口定男、谷口英知、鳴海靖、岩田利治

**【平成17年度 纏向石塚古墳第 9 次調査（纏向遺跡第144次）】**

調査期間：平成17年12月27日～平成18年 3 月31日  
調査主体：桜井市教育委員会 教育長 石井和典、事務局長 森北好則、事務局次長 中川行央、文  
化財課長 森幹雄、主幹 杉本好成、文化財係主任 橋本輝彦、技師 松宮昌樹・福辻淳、  
技師補 丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子、日々雇用職員 辰巳智圭子  
調査担当：桜井市教育委員会文化財課文化財係 技師補 丹羽恵二、臨時職員 橋爪朝子  
調査補助員：堂浦千景、西田良子、更谷綾、福西貴彦（奈良大学大学院）、相場さやか（奈良大学）、

山口寛・岩城圭吾（天理大学）

調査作業員：嶋岡辰雄、井上久幹、上田猛、宮前秀年、辻カズ子、川島利市郎、田中啓治、  
高奥恵子、中西智子、宮久保吉暲、澤田巳喜雄、小南一也

整理作業員：嶋岡由美、大島郁美、井ノ本奈津子

5. 本報告書の作成にあたっては以下の方々に御指導、御協力を頂いた。記して感謝いたします。（所属は整理・報告書作成期間中の所属。敬称略）

石野博信（香芝市二上山博物館館長）、菅谷文則（奈良県立橿原考古学研究所所長）、関川尚功・西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所）、奥田尚（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）、金原正明（奈良教育大学）、瀬宜田佳男（文化庁記念物課）

なお、現地調査および整理作業を通じては研究者、行政関係者、地元の方々と多くの方々から御指導・御協力を賜ったが、第1次の調査開始から本報告刊行までの期間が実に40年と長きにわたったことから、すべての方々を把握することができなかった。御芳名を省く非礼をお許し頂きたい。

6. 整理作業及び報告書の作成：本報告にかかる調査資料の整理と報告書の作成は以下の体制で行い、桜井市纏向学研究センター設立準備顧問 寺沢薫、桜井市教育委員会文化財課 橋本輝彦・丹羽恵二・木場佳子・橋爪朝子（～平成20年度まで）が主にこれを担当した。

#### 【平成17年度】

桜井市教育委員会 教育長 石井和典、事務局長 森北好則、事務局次長 中川行央、  
文化財課長 森幹雄、主幹 杉本好成、主任 橋本輝彦、技師 松宮昌樹・福辻淳、技師補 丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子、日々雇用職員 辰巳智圭子

#### 【平成18年度】

桜井市教育委員会 教育長 石井和典、事務局長 森北好則、事務局次長 瀬川憲嗣、  
文化財課長 森幹雄、主幹 杉本好成、主任 橋本輝彦・松宮昌樹、技師 福辻淳・丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子、日々雇用職員 辰巳智圭子・堤野真依

#### 【平成19年度】

桜井市教育委員会 教育長 石井和典、事務局長 森北好則、事務局次長 瀬川憲嗣、  
文化財課長 森幹雄、主幹 北浦良郎、主任 橋本輝彦・松宮昌樹、技師 福辻淳・丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子・岩城圭吾、日々雇用職員 堤野真依・西岡恵美

#### 【平成20年度】

桜井市教育委員会 教育長 雀部克英、事務局長 瀬川憲嗣、事務局次長 松田清吾、



文化財課長 竹田勝彦、主幹 北浦良郎、主任 橋本輝彦・松宮昌樹・福辻淳、  
技師 丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・橋爪朝子・福家恭、日々雇用職員 西岡恵美

#### 【平成21年度】

桜井市教育委員会 教育長 雀部克英、事務局長 瀬川憲嗣、事務局次長 松田清吾、  
文化財課長 竹田勝彦、文化財係長 川口忠英、主査 橋本輝彦、主任 松宮昌樹・  
福辻淳・丹羽恵二、臨時職員 木場佳子・福家恭・金松誠・武田雄志・荻谷史穂  
日々雇用職員 西岡恵美

#### 【平成22年度】

桜井市教育委員会 教育長 雀部克英、事務局長 松田至功、文化財課長 竹田勝彦、  
文化財係長 橋本輝彦、主査 寺田智子、主任 松宮昌樹・福辻淳・丹羽恵二、  
臨時職員 木場佳子・福家恭・武田雄志・荻谷史穂、日々雇用職員 西岡恵美

#### 【平成23年度】

桜井市教育委員会 教育長 雀部克英、事務局長 松田至功、桜井市纏向学研究センター設立準備顧  
問 寺沢薫、事務局次長文化財課長事務取扱 竹田勝彦、主幹 川本光司、  
文化財係長 橋本輝彦、主任 松宮昌樹・福辻淳・丹羽恵二、技師補 森暢郎、  
臨時職員 木場佳子・福家恭・武田雄志・荻谷史穂、日々雇用職員 西岡恵美、

7. 整理作業員：各調査時における補助員・整理員のほか、今回の遺物・資料整理にあたった補助員・  
整理員は以下の通りである。

大西里佳、岡田理絵子、北平太恵子、豊福恵子、西岡優美、西田千秋、山口充子

8. 本書所収の写真のうち遺構・遺物写真は基本的に各調査担当者が撮影を行っているが、このうち  
第4～7次調査の遺物写真は丹羽が撮影を行った。
9. 本書で使用した座標・方位のうち、第4～8次調査は日本測地系による数値を示し、第9次調査  
は日本測地系・世界測地系双方による数値を示しているが、他の第1～3次調査については任意  
の地区設定によるものである。なお、レベル高はいずれもが海拔高を示す。
10. 執筆者：本書の執筆は原則として各調査の担当者が行い、文責は文末に明記している。  
なお、出土石材の分析を橿原考古学研究所共同研究員 奥田尚氏に、樹種・土壌分析については  
奈良教育大学 金原正明氏に、木製品の年輪年代の分析については奈良文化財研究所 光谷拓実氏  
にお願いし、玉稿を頂戴した。記して感謝いたします。
11. 編集者：本書の編集は各担当者と協議のもと寺沢、橋本、丹羽、木場がこれを担当した。
12. 本書における遺物実測図の断面表現は転載となる第1・2次調査を除いて他はすべて土師器・土  
師質－白、須恵器－黒、埴輪－ドット、瓦器－網目とした。
13. 本報告所載の遺物をはじめ調査記録の一切は調査次数毎に奈良県立橿原考古学研究所及び、同附  
属博物館、桜井市教育委員会の各機関において保管されている。活用されたい。



# 目 次

序

例言

目次

## 第1章 位置と環境

第1節 地理的環境……………（橋本） … 1

第2節 歴史的環境……………（橋本） … 2

## 第2章 古記録にみる纏向石塚古墳

第1節 野淵龍潜による調査……………（橋本） … 9

## 第3章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯と経過……………（橋本） … 13

第2節 報告書作成の経緯と経過……………（橋本） … 20

## 第4章 纏向石塚古墳第1・2次調査報告

第1節 現状……………（石野・久野） … 23

第2節 西側周濠の調査（第1次調査） ……（石野・久野） … 23

（1）経過…………… 23

（2）周濠内の堆積土層…………… 23

（3）鶏形木製品の出土状況…………… 27

第3節 西北側周濠の調査（第1次調査） ……（石野・久野） … 29

第4節 南側周濠の調査（第2次調査） ……（石野・久野） … 30

（1）現状…………… 31

（2）周濠内の堆積土と遺物出土状況…………… 31

（3）弧文円板の出土状況…………… 34

第5節 南側墳丘の調査（第2次調査） ……（石野・久野） … 34

第6節 まとめ……………（石野・久野） … 37

（1）周濠掘削時期と存続時期…………… 37

（2）周濠内の遺物によって古墳の築造時期を限定しうるか…………… 37

（3）纏向石塚古墳周囲の黒色粘土のおちこみは、はたして同古墳周濠なのか…………… 38

（4）纏向石塚古墳の原形…………… 38

第7節 纏向石塚古墳周濠出土の木器・木製品……………（辻） … 39

（1）信仰に関する用具…………… 39

（2）土木・建築に関する用具…………… 42

（3）用途不明の木製品…………… 44

(4) 未製品 .....	46
第5章 纏向石塚古墳第3次調査報告	
第1節 はじめに..... (寺沢) ...	57
第2節 西区の調査(第1トレンチ)..... (寺沢) ...	58
(1) 南クビレ部の周濠の調査 .....	58
(2) 周濠内出土の遺物とその出土状況 .....	63
第3節 東区の調査(第2・3トレンチ)..... (寺沢) ...	69
(1) 第2トレンチ .....	70
(2) 第3トレンチ .....	70
第4節 小結－第3次調査の成果－..... (寺沢) ...	72
第6章 纏向石塚古墳第4次調査報告	
第1節 はじめに..... (寺沢) ...	101
第2節 クビレ部北側周濠の調査(第3トレンチ)..... (寺沢) ...	102
(1) 調査の概要 .....	102
(2) 墳丘盛土の堆積状況とその時期 .....	105
(3) 周濠の堆積状況とその時期 .....	108
(4) 周濠内の遺物出土状況と堆積状況 .....	109
(5) 周濠内の遺物 .....	111
第3節 前方部北東隅の調査(第4トレンチ)..... (寺沢) ...	113
(1) 調査の概要 .....	113
(2) 周濠北東隅の調査と出土遺物 .....	113
(3) 中世の遺構と出土遺物 .....	122
第4節 周辺周濠の調査..... (寺沢) ...	122
(1) 第1トレンチ .....	122
(2) 第2トレンチ .....	127
(3) 第3トレンチ .....	127
第5節 その他の現地調査.....	128
(1) 電気探査 .....	(清水) ... 128
(2) ラジコンヘリによる撮影 .....	(寺沢) ... 129
第6節 小結－第4次調査の成果－..... (寺沢) ...	129
(1) 墳形と規模について .....	129
(2) 築造の時期について .....	130
第7章 纏向石塚古墳第5次調査報告	
第1節 はじめに..... (橋本) ...	169

第2節 各トレンチの成果……………	(橋本) …	169
(1) 第1トレンチ……………		169
(2) 第2トレンチ……………		174
(3) 第3トレンチ……………		175
(4) 第4トレンチ……………		176
(5) 第5・6トレンチ……………		177
第3節 小結－第5次調査の成果－……………	(橋本) …	181
第8章 纏向石塚古墳第6次調査報告		
第1節 はじめに……………	(橋本) …	187
第2節 各トレンチの成果……………	(橋本) …	187
(1) 第1トレンチ……………		187
(2) 第2トレンチ……………		192
(3) 第3トレンチ……………		194
(4) 第4トレンチ……………		195
第3節 小結－第6次調査の成果－……………	(橋本) …	195
第9章 纏向石塚古墳第7次調査報告		
第1節 はじめに……………	(橋本) …	203
第2節 各トレンチの成果……………	(橋本) …	204
(1) 第1トレンチ……………		204
(2) 第2トレンチ……………		208
第3節 小結－第7次調査の成果－……………	(橋本) …	210
第10章 纏向石塚古墳第8次調査報告		
第1節 はじめに……………	(橋本) …	217
第2節 調査の成果……………	(橋本) …	218
(1) 検出された遺構……………		218
(2) 出土遺物……………		228
第3節 小結－第8次調査の成果－……………	(橋本) …	233
第11章 纏向石塚古墳第9次調査報告		
第1節 はじめに……………	(丹羽) …	289
第2節 調査の成果……………	(丹羽) …	290
(1) 検出された遺構……………		290
(2) 出土遺物……………		302
第3節 小結－第9次調査の成果－……………	(丹羽) …	305
第12章 分析結果		

第1節 纏向石塚古墳第4次調査周濠内堆積物の植生および環境の復原……………	
(金原・奈良教育大学古文化財科学研究室) …	325
(1) はじめに……………	325
(2) 試料と周濠内堆積物の様相……………	325
(3) 花粉分析……………	325
(4) 花粉分析から推定される植生と環境……………	327
(5) 珪藻分析……………	328
(6) 考察とまとめ……………	330
第2節 纏向石塚古墳第8次調査における環境考古学分析 ……(金原・古環境研究所) …	339
(1) 試料と方法……………	339
(2) 結果……………	339
(3) 考察とまとめ……………	340
第3節 纏向石塚古墳第9次調査における環境考古学分析 ……(金原・古環境研究所) …	348
(1) 試料について……………	348
(2) 結果……………	348
(3) 考察およびまとめ……………	349
第4節 纏向石塚古墳第4次調査出土木製品の年輪年代……………(光谷) …	358
(1) はじめに……………	358
(2) 分析結果……………	358
(3) まとめ……………	358
第5節 纏向石塚古墳第4次調査出土の岩石について……………(奥田) …	359
第6節 纏向石塚古墳におけるレーダー探査 ……(日本無線株式会社) …	360
(1) はじめに……………	360
(2) 調査原理……………	360
(3) 調査方法……………	361
(4) 調査結果……………	362
第13章 纏向石塚古墳の墳形復元	
第1節 纏向石塚古墳の墳形復元の変遷……………(橋本) …	365
第2節 纏向石塚古墳の平面プラン……………(橋本) …	367
第14章 纏向石塚古墳の築造時期をめぐって	
第1節 纏向石塚古墳の築造時期……………(橋本) …	371
第2節 纏向石塚古墳の相対年代……………(石野) …	371
第3節 纏向石塚古墳の築造時期について……………(寺沢) …	373
あとがき	(橋本)
報告書抄録	

## 巻頭図版目次

- 巻頭図版 1 纏向遺跡と纏向古墳群全景（2011.4 北西より）  
巻頭図版 2 整備事業前の纏向石塚古墳（1986.11 北東より）  
巻頭図版 3 纏向石塚古墳全景（1992.3 右が北）  
巻頭図版 4 纏向石塚古墳周濠出土 弧文円板

## 挿 図 目 次

図 1	桜井市の位置	1
図 2	桜井市の地質（註 1 文献より）	1
図 3	纏向石塚古墳と周辺の遺跡（1／25,000）	4
図 4	『大和國古墳墓取調書』所収の纏向石塚古墳（註 1 文献より）	9
図 5	纏向石塚古墳調査トレンチ配置図（1／1,000）	14
図 6	纏向石塚古墳第 1 次調査地位置図（1／1,000）	24
図 7	1－1 トレンチ平面図（1／400）	25
図 8	1－1 トレンチ平・断面図（1／160）	26
図 9	1－1 トレンチ周濠内遺物出土状況（1／60）	28
図10	1－2 トレンチ平・断面図（1／160）	29
図11	纏向石塚古墳第 2 次調査地位置図（1／1,000）	30
図12	2－1 トレンチ平・断面図（1／80）	32
図13	2－2 トレンチ平・断面図（1／80）	35
図14	2－3 トレンチ平・断面図（1／80）	35
図15	2－4 トレンチ平・断面図（1／80）	36
図16	2－5 トレンチ平・断面図（1／80）	36
図17	2－6 トレンチ断面図（1／80）	37
図18	纏向石塚古墳西側周濠 鶏形木製品実測図（1／3）	40
図19	纏向石塚古墳南側周濠 弧文円板実測図（1／2）	41
図20	纏向石塚古墳第 1 次調査出土土器実測図（1／3）	51
図21	纏向石塚古墳第 2 次調査出土土器実測図（1／3）	52
図22	纏向石塚古墳第 1 次調査出土木器実測図（1～8：1／6、9～12：1／3）	53
図23	纏向石塚古墳第 2 次調査出土土器実測図 1（1～8：1／6、9：1／8）	54
図24	纏向石塚古墳第 2 次調査出土土器実測図 2（1／6）	55
図25	纏向石塚古墳第 3 次調査地位置図（1／1,000）	57

図26-1	3-1 トレンチ断面図 (1/100).....	58
図26-2	3-1 トレンチ平・断面図 (1/100).....	59
図27	3-1 トレンチ後円部南側周濠 遺物出土状況図 (1/100).....	60
図28	3-1 トレンチ SK-01平・断面図 (1/20) .....	62
図29	3-1 トレンチ後円部南側周濠内 黒色粘土層Ⅰ出土樹幹出土状況図 (1/120).....	63
図30	3-1 トレンチ後円部南側周濠内 灰色ないし黒(暗)灰色砂礫層遺物出土状況図 (1/80) .....	64
図31	3-1 トレンチ後円部南側周濠部分断面図 (1/40) .....	65・66
図32	3-1 トレンチ後円部南側周濠内 黒色粘土層Ⅱ遺物出土状況図 (1/80) .....	67
図33	3-1 トレンチ周濠内立柱平・断面図 (1/20) .....	68
図34	3-2 トレンチ平・断面図 (1/80) .....	70
図35	3-3 トレンチ平・断面図 (1/80) .....	71
図36	3-3 トレンチ SD-02平面図 (1/40) .....	72
図37	纏向石塚古墳第3次調査出土土器実測図1 (1/3) .....	90
図38	纏向石塚古墳第3次調査出土土器実測図2 (1/3) .....	91
図39	纏向石塚古墳第3次調査出土土器実測図3 (1/3) .....	92
図40	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図1 (1/15) .....	93
図41	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図2 (1/5) .....	94
図42	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図3 (1/5) .....	95
図43	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図4 (1/5) .....	96
図44	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図5 (1/3) .....	97
図45	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図6 (1/3) .....	98
図46	纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図7 (1/3) .....	99
図47	纏向石塚古墳第4次調査地位置図 (1/1,000) .....	101
図48	4-3 トレンチ平面図 (1/80).....	103・104
図49	4-3 a・b トレンチ断面図 (1/80) .....	106
図50	4-3 c・d トレンチ断面図 (1/80) .....	107
図51	4-3 a トレンチ クビレ部周濠内遺物出土状況図 (1/40、土器は1/8) .....	110
図52	4-4 トレンチ上層遺構確認状況図 (1/80).....	115・116
図53	4-4 トレンチ平・断面図 (1/80).....	117・118
図54	4-4 トレンチ導水溝遺物出土状況図 (1/40、土器は1/8) .....	120
図55	4-4 トレンチ前方部周濠・導水溝断面図 (1/40) .....	121
図56	4-1 トレンチ平・断面図 (1/80).....	123・124
図57	4-2 トレンチ平・断面図 (1/80).....	125・126



図58	4-2 トレンチ暗灰褐色砂礫層出土石槍実測図 (1/2)	127
図59	4-3 e トレンチ平・断面図 (1/80)	128
図60	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図1 (1/3)	152
図61	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図2 (1/3)	153
図62	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図3 (1/3)	154
図63	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図4 (1/3)	155
図64	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図5 (1/3)	156
図65	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図6 (1/3)	157
図66	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図7 (1/3)	158
図67	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図8 (1/3)	159
図68	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図9 (1/3)	160
図69	纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図10 (1/3)	161
図70	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図1 (1/6)	162
図71	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図2 (1/6)	163
図72	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図3 (1/6)	164
図73	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図4 (12・13: 1/4、11・14~16: 1/6)	165
図74	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図5 (1/4)	166
図75	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図6 (1/6)	167
図76	纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図7 (26: 1/8、27: 1/16)	168
図77	纏向石塚古墳第5次調査地位置図 (1/1,000)	170
図78	5-1 トレンチ平・断面図 (1/80)	171・172
図79	5-2 トレンチ平・断面図 (1/80)	173
図80	5-3 トレンチ平・断面図 (1/80)	175
図81	5-4 トレンチ平・断面図 (1/80)	176
図82-1	5-5・6 トレンチ平・断面図 (1/80)	178
図82-2	5-5・6 トレンチ断面図 (1/80)	179
図83	纏向石塚古墳第5次調査出土棺材実測図 (1/2)	180
図84	纏向石塚古墳第5次調査出土遺物実測図1 (1/3)	185
図85	纏向石塚古墳第5次調査出土遺物実測図2 (1/3)	186
図86	纏向石塚古墳第6次調査地位置図 (1/1,000)	188
図87-1	6-1 トレンチ平・断面図 (1/80)	190
図87-2	6-1 トレンチ平・断面図 (平面: 1/80・断面: 1/20)	191
図88	6-2 トレンチ平・断面図 (1/80)	193
図89	6-3 トレンチ平・断面図 (1/80)	194

図90	6-4 トレンチ平・断面図 (1/80) .....	196
図91	纏向石塚古墳第6次調査出土土器実測図1 (1/3) .....	201
図92	纏向石塚古墳第6次調査出土土器実測図2 (1/3) .....	202
図93	纏向石塚古墳第7次調査地位置図 (1/1,000) .....	203
図94	7-1 トレンチ平面図 (1/80) .....	206
図95	7-1 トレンチ断面図 (1/80) .....	207
図96	7-1 トレンチ 土坑1平・断面図 (1/20) .....	208
図97	土坑1出土石鏃実測図 (1/1) .....	208
図98	7-2 トレンチ平面図 (1/80) .....	209
図99	纏向石塚古墳第7次調査出土土器実測図1 (1/3) .....	215
図100	纏向石塚古墳第7次調査出土土器実測図2 (1/3) .....	216
図101	纏向石塚古墳第7次調査出土土器実測図3 (1/3) .....	216
図102	纏向石塚古墳第8次調査地位置図 (1/1,000) .....	217
図103	第8次調査地平・断面図 (1/160) .....	219・220
図104	第8次調査地平面図 (東半) (1/100) .....	223・224
図105	第8次調査地平面図 (西半) (1/100) .....	225・226
図106	8-1 トレンチ断面図 (1/80) .....	229・230
図107	8-2～5 トレンチ断面図 (1/80) .....	231・232
図108	纏向石塚古墳後円部西端での墳丘復元案 (1/160) .....	234
図109	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図1 (1/3) .....	277
図110	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図2 (1/3) .....	278
図111	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図3 (1/3) .....	279
図112	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図4 (1/3) .....	280
図113	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図5 (1/3) .....	281
図114	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図6 (1/3) .....	282
図115	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図7 (1/3) .....	283
図116	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図8 (1/3) .....	284
図117	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図9 (1/3) .....	285
図118	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図10 (1/3) .....	286
図119	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図11 (1/3) .....	287
図120	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図12 (437～447: 1/3、448・449: 1/2) .....	288
図121	纏向石塚古墳第9次調査地位置図 (1/1,000) .....	289
図122	下層遺構平面図 (1/100) .....	291・292
図123	トレンチ断面図 (1/80) .....	293・294

図124	包含層上面検出遺構 (1/140) .....	296
図125	石塚東古墳周濠遺物出土状況 (1/80) .....	297
図126	纏向石塚古墳周濠横断面 (1/50) .....	298
図127	方形周溝墓 1 平面図及び断面図 (1/50) .....	299
図128	方形周溝墓 1 遺物出土状況 (1/30) .....	300
図129	方形周溝墓 2 遺物出土状況及び断面図 (1/40) .....	302
図130	S D 159・S X 161・S K 158 平面図及び断面図 (1/40) .....	303
図131	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 1 (1/3) .....	317
図132	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 2 (1/3) .....	318
図133	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 3 (1/3) .....	319
図134	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 4 (1/3) .....	320
図135	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 5 (1/3) .....	321
図136	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 6 (1/3) .....	322
図137	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 7 (1/3) .....	323
図138	纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物実測図 8 (1/3) .....	324
図139	纏向石塚古墳第 4 次調査における主要花粉ダイアグラム .....	332
図140	纏向石塚古墳第 4 次調査における主要珪藻ダイアグラム .....	333
図141	第 4 次調査サンプル採取地点図 (平面: 1/160・断面: 1/40) .....	335
図142	纏向石塚古墳第 8 次調査の第 1 トレンチ (北面) における花粉ダイアグラム .....	342
図143	纏向石塚古墳第 8 次調査の第 1 トレンチ (北面) における主要珪藻ダイアグラム .....	343
図144	纏向石塚古墳第 8 次調査の第 5 トレンチにおける花粉ダイアグラム .....	344
図145	纏向石塚古墳第 8 次調査の第 5 トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム .....	345
図146	纏向石塚古墳第 9 次調査における主要珪藻ダイアグラム 1 .....	351
図147	纏向石塚古墳第 9 次調査における主要珪藻ダイアグラム 2 .....	352
図148	第 8・9 次調査サンプル採取地点図 (1/80・1/50) .....	357
図149	纏向石塚古墳出土板材の年輪年代調査結果 .....	359
図150	地中探査レーダーの方法 .....	360
図151	調査区區割図 (1/1,000) .....	361
図152	レーダー探査の結果 .....	362
図153	レーダーによる内部探査画像 1 .....	363
図154	レーダーによる内部探査画像 2 .....	364
図155	墳丘復元案 (第 4 次 1/2,000) .....	366
図156	墳丘復元案 (第 5 次 1/2,000) .....	366
図157	墳丘復元案 (第 9 次 1/2,000) .....	367

図158	墳丘および周濠の検出状況（1／800）	368
図159	纏向石塚古墳の平面プラン（1／1,600）	369
図160	纏向石塚古墳第8次調査墳丘盛土内下層出土土器（1／4）	371
図161	纏向石塚古墳クビレ部の遺物出土状況と出土土器	376

## 写真目次

写真1	昭和54年撮影の纏向遺跡北半の様子（上が北）	10
写真2	昭和54年撮影の纏向遺跡南半の様子（上が北）	11
写真3	遺物実測作業の様子	21
写真4	1－1トレンチ 西側周濠 編物出土状況	27
写真5	1－1トレンチ 西側周濠 鋤（図22－1）出土状況（東より）	27
写真6	1－1トレンチ 西側周濠 鋤（図22－3）出土状況（西より）	27
写真7	1－2トレンチ（北より）	29
写真8	1－2トレンチ東壁土層堆積状況（西より）	29
写真9	2－1トレンチ 南側周濠の調査（北西より）	31
写真10	2－1トレンチ東壁土層堆積状況（南西より）	33
写真11	円座状樹皮製品	33
写真12	天秤棒状木製品	33
写真13	天秤棒状木製品	33
写真14	鋤等（西より）	33
写真15	甕（図21－3）	33
写真16	2－2トレンチ（北より）	34
写真17	纏向石塚古墳周濠内堆積物の花粉写真1	336
写真18	纏向石塚古墳周濠内堆積物の花粉写真2	337
写真19	纏向石塚古墳周濠内堆積物の花粉写真3	338
写真20	纏向石塚古墳第8・9次調査の花粉・胞子・寄生虫卵	355
写真21	纏向石塚古墳第8・9次調査の珪藻	356

## 表目次

表1	纏向石塚古墳における既往の調査地と次数一覧	15
表2	纏向石塚古墳第1次調査出土土器観察表（1）	47
表3	纏向石塚古墳第1次調査出土土器観察表（2）	48

表 4	纏向石塚古墳第 2 次調査出土土器観察表 (1)	49
表 5	纏向石塚古墳第 2 次調査出土土器観察表 (2)	50
表 6	纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (1)	74
表 7	纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (2)	75
表 8	纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (3)	76
表 9	纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (4)	77
表10	纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (5)	78
表11	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (1)	79
表12	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (2)	80
表13	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (3)	81
表14	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (4)	82
表15	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (5)	83
表16	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (6)	84
表17	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (7)	85
表18	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (8)	86
表19	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (9)	87
表20	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (10)	88
表21	纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (11)	89
表22	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (1)	132
表23	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (2)	133
表24	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (3)	134
表25	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (4)	135
表26	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (5)	136
表27	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (6)	137
表28	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (7)	138
表29	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (8)	139
表30	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (9)	140
表31	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (10)	141
表32	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (11)	142
表33	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (12)	143
表34	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (13)	144
表35	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (14)	145
表36	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (15)	146
表37	纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (16)	147



表38	纏向石塚古墳第4次調査出土土器観察表 (17)	148
表39	纏向石塚古墳第4次調査出土木器観察表 (1)	149
表40	纏向石塚古墳第4次調査出土木器観察表 (2)	150
表41	纏向石塚古墳第4次調査出土木器観察表 (3)	151
表42	纏向石塚古墳第5次調査出土遺物観察表 (1)	182
表43	纏向石塚古墳第5次調査出土遺物観察表 (2)	183
表44	纏向石塚古墳第5次調査出土遺物観察表 (3)	184
表45	纏向石塚古墳第6次調査出土土器観察表 (1)	198
表46	纏向石塚古墳第6次調査出土土器観察表 (2)	199
表47	纏向石塚古墳第6次調査出土土器観察表 (3)	200
表48	纏向石塚古墳第7次調査出土遺物観察表 (1)	212
表49	纏向石塚古墳第7次調査出土遺物観察表 (2)	213
表50	纏向石塚古墳第7次調査出土遺物観察表 (3)	214
表51	『大和國古墳墓取調書』にみる墳丘高計測の精度	234
表52	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (1)	236
表53	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (2)	237
表54	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (3)	238
表55	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (4)	239
表56	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (5)	240
表57	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (6)	241
表58	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (7)	242
表59	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (8)	243
表60	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (9)	244
表61	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (10)	245
表62	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (11)	246
表63	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (12)	247
表64	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (13)	248
表65	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (14)	249
表66	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (15)	250
表67	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (16)	251
表68	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (17)	252
表69	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (18)	253
表70	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (19)	254
表71	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (20)	255

表72	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (21)	256
表73	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (22)	257
表74	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (23)	258
表75	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (24)	259
表76	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (25)	260
表77	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (26)	261
表78	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (27)	262
表79	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (28)	263
表80	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (29)	264
表81	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (30)	265
表82	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (31)	266
表83	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (32)	267
表84	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (33)	268
表85	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (34)	269
表86	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (35)	270
表87	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (36)	271
表88	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (37)	272
表89	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (38)	273
表90	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (39)	274
表91	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (40)	275
表92	纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (41)	276
表93	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (1)	308
表94	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (2)	309
表95	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (3)	310
表96	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (4)	311
表97	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (5)	312
表98	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (6)	313
表99	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (7)	314
表100	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (8)	315
表101	纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (9)	316
表102	纏向石塚古墳第4次調査における花粉分析結果	334
表103	纏向石塚古墳第8次調査における花粉分析結果	346
表104	纏向石塚古墳第8次調査における珪藻分析結果	347
表105	纏向石塚古墳第9次調査における花粉分析結果	353

表106	纏向石塚古墳第9次調査における珪藻分析結果 .....	354
表107	2～4世紀の纏向様式土器編年と古墳（大和） .....	372



# 墳古塚石向纏

発掘調査報告書

本文編



# 第1章 位置と環境

## 第1節 地理的環境

桜井市は奈良盆地の東南部とその背後に続く大和高原・宇陀山地・吉野山地の一部より構成されている（図1）。人口約61,000人、面積98.93km<sup>2</sup>の市域の約80%は山地であり、平地は北西部の20%に過ぎないが、市域のほぼ中央では春日山断層と初瀬構造谷が交差し、巻向山地塊崖・御破裂山地塊崖が盆地に面する西北斜面にはいくつかの溪谷が形成されている<sup>1)</sup>（図2）。

また、平地部にはこれらに源を発する初瀬川や寺川・米川・纏向川・栗原川など多くの河川が流れ、これらによって形成された扇状地の自然堤防上を主として多くの遺跡が展開している。

纏向石塚古墳の所在する纏向遺跡は市域北西部の標高60～90mの扇状地上に位置する。現在考えられている遺跡の規模は東西約2km、南北約1.5kmであり、遺跡の主要な部分は纏向川と烏田川に挟まれた地域に集中するものの、遺跡はさらに北へと大きく広がっていくものと想定される。

さて、遺跡の内部には旧河川により形成された多くの微高地があるが、纏向石塚古墳は太田北微高地の中央よりやや西、標高89m前後の扇状地上に立地し<sup>2)</sup>、周辺には纏向石塚古墳と同じ3世紀代の古墳として注目される勝山古墳・矢塚古墳・東田大塚古墳などの出現期古墳が点在している。（橋本）

### 【註記】

1) 西宮克彦「地質」『桜井市史下巻』桜井市役所1979

2) 安井隆浩「奈良県纏向遺跡の立地基盤と古地形環境」『東田大塚古墳』（財）桜井市文化財協会2006

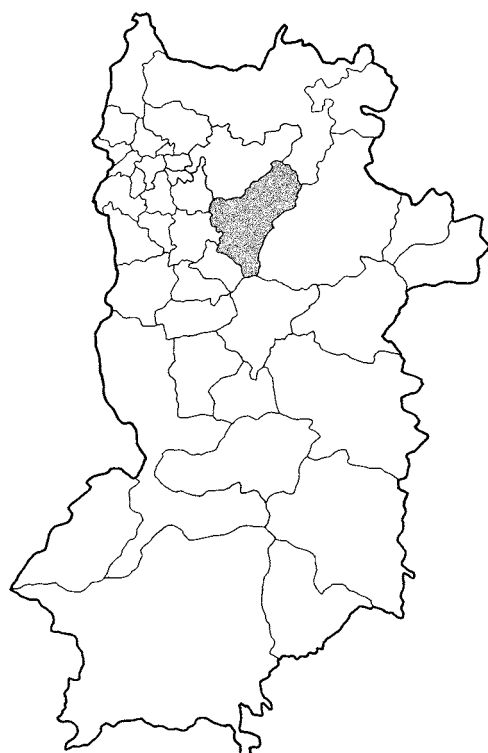


図1 桜井市の位置

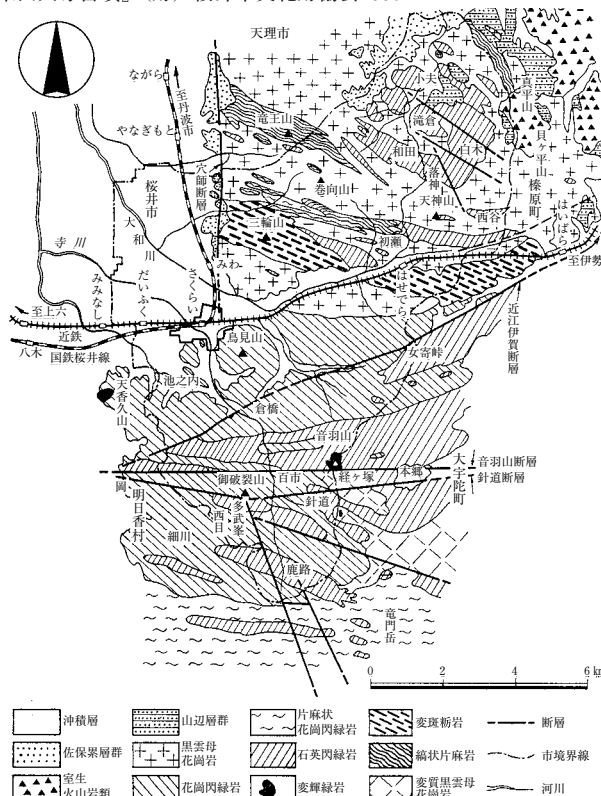


図2 桜井市の地質（註1文献より）

## 第2節 歴史的環境

### (1) 桜井市域の遺跡

以下、市域における遺跡の状況について概観していくこととしたい(図3)。

#### 【旧石器時代】

桜井市内の旧石器時代は幾つかの遺跡において遺物の出土が確認されている。阿部中山遺跡<sup>1)</sup>や吉備池遺跡<sup>2)</sup>・芝遺跡<sup>3)</sup>(41)の調査ではナイフ形石器が、谷遺跡<sup>4)</sup>(76)では翼状剥片が出土しているものの、遺構に伴うものは皆無である。

#### 【縄文時代】

縄文時代草創期の遺物は黒崎地区<sup>5)</sup>と檜原地区<sup>6)</sup>から採集されている有舌尖頭器が一点ずつあるのみで、直接遺跡に伴うものではない。

早期の遺物は初瀬小学校の建替えに際して行われた初瀬遺跡の調査で出土している。小さな破片であるが、山形文を施した尖底土器になると考えられ、市内では最古の土器である。

前期になると遺跡数は少ないが、三輪遺跡<sup>8)</sup>(59)や纏向遺跡(12)内の箸中地区所在の箸中遺跡では北白川下層Ⅱ式から前期終末の大歳山式までの比較的まとまった量の遺物が出土している<sup>9・10)</sup>。

中期の遺構・遺物は少なく、芝遺跡(41)と高家遺跡があるのみである。高家遺跡では船元式系の縄文と大歳山式類似の刻み目突帯を持ち、大型竹管状円形刺突文を持つものや、船元式系の縄文を持ち、里木式系の条痕に円形刺突文を持つものに大別されている<sup>11)</sup>。

後期になると市内でも遺構や遺物の確認例が増加する。東新堂遺跡(62)や、上之庄遺跡(63)・纏向遺跡(12)・安倍寺遺跡・吉備遺跡(73)・栗殿遺跡(71)などでは溝や流路、土器棺墓などが検出されており、纏向遺跡では所属時期は判然としないが、後期～晩期のものと考えられる土偶の頭部が出土している<sup>12)</sup>。

晩期の遺跡としては纏向遺跡(12)や栗殿遺跡(71)・三輪遺跡(59)・上之庄遺跡(63)・大福遺跡(66)・芝遺跡(41)・茅原遺跡(46)などで遺物の出土が確認されている。纏向遺跡では滋賀里3式期の深鉢とともに石棒片などが出土している<sup>13)</sup>。後期に比べると遺跡数は増加の傾向にあるが、遺構に伴わないか、伴っても土器棺が数基確認されている程度である。

#### 【弥生時代】

弥生時代の遺跡では前期から後期へと一定の規模を保ちつつ継続して営まれる拠点集落として、大福遺跡(66)と芝遺跡(41)があるが、この他にも小規模な集落遺跡の確認例は多い。前期の遺物が出土する遺跡には先述した大福遺跡・芝遺跡のほかに東新堂遺跡(62)や上之庄遺跡(63)・豊前遺跡(39)・脇本遺跡・大福池遺跡(67)などがあるが、殆どが包含層や土坑などからの出土で遺物量は少なく、小規模な集落ばかりである。

中期の主要な遺跡には芝遺跡(41)・吉備遺跡(73)・大福遺跡(66)があるが、遺物のみが出土・採集されている遺跡として三輪遺跡(59)・黒田池遺跡(72)・脇本遺跡などがある。

後期の遺跡には袈裟櫛文銅鐸<sup>14)</sup>や細型銅剣<sup>15)</sup>などが出土している大福遺跡(66)を中心として、吉備遺

跡（73）・芝遺跡（41）、小規模ながら纏向遺跡（12）・谷遺跡（76）・横内遺跡（74）・安倍寺遺跡・能登遺跡・生田遺跡・脇本遺跡などが確認されている。

### 【古墳時代】

古墳時代前期初頭になると所謂纏向遺跡（12）が出現し、弥生時代の拠点集落であった大福遺跡や芝遺跡だけでなく、他の小規模集落も殆どが姿を消すようである。庄内0式期から布留0式期の段階には大福遺跡（66）や東新堂遺跡（62）・城島遺跡（78）・上之宮遺跡などで当該期の遺構や遺物の出土があるが、集落と呼べるほどの規模があるのか否かもはっきりとしない程度のものである。

纏向遺跡以外の場所で前期の遺構が顕著になるのは布留1式期以降のことであり、纏向遺跡の縮小に反比例して大福遺跡（66）や上之庄遺跡（63）・安倍寺遺跡・大西遺跡（40）・河西遺跡・忍阪遺跡などの遺跡が出現している。これらの集落はいずれもごく小規模なものであるが、上之庄遺跡（63）では布留2式期の滑石や緑色凝灰岩を使った玉造遺構が検出されている。遺物には原石や砥石などのほかに緑色凝灰岩製管玉や滑石製勾玉・管玉・車輪石・有孔円盤・白玉などがあり、滑石製品の玉造遺跡としては最古級のものと言えよう<sup>17)</sup>。前期古墳には纏向石塚古墳（1）・矢塚古墳（3）・勝山古墳（2）・ホケノ山古墳（7）・東田大塚古墳（4）・南飛塚古墳（5）・メクリ1号墳（8）・箸墓古墳（6）などで構成される纏向古墳群のほかに、初瀬川より南には桜井茶白山古墳（80）・メスリ山古墳・池ノ内古墳群などがある。纏向遺跡に隣接する天理市域には柳本古墳群が展開し、渋谷向山古墳（16）や行燈山古墳（25）・天神山古墳（29）・櫛山古墳（24）・柳本大塚古墳（14）石名塚古墳（33）などがある。この古墳群には馬口山古墳などの3世紀に遡る可能性が指摘されている古墳も含まれるが、基本的には纏向古墳群に後出する段階のものが殆どである。

中期にはいと泊瀬朝倉宮の候補地とされる脇本遺跡を除くと、忍阪遺跡や大西遺跡（40）・纏向遺跡（12）・茅原遺跡（46）・河西遺跡などで単発的に遺構や遺物が検出されるばかりで、集落と呼べるほどのまとまった規模を持つものは極めて少ない。なお、この時期の市域の遺跡群を特徴づけるものには三輪山の山頂から山麓一帯に広がる磐座祭祀（51・52・53・55）が挙げられよう。この祭祀は斑糲岩の巨石を対象に土師器や須恵器などのほか、土製や滑石製の玉や形代を供献して行われるもので、5世紀から7世紀にかけて盛んに行われていたようであるが、近年の上之庄遺跡における滑石製玉造遺跡の発見などによってその開始時期が4世紀中頃まで遡る可能性も指摘されているものである。

三輪山祭祀の隆盛とともに、山麓にはこの祭祀を司掌したと考えられる大神氏の一族が居住していたようで、三輪遺跡では神撰田跡と考えられる水田遺構が検出され<sup>18)</sup>、茅原遺跡では掘立柱建物や井戸などが検出されている<sup>19)</sup>。古墳では全長約80mの帆立貝形前方後円墳である茅原大墓古墳（44）やツヅロ塚古墳が築かれ、後期まで連続して築かれている。この他、古式の家形石棺を持つ全長約40mの前方後円墳である兜塚古墳、銀製中空勾玉や金環の出土している外鎌山北麓古墳群（82）の慈恩寺1号墳<sup>20)</sup>、石見型や盾形・靱形などの木製埴輪が出土した全長34.7mの帆立貝形前方後円墳・小立古墳<sup>21)</sup>、竊窿式石室を持つと考えられる桜井児童公園2号墳<sup>22)</sup>などがあるほか、鳥見山古墳群（81）では径10m～20m程度の円墳や方墳が確認されているが、規模・質ともに前期段階の所謂王墓クラスのものとはか



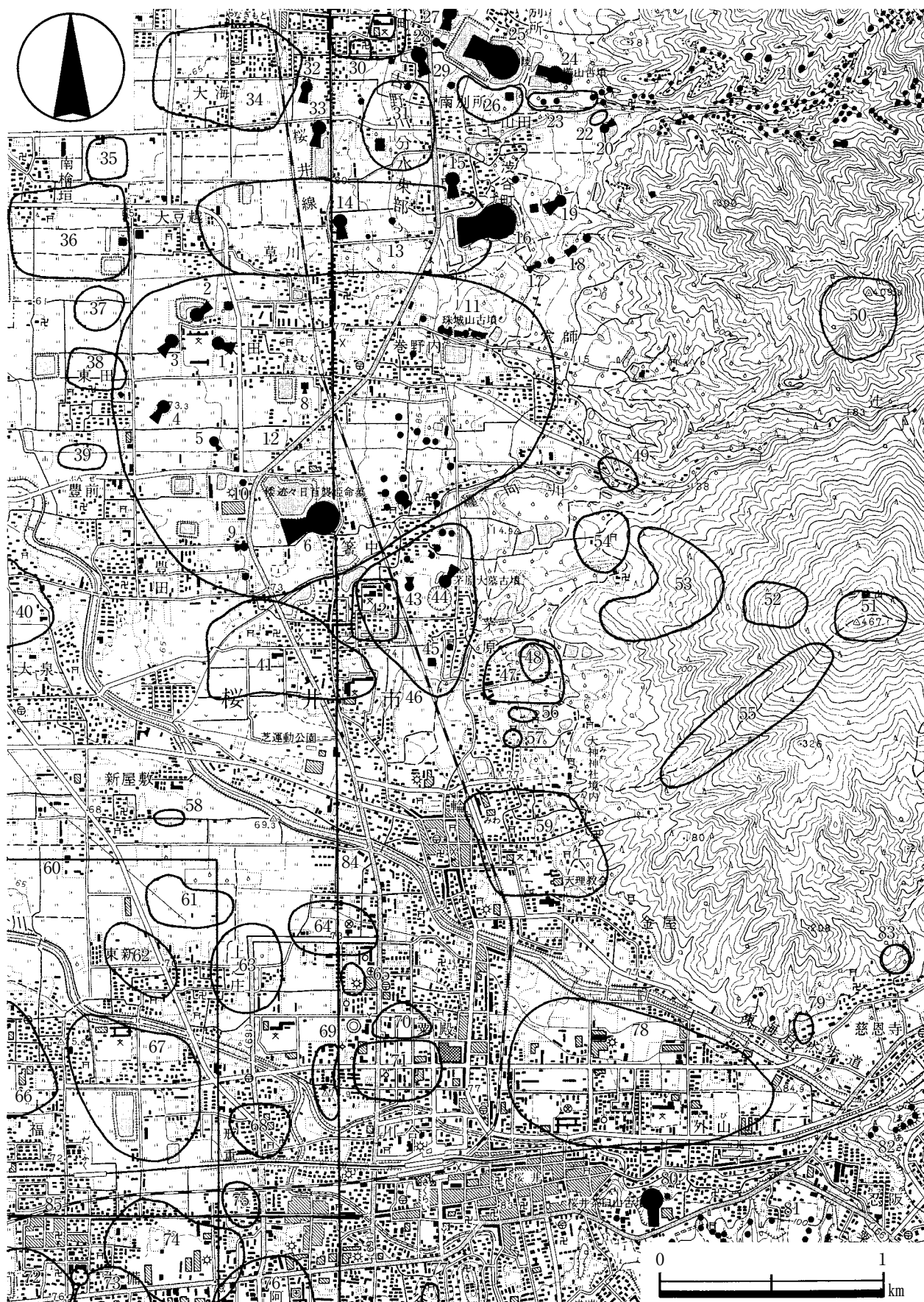


図3 纏向石塚古墳と周辺の遺跡 (1/25,000)

け離れたものとなっている。

後期になっても三輪山祭祀と結びついた磐座祭祀や古墳・集落遺跡などの大神氏関連遺跡の痕跡が多い。集落では茅原遺跡（46）が中期に引き続いて居住地として選ばれ、掘立柱建物や井戸などが確認されているし、大神神社摂社若宮社（57）の発掘調査では6世紀前半期の居館遺構が検出され、大神氏の居館ではないかと考えられている。<sup>23)</sup>また、中期に築造された茅原大墓古墳・ツヅロ塚古墳に続く毘沙門塚古墳（43）・馬塚古墳・茅原狐塚古墳（45）などがあり、築造の順序も茅原大墓古墳の5世紀前半以来、ツヅロ塚古墳の5世紀後半、毘沙門塚古墳の6世紀前半、馬塚古墳の6世紀後半、茅原狐塚古墳の6世紀末から7世紀初頭と連綿と築かれていることが解る。墳形・内部構造などから見ると、茅原大墓古墳の築造を契機としてツヅロ塚古墳・毘沙門塚古墳と3基の前方後円墳が続いた後、弁天社古墳・馬塚古墳、そして茅原狐塚古墳と家形石棺をもつ3基の横穴式石室が続いている。<sup>25)</sup>市内の他の遺跡に目を向けてみると鍛冶や玉造関連遺構が数多く確認されている谷遺跡<sup>26)</sup>（76）や河西遺跡・安倍寺遺跡・上之宮遺跡・纏向遺跡（12）・脇本遺跡などの規模の小さなものが数多く散在していたようである。古墳については先述した三輪山麓の古墳群以外に纏向遺跡内では径10m～20m前後の小規模な古墳が数多く存在していたようで、現在確認されている約20基の古墳以外にも集落内部の調査で埋没古墳が5基確認されており、さらにその数は増えるものと考えられる。また、市域の南部には高家古墳群や桜井児童公園の古墳群・鳥見山古墳群（81）・外鎌山北麓古墳群（82）・高田古墳群など数多くの群集墳が丘陵上に築かれる他、赤坂天王山古墳や越塚古墳・ムネサカ1・2号墳・谷首古墳・艸墓古墳・文殊院東古墳・文殊院西古墳といった後・終末期古墳や、磚槨墳としては花山塚東古墳・花山塚西古墳・外鎌山北麓古墳群（82）の忍坂8・9号墳・舞谷1～5号墳など、特色ある多くの古

★図3 遺跡名一覧

1. 纏向石塚古墳	23. 遺物散布地（弥生後～古墳前）	45. 茅原狐塚古墳	67. 大福池遺跡
2. 勝山古墳	24. 櫛山古墳	46. 茅原遺跡	68. 戒重城跡
3. 矢塚古墳	25. 行燈山古墳	47. 箕倉山遺跡	69. 遺物散布地（古墳中～鎌倉）
4. 東田大塚古墳	26. 山田遺跡	48. 箕倉山城跡	70. 遺物散布地（古墳後～平安）
5. 南飛塚古墳	27. アンド山古墳	49. 車谷遺跡	71. 粟殿遺跡
6. 箸墓古墳	28. 南アンド山古墳	50. 穴師山城塞跡	72. 黒田池遺跡
7. ホケノ山古墳	29. 天神山古墳	51. 奥津磐座	73. 吉備遺跡
8. メクリ1号墳	30. 柳本城跡	52. 中津磐座	74. 横内遺跡
9. イヅカ古墳	31. 遺物散布地（古墳後～平安）	53. 辺津磐座	75. 戒重遺跡
10. ビハクビ古墳	32. ノベラ古墳	54. 桧原遺跡	76. 谷遺跡
11. 珠城山古墳群	33. 石名塚古墳	55. 禁足地裏磐座群	77. 谷城跡
12. 纏向遺跡	34. 柳本遺跡	56. 馬場遺跡	78. 城島遺跡
13. 遺物散布地（弥生～古墳）	35. 遺物散布地（古墳）	57. 大神寺跡	79. 遺物散布地
14. 柳本大塚古墳	36. 檜垣遺跡	58. 新屋敷遺跡	80. 桜井茶臼山古墳
15. 上の山古墳	37. 遺物散布地（弥生）	59. 三輪遺跡	81. 鳥見山古墳群
16. 渋谷山古墳	38. 遺物散布地（古墳～平安）	60. 大藤原京跡	82. 外鎌山北麓古墳群
17. 立石古墳	39. 豊前遺跡	61. 上之庄遺跡	83. 慈恩寺跡
18. 立子塚古墳	40. 大西遺跡	62. 東新堂遺跡	84. 上ッ道
19. シウロウ古墳	41. 芝遺跡	63. 上之庄遺跡	85. 横大路
20. ヲカタ塚古墳	42. 芝村陣屋跡	64. 三輪松之本遺跡	
21. 龍王山古墳群	43. 毘沙門塚古墳	65. 遺物散布地（古墳後～平安）	
22. 遺物散布地（古墳後）	44. 茅原大墓古墳	66. 大福遺跡	

墳が築かれている。

### 【飛鳥時代】

この時代の主要な遺跡には上之宮遺跡や城島遺跡（78）・脇本遺跡・能登遺跡・阿部中山遺跡などの居館遺構あるいは公的な施設と考えられている遺跡群と、谷遺跡（76）・芝遺跡（41）・安倍寺遺跡などの一般的な集落、天皇家や豪族によって建立された山田寺・安倍寺・吉備池廃寺などの寺院跡が挙げられよう。この内、居館遺構については上之宮遺跡では6世紀後半から7世紀はじめにかけての園池遺構や四面庇を持った大型掘立柱建物などが検出されており、聖徳太子の「上宮」の有力な候補地と考えられているし、城島遺跡の居館遺構はその所属時期から万葉集にみられる大伴氏の鳥見の田処との関連が考えられ、大伴氏ゆかりの居館遺構と想定されている。また、能登遺跡の遺構は用明紀に見られる迹見赤埴の居館との説があるし、脇本遺跡や阿部中山遺跡は有力層の居館、あるいは離宮的な性格が想定されている。<sup>28)</sup>この時期には調査で検出されている遺構のほかにも欽明天皇磯城嶋金刺宮や迹見驛家・阿斗河辺館・阿斗桑市館等々文献にあらわれる宮跡や居館・公的な施設は数多く、今後の調査が期待される。寺院についても我国最初の官立寺院である百濟大寺とされる吉備池廃寺や、阿倍氏の氏寺である安倍寺、蘇我倉山田石川麻呂によって建立された山田寺など著名な遺跡が多い。<sup>29)</sup><sup>30)</sup>

### 【藤原京期】

藤原京期の桜井は上之庄遺跡（63）における東の京極道路である東十坊大路の確認により、市域の多くが大藤原京域に含まれることが判明している。<sup>32)</sup>京域内では西之宮地区や大福地区・吉備地区などにおける調査では広い範囲で条坊道路や掘立柱建物群・井戸などの遺構の確認が顕著である。また、横大路（85）や上ツ道（84）・安倍山田道などの幹線道路が整備されるのもこの段階であろう。なお、京域より外の地域にあたる谷遺跡（76）・箕倉山遺跡（47）・忍阪遺跡・三輪遺跡（59）などにおいても掘立柱建物や井戸などの集落遺構が確認されており、京域外にも小規模な居住地が広がっていたことが解っている。

### 【奈良・平安時代】

市域における奈良時代の遺構の確認例は、先述した大神神社摂社若宮社（57）の調査で検出されている大神寺関連の建物遺構程度で非常に少ないが、引き続き安倍寺が存続し、青木廃寺の創建が確認されている。<sup>33)</sup>青木廃寺の過去に採集された出土瓦の中には「延喜六年造檀越高階茂生」と陽刻を持つ軒平瓦や「大工和仁部貞行」と陰刻をもつ平安時代の軒丸瓦なども含まれており、長らく平安時代の創建とされていたものの、出土瓦の詳細な研究により奈良時代の初めに創建されたものであり、長屋王が父高市皇子の冥福を祈って建立した寺院であるとの説が出されている。<sup>34)</sup>このほか、殆どが未調査ながら高田廃寺や栗原寺・慈恩寺（83）などの寺院跡でも奈良時代の瓦や礎石などの出土が確認されており、集落遺構の貧弱さに対して寺院の多さが目に付く。また、笠や忍阪・谷・下などの山部では火葬墓やこれに伴う骨蔵器・鉄板・鉄刀なども出土しており、平野部を見下ろす東・南の山地にこの時期の奥津城があったようで、今後類例の増加が予想される。

平安時代の遺構が検出されているものには纏向遺跡（12）と東新堂遺跡（62）がある。いずれの遺



跡も掘立柱建物や井戸・土坑などがあり遺構の密度も比較的高いが、他の遺跡では芝遺跡（41）や脇本遺跡・三輪遺跡（59）などで土器片が僅かに出土しているのみである。

### 【鎌倉時代】

この時期になると市域の殆どすべての地域から遺構や遺物の出土がある。市域に現存する集落の多くはこの頃に形成された環濠集落をもとに発展してきたもので、現在でも当時の環濠をとどめているものは少なくない。調査で確認される遺構には先述した環濠の他、掘立柱建物や土坑・井戸・溝・墓などがあり、およそ当時の集落の在り方を知ることができる。このほか、鎌倉から南北朝期にかけての桜井を特徴づけるものには市内各地に築かれた多くの城館や砦を挙げることができよう。これら城館や砦の機能していた14世紀前半の桜井は南北朝期の南朝と北朝の勢力圏の境界にあたっており、北より進撃してくる北軍に対し、『太平記』に有名な三輪西阿（大神主 高宮勝房と同一人物か）を中心としてその一族や周辺の多くの国人が南朝に応じ、延元二年（1337）から興国二年（1341）にかけて市内各地で激戦が繰り返<sup>35)</sup>られていた様子が多くの資料から伺える。これらの文献に残る城郭や砦には西阿の本丸となった三輪（59）・戒重城（68）の他に河合・安房・瑠・赤尾・外鎌山・石原田などの支城の名が散見されるが、過去の発掘調査では吉備大臣薮遺跡<sup>36)</sup>や、大神神社北方で確認された空湟<sup>37)</sup>や切岸、箸中地区慶運寺裏の丘陵上に於いて検出された空湟と見られるV字溝など、文献には登場しない小さな遺構の確認も相次いでおり、今後の調査によってさらなる類例の増加が見込まれる。

（橋本）

### 【註記】

- 1) 清水眞一『阿部丘陵遺跡群』桜井市教育委員会1989
- 2) 小沢毅ほか『吉備池廃寺発掘調査報告―百済大寺跡の調査―』奈良国立文化財研究所創立50周年記念学報第68冊奈良国立文化財研究所2003
- 3) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1991年度発掘調査報告書3』（財）桜井市文化財協会1992
- 4) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1992年度発掘調査報告書2』（財）桜井市文化財協会1994
- 5) 前園実知雄ほか『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県立橿原考古学研究所編1978
- 6) 関川尚功・佐藤良二「奈良県三輪山麓採集の有舌尖頭器」『旧石器考古学32』旧石器談話会1986
- 7) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書1』（財）桜井市文化財協会1997
- 8) 樋口清之「三輪遺跡とその遺物の研究」『大和考古学』4・5 1932・1934
- 9) （財）桜井市文化財協会が1997年に調査。未報告。
- 10) 川村和正「箸中遺跡出土の縄文資料について」『大和の縄文時代―奈良盆地の狩人たちの足跡―』桜井市立埋蔵文化財センター 2000
- 11) 清水眞一編『大和の縄文時代―奈良盆地の狩人たちの足跡―』桜井市立埋蔵文化財センター 2000
- 12) 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会 1976
- 13) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1990年度発掘調査報告書2』（財）桜井市文化財協会1991
- 14) 萩原儀征『桜井市大福遺跡大福小学校地区発掘調査概報』桜井市教育委員会1987
- 15) 橋本輝彦・豊福恵子「大福遺跡第13次調査の特殊遺物」『みずほ第27号』大和弥生の会1998
- 16) 寺沢薫編『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所1986 以下、本書における土師器の編年観・調整技法はすべてこれに準ずる。
- 17) 橋本輝彦「上之庄遺跡第4次発掘調査現地説明会資料」（財）桜井市文化財協会1996
- 18) 清水眞一『芝遺跡大三輪中学校改築にともなう発掘調査報告書』桜井市教育委員会1987

- 19) 萩原儀征『茅原丸田地区発掘調査概要』桜井市教育委員会1990
- 20) 前園実知雄ほか『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県立橿原考古学研究所編1978
- 21) 村上薫史『磐余遺跡群発掘調査概報Ⅰ』（財）桜井市文化財協会2002
- 22) 網干善教「桜井市谷稻荷西第3号墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報11』奈良県教育委員会
- 23) 萩原儀征『茅原丸田地区発掘調査概要』桜井市教育委員会1990
- 24) 前園実知雄「第三節 地下発掘調査」『重要文化財大神神社摂社大直禰子神社社殿修理工事報告書』奈良県教育委員会1989
- 25) 橋本輝彦「近年の調査成果から見た三輪山祭祀・三輪氏について」『大美91号』大神神社1996
- 26) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1992年度発掘調査報告書2』（財）桜井市文化財協会1994
- 27) 橋本輝彦『桜井市平成6年度国庫補助事業による発掘調査報告書2』桜井市教育委員会1995
- 28) 清水眞一『阿部丘陵遺跡群』桜井市教育委員会1989
- 29) 清水眞一『城島遺跡田中地区発掘調査報告書』（財）桜井市文化財協会1992
- 30) 清水眞一『桜井市埋蔵文化財1996年度発掘調査報告書1』（財）桜井市文化財協会1997
- 31) 清水眞一『磯城・磐余の時代—大和の古代邸宅—展』桜井市立埋蔵文化財センター 1991
- 32) 橋本輝彦「上之庄遺跡第4次発掘調査現地説明会資料」（財）桜井市文化財協会1996
- 33) 田中英夫ほか『安倍寺跡環境整備事業報告—発掘調査報告書—』桜井市1970
- 34) 大脇潔「忘れられた寺—青木庵寺と高市皇子—」『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文集』1993
- 35) 松山宏「中世」『桜井市史上巻』桜井市役所1979
- 36) 橋本輝彦「吉備大臣薨遺第2次調査報告」『桜井市平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会 1999
- 37) 寺沢薫ほか「史跡・大神神社旧境内地第6次発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1991年度』奈良県立橿原考古学研究所1992
- 38) （財）桜井市文化財協会による1997年の調査。未報告。

## 第2章 古記録にみる纏向石塚古墳

### 第1節 野淵龍潜による調査

纏向石塚古墳の墳丘は太平洋戦争中の高射砲陣地の建設にあたり大きく削平を受けているが、墳丘の削平以前の状況を知る記録は非常に少なく、郷土史をまとめた『奈良県磯城郡誌』（1915）や『大三輪町史』（1959）では全く記載がないか、あってもごく短文のものであり、それほど注目された存在ではなかったようである。このような状況にあって墳丘削平前の古墳の様子を知ることができる唯一の資料が『大和國古墳墓取調書』である。この記録は当時奈良県嘱託であった野淵龍潜によって明治26年（1893）に県下所在の古墳の悉皆的な現況調査が行われた際に作成されたもので、纏向石塚古墳についても詳細な絵図と観察所見が掲載されている（図4）。

この所見には「第二百三十号 式上郡纏向村大字東田字矢塚第二百三十一号同村同大字字勝山第二百三十二号同村字大字大谷字石塚ニ在リ三塚共ニ宏壮ナル築造ニシテ往古ハ前方後円ナラント思惟スレドモ今ハ皆開墾シテ蜜柑畑ト為シ且諸處発掘ノ痕アリテ其全形ヲ知ルアタハ

ズ別ニ伝説等ノ考証スベキナシト雖モ其構造ヨリ推考スルモ皇族以上ノ御墓所ナルハ疑ウベカラザルモノト考フ」とあるが、現在の調査においても長らく墳形の判然としなかった纏向石塚古墳がこの時点ですでに前方後円墳の可能性が指摘されているのは注目すべきで、或いは絵図には見えないが前方部の高まりも幾らか残されていたのかも知れない。また、絵図の添書きの記録では高さは3間半（約6.3m）、根廻は81間（約146m）であるとの記載があるが、現在の墳丘高は絵図と同じ墳丘北側水田との比高が約3.3mで、3mもの削平を受けたようである。戦時中の削平に際しては埋葬施設の存在、遺物の出土を伝える記録はなく、第4章で紹介されている地元の古老の話がある程度である。

なお、掲載年月日は不明ながら平成初期の新聞記事<sup>2)</sup>には後円部西側の水田から17点、墳丘上から3点の計約20点の勾玉が過去に採集されたとの記事も見ることができるが、勾玉は現在所在不明であり、記事の内容から見ても即座に本墳に伴う遺物と判断できる状況にはないと思われる。（橋本）

#### 【註記】

1) 野淵龍潜『大和國古墳墓取調書』奈良県1893

2) 桜井市立埋蔵文化財センター所蔵の新聞記事切り抜きより。記事の内容から平成2年5月8日の記事と思われる。

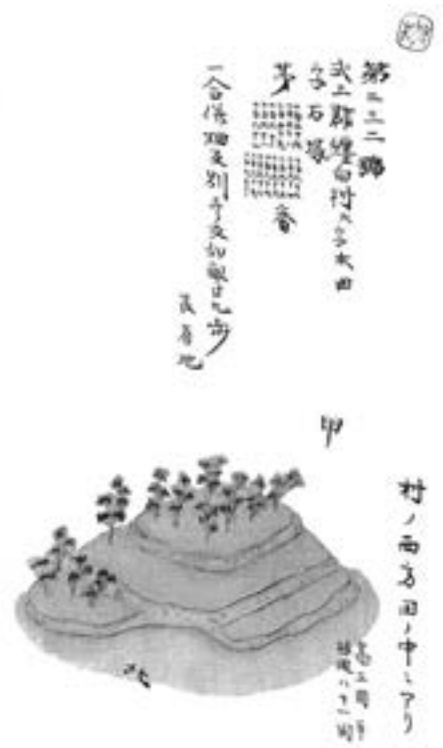


図4 『大和國古墳墓取調書』  
所収の纏向石塚古墳（註1文献より）





写真1 昭和54年撮影の纏向遺跡北半の様子（上が北）



写真2 昭和54年撮影の纏向遺跡南半の様子（上が北）





## 第3章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査にいたる経緯と経過

ここに報告するのは桜井市大字太田字石塚・塚東所在の史跡 纏向石塚古墳の範囲確認調査報告である。纏向石塚古墳は昭和46年12月から開始された纏向小学校の移転新築計画に先立つ纏向遺跡第6次調査において初めて調査が行われたもので、この調査の結果3世紀代に遡る列島内最古の古墳として一躍注目を集めることとなった。

以来、平成18年3月までの間、断続的に9次にわたる範囲確認調査が実施され、のべ3,752㎡の調査が行われるとともに、これら範囲確認調査の結果を受けて平成18年1月26日付で纏向石塚古墳は史跡 纏向古墳群の一つとしてホケノ山古墳とともに国史跡の指定を受けることとなった。

なお、これまで行われた調査区の位置関係については図5に示した通りであるが、個々の調査区には重複があるものもあり、調査位置や遺構の検出状況が煩雑であるため、以下に調査毎の位置や概要を簡単に整理しておくこととする。

#### 【昭和46年度 纏向石塚古墳第1次調査（纏向遺跡第6次）】

纏向小学校の移転新築に際して桜井市が事業主体となり、奈良県立橿原考古学研究所によって行われた調査である<sup>1)</sup>。調査そのものは学校用地全域を対象として確認調査が行われているが、この時点においては纏向石塚古墳に関しては墳形や規模・築造時期などその実態は全く不明であったため、墳丘測量図の作成および学校用地内の遺構の分布状況を探ることを目的とした調査が行われている。

調査区は校舎建物予定地東端から運動場部分へと南北に設定されたトレンチと、これに交差する形で残存する古墳の墳丘から運動場予定地にかけて設定された東西トレンチの2本をあわせて第1次調査第1トレンチ（以下すべてのトレンチ名称は「1-1トレンチ」のように「次数-トレンチ番号」で表記する）と呼称している。

なお、1-1トレンチの東西トレンチ部分は図示した範囲よりもさらに西方へと長く設定されたものであるが、ここでは古墳に関連する部分のみを纏向石塚古墳の調査区と便宜的に設定し、調査面積も南北トレンチとの交点より西側部分をその対象に含めることとした。そして、この1-1トレンチの調査により周濠の存在が確認されたことを受け、墳丘の西北部分の周濠の様相を探るために設定されたのが1-2トレンチである。

現地調査は昭和46年12月6日から昭和47年3月18日にかけて行われており、調査面積は1-1トレンチが888㎡、1-2トレンチが140㎡の計1,028㎡である。

#### 【昭和50年度 纏向石塚古墳第2次調査（纏向遺跡第8次）】

残存する墳丘の南隣接地の水田において資材倉庫および家屋建築の届出があったことを受け、奈良県立橿原考古学研究所によって墳形確認のためのトレンチ調査が行われたものである<sup>1)</sup>。調査は東西に

細長い対象地に対して南北方向に6本のトレンチが設定されている。

調査区は東側から順に2-1～2-6トレンチと呼称されている。このうち2-1から2-3トレンチでは墳丘の基底や端部、そして周濠の存在が確認され、2-4から2-6トレンチでは墳丘の盛土等は検出されなかったものの、墳丘の下に存在するとみられる弥生時代後期の包含層が厚く堆積する状況が確認されており、墳丘がさらに南側に展開する状況が確認されている。

なお、現地調査は昭和50年5月15日から昭和50年6月4日にかけて行われたもので、調査面積は2-1トレンチが36㎡、2-2トレンチは17㎡、2-3トレンチは6㎡、2-4トレンチは35㎡、2-5トレンチは23㎡、2-6トレンチが5㎡の計122㎡であった。

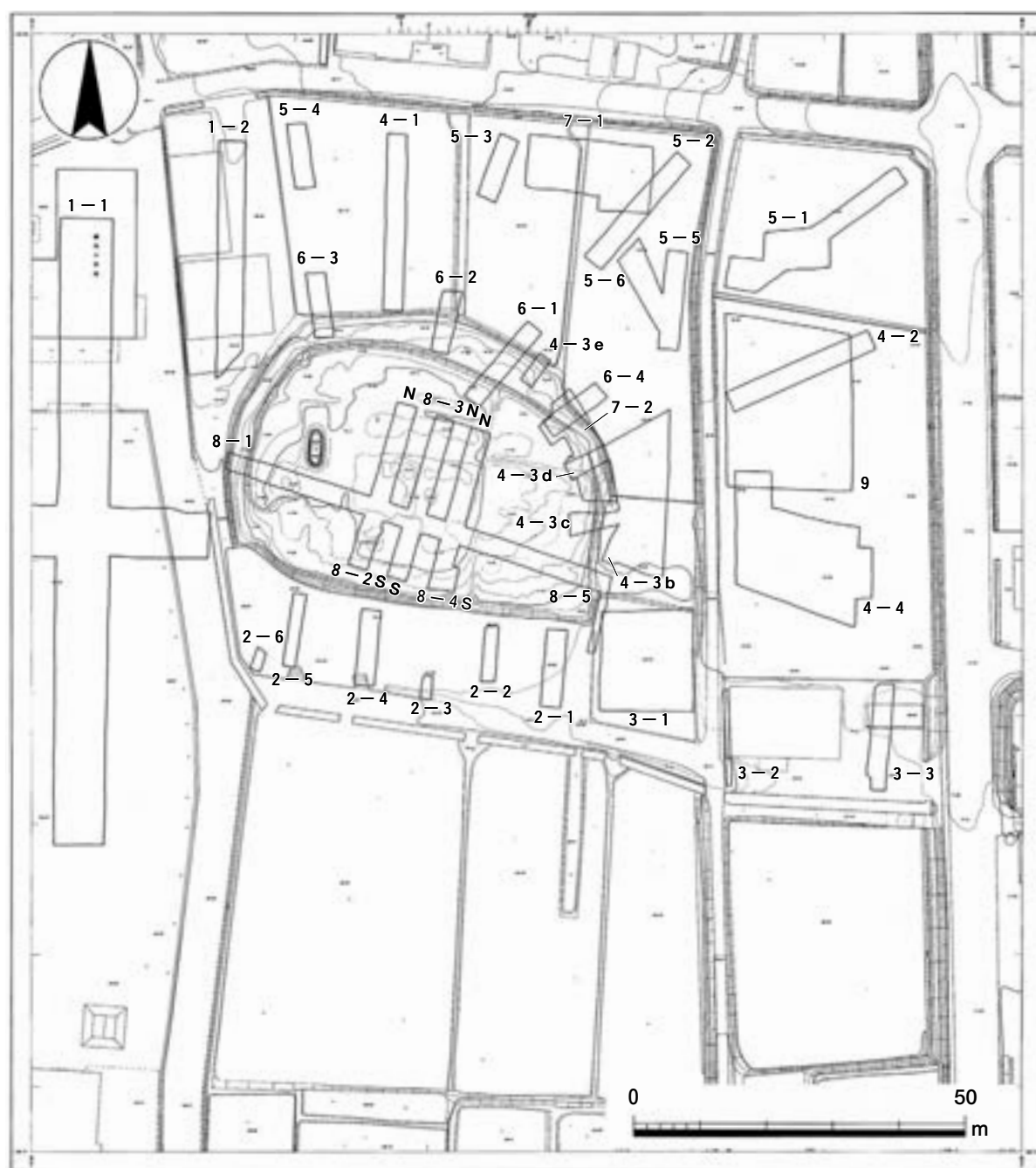


図5 纏向石塚古墳調査トレンチ配置図（1／1,000）

表1 纏向石塚古墳における既往の調査地と次数一覧

石塚 次数	纏向 次数	所在地	調査期間	主な遺構	主な遺物	担当者	調査面積	原因	文献
1 次	6 次	太田248-2、 249、250-1、 250-2、251、	1971.12.6～ 1972.3.18	古墳北西部墳 丘肩部・周濠 外肩部	古式土師 器・鶏形木 製品・鋤・ 有頭棒	石野・河上(県)	1,028㎡	纏向小学 校の移転 新築工事	1
2 次	8 次	太田246-1、 246-2	1975.5.15～ 1975.6.4	後円部南側墳 丘基底部・周 濠	古式土師 器・弧文円 板・鋤・鍬	久野・関川(県)	122㎡	資 材 倉 庫・家屋 建築	1
3 次	10次	太田242-1、 246-3	1976.7.12～ 1976.8.12	前 方 部 南 側 面・周濠	古式土師 器・柱材・ 板材・異形 木製品	久野・寺沢(県)	272㎡	農 業 用 倉 庫の建築	2
4 次	55次	太田253-1、 254-2、254-3、 255-2、257、 266、267、 268、269、 271-1	1989.4.17～ 1989.6.17	前方部北東隅 墳丘・周濠・ 導水溝、北側 後円部～クビ レ部墳丘・周 濠	古式土師 器・柱材・ 鋤・鍬・ 横槌・槽	萩原・清水(市) 寺沢 (県)	700㎡	範囲確認	3
5 次	62次	太田253-1、 254-1、255-1、 272-1、277-1	1991.9.17～ 1991.11.17	古墳北側 周濠外肩部	古式土師器	萩原 (市)	350㎡	範囲確認	4
6 次	66次	太田258、257、 254-1、254-2、 254-3、253-1、 253-3、255-2、 256	1992.1.21～ 1992.3.11	後円部北側 墳丘・周濠	古式土師器	萩原 (市)	131㎡	範囲確認	4
7 次	77次	太田254-1、 254-2、255-1、 255-2、256、 257、267	1993.12.2～ 1994.2.20	古墳北側 周濠外肩部、 後円部北東側 墳丘	古式土師器	萩原 (市)	270㎡	範囲確認	4
8 次	87次	太田259、260、 261、262、 263、264、265	1996.7.30～ 1996.11.22	後円部1段目 の段 築 平 坦 面、墳丘盛土 および墳丘下 の遺構面	古式土師器	橋本 (市)	402㎡	範囲確認	5
9 次	144次	太田271-1	2005.12.27 ～2006.3.31	前方部北東側 周濠外肩部、 石塚東古墳、 方形周溝墓2 基	古式土師器	丹羽・橋爪(市)	477㎡	範囲確認	6

## 【文献一覧】

- 1) 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会1976
- 2) 久野邦雄・寺沢薫「石塚古墳の調査」『奈良県遺跡調査概報1976年度』奈良県立橿原考古学研究所1977
- 3) 萩原儀征・寺沢薫「纏向石塚古墳 範囲確認調査（第4次概報）」桜井市教育委員会1989
- 4) 萩原儀征編『纏向石塚古墳第1期整備事業－範囲確認調査(第5次～7次)概報－』財大和文化財保存会 桜井市教育委員会1995
- 5) 橋本輝彦『纏向石塚古墳第8次調査の概要（纏向遺跡第87次）』桜井市教育委員会1996
- 6) 丹羽恵二・橋爪朝子「第3節 纏向遺跡第144次調査（纏向石塚古墳第9次調査）概要報告」『桜井市 平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2006

### 【昭和51年度 纏向石塚古墳第3次調査（纏向遺跡第10次）】

第3次調査は農業用倉庫建築の申請が提出された事を受けて実施された調査である<sup>2)</sup>。対象地は現存する墳丘の南西に隣接する水田と間に里道を挟んだ東側の水田の2筆で、西側から順に3-1、3-2、3-3トレンチと3本のトレンチが設定されている。

このうち、周濠が墳丘に沿って弧を描くと推定されていた3-1トレンチでは前方部の南側面とこれに沿う周濠が検出され、纏向石塚古墳が東南方向に前方部を持った前方後円墳となる事が初めて確認されている。

また、調査区は矮小ながら、3-2トレンチでは幅約6m、深さ約50cmの溝の存在が確認されている。この溝は前方部前面を区画するための施設と考えられ、前方部前面は規模の小さな区画溝によって区切られていたことが確認されている。

なお、現地調査は昭和51年7月12日から昭和51年8月12日にかけて行われており、調査面積は3-1トレンチが213㎡、3-2トレンチが12㎡、3-3トレンチが47㎡の計272㎡であった。

### 【平成元年度 纏向石塚古墳第4次調査（纏向遺跡第55次）】

第3次調査までの発掘調査の成果を受けて昭和61年から開始された纏向石塚古墳の公有化・整備事業の一環として行われたものである<sup>3)</sup>。調査は平成元年に概ね墳丘部の買収が完了したこと受け、整備計画を立案するにあたり課題となった墳丘北から東部一帯の墳丘形状や周濠の状況を把握することを目的としたもので、調査に先立って結成された纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、奈良県立橿原考古学研究所の協力をを受けて桜井市教育委員会が実施している。

また、この調査では発掘調査に先立って墳丘の航空測量が実施され、より正確な現況測量図が作成されている。なお、本報告に使用されている墳丘図はすべてこの測量によるものである。

調査区は1-2トレンチで確認されている墳丘北側の墳丘や周濠の形状を確認するための4-1トレンチ、墳丘東側の周濠外肩部のラインを確認するための4-2トレンチ、後円部北東部分の墳丘ラインを確認するための4-3eトレンチ、前方部からクビレ部、そして後円部にかけての墳丘と周濠の様子を確認するための4-3a～dトレンチ、前方部北東隅の墳丘および周濠の形状を確認するための4-4トレンチと計5ヶ所に調査区が設定されている。

この調査の実施によって明らかにされた纏向石塚古墳の墳丘は全長約93m、後円部は横長の扁楕円状を呈し、最大で径約64m、短径で約61mに復元されるとともに、前方部は長さ約32m、クビレ部幅約15m～16m、前方部前面幅約32mに復元が行われ、周濠の調査成果と合わせてはじめて詳細な復元プランが描かれることとなっている。

なお、現地調査は平成元年4月17日から平成元年6月17日にかけて行われたもので、調査面積は4-1トレンチが81㎡、4-2トレンチは75㎡、4-3a～dトレンチは227㎡、4-3eトレンチは9㎡、4-4トレンチが308㎡の計700㎡であった。



### 【平成3年度 纏向石塚古墳第5次調査（纏向遺跡第62次）】

第5次調査は第4次調査と同様に纏向石塚古墳の公有化・整備事業の一環として纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、桜井市教育委員会が実施したものである<sup>4)</sup>。

この調査の対象となったのは墳丘北側の周濠外肩ラインの確認で、4-1・4-2トレンチ間の様相を明らかにすることを目的として想定される周濠の推定ライン上に5-1から5-4までの4本のトレンチを設定し、遺構の検出が行われている。

この結果、5-2トレンチから5-4トレンチに至る対象地西側部分ではほぼ推定ラインどおりに周濠外肩が検出されたものの、5-1トレンチにおいては周濠外肩が検出されず、5-2トレンチと4-2トレンチ間の周濠の形状が判然としない状況となったため、急遽5-1トレンチよりも墳丘に近い部分に5-5トレンチを設定し、周濠外肩のラインを検出することに成功している。

なお、この周濠外肩ラインをより明確に捉えるために周濠外肩に沿ってトレンチを拡張したのが5-6トレンチであり、第5次調査では結果的に6本のトレンチを設定することとなっている。

現地調査は平成3年9月17日から平成3年11月17日にかけて行われており、調査面積は5-1トレンチが135㎡、5-2トレンチは66㎡、5-3トレンチは30㎡、5-4トレンチは30㎡、5-5トレンチは48㎡、5-6トレンチが41㎡の計350㎡であった。

なおこの調査の終了後、明けて平成4年の1月からは第6次調査が本調査と同じ年度事業として引き続き実施されることとなったため、周濠ラインが検出されなかった5-1トレンチのみ調査区の埋め戻しが行われ、残るトレンチは第6次調査終了後に埋め戻されている。

### 【平成3年度 纏向石塚古墳第6次調査（纏向遺跡第66次）】

第6次調査も第4・5次調査と同様に纏向石塚古墳の公有化・整備事業の一環として纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、桜井市教育委員会が実施したものである<sup>4)</sup>。

調査の対象となったのは墳丘北側の墳丘ラインの確認で、既に確認されている1-2、4-1、4-3e、4-3dトレンチ間の墳丘形状を明らかにすることに主眼を置き、先に調査を実施した5-1から5-4トレンチと軸を揃えるように6-1から6-4トレンチまで、計4本の調査区が設定されている。

この調査では墳丘にかかる部分は第4次調査で確認されている平安時代以降の攪乱土を除去し、周濠にかかる部分は周濠堆積土上面までの掘削を基本として調査が行われ、当初の推定どおりに墳丘のラインが検出されている。

なお、現地調査は平成4年1月21日から平成4年3月11日にかけて行われており、調査面積は6-1トレンチが43㎡、6-2トレンチは28㎡、6-3トレンチは30㎡、6-4トレンチが30㎡の計131㎡である。

#### 【平成 5 年度 纏向石塚古墳第 7 次調査（纏向遺跡第77次）】

第 7 次調査も第 4 ～ 6 次調査と同様に纏向石塚古墳の公有化・整備事業の一環として纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、桜井市教育委員会が実施したものである<sup>4)</sup>。

調査の主眼となったのは 6 - 4、4 - 3 d トレンチで既に確認されている墳丘東側の墳丘ラインの再確認と、周濠北側の外肩部の詳細な構造および周濠より外側の遺構の残存状況の確認であり、周濠北側には 7 - 1 トレンチを、墳丘東部には 7 - 2 トレンチが設定され調査が行われている。

このうち、7 - 1 トレンチでは古墳に先行するとみられる弥生時代後期の土坑が検出されたのみで、周辺には顕著な遺構は存在しないことが判明している。7 - 2 トレンチはこれまでに推定されている墳丘の推定線に対し、残存する墳丘がやや外側へと不自然な張り出しを持っていたことから、この張り出しの性格を確認するために設定されたものだが、調査の結果、墳丘ラインは当初の推定線どおりに検出され、張り出しは後世に墳丘を取り崩した時のものである事が確認されている。

現地調査は平成 5 年 12 月 2 日から平成 6 年 2 月 20 日にかけて行われており、調査面積は 7 - 1 トレンチが 173㎡、7 - 2 トレンチが 97㎡の計 270㎡であった。

なお、この調査の終了を受けて平成 6 年 2 月 20 日から 5 月 10 日までの間、墳丘北側の周濠部分を中心とした第 1 期整備工事が実施され、史跡公園として市民の憩いや、まなびの場として活用されている。また、この第 1 期整備工事の完了後の平成 7 年 3 月 6 日には桜井市指定文化財第 8 号として纏向石塚古墳は市指定文化財の指定を受け、以後保存の措置が講じられることとなった。

#### 【平成 8 年度 纏向石塚古墳第 8 次調査（纏向遺跡第87次）】

第 1 期整備工事の完了を受けて、第 2 期整備事業の対象となる墳丘部の調査が桜井市教育委員会によって行われ、8 - 1 から 8 - 5 トレンチの 5 本の調査区が設定されている<sup>5)</sup>。

調査は後円部の段築などの外表施設の有無確認と盛土等の構造確認のため古墳の中軸線上に 8 - 1 トレンチを、そして太平洋戦争中に墳丘上に築かれたとされる高射砲陣地による墳丘の攪乱状況を把握するために 8 - 1 トレンチに直交する形で 8 - 2 から 8 - 4 トレンチが設定されている。

また、8 - 5 トレンチは国土座標に基づいた記録が残されていなかった 3 - 1 トレンチの正確な位置を割り出すとともに、検出されている前方部のラインと現在の測量図の整合性を持たせるために設定された補足的なトレンチで、3 - 1 トレンチと重複する形で調査区が設定されている。

この調査の結果、8 - 1 トレンチの墳丘西端部からは墳丘 1 段目の段築とみられる平坦面の存在が確認され、箸墓古墳に先行する出現期古墳としては初めて段築の存在が確認されるとともに、墳丘の断ち割り調査からは築造時に墳丘に混入したと考えられる多くの土器資料が得られたほか、盛土および墳丘下の遺構面の状況が確認されている。

なお、現地調査は途中 2 度の中断を挟みながら平成 8 年 7 月 30 日から平成 8 年 11 月 22 日にかけて行われており、調査面積は 8 - 1 トレンチが 183㎡、8 - 2 トレンチは 69㎡、8 - 3 トレンチは 68㎡、8 - 4 トレンチは 72㎡、8 - 5 トレンチが 10㎡の計 402㎡であった。



### 【平成17年度 纏向石塚古墳第9次調査（纏向遺跡第144次）】

第8次調査の終了後、古墳の整備事業は財政的な事情によりしばらく中断状態にあったが、平成16年に入って市指定区域内ながら一部未買収のまま残されていた前方部および周濠部分において資材置場の造成事業が計画されたことを受け、対象地の公有地化をはかると共に平成17年度に範囲確認調査が実施されている<sup>6)</sup>。

調査が行われたのは平成元年に検出された前方部の北側、かつて4-2トレンチが設定され周濠外肩のラインが検出されている水田部分で、周濠外肩およびその周囲の遺構の状況を明確にするため4-2トレンチを含め周辺を大きく広げる形でトレンチが設定され、調査区内からは5世紀末に築造された帆立貝形古墳である石塚東古墳や、纏向石塚古墳の周濠に隣接する形で方形周溝墓2基が検出されたほか、かつて4-2トレンチで確認された古墳の周濠外肩ラインは先の石塚東古墳の周濠肩を誤って検出していたことが判明している。

なお、現地調査は平成17年12月27日から平成18年3月31日にかけて行われており、調査面積は477㎡であった。

以上、9次にわたる調査の状況を概観してきたが、これらの調査により確認された纏向石塚古墳の墳形および周濠形状などの様々な属性は、矢塚古墳・ホケノ山古墳などとともに「纏向型前方後円墳<sup>7)</sup>」の典型例として古墳の出現をめぐる論争の中で重要な位置を占めることとなり、周濠から出土した弧文円板や鶏形木製品をはじめとする木製祭祀遺物の存在は出現期古墳における墳墓祭祀の様相を伺わせるものとして、その後の研究の進展に大きく貢献している。

しかしながら、今後に残された課題も多い。古墳の築造時期をめぐっては3世紀代におさまる年代観についてはほぼ異論がないものの、未だ厳密な時期を示す決定的な資料に恵まれず、担当者間でも意見の統一をみていないのが実情であるし、周濠の形状についても史跡指定地外となる墳丘南側の水田部分は未調査の部分が殆どで、追加指定も視野に入れたさらなる形状の確認調査の実施が今後の課題である。

(橋本)

#### 【註記】

- 1) 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会1976
- 2) 久野邦雄・寺沢薫「石塚古墳の調査」『奈良県遺跡調査概報1976年度』奈良県立橿原考古学研究所1977
- 3) 萩原儀征・寺沢薫「纏向石塚古墳 範囲確認調査（第4次概報）」桜井市教育委員会1989
- 4) 萩原儀征編『纏向石塚古墳第1期整備事業－範囲確認調査(第5次～7次)概報－』（財）大和文化財保存会 桜井市教育委員会1995
- 5) 橋本輝彦『纏向石塚古墳第8次調査の概要(纏向遺跡第87次)』桜井市教育委員会1996
- 6) 丹羽恵二・橋爪朝子「第3節 纏向遺跡第144次調査(纏向石塚古墳第9次調査)概要報告」『桜井市 平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2006
- 7) 寺沢薫 「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学 1988

## 第2節 報告書作成の経緯と経過

例言でも述べたように纏向石塚古墳の調査は35年の長きにわたって行われてきたものであるが、その調査原因や担当機関はそれぞれに異なったもので、調査報告書の刊行は調査単位に委ねられた状態にあったが、実際に正式報告が完了しているのは第1・2次調査分だけであり、他の調査については概要報告が個々に刊行されているだけで調査の情報は必ずしも多くが公表されているとは言えない状況にあった。

このような状況の中、平成18年には長年継続的に実施された纏向古墳群における範囲確認調査の進捗を受けて纏向石塚古墳とホケノ山古墳が「纏向古墳群」として国の史跡指定を受けることとなったが、この史跡指定を目指した活動を契機として、それぞれの古墳における調査成果をまとめた報告書の刊行が望まれることとなった。

これらの状況を鑑み、桜井市教育委員会では纏向石塚古墳の調査報告書の刊行を目的として平成17年度より橋本と橋爪が業務の合間を縫いつつ資料の再整理に着手し、平成21年度から23年度にかけては国庫補助事業の採択を受けて橋本と木場がこれを担当した。なお、平成23年度からは桜井市に着任した寺沢が整理作業に加わり全体を統括している。

本報告書の作成にあたり、第1・2次調査分は既に正式な調査報告書が刊行されているため、本書への掲載にあたっては原則として本文は誤植の訂正と体裁を整えるための編集に留め、遺構図については原図より新規作成および再トレースを実施している。

第3次調査の資料については今回の報告書の刊行へ向けての作業を開始した時点で概ね整理作業が完了しており、今回は調査担当者である寺沢が新たに原稿の執筆とその編集作業を実施した。

また、第4次調査以降の調査については図版のほぼ全てを今回新たに実測・トレースを行い、原稿の執筆は第4次調査を寺沢が、第5～8次調査を橋本が、第9次調査を丹羽が執筆している。

なお、第9次調査については纏向石塚古墳に関係する周濠外肩の遺構以外にも方形周溝墓や石塚東古墳など多様な遺構の検出があったものの、今回の報告では纏向石塚古墳の周濠および周辺に展開する2基の方形周溝墓のみの報告とし、いわゆる纏向遺跡の時代と異なる遺構は別に報告を準備することとした。

さて、今回の報告にあたり新たに整理作業を行ったのは桜井市において保管されている第4次調査以降の調査資料である。実際の作業には収蔵庫に保管されている遺物ケースの中から各遺構に関連する出土遺物を抽出するところから作業を開始した。

この結果、纏向石塚古墳関連の遺構からの出土品は遺物ケースにして約50箱の分量があった。このうち、第4次調査出土の木製品については主要なものは既に実測・保存処理作業が完了していたものの、木端や木片などは既に所在の確認できないものも一部存在した。

土器資料については多くの遺物が調査当時に洗浄とネーミングが行われた程度で、第4次調査出土の主要な遺物を除くと多くは接合等の基礎的な整理さえ手付かずの状態にあった。このため、基本的な整理作業は以下の手順に基づいて実施することとした。

- ①報告に必要となる遺構・層位からの遺物をすべて抽出。
- ②遺物袋単位で仮接合を実施。
- ③すべての破片を点検するとともに仮接合したものの中から残存率の高いもの・特殊な個体・小片でも遺構の時期の決め手となる個体を抽出。
- ④抽出した土器を同一遺構内出土の全ての土器片と接合関係を再確認し、エポキシパテを併用しながら復元を実施。
- ④復元作業の完了後に後補部分にアクリル絵具（一部水性絵具）にて着色を実施。
- ⑤実測作業を実施。

この結果、本報告にあてた遺物量は遺物ケースにして19箱にのぼることとなった。整理作業は平成17年度から平成20年度までは橋本・橋爪の2名で遺物の抽出や遺構図の整理・実測・トレースに着手し、平成21年度からは橋爪に代わって木場と整理員が専従して遺物のネーミング・復元・実測（写真3）を開始、平成23年12月末までに作業を完了している。

この間、寺沢・橋本・丹羽の三者は遺物写真の撮影・原稿の執筆・編集作業などを進め、木場は図版の作成を実施、1月末には印刷所へ入稿を行った。

なお、今回整理を実施した遺物については報告書の刊行と合わせて台帳登録を行うとともに、図面・写真などの記録類についてはファイリングを行い、今後の利用の便を図る事とした。（橋本）



写真3 遺物実測作業の様子

## 第4章 纏向石塚古墳第1・2次調査報告

(纏向遺跡第6・8次調査報告)

### 第1節 現状

纏向石塚古墳は、太田北微高地の西延長上にある。太田北微高地はこの付近では水田となっているが、その中に水田との比高2.5mの小丘がある。小丘のほとんどは畠地となっているが、西側には竹藪がある。

小丘は、東西59m、南北45mの不整形で、丘上は比高2.5mでほぼ平らになっているが、中央部はやや高く、3mあり、西側の畠地になっていない部分に4.4mの最高所がある。

地元の人々の話によると、太平洋戦争末期に柳本の飛行場から兵隊がきて高射砲陣地をつくるために平らにしたのだという。その時“一間位くずしていたが何も出なかった”ともいう。また、“けずるまでは急な山だった”とも、“3段になっていて相当高かった”ともいう。

この小丘を纏向石塚古墳とよぶのは、旧纏向村大字太田字石塚に所在するからであるが、現状では石はみられないし、埴輪も採集できない。また、小丘周辺の現地地形には周濠の痕跡は全く認められない。

なお、石塚の西北に接して径15m余の小丘があり、「奈良県遺跡地図第2分冊」では“古墳”として記録しているが、調査の結果、盛土の下からコンクリートの土台が現われ、太平洋戦争中につくられた高射砲台跡であることがわかった。

### 第2節 西側周濠の調査（第1次調査）

#### (1) 経過

東田地区の遺構・遺物の分布を確認するためのトレンチの一つとして、石塚の西18mのところに幅8m・南北96mのトレンチ（5D・6DNライン）を設定して調査した。基盤層上面でとどめて平面観察をした段階で、南北50mに及ぶ弧を描く黑色粘土の落ち込みのあることに気づいた。弧は石塚の現墳丘端西側の曲線と平行するらしいことを認め、あるいは石塚の周濠の一部ではないかと考えた。

このことを確かめるため、石塚ならびにさきのトレンチに直交する幅8m・長さ39mのトレンチ（5D19ライン）を設定し（図6・7）、調査したところ、黑色粘土は石塚の墳端までつづいていることを確かめた。ついで北側での状況を確認するため石塚西北部に接して幅4m・長さ36mのトレンチ（5DUライン）を設け、黑色粘土のおちこみが5D・6DNラインで検出された弧線の延長部分に存在することを確かめた（図10）。

上記の石塚西側の3本のトレンチによって、石塚西側の黑色粘土のおちこみは、幅20mで南北90m余にわたって石塚をとりまくような位置にあることが判明した。

#### (2) 周濠内の堆積土層

周濠中央部は、上層から耕作土・灰褐色土層・褐色土層・黑色粘土層Ⅰ・植物層・黑色粘土層Ⅱの



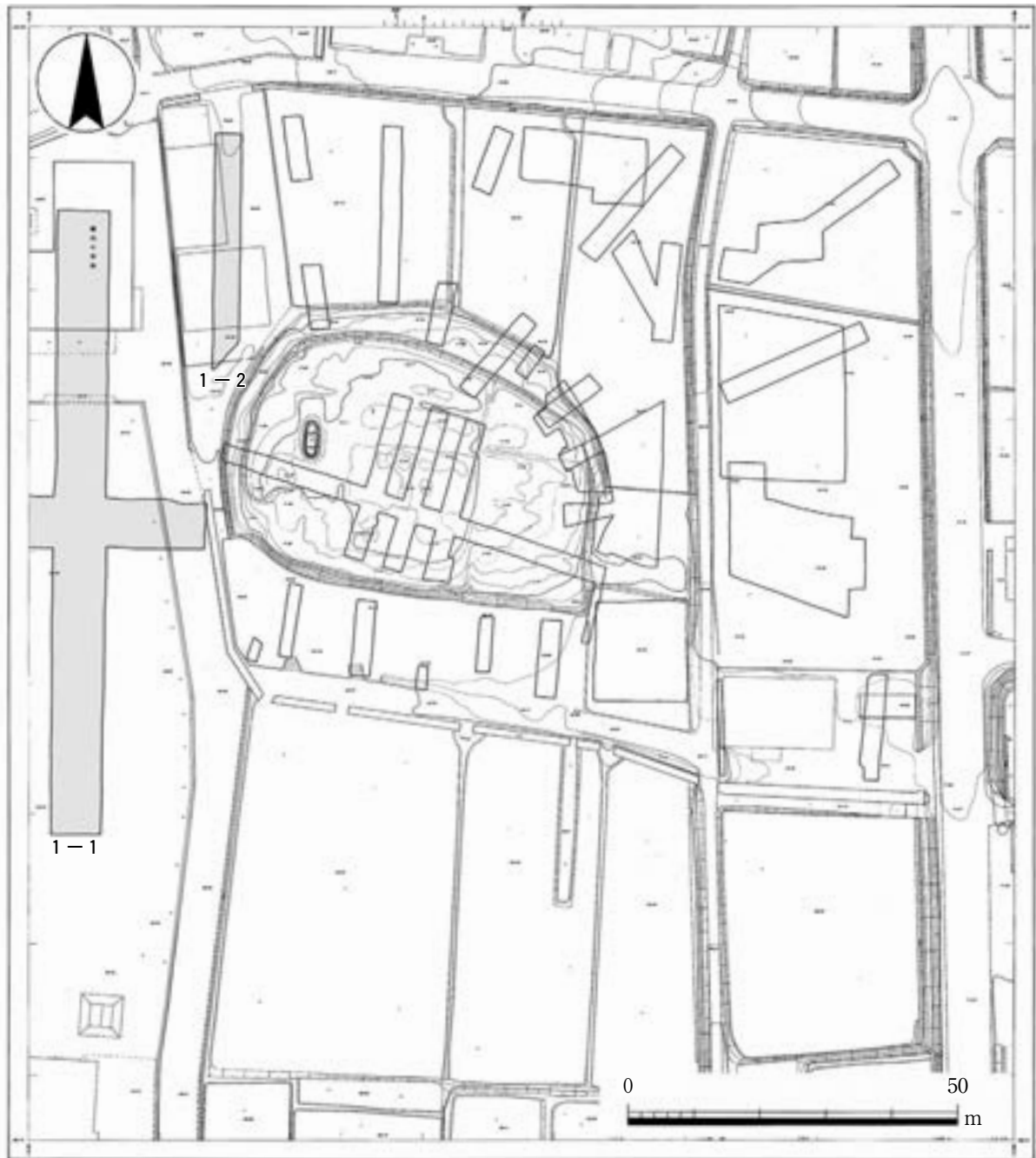


図6 纏向石塚古墳第1次調査地位置図（1／1,000）

順で堆積している。各層位に含まれている遺物とその相対年代はつぎのとおりである（図8）。

黒色粘土層Ⅰは湿地に堆積した泥土であり同層位の上面は石塚墳端・周濠肩部と一致している。つまり、周濠が泥土によってほぼ水平な状態に埋まったのは黒色粘土層Ⅰの段階であり、古墳時代後期から褐色土層の堆積がはじまったであろう飛鳥時代の頃である。

植物層は、墳端に近い部分を除いて周濠全体をレンズ状に覆っている。その厚さは、最も厚い部分で25cm余であり、層内には多量の自然木や木葉等が含まれている。自然木の中には自然の倒木と思われる根元で径42cm、年輪約60のスギの木や枝がある（図9）。この状況は古墳時代中期には、古墳ならびにその周辺に多くの樹木が生えていて、それが何らかの事情によって周濠内に多量に倒壊し、堆積

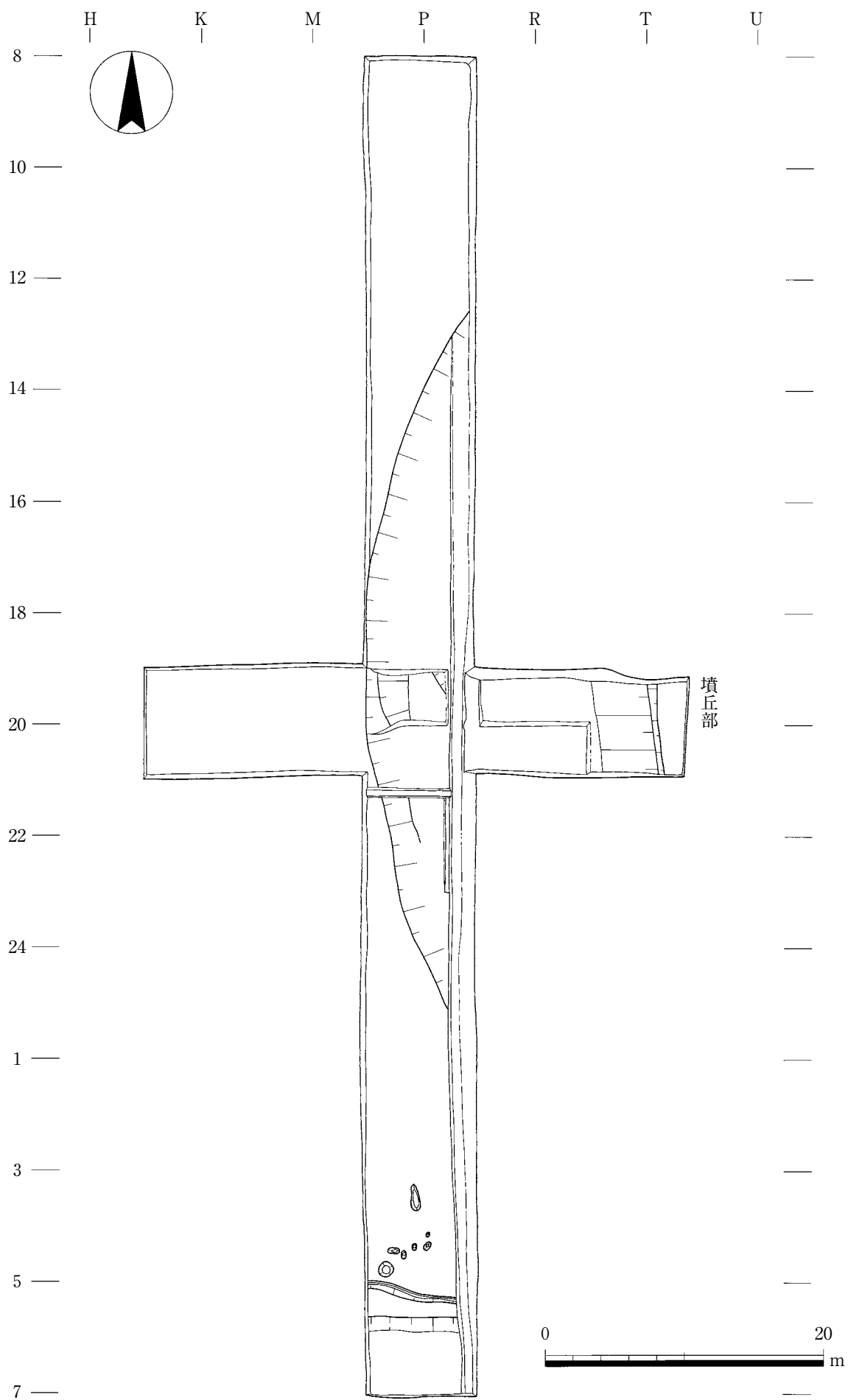


図7 1-1 トレンチ平面図 (1/400)



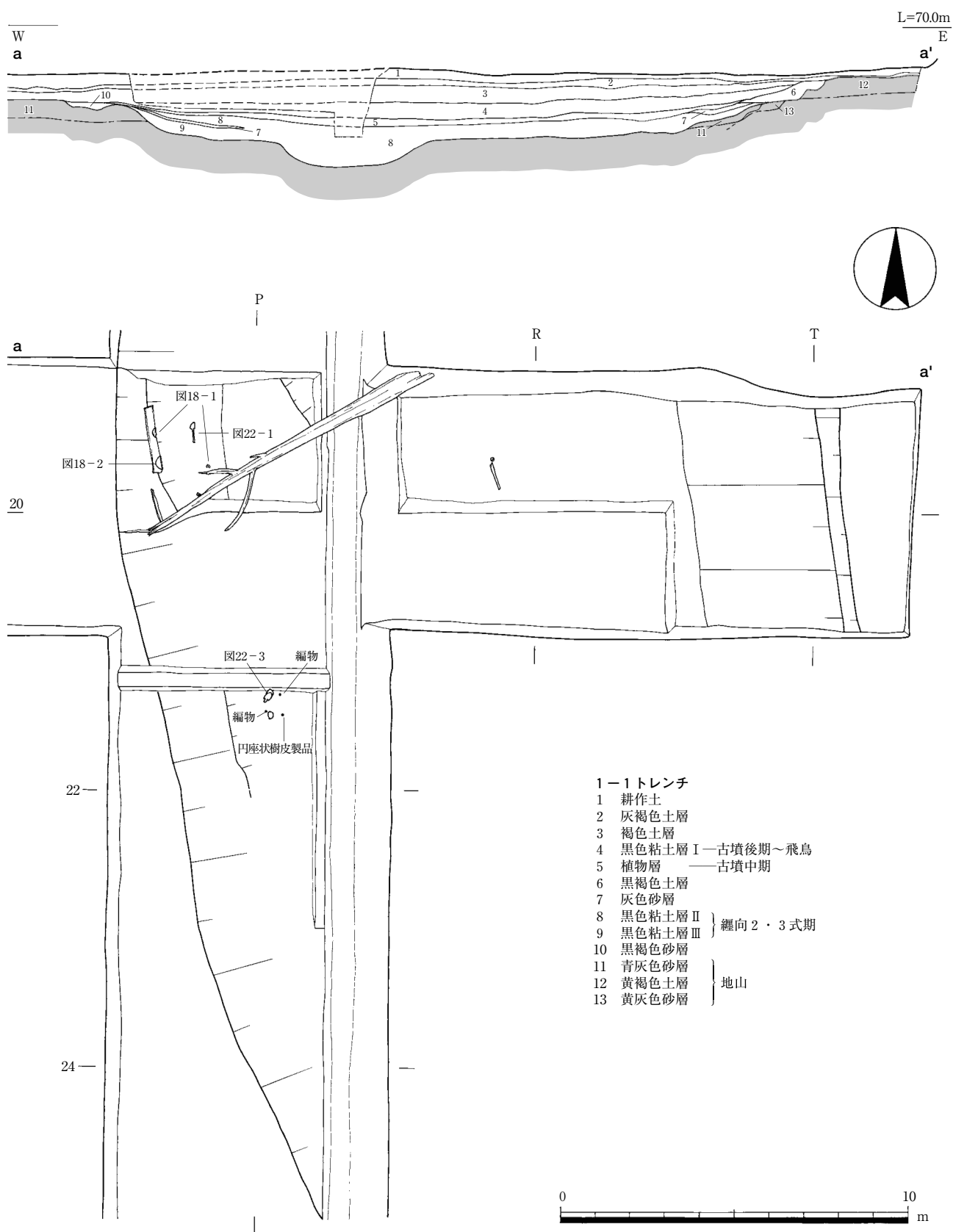


図8 1-1 トレンチ平・断面図 (1/160)

したものと考えられる。上下の層位と明確に区分できるこの植物層の存在によって、それ以前に掘られ堆積していた周濠が密閉され、本来オープンなものである濠でありながら、新しい遺物の混入を防ぐ結果となった。

黒色粘土層Ⅱは周濠底に直接している泥土である。部分的には周濠肩部に砂層が介在して黒色粘土層Ⅲの堆積をみるが、全体としては周濠掘削後の初期の堆積土としてよい。この層には縄向1式と同2式・3式の土器破片を含んでいる。その量は、発掘面積約50㎡で118片、1式と2式・3式の比は45片：17片（その他は不明）である。なお、鋤は5 D19N区と5 D21P区の黒色粘土層Ⅱから各1本検出されている（写真5・6）。

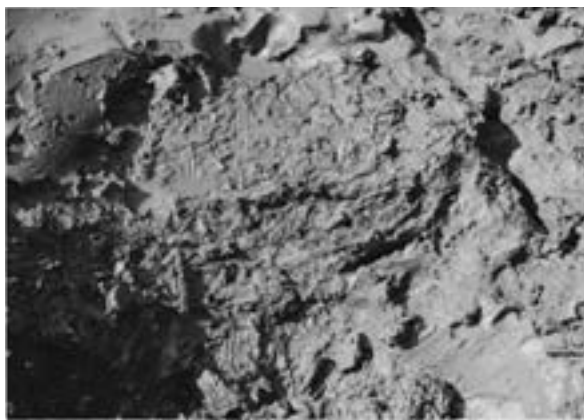


写真4 1-1トレンチ 西側周濠 編物出土状況



写真5 1-1トレンチ 西側周濠 鋤  
(図22-1) 出土状況（東より）

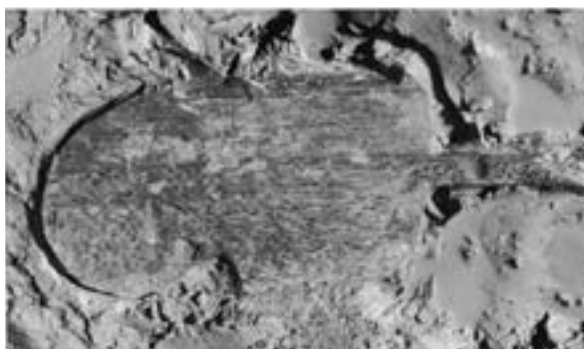


写真6 1-1トレンチ 西側周濠 鋤  
(図22-3) 出土状況（西より）

### （3）鶏形木製品の出土状況

西側周濠の外縁に近い地点（5 D19N区）から2点の鶏形木製品が出土した。周濠外縁端から濠内側へ70cm余のところに幅20cm・長さ190cm・厚さ0.6cm余の板が周濠外縁にほぼ平行して検出された。板は内側にやや傾いており（20cmで2cm）、板の表裏は腐蝕によって整形時の痕跡をとどめていないが、穿孔・刳込み・突起等の加工は認められない。

板の上から2点の鶏形木製品胴部が検出された（図9）。2点とも鶏の背側を板の縁にほぼ揃え、脚部側を板の内側に向けている。鶏形木製品1（図18-1）は脚部側が若干浮いていて板との間に3cm余土砂があるが同2（図18-2）は板に密着している。（2点の鶏形木製品と板との関係は、鶏形木製品が検出されたときに作業員がとっさに取上げてしまったため出土の原位置は自分の眼では確かめていない。前述の出土状況は、取上げた直後に板の上に付着していた朱の痕跡—鶏形木製品には両面に朱が塗られている—と板上の土の堅さから復原した。）

なお、板、ならびに鶏形木製品の出土層位は、周濠内堆積土である黒色粘土層Ⅱと黒色粘土層Ⅲの間にある灰色砂層の下部である。

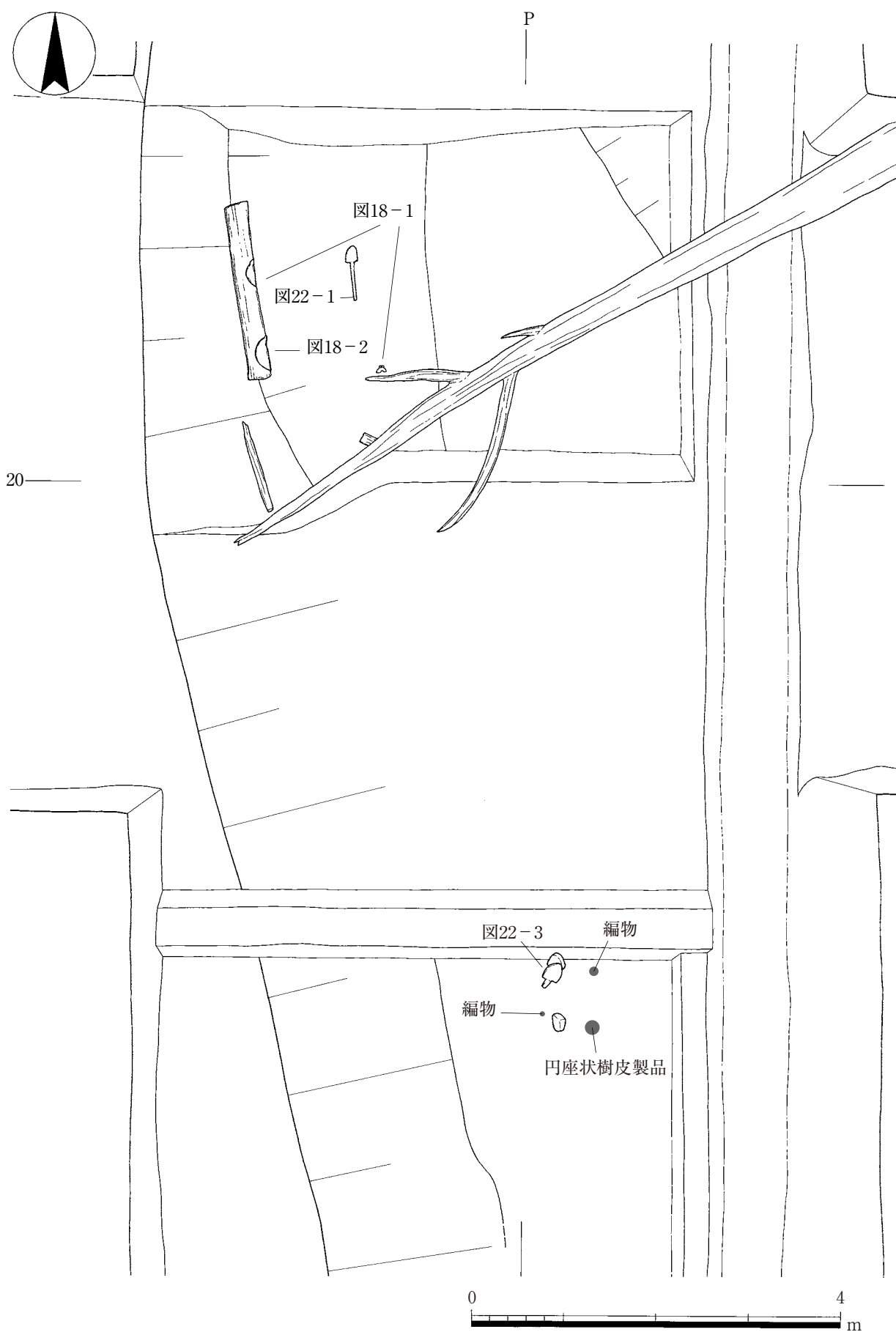


図9 1-1 トレンチ周濠内遺物出土状況 (1/60)

板の南端から東へ120cm余の地点の黒色粘土層Ⅱ、あるいは同Ⅲから鶏形木製品の頭部が1点検出された。とくに共伴遺物はない。後日、整理の段階でこの頭部と胴部1が接合し同一個体であることが明らかとなった。胴部2の頭部は不明である。

### 第3節 西北側周濠の調査（第1次調査）

纏向石塚古墳周濠の西北側を確認するため5DUラインに幅4m・長さ32mのトレンチを設定し、発掘した。周濠内は土地所有者との関係で完掘していないが、墳丘端と周濠外縁を確認することができた。

周濠内の堆積土は、西側周濠とほぼ同じであるが、植物層下の黒色粘土層内に砂層を認めることが比較的多かった。周濠内は部分的な発掘のため、遺物は多くはないが、黒色粘土層Ⅱ・Ⅲの土器片は纏向2式が下限である。



写真7 1-2トレンチ（北より）

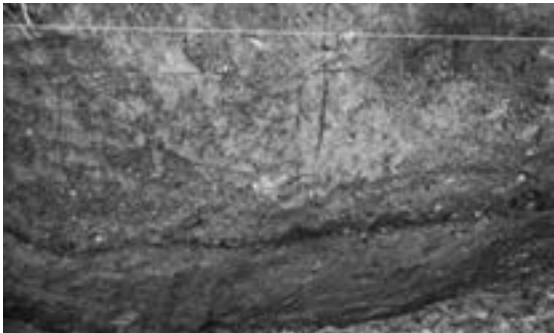


写真8 1-2トレンチ東壁土層堆積状況（西より）

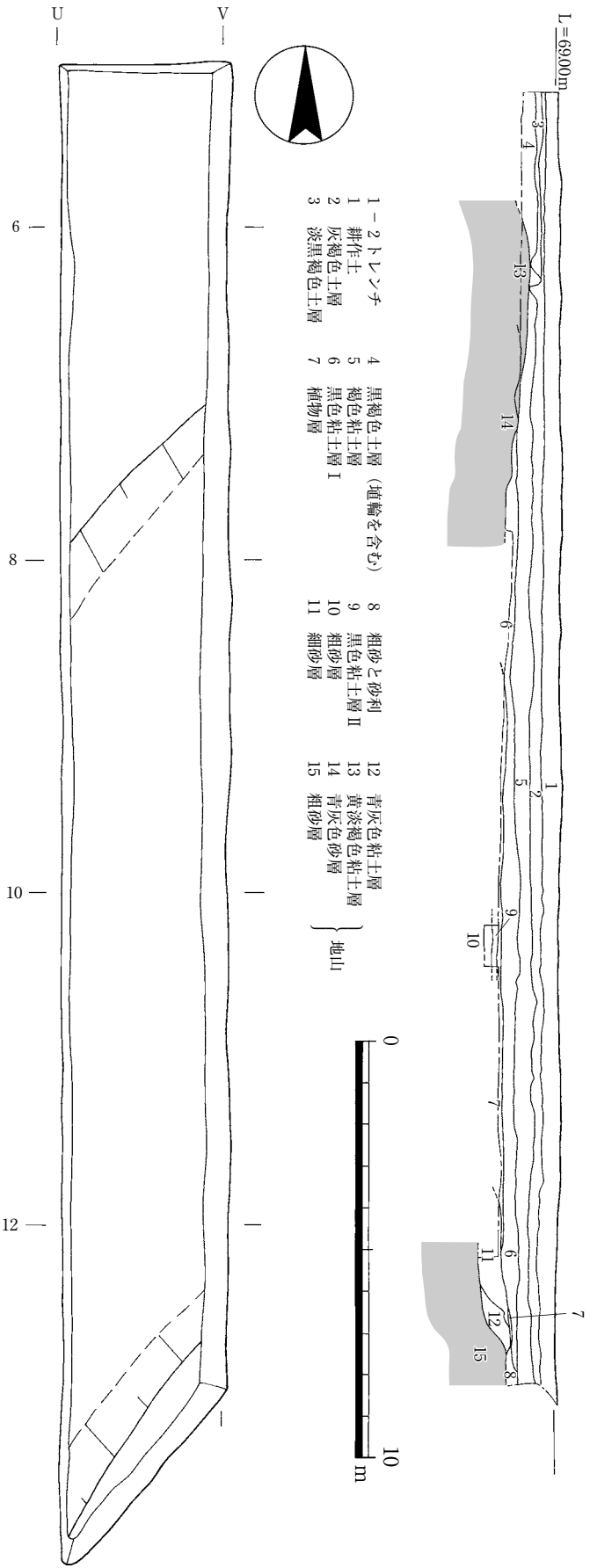


図10 1-2トレンチ平・断面図（1／160）

#### 第4節 南側周濠の調査（第2次調査）

さきの調査において、墳丘の西側に幅20m・深さ1.5mの周濠が墳丘にそって60mにわたって正円形の弧を描いていることが確認されていたが、今回墳丘の南側に接した水田に材料置小屋及び家屋建築の届出があり、当初よりこの地は、西側の周濠を復原してくると墳丘内にあたる部分と予想され、また用地東側では周濠にあたる可能性も予想されたので墳丘範囲及び周濠確認の目的で、昭和50年5月15日から6月4日まで事前発掘調査を行った。

なお調査対象地の東側は他の人の土地であり田植の時期にも近く、経費面でも困難があったため全掘することができず、トレンチ調査を行った（図11）。

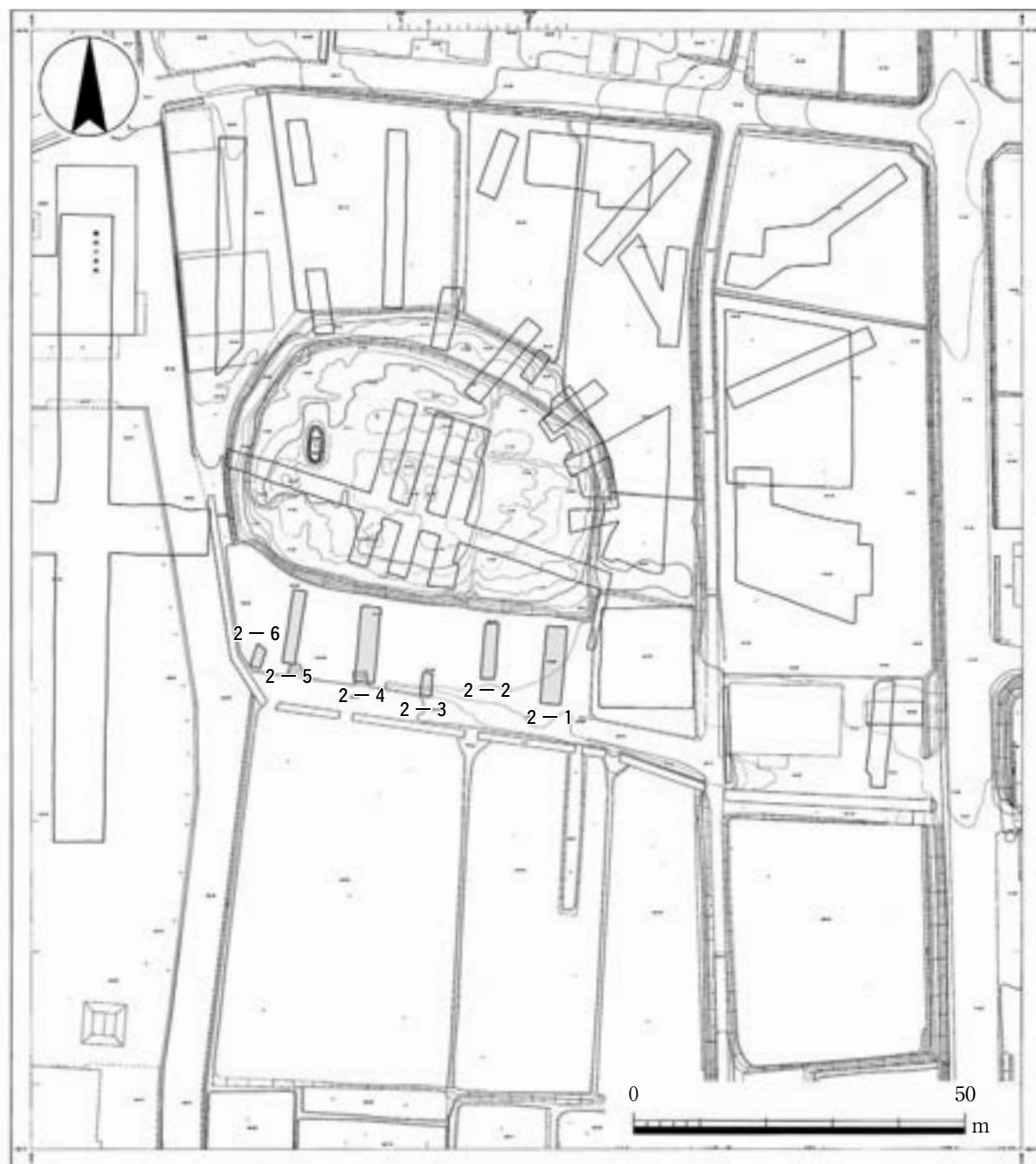


図11 纏向石塚古墳第2次調査地位置図（1／1,000）



## (1) 現 状

調査の対象となった地は、現存する墳丘の南裾に隣接する幅約13m、長さ70mの細長い水田である。この土地は、現存の墳頂上より約2.5m低く、しかも南側の水田面との比高差が約1mあり、周囲の水田面より一段高くなっている。

外形図でも観察されるように現存する墳丘の南側は、東西にほぼ直線で残存していて不整形な状態を呈し、水田によって、墳丘が削平されたことを示している。この裾部には数ヶ所にこぶし大の自然石で積まれた石垣がみられたが、これは、土砂流出防止のもので後世に築いたとの土地所有者の話である。

また墳頂部は戦時中砲台が備えられていた所で、そのおり運搬用道路を墳丘の東南すみから南側につけられていたとのことで、現在、南側の水田内に一部畑地となって残存している。

しかもこのときに盛土が運び出されたことを付記しておきたい。



写真9 2-1 トレンチ 南側周濠の調査  
(北西より)

## (2) 周濠内の堆積土と遺物出土状況

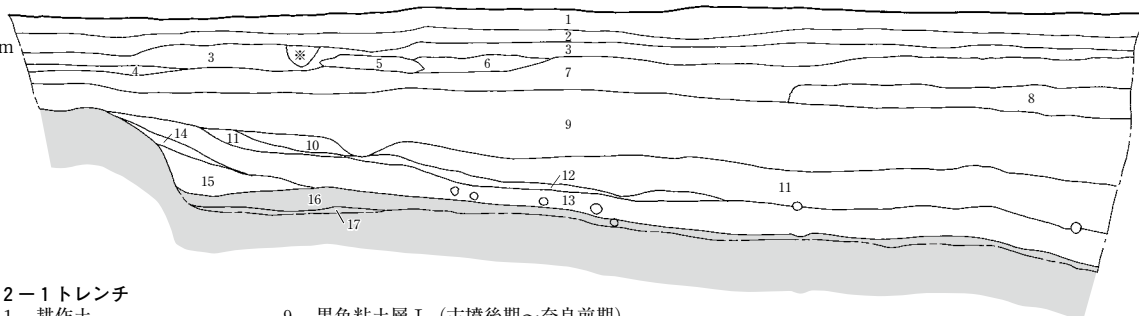
調査の対象地が、東西に細長い水田であったので幅2mのトレンチをほぼ等間隔に南北に6ヶ所入れた結果、遺構として東側で周濠及び墳丘端部を確認した。また西側では、弥生時代後期（近畿第5様式）の土器を含む包含層を検出し、南側での墳丘の形状を知ることができた。

現存する墳丘東南近くに入れた第1トレンチにおいて周濠を検出した（図12・写真9）。トレンチ内においては、周濠の両端を確認できなかったが、トレンチの北端において墳丘端に近く、濠底部は青灰色砂層を掘り込んで、墳丘側からわずかな傾斜をなして南に下っている。北側では周濠を埋めたと考えられる黒色粘土層Ⅰはさらに墳丘内に向って堆積しているところから、現墳丘内に本来の墳丘端があると考えられる。

周濠底は南側の最深部で表土下2m60cmを計測することができる。

濠内堆積層は、耕土下に灰褐色土層、赤褐色土層、黒褐色土層（奈良～平安にかけての土師器含有）、さらに黒色粘土層Ⅰ、植物層、黒色粘土層Ⅱとなり濠底の最下層は青灰色砂層となっている。周濠は黒色粘土層Ⅰの下に約20cm～30cmの南側にやや傾斜をもつ自然木を含む植物層で覆われており、植物層の上面には布留式土器片が含まれていた。植物層の上には、20cm～70cmの黒色粘土層が堆積し、下層には森浩一氏の第Ⅱ形式の須恵器、上層で第Ⅴ形式の須恵器、及び土師器を含有していた。これらから、黒色粘土層Ⅰは濠が埋まった時期を想定でき、布留式までは濠としての機能をはたしていたこ

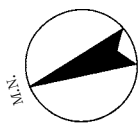
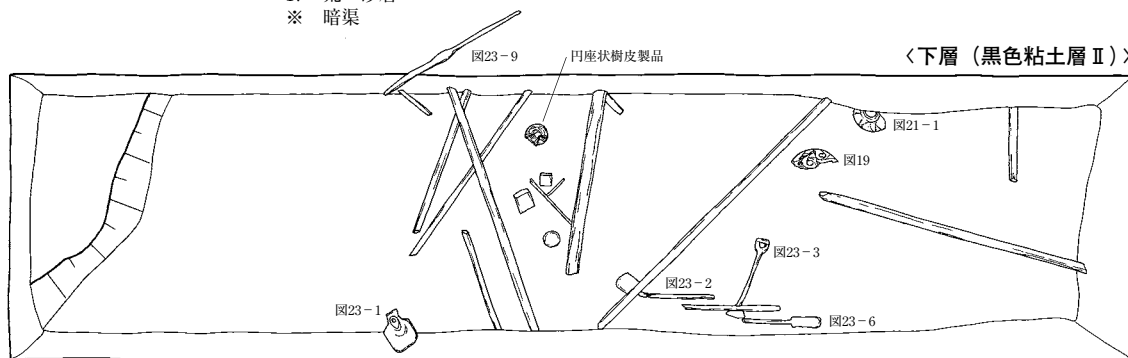
L=69.00m



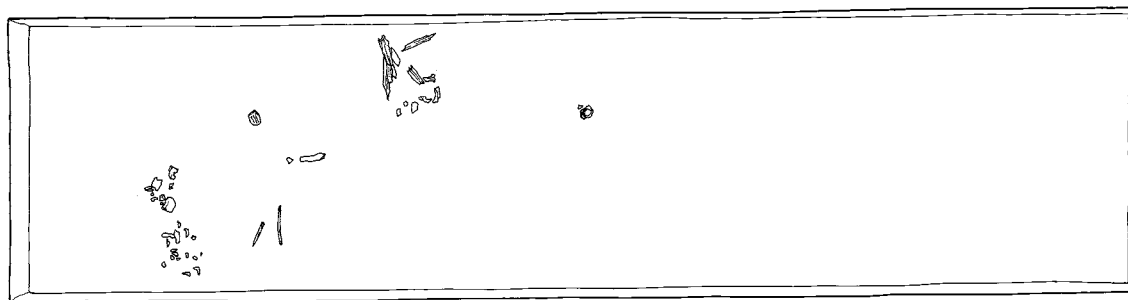
2-1 トレンチ

- |               |                          |
|---------------|--------------------------|
| 1 耕作土         | 9 黒色粘土層Ⅰ（古墳後期～奈良前期）      |
| 2 褐色土層（床土）    | 10 黒色粘土層（粘性なし）           |
| 3 灰褐色土層Ⅰ      | 11 植物層                   |
| 4 赤褐色土層       | 12 粗砂層                   |
| 5 黒褐色土層（平安時代） | 13 黒色粘土層Ⅱ                |
| 6 褐色土層（土器なし）  | 14 青灰色砂層（軟質）             |
| 7 灰褐色土層Ⅱ      | 15 青黒色土・青色砂・黒色土（無遺物）の混合土 |
| 8 赤褐色土層       | 16 青灰細砂層 } 地山            |
|               | 17 荒い砂層 }                |
|               | ※ 暗渠                     |

0 4 m



〈中層（植物層・砂層）〉



〈上層（黒色粘土層Ⅰ）〉

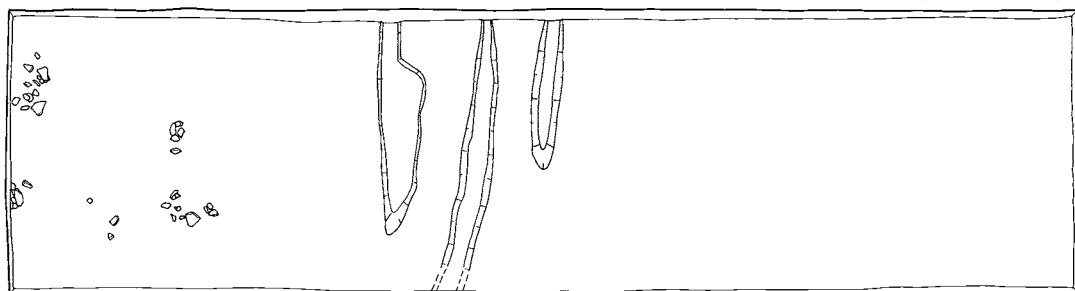


図12 2-1 トレンチ平・断面図（1/80）



写真10 2-1 トレンチ東壁土層堆積状況（南西より）



写真11 円座状樹皮製品

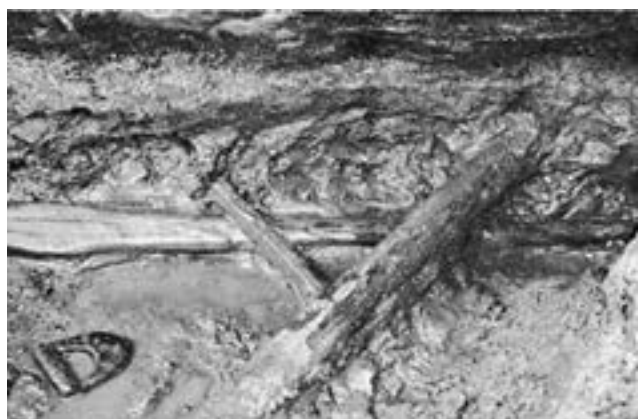


写真12 天秤棒状木製品



写真13 天秤棒状木製品



写真14 鋤等（東より）



写真15 甕（図21-3）

とが考えられる。

植物層のすぐ下には厚さ10cmの粗砂層がみられ、この下の濠最下層である黒色粘土層Ⅱが厚さ30cm堆積し、トレンチ両端にまたがって、加工された丸太棒状木製品が上層、下層に横転して出土し、交差する所もあり投棄された状態であった。弧文円板は濠底近くではほぼ水平に出土し、その他鋤・鍬も底部近くで検出した。これら木製品の他、纏向1式期の壺・甕・鉢の完形品も下層に含まれていた。この下層では他に、完形品以外の土器片は少量にすぎないが庄内型の叩き目をもつ破片は含まれていない。したがって、周濠が掘られた時期は纏向2式以前と考えられる。



### （３）弧文円板の出土状況

木製品は、いずれも黒色粘土層Ⅱのトレンチ中央部から南にかけて集中しており、丸太状木製品は中央部では、東西方向に一部交差したが放射状に上下さまざまな方向に向けて検出した。弧文円板は、東南部の濠底直上に文様面を上・円形面を東にして、西側に傾斜して出土した（図12）。他の木製品の関係においても西側近くに鋤4本が、あらゆる方向に刃先を向けて出土している。無雑作に投棄された状態であり、円板と他の木製品とは関連するものは確認できなかった。ただ円板は、同一層位で出土した縄向1式期の土器とほぼ同一レベルであり、弧文円板が埋没した時期が、伴出土器の時期とさほど差はないものと考えられる。

今回のトレンチ内では木製品では農耕具（鋤1・鋤8個体）が多く、しかも使用可能なものが大部分であり周濠内に多量に投棄された意味を解明する必要がある。

## 第5節 南側墳丘の調査（第2次調査）

第1トレンチの西側に5本のトレンチを入れ、第2、第3トレンチにおいて、墳丘端部を確認した。第4、5、6トレンチなどの西側では、墳丘端部は、調査対象となった水田のさらに南にあることを確認できた。

第2トレンチでは、耕土下に黄褐色土・暗褐色土層（奈良時代の須恵・土師含有）が堆積し、下層の黄色粘土層が南部近くで一段下り周濠になる（図13・写真16）。

この墳丘端は南西方向に延びており、第3トレンチの南端でも第2トレンチと同じ土層下においてわずかに弧を描いて検出した（図14）。これを西側墳丘端線とつないで図上復原すると、墳形は正円形にならないことが判明した。

南側の第4、5、6トレンチにおいては表土下30cmより下には、第6トレンチで厚さ30cm、第5トレンチで60cmの黒褐色土層があり、弥生時代後期（第5様式）の甕・長頸壺・高坏を含む包含層となっている（図15～17）。

この包含層はいずれも現存の墳丘下に延びていることを確認したことから、包含層の時期以後に古墳が築造されたと考えられる。包含層下はまったく遺物を伴わない灰色砂層・灰褐色砂層・青灰色粘土層となり、この地域が、湿地帯であったと思われる土層が堆積している。



写真16 2-2トレンチ（北より）

これら包含層は、いずれも南側において削平され、灰褐色土層が堆積して平安時代の土器（瓦器）が含有することから平安時代には墳丘が一部削平されていたことを確認した。従って、今回の調査地では本来の墳丘盛土は認められなかった。

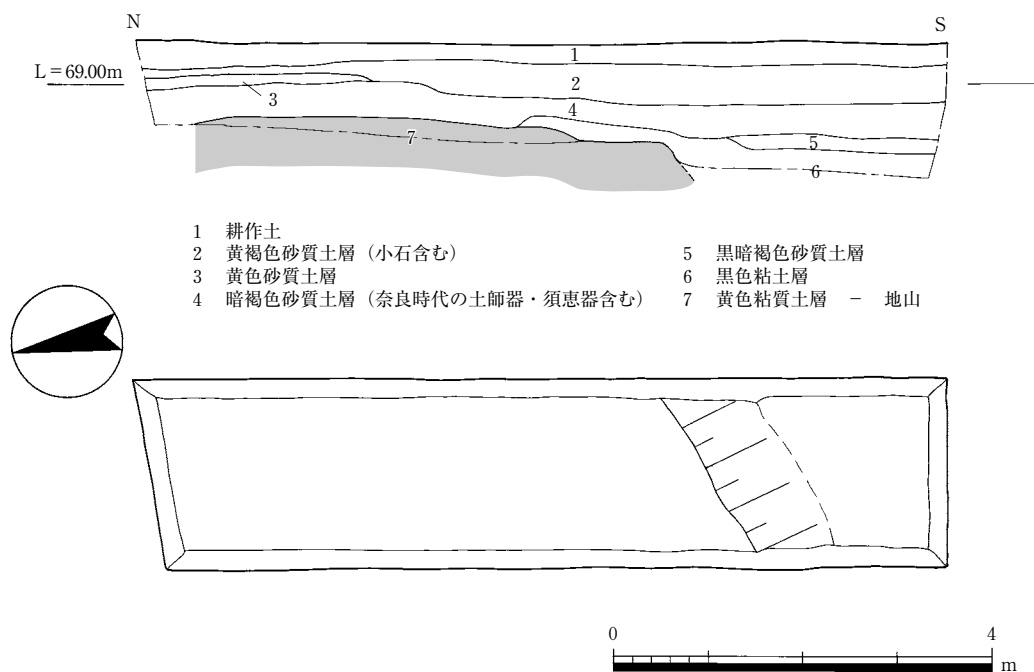


図13 2-2 トレンチ平・断面図 (1/80)

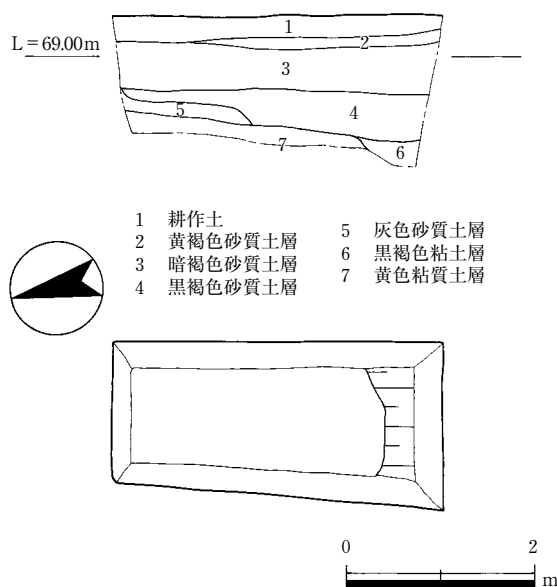
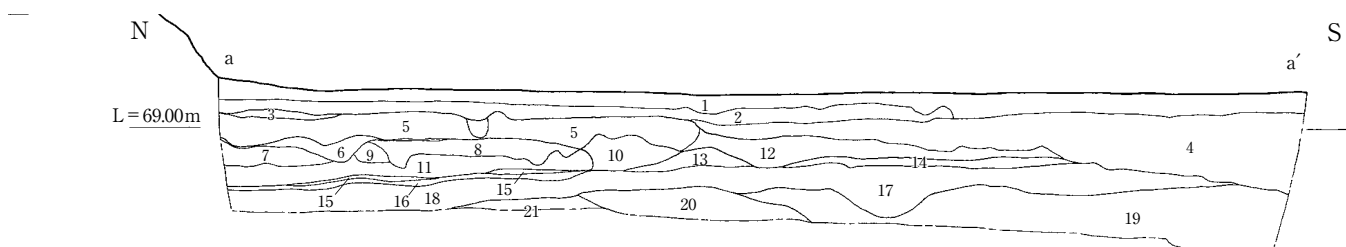


図14 2-3 トレンチ平・断面図 (1/80)





- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| 1 耕作土                  | 12 黒褐色粗砂土層（無遺物）    |
| 2 床土                   | 13 灰色砂層            |
| 3 暗褐色土層（床土と黒褐色土層の混合土）  | 14 黄灰粗砂土層          |
| 4 灰褐色土層（中世土器含む）        | 15 赤褐色砂土層          |
| 5 黒褐色土層（縄文1式期の土器を包含する） | 16 青灰色粘土層          |
| 6 暗褐色土層（炭化物含む）         | 17 黒褐色粘土層          |
| 7 灰褐色砂層（無遺物）           | 18 黒色粘土層（泥湿地を思わせる） |
| 8 灰褐色土層                | 19 黄色粘質土層          |
| 9 赤褐色砂層                | 20 灰色砂土層           |
| 10 黒褐色土層（炭化物含む）        | 21 青灰色粘土層          |
| 11 灰色砂層～灰褐色砂土層         |                    |

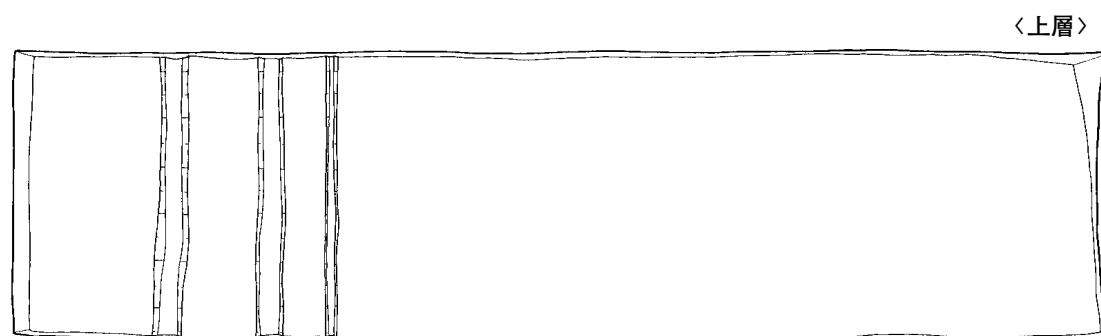
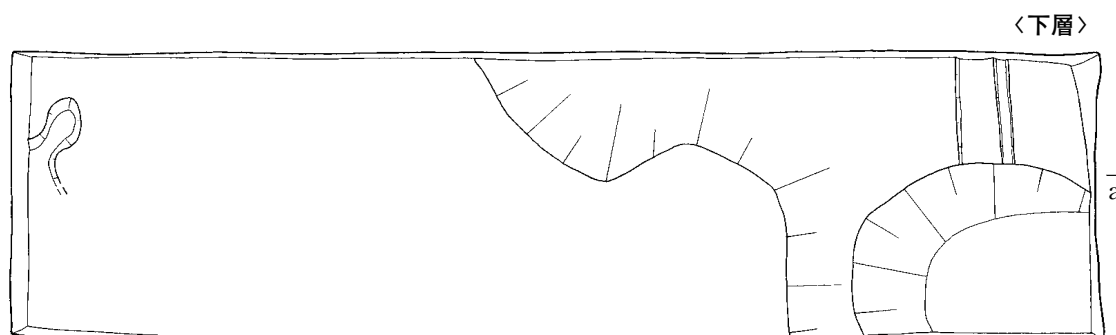
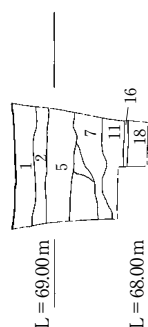
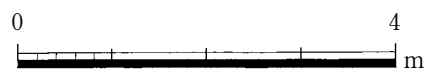
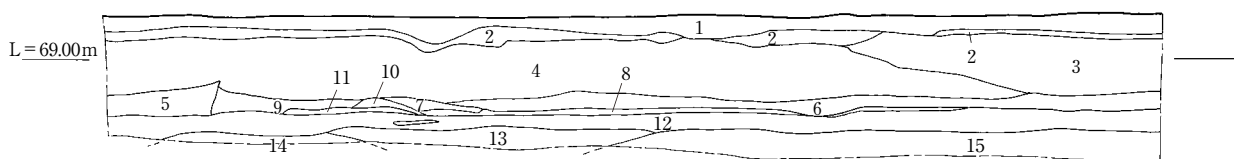


図15 2-4 トレンチ平・断面図（1/80）



- |                   |                  |            |
|-------------------|------------------|------------|
| 1 耕作土             | 6 暗灰褐色砂質土層       | 11 灰褐色粘土層  |
| 2 床土              | 7 灰褐色砂層（鉄分含む）    | 12 黒褐色粘質土層 |
| 3 灰褐色土層〔室町期の落ち込み〕 | 8 灰褐色粘質土層        | 13 黄灰色粘質土層 |
| 4 黒褐色土層（弥生土器片を包含） | 9 暗灰褐色砂質土層（鉄分含む） | 14 青灰色砂質土層 |
| 5 黒色粘土層（弥生土器片を包含） | 10 灰黒色砂層（鉄分含む）   | 15 灰色砂質土層  |

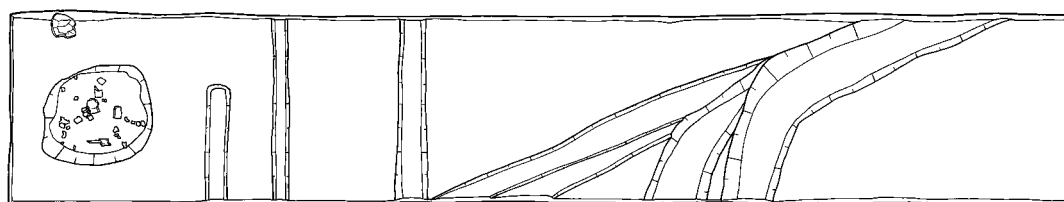
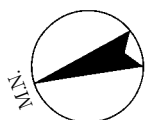


図16 2-5 トレンチ平・断面図（1/80）

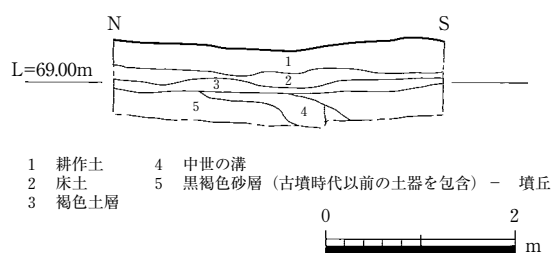


図17 2-6 トレンチ断面図 (1/80)

## 第6節 まとめ

### (1) 周濠掘削時期と存続時期

本章第2・3節で報告したとおり、纏向石塚古墳の周濠は黒色粘土層Ⅰ上面ではほぼ水平に埋没した。その時期は、古墳時代後期（森浩一氏須恵器第Ⅲ型式期）である。黒色粘土層Ⅰと黒色粘土層Ⅱの間には植物層があり、周濠全体を密閉している。その時

期は、古墳時代中期（森浩一氏須恵器第Ⅰ型式後半期）である。この2つの層位が周濠の存続時期を示すものであろう。

周濠掘削時期は黒色粘土層Ⅱと同Ⅲに含まれている土器によって検討しうる。黒色粘土層Ⅱには纏向1式土器破片と同2式・3式土器破片がある。両者の比は本章第2節で指摘したように、45片：17片で、圧倒的に纏向1式期の土器が多い。その上、南側周濠内からは同時期の完形品が3個検出されている。

なお、本章第5節で報告した墳丘の調査では弥生時代近畿（唐古45号堅穴上層併行）第5様式の堆積層が墳丘下にあることが確かめられ、かつ、周濠はこの堆積層を切っている。

これらの事実から考えられることは、

①周濠の掘削は近畿第5様式期（弥生時代後期）よりは新しく、おそらく濠底出土の3個の完形土器に象徴される纏向1式期であろう。

②植物層堆積時点まで周濠はオープンであったため纏向2式・3式期の土器がおちこむことは十分にありうる。つまり、黒色粘土層Ⅱ内の纏向2式・3式期の土器は滞水状態の周濠の存続時期を示すものであろう。

③纏向4式期の土器が認められないのは、東田地区に同時期の遺構が検出されていないことと対応する。つまり周濠はオープンであったけれども土器の入りうる機会は少なかったものと思われる。言いかえれば、纏向石塚古墳が纏向4式期以降に築造されたとは考え難いことを示す。

要するに、纏向石塚古墳の周濠は纏向1式期に掘削され、同4式期まで滞水状態でオープンであった。それが、須恵器第Ⅰ型式後半期には植物層によって密閉され、幸いにもその後の遺物の混入を防いだ。

### (2) 周濠内の遺物によって古墳の築造時期を限定しうるか

古墳の周濠は、本来オープンなものである。従って、現代も水を湛えている古墳の周濠には現代の器物が当然入りうる。それが重いものであれば周濠内泥土の最下層にも達するであろう。

そしてまた、古墳の周囲に仮に縄文時代の集落跡があれば、古墳築造時、あるいは周辺の開墾時等に周濠内に縄文土器が入ることもまた大いにありうる。

つまり、堀・池・溝等には、その状況に応じて古い器物も新しい器物も入ることは一般的な現象である。反対に、その構築物の機能によっては、機能時点の器物があまり入らないこともありうる。

古墳の周濠とは、本来上記のような性格のものであろう。従って、周濠内の遺物によって古墳の築造時期を推定しようとすることは極めて困難であり、また危険である。

このような条件を頭に入れた上で、なお、前項では周濠内の遺物によって周濠の掘削時期を推定し、古墳の築造時期に及ぼしたいと考えている。纏向石塚古墳に限ってそれが有効であろうと考える根拠はつぎの3点である。

①周濠が比較的早い時期に明確な土層によって密閉され、以後の器物の混入を防いだこと。

②密閉土層以下の各層に完形品を含む比較的多くの土器が含まれていて、ある程度の量的な操作が可能であること。

③古墳時代の葬送儀礼にかかわる直弧文の祖型を刻んだ「弧文円板」が検出され、文様の構成原理上、少なくとも岡山県地方の第2段階（向木見型）の特殊器台文様よりは古い段階に比定しうること。

上記3点の好条件に恵まれてはじめて、周濠内遺物によって周濠の時期を推定し、「墓」にかかわる「弧文円板」を通じて古墳築造時期に及ぼすことが可能となった稀有な例であろう。

### （3）纏向石塚古墳周囲の黒色粘土のおちこみは、はたして同古墳周濠なのか

纏向石塚古墳のある東田地区には、纏向1式期から同3式期の水路と土壙群がつくられている。従って、古墳周囲の「おちこみ」も古墳築造以前から存在していた可能性はないのか、という疑問は調査期間中から多くの方々から頂いたし、私を含めた調査者もその規模があまりに大きいことや東田地区から埴輪片が点々と検出されていることもあって、大いに疑った。

しかし、この疑問にはつぎのように答えることができる。

①「黒色粘土のおちこみ」はその外縁が南北60mの規模で正円に近い弧を描いており、その内縁は古墳墳丘端で終ること。

②仮に、この「おちこみ」が古墳築造以前から存在していたとすると、不整円形、あるいは不整馬蹄形の幅20m余のおちこみの中の島状の地点にたまたま古墳をつくったこととなり、考え難い。その上、もしそうであったとすれば古墳築造時の新しい器物（埴輪や土器等）が多少はおちこみ内に入りこんでいるのではないか。それが認められない。

③すでにあったおちこみを若干整形して周濠としたと考えても、その痕跡はどの部分の堆積土層にも認められない。

つぎに、古墳周濠であるとする、その中に日常使用の土器等が比較的に多く含まれていること自体おかしいのではないか、という疑問がある。

しかし、従来、古墳周濠の調査はあまり行なわれていないため、古墳周濠内遺物として正常か異常かを検討する類例に乏しい。むしろ近年の周濠調査の例に照らせば日常使用の土器や木製品が含まれている方が常態と言えるようである。

### （4）纏向石塚古墳の原形

古墳の現状は、本章第1節で記述したとおり長径60mの不整形の平坦な小丘にすぎない。かつて、「奈良県纏向遺跡の調査」（古代学研究 65）で周濠外縁の形状を根拠として復原した「径70m～80m

の円墳」説は、1975年5月の南側周濠の調査（本章第5節）によって訂正しなければならない。

南側周濠部分では、周濠外縁の調査は実施できなかったが、墳丘端が推定円墳の墳域より少なからず内側で検出された。この事実と西側周濠の事実を合わせると、墳形は南北60m以上75m、東西60mの扁円形となる。

さらにここで検討すべきことは、現墳丘東側の、他より50cm余高い水田が俗称「タカマル」とよばれている点と、より東側の水田畦畔が整然とした条里地割の中で異質な区画をもつ点である。

「タカマル」は、太田北微高地のたかまりと一致するとは言え、「かつて高まっていた地域」と考えると古墳の「前方部」を表現することとなるし、異質な畦畔の走向をたどるとその規模も想定できる。

畦畔痕跡によると、「前方部」は現墳丘東端から東へ75m・幅45mをはかることができる。これを「後円部」（現墳丘部分）と合わせると、全長135mの前方後円墳を復原することができる。この場合、前方部端と辻地区土壌4は60mの距離であり、仮に幅20mの周濠がめぐるとすれば、40mの至近距離となる。そうすると豊富な遺物をもつ辻地区土壌4と建物は、纏向石塚古墳の祭祀用施設の可能性が強まる。ただし、この復原は現地形に照らしても十分な根拠をもち得ないので、検討の対象にとどめておかねばならないだろう。

現段階では、纏向石塚古墳の墳形は、南北60m以上75m・東西60mの扁円形で、東側に張出す可能性がある、としておきたい。

（石野・久野）

## 第7節 纏向石塚古墳周濠出土の木器・木製品

ここに記述する木製品は、纏向石塚古墳の周濠が掘削された時期以後、すなわち纏向1式期に集中的に埋没したと思われるものである。農耕具を中心として、信仰・呪術に関わるものなどが出土している。だが通常農耕具としての機能を果たす鋤も、出土遺構から推すと、周濠の掘削または排土に使用された土木用具の役割を担ったのであろうと考えられる。

### （1）信仰に関する用具

纏向石塚古墳の西側周濠からは、鶏とみられる鳥形に切り抜かれた板が2点出土している。1点は頭部を欠失しているが、他のものは頭部に鶏冠が削り出され明らかに鶏と認められる。そしてその出土遺構との関連から、信仰かたは呪術に関した用具と推定される。また、南側周濠からは弧文円板が出土している。

#### 1. 鶏形木製品

鶏形木製品1（図18-1、図版89-18）1枚の板を削って鶏形に作りだしている。嘴と尾の部分は欠損する。安定感のある胴部から細い頸を作りだし、鶏としての性格を強調するかのごとく、やや大きく感じられる頭部にいたる。頭の上には鶏を特徴づける鶏冠を削りだしている。鶏冠の中央には半円形の穴を削り抜き、ここに紐等を通して器体を吊るしたのであろうか。脚の部分も本来表現されていたと思われるけれども、現状では破損している。腹部を厚くして頭部に行くに従って薄く仕上げられ

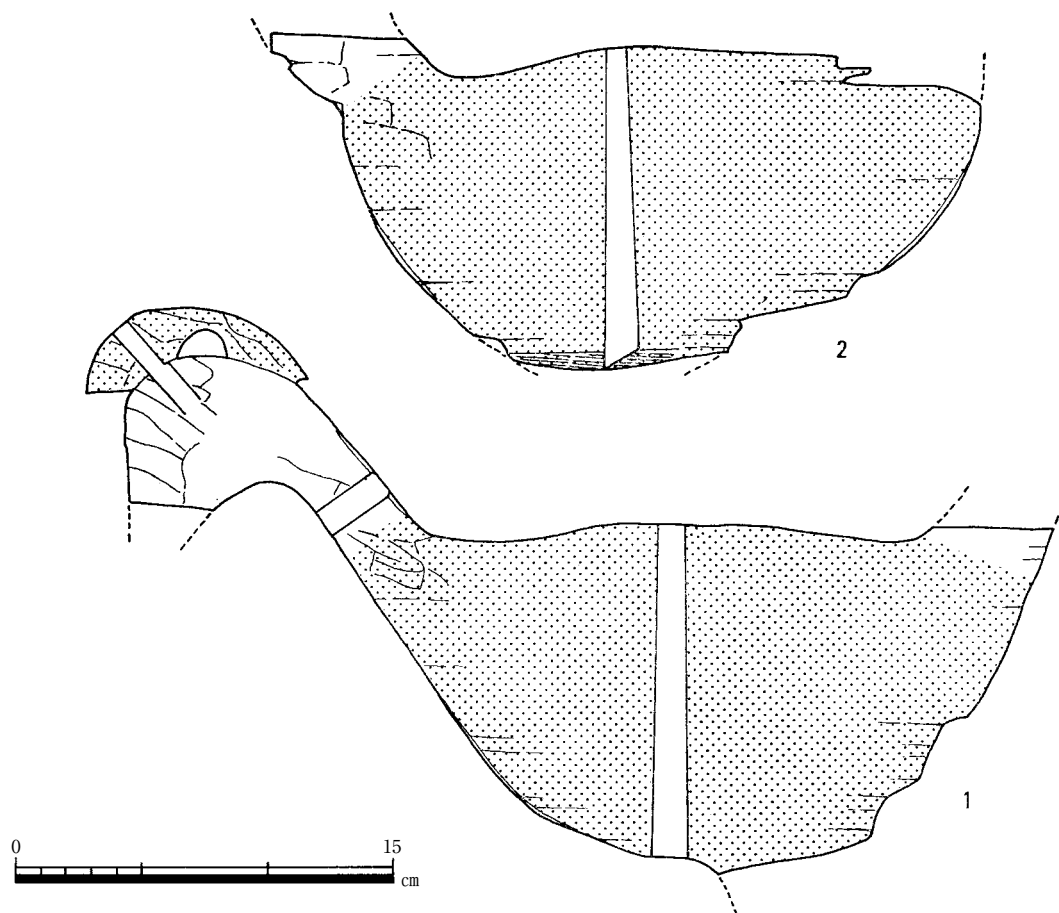


図18 纏向石塚古墳西側周濠 鶏形木製品実測図（1／3）（網目は朱彩、白ヌキは断面）

ているのは、鶏形に安定感を抱かせるためであろう。鶏冠部は一面を頭部より段をつけて削り込んでいる。表裏面とも鈍状の利器で整形し、鶏冠の細部の整形には刀子が用いられているようである。胴部は側面をもふくめ全面に朱彩している。鶏冠にも朱彩が施されているが、表面と側面のみで裏面にはない。全長39.0cm、高さ22.3cm、胴部の幅13.9cm、厚さ0.8～1.5cm。鶏冠の長さ8.8cm、高さ2.0cm。頭部幅2.9cm、厚さ1.1cm。〔柾目、ヒノキ、5 D19N〕

鶏形木製品2（図18-2、図版89-19）1枚の板より鶏形を削りだしたものと思われる。頭部と尾、脚部は折損している。形状は鶏形木製品1に類似しているが、胸部が鳩胸のようにやや張り出し、頸部との境目を抉り込んでいる点と、脚部の位置が器体のほぼ中央にきて、鶏形木製品1よりも整った形であるところがやや異なる。断面はやはり鶏形木製品1と同じく腹部を厚くしたつくりである。両面とも鈍で整形され、側面もふくめ胴部全面に朱彩されている。現存長28.0cm・高さ13.8cm。胴部幅12.7cm・厚さ0.8～1.4cm。〔柾目、ヒノキ、5 D19N〕

## 2. 弧文円板（図19、図版93）

一枚の板である。表面の細線文様は、断面V字形の鋭利な刃の工具で刻んでいる。文様の削り抜きには、けびき線を引いたようで一部にその痕を残す。削り抜き部側面には、一部で横位に削られた刀



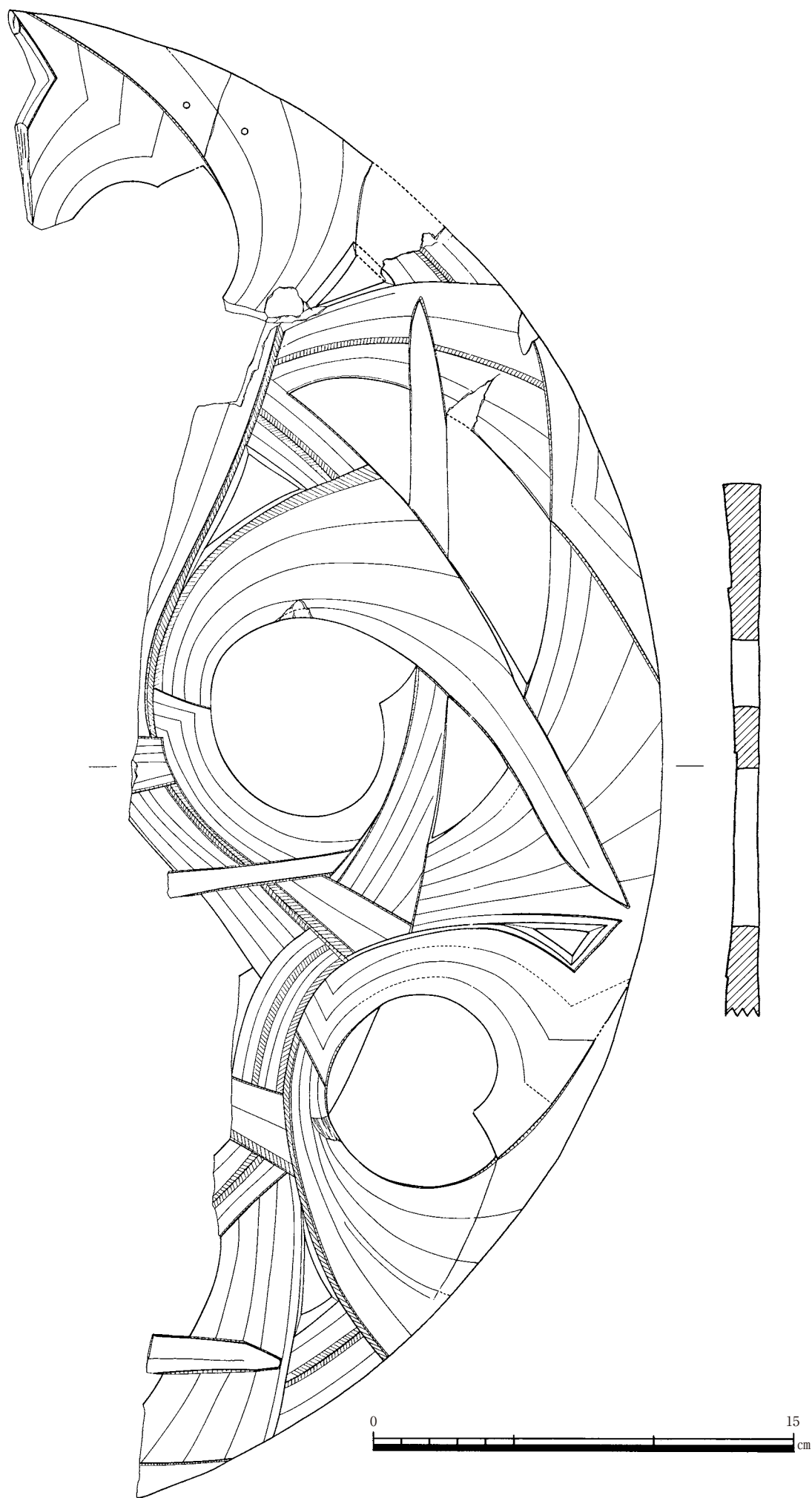


图19 纏向石塚古墳南側周濠 弧文円板実測図 (1 / 2)

子状の痕が残る。段を形成して表現した文様のうち、曲線の場合は残存最大刃幅0.6～0.7cmの工具で線に沿って削る。直線では線にむかって直角に削っている。

外周に残る2ヶ所の小孔は、径0.2cmの円形で錐を使用したと考えられる。孔の小口はやや磨り減る。紐が通されていたのであろう。2ヶ所の小孔の中央で割れているので、とじ合わせるための孔であったかもしれない。

裏面は木目に対して約30度の方向で、幅0.5～0.6cmの平行した鈍の整形痕が全面に残る。外周側面は1.5cm程の間隔で次々に削っている。円形の板であったとすれば、復原直径が56.0cmになる。残存直径54.6cm、残存幅19.6cm、最大厚1.4cm〔柁目、南側周濠〕

## （2）土木・建築に関する用具

土木用具と考えられるものに鋤身5点、鋤の柄部把手1点の出土がある。鋤身は現用のスコップ形のもの3点と、櫛形2点の2種類に分れる。

### 1. スコップ形の鋤（長柄鋤）

1.（図22-1、図版90-20）柄と身とを共木で作り角度がない。身は肩部をほぼ一直線に作り、横断面は表面を平坦にし、裏面は弧状をなす。先端と両側縁を薄くし刃部をなしている。柄は面取りした楕円形の長い棒の先端に、逆三角形環状の把手が共木で削り抜かれている。把手は横木の両端が突出したつくりである。刃幅0.5cmの鈍状の工具で内外面とも調整されている。身と柄の現存全長79.1cm、身の長さ18.1cm。肩現存幅13.4cm、厚さ0.6～3.2cm。柄の長さ61.0cm、径3.1×2.5cm。把手の幅11.2cm、長さ12.1cm、厚さ2.1cm。〔柁目、カシ、5 D19N〕

2.（図22-3、図版90-23）身は先端および両側縁を薄く作り、横断面は両側縁にむかってやや弧状をなす。肩は両側に約10度おちており、足をかけたため磨り減っている。柄は断面円形の一部を平坦にし、握るにやや不便を感じる。握り部は不明である。現存長41.4cm、身の長さ28.3cm、幅16.4cm、厚さ0.5～2.8cm。柄の現存長13.1cm、径2.8cm。〔柁目、カシ、5 D21N〕

3.（図22-4、図版90-22）身は先端および両側縁を薄くしている。横断面は裏面が欠損しているので明確ではないが、表面を平坦にし裏面を弧形にする。他の鋤と同じ形状をなすものと思われる。柄は付け根で欠失しているので明らかでないけれども、楕円形の棒であったと思われる。身の全長26.3cm、幅16.1cm、厚さ0.4～2.5cm。柄の断面3.4×2.5cm。〔柁目、カシ、5 D19N〕

4.（図23-2、図版94-16）身は表裏面と両側縁にむかって薄く削り刃部をつくる。刃部は全て磨り減る。肩部は一直線で磨滅はない。柄は基部が楕円形で先端にむかって細くなりつつ円形になる。柄の先端には逆三角形環状の把手が共木で削り抜かれる。横断面は方形であり、横木を太くつくる。横木外側面には、指にそった磨滅が認められる。残存長79.6cm、身の残存長23.0cm、幅18.9cm、最大厚2.3cm。柄の径（先端）2.8×2.4cm、把手の長さ11.5cm、幅11.4cm、横木の横断面3.0×2.7cm。〔柁目、南側周濠〕

5.（図23-3、図版95-23）身部の短小な鋤で1～4とは別な種類であるかもしれない。柄と身は共木。身の裏面は柄と身の接点から柄側約5.0cmのところより、柄下面に対し7～8度の角度で削り

出される。面は平坦である。表面は側縁を薄くし刃部をなし、横断面を弧状につくる。刃部先端は幅1.5cm程を特に角度を急に（下面に対し14度）削り込んでいる。肩部は両端にむかってやや下がり、両肩の位置は0.7cm上下する。下のほうはやや幅広で、足がかけられたものか磨滅が認められる。

柄は身との接続部下面を平坦に削る他は、ほぼ円形の棒につくられる。棒の先端には、逆三角形環状の把手が削り抜かれる。横木の内側が磨り減り、外側面の一部に削り痕が残存する。

刃部の磨滅は認められず、身も短小であるところから、鉄製刃先の着装も考えられるが、その当り痕は確認できない。

残存全長90.6cm、身の長さ10.6cm、肩幅14.3cm、最大厚1.6cm。柄の基部幅4.2cm、厚さ2.0cm、中央部径3.0×2.8cm。把手の長さ13.4cm、幅12.0cm、厚さ2.0cm。〔柁目、南側周濠〕

6.（図24-19、図版95-18）身は5と同様短小。裏面はほぼ平坦。刃部は片側が使用中に破損したのか大きく欠けている。刃先は磨り減る。肩部はほぼ一直線と思われ、残存する肩は磨滅がある。柄はほぼ円形の棒で先にむかうに従って細くなる。先端は磨滅しており、これよりさらに続くか明らかでない。

全長45.5cm、身の長さ11.6cm、幅13.9cm、最大厚2.5cm。柄の径（先端）2.7×2.3cm。〔柁目、南側周濠〕

7.（図24-22、図版95-22）身は短小。身の裏面は平坦。表面横断面は両側縁が薄い弧状をなす。刃先は一部が欠損するなど使用の痕が激しい。肩部は大半が欠失する。両端にやや下がり、両肩基部の位置が0.5cm上下する。5と同じ仕様であると思われる。柄は基部が残るのみである。丸棒である。残存長18.8cm、身の長さ13.5cm、残存幅12.6cm、最大厚2.4cm。柄の径3.1×2.6cm。〔柁目、南側周濠〕

8.（図24-17、図版94-15）身部のみが現存する。裏面平坦。表面は両側にむかって薄くつくる。刃部は残らないが、身部の肩に残る痕跡から身と共木で、幅4.0cm程のものであったと推測される。

身の長さ12.7cm、残存幅12.1cm、最大厚2.5cm。〔柁目、南側周濠〕

## 2. 櫓形の鋤（着柄鋤）

1.（図22-8、図版91-25）柄と身とも共木で作る。身の先端を直線に作り、また先端にむかいやや削り込まれた長方形を呈する。横断面は一面を平坦にし他面は鎗状の反りを作り、先端にむかって薄くして刃部をなす。両側縁には刃をつけていない。柄は破損しているが丸棒であろう。土を掘削して溝や穴を掘る土木工事用のために、身を細く作っている。身の長さ19.7cm、幅6.2cm、厚さ0.3～2.3cm。柄は直径2.5cm。〔柁目、カシ、5 D19N〕

2.（図22-5、図版90-24）身は肩の部分を残すのみである。肩部の形からみて身は長楕円形をなすものと考えられる。残存状態から推すと、両面とも側縁にむかって薄くなる弧状に作られたであろう。柄は丸棒としている。身の形やその横断面からすると、土すくいの機能をそなえた鋤ではなく、土を掘り削ることを主眼として作られた鋤と考えられる。現存長12.4cm、身の厚さ1.1～1.9cm。柄の長さ9.3cm、直径2.5cm。〔柁目、カシ、5 D19N〕

3.（図23-6、図版94-14）身部は裏面をほぼ平坦に、表面は側縁を薄くし刃部をなす。肩部は両側の位置が1.0cm程上下し、上位の肩がやや幅広である。柄は歪んだ楕円形に削られた棒であるが、先

が折損する。全体に腐蝕が進行し使用痕は明らかでない。

残存長79.5cm、身の長さ31.0cm、幅12.9cm、最大厚3.1cm。柄の径4.1×3.2cm。〔柁目〕

### 3. 鋤の柄頭

1. (図22-2、図版90-21) 逆三角形環状に、柄と共木で作られた把りである。把部は現在では3片しか残らないが、その形状からすると力の強くなる横木をやや太く作ったものと思われる。横木の内側には、指の幅程の磨り減った部分が3箇所あり、この部分が強く握られたのであろう。楕円形に握りやすく削りだされている。柄も折損している所以この把部のものとは断定できないが、楕円形の長い棒であり鋤身にむかって太くなっている。把部の長さ推定15.0cm、幅推定16.7cm、厚さ1.5cm。柄部現存長26.0cm、径1.9×3.0cm。〔5 D19R〕

2. (図23-4) 柄と共木である。削り抜き部が小さく、手を挿入するのに困難をきたしたと思われる。横木は楕円形につくり他の部分より厚くする。

全長10.6cm、幅9.2cm、横木の径3.1×2.2cm。〔柁目、南周濠、1トレ黒粘Ⅱ〕

### 4. 鋤の身部破片

1. (図24-21、図版95-21) 肩部の破片である。肩は両側にやや下がると思われる。柄は肩に残る痕跡から丸棒であったと推測される。

残存長12.9cm、残存幅10.9cm、最大厚3.1cm。〔柁目〕

2. (図23-5、図版94-17) 肩部から側縁にかけての破片である。残存長9.1cm、残存幅10.5cm、最大厚2.2cm。〔柁目〕

3. (図24-20、図版95-20) 側縁部の破片である。残存長7.9cm、残存幅9.5cm、最大厚2.0cm。〔柁目〕

4. (図24-18、図版95-19) 側縁部の破片である。残存長13.2cm、残存幅7.9cm、最大厚2.2cm。〔柁目、南側周濠〕

### 5. 広鋤 (図23-1、図版94-13)

頭部を狭く削り込み、その部分に柄つぼを穿孔している。柄つぼは110度程の鈍角に穿孔されている。柄つぼの周囲には舟形突起を設け、使用時の衝撃に備えている。突起は柄つぼ部分を最も高くし、刃部に伸びながら次第に不明瞭となる。

頭部端は一部分を破損しているが、一側にむかって下がっている。また頭部裏面の柄つぼの上には、あり形のみぞを彫り込む。磨り減りは認められない。彫り込み部から頭部上端にむかっては、角度を急にして削りとられている。刃部は両側および先端を薄くつくる。先端部は磨滅している。

全長27.3cm、刃部幅20.4cm、同厚さ0.6cm。頭部の長さ9.2cm、幅10.3cm、厚さ1.3cm。柄つぼの径3.9×3.0cm、舟形突起の高さ1.6cm。あり形のみぞ上端幅1.7cm、下端幅2.0cm、深さ0.7cm。〔柁目、南側周濠〕

### (3) 用途不明の木製品

1. (図22-10、図版91-27) 横断面矩形の細長い板であり、その幅広い面に方形の穴が2箇所にある。現状では2箇所以上の穴は判らないが、格子の柁木また飛躍すれば大足の縦柁木とも考えられる。

同様の仕口のものが東田地区北溝からも出土している。現存長27.7cm、幅2.3cm、厚さ0.8～0.9cm。方孔0.8×1.2cm。〔ヒノキ、5 D23N〕

2. (図22-9、図版91-28) 細長い棒の一端の幅広い面を彫り込んだものである。横断面は彫りのある面がわずかに盛り上る矩形を呈する。全長32.5cm、幅2.4cm、最大厚1.7cm。彫り込み下底の幅1.6cm、深さ0.4cm。〔柁目、5 D19R〕

3. (図22-12) 柄状の棒であり、一端は折損する。角棒の一面を丸く削り磨き、先端を丸く仕上げている。現存長50.0cm。〔5 D21N〕

4. (図22-11、図版91-26) 木の枝を利用したものと思われ、表面を幅0.5cm前後に刀子状の工具で削っている。一端は折損するが、他端には多方面より抉りを入れている。全長35.5cm、直径1.8cm。〔5 D16N〕

5. (図23-9) 半截した木を両側より削って彎曲した弓状にしたものである。中央部で6.0cm程を削らず幅広くし、断面も半円形のままだにしている。この部分を中央にして両側に均等な長さになっている。両端にむかうにしたがって、断面楕円形で細く削っている。先端は一端が4方向より、他端が3方向より切断されている。両端には幅2.5cm前後、深さ0.5cm前後の刻みがそれぞれ2ヶ所にある。これらの刻みには使用痕跡がまったくみられない。

内彎する側面は全面にわたって磨滅している。外彎する側面には幅1.0cm前後の鈍の痕が顕著である。裏面の一部分には手斧痕が残る。用途は一見したところ、天秤棒のようであるがそれらしき使用痕跡がない。

全長174.8cm、中央部幅7.6cm、厚さ3.6cm。〔半截材、南側周濠〕

6. (図23-7) ほぼ断面半円形の削られた棒の破片である。

残存長20.6cm、幅2.6cm、厚さ1.9cm。〔柁目、南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕

7. (図24-10) 両面および木端を手斧で荒削りした板を割ってつくられた棒であると思われる。両端は斜目に切断されている。

全長48.4cm、断面3.5×2.8cm。〔柁目、南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕

8. (図24-11) 7と同じく手斧で削った板から取った棒である。両端は斧よりもさらに鋭利な刃物で切断されたと思われる。

全長52.0cm、断面3.6×2.8cm。〔柁目、南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕

9. (図24-13) 手斧で削った板から割った角棒である。両端の切断には鋭利な刃物を使用。上端は5回斜目に刃物を入れて切断している。

全長34.4cm、断面5.1×3.1cm。〔柁目、南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕

10. (図24-15) 木のずい心を頂点にして、樹皮にむかって3角形状に木取りしたものである。面に仕事はない。両端は切断された痕を残す。

全長38.8cm、幅4.3cm、高さ2.6cm。〔南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕

11. (図24-16) 先端がノミによって斜めに切断された板である。表面には並列して削った手斧痕が



残り、裏面には千鳥に削った手斧痕が残存する。両端の木端には仕事がない。上端木口には敲打された痕がわずかに認められる。裏面上端の0.5cm程内側には、縁に沿って刃物によるけびき線が引かれている。

全長17.9cm、幅25.3cm、厚さ2.4cm。〔板目、南周濠1トレ砂層（下）〕

12. 他に丸棒（柄）片3個、木っば11片、切れ端1個が出土している。

#### （4）未製品

1.（図24-12）表裏面およびこばを手斧で削った板を幅2.9cm程に割り棒状にしている。棒の表面には10.0～15.0cmの割合で3ヶ所に、深さ1.0cm前後の刻みを鋭利な刃物で斜目に切り込んでいる。

一端ではこの切り込みの深さまで材を割り取っている。他端はこの切り込み部分で折損している。予定した幅の長い棒をつくる場合には、確実性を期して所々に切り込みを入れて割っていったのであろう。

残存長50.6cm、断面3.2×2.5cm。〔柁目、南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕

2.（図24-14）1の棒から切り込みを入れて割り取られたものである。同様なものが他に9片出土している。

全長17.0cm、断面2.5×2.0cm。〔柁目、南側周濠1トレ黒粘Ⅱ〕 (辻)

表2 纏向石塚古墳第1次調査出土土器観察表(1)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	調査技法			色調	胎土	その他
			口縁部	体部外面	体部内面			
20—1 87—4	第1トレンチ 西側周濠 黒色粘土層Ⅱ	壺B <sub>1</sub>	横ナデ。端部に一条の凹線			茶褐色	砂を含み、金雲母が目立つ。 堅い	
20—2 87—7	第1トレンチ 西側周濠 黒色粘土層Ⅱ	甕B	横ナデ	左上り叩き	右回り横へら削り	明褐色	細砂を含む 堅い	
20—3 87—9	第1トレンチ 西側周濠 黒色粘土層Ⅱ	高坏B	横ナデ	縦へら磨き(坏部)	細かい横へら磨き(坏部)	灰褐色	石英粒を少し含む。 堅い	
20—4 87—3	第1トレンチ 西側周濠 灰色砂層	甕A <sub>2</sub>	横ナデ	左上り叩き	左回りナデ	灰褐色	砂を含み、石英粒が多い。 堅い	
20—5 87—5	第1トレンチ 西側周濠 灰色砂層	甕I	横ナデ。外面に沈線	横へら描条線と斜めハケ	指頭?ナデ	黄灰色	石粒を含む 堅い	
20—6 87—6	第1トレンチ 西側周濠 灰色砂層	甕		荒い右上り叩き 原体の溝幅4mm	弱い左回りハケ	灰褐色	細砂を含む 堅緻	
20—7 87—2	第1トレンチ 西側周濠 灰色砂層	高坏C <sub>3</sub>	細かい横へら磨き(坏部外面) 細かい縦へら磨き(坏部内面)	細かい横へら磨き(脚部)	弱いへら削り(脚部)	赤褐色	良質。堅緻	
20—8 88—15	第1トレンチ 西側周濠 灰色砂層	壺C <sub>2</sub>	横ナデのち左上りハケ(外面)			茶褐色	砂を含む。堅い	
20—9 87—12	第1トレンチ 西側周濠 灰色砂層	鉢C <sub>1</sub>	縦へら磨き(外面) 横へら磨き(内面)			黄灰色	良質。石英粒を少し含む。 堅い	
20—10 88—17	第1トレンチ 西側周濠 黒褐色土層	壺B <sub>1</sub>	軽い縦ハケ(下半)			淡灰褐色	粗砂を含み、石英粒が多い。 堅い	

※本表における分類および個体説明は『纏向』1976による。

表3 纏向石塚古墳第1次調査出土土器観察表(2)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	調整技法			色調	胎土	その他
			口縁部	体部外面	体部内面			
20-11 87-8	第1トレンチ 西側周濠 黒色粘土層Ⅰ	甕A <sub>2</sub>	細かい横へら磨き			灰褐色	良質。堅緻	
20-12 88-13	第1トレンチ 西側周濠 黒色粘土層Ⅰ	甕B	横ナデ	左上り叩きのち縦ハケ	へら削り	灰褐色	細砂を含む 堅緻	
20-13 88-16	第1トレンチ 西側周濠 黒色粘土層Ⅰ	甕C	横ナデ			黄灰色	砂を多く含む やや軟質	
20-14 88-14	第1トレンチ 西側周濠 黒色粘土層Ⅰ	甕C	横ナデ	肩部に横ハケ	横へら削り	黄灰色	砂を多く含む 雲母なし 堅い	
20-15 87-11	第1トレンチ 西側周濠 黒色粘土層Ⅰ	甕G	横ナデ	横ハケ		黄灰色	石粒を含む 堅い	北陸系
20-16 87-1	第1トレンチ 西側周濠 周濠内	甕A <sub>1</sub>	横ナデ 竹管円形浮文を付加する			黄灰色	砂を含み、石英粒が多い。 堅緻	
20-17 87-10	第1トレンチ 西側周濠 周濠内	甕B	横ナデ	左上り叩きのち縦ハケ	左回り横へら削り	灰褐色	細砂を含む	

※本表における分類および個体説明は『纏向』1976による。

表4 纏向石塚古墳第2次調査出土土器観察表(1)

図番号 図版番号	地区 層位	器種	調整技法			色調	胎土	その他
			口縁部	体部外面	体部内面			
21-1 91-1	第1トレンチ 南側周濠 周濠下層	壺B <sub>1</sub>	横ナデ	左上り及び横のナデ	指頭圧及び横のナデ	黄灰色	細砂を少し含む 堅緻	肩部に火燬
21-2 —	第1トレンチ 南側周濠 周濠下層	壺B <sub>3</sub>	横ナデのちヘラの刺突を加える			黄褐色	細砂を含む 堅緻	
21-3 91-2	第1トレンチ 南側周濠 周濠下層	甕A <sub>1</sub>	横ナデ	水平及び右上り叩き	左回り斜めハケ	黄灰色	細砂を含む 堅緻	
21-4 91-3	第1トレンチ 南側周濠 周濠下層	鉢B		赤色塗彩	弱い左回り斜めハケ。赤色塗彩	黄灰色	細砂を含む 堅緻	外面に煤付着。 本来鉢AであったものをBに変えている
21-5 91-5	第1トレンチ 南側周濠 周濠中層	甕	横ナデ	縦のち横ハケ	右回り横ヘラ削り	暗黄灰色	砂を少し含む 堅緻	
21-6 —	第1トレンチ 南側周濠 周濠上層	須恵器 蓋	ロクロナデ	ヘラ削りか	ナデ	青灰色	小石を少し含む 堅緻	外面に薄く灰付 着
21-7 —	第1トレンチ 南側周濠 周濠上層	須恵器 蓋	ロクロナデ			青灰色	砂を少し含む 堅緻	天井部に少し灰 付着
21-8 91-4	第1トレンチ 南側周濠 周濠上層	須恵器 蓋	ロクロナデ	ヘラ切り	ナデ	青灰色	小石を少し含む 堅緻	天井部に墨書?
21-9 —	第5トレンチ 墳丘内堆積層	壺B <sub>1</sub>	横ナデ			黄灰色	砂を含む。堅い	
21-10 91-11	第5トレンチ 墳丘内堆積層	小型 長頸壺	横ナデ(上半) 左回り横ハケ(下半内面)	左上りハケ(上半) 右上り叩き(下半) 底部周辺に軽い指頭圧	左回り弱いハケ(下半)	暗黄灰色	金雲母を多く含む。堅緻	

※本表における分類および個体説明は『纏向』1976による。

表5 纏向石塚古墳第2次調査出土土器観察表(2)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	調 整 技 法			色 調	胎 土	その他
			口 縁 部	体 部 外 面	体 部 内 面			
21—11 91—10	第5トレンチ 墳丘内堆積層	壺D	横ナデ	横へら磨き	指頭ナデ	黄灰色	良質。堅緻	
21—12 91—6	第5トレンチ 墳丘内堆積層	壺A <sub>1</sub>	へら磨きか(外面) 円形条文を付加			黄褐色	細砂を少し含む 堅い	
21—13 —	第5トレンチ 墳丘内堆積層	壺A <sub>2</sub>	横ナデ	右上り叩き	左回り斜めハケ	黄灰色	金雲母が多い 堅緻	
21—14 —	第5トレンチ 墳丘内堆積層	甕A <sub>2</sub>	横ナデ	右上り及び水平叩き	左回り斜めハケ	黄灰褐色	細砂を含む 堅緻	
21—15 91—7	第5トレンチ 墳丘内堆積層	甕	横ナデ	未調整か	板ナデか	暗黄灰色	細砂を少し含む 堅緻	
21—16 91—8	第5トレンチ 墳丘内堆積層	鉢B		底部に指頭圧	左回り斜めハケ	暗灰褐色	細砂を含む 堅緻	
21—17 —	第5トレンチ 墳丘内堆積層	鉢B		底部周辺に堅い指頭圧		黄灰色	金雲母を多く含む。堅い	
21—18 —	第5トレンチ 墳丘内堆積層	高坏A <sub>1</sub>	縦へら磨き(外面上半)			黄灰色	粗砂を少し含む	
21—19 —	第5トレンチ 墳丘内堆積層	高坏A <sub>1</sub>	横へら磨き 端部に二条の擬凹線文			茶褐色	金雲母を多く含む。堅緻	
21—20 91—9	第5トレンチ 墳丘内堆積層	高坏			絞り及び左回り横ハケ	灰褐色	良質。堅緻	

※本表における分類および個体説明は『纏向』1976による。



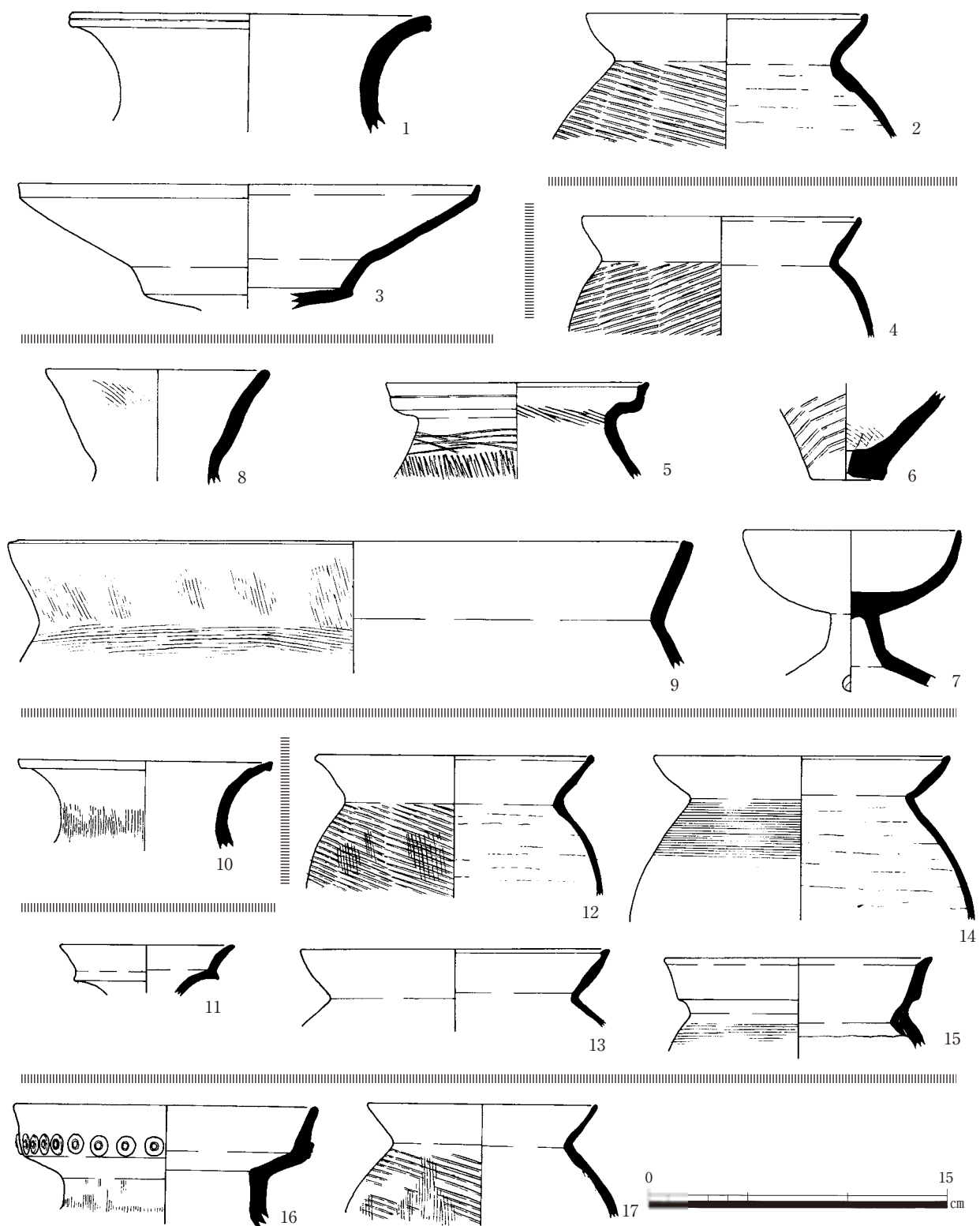


図20 纏向石塚古墳第1次調査出土土器実測図 (1 / 3)  
 第1トレンチ：1～3 黒色粘土層Ⅱ 4～9 灰色砂層  
 10 黒褐色土層 11～15 黒色粘土層Ⅰ 16・17 周濠内

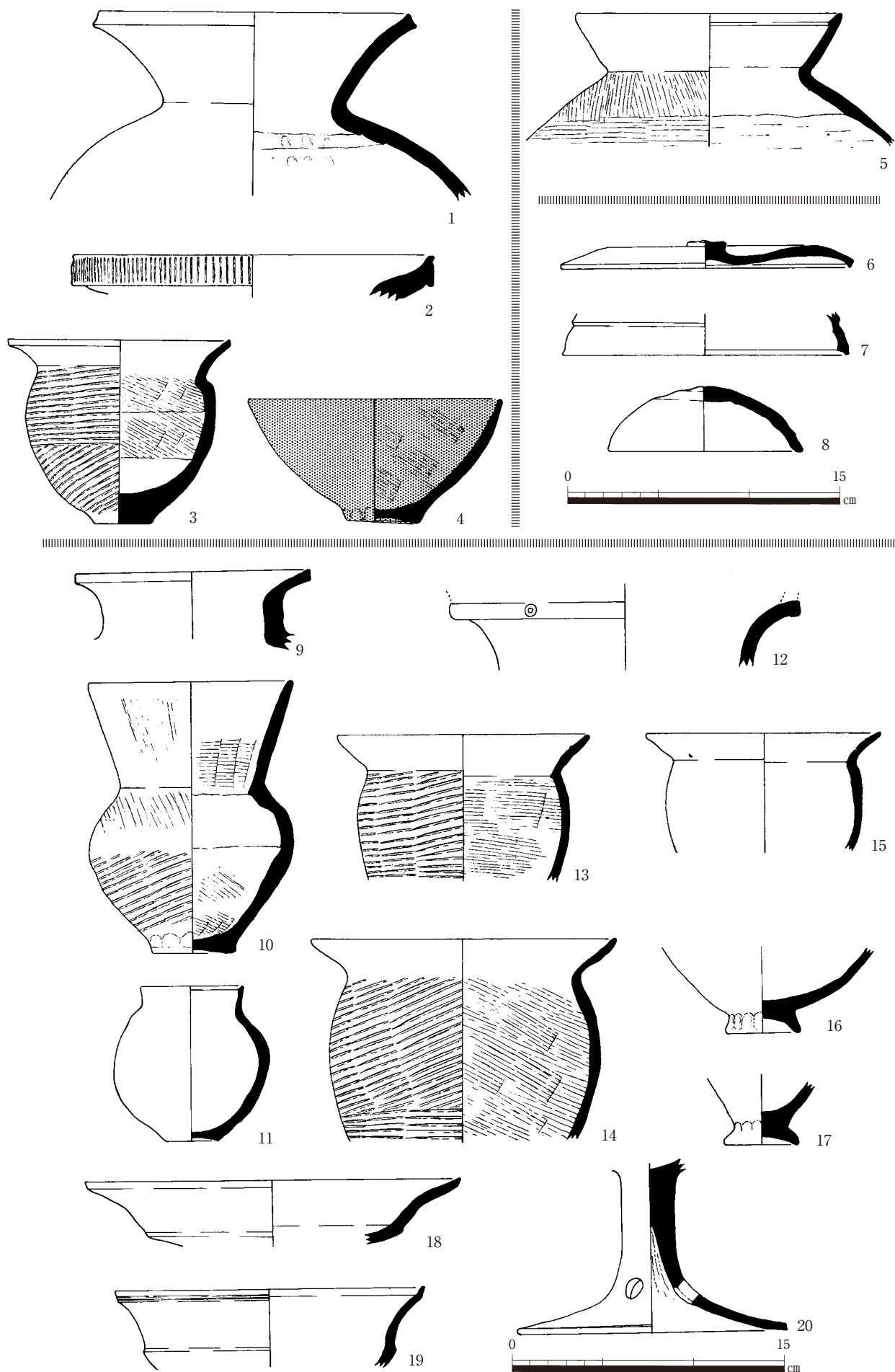


図21 纏向石塚古墳第2次調査出土土器実測図 (1 / 3)  
 第1トレンチ：1～4 周濠下層 5 周濠中層 6～8 周濠上層  
 第5トレンチ：9～20 墳丘内堆積層

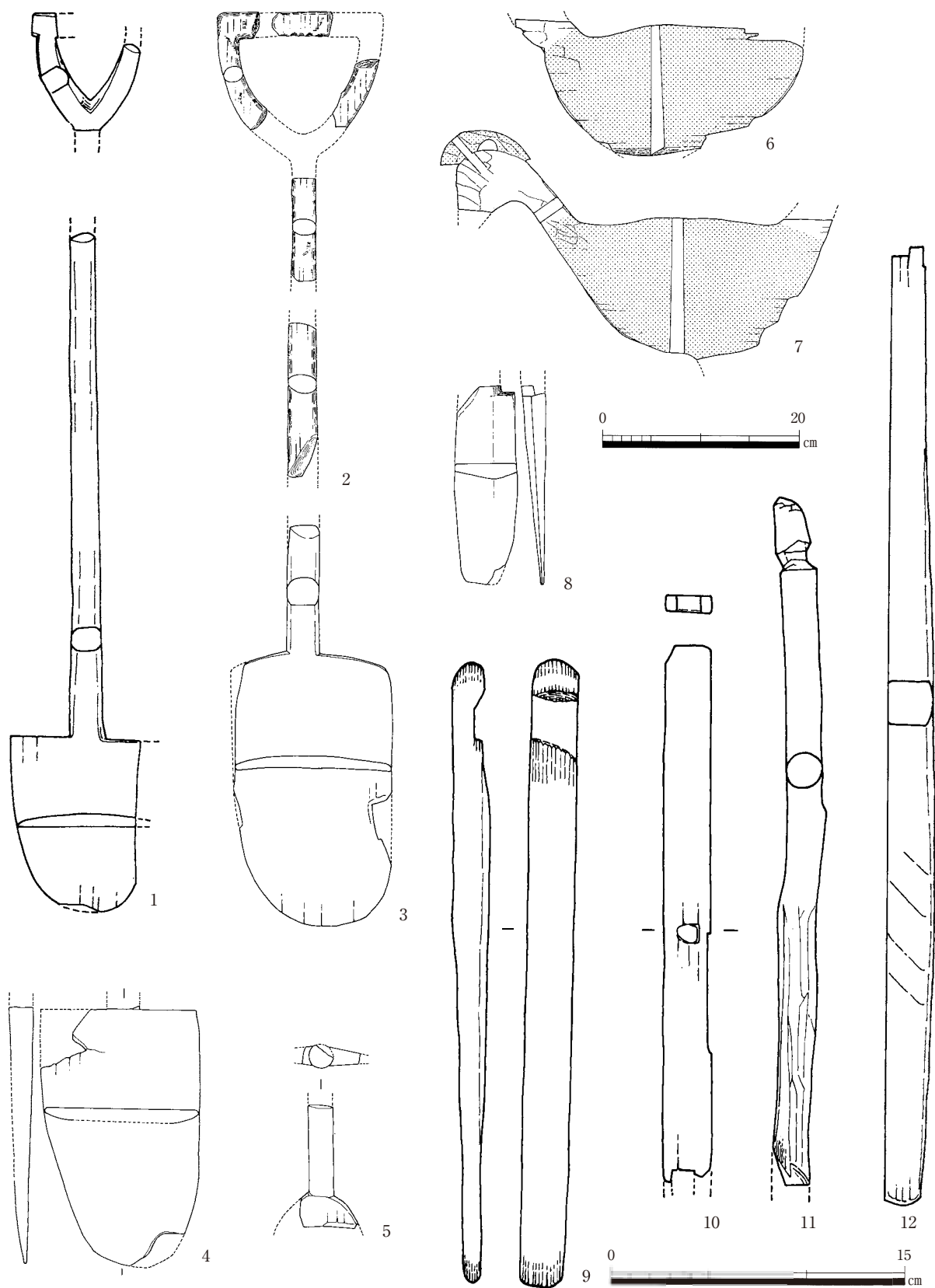


図22 纏向石塚古墳第1次調査出土木器実測図（1～8：1／6、9～12：1／3）  
第1トレンチ：1～5 黒色粘土層Ⅲ 6・7 灰色砂層下部 8～12 周濠内

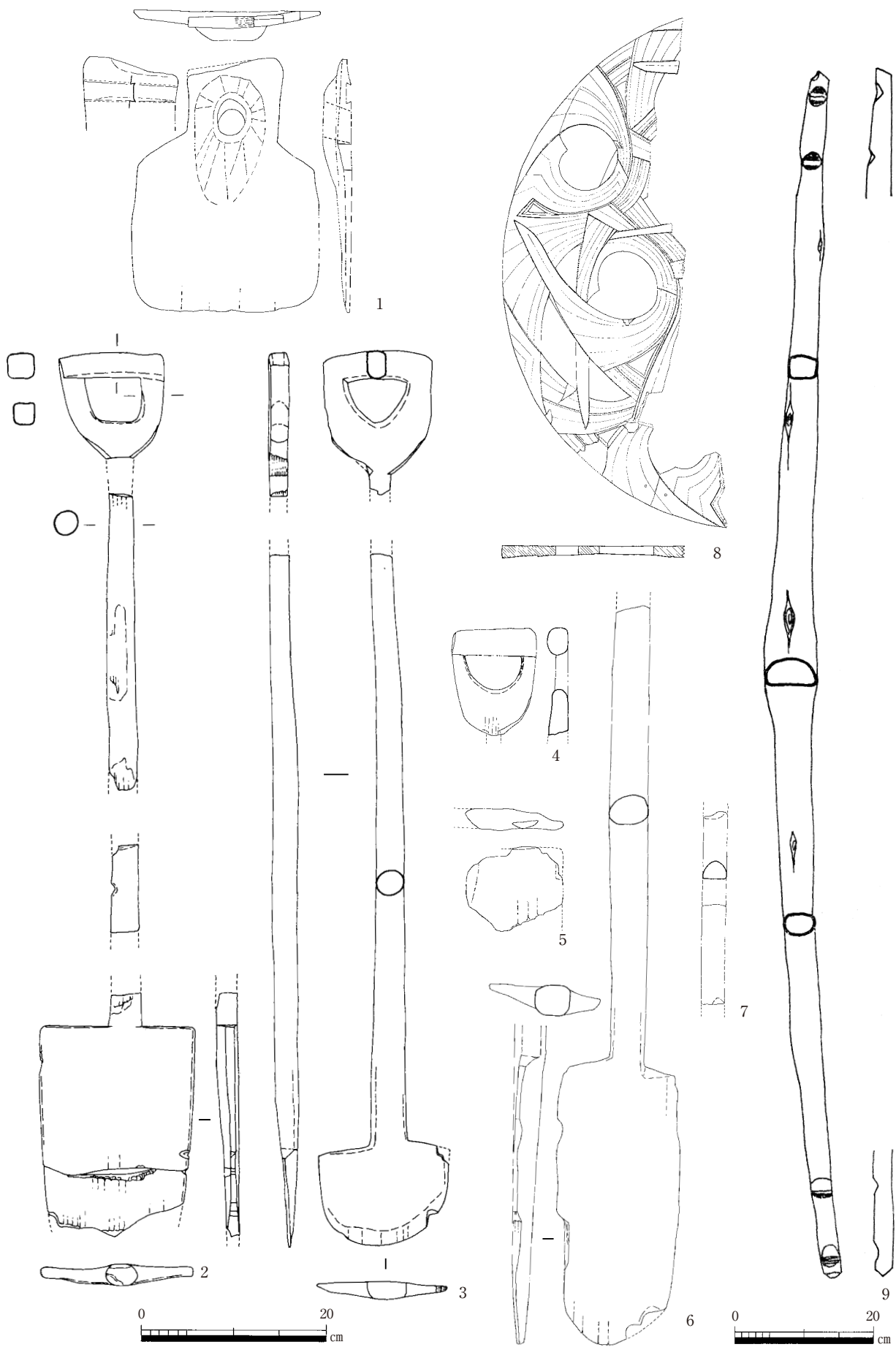


図23 纏向石塚古墳第2次調査出土木器実測図1 (1～8：1/6、9：1/8)  
第1トレンチ：1～9 黒色粘土層Ⅱ

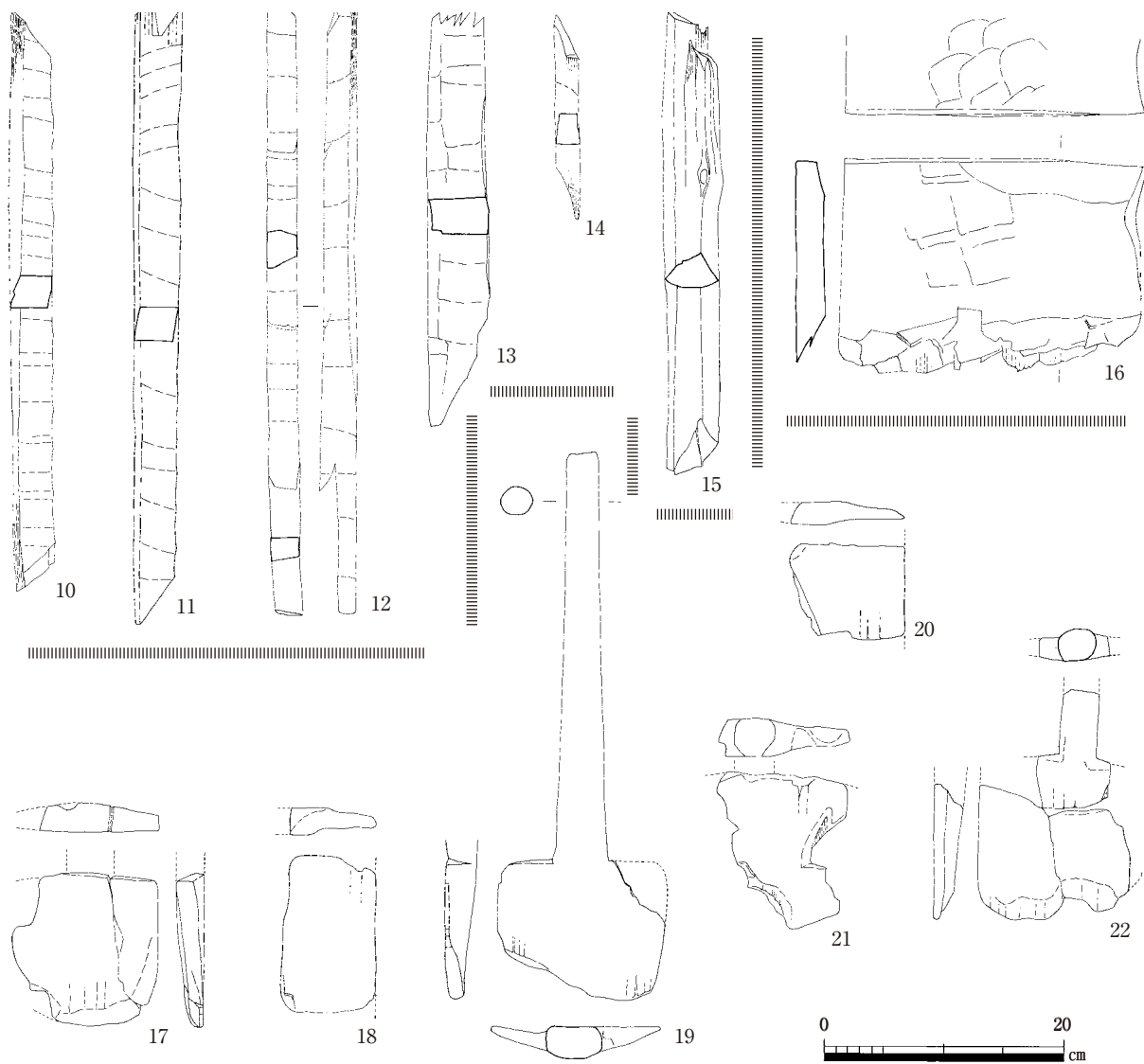


図24 纏向石塚古墳第2次調査出土木器実測図2 (1 / 6)  
 第1トレンチ：10～15 黒色粘土層Ⅱ 16 砂層下部 17～22 周濠内





## 第5章 纏向石塚古墳第3次調査報告

(纏向遺跡第10次調査報告)

### 第1節 はじめに

第3次調査の対象地は、前年度（昭和50年度）に調査を行った纏向石塚古墳後円部南側のさらに東に隣接した水田一区画と、農道を挟んでさらに東側の水田である。調査区は便宜上、農道を境として「西区」と「東区」と呼称して調査を行った。

本事業は纏向石塚古墳の範囲確認を目的としたもので、前年度に引き続いて国庫補助事業として奈

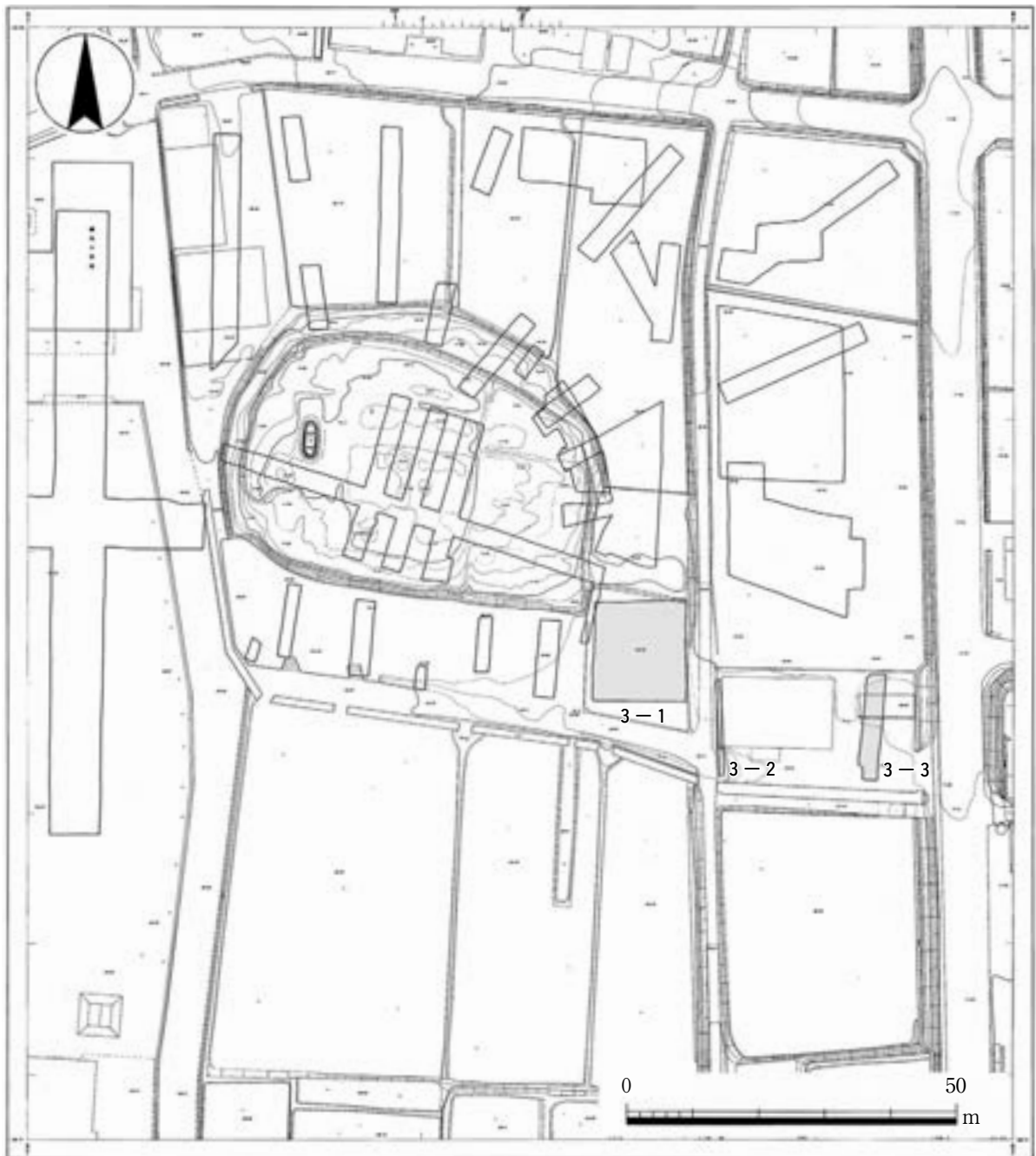


図25 纏向石塚古墳第3次調査地位置図（1／1,000）

良県教育委員会が行い、発掘調査を奈良県立橿原考古学研究所が実施した。調査は調査課長 石野博信の指揮のもと、技師 久野邦雄、嘱託 寺沢薫が担当した。

調査の目的は、纏向石塚古墳現存墳丘の南半に確認トレンチを設けることで、墳丘と周濠の関係を確認することであるが、とりわけ第3次調査の最大の目的は「帆立貝形古墳」とも「前方後円墳」とも目されてきた纏向石塚古墳の墳形を確認することである。すでに第2次調査の6本のトレンチにおいては南東にかけての墳丘と周濠が円弧状に確認されているから、もし突出部（前方部）が存在するとすれば、「西区」では当然、クビレ部の検出が予測されたからである。

また、「東区」については、農業用倉庫の建築申請を受けて行ったものであるが、地権者の意向で、幅3mの南北方向のトレンチ（第3トレンチ）と農道に沿った幅1mの南北方向のトレンチ（第2トレンチ）を設定するとどまった。文化財行政の現状からすれば、不十分極まりない確認調査ではあるが、とりわけ後者に関しては建物基礎に接していることもあって、当時とすればぎりぎりの譲歩だったのである。このような狭隘なトレンチを設けたのも突出部（前方部）前面の状況を確認したいがためである。

なお、調査地の地番は桜井市大字太田242-1 および246-3 番地、調査面積は272㎡、調査期間は昭和51年7月12日～8月12日である（表1 参照）。

## 第2節 西区の調査（第1トレンチ）

### （1）南クビレ部の周濠の調査

西区では、第2次調査第1トレンチにおいて周濠が本調査区にのびていることは確実であったこともあり、水田（休耕田）敷地の全面発掘調査を行った。調査区は南北15m、東西14.2m、調査面積は213㎡におよんだ。

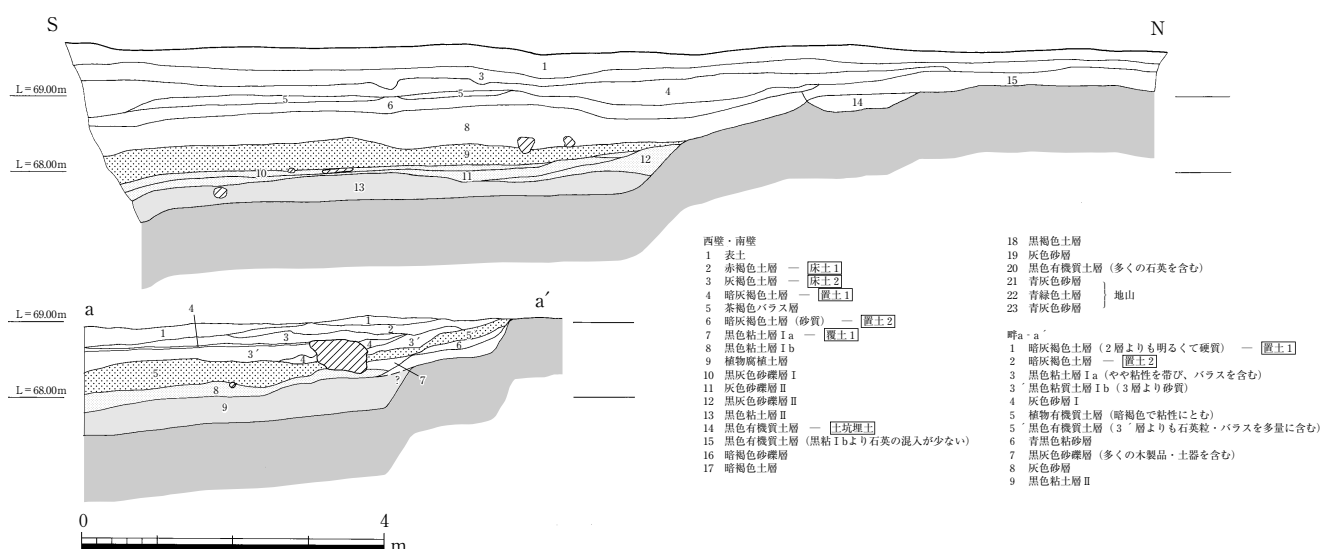


図26-1 3-1トレンチ断面図（1/100）

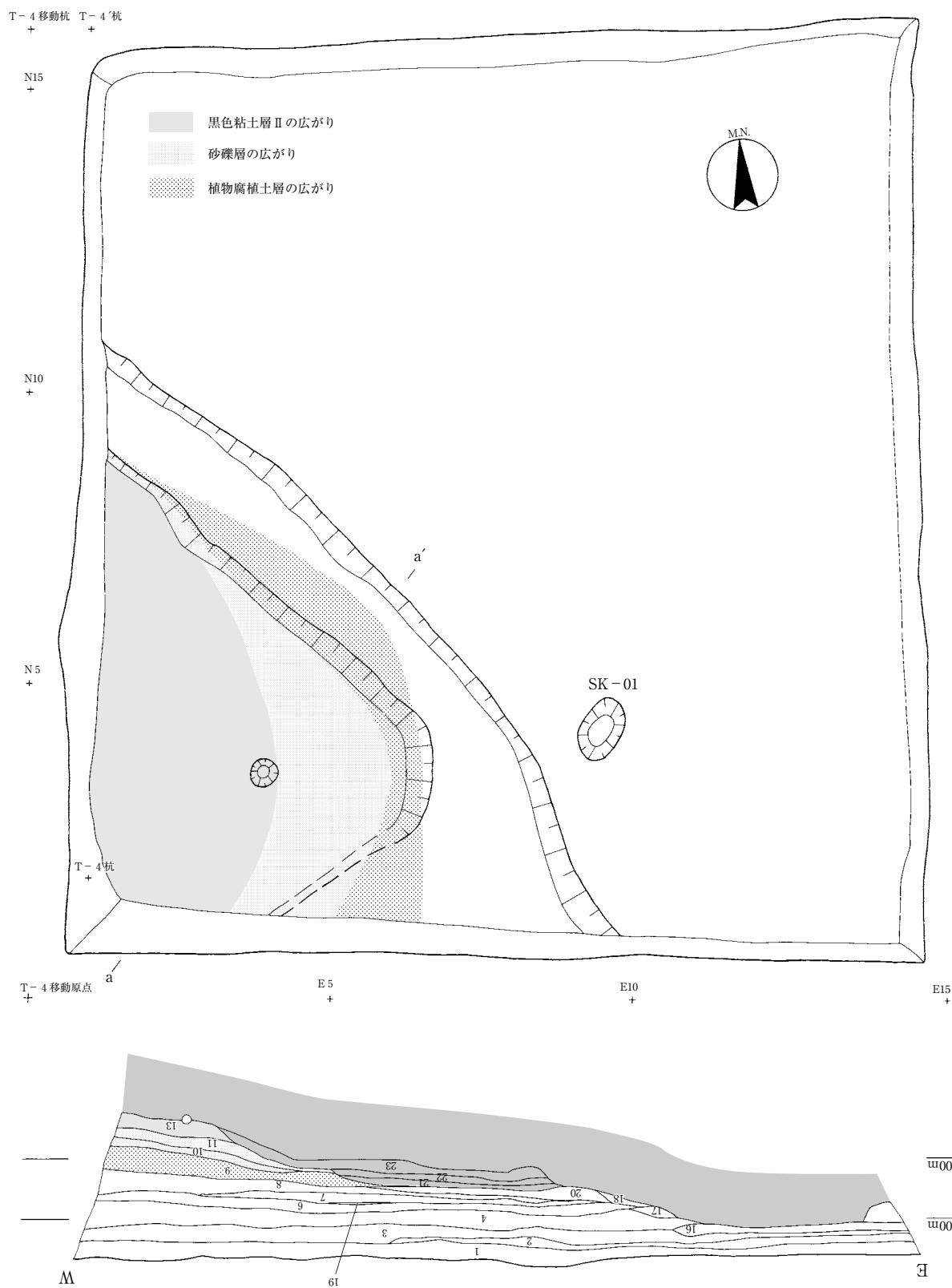


図26-2 3-1 トレンチ平・断面図 (1/100)

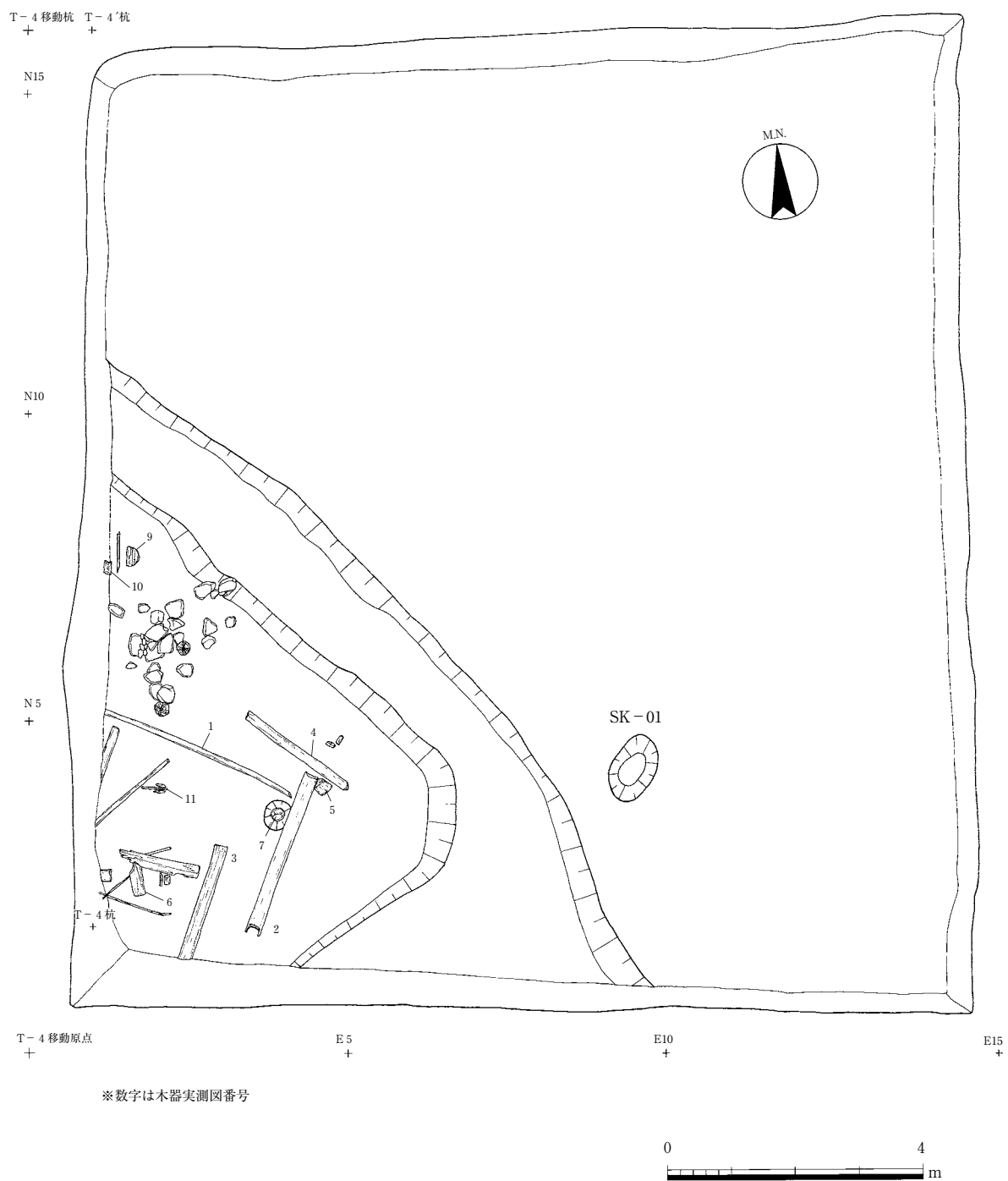


図27 3-1 トレンチ後円部南側周濠 遺物出土状況図 (1/100)



その結果、調査区の南西隅において周濠を確認することができた。周濠は、現存する墳丘（円丘状）に沿って弧状にめぐるのはなく、周濠肩部は北西－南東方向となって調査区内で収束し、円丘部から東南方向に墳丘が明らかに張り出す様相を見せた。その長さは調査区内で11.6m確認することができた。この時点で、纏向石塚古墳の墳形は帆立貝形古墳ではなく、明らかに前方後円形を呈した墳丘墓である可能性が高くなったのである。

前方部側の周濠肩は、1.6m幅のテラスを持つ2段の段掘り成形となり、それぞれが約80cm～1mの落差がある。上段は、わずかに弧を描きながら東南にのびていて、さらに前方部が東南方向に伸びていくことを予感させるが、下段は調査区内で内湾しながら収束していく形態をなしている。前方部がさほどは伸びないであろうことはその平面形からも難なく予測することができる。

また、周濠下段の肩部から濠底の西方には、拳大から人頭大の自然石約20個が径2～2.5mの範囲にわたって散在して発見されている。これらの石には濠底に近い最下層（黒色粘質土Ⅱ）に被覆される大部分のものと、上部の植物腐植土層に含まれる少量の二者があり、前方部側からの転落が墳丘・濠の築造後まもない時期と時間を隔ててあったことを物語っている。ただし、その量と検出範囲から考えれば墳丘の葺石的な状況を考えることは難しく、クビレ部前方部側での置石（配石）程度のものとししか理解できない。その性格は不明である。濠底は北の前方部側より緩い傾斜でもって南に降下し、また前方部前面側からクビレ部に向かって降下しており、調査区南西隅の最深部で標高67.38m（表土下2.7m）を計測した。

濠内の堆積層をみると、表土（耕土：1層）下に赤褐色土層ないし灰褐色土（床土：2・3層）があり、以下、茶褐色バラス層（5層）を介在した暗灰褐色土（4・6層）が濠の最上部を覆っている。以下は黒色粘土層Ⅰ（やや砂質のⅠa：7層と粘性の高いⅠb：8層に分層：以下、「黒粘Ⅰ」と略称）、植物腐植土層（9層：以下、「植物層」と略称）、灰色ないし黒（暗）灰色砂礫層（10～12層：以下、「砂礫層」と略称）、黒色粘土層Ⅱ（：13層で、植物質分解のやや低い上層と、分解度が高くきめの細かい下層に分層：以下、「黒粘Ⅱ」と略称）となっている。最下層は黒粘Ⅱであるが、部分的に黒粘Ⅱと濠底ベースとなっている暗青灰色のシルト層や暗灰色の砂礫層が混在した土層<sup>1)</sup>の堆積が認められている。

4～6層は平安時代以前の土器片を含有しており、この時期の整地土層（置土）と考えられる。古墳周濠の最上部を被覆するように見られることから、墳丘周辺の水田化（耕地化）に伴うものと考ええてよいであろう。もっとも新しい瓦器碗や土師器小皿の時期からおよそ10世紀後半から11世紀頃の開発に関係するものと考えている。

周濠内堆積は、第2次調査と同様の堆積状態を示し、最上層の黒粘Ⅰの直下は、南に向かって傾斜をもつ自然木の太木（幹）を含んだ植物層で覆われていた。植物層中では遺物の出土は知られておらず、湿地と化した周濠に水生植物が繁茂したり墳丘上に繁茂した樹木が倒壊したり枯れ葉が堆積していった状況が想起された。

こうした植物層が周濠の縁辺を除くほぼ全域にわたって厚さ10～40cmに圧縮される状況で出土して

いることは、上層の黒粘Ⅰの形成と無関係とは考えられない。黒粘Ⅰ（とくにⅠa）は平均40cmほどで上面は平坦であり、粘土に細かい砂粒ブロックが混ざった土壌構成で、グライ化が進行しているとはいえず人為的な整地層と考えるべきであろう。植物層の形成は黒粘Ⅰの土壌投棄によって一気に為されたものと考えられるのである。

その時期は、本調査での出土遺物からは限定しにくい。第1・2次調査の成果では黒粘Ⅰの形成が「古墳時代後期（森浩一編年須恵器Ⅲ型

式）」、植物層は「古墳時代中期（森浩一編年須恵器Ⅰ型式後半）」とされているから、植物の繁茂はおよそ5世紀代、整地地層は6世紀代と考えてよいのではないだろうか。天理市から桜井市にかけての古墳周濠の調査に拠れば、5世紀代に周濠が樹木の残滓に覆われたり倒木などの検出される例がまま見受けられるし、それが6世紀代に人為的に埋設されたり洪水などで埋没している例も少なくない。一帯の古墳造営後の経歴には一致した現象が痕跡として残っているようである。

古墳周濠本来の堆積土は、植物層下の灰色ないし黒（暗）灰色砂礫層（10～12層）と黒粘Ⅱである。砂礫層は周濠の下段より内部の深い部分にのみ分布し、その厚さも5～30cm程度である。また、黒粘Ⅱになるとさらにその分布は西寄りに後退しほぼ標高68mより以下に分布している（図26-2参照）。黒粘Ⅱの厚さは20～40cmと厚く平均的ではあるが、南西隅に向かって深く厚くなり、最深部で標高67.32mとなっている。濠底はこうして西へ向かって低くなり、クビレ部南側の第2次調査の第1トレンチ北端において最深となり標高67mを切る。

黒粘Ⅱは前述したように、上部と下部では細かい植物質残滓と土壌のきめの細さが異なる。下部は土壌の沈殿物が精製、有機分解が進んでいるのに対して、上部は沈殿物が未分解で残っていたことになる。黒粘Ⅱの上部には砂礫層の流入があるが、これらの層の形成が時間差であるのか、ごく短時間内での形成原因の差に起因するものなのかは判断が難しい。私は後述するような遺物の出土状況から勘案して、形成された各土壌の性質の差は形成環境や要因の差であって、出土遺物との間にさしたる時間差はないものと判断している。

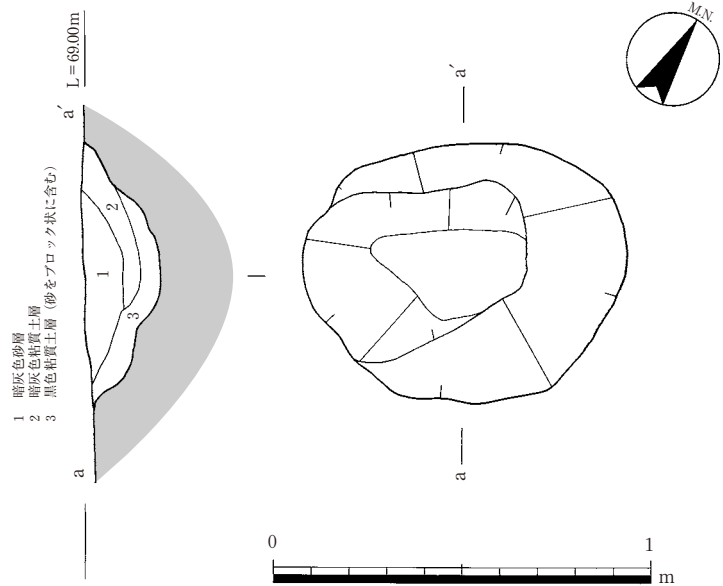


図28 3-1トレンチ SK-01 平・断面図（1/20）

## (2) 周濠内出土の遺物とその出土状況

周濠より出土した遺物のうち、古墳周濠本来の堆積土である砂礫層（10～12層）と黒粘Ⅱから出土した遺物には土器、木製品、植物質の人為物と、植物質自然遺物がある。また、植物層には多数の樹木の枝や分解途中の植物有機質が含まれていたが、人為物は須恵器と土師器の細片のみで図示できるものはない。また、中央のセクションベルトにほぼ直交するように広葉樹（エノキ？）の樹幹が検出されている（図29）。ここでは以下、砂礫層（10～12層）と黒粘Ⅱの遺物の出土状況を平面と断面エレヴェーションから説明する。

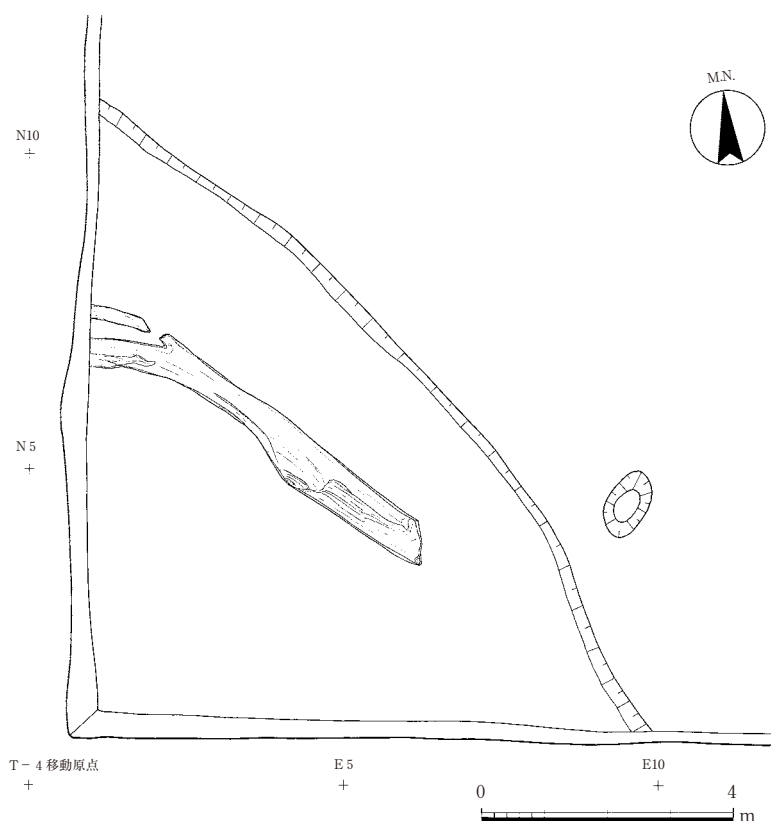


図29 3-1 トレンチ後円部南側周濠内  
黒色粘土層Ⅰ出土樹幹出土状況図（1/120）

### 1. 灰色ないし黒（暗）灰色砂礫層の出土遺物

砂礫層は周濠下段を覆うように分布するので、遺物も全体に広がって出土している（図30）。

木製品で明らかに本層に所属するものは、丹塗痕跡の残る有孔円盤状木製品（9）、板状木製品（17）、棒状木製品（16）、杭状木製品（8）、異形の木製品（異形蓋状木製品：11と臍穴付棒状木製品：13）、赤色顔料が付着した円座状樹皮製品（図版 109-154・155・156）のほか、木材切片、剥片などがある。

9は円盤の半分が残ったもので、径約35cmで中心に方形穿孔があり、円盤の縁からやや内側に円弧に沿って等間隔で小孔が穿たれている。その配置から見て8孔が穿たれていたものと考えられる。彩色飾布などを垂らした幡のようなものであろうか。そうであれば、蓋の初現的なものの可能性がある。

異形蓋状木製品（11・13）は、11が13の臍穴に接して出土していたことから一体のものと考えられる。棒状としたものは下部が折損しているが、断面が多角形ないし楕円形を呈しており、長い棒状のものであった公算が大きい。異形蓋状の木製品はちょうど中心と考えられる方孔部分（棒の臍穴のところ）で半折しており、本来、この棒の先端に差し込まれ、臍穴に束縛されたか、あるいはやはり臍穴に彩色飾布などを垂らしたものかもしれない。その平面形も出土時から劣化が進み縁辺部は破損していたが、周囲に幾何学的に切れ込みを設けていたものと考えられる。前述の有孔円盤状木製品や第

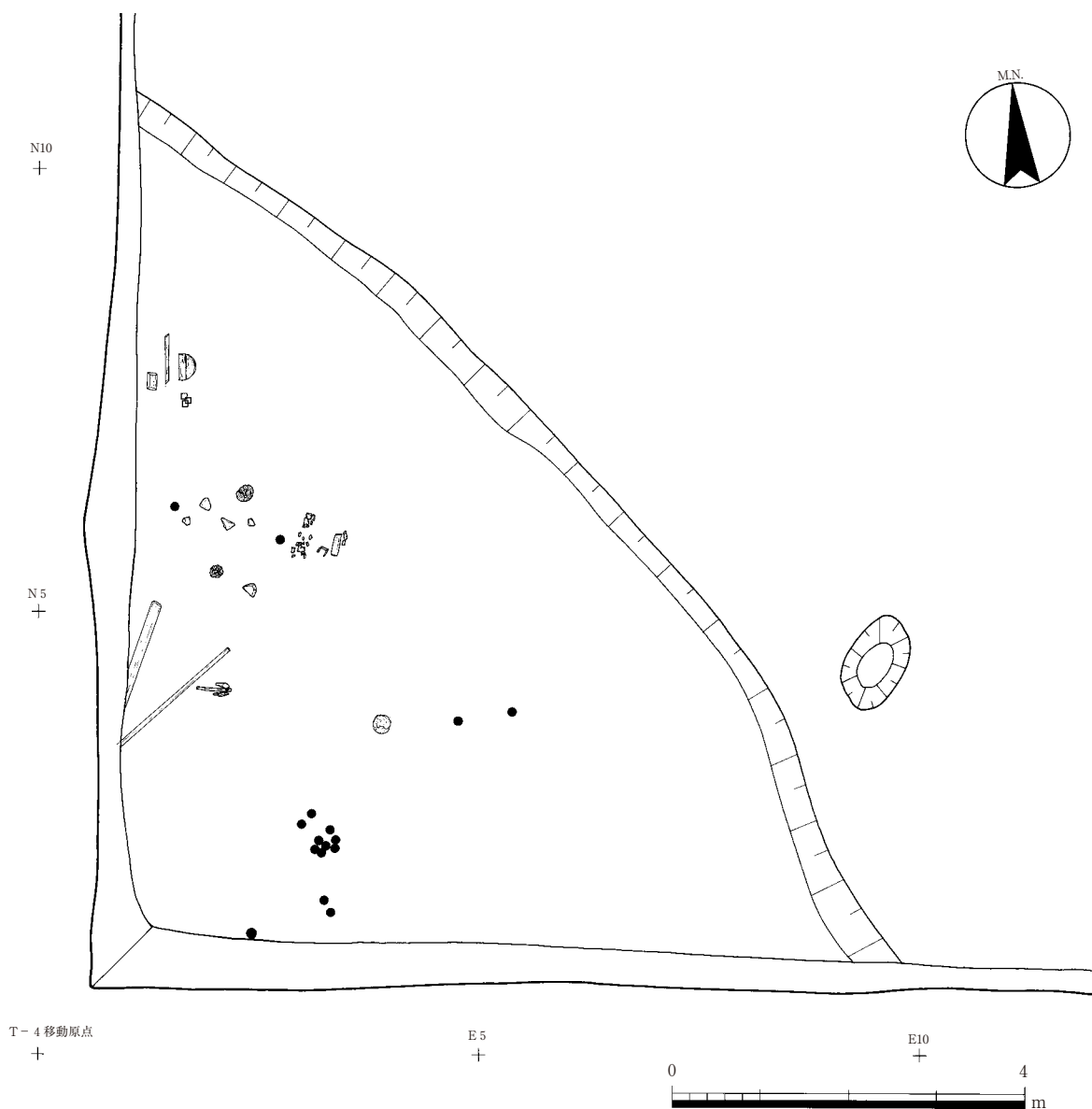


図30 3-1トレンチ後円部南側周濠内 灰色ないし黒（暗）灰色砂礫層遺物出土状況図（1／80）

2次調査第1トレンチ出土の弧文円板などとの関連を考慮すべきであろう。

柱材では、その切断材（12・14）が知られる。いずれも柱の底面はしっかりした本来の調整痕を残しているから、柱の基部より少し上で切断された残材である。12が手斧で切断されているのに比べて、14は一部切断痕はあるものの、強い力で折損したような痕跡である。そのせいか残材も完形品ではなく、複数の縦割れを生じている。外面はいずれもていねいなウリ削りを施しており、製品として利用していたことがわかる。なお、西壁にかかったウリ削りの柱材と垂木状の材は、取り上げることができなかったため現地保存することとした。

円座状樹皮製品は3点が出土している。いずれも赤色顔料が所々に残存していて、本来は表面に広汎に赤色顔料が塗布されていた可能性を物語っている。ヒノキの樹皮を約16～24cmの円形に巻き取って、中心から放射線状に5～6条の同様の樹皮で括り付けたものである。祭祀の際に祭具または供献

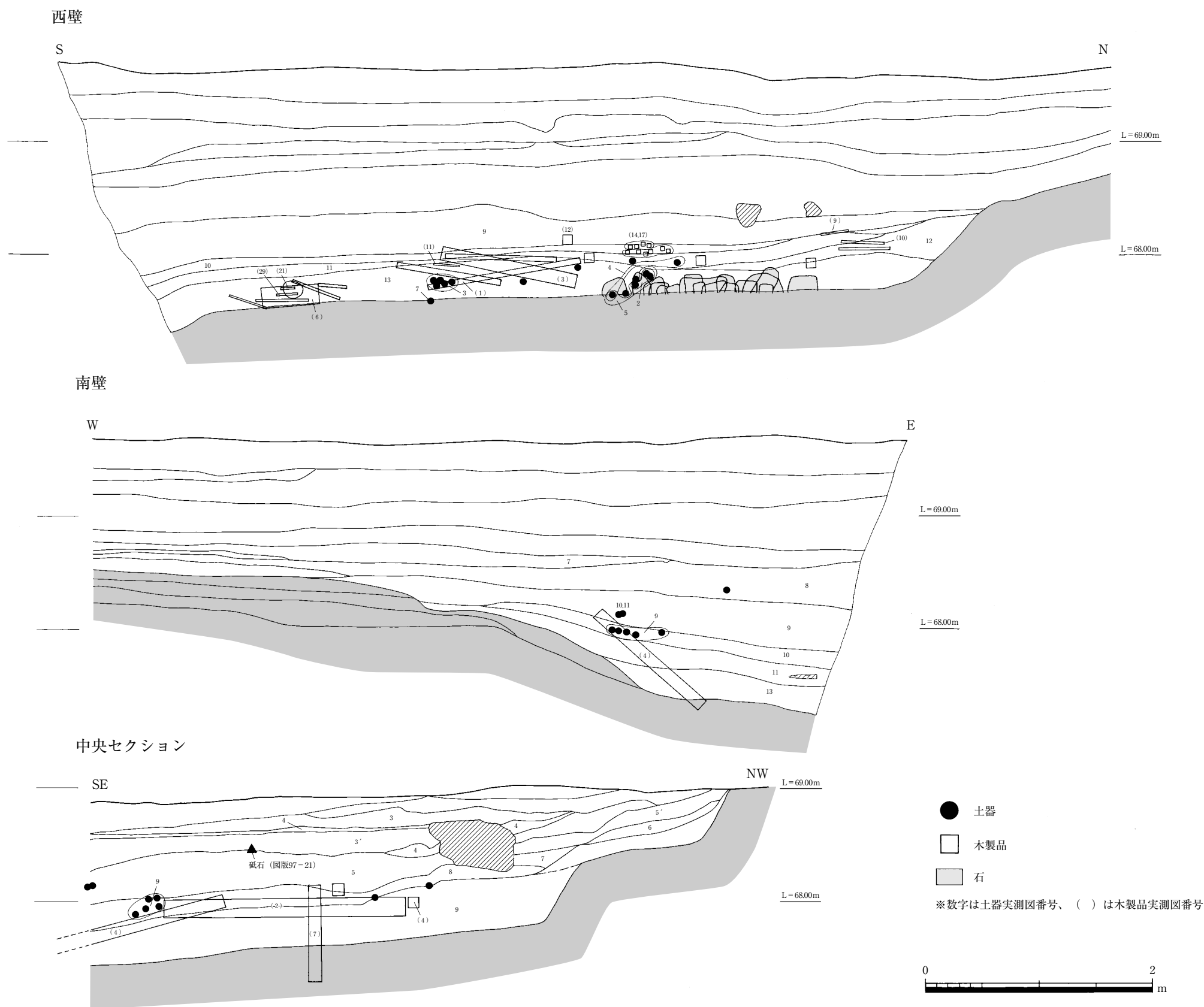


図31 3-1 トレンチ後円部南側周濠部分断面図 (1/40)



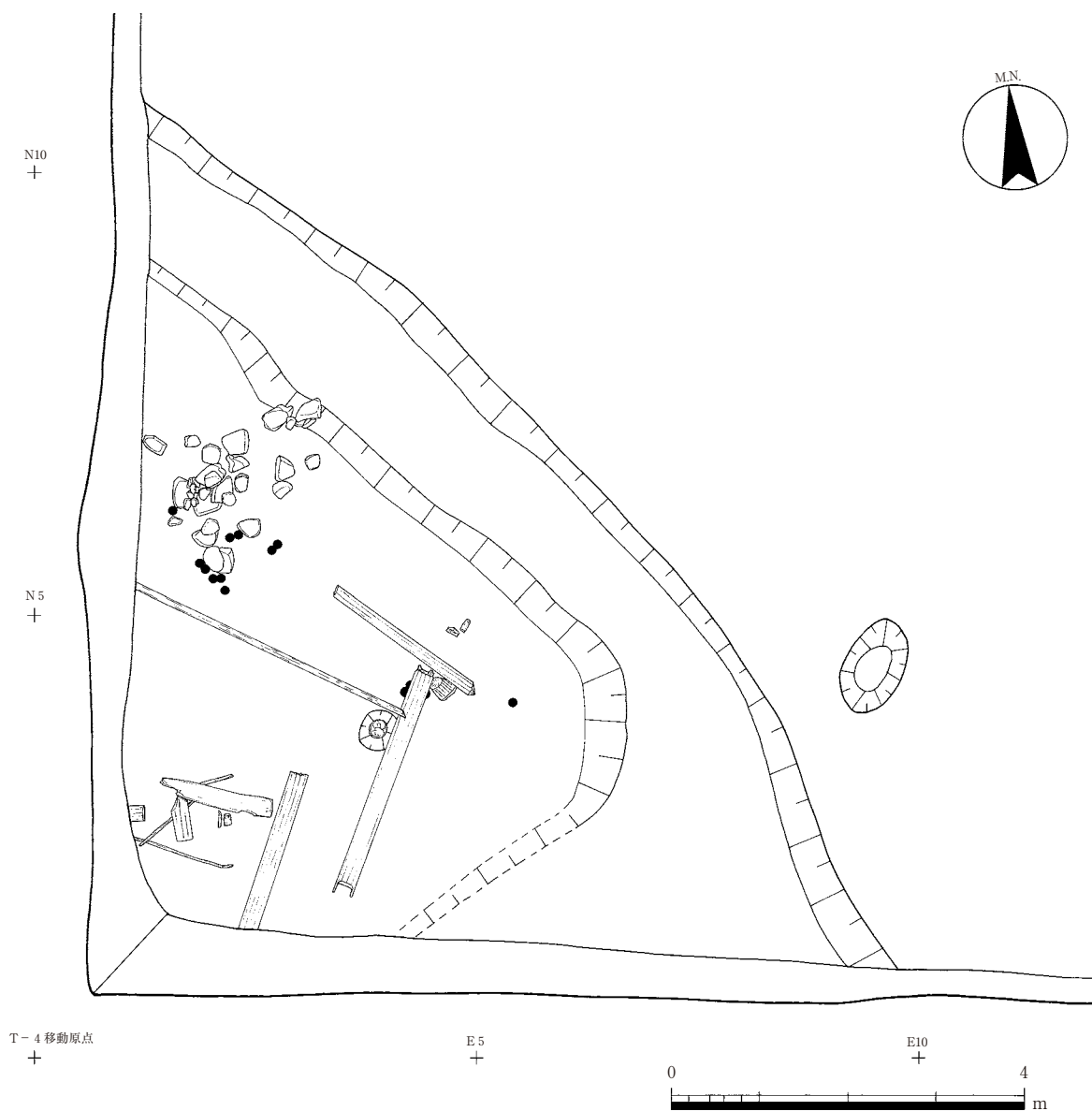


図32 3-1 トレンチ後円部南側周濠内 黒色粘土層Ⅱ遺物出土状況図 (1/80)

品を置いたか、実際に簡易な一次的な円座として使用したものであろう。

土器は、庄内大和形甕(9)、甕底部(10・11)が本層より出土している。9は周濠南端で砂礫層中からまとまった破片が散乱状態で出土しており、接合によってほぼ一個体に復元された。外面上半には右上がりの、下半には左上がりのタタキを施し、のちに下半をスリナデによっていねいに消している。内面のケズリ痕も上半部と下半部で方向が異なる。底部下半と上半を別作りしたためであろう。

## 2. 黒色粘土層Ⅱの出土遺物

黒粘Ⅱの出土遺物も周濠下段内に広く分布している。しかし後述するように、本層の遺物は必ずしも完全に黒粘Ⅱのなかに収まるのではなく、上層の砂礫層との間に若干の相関があるようにも見受けられる。

たとえば、柱材4は頂部にあたる東側が高く、基部にあたる西側が低く、その水準差は80cmにおよんでいて、明らかに東方向から濠内に投棄された様子が見てとれる。層位的に見ると、頂部は砂礫層上部の10層に、基部は黒粘Ⅱ（13層）のほとんど濠底である。こうした現象は、柱材4の投棄時にはすでに砂礫層の堆積が始まっていたことになり、先端は柱の重量で沈没したことになる。表面は手斧によるていねいなウリ削りで、頭頂部は棟木や軒桁材を受けるためであろう、凹部を両側面から山形に切り込むことで造作している。基部は鉄斧による一方向からの切断痕がある。二次的なものである。

柱材1は断面円形の垂木ないしは長押様の木材で、基部は西壁の黒粘Ⅱに食い込みほぼ水平を保っていた。

柱材2は黒粘Ⅱの上面で、南北方向にほぼ水平に検出された柱で、一部砂礫層に覆われていた。出土材中、長さ、径ともにもっとも大きく立派な柱である。断面は正円形を呈し、表面はもっともていねいなウリ削りを施している。棟木受けだろうか、頭頂部の受け部は丁寧な凹形で柱材4より大きく、径15cmほどの柱を受けることが可能である。両面はやはり双方から手斧で山形にはつっている。基部は手斧でていねいに平坦面を形成する。柱材本来の仕様であろう。

柱材3は、柱材2と平行して約1m西側で検出した柱材で、頭頂部を南壁に陥入した状態で出土した。黒粘Ⅱ上部の出土であるが、頭頂部は砂礫層に包括される。頭頂部を両側面から山形にはつって受け部を形成しているが、柱材2・4に比較すると、凹部形成は簡易で粗雑である。基部は平坦で切断痕はない。

柱材7は柱材1・2に接する状態で直立して検出された柱で、折損した頂部は砂礫層に達していた。周濠底の調査の際に柱穴を確認しているが、柱穴上面の径は45～50cmだが、湧水が激しく精査できなかった。そのため正確な深さは不明であるが、基部は検出面より40cm埋設されていた。検出時の略測図を図33に提示する。基端から約25cm上に円形と

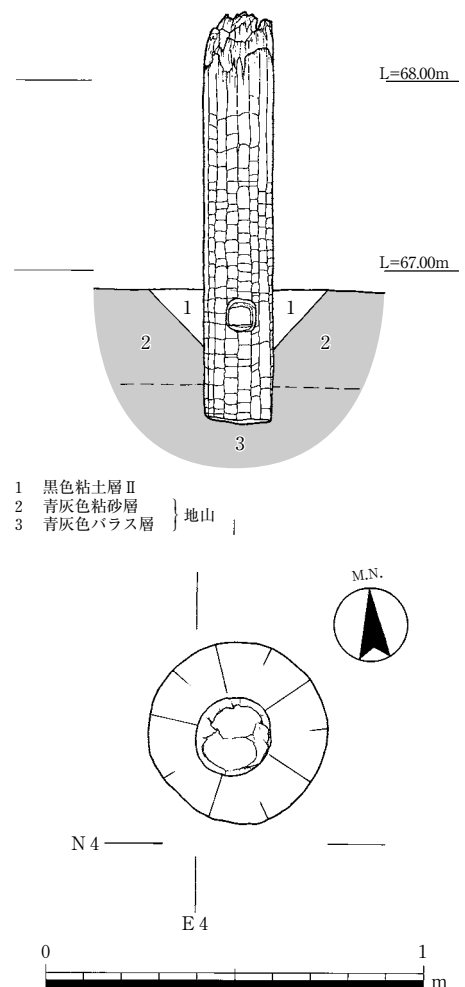


図33 3-1 トレンチ周濠内立柱  
平・断面図 (1/20)

方形の孔が双方から穿たれた貫孔構造を形成している。きわめて精緻な造作のもので、孔は濠底下に埋設していたのでその性格は不明である。柱の頂部は自然劣化が認められる。現存長約106cmを測るが、本来は砂礫層よりも上で切断され、長期間の露出によって劣化したものと判断される。

柱材5は柱材2と4の頂部付近で、柱材6は調査区南西隅の黒粘Ⅱ中で検出されている。いずれも基部は平坦面をもち本来の底面の状態を残しているが、上部はそれぞれ基底から32cmと46cmの位置で双方から山形に切断されている。柱材6はさらにもう一面からつごう三方向からの切断痕が見られる。いずれもていねいなウリ削りを呈し、切断面も他と同じく鉄斧による裁断である。

柱材10もウリ削りを施した柱材で底面は手斧で平坦に加工されている。基部より20cmほどで山形に切断され、さらに半裁された残材である。

黒粘Ⅱ出土の木製品には他に、矢板状木製品、加工板材、角材、角棒、棒状木製品の他に、多数の木材切削片が出土している。こうした加工材の破片や切削片が黒粘Ⅱ中に多数含まれていることも、クビレ部南側周濠での大きな特徴である。柱材などの建築部材や祭祀的な木製品などの投棄に先立って材の切断や切削といった行為が伴っていたことを暗示しているといえよう。これらの木製品についての詳細は、実測図と観察表に整理してあるので参照いただきたい。

黒粘Ⅱ出土の土器には、復元可能の甕3個体（2・3・5）と甕上半部破片（4）、二重口縁壺口縁部（6）、広口壺口縁部（1）、高坏脚部（7）、小形碗形鉢（8）の8点を図示した。甕はいずれも突出底を残し、粗いタタキを施した弥生形甕である。土器の組成は庄内形甕や布留形甕を欠くことから、いわゆる「纏向1式」の特徴的な組成を残している。

しかしこの程度の組成内容や量で、様式としての「纏向1式」に限定することがいかに危険であるかはすでに論証してきたところであり、さらに他地点での周濠底の土器出土状況や他の時期決定要素をも援用しながら総合的な判断をおこなう必要がある。ちなみに4と5の胴部最大形は中程下半にあるようであり、とくに3は胴部の肩が張り球形化が著しい。弥生後期後半の第Ⅵ様式～「纏向1式」にはあまり見られないタイプである。

なお、遺物については別に観察表を用意してあるので参照いただきたい。

### 第3節 東区の調査（第2・3トレンチ）

西区（第1トレンチ）の纏向石塚古墳周濠調査に先立って、西区とは農道を隔てた東側の休耕田で2ヵ所のトレンチ調査をおこない、「東区」と仮称した。

東区は、北隣の字名「タカマル」と俗称される水田より一段低く、前方部南東隅が延びて周濠の一部がかかる可能性が予想されたため、まず、敷地東端部に幅3m、長さ16.2mの南北トレンチ（第3トレンチと呼称）を設定して発掘をおこなったが、纏向石塚古墳と直接関係するような遺構は検出されなかった。そこで今度は、調査区西端の農道に沿って、幅0.8m、長さ14.7mのトレンチ（第2トレンチと呼称）を南北に設けた。纏向石塚古墳墳丘や西区の3-1トレンチとの位置関係はトラヴァース測量によって位置関係を図化した。

東区は、建設に伴う基礎工事の関係で、トレンチの設定箇所や規模が限定されたために、十分な確認調査は行えなかったが、3-2トレンチでは南部においては前方部前面の周濠と考えられる溝状遺構を検出することができた。

### (1) 第2トレンチ

農道に沿って設けた幅0.8m、全長14.7mの小規模なトレンチである。トレンチの南半で約10mにわたって溝状遺構を確認した。溝は北東-南西に走行する復元幅約6mで、地山層（灰色砂質土：9層、茶褐色砂質土：10層）上面で検出されている。溝内の堆積は、上から黒褐色砂質土（6層）→黒色粘質土（7層）であるが、いずれも砂礫を含んでおり、トレンチが狭小であるためと建物基礎への影響から下層への調査は断念した。現状で遺構面より約50cm掘り進んだ状況にある。

溝の堆積層下層（7層）からは、加飾の二重口縁壺口縁部（33）と甕底部（34）が出土している。甕は弥生形であろうが、壺は口縁端部に加飾した面をもつ垂下口縁を付加したもので、庄内式併行期に特徴的な型式であろう。

この溝状遺構は、西区の纏向石塚古墳の周濠や前方部の方向等の調査知見とあわせて考えると、前方部の前面を区画する位置と方向にあたり、後述するように、纏向石塚古墳周濠出土の土器とも年代的に合致するようであるから、纏向石塚古墳前方部前面周濠と考えて大過あるまい。ただ、溝内の堆積は後円部南側やクビレ部南側の周濠堆積とは大きく異なっているので、墳丘周囲の周濠部分とは環境の異なる小規模な溝状の浅い周濠遺構であった可能性が考えられる。

### (2) 第3トレンチ

全長16.2m、幅3mのトレンチである。トレンチ東半で落ち込み状の遺構SX-01とSX-02を検出した。SX-01はSX-02を切って作られている。いずれも砂質

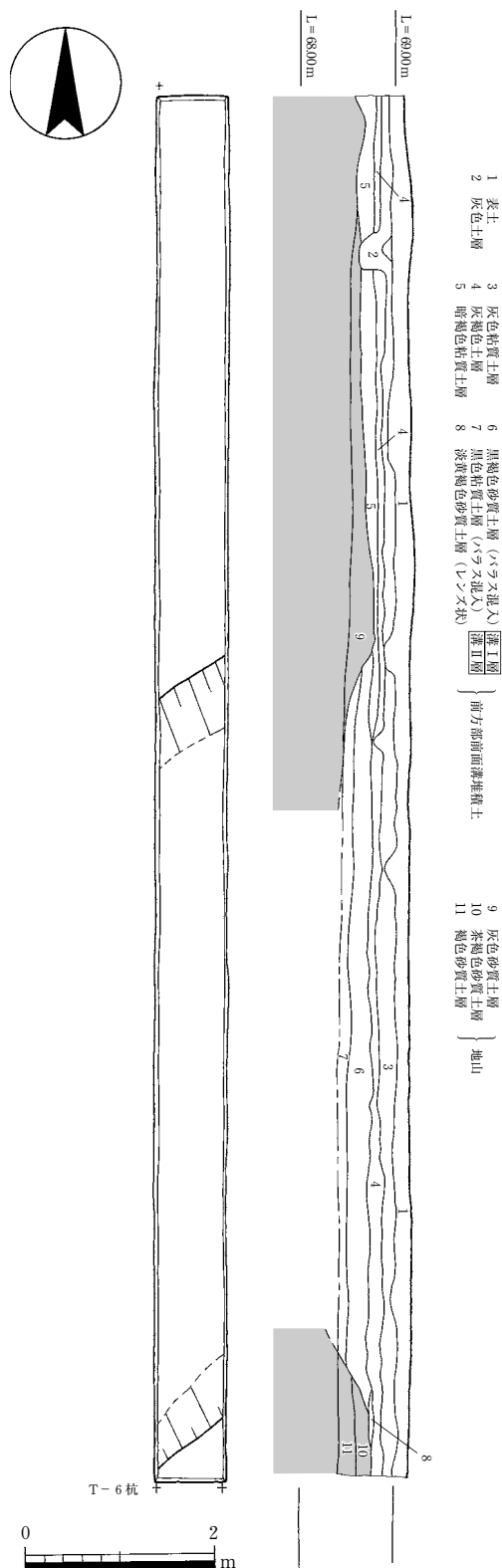


図34 3-2トレンチ平・断面図（1/80）



図35 3-3 トレンチ平・断面図 (1/80)

の土壌で充填されており、SX-01の底面には木質部が一部残存していた。SX-01の暗褐色砂質土層（4層）とSX-02の淡褐色礫質土層（5層）からは高坏脚部（48・49）が出土しているが、本来の時期のものではあるまい。

一方、トレンチの南端部では溝状の遺構を3時期にわたって検出している。もっとも古い溝は北東-南西方向に走行するもので、砂礫を混入した灰黒色土（17・18層）が充填し、北肩方向から拳大以下の小礫が多数流入した状況が看取された。出土遺物は有孔鉢底部のみで、溝の走行方向が纏向石塚古墳前方部前面（周濠）の方向に一致することは注意すべきであろうが、古墳に関連する積極的な根拠はない。

SD-01は、SD-02を切って作られた東西方向の溝で、灰褐色ないし灰黒色の土壌（13～16層）が充填する。上層から土師器の大形鉢高台部（38）や瓦器塊（37）が検出されている。おおむね12世紀のものであろう。さらにこれらの溝を切ってSD-03が存在する。北東-南西走行の溝で、暗褐色ないし濃灰色の粘質土（11・12層）で充填されており、土師器小皿（41～43）、瓦器塊（44～47）が出土している。13世紀後半期に下る時期となろう。さらにSD-03の上部に



は同一方向に走行する素掘り小溝が作られている。

これらの遺構は、SD-02を除けばいずれも11世紀から13世紀後半にかけてのものであり、古墳造営後のこの地域の古代末～中世開発の一端を物語る資料であろう。

#### 第4節 小結—第3次調査の成果—

以上報告してきたように、第3次調査で明らかとなった成果は大きい。とはいえ、すでに三十有余年が経過し、もはや周知の事実となった事項、再検討すべき事項は少なくない。しかしここでは、明らかに訂正、修正すべき点以外はあくまでも当時の概報の総括<sup>2)</sup>に則って第3次調査の成果について整理しておこうと考える。纏向石塚古墳の長期間にわたる確認調査の総括的かつ総合的な成果については後論によりたい。

1. 纏向石塚古墳の墳形については、円あるいは楕円形墳の可能性が考えられていたが、東西方向に張り出し部があることを確認したことによって、円墳、楕円形墳の可能性は否定されることになった。

本調査の現状では突出部が未だ短いことから、これを「帆立貝」形ではないかとの憶測もあったが、東区の3-2トレンチで検出された溝状遺構が前方部前面周濠と考えてよいのであれば、突出部の長さは約30mとなり、後円部径約60mと比較しても決して「帆立貝形古墳」の範疇ではあり得ない。今後、纏向石塚古墳の墳形については「前方後円」形として理解し、かつ最古級の前方後円墳として位置づけていく必要がある。今後のさらなる調査を期待したい。

2. 周濠の開穿時期については、第2次調査と同様に、最下層の黒粘Ⅱからは、いわゆる「纏向1式」を想定するような一連の土器群が出土した。このことから第3次調査の概報段階では、第1次調査の黒粘Ⅱの土器の混在に不安を感じつつも、黒粘Ⅱと砂礫層は時間的にも判然として分離し、最下層が「纏向1式」、その後の埋没過程のなかで「庄内式」土器も堆積したと考え、一連の祭祀品も含め、第一次祭祀と二次的祭祀の存在を模索した。つまり、第2次調査成果との層位的整合性に固執して「纏向1式」期の築造説を容認したのであった。

しかし改めて木製品群の出土状況を見ると、黒粘Ⅱのすぐ上を覆う灰黒色の砂礫層中にもおよんでおり、黒粘Ⅱと砂礫層はさしたる時間差はなく、ほぼ一体として形成されていた可能性が考えられる。

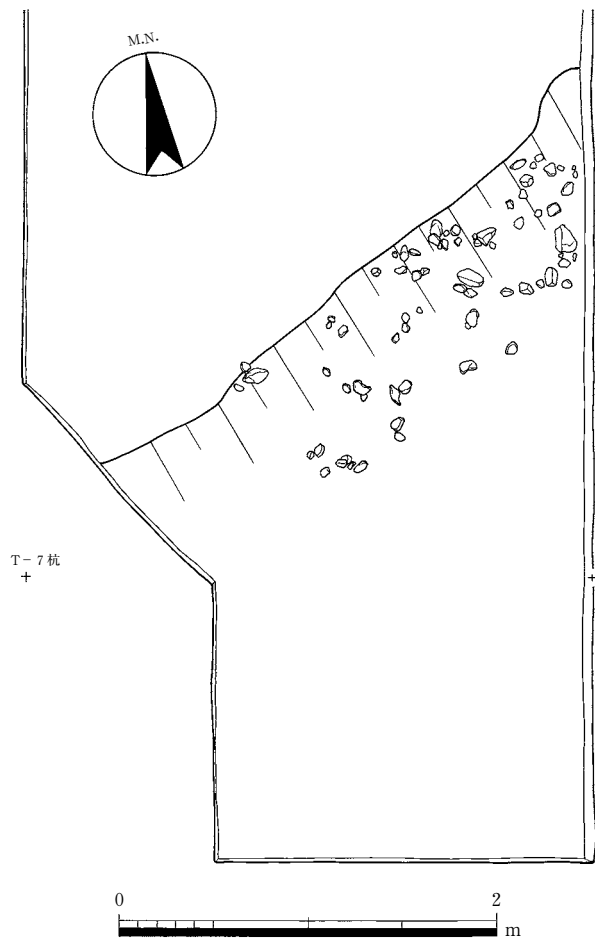


図36 3-3トレンチ SD-02 平面図 (1/40)

畢竟、砂礫層からは明らかに典型的な庄内形甕が出土しており、少なくとも周濠底への最初の遺物群の投棄が「纏向1式」期であることは再検討を余儀なくされたものと理解している。

その後、第1～2次調査の遺物を再検討する機会があり、築造時期を下らせて考えるようになったことは大きな変化であるが、それでもこの段階では庄内式の古い段階（庄内2式）を想定していた<sup>3)</sup>。現時点での私の纏向石塚古墳築造時期観を形成するには第4次調査を待たねばならなかったのである。

3. 最下層や砂礫層出土の木製品には柱材などの建築用材や祭祀的性格の強い木製品等が多数存在したが、第1～2次調査の事例を踏まえても、その性格を究明することができなかった。それでも、概報段階では「これらのなかには、二次的な転用を受けているものも含まれていて、何らかの形で使用されていたものが廃棄されたことを物語っている。しかし、前回調査した同一周濠内（第2次調査のこと：寺沢註）とは、わずかに隔てたところにおいて、一方では木製工具が多量に出土し、他方では材木を主体とする用材が検出されたことは、たんに周濠内に一括投棄したとも考えられず、埋蔵儀礼あるいは、墓上祭祀の問題とも関連して考えることが、今後に残された問題である」との見解を表明している。

現在の私の第1～3次調査にわたる一連の周濠調査に関しての見識として、もっとも強調しておかねばならないことは、これらの一連の周濠内遺物が黒粘Ⅱあるいは砂礫層の如何に関わらず、周濠底面近くにおいてプライマリーな投棄状態という機能面を確保している点であろう。この一括投棄性と同時性の認識こそが築造時期とこれらの遺物の性格を考える上での重要な思考基点であろうと思うのである。

（寺沢）

#### 【註記】

- 1) 土層断面図には現れていない。当時のメモと木製品のなかに「青暗色砂質粘土層」という記載があり、本土層のことと考えられる。
- 2) 久野邦雄・寺沢薫「纏向遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1976年度 奈良県立橿原考古学研究所 1977 なお、「まとめ」の項は久野邦雄の執筆になるものであるが、見解は両者協議の上のものであるので、部分的にここに引用する。
- 3) 寺沢薫「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』第六 吉川弘文館 1984

表6 纏向石塚古墳第3次調査出土土器観察表(1)

図番号 図版番号	地 区 層	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
37—1 96—8	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	壺 (口縁)	T—D—b	C : (121)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAb→ スリナデヨコICa				淡灰褐	
37—2 96—4	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	甕 Y	Ⅱ—A—3b	H : 164 C : 128 W : 140 B : 38	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIB	O. タタキ→ 一部スリナデヨコIC a i. スリナデヨコIB	O. タタキ i. ケズリB	40/CM	暗茶褐	・口縁～体部外面 にかけてスス付 着 ・底面～底部外面 に乾火痕あり
37—3 96—2	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	甕 Y	Ⅰ—A—・b	H : (250) C : (180) W : (250) B : 32	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAb	O. タタキ i. (肩) スリナデヨコIAb (胴) スリナデIAb→ スリナデICa	O. タタキ→ スリナデICa i. スリナデICa		O. (体部) 淡赤茶褐 (底部) 淡赤 i. 淡茶褐	
37—4 96—3	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	甕 Y	・――・b	C : (142) W : (185)	O. (口唇) スリナデヨコICa (口縁～頸) スリナデヨコIAb i. スリナデヨコICa	O. タタキ i. スリナデヨコIAa		40/CM 7/cm	淡褐	
37—5 96—1	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	甕 Y	Ⅰ—B—1b	H : 199 C : 162 W : 185 B : 37	O. スリナデIB i. スリナデヨコIB	O. タタキ→ スリナデタテIAb i. スリナデヨコIAb	O. ケズリA i. スリナデIAb	30/CM	黒褐	・内部に炭化物 付着 ・底部外面にモ ミ圧痕あり
37—6 96—7	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	高坏	G—・――・――	C : (161)	O. スリナデヨコICa i. ミガキA→ スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. スリナデICa			淡褐	
37—7 96—5	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	脚台 (高杯)	4—A—c	B : 142			O. (柱状部) ミガキA (裾部上半) タタキ→ (裾部下半) スリナデI a i. スリナデヨコICa		灰褐	・3方スカシ
37—8 96—6	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	鉢	Ⅳ—A 1	H : 47 C : 76 B : 29	O. スリナデIAa→ スリナデヨコICa i. スリナデIAa→ スリナデICa	O. スリナデIAa→ スリナデヨコICa i. スリナデIAa→ スリナデICa	O. 押捺A i. 爪痕	23/cm	淡褐	・土器内から種 子出土 ・内面に炭化物、 赤色顔料が付着
37—9 96—9	第1トレンチ 濠内堆積土 灰黒色砂礫層 上面	甕 SY	Ⅱ—C—4 e2	H : 136 C : 121 W : 143 B : 10	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコIB	O. タタキ→ スリナデIAb i. ケズリA	O. タタキ→ スリナデIAb i. ケズリA	40/CM	淡褐	
37—10 96—10	第1トレンチ 濠内堆積土 灰黒色砂礫層 上面	底部 (甕)	2—C—b	B : 46			O. スリナデヨコICa i. スリナデ			・底面にモミ圧 痕あり
37—11 96—11	第1トレンチ 濠内堆積土 灰黒色砂礫層 上面	底部 (甕)	1—C—b	B : 31			O. スリナデIAa i. スリナデIAa	5/cm 7/cm		

表7 纏向石塚古墳第3次調査出土土器観察表(2)

図番号 図版番号	地 区 層	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
38—12 97—12	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	壺		C : (288)	O. i. ミガキA					
38—13 97—13	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	壺		C : (162)	O. (口縁) スリナデヨコ (頸) スリナデⅠAa→ スリナデⅠCa i. スリナデヨコ				淡茶褐	
38—14 97—14	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	底部 (甕)	3—1—・	B : 5.0			O. タタキ i. スリナデ			・内面にスス付 着
38—15 97—15	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	底部 (甕)	2—A—・	B : 3.8			O. タタキ→ スリナデⅠCa i. スリナデAb?		O. 淡黒褐 i. 黒褐	・内面の一部に スス付着
38—16 97—16	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	有孔鉢		B : 3.9			O. 押捺A→ スリナデⅠCa i. 押捺A→ スリナデⅠCa		淡灰褐	・焼成後穿孔
38—17 97—17	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	土師器 高坏		—		O. ケズリ→ユビナデ i. ユビナデ→ ハラミガキ (放射状暗文) → ハラミガキ (螺旋状暗文)	O. ケズリ		茶褐	
38—18 97—18	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	脚台 (?)		B : (8.0)				O. スリナデ i. スリナデ	暗褐	・内面全体と外 面の一部にス ス付着
38—19 97—19	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅰ	土師器 壺		C : (152)	O. ナデ i. ナデ	O. ミガキ i. ハケ			赤褐	
38—20 97—22	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	底部 (壺)		B : 5.0			O. マメツ不明		淡茶褐	
38—21 —	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	脚台 (高坏)		—		O. ヨコナデ			淡乳赤褐	
38—22 97—23	第1トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	土師器 甕	甕A	C : (292)	O. ヨコナデ・押捺 i. ヨコナデ	O. ハケメ→ヨコナデ i. ヨコナデ	5/cm		淡褐	

表 8 纏向石塚古墳第 3 次調査出土土器観察表 (3)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
38—23 97—24	第 1 トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	土師器 環		C : (113)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ					
38—24 97—25	第 1 トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	土師器 環?		C : (128)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. ケズリ i. 回転ナデ			淡赤褐	
38—25 97—26	第 1 トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	土師器 環?		C : (128)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ケズリ i. 回転ナデ			灰白	
38—26 97—27	第 1 トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	土師器 環	環C	H : (35) C : (146)	O. ナデ i. ナデ→ミガキ	O. ケズリ i. ナデ→ミガキ			淡赤褐	
38—27 97—28	第 1 トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	土師器 環?		H : 31 C : (144)	O. ナデ i. ナデ	O. 回転ケズリ i. ナデ			灰白	
38—28 97—29	第 1 トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	須恵器 Ⅲ	ⅢB	B : (131)		O. (上半) ナデ (下半) ケズリ i. ナデ	O. (底部) 回転ヘラケズリ (高台) ヨコナデ i. (底部) ナデ (高台) ヨコナデ		淡青灰	・ ロクロ逆時計 回り
38—29 97—30	第 1 トレンチ 濠内堆積土 暗灰褐色土	須恵器 Ⅲ	ⅢB	B : (142)			O. (底部) ケズリ→ナデ (高台) ナデ i. (底部) ナデ (高台) ナデ		暗青灰	・ ロクロ時計回 り
38—30 97—31	第 1 トレンチ 濠内出土	土師器 環?		C : (140)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. ケズリ→回転ナデ i. 回転ナデ			赤褐	
38—31 —	第 1 トレンチ 床土	底部 (?)	4—・	B : 30			O. スリナデ i. スリナデ		O. 淡褐 i. 赤褐	
38—32 —	第 1 トレンチ 床土	脚部 (高環)	・—A—c	—		O. スリナデ i. スリナデ				
39—33 98—32	第 2 トレンチ 前方部前面溝 黒色粘質土 (下層)	甕	G—・—・—・	C : 208	O. スリナデ I A b→ スリナデ I C a i. マメツ不明				赤褐	・ 二個一対の円 形浮文 8 ヶ所



表 9 纏向石塚古墳第3次調査出土土器観察表(4)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色	調	備 考
					口	縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
39-34 98-33	第2トレンチ 前方部前面溝 黒色粘質土 (下層)	底部	2-A-・	B : 3.8				O. スリナデICa i. スリナデIAa	茶褐	
39-35 98-35	第3トレンチ SD-02	有孔鉢 底部		B : 3.6				O. タタキカスリナデIA b スリナデICa i. スリナデIB→ スリナデICa	茶褐	
39-36 98-36	第3トレンチ SD-01 上層	底部	2-A-・	B : (4.5)				O. タタキ→ スリナデICa i. スリナデICa	O. 暗茶褐 i. 茶褐	
39-37 98-37	第3トレンチ SD-01 上層	瓦器 塊		C : (14.9)	O. ミガキ (暗文) i. ミガキ (暗文)				O. 淡褐黒 i. 黒灰	
39-38 98-38	第3トレンチ SD-01 上層	土師器 鉢底部		B : (8.3)				O. (底部) ナデ (高台) ヨコナデ i. (底部) ナデ・押捺→ ミガキナデ (高台) ヨコナデ	O. 淡褐 i. 黒灰	
39-39 98-39	第3トレンチ SD-03	口縁	H-I-?	C : (12.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデIAb→ スリナデヨコICb				O. 淡灰褐 i. 黒灰	・小溝
39-40 98-40	第3トレンチ SD-03	底部 (甕)	2-C-・	B : 4.0				O. タタキ 押捺A i. マメツ不明	O. 赤褐 i. 茶褐	・小溝
39-41 98-41	第3トレンチ SD-03	土師器 小皿		H : (1.4) C : (8.4)	O. ヨコナデ i. ヨコナデ				淡褐	・小溝
39-42 98-42	第3トレンチ SD-03	土師器 小皿		H : (1.4) C : (9.4)	O. ナデ i. ナデ		O. ヨコナデ・押捺		淡褐	・小溝
39-43 98-43	第3トレンチ SD-03	土師器 皿		H : (1.3) C : (9.2)	O. ヨコナデ i. ヨコナデ		O. ヨコナデ・押捺		淡褐	・第3トレンチ SD-01上 層と接合 ・小溝
39-44 98-44	第3トレンチ SD-03	瓦器 塊		C : (13.8)	O. ミガキ (暗文) i. ヨコナデ		O. ミガキ (暗文) i. ミガキ (暗文)		黒灰	・第3トレンチ SD-01上 層と接合 ・小溝

表 10 纏向石塚古墳第3次調査出土土器観察表 (5)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色	調	備 考
					口	縁 部	体	部			
39—45 98—45	第3トレンチ SD—03	瓦器 埴		C : (I72)	O. ミガキ (暗文) i. ミガキ (暗文)		O. ミガキ (暗文) i. ミガキ (暗文)			黒灰	・小溝
39—46 98—46	第3トレンチ SD—03	瓦器 埴		B : (59)						淡灰	・小溝
39—47 98—47	第3トレンチ SD—03上 包含層	瓦器 埴		B : (57)						黒灰	・第3トレンチ SD—03直 小溝上包含層 と接合
39—48 98—48	第3トレンチ SX—01	脚台 (高坏)	・—A—・	—						O. 淡赤褐 i. 赤褐	
39—49 98—49	第3トレンチ SX—02	脚台 (高坏)	・—B—・	—						茶褐	
39—50 —	第2トレンチ 床土	須恵器 ?		B : 5.3						淡青灰	・クロ時計回 り
39—51 98—50	不明	脚台	・—A—・	B : (I58)						5/cm 4/cm	
— 97—20	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層I	須恵器 甕									
— 98—34	第2トレンチ 前方部前面溝 黒色土 (下層)	口縁									

表 11 纏向石塚古墳第3次調査出土木器観察表(1)

図番号 図版番号	地 区 層	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
40-1 100-53	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木製品	L : 2945 W : 7.4 × 7.5	・両端折損 ・断面はほぼ円形	・一部に縦方向の手斧痕を残す	ヒノキ	分割材	(No.23)
40-2 99-51	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	柱材	L : 2580 W : 22.5	・頭部は対面する2面を刃幅4.5cmの手斧で削り込み、先端を「コ」の字に加工 ・基部は平坦 ・断面はほぼ円形	・全面に手斧による丁寧な瓜削りを施す	ヒノキ	芯持材	(No.19)
40-3 100-52	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	柱材	L : 2144 W : 13.2	・頭部を「く」の字に加工 ・基部は平坦 ・断面は多角楕円形	・全面に手斧による瓜削りを施す	ヒノキ	芯持材	(No.22)
40-4 101-54	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	柱材	L : 1955 W : 13.0 × 15.0	・頭部を「く」の字に加工 ・基部は斜めに切断 ・断面は多角楕円形	・頭部木口に工具刃幅4cm強の加工痕を顕著に残す ・側面に手斧による瓜削り状態を残す	ヒノキ	芯持材	(No.20)
40-5 103-56	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	切断柱材	L : 32.0 W : 18.0 × 18.9	・木口は一端を「く」の字に加工、他端を比較的平坦に加工 ・断面は多角楕円形	・全面に手斧による瓜削りを施す	ヒノキ	分割材	(No.13)
40-6 103-57	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	切断柱材	L : 46.6 W : 17.0 × 18.8	・木口は、一端は対面する2方向およびそれに垂直する一方より削り出しており、他端は平坦 ・断面は多角楕円形	・全面に手斧による瓜削りを施す	ヒノキ	分割材	(No.21)
40-7 102-55	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	臍穴付柱材	L : 1063 W : 18.0 × 18.4	・基部より約24cmの位置に臍穴を設ける ・臍穴は貫通しており、中ほどで段を画して形を変える ・一方は9 × 8 cm、深さ6.6cmの楕円柱形、他方は一辺6.2cmの方形	・全面に手斧による瓜削りを施す	ヒノキ	分割材	(No.24)
41-8 —	第1トレンチ 濠内堆積土 灰色砂層下面	杭状木製品	L : 51.0 W : 8.0	・上部と基部先端を折損 ・樹皮がついた自然木の先端を尖状に加工	・刃幅2.5～3 cm以上の工具を使用	—	芯持材	(No.32)
41-9 104-65	第1トレンチ 濠内堆積土 灰色砂層	有孔円盤状木製品	L : 34.6 W : 19.3 (36.0) T : 1.5	・1/2を折損 ・平面円形 ・中央部に2.5cmの方形の穴を設け、周囲に直径5 mm程の孔を8ヶ所設ける(残存孔数5)	・表面を刃幅2cm前後の小型手斧で調整 ・側面にも丁寧な加工を施す ・孔はほかの部分に比べて粗雑である ・赤色顔料付着	ヒノキ	柵目材	(No.14)
41-10 104-61	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	柱材片	L : 21.3 W : 16.4 T : 7.7	・1/2を折損 ・木口は一端は斜めに、他端はほぼ平坦に切断	・材の側面は刃幅5 cm以上の手斧で加工し、木口は刃幅4 cm以上の手斧で加工	ヒノキ	分割材	(No.16)
41-11 104-59	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	異形蓋状 木製品(蓋板部?)		・乾燥のため劣化。観察不可		—	板目材	13と一体品 観察不可能 (No.4)

表 12 纏向石塚古墳第3次調査出土木器観察表（2）

図番号 図版番号	地 区 層 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
41-12 104-58	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	柱材片	L : 14.0 W : 16.4 × 15.0	・木口の一端は、対面する2面より削り込みを施し、他端はほぼ平坦 ・断面は多角楕円形	・手斧痕がみられる	—	芯持材	(No. 1)
41-13 104-64	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	異形蓋状木製品 臍穴付棒状部	L : 44.5 W : 2.8 T : 2.2	・断面は、上部から約20cmのところから先端に向かいて、円形から長方形へと変わる ・先端から4.5cmのところから4.0×0.5cmの楕形の穴を設ける ・先端8cmをさらに細く作り、先端より4cmに約		—	分割材	(No. 4)
41-14 104-60	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	柱材片	L : 25.5 W : 13.5 (14.0)	・木口の一端を平坦に切断、他端は上方からの刃痕が認められる	・全面に手斧による瓜削りを施す	—	芯持材	(No. 3, 31)
41-15 104-62	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	小切り状木製品	L : 3.0 W : 3.2 T : 1.8			—	分割材	全面被火のため炭化 (No.105)
41-16 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	棒状木片	L : 30.0 W : 3.3 T : 2.6	・木口の一端を平坦に切断、他端は斜めに切断	・表面および木端を手斧で加工（刃幅3cm以上）	—	板目材	(No.29)
41-17 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	板状木片	L : 23.4 W : 6.4 T : 2.4			—	板目材	(No. 3-②)
42-18 104-63	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	切断材	L : 18.0 W : 10.2 × 12.3	・芯持材の両端を折切 ・横断面は多角形 ・側面は全面加工を施しているが、整形されていない なく、横断に伴う剥離等もあり詳細不明	・刃幅4～4.5cm程の鑿状工具で木目と直交する方向に切り込み、切断している	ヒノキ	芯持材	(No.39)
42-19 105-66	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	加工板	L : 14.9 W : 13.5 T : 1.6		・表面磨滅のため加工痕不明 ・切断面に荒い加工痕が認められるが刃幅等不明	—	板目材	(No.41)
42-20 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角材	L : 14.6 W : 8.0 T : 3.2	・木口の一端を斜めに、他端を平坦に削る	・木口に手斧痕がみられる	—	分割材	(No.30)
42-21 105-67	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角材	L : 15.4 W : 9.9 T : 3.5	・木口の一端を斜めに、他端を平坦に削る	・表面と木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	分割材	(No.10)
42-22 105-69	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	矢板状木製品	L : 24.7 W : 6.9 T : 1.3		・手斧痕がみられる	—	板目材	(No.122)

表 13 纏向石塚古墳第3次調査出土木器観察表(3)

図番号 図版番号	地 区 層	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
42—23 105—75	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 16.8 W : 4.4 T : 2.5	・断面長方形	・刃幅3 cm以上の工具で加工	—	分割材	(No.42)
42—24 105—68	第1トレンチ 濠内堆積土 青黒色粘砂層	角材	L : 16.8 W : 8.0 T : 1.8	・片側面は剥離あるいは折損 ・木口の一端を斜めに、他端を平坦に削る ・断面長方形	・全面に手斧痕がみられる ・斜めの面は数回に渡って削りこんでいる	—	板目材	(No.123)
42—25 105—77	第1トレンチ 濠内堆積土 青黒色粘砂層	板状木片	L : 19.3 W : 7.2 T : 2.3		・手斧痕がみられる	—	分割材	(No.124)
42—26 105—70	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	板状木片	L : 19.6 W : 4.2 T : 1.1		・手斧痕がみられる	—	板目材	(No.107)
42—27 105—76	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角材片	L : 17.2 W : 4.6 T : 3.0	・断面台形		クスギ	框目材	・被火により一部炭化 (No.40)
42—28 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	板状木片	L : 21.2 W : 4.2 T : 1.0			—	框目材	(No.15-②)
42—29 105—71	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	木片	L : 21.7 W : 3.6 T : 2.1	・断面三角形	・手斧痕がみられる	コウヤマキ	分割材	(No.11)
42—30 105—72	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 22.1 W : 2.8 × 3.0 T : 2.1	・両端折損 ・断面円形		—		(No.48)
42—31 106—80	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 23.9 W : 2.9 T : 2.1	・側面に斜めの切り込みが入る ・断面方形		—	分割材	(No.50)
42—32 105—73	第1トレンチ 濠内堆積土 青黒色粘砂層	角棒状木片	L : 23.7 W : 2.8 T : 1.6			—	分割材	(No.125)
42—33 —	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	切断木片	L : 16.2 W : 6.7 T : 3.2		・手斧痕がみられる	—		(No.15-①)

表 14 纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (4)

図番号 図版番号	地 区 層 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
42—34 106—87	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 15.5 W : 1.7 T : 2.1	・両端折損		—		(No.49)
42—35 106—90	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 15.0 W : 3.0 × 1.8	・両端折損		—		(No.47)
42—36 —	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	木片	L : 6.4 W : 5.3 T : 2.4		・手斧痕がみられる	—		(No.38)
43—37 106—78	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 69.6 W : 2.4 T : 1.4	・ 3 面に手斧痕が認められ、他面は剥離している ・ 残存部中央に鋭い刃物による斜めの切り込みを有する ・ 断面長方形	・ 各面ともに手斧で丁寧な面取りを行う	ヒノキ		(No.61, 62)
43—38 106—79	第 1 トレンチ 濠内堆積土 青黒色粘砂層	角棒状木片	L : 50.5 W : 3.0 T : 1.9	・ 木口的一方を斜めに削る ・ 断面長方形	・ 各面ともに手斧で丁寧な面取りを行う	ヒノキ		(No.120)
43—39 106—82	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 19.4 W : 3.2 T : 2.1	・ 下端折損 ・ 各面を手斧で加工した棒状の木の一面に、斜めに鋭い「V」字状の切り込みを入れる ・ 切込みを入れ、さらに木目方向の縦割りを施す ・ 断面長方形	・ 各面ともに手斧で丁寧な面取りを行う	—		(No.64)
43—40 —	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 15.9 W : 1.8 T : 0.4	・ 両端を折損 ・ 3 面に手斧痕が認められ、他面は剥離している	・ 手斧で丁寧な面取りを行う	—		(No.63)
43—41 —	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木材	L : 51.8 W : 3.9	・ 断面楕円形	・ 全体に手斧痕を残す	—	分割材	(No.33)
43—42 106—94	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木材	L : 54.8 W : 5.2 T : 2.5			ヒノキ		(No.45)
43—43 106—81	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 23.0 W : 3.5 T : 3.4	・ 割材の棒に 2 ヶ所の切り込みを入れている	・ 手斧痕がみられる	—	分割材	(No.106)
43—44 —	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 29.3 W : 2.2 T : 0.9	・ 断面長方形		—	紐目材	(No.34)



表 15 纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (5)

図番号 図版番号	地 区 層	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
43—45 —	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 33.0 W : 1.2 T : 2.4			—		(No.35)
43—46 106—92	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 31.0 W : 3.0 × 1.8	・断面楕円形		—		(No.46)
43—47 —	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	板状木片	L : 38.1 W : 4.3 T : 0.9	・断面長方形		—	板目材	(No.15-③)
43—48 106—93	第 1 トレンチ 濠内堆積土 青黒粘砂層	杭状木片	L : 39.3 W : 4.2 T : 3.5	・両端を折損 ・四分割材の先端を杭状にしたもの		—	分割材	(No.121)
44—49 107—95	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 9.7 W : 3.2 T : 0.2		・表面に手斧痕がみられる	ヒノキ	柵目材	(No.68)
44—50 107—105	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 7.6 W : 2.7 T : 0.2		・表面および両側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.72)
44—51 107—101	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 10.5 W : 2.7 T : 0.4		・片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.69)
44—52 107—99	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.0 W : 3.2 T : 0.5	・両木口を斜めに削る	・木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	柵目材	(No.76)
44—53 107—97	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.5 W : 3.6 T : 0.2	・両木口を斜めに削る		ヒノキ	板目材	(No.73)
44—54 107—98	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.2 W : 2.7 T : 0.2	・両木口を斜めに削る	・表裏と木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.75)
44—55 107—96	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.0 W : 3.1 T : 0.4	・両木口を斜めに削る	・表裏と木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	柵目材	(No.59)

表 16 纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (6)

図番号	地 区 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
図版番号								
44—56 107—100	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 65 W : 32 T : 04	・両木口を斜めに削る	・木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.77)
44—57 107—110	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 50 W : 23 T : 04	・両側面を折損 ・木口の一方を斜めに、他方を平坦に削る		ヒノキ	板目材	(No.118)
44—58 107—109	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 60 W : 36 T : 03	・木口の一方を斜めに、他方を平坦に削る		ヒノキ		(No.86)
44—59 107—108	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 68 W : 26 T : 02	・両側面と下端を折損	・表面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.117)
44—60 107—106	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 94 W : 21 T : 03		・表面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.97)
44—61 107—104	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 120 W : 25 T : 02	・両端を折損	・表面と片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.67)
44—62 107—103	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 124 W : 25 T : 04	・下端を折損	・表面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.115)
44—63 107—102	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 124 W : 28 T : 04	・両端を折損 ・両側を加工した後もう一面を加工した時の削片 か	・表面と両側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.66)
44—64 107—107	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 78 W : 28 T : 01		・表裏面に手斧痕がみられる	ヒノキ	柃目材	(No.116)
44—65 107—136	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 56 W : 22 T : 05	・表裏面と両側面が剥離または折損 ・両木口を斜めに削る	・木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.60)
44—66 107—132	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 62 W : 32 T : 05	・両木口を斜めに削る	・木口と両側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.74)

表 17 纏向石塚古墳第3次調査出土木器観察表(7)

図番号 図版番号	地 区 層 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
44-67 107-127	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.8 W : 2.6 T : 0.9	・両木口を斜めに削る	・木口と片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.78)
44-68 107-134	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.6 W : 2.8 T : 0.7	・両木口を斜めに削る	・表面および両側面、木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.82)
44-69 107-129	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.2 W : 3.6 T : 0.7	・両木口を斜めに削る	・表面および両側面、木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.83)
44-70 107-130	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 4.7 W : 2.8 T : 0.7	・両木口を斜めに削る		ヒノキ	板目材	(No.91)
44-71 107-128	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.8 W : 2.4 T : 0.7	・両木口を斜めに削る	・手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.112)
44-72 107-126	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.4 W : 3.1 T : 0.9	・樹皮側を小型手斧で加工した丸材または分割材を制ったものか ・両木口を斜めに削る	・表面と木口に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.84)
44-73 107-135	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.0 W : 5.7 T : 0.8		・表面に千鳥に加工痕を有す	ヒノキ	板目材	(No.80)
44-74 107-131	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.3 W : 2.7 T : 0.7	・両木口を斜めに削る		ヒノキ		(No.114)
44-75 107-133	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.5 W : 3.6 T : 0.6	・両木口を斜めに削る		ヒノキ		(No.89)
44-76 107-124	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 8.1 W : 2.7 T : 0.8	・表裏ともに剥離 ・両木口を斜めに削る	・両木口と側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.109)
44-77 107-125	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 7.2 W : 3.3 T : 0.7	・両木口を斜めに削る	・両木口と片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.81)

表 18 纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 ( 8 )

図番号 図版番号	地 区 層	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
44—78 107—123	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 9.7 W : 2.7 T : 1.1	・両木口を斜めに削る	・表面および片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.71)
45—79 107—118	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 7.2 W : 3.0 T : 0.9	・両木口を斜めに削る	・両木口と片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.87)
45—80 107—117	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 9.3 W : 3.7 T : 1.1	・樹皮側を手斧で整えた丸材に二次的加工を施した際の削片か	・一次加工時の工具刃幅1.2cm以上 ・二次加工時の工具刃幅2.7cm以上	ヒノキ	分割材	(No.58)
45—81 107—116	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 11.5 W : 2.4 T : 0.7	・断面長方形	・表面と側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	紐目材	(No.52)
45—82 106—88	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 12.6 W : 3.0 T : 1.1	・断面長方形	・両側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.53)
45—83 107—112	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.2 W : 2.7 T : 0.5			ヒノキ		(No.90)
45—84 107—114	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 7.4 W : 2.5 T : 0.9	・木口的一方を斜めに削っており、他方は折損不明 ・断面長方形		ヒノキ	板目材	(No.103)
45—85 107—111	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.0 W : 2.7 T : 0.6	・木口的一方を斜めに削っており、他方は折損不明 ・断面長方形	・両木口と片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.95)
45—86 107—113	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.1 W : 2.2 T : 1.1		・木口と両側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.92)
45—87 107—115	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 8.3 W : 2.5 T : 0.8	・木口的一方を斜めに削っており、他方は折損不明 ・断面長方形	・表面と木口に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.111)
45—88 107—122	第 1 トレンチ 濠内堆積土 青黒色粘砂層	削片	L : 7.7 W : 4.9 T : 0.9	・木口的一方を斜めに、他方を平坦に削る	・斜めの部分は 2 回にわたって削り込んでいる	ヒノキ		(No.126)

表 19 纏向石塚古墳第3次調査出土土器観察表(9)

図番号 図版番号	地 区 層	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
45—89 107—119	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.9 W : 2.6 T : 0.8	・木口的一方を斜めに、他方を平坦に削る	・表面と木口に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.93)
45—90 107—120	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.1 W : 3.5 T : 0.8	・木口的一方を斜めに、他方を平坦に削る ・表面に斜めに切り込んだ刃痕あり		ヒノキ	板目材	(No.113)
45—91 106—86	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 8.3 W : 1.9 T : 1.2		・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.102)
45—92 108—144	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 9.7 W : 1.1 T : 1.3	・両木口を斜めに削る	・両木口と片側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.110)
45—93 106—85	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 8.1 W : 1.8 T : 1.3	・上面は木目方向に、一方は深く斜めに、他方は 0.5cmくらいの深さまで斜めに切り込む	・両木口に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.96)
45—94 108—142	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 8.2 W : 2.5 T : 1.3	・両木口を斜めに削る ・断面長方形	・木口と側面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.79)
45—95 108—141	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 14.5 W : 2.0 T : 1.5	・両木口を斜めに削る ・断面平行四辺形		ヒノキ		(No.36)
45—96 108—143	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 13.4 W : 5.0 T : 1.9	・裏面剥離 ・両木口を斜めに削る ・丸材の表面を手斧で加工し、さらに大きな手斧 で再加工した時の削片か	・表面と側面に手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.108)
45—97 108—140	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.0 W : 5.5 T : 1.5	・両木口を斜めに削る		ヒノキ		(No.57)
45—98 108—139	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 14.9 W : 2.1 T : 2.3	・下端を折損 ・両木口を斜めに削る		ヒノキ		(No.37)
46—99 107—121	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.5 W : 5.8 T : 1.2	・木口的一方を斜めに、他方を平坦に削る		ヒノキ	板目材	(No.43)

表 20 纏向石塚古墳第3次調査出土木器観察表 (10)

図番号 図版番号	地 区 層 位	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
46—100 108—138	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 7.1 W : 5.2 T : 1.6	・木口的一方を斜めに、他方を平坦に削る		ヒノキ	板目材	(No.94)
46—101 108—137	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 9.1 W : 6.3 T : 1.5	・表裏面と両側面は剥離 ・木口的一方を斜めに、他方を平坦に削る		ヒノキ	板目材	(No.44)
46—102 108—148	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 4.7 W : 2.0 T : 0.8	・方形の板状木の角を削った削片	・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.100)
46—103 108—152	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 4.5 W : 3.6 T : 0.6	・頭部を「く」の字に、下端を斜めに加工	・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.99)
46—104 108—147	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.8 W : 4.0 T : 0.6	・頭部を「く」の字に、下端を斜めに加工	・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.98)
46—105 108—151	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.9 W : 3.9 T : 0.8	・頭部を「く」の字に、下端を斜めに加工	・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.70)
46—106 108—150	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.3 W : 3.1 T : 0.1	・頭部を「く」の字に、下端を斜めに加工	・手斧痕がみられる	ヒノキ	榎目材	(No.104)
46—107 108—146	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 5.1 W : 3.2 T : 0.2	・頭部を「く」の字に、下端を斜めに加工	・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.119)
46—108 108—149	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 6.3 W : 3.1 T : 0.2	・頭部を「く」の字に、下端を斜めに加工	・手斧痕がみられる	ヒノキ		(No.101)
46—109 108—145	第1トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	削片	L : 6.1 W : 4.8 T : 0.7	・樹皮側を加工した丸材から削られたものか	・刃幅2cm以上の工具で表面を加工した後、さらに刃幅4.7cm以上の手斧で削り取っている	ヒノキ	板目材	(No.28)
46—110 106—83	第1トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 17.9 W : 2.0 T : 1.0	・両端を折損 ・断面長方形		ヒノキ	板目材	(No.56)



表 21 纏向石塚古墳第 3 次調査出土木器観察表 (11)

図番号 図版番号	地 区 層	種 類	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	材 質	木取り	備 考 (実測番号)
46—111 106—89	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	角棒状木片	L : 17.3 W : 2.5 T : 1.4	・裏面および両側面が剥離、両端を折損		ヒノキ	柵目材	(No.54)
46—112 106—84	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	板状木片	L : 17.1 W : 3.4 T : 1.1		・表面に手斧痕がみられる	ヒノキ	板目材	(No.55)
46—113 106—91	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	棒状木片	L : 15.2 W : 3.0 T : 1.7	・両端を折損 ・断面楕円形		—		(No.65)
46—114 105—74	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒色粘土層Ⅱ	削片	L : 14.8 W : 5.1 T : 3.6	・樹皮側を加工した丸材から削られたものか	・表面に手斧痕がみられる	ヒノキ	分割材	(No.51)
(115) 109—154	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	円座状樹皮製品	φ : 24	・東ねた栓皮を円状に巻き、外から中心へ巻き綴 じを 6 ヶ所施している		ヒノキ 樹皮		・赤色顔料が付 着
(116) 109—155	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	円座状樹皮製品	φ : 20			ヒノキ 樹皮		・赤色顔料が付 着
(117) 109—156	第 1 トレンチ 濠内堆積土 黒灰色砂礫層	円座状樹皮製品	φ : 16			ヒノキ 樹皮		・赤色顔料が付 着

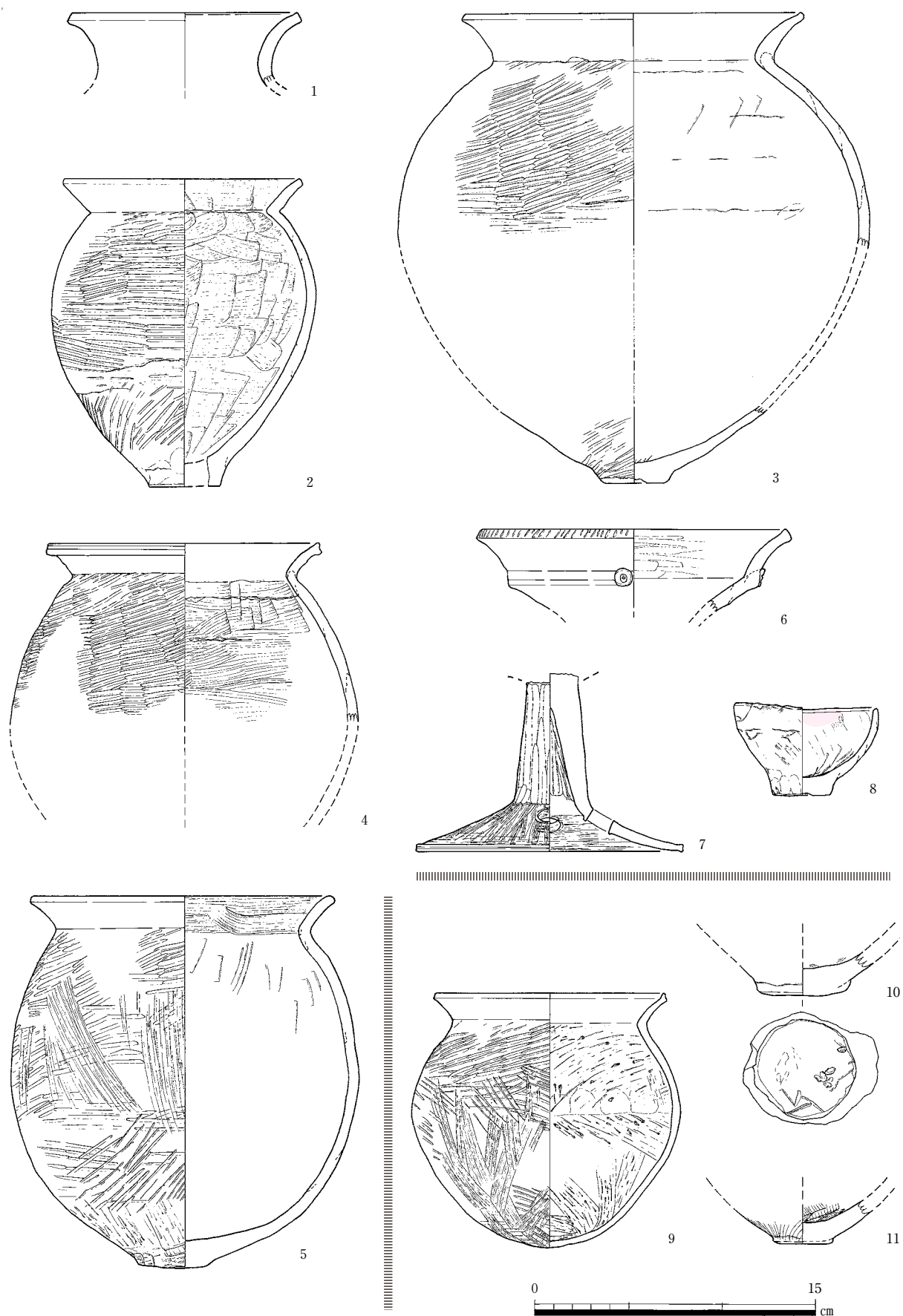


図37 纏向石塚古墳第3次調査出土土器実測図1 (1/3)  
第1トレンチ 濠内堆積土：1～8 黒色粘土層Ⅱ 9～11 黒灰色砂礫層上面

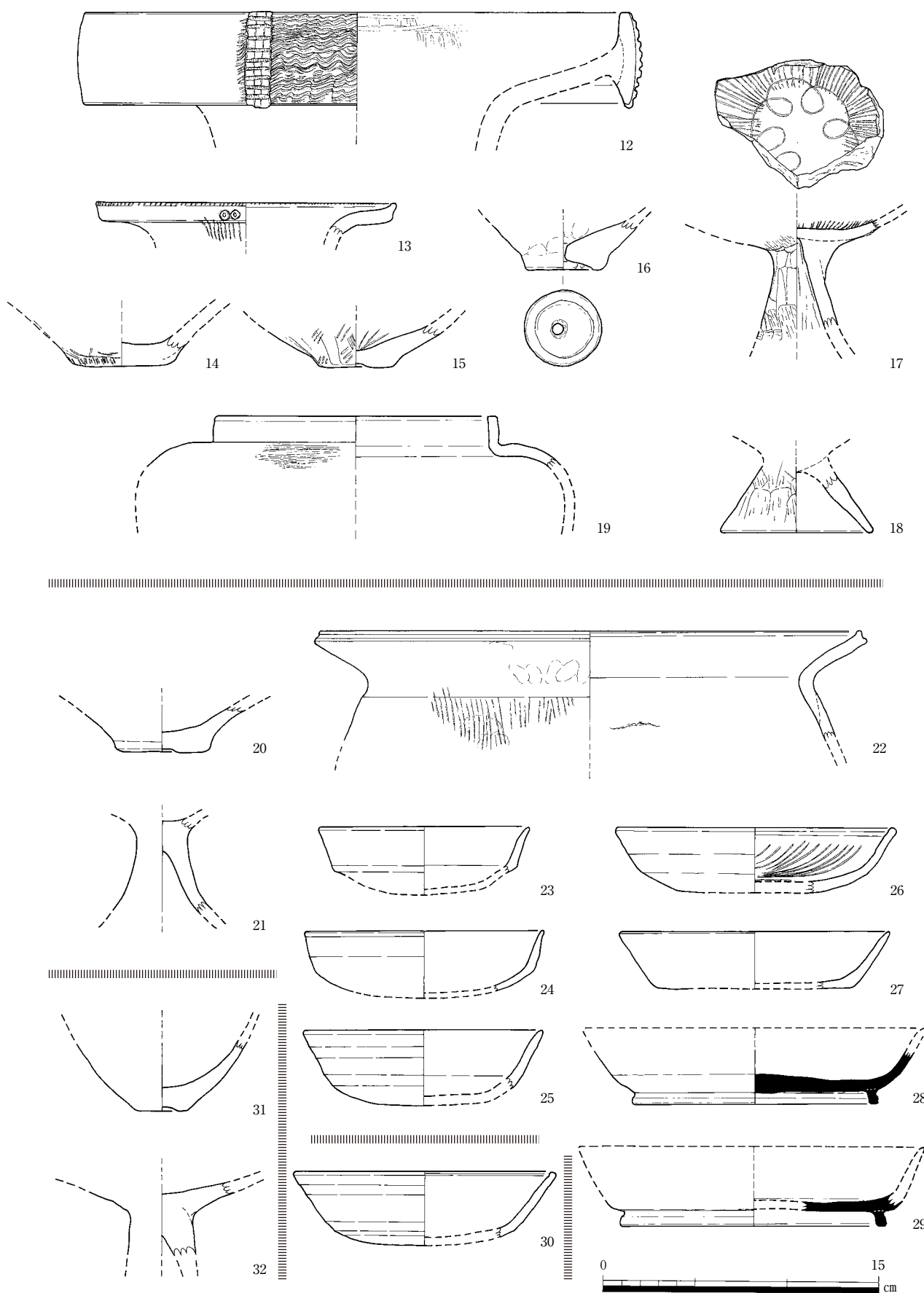


図38 纏向石塚古墳第3次調査出土土器実測図2 (1/3)  
 第1トレンチ 濠内堆積土：12～19 黒色粘土層Ⅰ 20～29 暗灰褐色土 30 濠内出土 31～32 床土

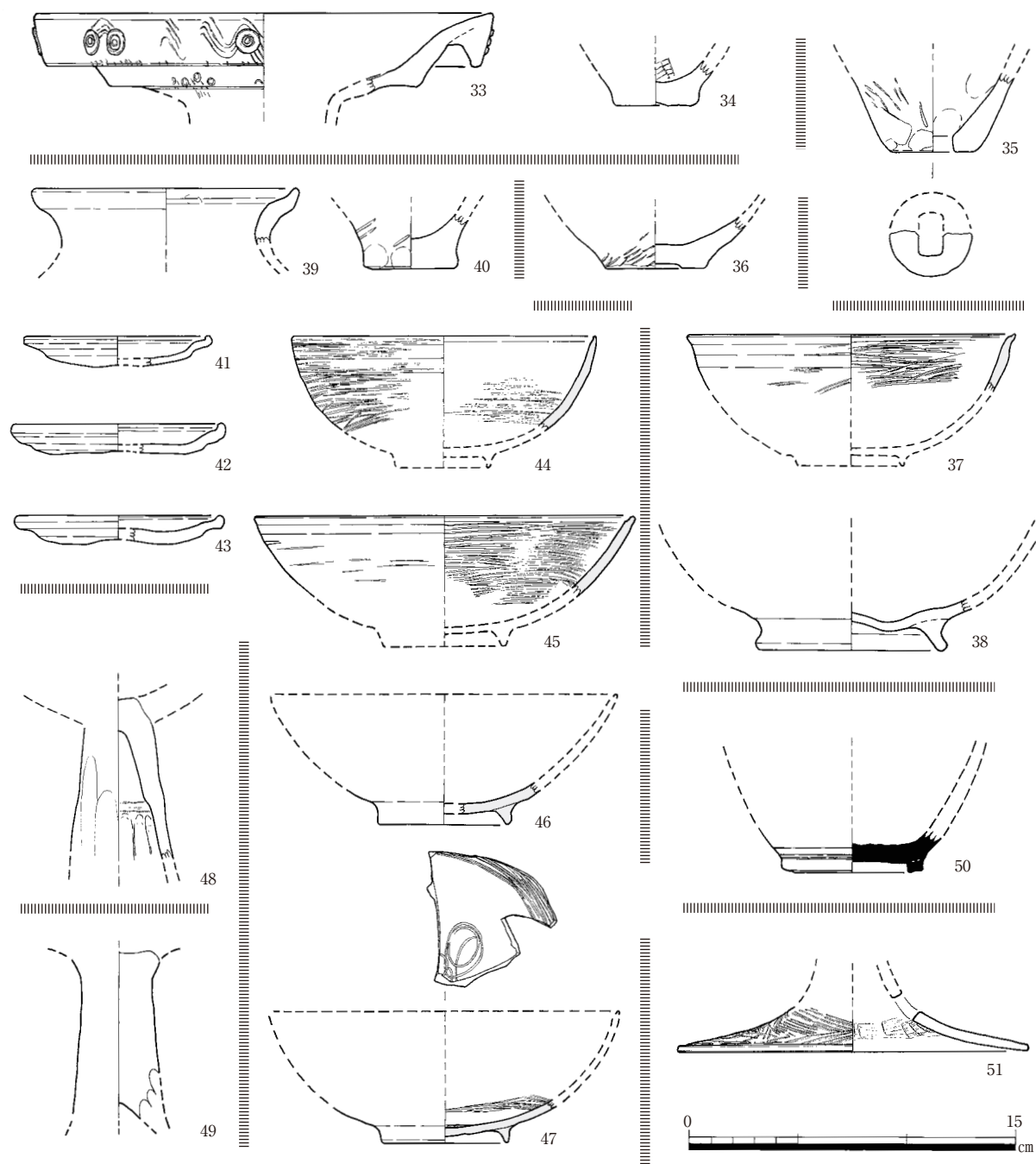


図39 纏向石塚古墳第3次調査出土土器実測図3 (1/3)  
 第2トレンチ：33・34 前方部前面溝 黒色粘質土（下層） 50 床土  
 第3トレンチ：35 S D - 02 36～38 S D - 01 上層 39～47 S D - 03  
 48 S X - 01 49 S X - 02 51 不明

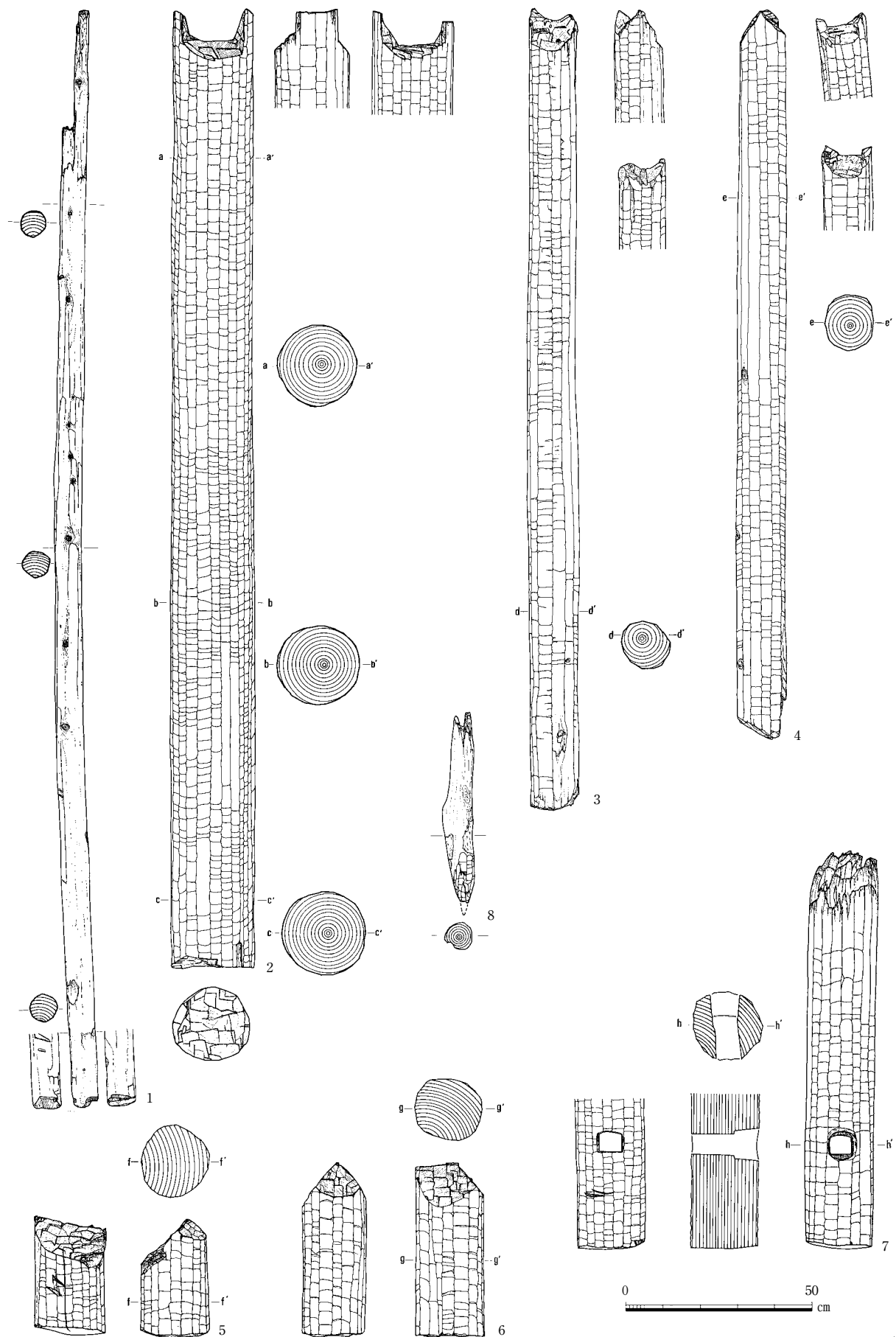


図40 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図1 (1/15)  
第1トレンチ 濠内堆積土：1～7 黒色粘土層Ⅱ 8 灰色砂層下面

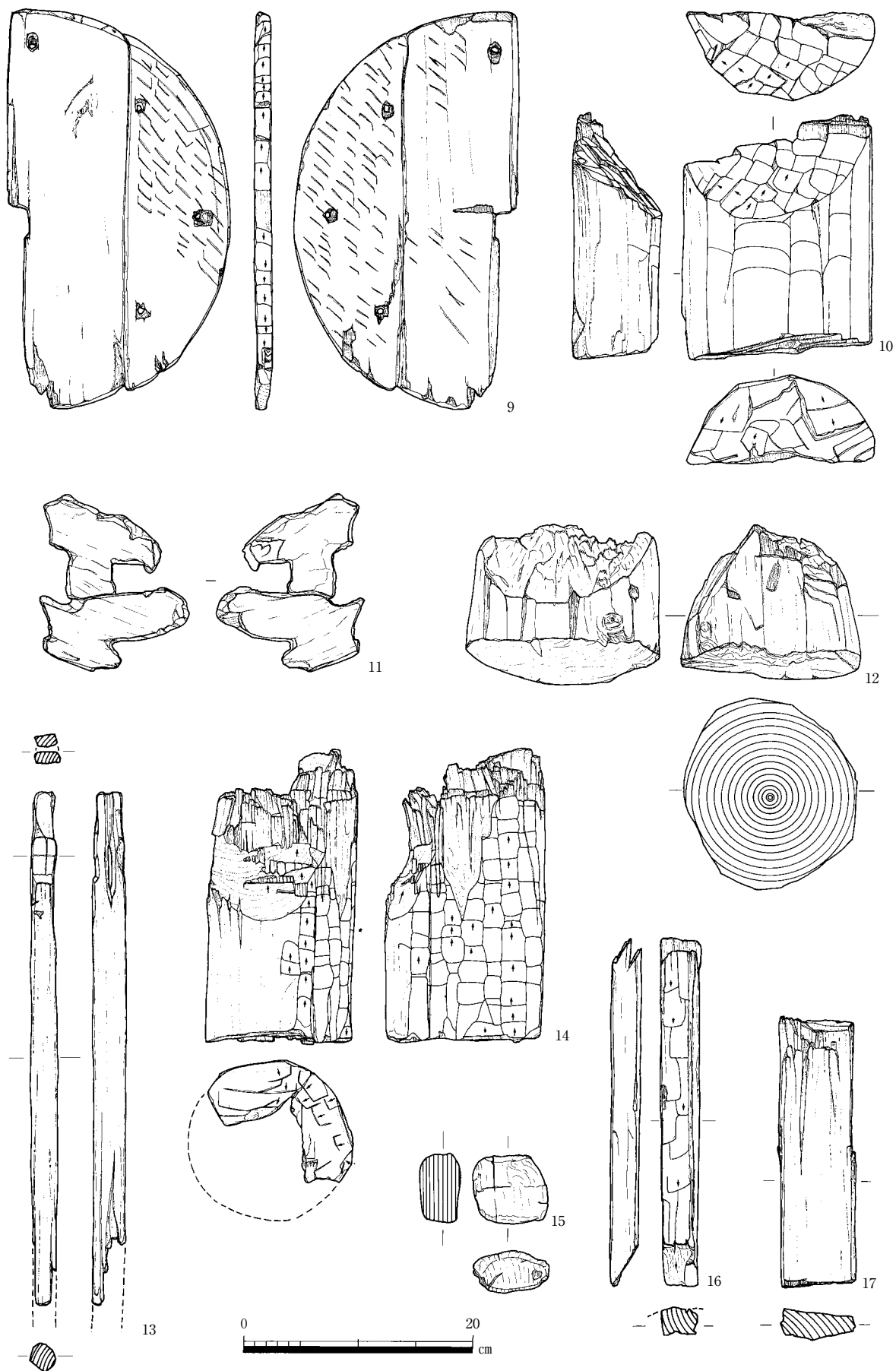


図41 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図2 (1/5)  
 第1トレンチ 濠内堆積土：10、15、17 黒色粘土層Ⅱ 9、11～14、16・17 黒灰色砂礫層



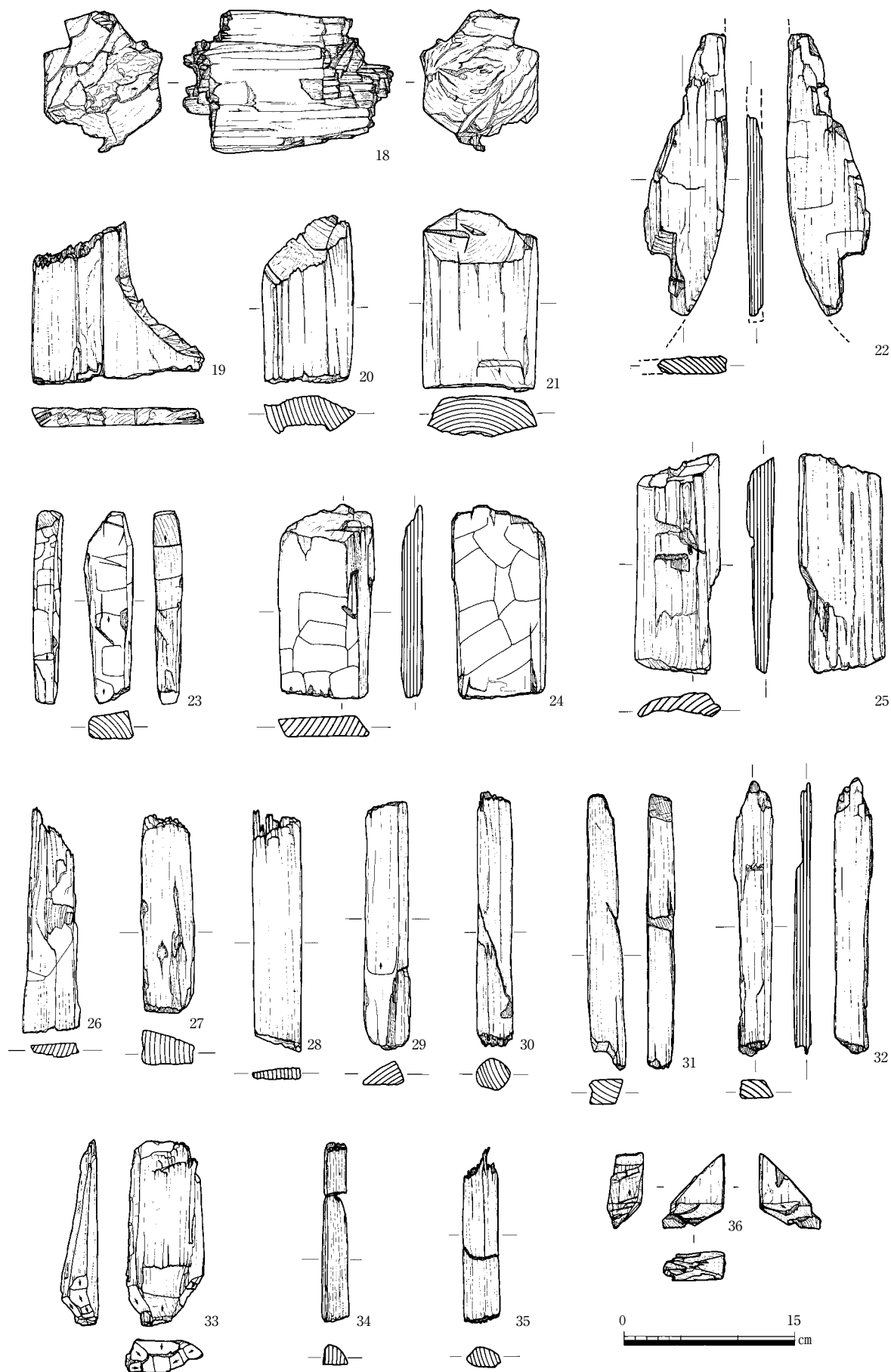


図42 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図3 (1/5)  
 第1トレンチ 濠内堆積土：18～23、26～36 黒色粘土層Ⅱ 24・25、32 青黒色粘砂層

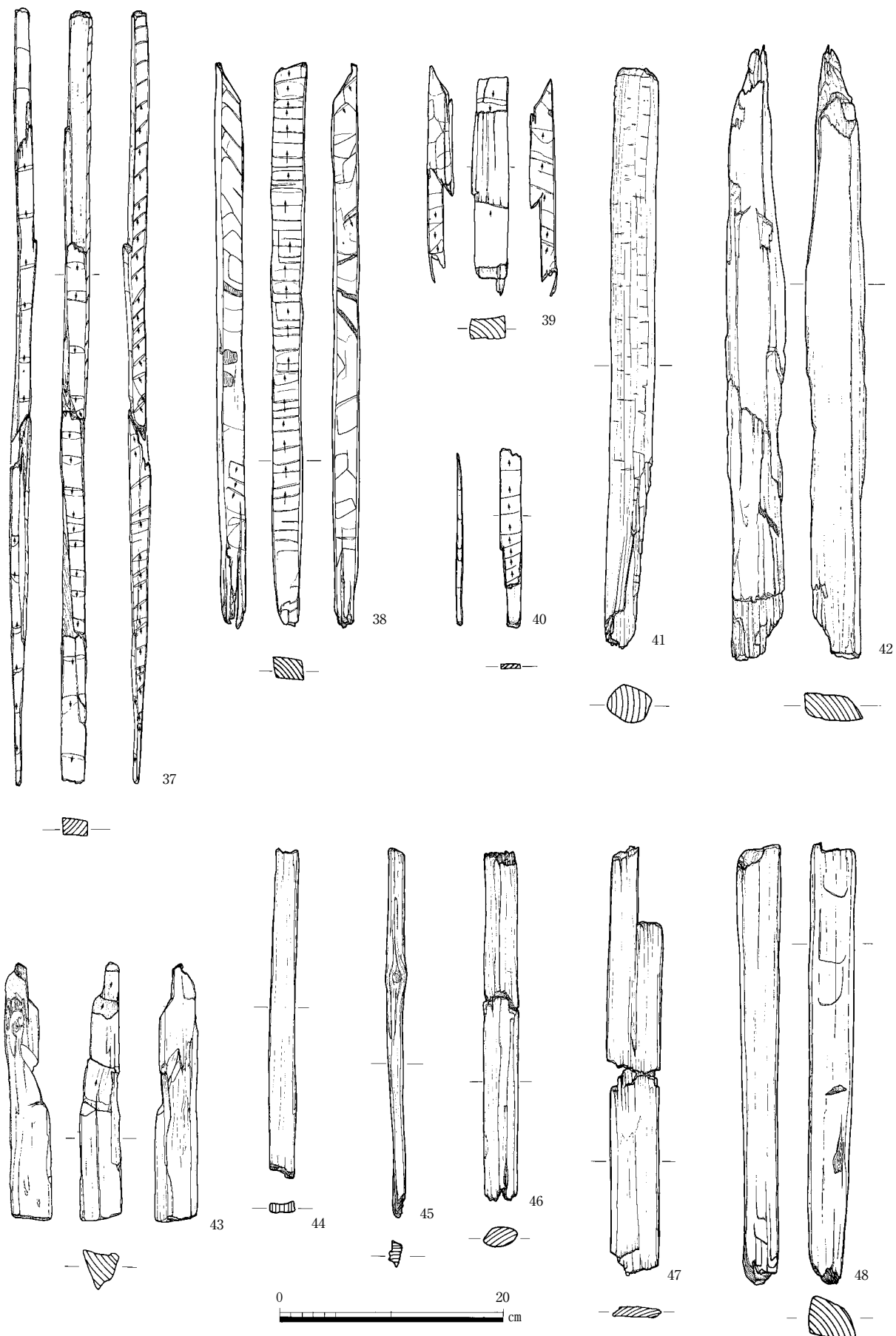


図43 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図4 (1/5)  
 第1トレンチ 濠内堆積土：37、39～47 黒色粘土層Ⅱ 38、48 青黒色粘砂層

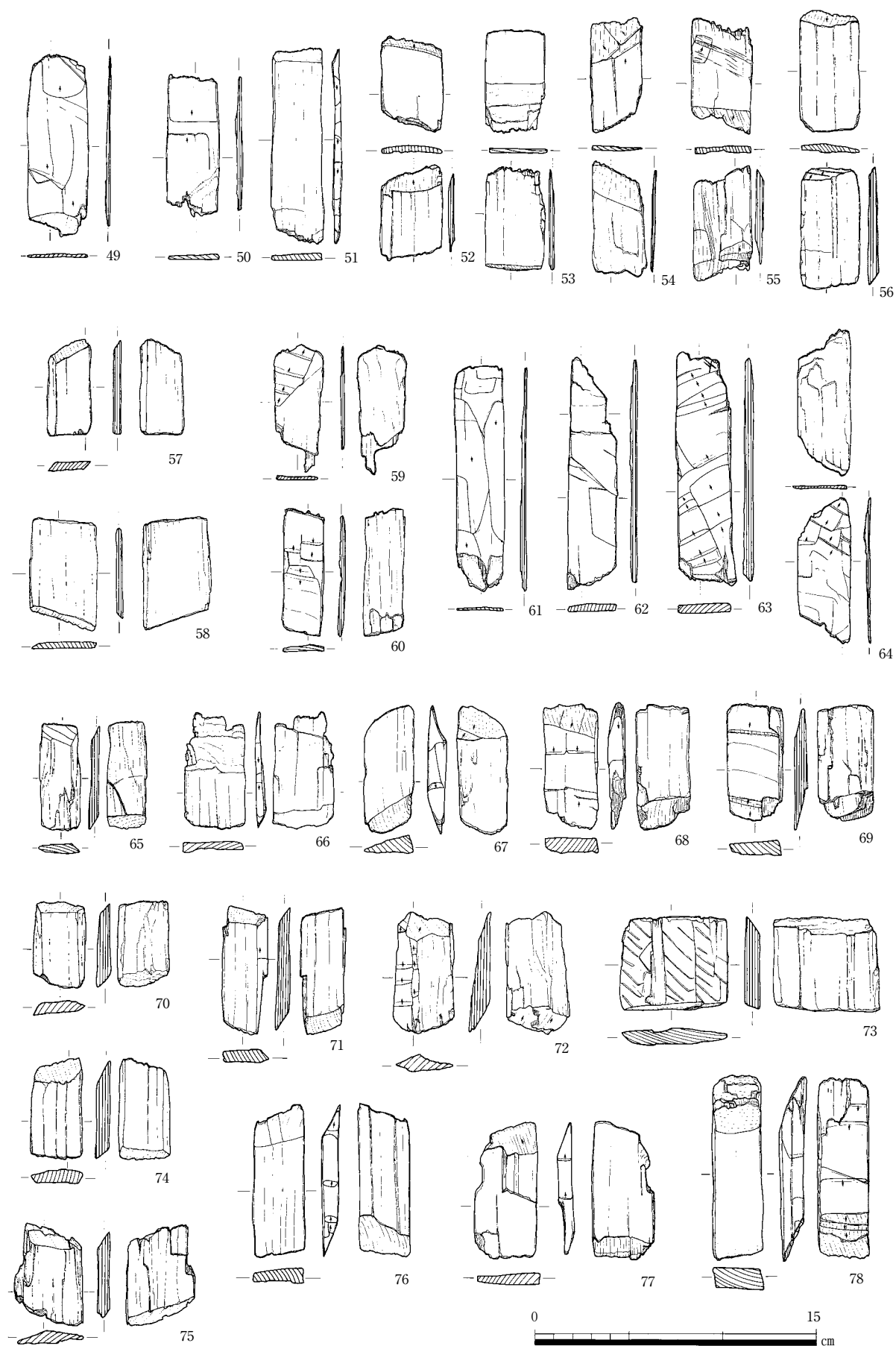


図44 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図5 (1/3)  
第1トレンチ 濠内堆積土：49~78 黒色粘土層Ⅱ

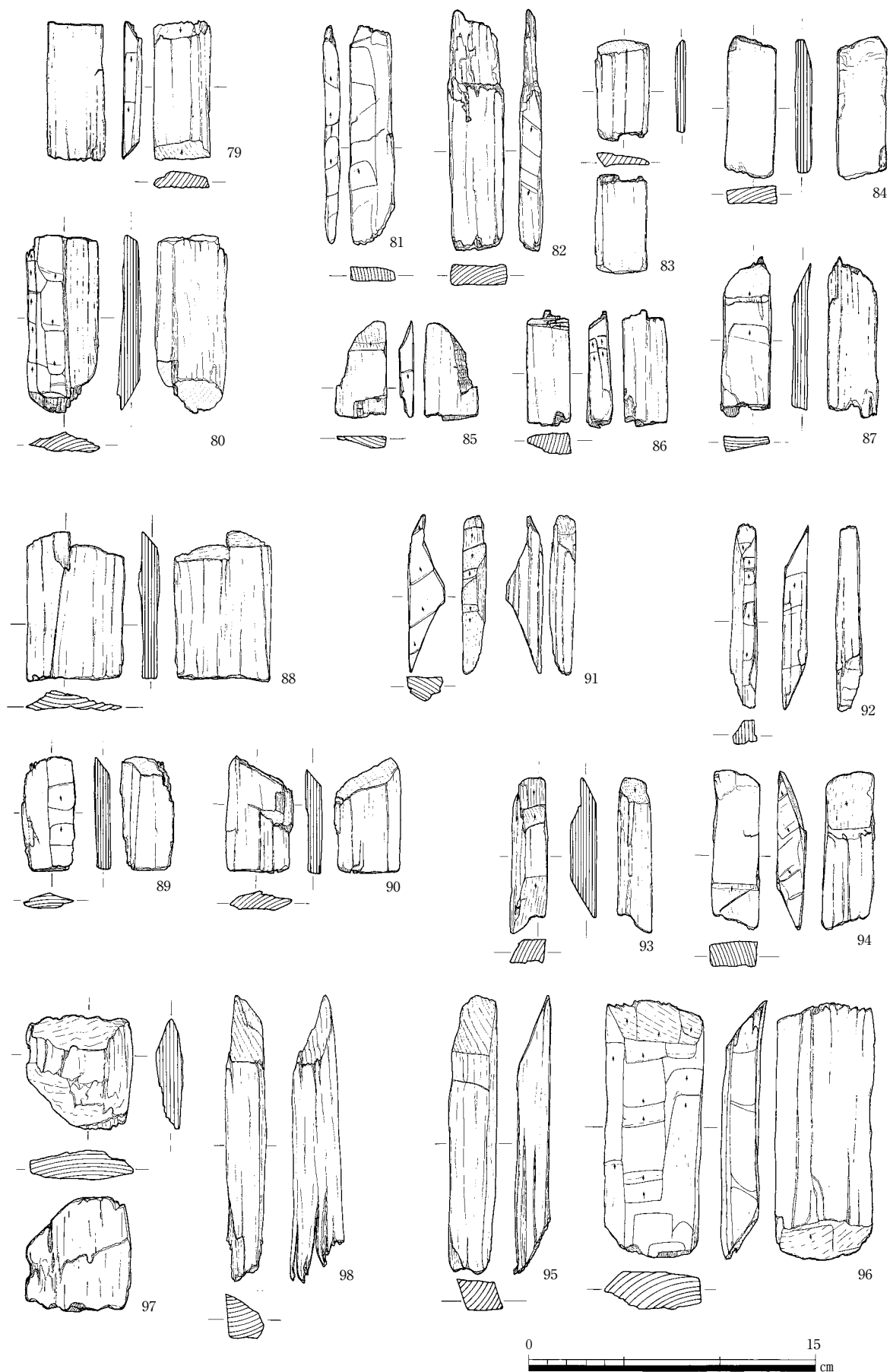


図45 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図6 (1/3)  
 第1トレンチ 濠内堆積土：79～87、89～98 黒色粘土層Ⅱ 88 青黒色粘砂層

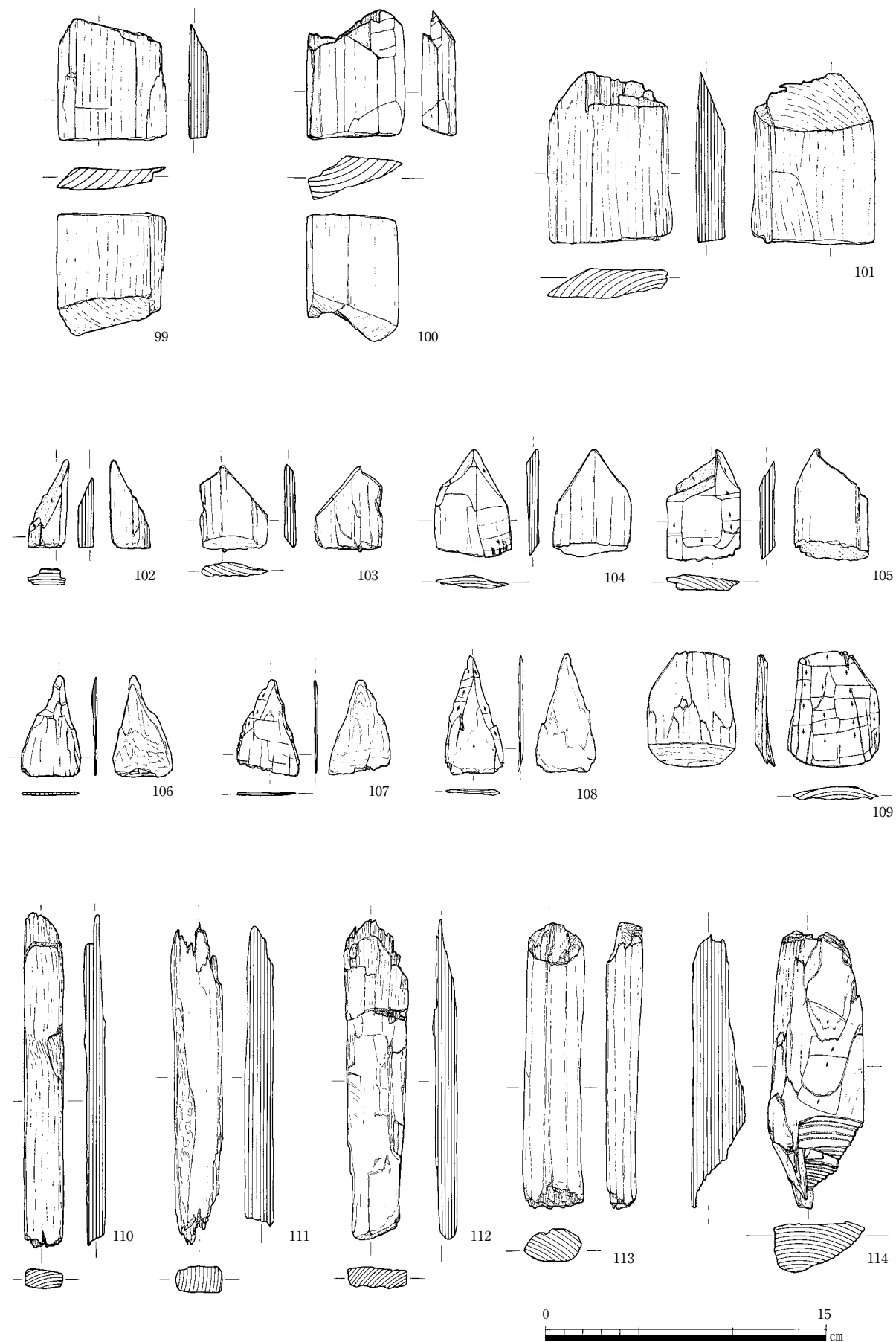


図46 纏向石塚古墳第3次調査出土木器実測図7 (1/3)  
 第1トレンチ 濠内堆積土：99～108、110～114 黒色粘土層Ⅱ 109 黒灰色砂礫層

## 第6章 纏向石塚古墳第4次調査報告

(纏向遺跡第55次調査報告)

### 第1節 はじめに

纏向石塚古墳の調査は、昭和46年から昭和51年の間に3次にわたって実施されているが、発掘調査は墳丘の西側と南側に限られていた。とりわけ第3次調査では現在墳丘が残る後円部から南東方向に張り出す前方部が確認され、初めて墳丘が前方後円形であることが確定されたことから前方部の形状や、周濠の形状、墳丘の規模等の早急な確認が期待されていた。

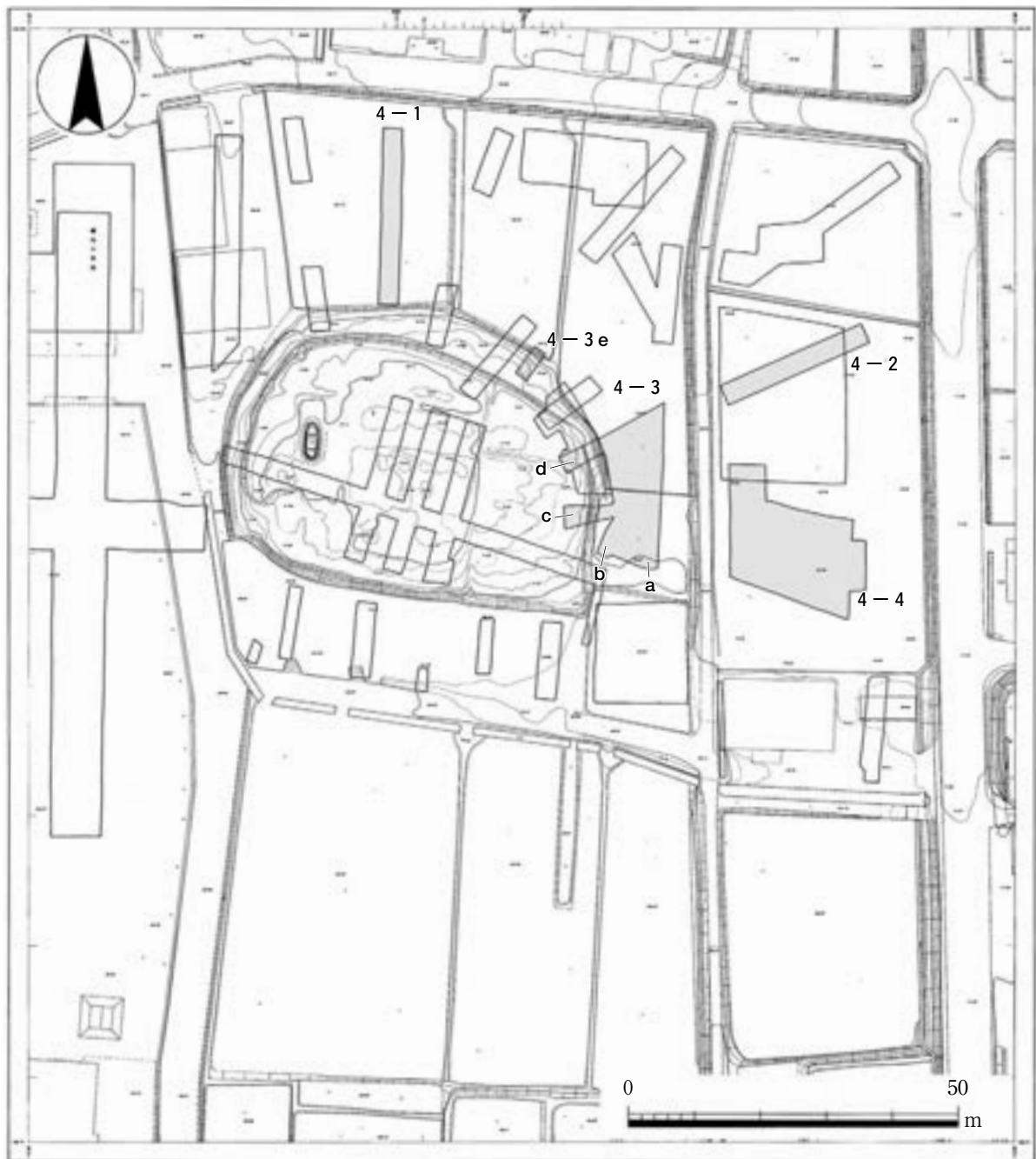


図47 纏向石塚古墳第4次調査地位置図（1／1,000）



こうして実に23年ぶりに、桜井市教育委員会によって纏向石塚古墳の前方部を中心とした確認調査が計画され、平成元年4月17日から6月17日にわたって第4次調査が実施される運びとなった。調査は桜井市教育委員会社会教育課の萩原儀征、清水眞一、奈良県立橿原考古学研究所の寺沢薫が担当した。

実はこの調査の空白期間には、纏向石塚古墳は保存整備を目指して（財）大和文化財保存会による用地買収が進められており、発掘調査はそうした纏向石塚古墳の保存整備事業に先だつ範囲確認調査として位置づけられ、纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと実施されたのである。

調査地点は、桜井市大字太田255-2番地ほかで、未確認部分であるクビレ部の北側と前方部前面部分、後円部の北側周濠に重点をおくこととなり、纏向石塚古墳の墳形と周濠形態全体を把握しようというものであった。調査方法は、既往の調査成果を補足することを目的とするため、クビレ部北側周濠以外は墳丘と周濠の確認をできるだけ上面で確認することとされた。その結果、第1・第2トレンチでは墳丘と濠の取り付き部分と濠外肩部を上面で確認した。

また第4次調査の主体をなす第3トレンチでは、前方部の形状と第3次調査までに確認した濠内堆積状態と時期の再確認を目的として、墳丘裾と周濠底までの発掘調査をおこなったが、既往の調査で認められた植物腐植土層下のいわゆる黒色粘土層Ⅱの堆積は確認できなかった。以下、調査地点（トレンチ）ごとの発掘調査の報告をおこなう。

## 第2節 クビレ部北側周濠の調査（第3トレンチ）

### （1）調査の概要

第3トレンチは第3次調査で検出したクビレ部の北側の状況を確認するために設定した本次調査では主体となる調査区である。調査区は、標高70.0mの等高線がわずかに前方部の隆起を残すと考えられる部分から周濠推定部分に、南北25.5m、東西約8mの矩形の調査区を設定し、前方部から周濠にかけて地山面まで全掘をおこなった中心部分（aトレンチと呼称）と、aトレンチから前方部に延ばしたbトレンチ、後円部墳丘に延ばしたc・dトレンチを補助トレンチとして設定し、必要に応じ拡張する方法をとった。

その結果、a・bトレンチでは前方部北側の裾線を検出した。cトレンチでは前方部と後円部の接点において後円部裾線が前方部北裾線とほぼ直交するような状態で検出された。

cトレンチは、クビレ部が推定される地点に、後円部の墳丘裾を確認するために設定した幅3m、長さ7.5mのトレンチで、当初の調査区（a・bトレンチ）では予定通りに墳丘裾が検出されなかったために、急遽設定した。その結果、墳丘裾は思いのほか現墳丘内に食い込んで検出され、現墳丘地表下1.7mにわたって10世紀末頃の整地・盛土地層がなされていることが判明した。しかし、地山直上の高さ50cmにわたっては本来の墳丘盛土と考え得る暗褐色の硬質の土層を確認した。

dトレンチは、後円部墳丘確認のために後円部北東裾に設定したトレンチ（幅3m、長さ7m）で、現在の墳丘裾より5.2m内側で本来の墳丘裾線を確認した。また、10世紀末頃の整地層は1.6mに及んでいる。また本来の墳丘盛土も高さ80cmにわたって確認したが、地山の高まりや成形の状況は認められ

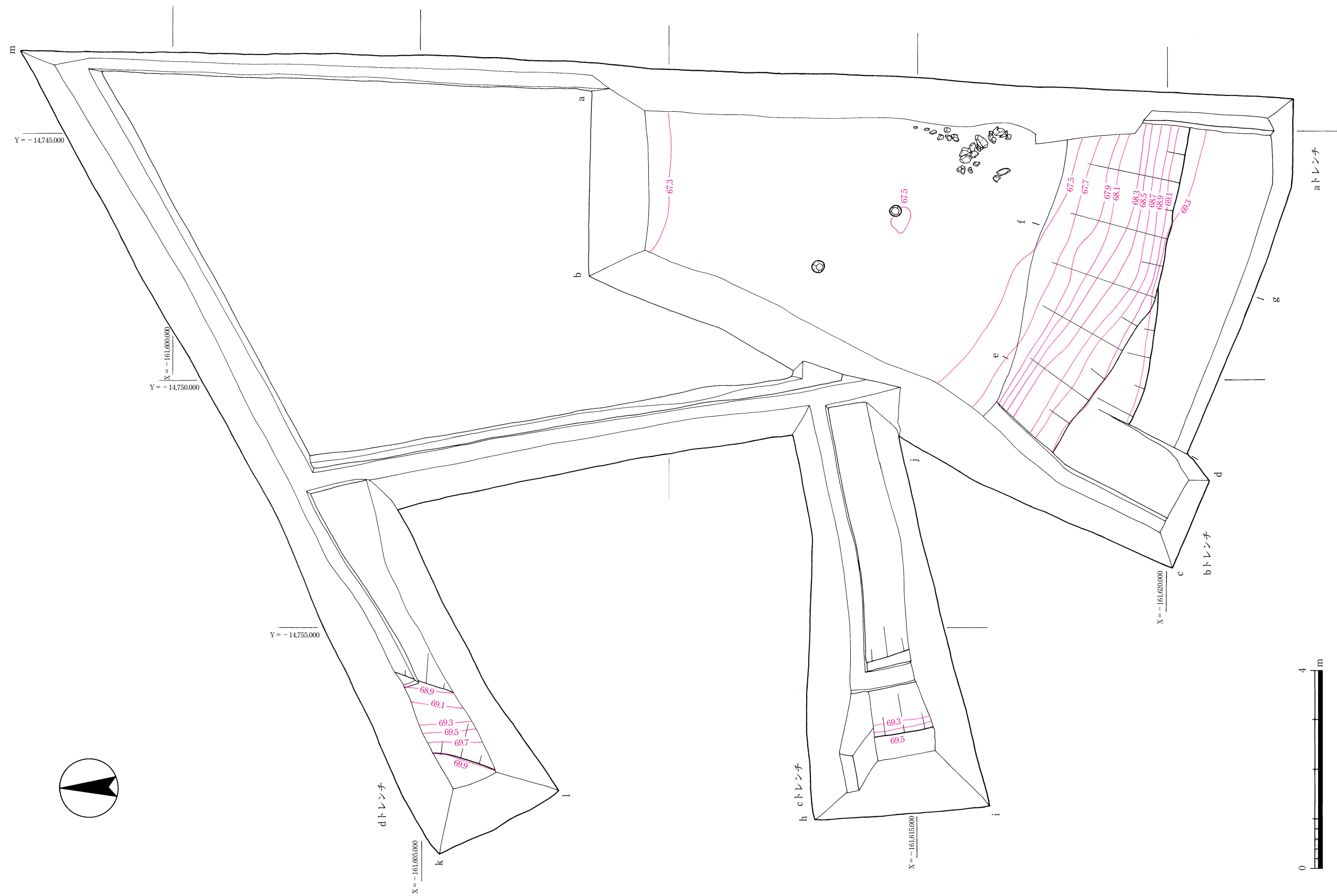


図48 4-3 トレンチ平面図 (1/80)

ない。

## （２）墳丘盛土の堆積状況とその時期

クビレ部北側の墳丘の堆積状況は、aトレンチのe—dライン、g—fライン、bトレンチ西壁（c—bライン）、cトレンチ南・西壁（j—iライン・i—hライン）、dトレンチ北・西壁（k—mライン・l—kライン）において比較検討した。

前方部の土層状況は、a・bトレンチにおいて検出できたが、後世の削平が著しく、現地表より70cmは11世紀以降の畑跡や水田跡によって攪乱を受けてはいたものの、地山上30～40cmにわたって、本来の墳丘盛土と考えられる暗黄灰色砂質の盛土層ないしはその崩壊土（31～38層）が確認できた。現状で確認できる盛土面は標高69.4mで、前方部の地山層（39～41層）上面の水準はほぼ69.0mである。

16～20層は本来の墳丘土上に盛り上げられた土壌で、あたかも墳丘盛土のように見えるが、それは暗褐色砂質土系土層（14・15・21・22層）の充填する溝状遺構による作業面のためであり、おそらくは11世紀以降の最初の水田化に伴うものであろう。また、11・12層で切断された作業面も後世（おそらく13世紀後半以降）の水田化によるものであろう。

なお、33・34層は墳丘盛土残存面からの掘り込み充填土であり、幅60cm、深さ1mにわたって掘削されており、墳丘形成時ないしは形成後に穿たれた土坑の可能性はあるが、その性格は不明である。

一方、後円部の墳丘盛土状況は、c・dトレンチにおいて把握できる。

cトレンチでは、20層のみが本来の墳丘盛土層であり、西壁の状況からは50～60cmの厚さで盛土されていることがわかる。炭化物と粘土ブロックが混入してよく締まっており、古式土師器細片が包含される。しかし、その上部の現状で墳丘を形成している土層はいずれも中世以降の二次的に盛土された土壌であり、中世以降、墳丘の縁辺部分に大きく手が加えられたことを物語っている。残存盛土の上面は標高約70m、地山（21・22・23層）上面は約69.3mと、a・bトレンチの前方部より高い。

dトレンチでは、44・45層が本来の墳丘盛土層である。前者は砂礫や炭化物細片が混入してよく締まっており、後者は炭化物や腐植土をふくむ暗（灰）褐色土で粘性が高く、やはり古式土師器破片が出土する。後者は現状で1.5mの厚さを示し、標高も70.8mと最も高い水準を記録している。墳丘下地山（46層）面の標高は69.3mと、cトレンチに大過ない

45層出土の土師器は4点が知られる。1はほぼ完形に近い小形の高坏で、坏部は明瞭な稜線をもって外傾して直線的に伸びる。明らかに庄内1式以降の型式的範疇に属する。2は甕底部、3・4は鉢底部で4は有孔鉢である。2～4は詳細な時期決定資料とはならないが、1は墳丘の形成が遡っても庄内1式段階であることを示しているといえる。

ここでも現墳丘縁辺部の盛土は明らかに中世以降の新しいことがわかる。本来の墳丘を削土した作業面には水田化の痕跡が幾重にも確認される。墳丘縁辺の溝状断面から、①39層 → ②37層 → ③28層 → ④24層 → ⑤22層という水田化の作業が確認できるが、それはそれぞれ、①40層 → ②38層 → 35層 → ③34層 → ④33層 → ⑤21・20層 → 19層という水田耕土の諸段階に対応している。



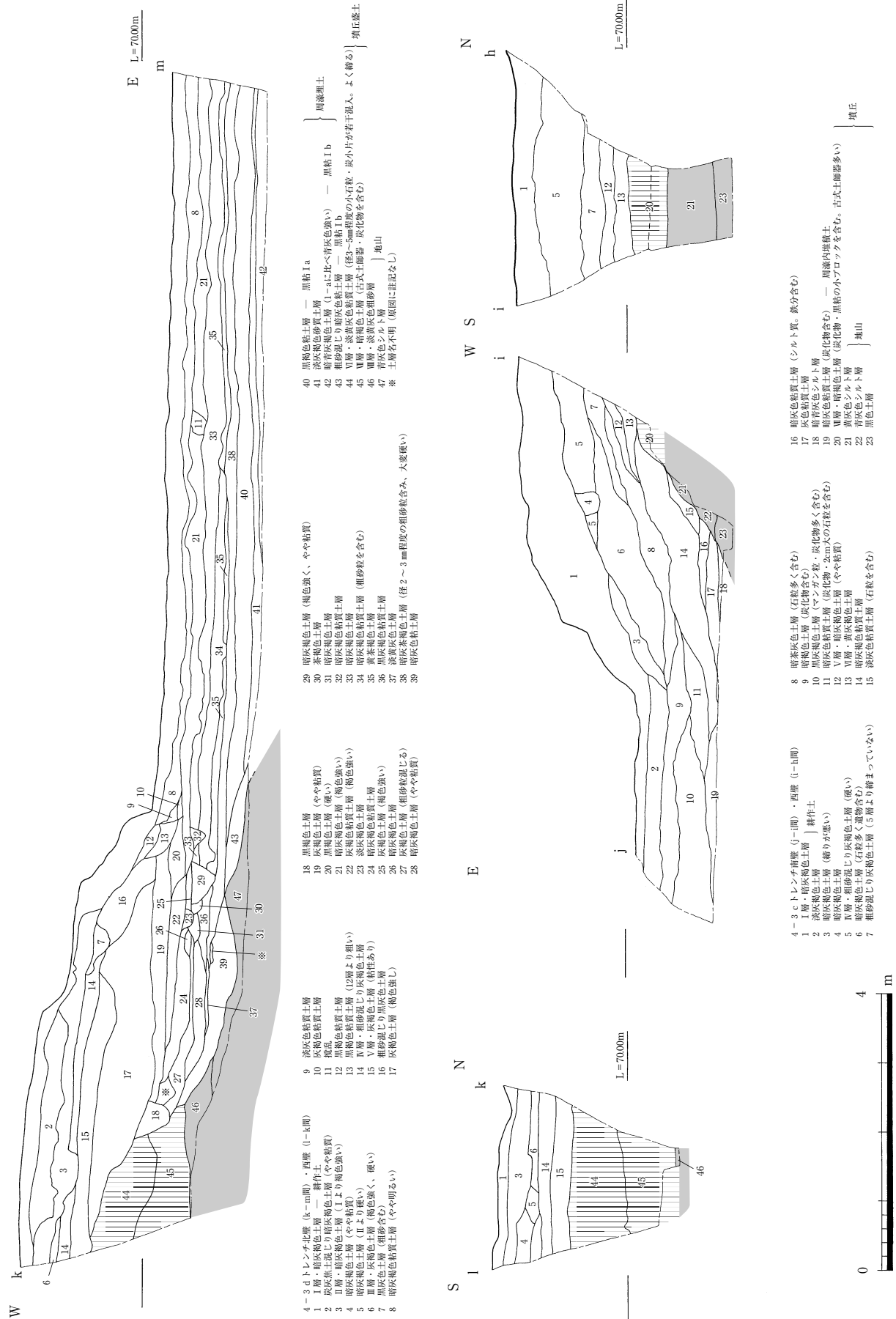


図50 4-3 c・d トレンチ断面図 (1/80)



この段階までの纏向石塚古墳後円部墳丘は、地山層の落ちるラインから勘案して、本来の墳丘一周濠上面ラインを5.2m後退したことになるが、この段階で再度、19層上面から墳丘が大規模に盛土されて、⑥水田化の作業面12・13層あるいは9・10層による水田耕土（8層）→そして現水田耕土（1層）へと継起的に展開したことがわかる。その時期は明確ではないが、出土した遺物の年代から中世末から近世の頃と推定している。

### （３）周濠の堆積状況とその時期

クビレ部北側（第3トレンチ内）の周濠の堆積は、dトレンチ北壁の延長を断ち割った部分（k—mライン）と、濠底までの主体的な調査を行ったa・bトレンチの西壁（前方部に直交して設定したbトレンチ西壁の延長c—bライン）、b—aラインにおいて検討し、東壁において比較検討した。c・dトレンチにおいては後円部墳丘下地山面と周濠堆積上面までの調査しかおこなっていないので、墳丘一周濠上面ラインを検出するに止まっている。

周濠の堆積土は大別すると、上から（青）黒（灰）色粘質土層Ⅰ（以下、第1～3次調査にならって「黒粘Ⅰ」と呼称）、→植物腐植土層（同、「植物層」と呼称）→暗青灰色シルト層であり、黄灰色ないし青灰色のシルトないしは灰色砂礫の地山に達している。

さらに、黒粘Ⅰは砂粒の量や有機質の分解度の差、炭化物の量などからa（23層）・b（24層）・c（25・26層）の3層に分層可能であり、それぞれ30cmほどの厚さでほぼ水平に計90cm堆積している。黒粘Ⅰcはさらに、上層（25層）と、粒子の細やかさや有機質分解度の高い下層（26層）に分層する。黒粘Ⅰ上面の標高はa・bトレンチで68.6m、dトレンチで69.6mと一定する。なお、dトレンチでは40層が黒粘Ⅰaであるが、前に述べた水田化①の耕土として利用されたものと考えられるが、直上の38層は暗灰茶褐色の粗砂を含む硬い土層であり、軟弱な周濠堆積土を耕土とすることの改善を目的として客土によって整地したものと考えられることができる。

植物層も本調査では分解度の違いから、腐植化の進行した上層（28層）と植物質残存物の多い下層（29層）に分層している。植物層も水平堆積が明瞭で、上下層とも約25cmの厚さで堆積している。最下層の暗青灰色シルト層は地山の砂礫や黒色粘土のブロックをふくんだ土壌で、5cmほどの厚さで濠底の所々で検出されるが、濠底全面に普遍的な存在ではない。

さて、クビレ部北側の周濠では、第2・3次調査で確認された最下層の黒色粘土層Ⅱ（以下、「黒粘Ⅱ」と呼称）は確認されていない。本調査区での周濠底最深部は標高67.3mで、周濠クビレ部交点から北東12mの地点にあたる。つまり濠底は調査区北に向かってわずかに低くなっていることを考えれば、クビレ部北側の北方未調査部分で黒粘Ⅱが検出される可能性は皆無ではない。しかし、古墳自体が東から西へ、北から南へわずかに傾斜する微地形と周濠の範囲から考えて、黒粘Ⅱが北側クビレ部周辺に明確に堆積する可能性は薄い。おそらくは北側周濠では後円部の北側から西方にかけて分布するのであろう。

黒粘Ⅰの形成年代は、出土土器を見る限りa～cで異なる。黒粘Ⅰcはほとんどが古式は時期の細片で占められる（31～47）。布留形甕口縁部（36～38）や底部（45）から見て布留0式土器がほとんど考



えて大過あるまい。下田所式ないしは亀川上層式相当の型式の特徴をもつ吉備形甕（32・33）もほぼ併行するであろう。しかし唯一細片とはいえ須恵器壺の口縁端部（48）があることから、古墳時代後期と考える。この点は、先行調査の黒粘Ⅰの形成時期を6世紀代としたことと矛盾しない。

黒粘Ⅰbの高坏脚部（49）と円筒埴輪片（50）も後者の時期から6世紀代のものである。ところが、黒粘Ⅰaには大量の土師器埴（55）、土師器小皿（56～61、64、65）、土師器甕（62、67～72）、土師器移動式竈（73）、土師器釜（羽釜：74）、須恵器壺口縁部（75）が出土しており、7世紀から10世紀末ないし11世紀初頭と考えられる。このことは周濠堆積の最上層である黒粘Ⅰの上部がこの時期に攪乱されていたことを示しており、前項で指摘したように、それは水田化に伴う行為と考えることができよう。ただし、水田土壌とすれば量的に多いことを考えれば、第4トレンチの調査で報告するように、この時期の水田隣接地における宅地開発との関係も考慮すべきかも知れない。

さらに周濠堆積土を覆う黒褐色土、黒灰色土（dトレンチ）や暗灰色粘質土（b・cトレンチ）からも、多数の土師器小皿（81・82・93～99）、土師器甕（78・79・88・89・105～109）、土師器釜（羽釜：110）、黒色土器埴（84・85・86・100・102・103）、瓦器埴（87）、灰釉陶器皿（104）、須恵器小壺（111）が出土している。その時期は、10世紀末から13世紀後半におよぶ。これも前に述べた古墳周辺（周濠と墳丘）のその後の開発状況を示しているであろう。

#### （4）周濠内の遺物出土状況と堆積状況

第3次調査の報告でも述べたように、黒粘Ⅰは6世紀における人為的な周濠埋設によって形成された可能性がある。従って、古墳周濠の自然埋没状況を示す層は植物層より下であるが、黒粘Ⅱが欠落するため出土遺物のほとんどは植物層から出土したものである。ところが、第1～3次調査の植物層からは5世紀代以前の土器が出土しているにもかかわらず、本調査では須恵器はもとより5世紀代の土師器の出土は皆無であり、細片の一片すら出土していないという現状がある。そればかりではなく、後述するように明らかに布留1式と考えられる土師器も植物層下層には存在しないのである。

植物層出土の遺物は土器、木製品、植物自然遺体（種子など）である。図51は植物層（上層：28層および下層：29層）と最下層の暗青灰色シルト層（30層）の出土状況を示したものである。

そこから、3点の完形に近い広口壺（9）、二重口縁壺（26）、小形丸底鉢（30）は、前方部裾から1mほどのところに転落するように出土しており、クビレ部に近い前方部側からの投棄の色彩が強い。また、木製品も長さのある建築部材や棒状の木製品、鋤、板材などをみると、多くがクビレ部から前方部にかけての墳丘側線に沿うように出土していることがわかる。木製品もまた、クビレ部の前方部側から投棄された状況が想像されるのである。

とくに、調査区の南東隅の周濠の前方部裾にあたる部位では、拳大から人頭大の石25点とともに、丹塗りの棒、横槌、加工木などの木製品が集中して出土している。石の出土はごく部分的であるがやはり前方部に沿うようであるから、祭祀的行為に伴う祭具や設えの一括廃棄が想起される。こうした石の出土状況や数量は第3次調査のクビレ部南側周濠内の石の出土状況とも通底するところがあり、前方部クビレ部付近での南北周濠それぞれへの投棄行為を想起するのである。同様に、前方部裾から

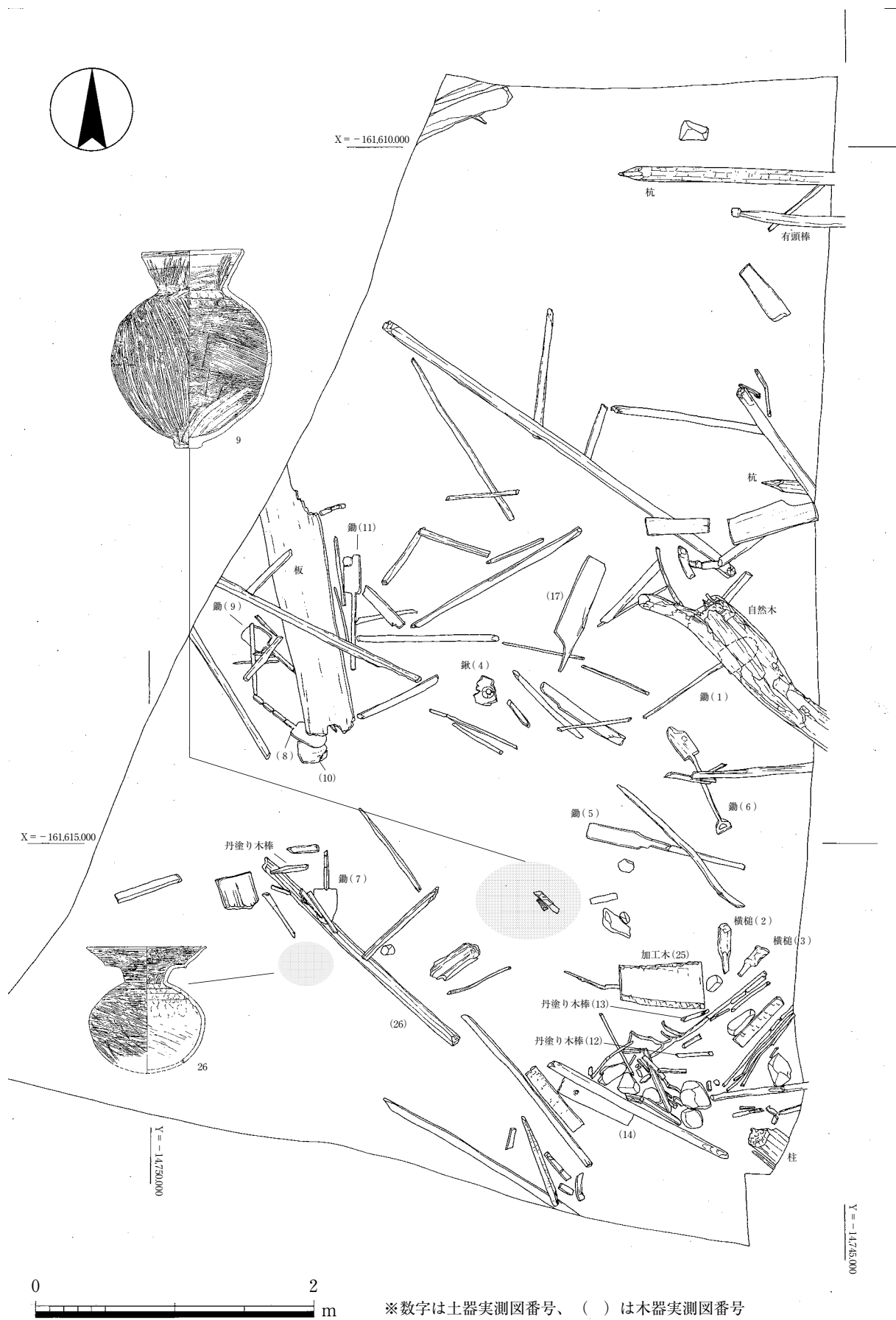


図51 4-3a トレンチ クビレ部周濠内遺物出土状況図 (1/40、土器は1/8)

約3mのライン上では、鋤5点と鍬1点の木製土木・開墾具が並んで一括出土している。やはり祭祀時の一括性の反映であろうか。

なお、濠底では径20cmのピット2基を検出している。わずか2基ではあるがこれも墳丘のクビレ部裾から1.5m離れたラインに位置するのではないかと想像する。第3次調査の周濠底では、臍穴を有した立柱の基部と径50cmの柱穴の検出があったが、前方部北側では深さ10～15cmのごく小規模ではあるが、立柱穴の可能性も無視できない。

このように、クビレ部北側の周濠内では南側周濠の黒粘Ⅱはまったく欠落するものの、南側周濠の遺物出土状況と同様の各種の建築部材や土木・開墾具類、祭祀的色彩の濃厚な木製品や土器が、植物層下層を中心にプライマリーな状態で面的に検出されているのである。とすれば、黒粘Ⅱや暗灰色砂礫層などの形成が植物層の形成よりも相対的に先行することは明らかであるとしても、前者に属する遺物こそが纏向石塚古墳の築造時期を示す資料であって、前方部北側周濠内の植物層下層の一群の遺物を黒粘Ⅱの遺物群よりも新しくみるべきであるといった固執した考えは再考せざるを得ない。クビレ部北側周濠において黒粘Ⅱが欠落するのであれば、あくまで濠底のプライマリーな遺物群を南側と同様の目線で総合的に判断する必要があると言えよう。

ちなみに、クビレ部南側周濠（3次）調査の最下層で確認した暗青灰色の砂質土層は、北側周濠の最下層である30層と対応するのではないかと考えている。

#### （5）周濠内の遺物

##### 土器

土器の内訳は、前に掲げた3点の完形に近い土器のほかは破片ばかりで、壺5点（複合口縁壺口縁部：6、口縁部10～12、底部：13）、甕14点（口縁：8・14～18・27～29、底部：5・7・19～21）、小形丸底壺（鉢）2点（22・23）、小形器台脚部1点（24）である。これらの土器を層位的にみると、最下層（30層）出土の土器群と植物層下層（29層）出土のものは弥生形甕、庄内形甕と考えうる胴部破片を含むものの布留0式古相に属し、様式的な差はないと考えざるをえない。

広口壺（9）は淡い黄灰色ないし乳白色を呈する。越前地方からの搬入品の可能性が高い。胎土や色調からすると、10の広口直口壺や布留形甕（15・16）なども越前地方の可能性はある。18の甕は黄橙色の胎土で阿波地方からの搬入品であろう。また、最下層（30層）出土の複合口縁壺口縁（6）も越前地方かもしれない。受口の有段口縁甕（8）は近江北部からの搬入品である。

これに対して植物層上層（28層）の土器群は、胴部最大径が過半部にあり偏球状を呈する二重口縁壺（26）、口縁部全体が肥厚して内湾し、肩部横位のスリナデを放棄した布留形甕の主流化などから布留0式新相ないしは布留1式に属する。北側周濠へ投棄された土器は最下層と植物層下層によってまず被覆されたものと考えられるのである。

##### 木製品

すでに述べたように、3a・bトレンチの植物層および暗青灰色シルト層からは夥しい量の木製品が出土している。その種目は、土木・開墾具類（鋤・鍬）、農具（横槌）、槽、柱材、板材、杭材、棒状

材、加工材断片、削屑などである。

土木・開墾具類には鋤と鍬がある。鋤は8点あるが、その内訳は一本造りの直柄鋤（1・6・7・8・9・10・11）と、着柄鍬（5）である。前者はいずれも先端を円く整えスコップ状を呈する。6・9は把手部まで残存しており、復元長は約90cmにおよぶ。6の鋤身の基部には4×2cmの長方形内に中央を残して2孔が穿孔されている。踏み込み用の棒板を装着するためであろうか。5は柄に装着した状況で出土したが、柄は保管中欠損している。

鋤の刃部はいずれも使用によって磨滅している。しかし、柄部の折損がないのであれば使用に給することも可能なはずであるにもかかわらず、これだけの数がまとまって投棄されていることは、古墳造営に関わった用具（当然、祭祀的行為をとまって）の一括遺棄と考えることもできよう。

鍬は1点が出土している。直柄平鍬の風呂部臍部分（4）であろう。

農具には横槌2点（2・3）があり、いずれも使用痕が認められる。なお、以上の土木・開墾具、農具類はいずれも植物層下層のほとんど濠底に接して出土している。

容器としての槽（18）はかなりの大形品と考えられるが、直線的に伸びる平縁のごく一部であるため全体の形状は明らかにならない。内面は緩やかに内湾する。

柱材は2点あり、1点は直径26cmの太柱で、その大部分を調査区の東壁奥に陥入した状態で出土した。表面をていねいにウリ削りし、検出された基部は、第3次調査でも検出された棟持柱ないしは通柱などと同様の、3～4方向から山形に切断された状況が見られた。柱材は原位置に遺存させた。26は径7.6cm、長さ約180cmの細柱である。前面ウリ削りを施しているが各所に節が残り、前者ほどていねいな作りではない。柱は上下端で切断痕があるが、下端より約80cmと140cm付近に長さ約10cm、幅約7cm、深さ約2cmの手斧による抉入をもつ。軒桁材あるいは垂木材などとの結合・束縛のためであろう。

板材は多数出土している。うち、14はていねいな手斧痕を残す板面に円孔が穿たれており、縦2面は切断されているが、横1面は断面がV字形になるほどの切断である。よほどの力が加わったのであろうか。赤色顔料の塗布が認められる。15も板状の木片であるが、手斧痕は極めてていねいである。完形と考えられるが一部破損している。

17は大形の板材で一方向に円弧上の切り込みをもつ。板面は手斧痕をていねいに消しており、片面に線刻、片面に直線的に連なる小孔列が数条みられる。側辺には一部突出部があり、材を受ける覆いのような建築部材ないしは調度品材と考えられる。20も板材の一部と考えられるが、やはり両面に直線的に並ぶ小孔をもつ。21は矢板であろう。

25は大形の加工板材である。長辺の一側面は角を面取りして調整しているが、端辺は切断、他の一長辺は折断している。表面には手斧痕を残す。本板材は光谷拓実氏からの要請で年輪年代資料として萩原を通じて供され、その結果が公表された資料である（第12章 第4節に収録）。

杭材は2点を確認している。いずれも径10cmで東壁に陥入しており採取できていない。長い方は1.5m分を確認し、杭としてはかなり長大なものであろう。表面はていねいなウリ削りを施していることから、単なる土木用材ではなく何らかの施設に伴うものであろうか。



棒状の丸太材には、径6.6cm、長さ3mを超える27がある。一端は切断痕がみられるので、本来はさらに長い材であったと考えられる。有頭棒としたものは東壁にそのほとんどを陥入した状態で長さ70cm分出土した。径約7cmの断面円形で、表面はていねいにウリ削りを施す。採取はできず実測図はないが、おそらくは2m前後の天秤棒であろう。

16は角材、24は角棒。丹塗りの棒状木製品は3点出土したが、2点を図示する（12・13）。12は一方を鋭利な刃物で斜位に切断され、13は折断される。19の棒状木製品は方形孔を穿孔する。

以上のほかにも板材、棒状材、加工材断片、削屑などが多数出土している。板材や棒状材には調査区の壁に陥入しているため取りあげることができなかった木材も少なくない。また、木製品には保存状態が思わしくなく、極度の劣化や紛失等によって図化されなかったものも一部にはある。とくに棒状の木製品や板材、加工材断片、削屑、切片の類はほとんど報告できなかった。ただ、これらの木製品や加工材断片には一部に赤色顔料が付着したものがあり、木工作業の工程で赤色顔料が使用されていたことが考えられる。さらには往々にして火を受けて炭化した部位を残すものもある。周濠への投棄に先駆けて何らかの火を伴う祭祀行為が存在したらしいことも記録しておきたい。

### 第3節 前方部北東隅の調査（第4トレンチ）

#### （1）調査の概要

第4トレンチは、前方部の北半から北東隅、さらには前方部前面の状況を確認するために設定した。その結果、調査区の南半で前方部北東隅部分の墳丘部を検出した。しかし、周濠については当初から完掘しないことを旨としたため、後述するように、前方部前面の一部と周濠の北東隅部分（導水遺構）を除いて、その堆積状況や深さ、あるいは前方部裾については確認していない。

第4トレンチは当初、表土下約70cmの整地土層上において中世遺構面を検出したため、この面での遺構検出を徹底した。整地土は砂礫を多く含む暗灰色土（23層）を基盤とし、西部の暗灰褐色土（7層）、灰褐色土（8層）、東部では灰褐色粘質土（25層）、暗灰褐色土（26層）、灰褐色土（27層）、暗茶褐色土（28層）などで構成され、土器片を若干包含している。

しかし、この時点ですでに前方部の微高所の一部が露呈した状況にあり、また周濠の西よりの深い部分の状況が上層に反映し、検出当初は周濠が前方部前面の左右隅で切れる状態ではないかとの感があった。そこでトレンチ南半の整地層を20～30cmにわたって、前方部推定線に沿って地山面まで掘り下げたところ、前方部前面を囲繞するように周濠が存在することが明らかとなり、前方部北東隅も明瞭に検出することができた。また同様に、周濠北東隅の外肩線の一部も確認できたことから第2トレンチで確認した周濠外肩線との関係によってその周濠形態も復元可能となった。

#### （2）周濠北東隅の調査と出土遺物

##### 前方部の北東隅

北西から南東に延びる纏向石塚古墳前方部北東隅角の北側線を約10m、前方部前面を約5mにわたって検出した。前方部は後世に大規模な削平を受け（これは周辺調査の状況から勘案して、おそらくは

10世紀末～11世紀の耕地開発に深く関係するものと考えている)、その後改めての宅地化によってさらなる削平を被った可能性がある。その時期は、後述するように10世紀末ないしは11世紀初頭のことなのであろう。

前方部隅角はわずかに撥形に広がるように見えるが、纏向石塚古墳の前方部の「撥形」の測線の変換点はむしろ、第3次調査との間にある農道付近であり、本調査区における端部の開きは撥形に開いたなかでのさらなる膨らみといったことになる。前方部上の地山面の残存標高は前方部前面端と南壁付近が最も高く69.5mを測る。

#### 前方部前面の周濠と出土遺物

前方部前面の周濠部分については、南壁に沿って設けた幅2mの試掘坑によって濠底まで掘り下げた。その結果、前方部の前面濠は幅4.8～5m、深さ約60cm程度の浅い溝状の掘り込みであり、その規模や方向から、第3次調査の第2トレンチで検出した溝状遺構に連なるものであることが判明した。

堆積層は上から、黒褐色土（29層：「最上層」と呼称）→黒褐色土（30層：「上層」と呼称）→黒灰色砂質土（33層：「中層」と呼称）→黒色粘土（34層：「下層」と呼称）→青灰色粘質土（38層「最下層」と呼称）→地山（43～49層：黄灰色ないし黒灰色の粘質土）である。

ところが、断面図を見ると、前方部側と周濠外岸壁の立ち上がりには差が見られる。前方部側では淡黄色土混じりの灰褐色粘質土（25層）や灰色砂礫層（42層）を切って、標高69.8m付近で立ち上がっているのに対して、外岸壁部分では、周濠内最上層にあたる黒褐色土（29層）が周濠外へとオーバーフローし、周濠の掘り込みは黒灰色土層（39層）上面の標高69.5m付近となっていることである。

このことは、25層と42層がわずかに盛土を残している可能性を物語っている。大規模な削平を受けながらも、墳丘を有していた前方部と周濠外部とは、わずかに削平の度合いに差があったのであろうか。従って、濠底は最深68.9mを計測しているけれども、前方部残存頂高との水準差は90cm、外部残存高層上面との水準差は60cmということになる。

なお、今調査における周濠堆積層の黒褐色土（30層）は、第3次調査の前方部前面周濠堆積の黒褐色砂質土（3-2トレンチ 6層）に、黒色粘土（34層）は黒色粘質土（同7層）に対応するものと考えられる。とすれば、第3次調査の前方部前面の周濠底はあと20cm（暗青灰色粘質土：38層）ほどで濠底に達することになる。また、灰褐色粘質土（25層）や灰色砂礫層（42層）も、第3次調査では周濠を覆う灰褐色土（同4層）ということになる。

前方部前面周濠内からは、下層より広口壺口縁（163）と布留形甕口縁（164）が、中層からは二重口縁壺口縁（165）、布留形甕口縁（167～170）、小形器台脚部（176）、円筒埴輪片（177・178）が、上層からは須恵器高坏坏部片（180）が出土している。前方部においても最下層の堆積が布留0式段階であることが明らかであろう。

このように周濠の堆積は、他の調査地点と同様に6世紀にはかなり進行していたことがわかるが、最上層からは土師器小皿や甕が出土しており、前面の溝もまた10世紀末には埋没を終えていることが明らかとなった。整地地業に伴う行為であろう。



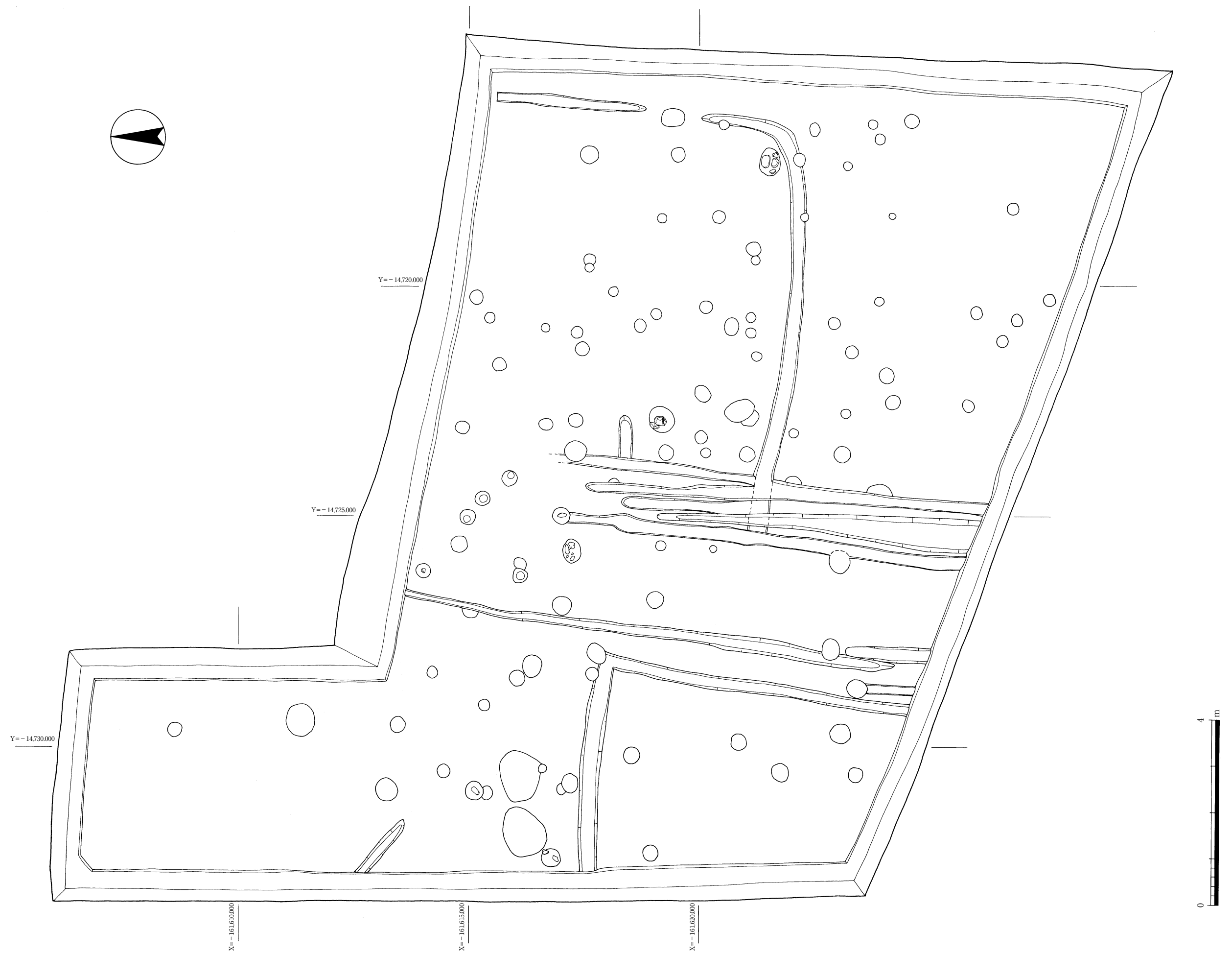


図52 4-4 トレンチ上層遺構確認状況図 (1/80)



図53 4-4 トレンチ平・断面図 (1/80)

#### 前方部北東周濠部の調査と出土遺物

第4次調査の第4トレンチでは、周濠の北東隅の状況を把握するために一部地山面までの掘り下げをおこなった。古代末～中世の整地土は、地山面が標高69.6mと高いこともあって、ここでは10～20cmほどであり、周濠の北東隅のコーナーを検出することができた。

さらに、周濠北東隅角から南東方向に伸びる溝状の遺構を検出したので、8×3mにわたって調査区を東に拡張してこの溝状遺構の性格を把握することに努めた。その結果、周濠北東隅角とこの南東に延びる溝状遺構のほかにも、土坑、ピット群、前方部前面辺に平行するような溝状遺構を検出した。

周濠内の堆積はおおよそ5層に分層される（図55 断面b-aライン）。「最下層」は黒灰色土（12層）および青黒色土（13層）の厚さ20～30cm粘質の土壤で、低脚高坏脚部（139）が出土した。「下層」は暗灰色砂質土（10層）で、小形器台の半完形品（155）のほか、S字形口縁甕脚台部（154）、布留形甕の口縁部多数（143～151）が知られる。142は庄内形甕口縁であろうか。「上層」は灰褐色土（2層）、褐灰色土（3層）、暗灰褐色土（4層）で、二重口縁壺口縁（157）や布留形甕（158～160）、吉備形甕（161）が出土している。完形の小形鉢（156）は4層（上層下部として採取）出土である。なお、5～9層は周濠北側外部からの流入土であり、その形成は最下層埋没後、下層の形成と期を一にしたものと考えられるが出土遺物はない。

上層出土土器は布留1式、下層以下は布留0式と考えられるけれど、「最下層」は前方部前面周濠の「最下層」と「下層」に、「下層」は「中層」に、「上層」は「上層」に対応するものと考えているから、最下層と下層以外は後世の埋没ないし埋設土であろう。

一方、濠底の青灰色シルト層（地山）を穿って径80×50cm、深さ30cmのpit 5を検出した。土坑内の粘土層は有機質を大量に含み木片と土器片を若干検出したが、時期は明らかではない。しかし、濠低最下層の堆積と土坑内の堆積状況から、古墳造営以前のものと考ええるよりは造成時に穿孔された可能性を考えておきたい。さらに、周濠底を抉るように流れ込む導水溝（幅0.7～1m、深さ10～30cm）を検出し、復元可能な土器片をこの抉られた部分から一括採取した。

また、前方部前面周濠に平行するように走行する溝状遺構は、幅0.8～1.5mで、南東に走行する溝の手前で途切れる。この溝は南壁付近でピットによって切られているがその土層断面の状況から、ともに古墳築造時ないしは以前であることは明らかである。築造時（直前）における前方部前面の区画溝の可能性を指摘しておきたい。

#### 導水溝の調査と出土土器

周濠の北東隅のコーナーから南東方向に伸びる溝状の遺構は、幅4～5m、深さ10～30mで、北東の肩を周濠北東辺の延長上にあわせて設定されていた。溝底は凹凸があり中央部で深く抉られた状況で、東端の上流部では幅90cmと狭い。また、下流の周濠合流部付近では広い落ち込み状を呈していることから、集水流下させていた機能が想定される。

取り付き部分の縦断面（c-bライン）と、横断面（d-eおよびf-gライン）の堆積土層の精査によって、本溝状遺構は周濠とは切り合い関係がないことを確認した。周濠と溝状遺構は一体的同時に埋没

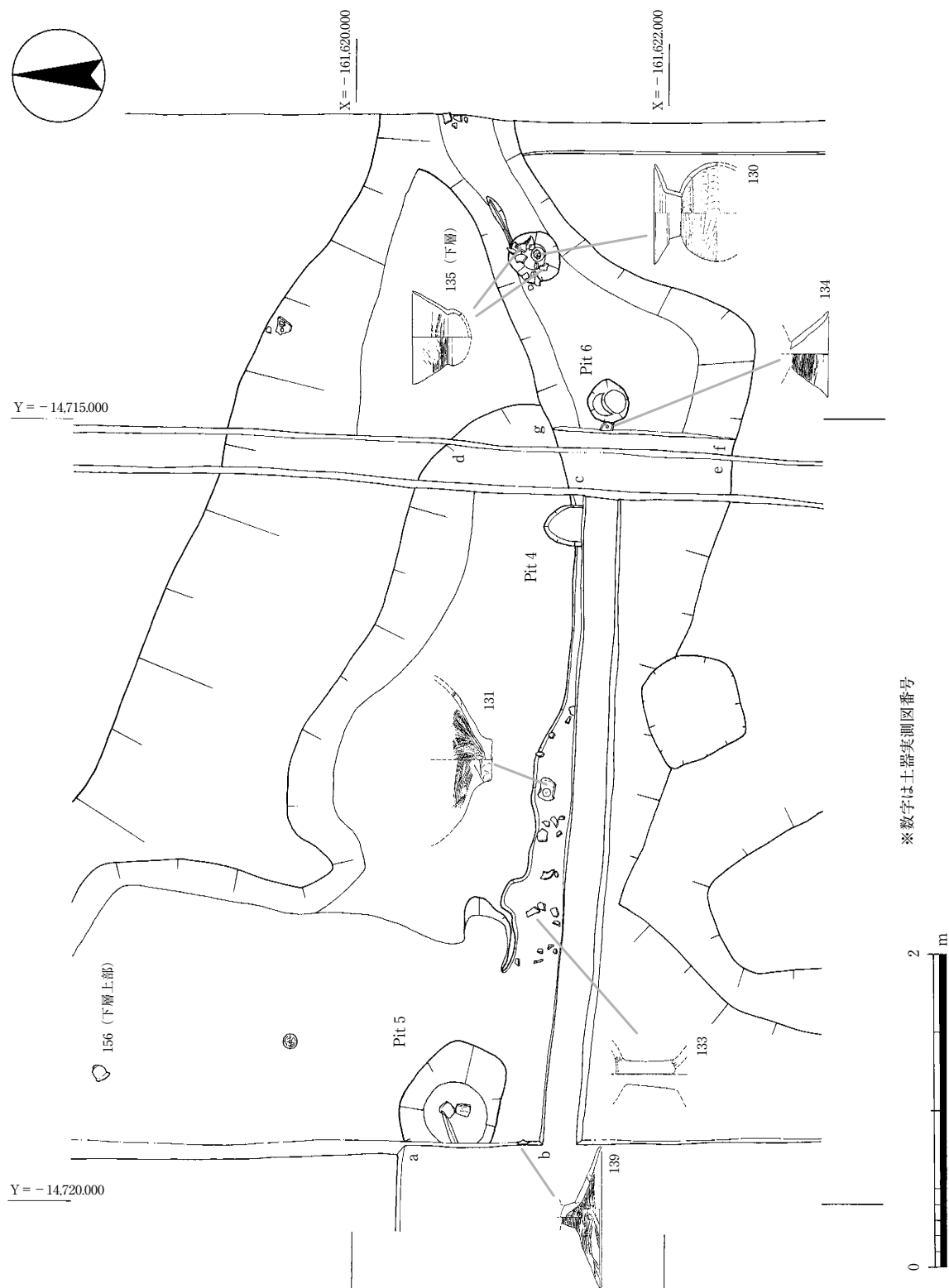
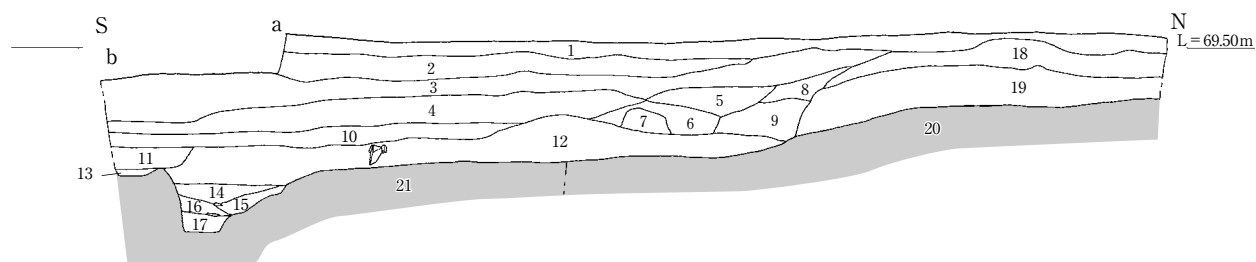


図54 4-4 トレンチ導水溝遺物出土状況図 (1/40、土器は1/8)

したことになる。

溝内の堆積土は、「最下層」= 5～7層、「下層」= 3・4層（暗灰色砂質土・灰褐色細砂層）、「上層」= 2層（暗灰褐色土）である。「最下層」は、北東隅周濠の堆積物とは違いがあるが、ほぼ北東隅周濠の「最下層」（12・13層）に対応するものと考えられ、「下層」は「下層」（10層）に、「上層」は



前方部周濠北東隅畔東壁 (b-a)

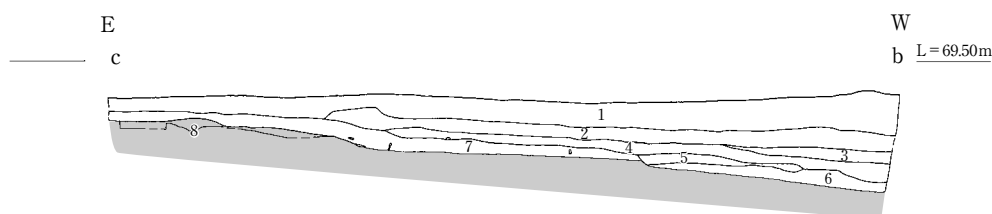
- 1 灰褐色土層 (1cm大の小石・粗砂を多量に含む)
- 2 灰褐色土層 (5mm大の小石と粗砂を中量含む)
- 3 褐色土層 (5mm大の小石と粗砂を中量含む)
- 4 暗灰褐色土層 (やや砂質。2～4mm大の小石を少量含む)
- 5 灰褐色土層 (5mm大の小石を多量に含む)
- 6 灰褐色土層 (5層よりやや褐色強い。1cm大の黄砂をまばらに含む)
- 7 暗灰色土層 (2mm大の小石を中量含む)
- 8 褐色土層 (5mm大の小石を多量に含む)
- 9 暗灰褐色土層 (やや砂質。粗砂・小石をまばらに含む)
- 10 暗灰色砂質土層 (1cm大の小石と粗砂を中量含む)

周濠内堆積土

- 11 灰褐色細砂層
- 12 黒灰色土層 (やや粘質。遺物含む。2cm大の礫をまばらに含む)
- 13 青黒色粘質土層
- 14 青黒色粘土層 (ややシルト質) — pit5埋土最上層
- 15 暗灰色砂質土層
- 16 黒色粘土層
- 17 青黒色粘土層 (有機物を含む) — pit5埋土最下層
- 18 黄褐色土層 (よく締まる)
- 19 黒褐色土層 (よく締まる)
- 20 黄灰色シルト層
- 21 青灰色シルト層

pit5埋土

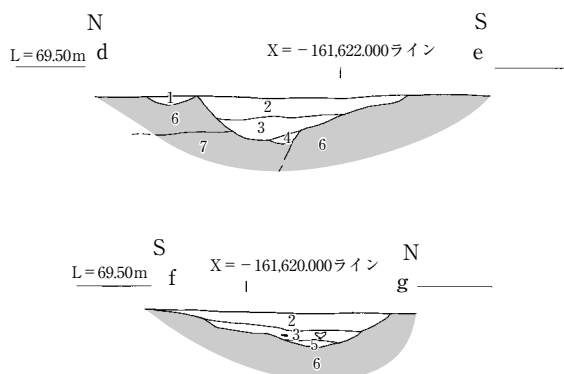
地山



導水溝東西畔北壁 (c-b)

- 1 褐色土層 (周濠北東隅畔東壁の3層に同じ)
- 2 暗灰褐色土層 (周濠北東隅畔東壁の4層に同じ)
- 3 暗灰色砂質土層 (周濠北東隅畔東壁の10層に同じ)
- 4 灰褐色細砂層 (周濠北東隅畔東壁11層に同じ)

- 5 灰褐色細砂層 (やや粘質)
- 6 青黒色粘質土層 (周濠北東隅畔東壁13層に同じ)
- 7 黒灰色砂質土層 (礫を多く含む)
- 8 黄灰色シルト層 — 地山



導水溝南北畔西壁 (d-e)・東壁 (f-g)

- 1 暗褐色土層
- 2 暗灰褐色土層
- 3 黒灰色土層
- 4 暗青灰色シルト層 (木質を含む)
- 5 褐色砂礫層
- 6 黄灰色シルト層
- 7 青灰色シルト層

導水溝内堆積土

地山

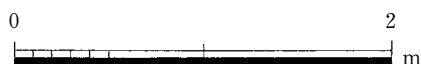


図55 4-4 トレンチ前方部周濠・導水溝断面図 (1/40)

「上層」下部 (4層) に全く対応関係にある。

こうしたことから、本溝状遺構の造営は周濠の掘削に伴ってなされたものであり、溝底の水準や土壌の堆積が周濠内に傾斜していることから、古墳周濠への導水遺構と考えた。以下、本溝を「導水遺構」と仮称する。

導水遺構の出土遺物は土器のみであるが、最下層から半完形の二重口縁壺 (130)、小形器台脚部 (134)、高坏脚部 (133)、壺底部 (131)、甕底部 (132) が、下層からは小形丸底鉢 (135) が出土している。



ここでは甕の胴部破片や口縁部細片が確認されているにもかかわらず、布留形甕と認定できるものは皆無であることから、布留0式に先行する可能性が高い。

とりわけ小形丸底鉢は、赤褐色を呈する口径12cmの口頸部がやや内湾気味に著しく発展しているもので、外面ともに繊細なミガキを施している。庄内3式以降の纏向遺跡やホケノ山古墳埋葬施設出土品に類例がある。従来、一般に布留式でも典型的な発展型式（布留1式）とされてきたものであるが、伊勢湾沿岸地域の脚台付小形丸底鉢・壺や、中・東部瀬戸内地域における口頸部を内湾拡大させた小形丸（尖）底鉢との型式的統合によって庄内3式段階に纏向遺跡において成立した可能性が極めて高いと考えられる<sup>1)</sup>。また本資料は概報段階では、胎土観察による情報から吉備製の可能性をも考え、「将来このタイプの初現を考慮する資料になるかもしれない」と述べたが、本型式の祖型（初源）論としてはともかく、本資料そのものの製作地の位置づけとしては撤回する。

なお、上層からは加飾二重口縁壺口縁（136）、小形高坏（137）、低脚埴形高坏埴部（138）が出土しており、庄内3式から布留0式の資料と考えられるが、前述したような周濠埋土との対応関係からすれば、その埋設時期は6世紀頃ということになるろう。

### （3）中世の遺構と出土遺物

すでに述べたように、整地土層上においては中世の遺構多数を検出している。遺構は素掘り溝とピット（柱痕跡の残る柱穴を含む）、径80cmから1mほどの土坑である（図52参照）。

しかし、中世遺構のほとんどは発掘調査を行わずに検出遺構の平面的な記録にとどめているため、遺構の構造は明らかではない。ただ、第3トレンチの周濠部分のような明らかな水田土壌の存在は、少なくとも中世以降のベースとなる土壌では確認できていないことや、ごく小さな礎石を据えた径30～40cmの掘形をもつ柱穴も確認されているから、これらのピット群や素掘りの区画溝は居住遺構に関わるものである公算大である。おそらくは小規模な掘立柱建物と宅地区画溝の可能性の高いものであろう。

出土した遺物はわずかであるが、周濠内上面から出土した土師器小皿（182～185）や甕（186）、あるいは整地層内の土器細片から10世紀末の整地層を基盤としていと考えられるので、およそ同時期から11世紀にかけての開発に伴う宅地経営と関係があるものと理解できよう。このことは墳丘縁辺部の削平や盛土中の土器の時期とも符合するから、平安時代後期に一带に土地開発がなされたものと考えられよう。

## 第4節 周辺周濠の調査

### （1）第1トレンチ

後円部のほぼ中央北側に、南北方向に設定した幅3m、長さ27mのトレンチで、トレンチ南端の現墳丘外（北）5mの地点で、周濠堆積層上面と交接する墳丘線を確認し、またトレンチ北端ではかろうじて、周濠上面と地山層が交接する外肩線を確認した。このレベルでの濠幅は23mを測る。

発掘調査は、周濠内堆積層と考えられる褐色土（16・19層）、灰茶褐色土（23層）、そして黒色粘土



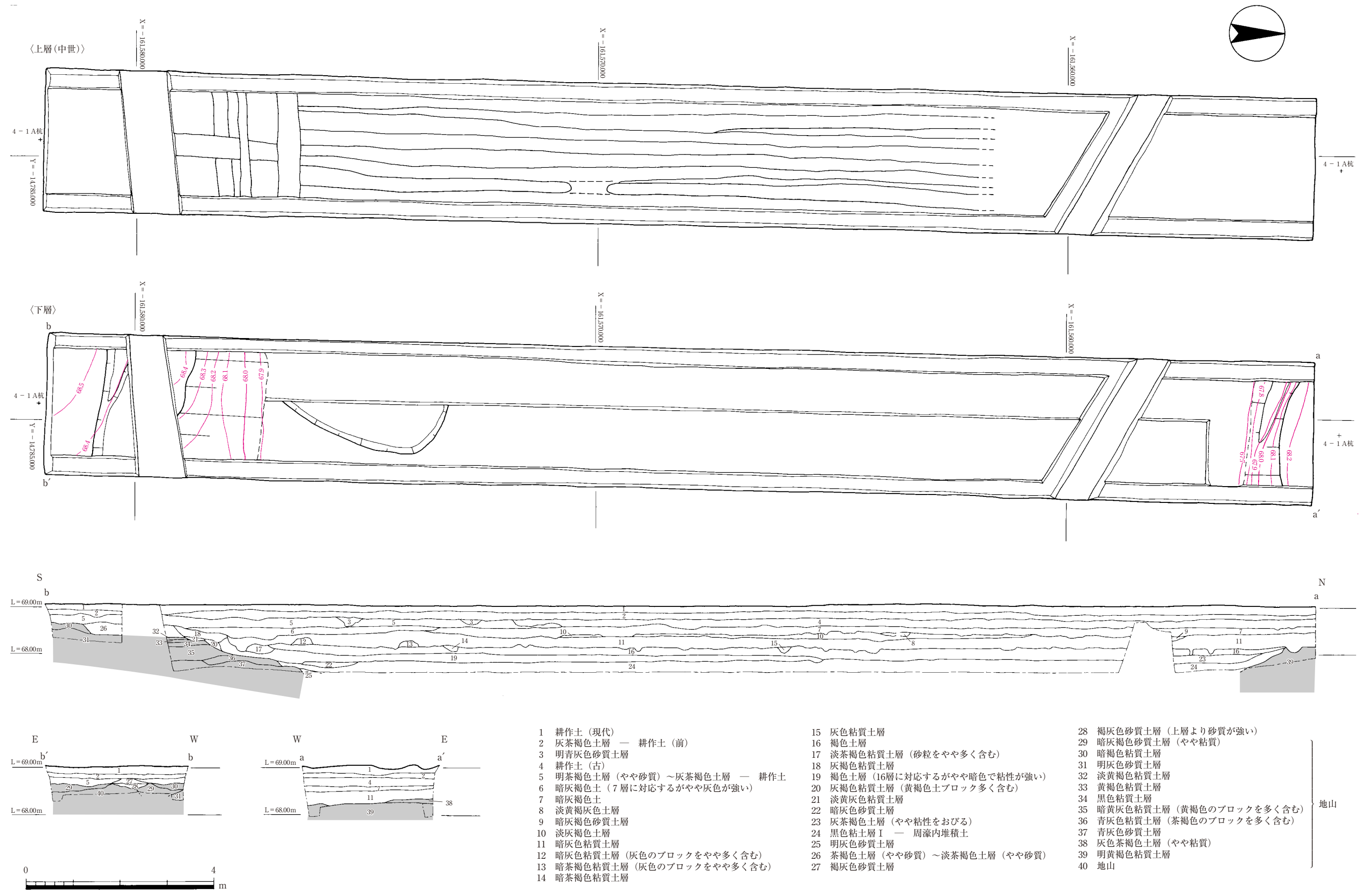


図56 4-1 トレンチ平・断面図(1/80)

- |            |     |                            |             |                       |                 |
|------------|-----|----------------------------|-------------|-----------------------|-----------------|
| 1 淡灰褐色土層   | 耕作土 | 11 暗灰色土層（やや砂質）             | 石塚東古墳周濠内堆積土 | 21 淡黄褐色砂質土層           | 31 淡灰色砂礫層       |
| 2 淡灰褐色土層   |     | 12 暗灰褐色粘質土層（土器片含む）         |             | 22 灰褐色粘質土層            | 32 黄灰色砂質土層      |
| 3 青灰色粘質土層  |     | 13 暗灰色砂質土層（土器片含む）          |             | 23 灰色砂礫土層             | 33 淡灰色砂質土層      |
| 4 明黄茶褐色土層  |     | 14 暗灰色粘質土層                 |             | 24 灰褐色粘質土層（砂礫を少量含む）   | 34 灰褐色砂質土層      |
| 5 茶褐色土層    |     | 15 淡黄褐色砂質土層                |             | 25 淡灰色粘質土層            | 35 灰色粘質土層       |
| 6 暗灰茶褐色土層  |     | 16 灰褐色粘質土層                 |             | 26 暗茶褐色砂質土層           | 36 茶褐色砂質土層      |
| 7 暗灰色粘質土層  |     | 17 灰茶褐色粘質土層                |             | 27 暗灰褐色砂礫層            | 37 淡黄灰色粘質土層     |
| 8 淡灰色砂質土層  |     | 18 暗灰色粘質土層 — 方形周溝墓周溝堆積土    |             | 28 淡黄灰色砂質土層           | 38 暗茶褐色粗砂層 — 地山 |
| 9 暗灰色土層    |     | 19 暗灰褐色土層（やや粘性を帯びる）        |             | 29 暗灰色粘質土層（やや砂礫を多く含む） | 39 灰色砂礫土層       |
| 10 灰褐色砂質土層 |     | 20 暗灰褐色砂質土層（黄褐色砂質土が一部混入する） |             | 30 黄茶褐色砂質土層           | 40 黄灰色砂質土層      |

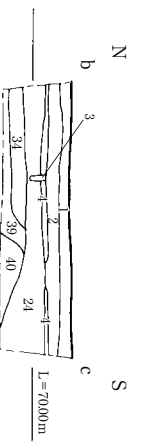
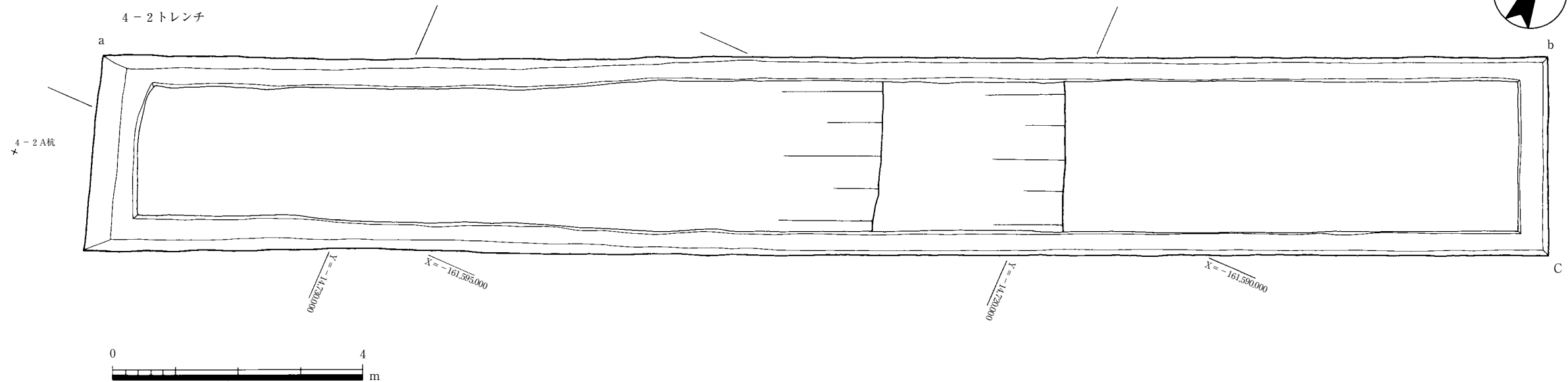
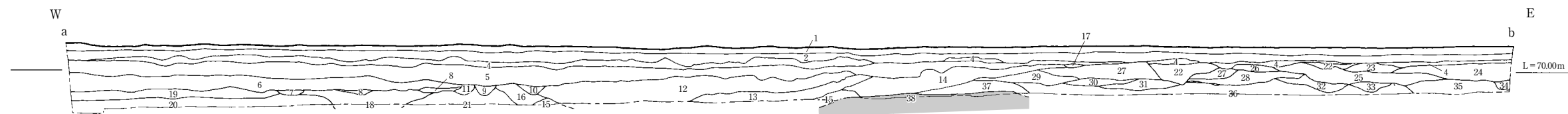


図57 4-2 トレンチ平・断面図（1/80）

層Ⅰ（24層）を若干掘り下げて終わっている。墳丘は地山層を確認しているが、明らかに本来の墳丘盛土と考えられる土層はない。黄褐色土のブロックを含む灰褐色粘質土（20層）がその可能性の高い土層ではあるが、一次的な盛土であるかは保留しておきたい。黒粘Ⅰ上面では暗灰色砂質土（22層）を充填する浅い落ち込みを確認したが、人為的なものかは判断しがたい。図化しえた出土遺物はない。

## （2）第2トレンチ

後円部部分の周濠北東部外肩線を確認するために、後円部中心から放射線状に設定した幅3m、長さ23mのトレンチで、トレンチのほぼ中央で地山面（暗茶褐色粗砂層：38層）を確認した。周濠内の発掘はおこなっていないが、地山はこれより西（墳丘方向）に向かって下がり、周濠外部の地山上には砂礫層や砂質土層、粘質土層がレンズ状になって互層をなして堆積しており、その堆積土はトレンチの東端付近にいたる基底幅約10mにおよぶ土堤状堆積を形成しているかに判断された。また、この土堤状堆積の頂部付近から墳丘方向に向けて、茶褐色土層（5層）、暗灰茶褐色土層（6層）、暗灰褐色粘質土層（12層）、暗灰色砂質土層（13層）、暗灰色粘質土層（14層）などが傾斜して堆積している状況が看取された。

こうしたことから本トレンチのほぼ中央部を周濠外肩と判断し盛土土堤を伴った可能性も考えた。従ってこのレベルでの周濠幅を38m程と判断したのである。しかしのちに、第9次調査において、本トレンチを含めた面的な調査によって周濠の全面発掘をおこなったところ、周濠本来の掘り込みである外肩線は本トレンチの西端部ギリギリであることが判明した<sup>2)</sup>。そうであれば、前述の土堤状の盛土は旧河道堆積物による自然の土堤状堆積ということになるが、第9次調査の纏向石塚古墳周辺の遺構の調査状況を見ると、ちょうどこの落ち込み状の遺構は「石塚東古墳」と命名された方墳の周濠東肩部に対応しており、結果としてその周濠等を誤認した可能性が高くなった。とすれば、この盛土状の堆積は石塚東古墳の墳丘の一部ということになるかもしれない。正式報告での判断を待ちたい。

なお、本トレンチ出土で図化しえた土器はないが、周濠外の土堤状堆積の暗灰褐色砂礫層（27層）から全長19.8cmのサヌカイト製の石槍1点を検出した。先端から11cmの両側面に押圧剥離を施して鋭利な刃部形成を行い、基部から6cm以下は丁寧で細やかな敲打によって刃潰しを施す。この土堤状の堆積中からは弥生時代前期と思われる土器細片も出土しているので、本時期に所属する可能性が高い。

## （3）第3eトレンチ

第3トレンチとしては北西に12m遊離しているが、後円部北東部分の墳丘裾を確認するために設けたトレンチである。土地承諾

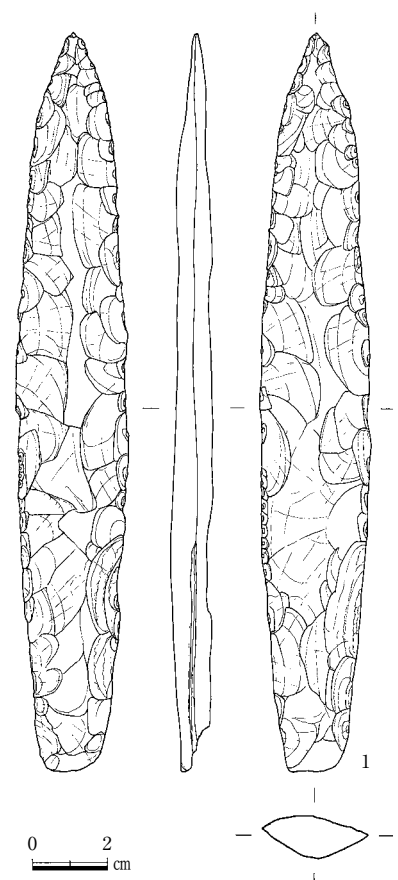


図58 4-2トレンチ暗灰褐色砂礫層出土石槍実測図（1／2）



の高まりが反応した個所について、興味ある反応が認められる。また、地表下2.0mのところ、安定した平坦面が続いており、古墳築造前の地山層の可能性が高い。この他、太平洋戦争時の大砲砲台の基礎かとみられる傾斜面も確認されており、未発掘ながらも数多くの手がかりを知ることができた。その結果については第12章第6節で別に報告する。(清水)

## (2) ラジコンヘリによる撮影

今回の調査では、発掘トレンチが小規模でかつ調査が段階的になることから、ラジコンヘリコプターに撮影機器を搭載させ、地上に送られた映像を見ながら撮影を行う方法をとった。近年の撮影用ヘリコプターは振動が少なく、ビデオカメラで同時映像投写と記録ができるため、今回のような撮影に機動力を発揮するであろう。本報告書における上空からの遺構写真はいずれもその成果である。

## 第6節 小結 ―第4次調査の成果―

ここでは、纏向石塚古墳第4次調査の成果として、とくに墳形と築造時期を取り上げる。しかし三十有余年にわたる纏向石塚古墳の調査にとって、最も重要かつ他地域への影響の大きいともいえるこの問題は、第4次調査の成果に収斂されることでもなければすべき問題でもあるまい。それは9次にわたる総括的な判断と纏向諸古墳、纏向遺跡全体の脈絡のなかで解決されるべき問題であろう。

とはいえ、トレンチによって解剖された纏向石塚古墳の調査回数<sup>3)</sup>ごとのデータは真摯に取り扱わねばならない。ここでは、第4次調査の概報の総括でもある「まとめ」に立ち戻ること、その時点(平成元年の時点)での評価や考え方の原形を残して記録しておくことに重点をおき、現時点での私見との違いを明確化する手法をとった。結果的には、二十有余年を経た今も大きな修正の必要は感じないが、現時点での結論と問題点については本報告書の総括編を参照されたい。

### (1) 墳形と規模について

今回の調査では、整備保存を目的とした調査のため、調査方法もその目的に沿ったトレンチを設定し、できる限り上面で遺構を確認する方法をとった。そのため、第1次から第3次の周濠資料を合わせ、墳形と周濠形態をほぼ復元することができたとはいえ、すべてのトレンチにおいて墳丘裾をおさえたわけではなく、墳丘自体が後世の削平や攪乱によって変形を被っている箇所も少なくない。従って、墳形、周濠の形態、計測値も正確なものではなく、概略を把握したにとどまる。

概報では、「墳形は東南方向に前方部に向けた明確な前方後円形で、墳丘の全長は約93m、後円部は最大幅部が中心よりやや西に寄った横長の扁楕円状を呈している。その計測値は、最大幅部で約64m、短径約62mが復元できる。前方部は括れ部が狭まって開く撥形を呈す。括れ部の幅は15～16m、前方部前面の最大幅は約32m、前方部の長さは約32mを測る」としたが、この意味では以前の推定値をも加味して、墳長は93～96m、後円部径62～64mと見ておくことが寛容であろう。

周濠形態は、第1トレンチと第2トレンチの間隔が広く、全掘もしておらず、また墳丘の南側での調査資料を欠くので復元は困難であるが、前方部前面周辺が突出した楕円に近い馬蹄形が想定される。その規模は径112～116mほどで、周濠幅は18～24mで、クビレ部付近では38mに達するようである。

前方部前面では約 5 m と狭くなり、むしろ区画溝的な機能の名残と考えられる。前方部前面の区画溝が墳丘部周濠に接続したことによって、墳丘が周濠によって周囲を囲まれ、陸部とは隔絶した前方後円墳ということになる。いずれにせよ纏向石塚古墳は、千葉県神門 3 ～ 5 号墳など、類似した墳形の古墳（後述の「纏向型前方後円墳」のこと）と比較してもより周濠が墳丘部を囲み陸部と切断していることから、形式的にも「定形型」前方後円墳に近づきつつある前方後円墳として位置づけることができる。反面、後円部が正円形を示さず、クビレ部が細く、前方部の平面的、立体的発達度が低い点や区画溝的な前面周濠の様相などは「定形型」以前の様相を示しているといえることができる。

なお、纏向石塚古墳の墳形については、第 4 次調査のちょうど 1 年前に、「纏向型前方後円墳」なる概念を提唱し、その起源的な典型として位置づけた<sup>4)</sup>。そしてその 23 年後の平成 23 年には、自ら纏向型前方後円墳を再検討したなかで、纏向石塚古墳の墳形については 9 次にわたる発掘調査の成果を受け、かつ魯班尺の適用を仮定した上で、以下のような墳丘の規模と企画性を提案した<sup>5)</sup>。

①墳形は、後円部が正円ではなくやや偏球状に膨らみ、前方部が大きく撥形に開く、IC-β1 類型の纏向型前方後円墳である。

②墳丘規模の規格は、墳長 95.445 m（魯班尺 300 尺）、後円部径 63.63 m（魯班尺 200 尺）、前方部長 31.815 m（魯班尺 100 尺）、前方部前面幅 31.815 m（魯班尺 100 尺）、クビレ部幅 15.9075 m（50 尺）の可能性はある。

纏向石塚古墳の纏向遺跡のなかでの位置づけ、列島規模での歴史的意味等々については前掲書に詳しいので、参照いただければ幸いである。

## （2）築造の時期について

第 4 次調査も墳形確認の域を出ないため、墳丘本体での外表施設や遺物の状況はほとんど知られない（存在しない）。従って本墳の場合、今のところ周濠内出土の遺物が唯一の築造時期を知る手がかりである。

すでに見てきたように、今回の調査地区では、従来、木製品群や若干の完形土器群がプライマリな状態で検出された最下層の黒粘Ⅱがまったく欠落し、かわって従来は布留式でも新しいと考えられていた植物腐植土下において、まったく同様の木製品群や土器若干を検出している。前方部南側（第 3 次調査）と今回の北側の周濠底水準も差はない（ただし第 2 次調査地は西方へと深くなる）。たとえ最下層の堆積層の違いはあっても、これらの木製品群や土器群が同時に、同じ理由と目的を持って前方部両側に投棄されたと考える所以である。

周濠内の木製品群に伴う土器の示す時期は、今回の出土資料によって布留 0 式と考えうる。このことは纏向石塚古墳の第 1・2 次調査報告（以下、『纏向』と略称する<sup>6)</sup>）でこれを纏向 1 式（≡庄内 0 式）とする見解と齟齬をきたすであろうか。しかし、私は第 1 次調査の周濠内黒粘Ⅱのなかに布留形甕（『纏向』P259 図 111-10・11）、布留式影響庄内形甕（7）、庄内大和形甕（6・8・9）と庄内 1 式以降の器種・型式（5・16）、北陸製甕（12）や近江製甕（13）が共存型式としてはより新しい様相を示しているということを早くに指摘してきた<sup>7)</sup>。



また、石野・関川両氏の方法の根拠となる、①第2次調査での完形土器が纏向1式である、②出土土器片は纏向1式45片に対して2・3式は17片であり、圧倒的に1式が多い、③墳丘下と包含層に第5様式後半土器を含む、についても方法的な問題があると考えた。特に③では、『纏向』図111の1・3・10・11などは庄内様式の範疇で捉えるべきであり、今回の墳丘盛土中の資料とも矛盾しない。こうして、纏向石塚古墳の上限は遡っても庄内式期であり、周濠底への製品の一括投棄は布留0式期に下ることは必至であろう。その実年代は3世紀後葉と考える。

ところが、植物腐植土層下の暗青灰色シルト層の堆積や導水遺構（流入溝）の土器は古墳の築造時期じたいが微妙に遡る可能性を物語っている。これらの土器群には布留様式的な土器様相が見られず、なにより布留形甕は一片の破片も見られない。それは微妙に庄内3式期に食い込む公算があり、隣接する纏向型前方後円墳である矢塚古墳とほぼ同時期に造られた可能性が高い。

纏向石塚古墳の年代がこのように考えられるのであれば、当然、第2次調査で共伴した弧文円板の時期や文様系統論についても検討が余儀なくされる。また纏向古墳群の築造時期と纏向遺跡の経営年代との関係、纏向遺跡の歴史的評価にまでおよぶかもしれない。

纏向石塚古墳の墳形が庄内3式期の築造と考えられている矢塚古墳やホケノ山古墳とともに纏向型前方後円墳に属し、勝山古墳、東田大塚古墳は纏向型前方後円墳ではなく、「定形化」前方後円墳として評価されることになった今、勝山古墳の築造時期がいまだ不安定とはいえ、布留0式古段階の築造が確かな典型的な巨大定形型前方後円墳たる箸墓古墳の築造に向けて、一つの発展的図式が見えてきたようにも感じる。この点についても前掲書に詳しいので参照いただければ幸いである。（寺沢）

#### 【註記】

- 1) 寺沢薫 「第二部第四章 前方後円墳出現論」『王権と都市の形成史論』吉川弘文館 2011
- 2) 丹羽恵二編「纏向遺跡第144次調査（纏向石塚古墳第9次調査）概要報告」『平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』（桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集）桜井市教育委員会 2006
- 3) 萩原儀征・寺沢薫編『纏向石塚古墳範囲確認調査（第4次）概報』桜井市教育委員会 1989 なお、「まとめ」は萩原と寺沢が協議の上、（1）墳形・規模については萩原が、（2）築造の時期については寺沢が執筆しているが、現時点での寺沢の目線で修正を施している。
- 4) 寺沢薫 「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』（同志社大学考古学シリーズⅣ）同志社大学考古学研究室 1988
- 5) 寺沢薫 「第二部第四章 前方後円墳出現論」『王権と都市の形成史論』吉川弘文館 2011
- 6) 石野博信・関川尚功編『纏向』桜井市教育委員会 1976
- 7) 寺沢薫 「築造の時期について」註3『前掲書』所収、寺沢薫編『纏向遺跡をめぐる』（『石野博信さんと語る会』座談会資料）奈良県立橿原考古学研究所 1992

表 22 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (1)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
60—1 111—1	第3—d トレンチ 墳丘盛土	高坏	B <sub>6</sub> —1—A—・	H : 87 C : 124 B : 84	O. ミガキ A i. ミガキ A か	O. ミガキ A i. ミガキ A か	O. マメツ不明 i. マメツ不明		7.5Y R 7/4 にぶい橙	
60—2 111—2	第3—d トレンチ 墳丘盛土 暗灰褐色土	底部 (甕)	1—C—・	B : 445		O. タタキ i. マメツ不明	O. タタキ i. 押捺 A		O. 淡褐 i. 赤褐	・外面にスス付 着
60—3 111—3	第3—d トレンチ 墳丘盛土 暗灰褐色土	鉢	・—・ 2—・	B : 40		O. スリナデ I A b か I B i. スリナデ I A a ケズリ B	O. 押捺 A i. 押捺 A	5/cm	O. 7.5Y R 7/4 にぶい橙 i. 7.5Y R 7/3 にぶい橙	
60—4 111—4	第3—d トレンチ 墳丘盛土 暗灰褐色土	有孔鉢	・—・ B <sub>1</sub> —・	B : 375		O. マメツ不明 i. スリナデ I A b	O. 押捺 A		10Y R 7/4 にぶい黄橙	・焼成後穿孔
60—5 111—5	第3—a トレンチ 暗青灰色シルト 下層	底部 (ミニ チュア 甕)	2—C—・	B : 26			O. スリナデ I A a i. ケズリ B→ スリナデ I C a	4/cm	灰褐	・底面にもスリ ナデ I C a を 施す
60—6 115—6	第3—a トレンチ 暗青灰色シルト	壺	N—A—? ?	C : 18.4	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				淡灰褐	
60—7 115—7	第3—a トレンチ 暗青灰色シルト	底部 (甕?)	2—A?—・	B : 48		O. タタキ i. スリナデ I A a	O. 押捺 A i. 押捺 A	8/cm	暗褐	
60—8 111—8	第3—a トレンチ 暗青灰色シルト	甕	近江形	—	O. スリナデヨコ I C a→ i. スリナデヨコ I C a				灰白	
60—9 111—9	第3—a トレンチ 周濠 植物腐植土下層	壺	H—A—d	H : 28.5 C : (14.7) W : 23.0 B : 3.7	O. (口縁) ミガキ A (口縁) スリナデ I A a→ミガキ B (					

表 23 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (2)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
60—12 115—12	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	壺	?	C : (18.0)	O. (口底)スリナデヨコICa (口縁〜胴)スリナデヨコICa→ ミガキA i. スリナデヨコICa				25Y6/2灰黄	
60—13 115—13	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	底部 (甕)	5—・	—				O. スリナデICa i. スリナデICa 押捺	O. N3/0暗灰 i. 5Y4/1灰	・外面にスス付 着
61—14 115—14	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕 S	?	C : (14.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				25Y6/2灰黄	・口縁部外面に スス付着
61—15 115—15	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕 F	・—・—?	C : (13.1)	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコIB	O. スリナデヨコIAa→ スリナデIB i. ケズリア			10Y R7/3にぶい黄橙	
61—16 115—16	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕 F	・—・—?	—	O. スリナデIB i. スリナデIB				O. 10Y R2/1黒 i. 10Y R6/2灰黄褐	・口縁にスス付 着
61—17 115—17	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕 F	・—・—g <sub>3</sub>	C : (14.2)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリア			25Y8/3淡黄	
61—18 115—18	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕	阿波形	C : (15.0)	O. スリナデICa i. スリナデICa	O. スリナデIAa i.			10Y R6/3にぶい黄橙	
61—19 115—19	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	底部 (甕)	2—A—・	B : (4.9)				O. 右上がりタタキ→ スリナデ? i. スリナデICa?	O. 25Y5/1黄灰 i. 25Y6/2灰黄	
61—20 115—20	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	底部 (甕)	2—C—・	B : (4.1)				O. 右上がりタタキ→ スリナデICa i. スリナデタテICa	30/CM 25Y4/1黄灰	
61—21 115—21	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕 Y	?	B : (5.0)		O. (上半)スリナデIAa→ スリナデICa i. スリナデIAa		O. スリナデ? i. 押捺	O. 10Y R5/2灰黄 i. 10Y R2/1黒	・底面に木の葉 の痕跡あり
61—22 115—22	第3-aトレンチ 周濠 植物腐植土下層	小形丸 底甕?	?	C : (13.0)					O. 5Y R6/4にぶい橙 i. 7.5Y R5/2灰褐	

表 24 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (3)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
61—23 111—23	第 3 - a トレンチ 周濠 植物腐植土下層	小形丸 底鉢?	?	—		O. ミガキ A ヨコ i. スリナデ I C a → ミガキ A タテ	O. ケズリ A → ミガキ A タテ i. ミガキ A タテ	10Y R 6/2 灰黄褐	
61—24 115—24	第 3 - a トレンチ 周濠 植物腐植土下層	脚台 (小形器 台?)	?	—			O : スリナデ I A → スリナデ I C a i : スリナデ I A a	10Y R 6/3 にぶい黄橙	
— 111—25	第 3 - a トレンチ 周濠 植物腐植土下層	甕 S	?	—		O. タタキ i. ケズリ A → スリナデ	40/CM	O. 7.5Y R 4/1 褐灰 i. 7.5Y R 5/1 褐灰	・内面に赤色顔 料付着 ・外面にスス付 着
61—26 111—26	第 3 - a トレンチ 周濠 植物腐植土	壺	N—A <sub>2</sub> —a	C : 17.1 W : 16.55	O. (口縁) ミガキ B ナナメ → (頸部) ミガキ B ヨコ i. (口縁) ミガキ B ナナメ → (頸部) ミガキ B ヨコ	O. (上半) ミガキ B ナナメ → (下半) ミガキ B ヨコ i. (上半) 押巻 A (下半) ケズリ A → スリナデ		O. 10Y R 5/2 灰黄褐 i : 10Y R 4/2 灰黄褐 ~ 10Y R 3/1 黒褐	
61—27 115—27	第 3 - a トレンチ 周濠 植物腐植土	甕 F	・—・—d	C : (15.0)	O. スリナデ ヨコ I C a i. スリナデ ヨコ I C a			O. 10Y R 6/3 にぶい黄 橙 i. 7.5Y R 5/2 灰褐	
61—28 115—28	第 3 - a トレンチ 周濠 植物腐植土	甕 F	・—・—g <sub>1</sub>	C : 13.0	O. スリナデ I B i. スリナデ I B	O. スリナデ I A a i. ケズリ A	9/cm	暗灰褐	
61—29 111—29	第 3 - a トレンチ 周濠 植物腐植土上層	甕 F	・—・—?	C : 16.55	O. スリナデ ヨコ I C a i. スリナデ ヨコ I C a	O. スリナデ I A a i. ケズリ A	6/cm	O. 7.5Y R 6/3 にぶい褐 i. 5Y R 6/4 にぶい橙	
61—30 112—30	第 3 - a トレンチ 周濠 植物腐植土上層	小形丸 底鉢		C : 9.2 H : 7.6	O. スリナデ ヨコ I C a i. スリナデ ヨコ I C a	O. スリナデ I A a i. (上半) スリナデ I C a (下半) スリナデ I A a ? → スリナデ II C a	8/cm 9/cm	10Y R 6/3 にぶい黄橙	
62—31 115—31	第 3 トレンチ 周濠 黒色粘土層 I c 黒色	甕 S?	?	—	O. (口唇) スリナデ ヨコ I C a (口縁~頸部) ミガキ A i. スリナデ ヨコ I C a			2.5Y 5/2 暗灰黄	
62—32 115—32	第 3 トレンチ 周濠 黒色粘土層 I c 黒色	甕	吉備形甕	—	O. (口唇) 櫛状スリナデ ヨコ I A a i. スリナデ ヨコ I C a		9/cm	5Y R 7/3 にぶい橙	
62—33 115—33	第 3 トレンチ 周濠 黒色粘土層 I c 黒色	甕	吉備形甕	—	O. (口唇) 櫛状スリナデ ヨコ I A a i. スリナデ ヨコ I C a		6/cm	10Y R 7/2 にぶい黄橙	

表 25 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (4)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
62—34 115—34	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層I c 黒色	甕 Y (F)	?	—	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI Ca				5Y R7/6橙	
62—35 115—35	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層I c 黒色	甕 S	?	—	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI Ca				O. 25Y3/7浅黄 i. 25Y5/1黄灰	
62—36 115—36	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層I c 黒色	甕 F	・—・—e <sub>1</sub>	—	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI A a	9/cm			25Y5/1黄灰と5Y R1/3 にぶい橙が斑状になる	
62—37 115—37	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層I c 黒色	甕 F	—	—					O. 5Y2/1黒 i. 10Y R6/2灰黄褐	
62—38 115—38	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層I c 黒色	甕 F	・—・—g <sub>1</sub>	—	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI Ca				25Y6/2灰黄	
62—39 115—39	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層I c 黒色	甕 Y	・—・—?	C : (15.0)	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI Ca				10Y R6/3にぶい黄橙	・外面にスス付 着
62—40 115—40	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層I c 黒色	甕 F	?	C : (13.0)	O. スリナデヨコI Ca i. スリナデヨコI Ca				10Y R8/2灰白	
62—41 115—41	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層I c 黒色	底部 (ミニ チュア 甕)	2—?—・	B : (2.7)			O. タタキ→ミガキA i. スリナデI Ca→ スリナデI Ca		O. 25Y5/2暗灰黄 i. 10Y R5/2灰黄褐	
62—42 115—42	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層I c 黒色	底部 (甕?)	3—C—・	B : (2.9)			O. マメツ不明 押捺あり i. マメツ不明		O. 10Y R7/1灰白 i. 25Y7/1灰白	
62—43 115—43	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層I c 黒色	底部 (甕?)	2—C—・	B : 38		O. スリナデI Ca			25Y5/2暗灰黄～10Y R 5/2灰黄褐	
62—44 115—44	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層I c 黒色	底部 (甕Y)	1?—C—a	B : 38			O. タタキ i. スリナデI A b		25Y6/2灰黄	

表 26 纏向石塚古墳第4次調査出土土器観察表 (5)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
62—45 112—45	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I c 黒色	底部 (甕)	6—・	B : 70		O. ケズリ A i. ケズリ A	O. ケズリ A i. ケズリ A	O. 10Y R7/2にぶい黄 橙 i. 2.5Y4/1黄灰	
62—46 115—46	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I c 黒色	底部 (甕)	3—C—・	B : 20			O. 押捺 i. スリナデ I C a	2.5Y5/1黄灰	
62—47 115—47	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I c 黒色	底部 (甕)	2—C—・	B : 37.5			O. タタキ? i. スリナデ I C a	2.5Y5/2暗灰黄	
62—48 115—48	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I c 黒色	須恵器 鉢?		C : 28.0	O. 回転ナデ i. 回転ナデ			O. 2.5Y5/1黄灰 i. N4/0灰	
62—49 112—49	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I b 青黒色下部	脚台 (高坏)	3か4—B—b か c	—			O. スリナデ I A a i. 押捺	8/cm	・ ロクロ右回転
62—50 115—50	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I b 青黒色下部	円筒 埴輪		—		O. タテハケメ→ヨコハケメ i. 荒いユビナデ		2.5Y R5/6明赤褐	
62—51 115—51	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a 黒灰色	底部 (甕)	5—・	B : (2.5)			O. タタキ→ スリナデ I C a i. スリナデヨコ I A b スリナデヨコ I C a		
62—52 115—52	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	脚台 (高坏)	・—B—b	—			O. スリナデ I C a i. スリナデ I A b	5Y R5/6明赤褐	
62—53 115—53	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	円筒 埴輪		B : (15.0)			O. 板オサエ i. ユビナデ	10Y R7/2にぶい黄褐	
62—54 112—54	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	朝顔形 埴輪		—	O. タテハケメ i. (上半) ヨコハケメ (下半) 斜めユビナデ	7/cm (約 2cm 幅)		7.5Y R7/4にぶい橙	
63—55 115—55	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 埴輪		H : (4.1) C : (12.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ			10Y R8/3浅黄橙	



表 27 纏向石塚古墳第4次調査出土土器観察表 (6)

図番号 図版番号	地 区 位 層	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
63—56 115—56	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		—	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		o. 7.5Y R7/3にぶい橙 i. 2.5Y R7/6橙	
63—57 115—57	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		—	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ケズリ? i. 横方向ユビナデ		7.5Y R6/4にぶい橙	
63—58 115—58	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		—	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		o. 7.5Y R7/1灰白 i. 7.5Y R6/1灰	
63—59 115—59	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		—	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 押捺 i. ユビナデ		o. 2.5Y 6/2灰黄 i. 2.5Y 4/1黄灰	
63—60 115—60	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		H : (1.8) C : (14.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. (上半) 横方向ユビナデ (下半) ヘラケズリ i. (上半) 横方向ユビナデ (下半) 押捺		2.5Y 6/2灰黄 口縁部付近は2.5Y 3/1黒 褐	
63—61 115—61	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		H : (2.2) C : (16.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ユビナデ 押捺 i. ユビナデ		10Y R8/2灰白	
63—62 115—62	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕		—	O. ユビナデ i. ハケメ	3/cm		7.5Y R6/4にぶい橙	
63—63 115—63	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	瓦器 碗		—		i. ミガキ		5Y R6/4にぶい橙	
63—64 116—64	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		C : (14.8)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ケズリ i. 横方向ユビナデ		2.5Y 7/2灰黄	
63—65 116—65	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 皿		C : (18.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		10Y R6/2灰黄褐	
63—66 116—66	第3トレンチ 周濠 黒色粘土層 Ia (黒灰色)・黒色 粘土層	黒色 土器 碗		B : (8.0)		O. 不明 i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. ユビナデ	O. 7.5Y R7/3にぶい橙 i. 7.5Y R2/1黒	・内黒

表 28 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (7)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
63—67 116—67	第 3 トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕?		—	O. ユビナデ i. ユビナデ			5Y R6/6橙	
63—68 116—68	第 3 トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕?		—	?			10Y R7/3にぶい黄橙	
63—69 116—69	第 3 トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕?		—	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ			5Y R6/6橙	・口縁外面にス ス付着
63—70 116—70	第 3 トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕		—	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 押捺		5Y R7/6橙	
63—71 116—71	第 3 トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕		C : (18.0)	O. 横方向ユビナデ i. ハケメ			10Y R7/3にぶい黄橙	
63—72 116—72	第 3 トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 甕		C : (20.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		O. 10Y R7/2にぶい黄 橙 i. 10Y R6/2灰黄褐	
63—73 116—73	第 3 トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 移動式 甕		C : (24.0)	O. ヘラケズリ・ユビナデ i. ユビナデ	O. タテハケメ i. ユビナデ	5/cm	5Y5/4にぶい赤褐	
63—74 116—74	第 3 トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	土師器 羽釜		W : (38.4)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		5Y R6/6橙	・羽の下にスス 付着
63—75 112—75	第 3 トレンチ 周濠 黒色粘土層 I a (黒灰色)・黒色 粘土層	須恵器 大甕		C : (63.0)	O. 回転ヨコナデ (頸) 櫛櫛文→ 回転ヨコナデ i. 回転ヨコナデ	O. 回転ヨコナデ i. 回転ヨコナデ		N5/0灰～10Y5/1灰	
64—76 116—76	第 3 トレンチ 黒褐色土層・黒 灰色土層	土師器 碗		H : (3.6) C : (15.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 押捺 i. 横方向ユビナデ	i. 押捺	7.5Y R6/6橙	・口縁に沈線が 入る
64—77 116—77	第 3 トレンチ 黒褐色土層・黒 灰色土層	瓦器 碗		H : (4.0) C : (12.0) B : (7.0)	O. 横方向ユビナデ i. ミガキ	O. 押捺 i. ミガキ	O. ユビナデ i. ミガキ	O. 10Y R6/4にぶい黄 橙 i. 10Y R6/2灰黄褐	

表 29 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (8)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
64—78 112—78	第3トレンチ 黒褐色土層・黒 灰色土層	土師器 甕		C : (20.0) W : (19.0)	O. 横方向ユビナデ i. ヨコハケメ	O. ユビナデ i. ユビナデ			5Y R6/6橙	・口縁に沈線が 入る
64—79 112—79	第3トレンチ 黒褐色土層・黒 灰色土層	土師器 甕?		C : (25.0)	O. 横方向ユビナデ i. ヨコハケメ	O. ユビナデ i. ユビナデ			7.5Y R6/4にぶい橙	・口縁部外面に スス付着
— 112—80	第3トレンチ 中央部 ③—④間黒褐色 土	人物埴 輪 手		—					O. 7.5Y R7/4にぶい橙 i. 10Y R8/2灰白	
64—81 116—81	第3トレンチ 黒褐色土層	土師器 皿		C : (12.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ			10Y R7/3にぶい黄橙	
64—82 112—82	第3トレンチ 黒褐色土層	土師器 皿		C : 15.85	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ		2.5Y R6/8橙～2.5Y R 5/8明赤褐	
64—83 116—83	第3トレンチ 黒褐色土層	土師器 碗		C : (15.0)	O. 横方向ユビナデ i. ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ			O. 7.5Y R6/4にぶい橙 i. 7.5Y R5/4にぶい褐	
64—84 116—84	第3トレンチ 黒褐色土層	黒色 土器 碗		H : (3.5) C : (14.0) B : (6.4)	O. 横方向ユビナデ i. ヘラミガキ	O. (上半) 押捺 (下半) 横方向ユビナデ i. ヘラミガキ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		O. 10Y R7/3にぶい黄 橙 i. 7.5Y 2/1黒	
64—85 116—85	第3トレンチ 黒褐色土層	黒色 土器 碗		B : (8.0)		O. ユビナデ i. ヘラミガキ	O. ユビナデ i. ユビナデ		O. 2.5Y 7/2灰黄 i. 5Y 3/1オリーブ黒	・内黒
64—86 116—86	第3トレンチ 黒褐色土層	黒色 土器 碗		B : (7.8)		O. ユビナデ i. マメツ不明	O. ユビナデ i. マメツ不明		O. 10Y R7/2にぶい黄 橙 i. 2.5Y 4/1黄灰	・高台の取り付 けが汚い
64—87 116—87	第3トレンチ 黒褐色土層	瓦器 碗		B : (5.7)		O. ユビナデ i. ユビナデ→ヘラミガキ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		N4/0灰	
64—88 116—88	第3トレンチ 黒褐色土層	土師器 甕		C : (18.0)	O. ユビナデ (口唇～口縁) 横ヘラミガキ (頸) ケズリ	O. ユビナデ i. ハケメ		9/cm	O. 2.5Y 6/2灰黄 i. N3/0暗灰	・外面にスス付 着

表 30 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (9)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
64—89 112—89	第 3 トレンチ 黒褐色土層	土師器 甕？		C : 18.5	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺			O. 10Y R7/3にぶい黄 橙 i. 10Y R8/4浅黄橙	
64—90 116—90	第 3 トレンチ 黒褐色土層	土師器 移動式 甕		C : (21.5)	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. ハケメ i. ユビナデ	3.5/cm		O. 10Y R5/2灰黄褐 i. 25Y3/1黒褐	
64—91 116—91	第 3 トレンチ 黒褐色土層	土師器 移動式 甕		C : (21.7)	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. 押捺 i. ユビナデ			O. 10Y R7/3にぶい黄 橙と10Y R5/1褐灰 i. 25Y5/1黄灰	
— 112—92	第 3 トレンチ 中央部 ③－④間黒褐色 土	緑釉？		—					5Y6/2灰オリーブ	
65—93 116—93	第 3－d トレンチ 暗灰褐色土	土師器 小皿		H : (1.65) C : (9.2)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ			O. 75Y R7/3にぶい橙 i. 75Y R7/4にぶい橙	
65—94 116—94	第 3－d トレンチ 暗灰褐色土	土師器 小皿		C : (11.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ			10Y R7/3にぶい黄橙	
65—95 116—95	第 3－d トレンチ 暗灰褐色土	土師器 皿		C : (13.0)	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. 押捺 i. ユビナデ			10Y R7/4にぶい黄橙	
65—96 116—96	第 3－d トレンチ 暗灰褐色土	土師器 皿		C : (14.0)	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. 押捺 ユビナデ i. ユビナデ		O. 押捺 ユビナデ i. ユビナデ	O. 75Y R6/4にぶい橙 i. 10Y R7/3にぶい黄 橙	
65—97 116—97	第 3－d トレンチ 暗灰褐色土	土師器 皿		H : (2.8) C : (15.0) B : (7.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 縦方向ユビナデ i. ユビナデ		O. 押捺 ユビナデ i. ユビナデ	75Y R4/2灰褐	
65—98 116—98	第 3－d トレンチ 暗灰褐色土	土師器 皿		C : (16.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ケズリ i. ユビナデ			5Y R6/6橙	
65—99 116—99	第 3－d トレンチ 暗灰褐色土	土師器 皿		C : (15.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ			75Y R6/6橙	

表 31 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (10)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
65—100 112—100	第3-dトレンチ 暗灰褐色土	黒色 土器 埴		B : (8.2)		O. 横方向ユビナデ i. ヘラミガキ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		O. 10Y R6/3にぶい黄 橙 i. N3/0暗灰	
65—101 116—101	第3-dトレンチ 暗灰褐色土	土師器 埴		B : (7.8)		O. ユビナデ i. 剥離不明	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		O. 7.5Y R8/4浅黄橙 i. 5Y R7/8橙	
65—102 116—102	第3-cトレンチ 暗灰褐色土	黒色 土器 埴		B : (8.9)		O. マメツ不明 (ナデか) i. ヘラミガキ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		O. 10Y R7/4にぶい黄 橙～10Y R6/4にぶ い黄橙 i. 10Y2/1黒	
65—103 116—103	第3トレンチ 暗灰褐色土	黒色 土器 埴		B : (10.8)		O. ユビナデ i. ヘラミガキ	O. ユビナデ i. ユビナデ		10Y R5/4にぶい黄褐	
65—104 112—104	第3-cトレンチ 暗灰褐色土	灰釉 皿		H : 22 C : 15.1 B : 7.6	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. (上半) ヘラケズリ→ ユビナデ (下半) ユビナデ i. ?	O. ユビナデ i. ユビナデ		O. 10Y R7/1灰白 i. 5Y7/2灰白	・全体に灰釉が かかる ・裏面にヘラ描 きあり
65—105 116—105	第3トレンチ 暗灰褐色土	土師器 甕?		C : (20.0)	O. 横方向ユビナデ i. ハケメ	O. ユビナデ i. マメツ不明			5Y R5/4にぶい赤褐	
65—106 116—106	第3トレンチ 暗灰褐色土	土師器 甕?		C : (17.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺			O. 5Y R7/6橙 i. 7.5Y R5/4にぶい褐	・外面にスス付 着
65—107 116—107	第3トレンチ 暗灰褐色土	土師器 甕?		C : (27.0)	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ナナメユビナデ i. ユビナデ			7.5Y R6/4にぶい橙	
65—108 116—108	第3トレンチ 暗灰褐色土	土師器 甕?		—	O. 横方向ユビナデ i. (口縁) ハケメ (頸) 横方向ユビナデ	O. ユビナデ i. 押捺			5Y R6/6橙	
65—109 112—109	第3-cトレンチ 暗灰褐色土	土師器 甕?		C : 29.0	O. ユビナデ i. (口唇) ユビナデ (口縁～頸) ハケメ	O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺			5Y R6/6橙	
65—110 116—110	第3トレンチ 暗灰褐色土	土師器 羽釜		—		O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺			5Y R6/6橙	・羽先端に沈線 入る

表 32 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (11)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
65—111 112—111	第3トレンチ 暗灰褐色土	須恵器 小壺		B : (38)		O. ユビナデ i. 回転ナデ	O. 回転ヘラケズリ i. 未調整		10Y 5/1 灰	・火ぶくれによ る破損箇所あ り
66—112 116—112	第3トレンチ 黄褐色土	土師器 小皿		H : (15) C : (80) B : (24)		O. ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ユビナデ i. 横方向ユビナデ		10Y R6/3にぶい黄橙	
66—113 113—113	第3トレンチ 黄褐色土	土師器 小皿		H : (20) C : (100)		O. 押捺 i. ユビナデ	O. 押捺 i. ユビナデ		5Y R6/6橙	
66—114 113—114	第3トレンチ 黄褐色土	土師器 小皿		H : 18 C : 98		O. ユビナデ i. ユビナデ			5Y R7/6橙～5Y R6/6 橙	
66—115 113—115	第3トレンチ 黄褐色土	土師器 小皿		H : 23 C : 101		O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺	O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺		5Y R6/6橙	
66—116 116—116	第3トレンチ 黄褐色土	土師器 皿		H : (30) C : (140) B : (86)		O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ	O. ユビナデ i. 押捺 ハケメ		7.5Y R7/6橙	
66—117 116—117	第3トレンチ 黄褐色土	瓦器 碗		—		O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ			N5/0灰	
66—118 116—118	第3トレンチ 黄褐色土	瓦器 碗		—		O. ナデ→ミガキ i. ナデ→ミガキ (暗文)			N6/0灰	
66—119 113—119	第3トレンチ 黄褐色土	黒色 土器 碗		B : (68)		O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	O. 横方向ユビナデ i. 横方向ユビナデ		2.5Y 4/1黄灰	
66—120 117—120	第3トレンチ 黄褐色土	黒色 土器 碗		C : 148		O. マメツ不明 i. ヘラミガキ			5Y3/1オリープ黒	
66—121 117—121	第3トレンチ 黄褐色土	黒色 土器 碗		C : (138)		O. ヘラケズリ→ナデ i. ヘラミガキ			O. 5Y 4/1 灰 i. 2.5Y 3/1黒褐	



表 33 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (12)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
66—122 113—122	第 3 トレンチ 黄褐色土	黒色 土器 埴 埴		H : 535 C : 160 B : 74	O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	2.5Y 2/1 黒～5Y 3/1 オ リーブ黒	・ 面黒
66—123 113—123	第 3 トレンチ 黄褐色土	黒色 土器 埴 埴		H : 54 C : 17.0 B : 78	O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	O. ヘラミガキ i. ヘラミガキ	O. ユビナデ i. ユビナデ	5Y 3/1 オリーブ黒	・ 面黒
66—124 113—124	第 3 トレンチ 黄褐色土	黒色 土器 埴 埴		H : (54) C : (16.5) B : (7.5)	O. ユビナデ i. 不明	O. ユビナデ i. ミガキか	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. 10Y R 7/4 にぶい黄 褐 i. 黒	・ 内黒
66—125 117—125	第 3 - c トレン チ 黄褐色土	瓦器 埴 埴		B : (5.0)		O. ヘラミガキ i. らせん状ヘラミガキ	O. ユビナデ i. ユビナデ	N 4/0 灰	
66—126 113—126	第 3 - c トレン チ 黄褐色土	須恵器 甕 甕		W : 99		O. (上半) ユビナデか (下半) ヘラケズリ→ ユビナデ i. ユビナデ	O. ヘラケズリ→ユビナデ i. 無調整	N 6/0 灰～N 5/0 灰	・ 自然釉あり
66—127 113—127	第 3 トレンチ 黄褐色土	土師器 甕 甕		C : (18.0)	O. ユビナデ i. ユビナデ	O. ユビナデ i. ユビナデ 押捺		O. 5Y R 6/4 にぶい橙 i. 10Y R 8/2 灰白	・ 外面にスス付 着
66—128 117—128	第 3 トレンチ 黄褐色土	土師器 甕 甕		C : (15.0)	O. (口縁) ユビナデ (頸) ハケメ→ ユビナデ i. 櫛方向ユビナデ	O. 櫛方向ユビナデ i. ユビナデ		O. 5Y R 6/4 にぶい橙 i. 7.5Y R 5/4 にぶい褐	
66—129 113—129	第 3 トレンチ 耕作土	土師器 羽釜		C : 21.8	O. ユビナデ i. 押捺	O. マメツ不明 i. マメツ不明		7.5Y R 8/2 灰白	・ 外面にスス付 着
67—130 113—130	第 4 トレンチ 前方形部 流入溝 最下層	壺	N—?—a	C : 12.7	O. マメツ不明 (ミガキA か) i. マメツ不明 (ミガキA か)	O. マメツ不明 (ミガキA か) i. マメツ不明 (ミガキA か)		O. 7.5Y R 7/6 にぶい橙 ～7.5Y R 6/4 にぶい 橙 i. 5Y R 6/4 にぶい橙	
67—131 113—131	第 4 トレンチ 前方形部北東隅 流入溝 最下層	底部 (壺)	2—A—・	B : 52		O. スリナデ I A a i. スリナデ I A a	O. 押捺 A i. ケズリ B	茶褐	
67—132 117—132	第 4 トレンチ 前方形部北東隅 流入溝 最下層	底部 (甕)	3—C—a	B : (3.8)			O. スリナデ I C a i. スリナデ I A a	10Y R 6/3 にぶい黄橙	

表 34 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (13)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
68—133 117—133	第 4 トレンチ 前方部北東隅 流入溝 最下層	脚台 (高坏)	4 (か2) —B —?	—		O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. マメツ不明	10Y R7/2にぶい黄褐	
68—134 113—134	第 4 トレンチ 前方部北東隅 流入溝 最下層	脚台 (小形器 台)	5—A—?	B : (10.9)			O. (上半) ミガキ A (裾) スリナデ I C a i. スリナデ I C a	10Y R7/2にぶい黄褐	
68—135 113—135	第 4 トレンチ 前方部北東隅 流入溝 下層	小形丸 底鉢	II—D I	C : 11.8	O. (口唇) スリナデ I B? (口縁~頸) ケズリ→ミガキ A i. (口唇) スリナデ I B (口縁~頸) ミガキ A	O. ? i. スリナデ I C a		2.5Y R6/6橙	
68—136 113—136	第 4 トレンチ 前方部北東隅 流入溝 上層	壺	㊦—C—a	C : 23. 0	O. (上半) スリナデ I B→ 液体文5本→ 竹箸彫彩律文 (下半) スリナデ I B i. スリナデ I B			10Y R8/2灰白	
68—137 114—137	第 4 トレンチ 前方部北東隅 流入溝 上層	高坏	E—・—・—・	C : 12.3	O. (口唇) スリナデ I B i. (口唇) スリナデ I B	O. (上半) ミガキ A (下半) ケズリ→ミガキ ミガキ A ヨコ→ミガキ A タテ		O. 5Y R6/6橙 i. 7.5Y R6/6橙~5Y R6/6橙	
68—138 114—138	第 4 トレンチ 前方部北東隅 流入溝 上層	高坏	B <sub>6</sub> —4—B—・	H : 8.7 C : 11.1 B : 9.8	O. ミガキ A か? i. スリナデ I B ヨコ	O. ミガキ A か i. (上半) スリナデ I A a (下半) スリナデ I C a	O. (柱状部) ケズリ→ ミガキかスリナデ I C (裾部) スリナデ I B (柱状部) スリナデ I C a i. (裾部) スリナデ I B	7.5Y R7/4にぶい橙	
68—139 114—139	第 4 トレンチ 前方部 北東隅周濠 最下層	脚台 (高坏)		B : 17.8			O. ミガキ A i. スリナデ I A a (裾) スリナデ I C a	10Y R6/2灰黄褐	
68—140 117—140	第 4 トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 Y	・—・—?	C : (14.0)	O. スリナデ ヨコ I C a i. スリナデ ヨコ I C a	O. 右上がりタタキ		10Y R7/3にぶい黄橙	
68—141 117—141	第 4 トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 Y	・—・—?	C : (15.0)	O. スリナデ ヨコ I C a i. スリナデ ヨコ I C a			O. 2.5Y 4/1黄灰 i. 2.5Y 6/3にぶい黄	
68—142 117—142	第 4 トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 S Y	・—・—d ?	C : (16.0)	O. スリナデ ヨコ I C a i. スリナデ ヨコ I C a			10Y R7/3 にぶい黄橙	
68—143 117—143	第 4 トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F	・—・—?	C : (13.0)	O. スリナデ ヨコ I C a i. スリナデ ヨコ I C a			10Y R7/3 にぶい黄橙	

表 35 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (14)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
68—144 117—144	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F	・—・—g	C : (128)	O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a	O. スリナデ I A a i. ケズリ B	6/cm		7.5Y R 7/2明褐灰	
68—145 117—145	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F ?	・—・—a ?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				10Y R 6/3にぶい黄褐	
68—146 117—146	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 ?	・—・—?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 2.5 Y 3/1黒褐 i. 2.5 Y 5/2暗灰黄	
68—147 117—147	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F		—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				7.5Y R 8/4浅黄橙	
68—148 117—148	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F	?	—	O. スリナデヨコ I B i. スリナデヨコ I B				7.5Y R 7/4にぶい橙	
68—149 117—149	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F	・—・—e <sub>2</sub>	—	O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a				2.5Y 5/2暗灰黄	・外面にスス付 着
68—150 117—150	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F ?		—					O. 7.5 Y R 7/3にぶい橙 i. 5Y R 7/4にぶい橙	
68—151 117—151	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	甕 F	・—・—e <sub>1</sub>	—	O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a				5Y R 7/4にぶい橙	
68—152 117—152	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	底部 (甕 ?)	6—・	B : 5.4				O. スリナデ I A a i. ケズリ	O. 10Y R 6/2灰黄褐 i. 2.5 Y 5/1黄灰	
68—153 114—153	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	底部 (甕 ?)	2—A—・	B : 6.3				O. スリナデ I A a i. スリナデ I A a	O. 7.5 Y R 6/2灰褐 i. 10Y R 7/2にぶい黄 橙	・底部外面にス ス付着
68—154 114—154	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	脚台 (甕)	東海形	B : 6.0				O. (上半) スリナデ I A a (下半) ミガキ B i. 押捺 A	10Y R 6/2灰黄褐	

表 36 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (15)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
68—155 114—155	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 下層	小形器 台	I—C <sub>4</sub>	H : 88 C : 100 B : 112	O. スリナデI C a i. スリナデI C a	O. ミガキ B i. ミガキ B	O. (上半) ケズリ B ミガキ B i. スリナデI A a→ スリナデI C a	5Y R6/6橙～7.5Y R6/4 にぶい橙	・ 3方スカシ
68—156 114—156	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層下部	鉢		H : 66 C : 79 B : 24	O. スリナデI C a i. スリナデI C a	O. ? i. 押捺	?	10Y R4/2灰黄褐	
68—157 114—157	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層	壺	N—A—b	C : 29.0	O. (口唇) スリナデI C a (口縁) ミガキ A (頸) マメツツ不明 i. (口唇～口縁) ミガキ A (頸) マメツツ不明			5Y R7/6橙	
68—158 117—158	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層	甕 F?	・—・—e <sub>1</sub>	—	O. スリナデヨコI C a i. スリナデヨコI C a			5Y R7/6橙	
68—159 114—159	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層	甕 F	・—・—g <sub>2</sub>	C : (16.0)	O. スリナデヨコI C a i. スリナデヨコI C a	O. スリナデヨコI C a i. ケズリ B		7.5Y R6/3にぶい褐	
68—160 117—160	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層	甕 F	・—・—b?	C : (16.4)	O. スリナデI C a i. スリナデI C a	O. スリナデI A a→ スリナデI C a i. スリナデI C a	6/cm	10Y R7/3にぶい黄橙～ 10Y R6/3にぶい黄橙	
68—161 117—161	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層	甕	吉備形	C : (12.0)	O. スリナデI C a i. スリナデI C a			O. 7.5Y R7/4にぶい橙 i. 2.5Y R6/8橙	
68—162 117—162	第4トレンチ 前方部 北東隅周濠 上層	底部 (?)	3—A—・	C : (4.3)			O. 右上がりタタキ i. スリナデI A a 7/cm	O. 10Y R5/3にぶい黄 橙 i. 10Y R3/2黒褐	
69—163 117—163	第4トレンチ 前方部前面溝 下層 (青灰色粘 質土)	口縁 (壺)	b	C : (11.0)	O. スリナデI C a i. スリナデI A a			7.5Y R6/3にぶい褐	
69—164 117—164	第4トレンチ 前方部前面溝 下層 (青灰色粘 質土)	甕 F	・—・—e <sub>1</sub> ?	—	O. スリナデヨコI C a i. スリナデヨコI C a			7.5Y R7/4にぶい橙	
69—165 117—165	第4トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	壺	N—A <sub>1</sub> —a	C : (20.0)	O. スリナデヨコI C a i. スリナデヨコI C a			7.5Y R8/3浅黄橙～10Y R8/3浅黄橙	

表 37 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (16)

図番号 図版番号	地 層 区 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
69—166 117—166	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	甕 Y ?	・—・—?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			10Y R5/3にぶい黄褐	
69—167 117—167	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	甕 ?	・—・—?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			O. 5Y R7/6橙 i. 7.5Y R7/6橙	
69—168 117—168	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	甕 F	・—・—e <sub>1</sub> ?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			7.5Y R7/4にぶい橙	
69—169 117—169	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	甕 F	・—・—e <sub>2</sub> ?	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			10Y R6/2灰黄褐	・外面にスス付 着
69—170 117—170	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	甕 F	・—・—e <sub>1</sub> ?	C : (11.0)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			O. 7.5Y R7/4にぶい橙 i. 10Y R7/4にぶい黄 橙	
69—171 117—171	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	底部 (甕?)	6—・	B : (5.6)			O. スリナデ I A a→ スリナデ I C a i. ケズリ	O. 10Y R7/2にぶい黄 橙 i. 5Y 5/1灰	
69—172 117—172	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	底部 (甕)	3?—C—?	B : (2.8)			O. スリナデ I C a ? i. マメツ不明	10Y R8/1灰白	
69—173 114—173	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	底部 (甕?)	2—・	B : (4.3)			O. タタキ→ スリナデ I C a i. スリナデ I C a	O. 5Y R7/4にぶい橙 ~2.5Y R6/4にぶい 橙 i. 2.5Y 5/1黄灰	
69—174 117—174	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	底部 (甕?)	1—C—c?	B : (4.3)			O. 左上がりタタキ i. スリナデ I A a・ スリナデ I C a	O. 10Y R7/4にぶい黄 橙 i. 7.5Y R7/6橙	
69—175 117—175	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	口縁 (高坏)		C : (18.0)	O. マメツ不明 i. ミガキ A か?			10Y R7/2にぶい黄橙	
69—176 117—176	第 4 トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	脚台 (小形器 台)		B : (10.0)			O. ミガキ A ヨコ i. スリナデ I C a	5 Y R6/6橙	

表 38 纏向石塚古墳第 4 次調査出土土器観察表 (17)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
69—177 114—177	第4トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	円筒 埴輪 底部		—				O. B種ヨコハケ i. ユビナデタテ	2.5Y 8/2灰白	・底部に凹線あり
69—178 117—178	第4トレンチ 前方部前面溝 中層 (黒灰色砂 質土)	円筒 埴輪 胴部		—		O. タテハケ i. ユビナデ	7/cm		O. 5Y R7/6橙 i. 10Y R8/4浅黄橙	
69—179 117—179	第4トレンチ 前方部前面溝 上層 (黒褐色土)	甕 ？		—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				10Y R6/3にぶい黄橙	
69—180 117—180	第4トレンチ 前方部前面溝 上層 (黒褐色土)	須恵器 高坏？		—		O. 回転ナデ i. 回転ナデ			N5/0灰	
69—181 114—181	第4トレンチ 前方部前面溝上面 包含層 黒褐灰色土	土師器 碗		C : 10.0 H : 2.9	O. ヨコユビナデ i. ユビナデ	O. 押捺 i. ユビナデ		O. 押捺 i. ユビナデ	7.5Y R8/4浅黄橙	
69—182 117—182	第4トレンチ 周濠上面	土師器 小皿		H : (1.5) C : (9.6)	O. ヨコユビナデ i. ヨコユビナデ	O. 押捺 i. 押捺		O. 押捺 i. 押捺	O. 5Y R6/6橙 i. 7.5Y R7/4にぶい橙	
69—183 117—183	第4トレンチ 周濠上面	土師器 小皿		H : (1.4) C : (10.0)	O. ヨコユビナデ i. ヨコユビナデ	O. 押捺 i. ユビナデ		O. 押捺 i. ユビナデ	O. 10Y R7/4にぶい黄 橙 i. 5Y R6/6橙	
69—184 114—184	第4トレンチ 周濠上面	土師器 小皿		H : (1.4) C : (10.0)	O. ヨコユビナデ i. ヨコユビナデ	O. 押捺 i. ヨコユビナデ		O. 押捺 i. ユビナデ	O. 5Y R6/6橙 i. 7.5Y R7/6橙	
69—185 117—185	第4トレンチ 周濠上面	土師器 皿		C : (12.0)	O. ヨコユビナデ i. ヨコユビナデ	O. 押捺 i. 押捺			5Y R5/4にぶい赤褐	
69—186 117—186	第4トレンチ 周濠上面	土師器 甕		C : (28.0)	O. ヨコユビナデ i. ヨコハケ	O. タテハケ i. ユビナデ			O. 7.5Y R6/4にぶい黄 橙 i. 7.5Y R4/2灰褐	



表 39 纏向石塚古墳第4次調査出土木器観察表 (1)

図番号 図版番号	種類	地層	区 位	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	木取り	備 考 (実測番号)
70—1 118—1	第3トレンチ 周濠底	直柄鋤		L : 101.2 D : 3.4 I : 31.4 w : 16.1 t : 2.7	・把手を折損 ・身部は角肩で ・身部横断面は中央がややふくらんだ菱形を呈する	・身部両面に幅2.5cm前後の手斧痕がみられる	柃目材	・柄部と鋤先が使用により磨耗している (纏向 55 - 3)
71—2 118—2	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	横槌		L : 37.3 D : 4.3 I : 19.5 w : 7.0 t : 7.6	・身部と握り部の境目がくびれない ・身部は断面円形	・握り部には手斧痕がみられる ・両木口には材を切り取った際の工具痕がみられる	芯持材	・明瞭な使用痕が認められない ・身の一部に樹皮が残る (纏向 55 - 15)
71—3 118—3	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	横槌		L : 28.5 D : 3.3 I : 13.1 w : 6.4 t : 5.7	・身部と握り部の境目がくびれる ・身部は断面方形	・握り部に細かい手斧痕がみられる	芯持材	・身部は使用による磨耗が激しく、四面のうち二面が特によく使われている (纏向 55 - 7)
71—4 118—4	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	鎌身 (平鉄)		L : 9.9 w : 15.0 t : 2.5 柄孔 : 3.5	・身部のうち柄孔周辺のみが残存 ・柄孔周囲の隆起がなだらかで段を成さない	・身部両面に手斧痕がみられる	柃目材	(纏向 55 - 12)
71—5 118—5	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	鋤身 (着柄鋤)		L : 64.2 w : 11.3 t : 軸部上半 1.5 軸部下半 2.0	・軸部上半は段をつけて刃部より薄く加工している	・身部両面に幅2cm前後の手斧痕がみられる	柃目材	(纏向 55 - 4)
71—6 119—6	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	直柄鋤		L : 87.7 W : 11.3 D : 2.9 × 2.7 I : 25.8 w : 13.4 t : 2.3	・把手は逆半円形で、櫛木を太くつくる ・身部は角肩で、横断面は前中央がややふくらみ後面は平坦である ・身部の亀裂を植物質のもので縛って補修している	・身部前面に手斧痕がみられる	柃目材	・鋤先が使用により磨耗している (纏向 55 - 10)
72—7 119—7	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	直柄鋤		L : 53.6 D : 3.4 × 3.1 I : 23.5 w : 17.3 t : 2.7	・柄部の一部と把手を折損 ・身部は角肩 ・身部横断面は前中央がややふくらみ、後面は平坦	・身部両面に手斧痕がみられる	柃目材	(纏向 55 - 6)
72—8 119—8	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	直柄鋤		L : 62.6 D : 3.2 × 3.0 I : 27.1 w : 13.2 t : 2.6	・柄部の一部と把手を折損 ・身部は角肩 ・身部横断面は前中央がややふくらみ、後面は平坦	・身部および柄部に手斧痕がみられる	柃目材	・柄部と鋤先が使用により磨耗している (纏向 55 - 5)
72—9 120—9	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	直柄鋤		L : 77.9 D : 3.3 × 2.2 I : 19.4 w : 14.5 t : 2.2	・把手の大半を折損 ・身部は角肩 ・身部横断面は前中央がややふくらみ後面は平坦	・全体に幅1～2cm程度の手斧痕がみられる	柃目材	・柄部が使用により磨耗している (纏向 55 - 2)
72—10 119—10	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	直柄鋤		L : 24.3 w : 15.9 t : 2.2	・柄部と把手を折損 ・身部は角肩 ・身部横断面は前中央がややふくらみ後面は平坦	・身部前面に手斧痕がみられる	柃目材	(纏向 55 - 11)
73—11 120—11	第3トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	直柄鋤		L : 85.9 D : 3.6 × 1.8 I : 26.6 w : 11.7 t : 2.1	・把手を折損 ・身部は角肩	・身部両面に柄部に刃幅3cm程度の手斧痕がみられる	柃目材	・柄部が使用により磨耗している (纏向 55 - 1)

表 40 纏向石塚古墳第 4 次調査出土木器観察表 (2)

図番号 図版番号	種 類	地 区 層	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	木取り	備 考 (実測番号)
73-12 120-12	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	朱付き棒	L : 28.8 D : 約 1.5 ~ 2.4	・木口の一端は斜めに削り、他端は材を切り離したままの状態 ・断面円形		分割材	・赤色顔料の塗布が認められる (纏向 55 - 19)
73-13 120-13	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	朱付き棒	L : 18.2 D : 約 1.8 ~ 2.1	・木口の一端は V 字に切り込み、他端は材を切り離したままの状態 ・断面円形		分割材	・赤色顔料の塗布が認められる (纏向 55 - 20)
73-14 121-14	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	加工板	L : 54.0 W : 6.3 T : 1.9	・側面は両側ともに折損 ・木口の一方を平坦に、他方を V 字に削り込んでいる	・表裏両面と短辺の端面に手斧痕がみられる	板目材	・赤色顔料の塗布が認められる (纏向 55 - 16)
73-15 —	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	板状木片	L : 50.4 W : 6.3 T : 1.9	・両木口を斜めに削る ・断面長方形	・両面に手斧痕がみられる		
73-16 121-16	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	角棒状木片	L : 72.4 W : 2.5 T : 1.5	・断面方形	・両面に手斧痕がみられる		(纏向 55 - 13)
74-17 122-17	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層 下層	有孔板状木製品	L : 80.7 W : 20.0 T : 2.0	・一部折損 ・片面には直線的に連なる小孔がみられ、他面には人為的なものか不明であるが多数の凹線が走る	・両面に手斧痕がみられる	板目材	・一部が被火により炭化 (纏向 55 - 21)
75-18 121-18	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	槽				板目材 半裁材	(纏向 55 - 14)
75-19 —	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	有孔棒	L : 30.5 W : 3.4 T : 3.1 孔約 2 × 1	・方形の穴が穿たれている ・断面不整円形		分割材	
75-20 121-20	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	有孔板状木製品	L : 48.0 W : 12.1 T : 2.8	・一部折損 ・両面に、直線的に連なる小孔がみられる		板目材	・一部が被火により炭化
75-21 —	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	矢板状木製品	L : 35.0 W : 11.7 T : 2.9				
75-22 —	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	加工木	L : 15.2 W : 7.4 T : 厚い部分 2.5 薄い部分 1.4				

表 41 纏向石塚古墳第 4 次調査出土木器観察表 (3)

図番号 図版番号	種 類	地 区 層	法 量 (復元) cm	形 態 的 特 徴	技 術 的 特 徴	木取り	備 考 (実測番号)
75—23	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	角材	L : 10.6 W : 11.2 T : 3.5	・断面長方形	・表裏と両木口に手斧痕がみられる ・特に表面は細かく丁寧に整形している		
—							
75—24	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	角棒状木片	L : 41.4 W : 4.8	・両木口を斜めに削る	・刃幅約 3 cm の手斧痕がみられる		
—							
75—25	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	加工板	L : 32.6 W : 59.5 T : 28.0	・両側を折損	・表裏両面と木口に手斧痕がみられる	板目材	(纏向 55 - 18)
121—25							
76—26	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	柱状木製品	L : 179.7 W : 約 7.6	・端部は、一方が腐食しており、他方には縦方向に刻むように刃痕が認められる ・材を斜めに削り込む部分が 2 ヶ所ある	・全面に手斧による丁寧に丁寧な瓜削りを施す	芯持材	(纏向 55 - 8)
123—26							
76—27	第 3 トレンチ 周濠内 植物腐植土層	棒状木製品	L : 306.8 W : 6.6	・端部は、一方を折損、他方は刃痕が認められることから切断した可能性はある	・明瞭な加工痕は認められないが、縦方向に面をもっていることから全体的に手斧等で整えてあるとみられる	分削材	(纏向 55 - 9)
123—27							

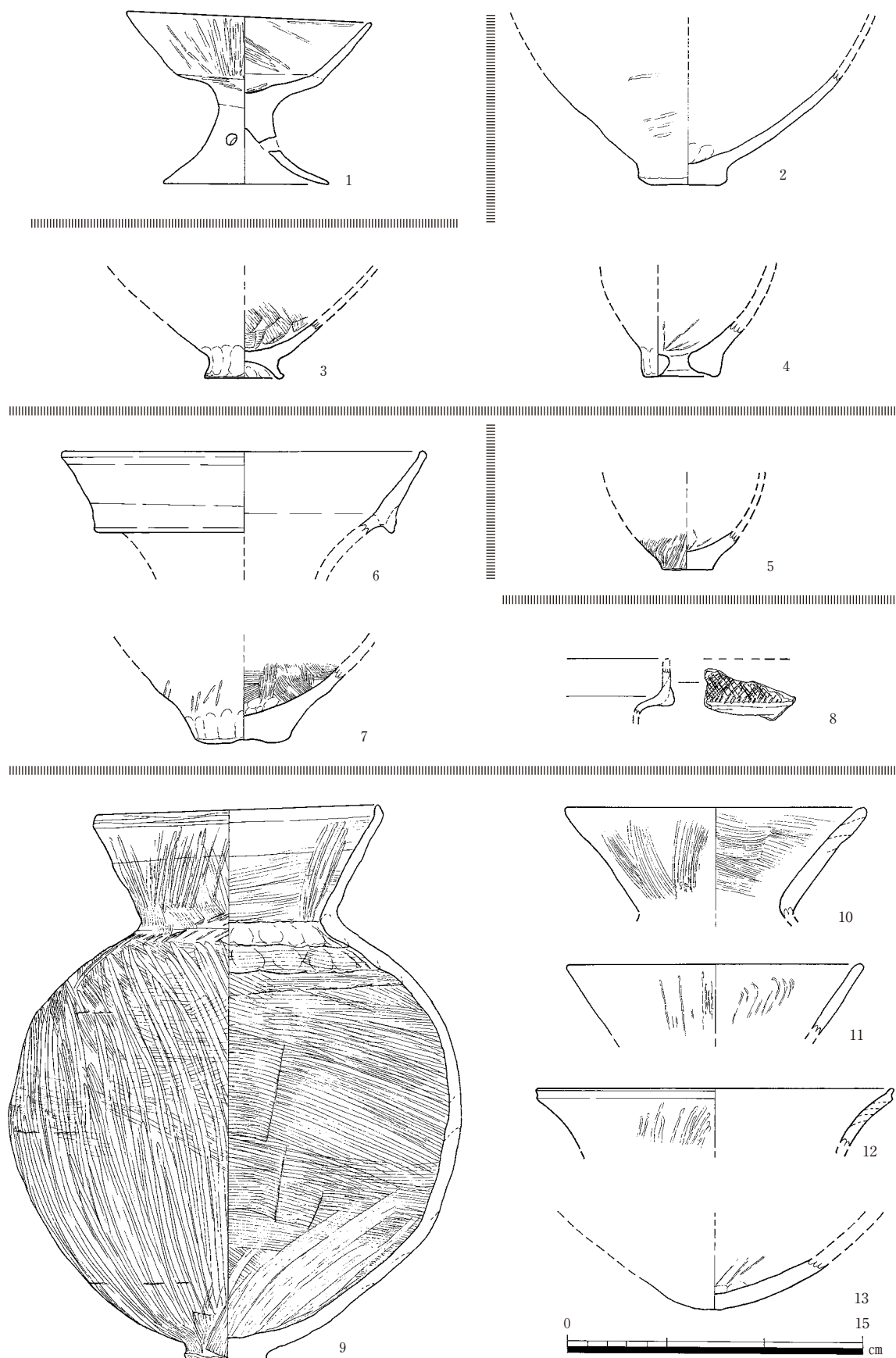


図60 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図1 (1/3)  
 第3トレンチ：1 墳丘盛土 2～4 暗灰褐色土 (墳丘盛土)  
 5 暗青灰色シルト下層 6～8 暗青灰色シルト 9～13 植物腐植土下層

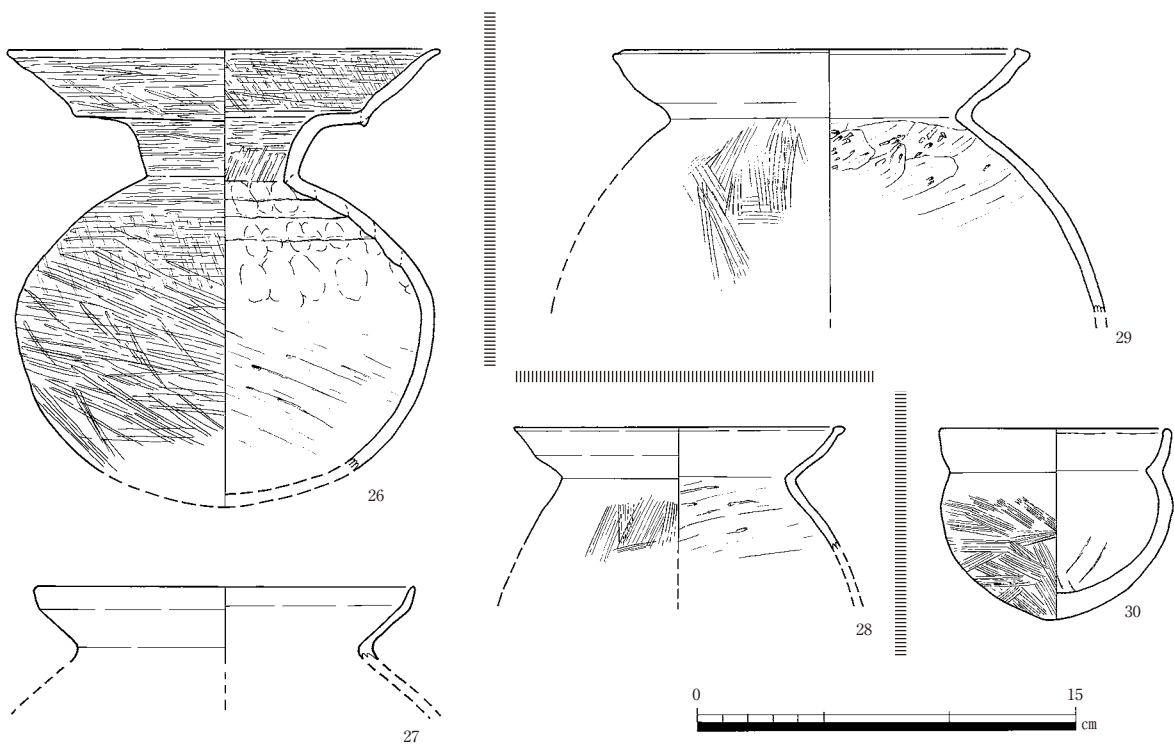
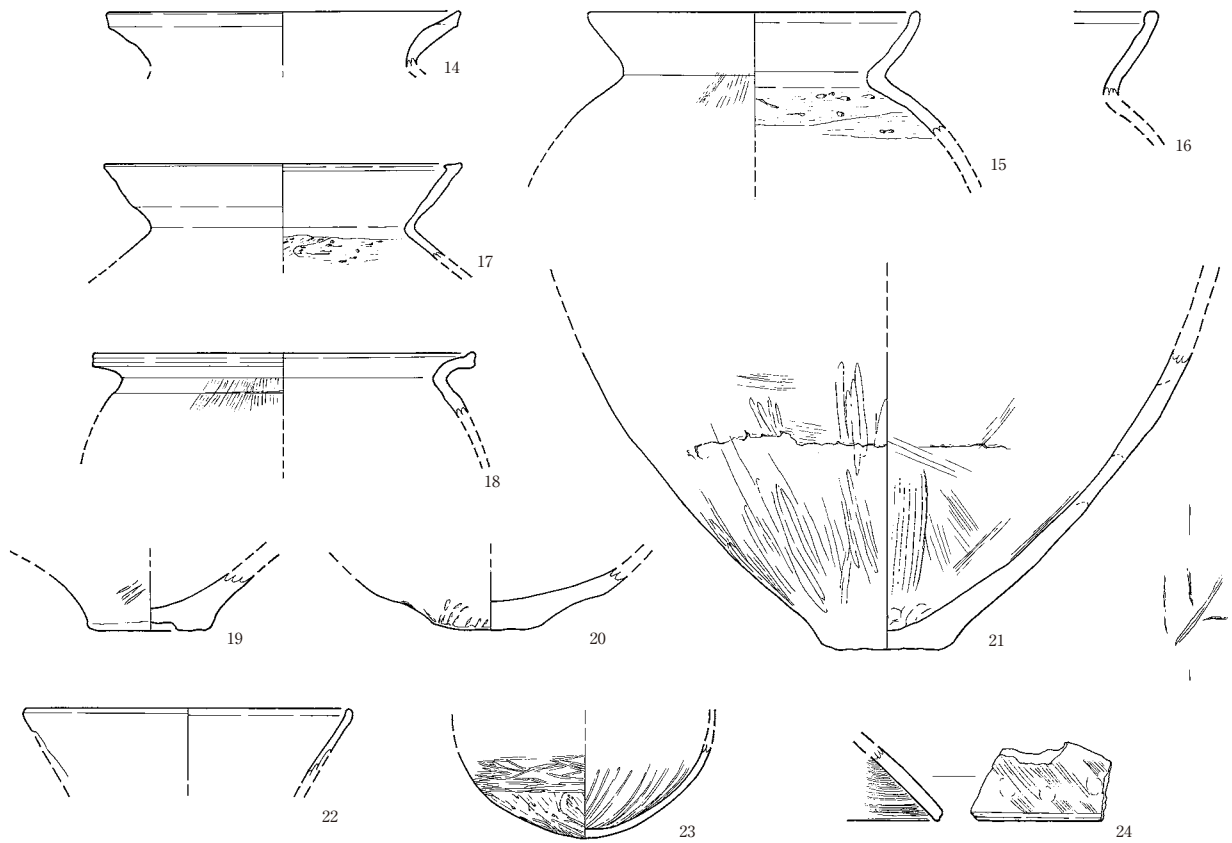


図61 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図2 (1/3)  
 第3トレンチ：14～24 植物腐植土下層 26～28 植物腐植土 29・30 植物腐植土上層 (25) は写真図版のみ

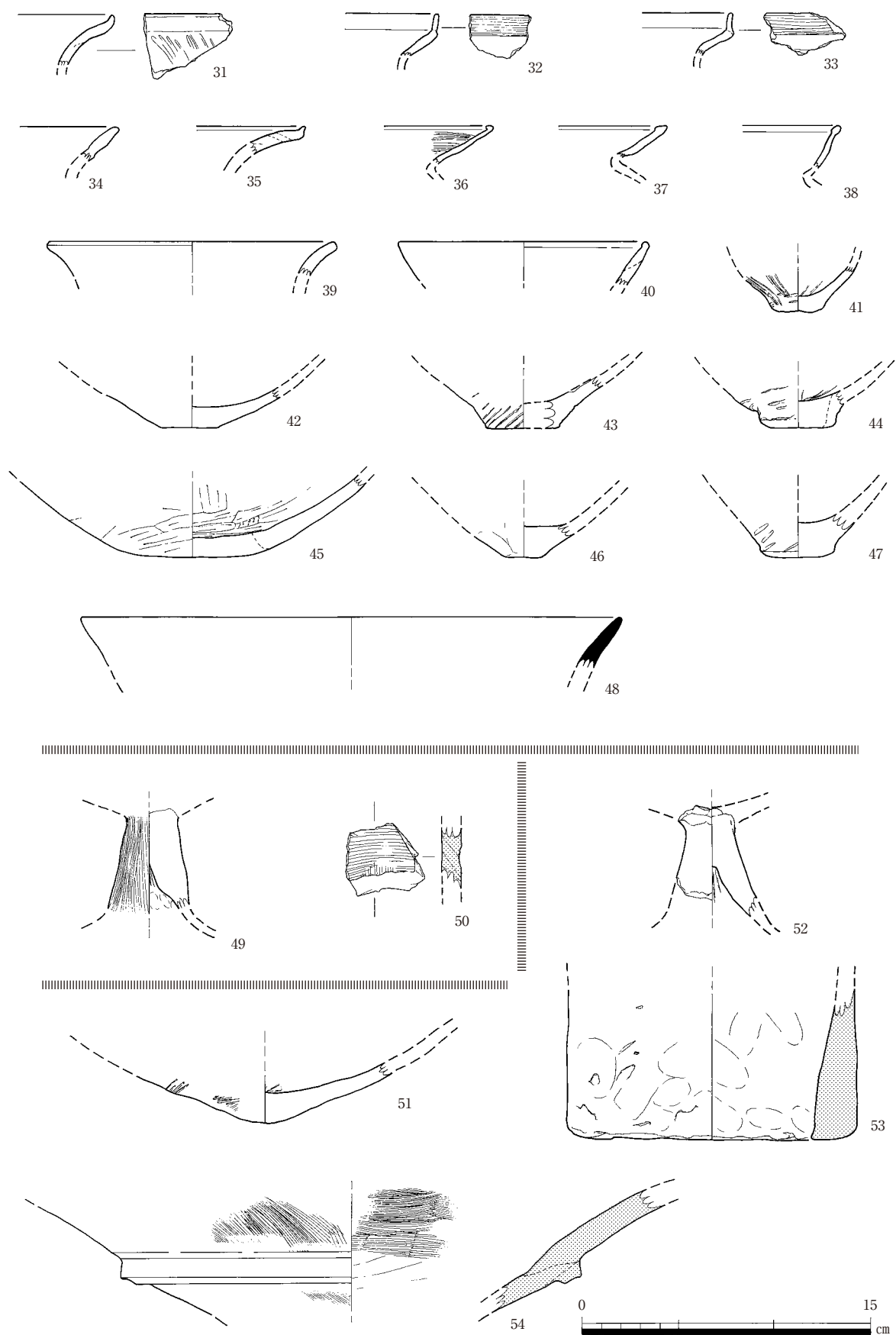


図62 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図3 (1/3)  
 第3トレンチ: 31~48 黒色粘土層 I c 49・50 黒色粘土層 I b 51~54 黒色粘土層 I a



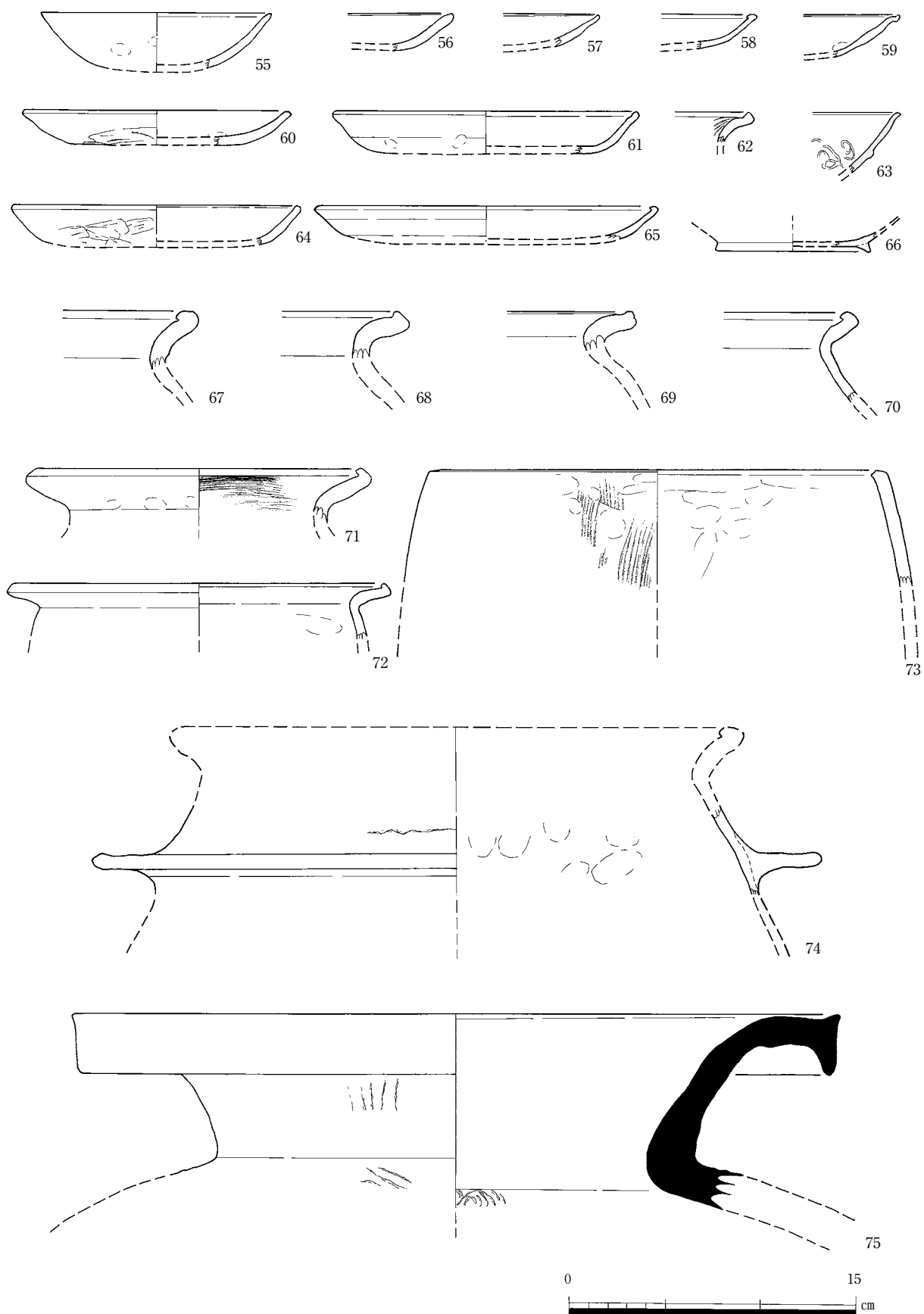


図63 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図4 (1/3)  
第3トレンチ：55～75 黒色粘土層Ⅰa

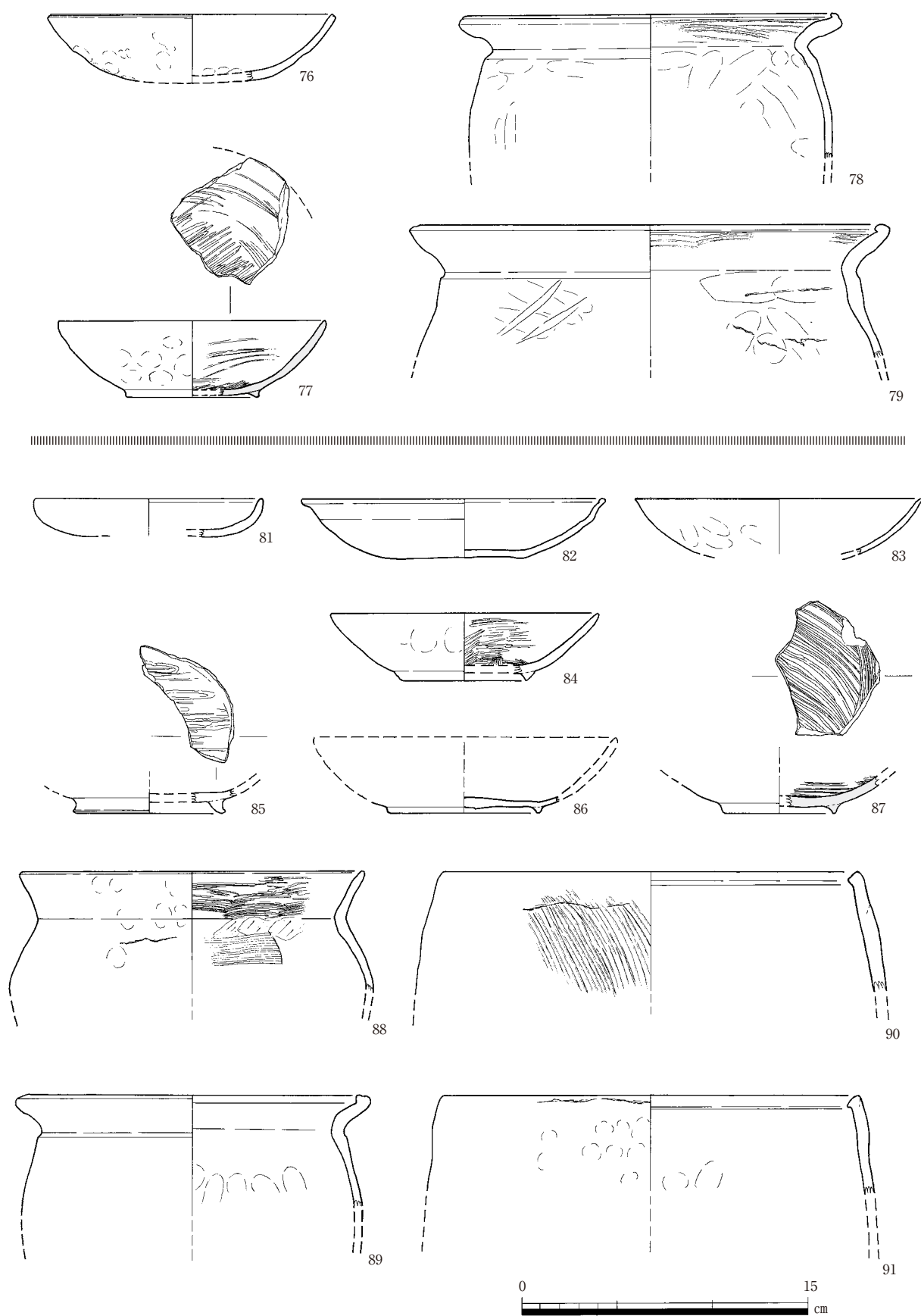


図64 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図5 (1/3)  
 第3トレンチ：76～79 黒褐色土層・黒灰色土層 81～91 黒褐色土層 (80・92) は写真図版のみ

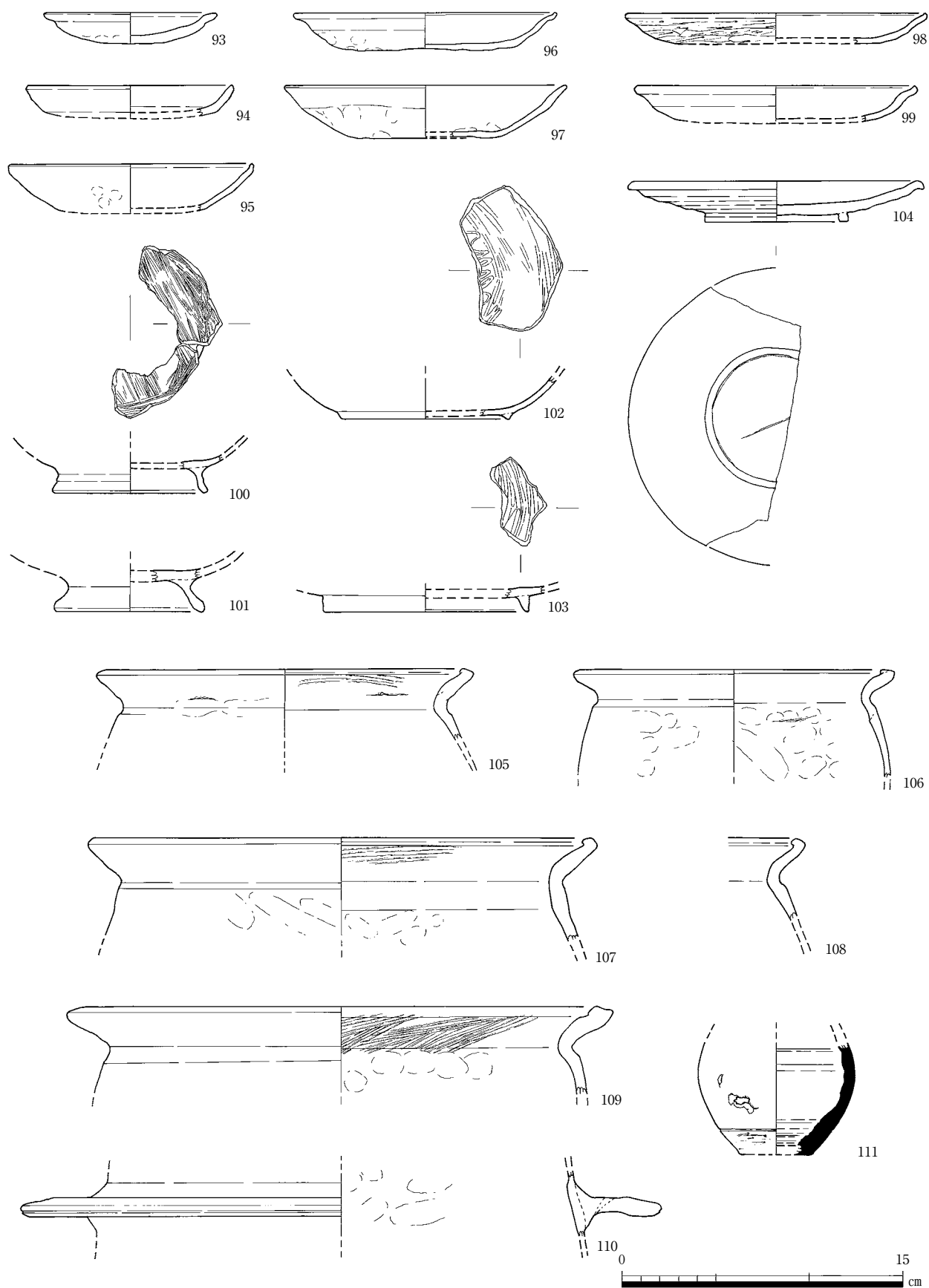


図65 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図6 (1 / 3)  
第3トレンチ：93～111 暗灰褐色土層

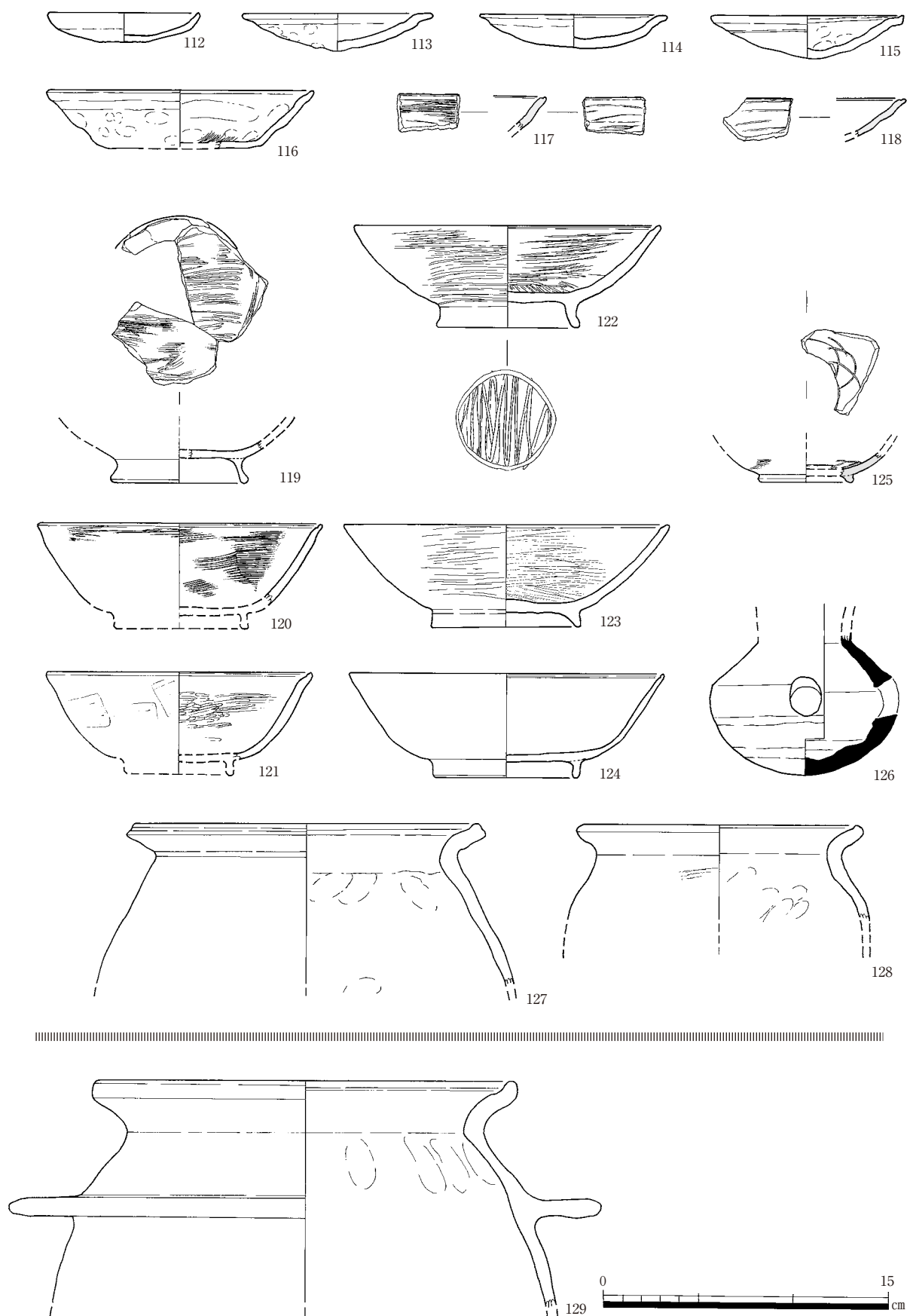


図66 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図7 (1/3)  
第3トレンチ：112～128 黄褐色土（黄灰褐色土）129 耕作土

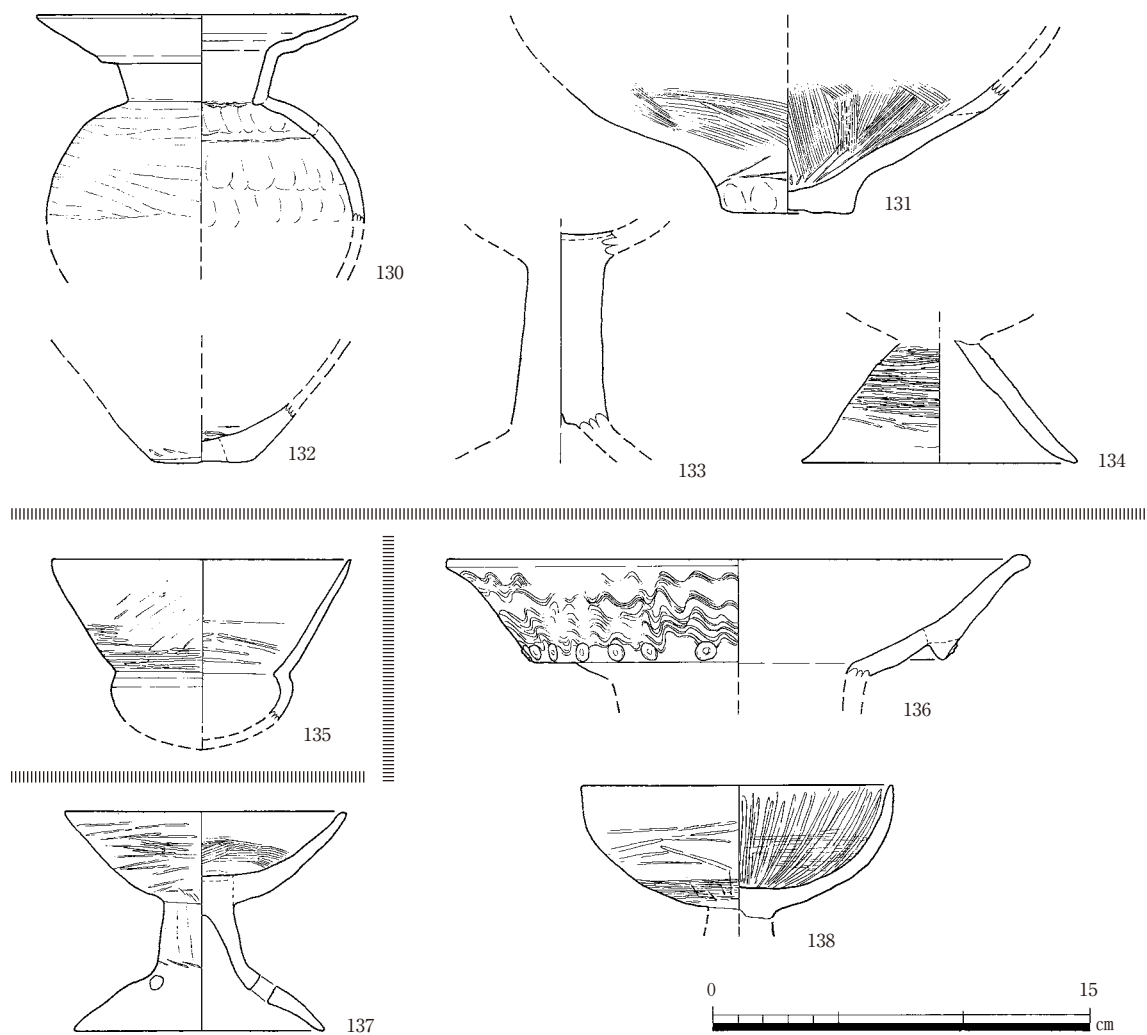


図67 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図8 (1 / 3)  
第4トレンチ：導水溝 130～134 最下層 135 下層 136～138 上層

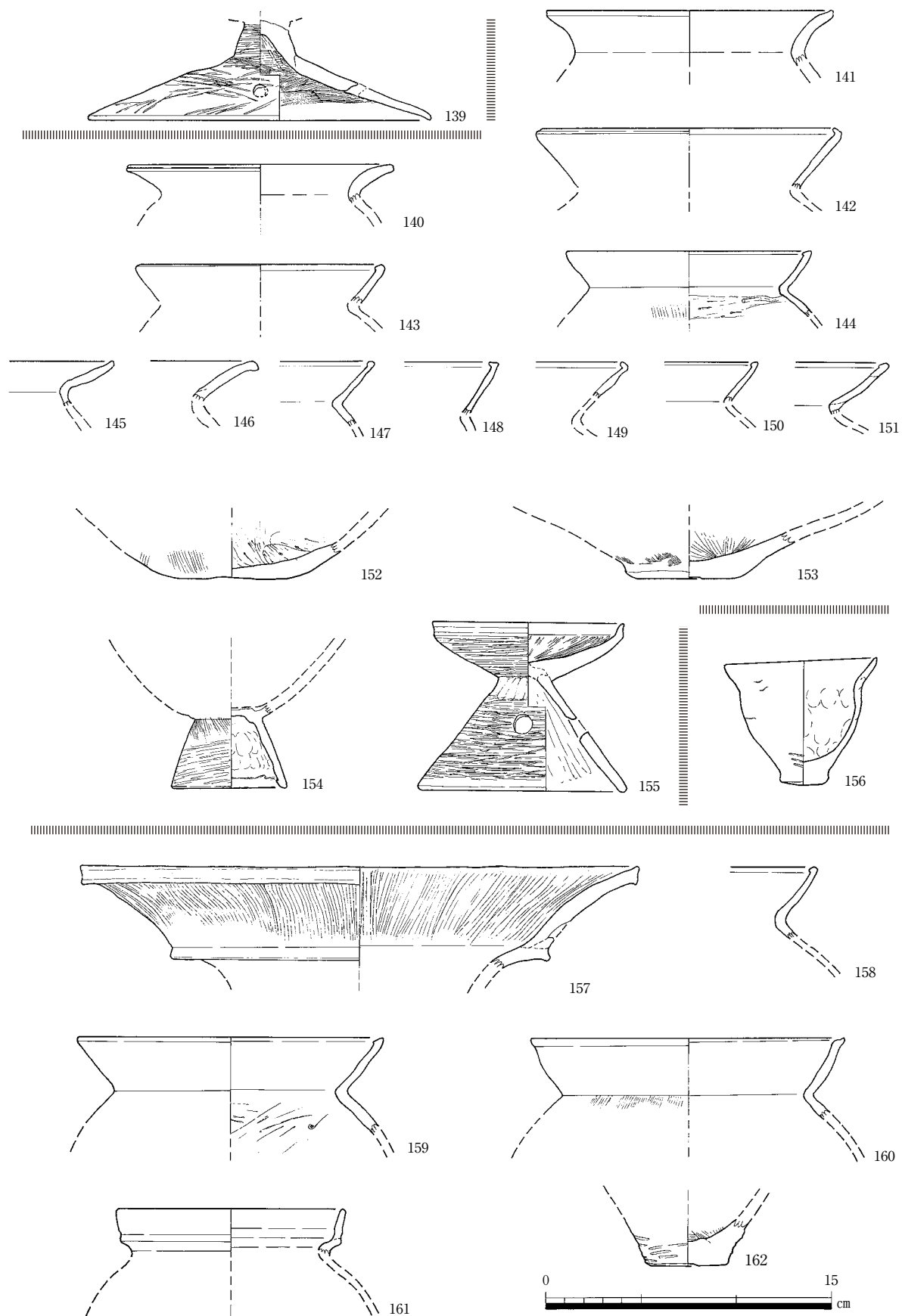


図68 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図9 (1 / 3)  
 第4トレンチ：前方部北東隅周濠 139 最下層 140～155 下層  
 156 下層上部 157～162 上層



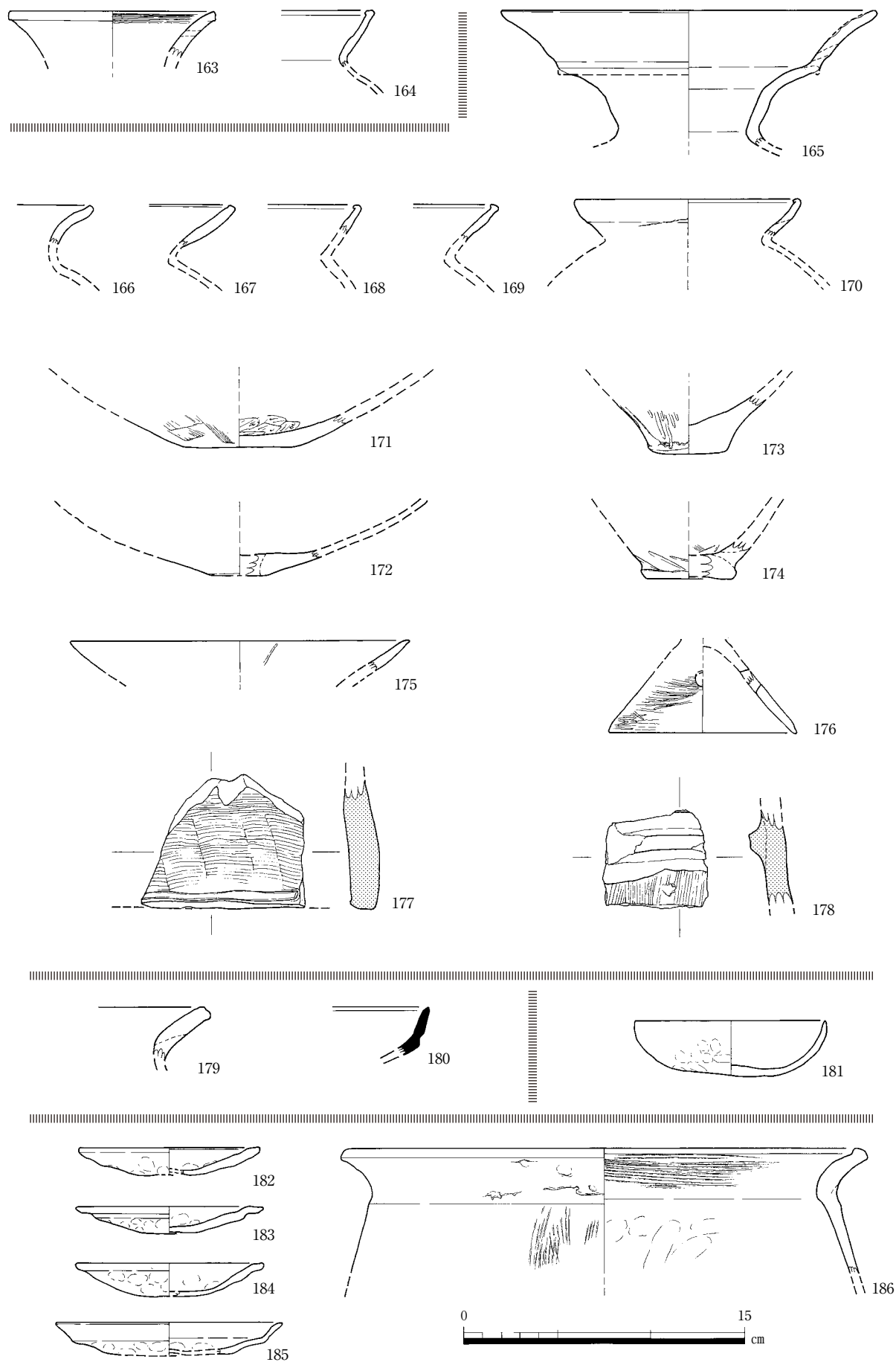


図69 纏向石塚古墳第4次調査出土土器実測図10 (1 / 3)  
 第4トレンチ：前方部前面周濠 163・164下層 165～178 中層 179・180 上層  
 181 前方部前面周濠上面包含層 182～186 周濠内

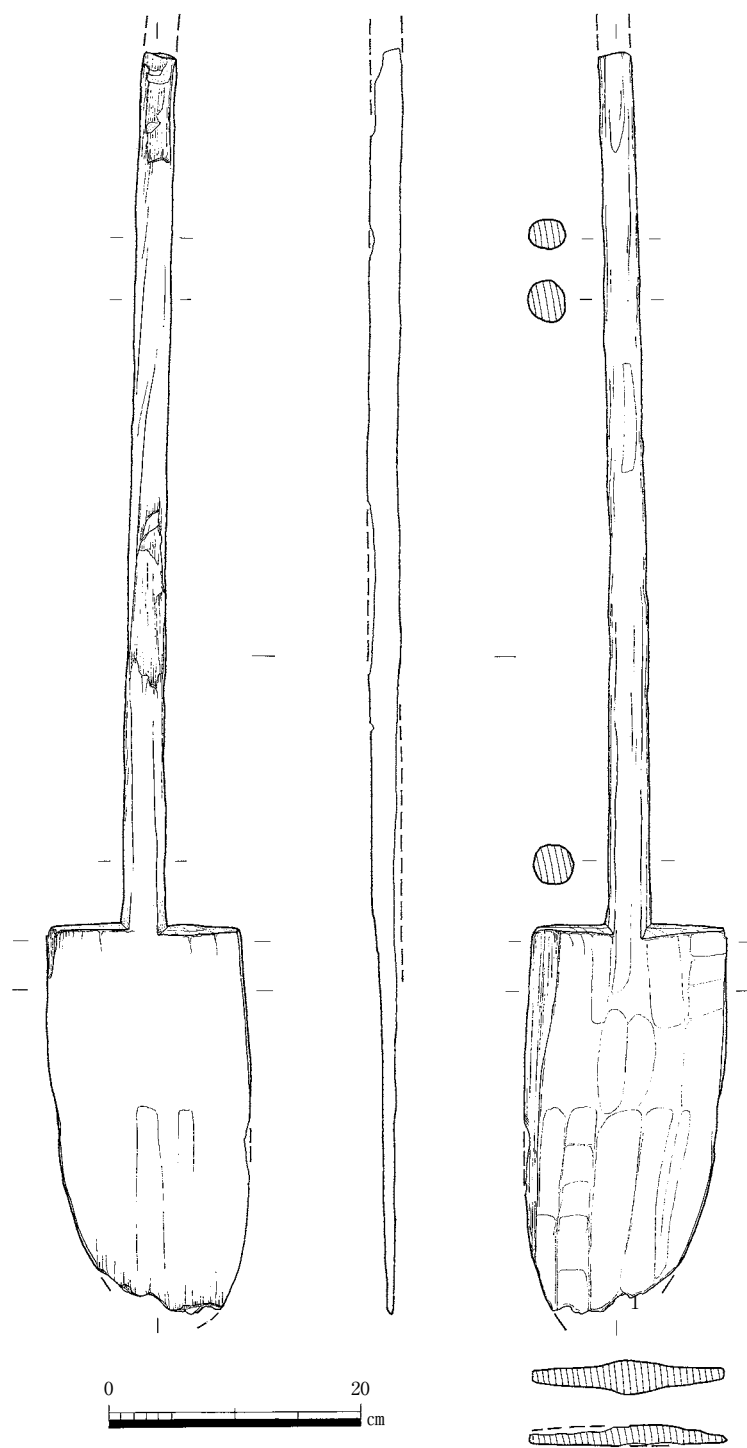


図70 纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図1 (1/6)  
1 周濠底

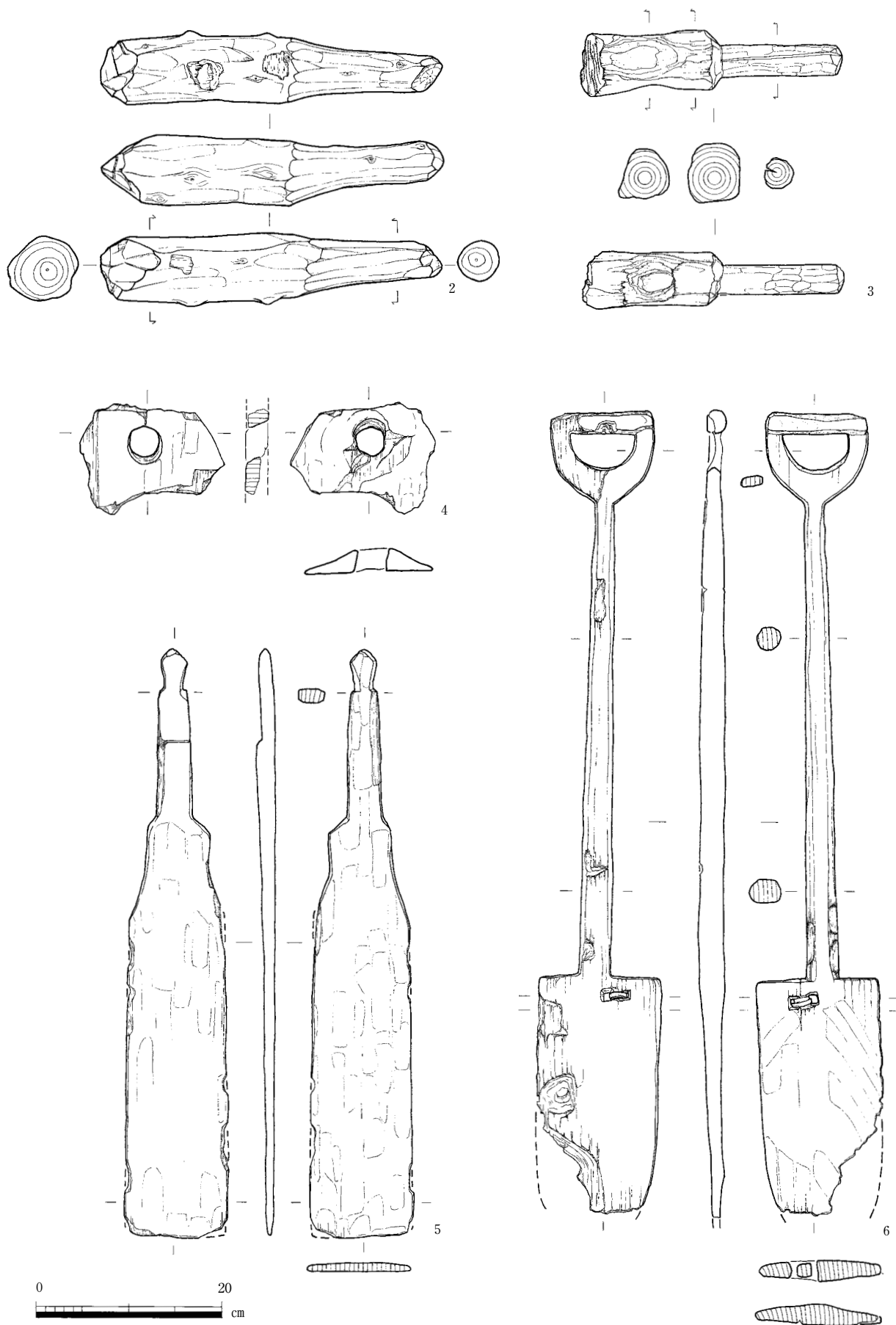


図71 纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図2 (1/6)  
2～6 植物腐植土下層

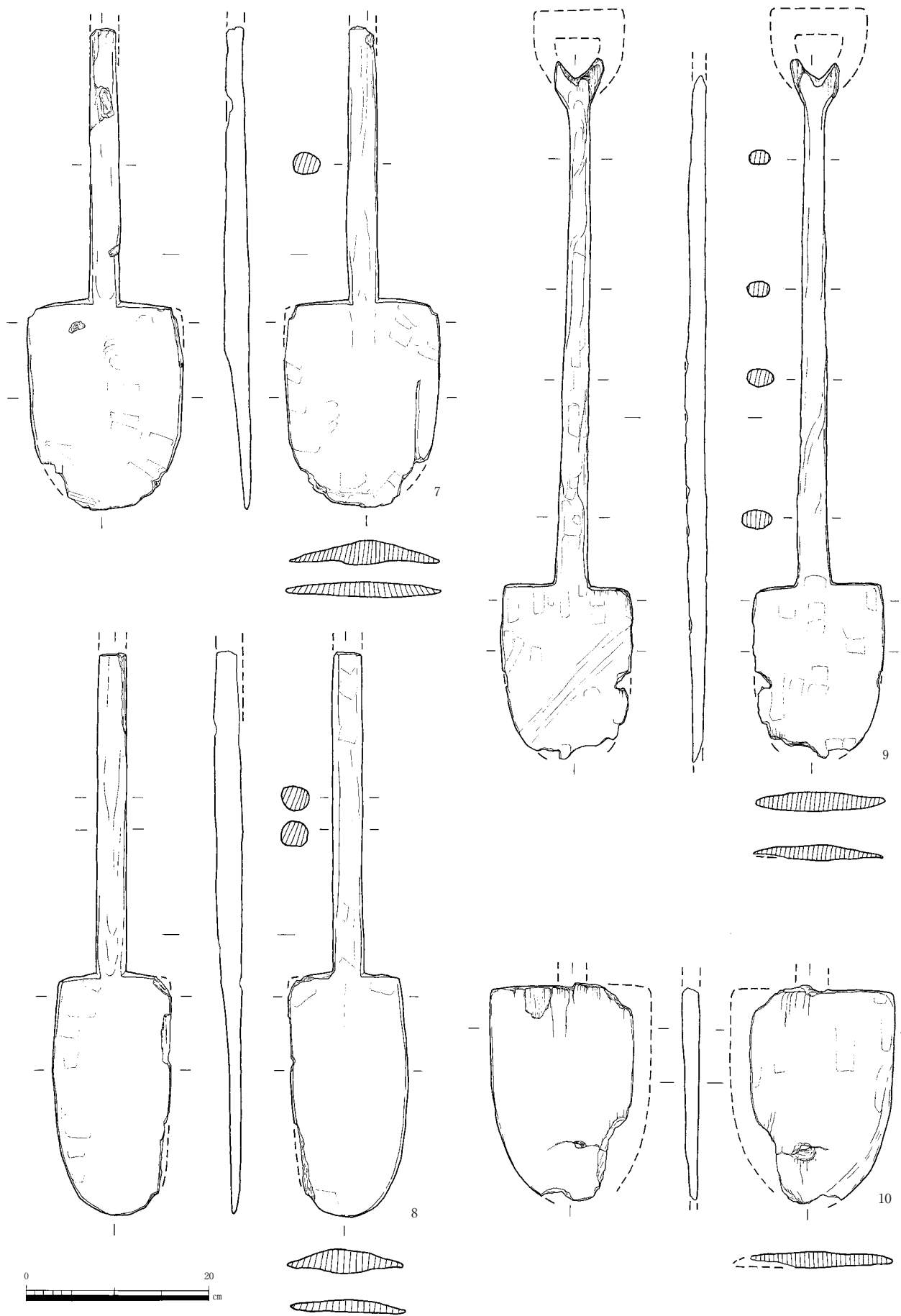


図72 纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図3 (1/6)  
7~10 植物腐植土下層

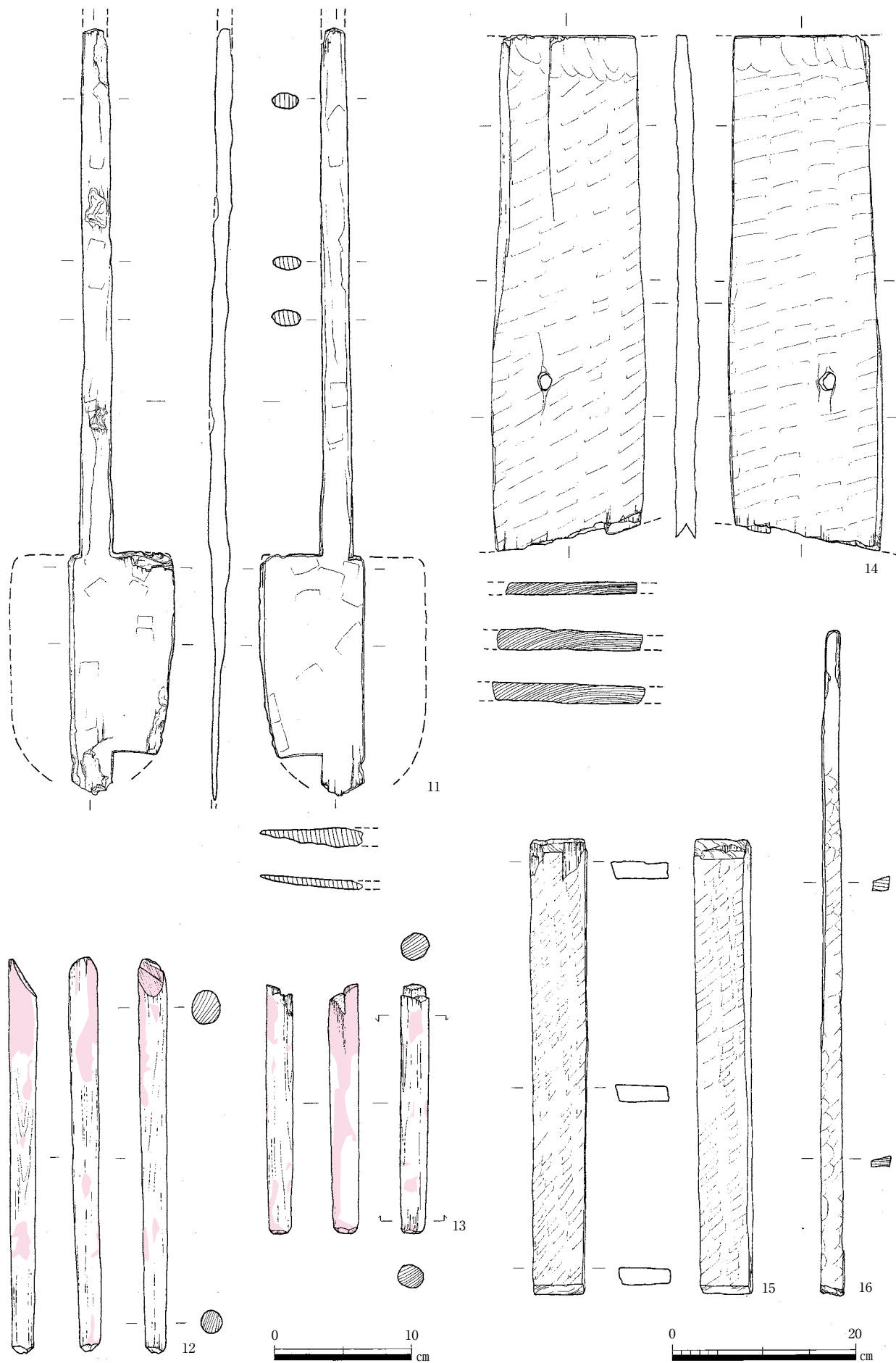


図73 纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図4 (12・13：1／4、11・14～16：1／6)  
11～16 植物腐植土下層

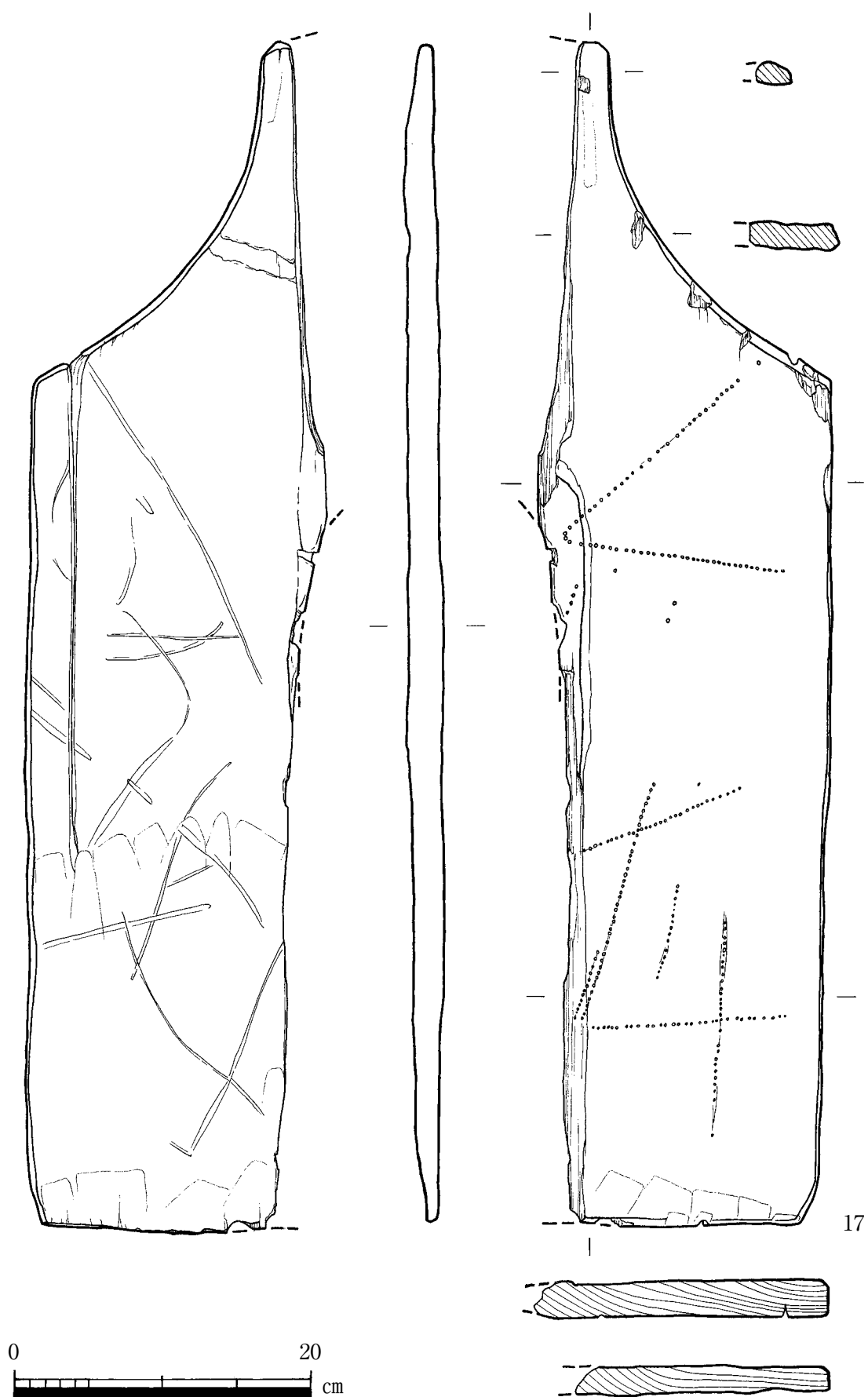


図74 纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図5 (1/4)  
17 植物腐植土下層



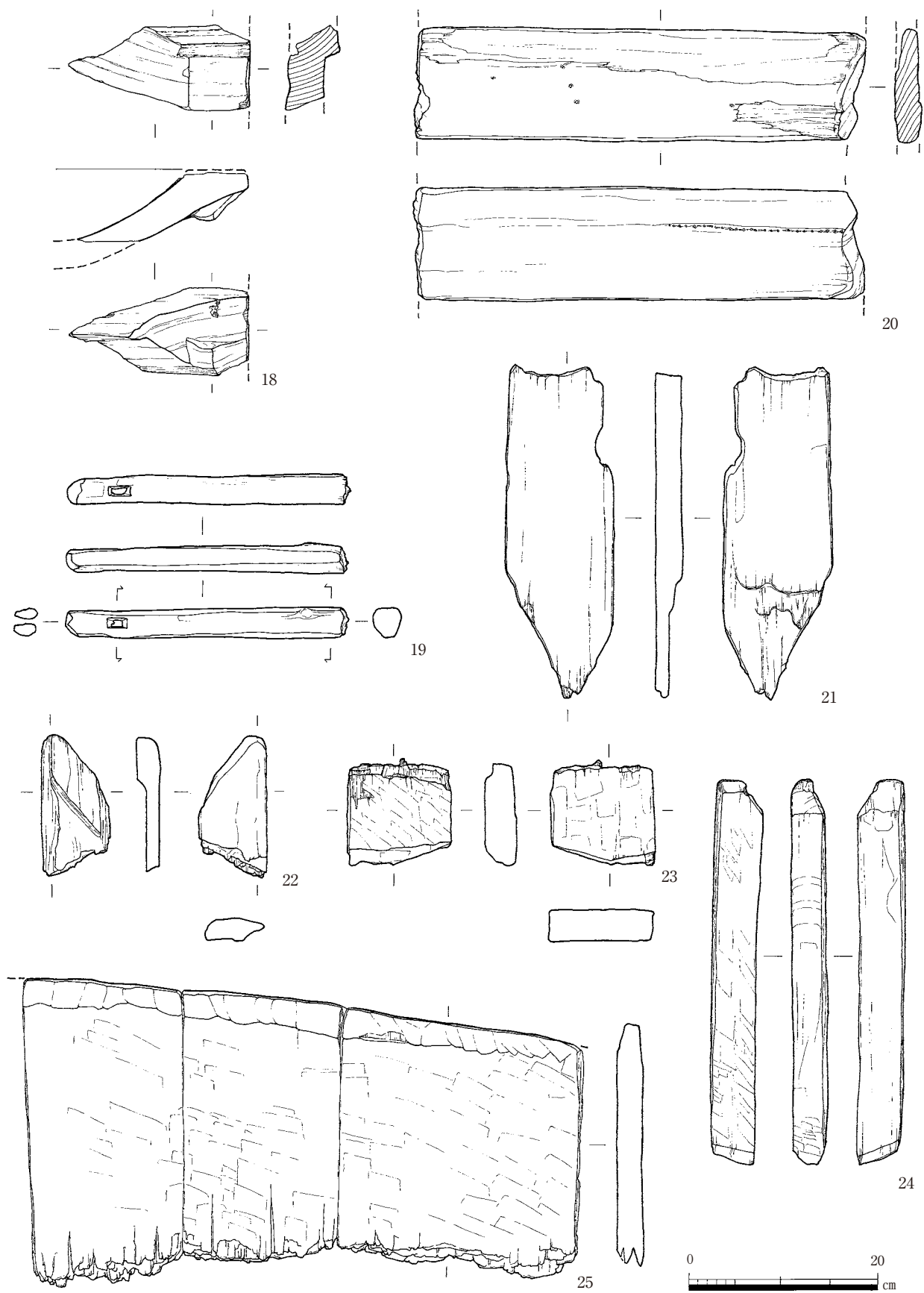


図75 纏向石塚古墳第4次調査出土木器実測図6 (1/6)  
18~25 植物腐植土

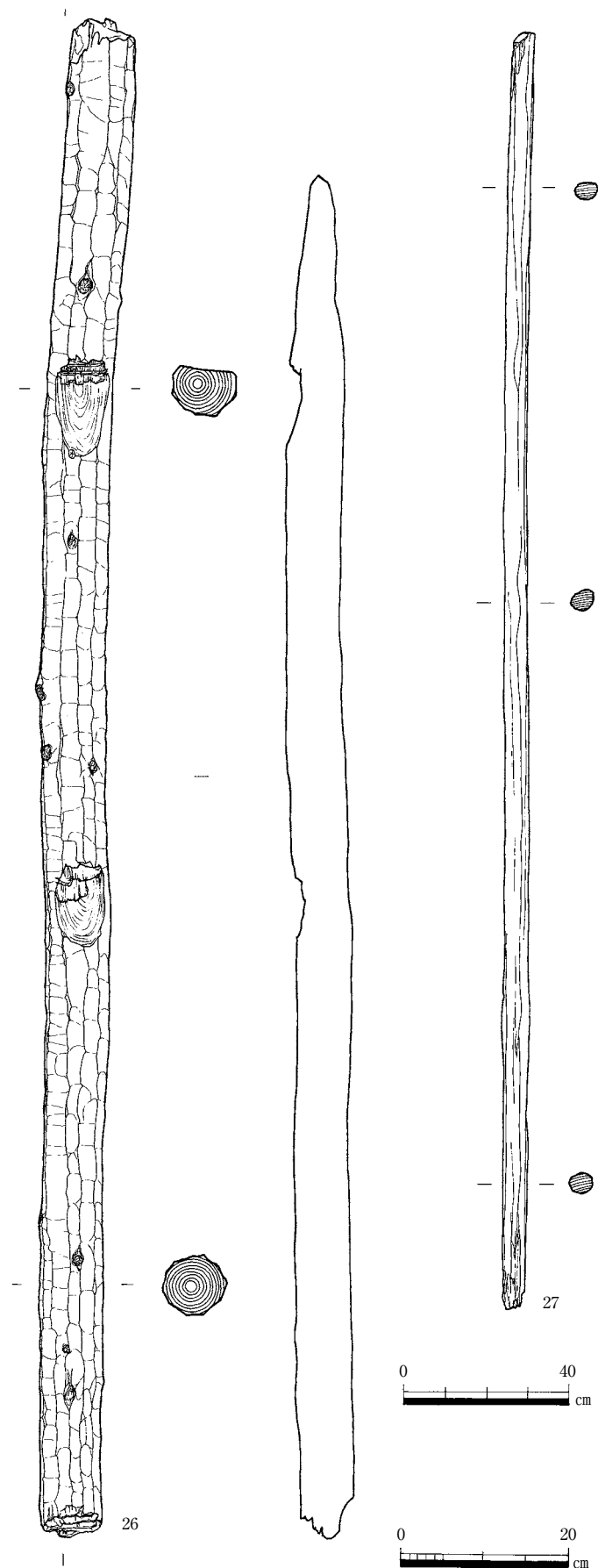


図76 縄向石塚古墳第4次調査出土木器実測図7 (26: 1/8、27: 1/16)  
26・27 植物腐植土

## 第7章 纏向石塚古墳第5次調査報告

(纏向遺跡第62次調査報告)

### 第1節 はじめに

第5次調査は古墳の公有化・整備事業の一環として纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、桜井市教育委員会が実施したものである。

本調査の目的となったのは墳丘北側の周濠外肩ラインの確認だが、このラインは1-2、4-1・2トレンチにおいて既にその一部が確認されているものの、4-1・2トレンチは各調査区が約70mもの距離において設定されていること、1-2トレンチは国土座標に基づいた記録が残されておらず正確な位置情報を欠くことなどから、この間の様相をさらに明らかにすることを目的として、想定される周濠の推定ライン上に5-1から5-6までの計6本、総面積350㎡のトレンチを設定し、遺構の検出を行っている(図77)。

調査は基本的に周濠堆積上面(暗灰色粘土)が周濠の滞水時に堆積した層位と判断し、これに相当する層の上面を露呈させ、これより以下は掘り下げを中止することとした。

なお、現地調査は平成3年9月17日から同年11月17日にかけて行われているが、この調査の終了後、明けて平成4年1月からは本調査と同じ年度事業として第6次調査が引き続き実施されることとなったため、周濠ラインが検出されなかった5-1トレンチのみ調査区の埋め戻しが行われ、残るトレンチは第6次調査終了後に埋め戻されている。

### 第2節 各トレンチの成果

#### (1) 第1トレンチ

##### 1. 調査の成果

周濠推定ラインの北東部にあたる位置に設定した幅3m、長さ27mの調査区である。この調査区については図78に示した土層断面図の8・9層、中世遺構面の構成土上面において径30cmの掘形を持つ柱穴が数基確認されたことから、上層遺構面において調査を行ったのちに下層遺構面の調査を行うこととした。上層遺構面の調査はこの柱穴の広がりを確認するために先に検出されている柱穴の周辺を拡張しているが、結果的には新たな遺構の確認はできなかった。

検出された柱穴のうち、SP-02~05で構成されるSH-01は拡張区から新たな柱穴が検出されず、建物としてまとまりを持つものとはならなかったが、仮にSP-05北側に想定される柱穴が削平を受けて消滅したと考えるならば、その規模は東西2間(4.2m)×南北1間(1.8m)以上で、GN-2.5°-Wに方位を持った掘立柱建物と考えているが、柱穴からの遺物には恵まれず、建物の厳密な時期は判然としない。

さて、第4次調査の成果から推定された周濠ラインの調査はトレンチの西端部を通過するものであったためこの部分についても上層遺構面において調査区の拡張を行い、下層での周濠の検出に備えるこ

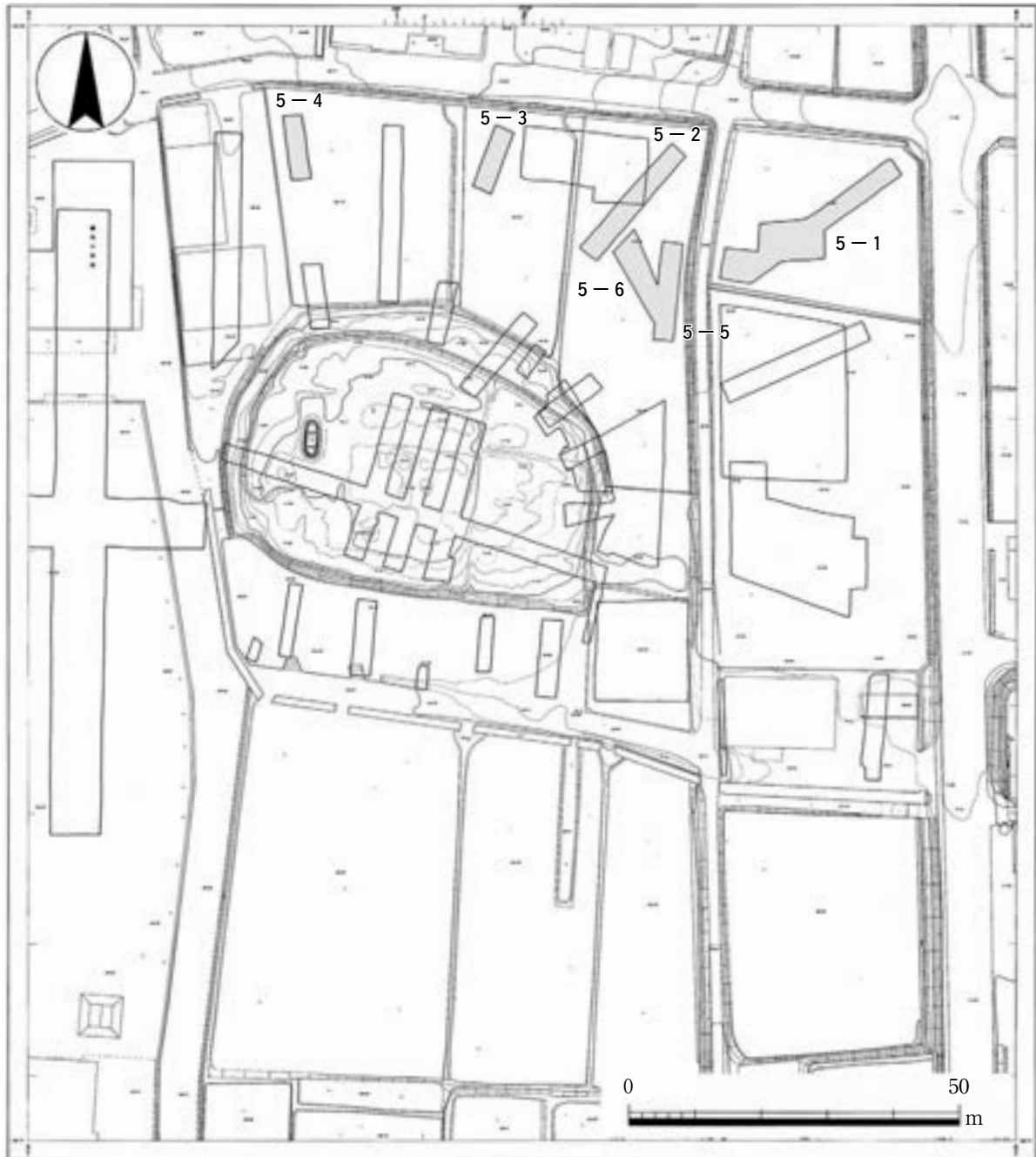


図77 纏向石塚古墳第5次調査地位位置図（1／1,000）

ととした。周濠の探査を目的として行った下層遺構面の調査は調査区西端の一部を地山とみられる淡黄灰色シルト面まで掘削を行い遺構の精査を行ったが、周濠の存在を確認することができなかったため拡張部分の掘り下げは行っていない。なお、拡張部分を含めた第1トレンチの調査面積は135㎡であった。

## 2. 出土遺物

本調査区からの遺物の総量はそれほど多くない。残念ながら遺構に伴うものは皆無であったが、トレンチ内の各層位からは若干の遺物の出土があった（図 83・84）。1 から 3 は淡灰褐色土から出土し

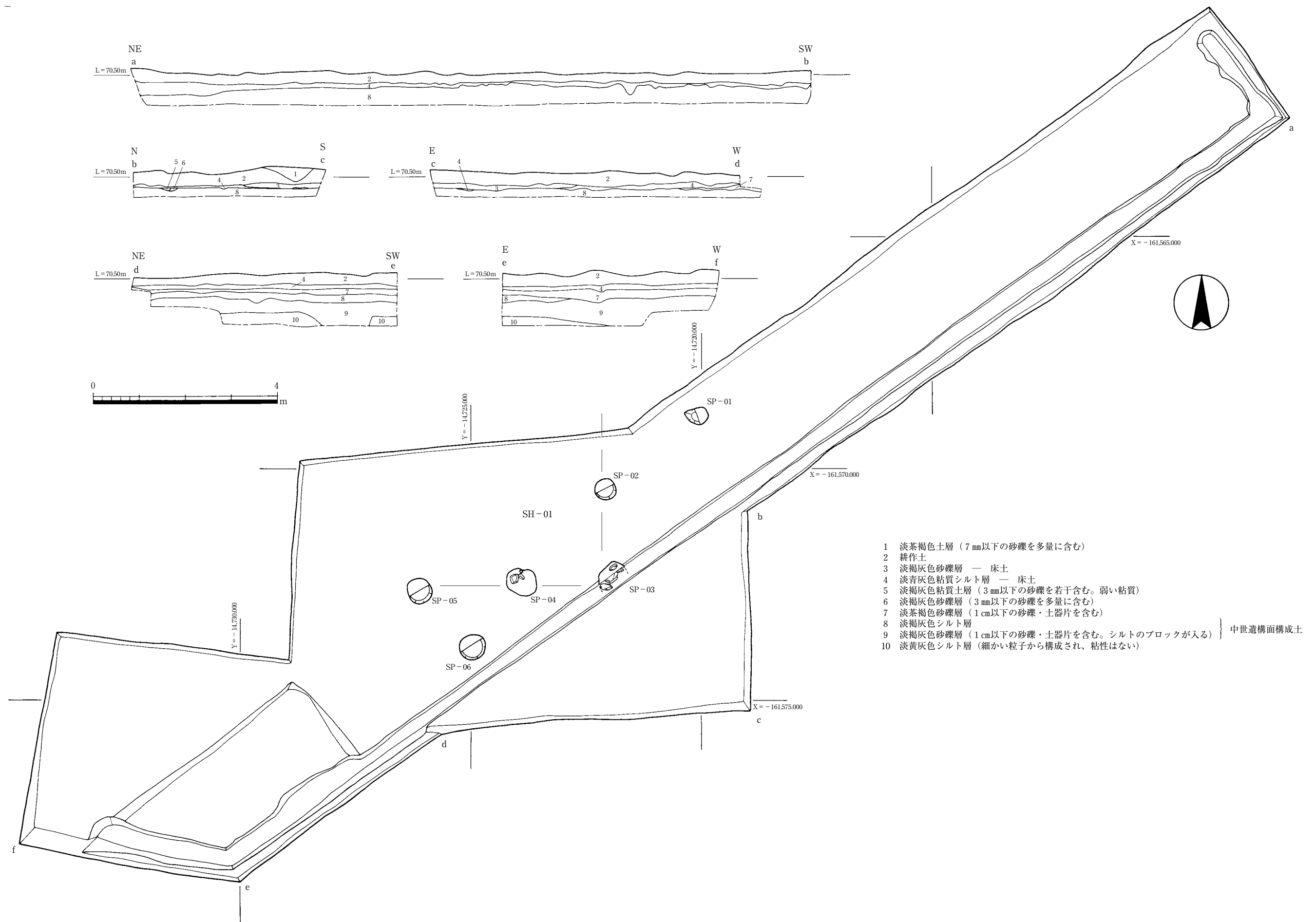
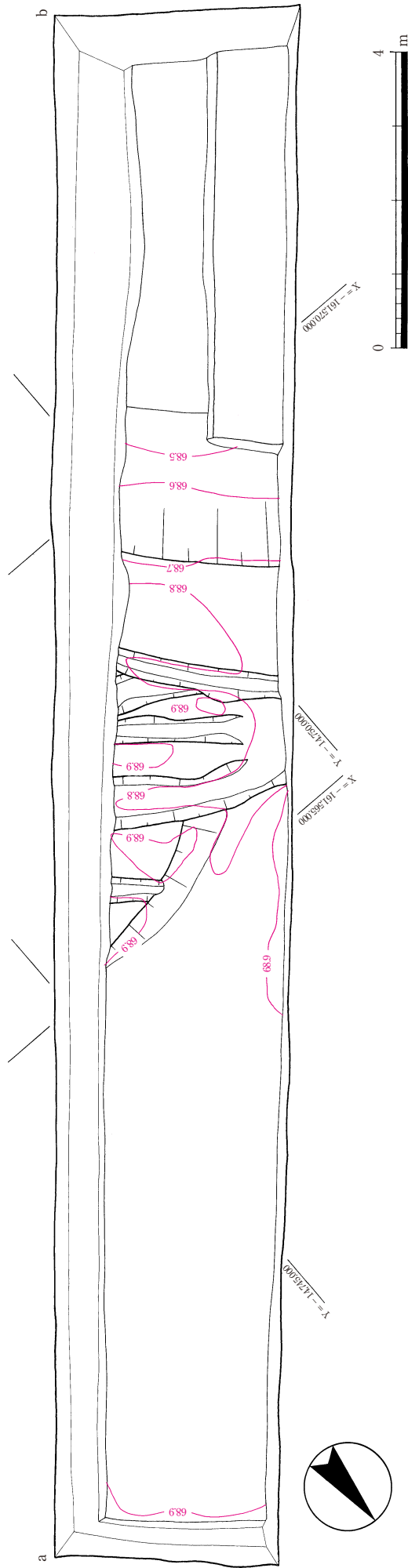
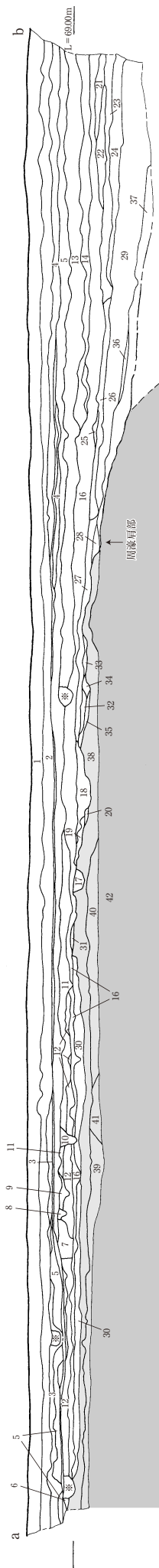


図78 5-1 トレンチ平・断面図（1/80）

NE

SW



1 耕作土  
2 暗青灰色土層 (2層より青みが強い)  
3 暗青灰色土層 (シルト質)  
4 暗青灰色土層 (シルト質)  
5 黄灰色土層 (シルト質)  
6 灰褐色粘質シルト層 (5mm以下の砂粒を多く含む)  
7 灰褐色土層 (シルト質。5mm以下の砂粒を含む)  
8 淡黄灰色土層 (シルト質。5mm以下の砂粒を含む)  
9 黄灰色土層 (シルト質。5mm以下の砂粒を含む)  
10 灰褐色土層 (1cm以下の砂粒・炭・土器片を含む)  
11 灰褐色土層 (1cm以下の砂粒・炭・土器片を含む)  
12 暗灰褐色土層 (13層と同質)  
13 灰茶色砂礫土層 (16層と同質)  
14 暗灰褐色土層 (2mm以下の砂粒を多量に含む)  
15 暗灰褐色土層 (2mm以下の砂粒を多量に含む)

16 灰褐色土層 (1cm以下の砂粒・砂で構成される)  
17 灰褐色砂礫土層 (5mm以下の砂粒・土器片を若干含む)  
18 黄灰色砂礫土層 (2~5mmの砂を多く含む、2cm大の小石も入る)  
19 淡黄灰色シルト層 (2mmの砂を若干含むが、きめ細かくよく揃っている)  
20 茶褐色粘質シルト層 (2mmの砂を若干含む)  
21 淡灰色砂礫土層 (2mm以下の砂を多量に含む)  
22 灰茶褐色土層 (3mm以下の砂粒を少量含む)  
23 暗灰褐色砂礫土層 (5mm以下の砂粒を多量に含む)  
24 淡灰色砂礫土層 (3mm以下の砂粒を多量に含む)  
25 灰褐色砂礫土層 (3mm以下の砂粒を多量に含む)  
26 暗灰褐色砂礫土層 (2~4mmの砂粒を多量に含む)  
27 暗灰褐色砂礫土層 (2~4mmの砂粒を多量に含む)  
28 暗灰褐色粘質土層 (1mm以下の砂粒を比較的多く含む)  
29 暗灰褐色粘質土層 (5mm以下の砂粒を少量含む)

30 暗灰褐色土層 (12層と類似。1cm以下の砂粒・炭・木・土器を含む)  
31 黄褐色粘質土層 (シルト質を含み、極めてきめ細かい)  
32 暗灰褐色砂礫土層 (33層より粒子が細かくそろっている)  
33 淡黄灰色砂礫土層 (4mm以下の砂粒を多く含む)  
34 暗灰褐色シルト層 (1mm以下の砂粒を多く含む)  
35 茶褐色砂礫土層 (2~5mmの砂粒を多く含む)  
36 暗灰褐色粘質土層 (5mm以下の砂粒を若干含む。粘性強い)  
37 暗灰褐色粘質土層 (2mm以下の砂粒を若干含む)  
38 淡灰褐色粘質土層 (5mm以下の砂粒を多量に含む)  
39 淡灰色砂礫土層 (3mm以下の砂粒で構成され、粒子はよく揃っている)  
40 暗灰褐色砂礫土層 (3mm以下の砂粒を多量に含む)  
41 黄褐色砂礫土層 (やや粘性があり、7mm以下の砂粒を多量に含む)  
42 黄褐色粘質土層 (2mm以下の砂粒を若干含む)

※ 周濠埋土 (黒粘 I 相当)

古墳築造前の包含層?

※ 周濠埋土 (黒粘 I 相当)

古墳築造前の包含層?

※ 周濠埋土 (黒粘 I 相当)

古墳築造前の包含層?

図79 5-2 トレンチ平・断面図 (1/80)



た須恵器坏身・坏蓋である。残念ながら断面図等の調査記録には同一の層名が確認できず、厳密な出土位置を確認することはできなかったが、ラベルに記載された日付からは調査区西端の下層遺構探査に伴う遺物ではないかと考えられる。4から9は須恵器坏蓋や土師器甕口縁・円筒埴輪や平瓦である。これらの遺物には整地層からの出土とのラベルが伴うが、整地層の名称も調査記録からは確認できない。断面図の記載から類推するに、恐らくは中世遺構面の構成土である8・9層を指すものと考えている。10から14は円筒埴輪や馬形埴輪・須恵器壺・緑釉陶器などの小片で、いずれもが3・4層、現代水田の床土からの出土である。15は須恵器壺もしくは甕の口縁部小片とみられ、現代水田の耕土からの出土であった。

この他、纏向石塚古墳に直接かかわるものでは無いと判断されるが、特殊な遺物として挙げられるものに床土内より出土した凝灰岩片（図83-1）がある。この凝灰岩片は多くの面が欠損しているものの、表面にはベンガラとみられる赤色顔料の付着が顕著であった。同様の石材は本調査区よりも西側に設定された第6トレンチからも出土しているが（図83-2）、材質・形状などの観察からはともに石棺材の一部となるのではないかと考えている。

なお、本調査区の南隣接地で行われた第9次調査では5世紀後半の帆立貝形古墳である石塚東古墳<sup>1)</sup>が検出されているが、この古墳の周濠の一部は第1トレンチにかかることが想定されることや出土遺物の様相が良く似ていることなどから、今回の出土遺物のうち4～6・10～12の埴輪や1～3の須恵器類などは、この石塚東古墳に由来するものではないかと考えられる。

## （2）第2トレンチ

### 1. 調査の成果

後円部墳丘の北東、周濠推定ライン上に設定した幅3m、長さ21mの調査区で、調査面積は66㎡であった。この調査区からは第4次調査で推定されていた地点よりもやや墳丘に近いところで周濠の外肩部を検出している。

調査は地山となる黄褐色粘土層上面を露呈させる方針で遺構の検出が行われたが、地山が明瞭に確認されたのは調査区中央よりやや西側の周濠肩部だけであり、遺構面の大半は古墳築造前の包含層とみられる粘質土層や砂礫層（図79-38～41層）によって構成されることが確認された。

検出された遺構は中世以降の素掘り小溝と纏向石塚古墳の周濠のほか、今回の調査では掘削を行わなかったが、調査区北側には東壁にはかからないかたちで大きな落ち込み遺構が確認されている。落ち込み遺構は掘削が行われなかった上に、平面図等の記録が作成されておらず、その性格は明らかではないが写真では方形にめぐる落ち込みにもみえることから、或いは古墳築造前の包含層上面から切り込まれた古墳の周濠のようなものになる可能性も考えられる。

さて、周濠部分の調査では周濠堆積の最上層にあたる灰色・灰褐色系の砂層・砂礫層（図79-23～27・29層）の厚い堆積が認められた。この砂礫層はこれまでに判明している纏向石塚古墳の周濠堆積の基本土層となる黒色粘土層Ⅰの上部に堆積するものとみられ、第5次調査区では中央～東側地区に設定した2・3・5・6トレンチにおいて確認されている鍵層となるものであった。本調査区におけ

る周濠埋土の掘り下げはこの周濠堆積の最上層にあたる砂礫層の掘削を行い、黒色粘土層Ⅰに相当するとみられる淡灰黄色粘質シルト層（図79－37層）を露呈させるのみにとどめ、以下の掘り下げは行っていない。また、周濠外肩部の状況は非常に緩やかな傾斜を持って落ち込んでいくもので、この緩斜面周辺には動物或いは人のものとみられる足跡状の窪みが多数検出されている。この窪み及びその上面からは須恵器や円筒埴輪の小片が採集されており、この頃までは周濠の名残となる若干の窪地が存在していたことがうかがえる。

## 2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物には覆土中からの中世土器や周濠埋土最上層からの須恵器・円筒埴輪などの小片がみられたが、遺物の総量は少ないものであった。また、今回の報告に際して再度見直しを行ったが、図示できるような遺物は認められなかった。

### （3）第3トレンチ

#### 1. 調査の成果

5－3トレンチは後円部墳丘の北側に設定した幅3m、長さ10mの調査区で、調査面積は30㎡であった。遺構の検出は古代以降の覆土を除去し地山面となる明黄灰色シルト層（図80－19層）上面で行い、周濠外肩部を検出したほか地山面において幅約60cmの弧状にめぐる溝を1条検出している。

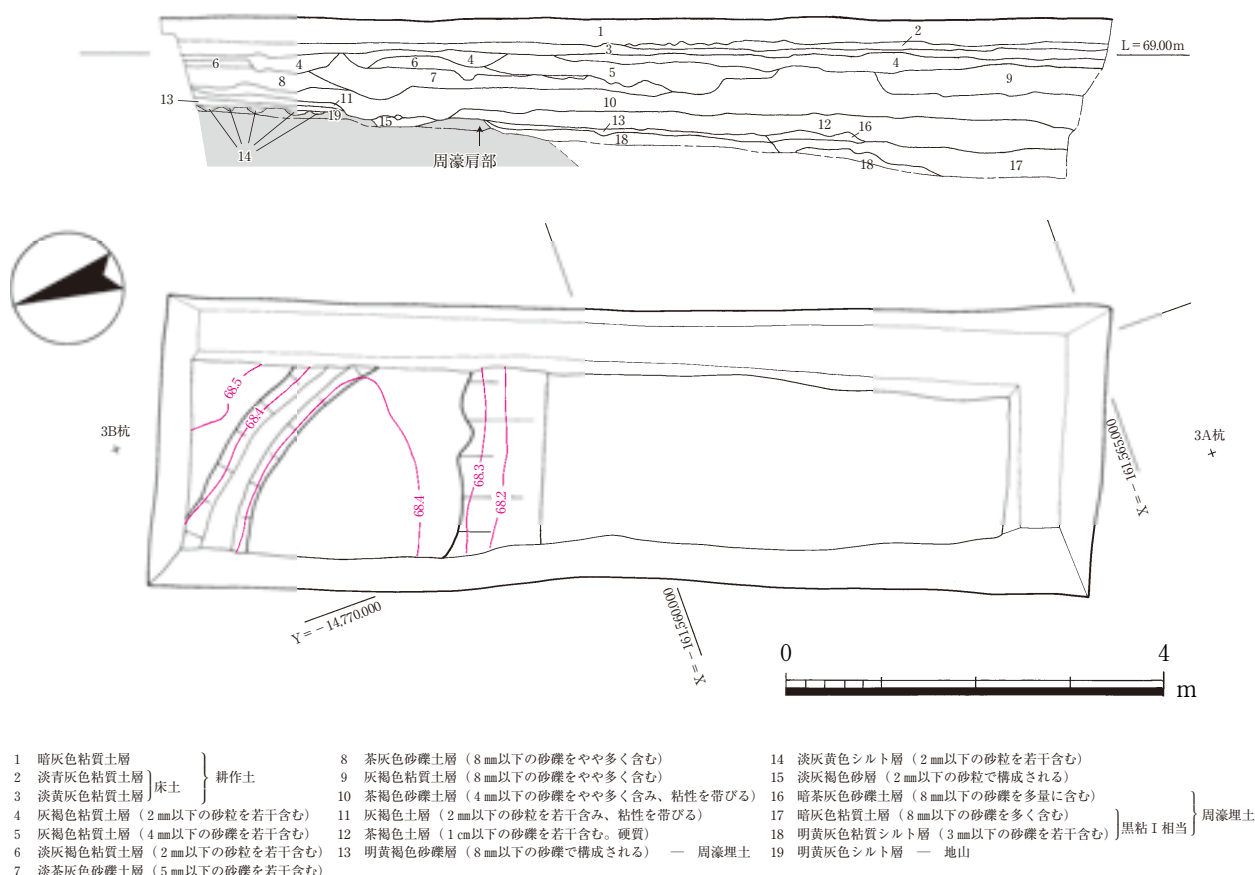


図80 5－3トレンチ平・断面図（1／80）

この溝は中世のものとみられる10層下面より掘削されたもので比較的新しい遺構と考えられるが、遺物の出土に恵まれず、厳密な時期を限定することはできなかった。

さて、周濠外肩部はトレンチ北端より約3mの地点において検出されたもので、5-2トレンチよりは比較的急な角度で南へと落ち込んでゆく様子が確認されている。

周濠内の調査は5-2トレンチと同様に周濠堆積最上層にあたる砂礫層(図80-13・16層)を除き、黒色粘土層Iに相当するとみられる粘質土・粘質シルト層(図80-17・18層)の上部を露呈させるにとどめ、以下の掘り下げは行わないこととした。なお、周濠肩部および地山面からは5-2トレンチと同様、多くの足跡状の窪みが検出されている。

## 2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物には覆土中からの中世土器や須恵器小片がみられたが、遺物の総量は非常に少ない。今回の報告に際して再度見直しを行ったが、図示できるような遺物は認められなかった。

### (4) 第4トレンチ

#### 1. 調査の成果

5-4トレンチは後円部北側水田の北西隅に設定した長さ10m、幅3mの調査区である。調査面積は30㎡で、1-2トレンチにおいて検出されている周濠外肩のラインが国土座標による記録が残され

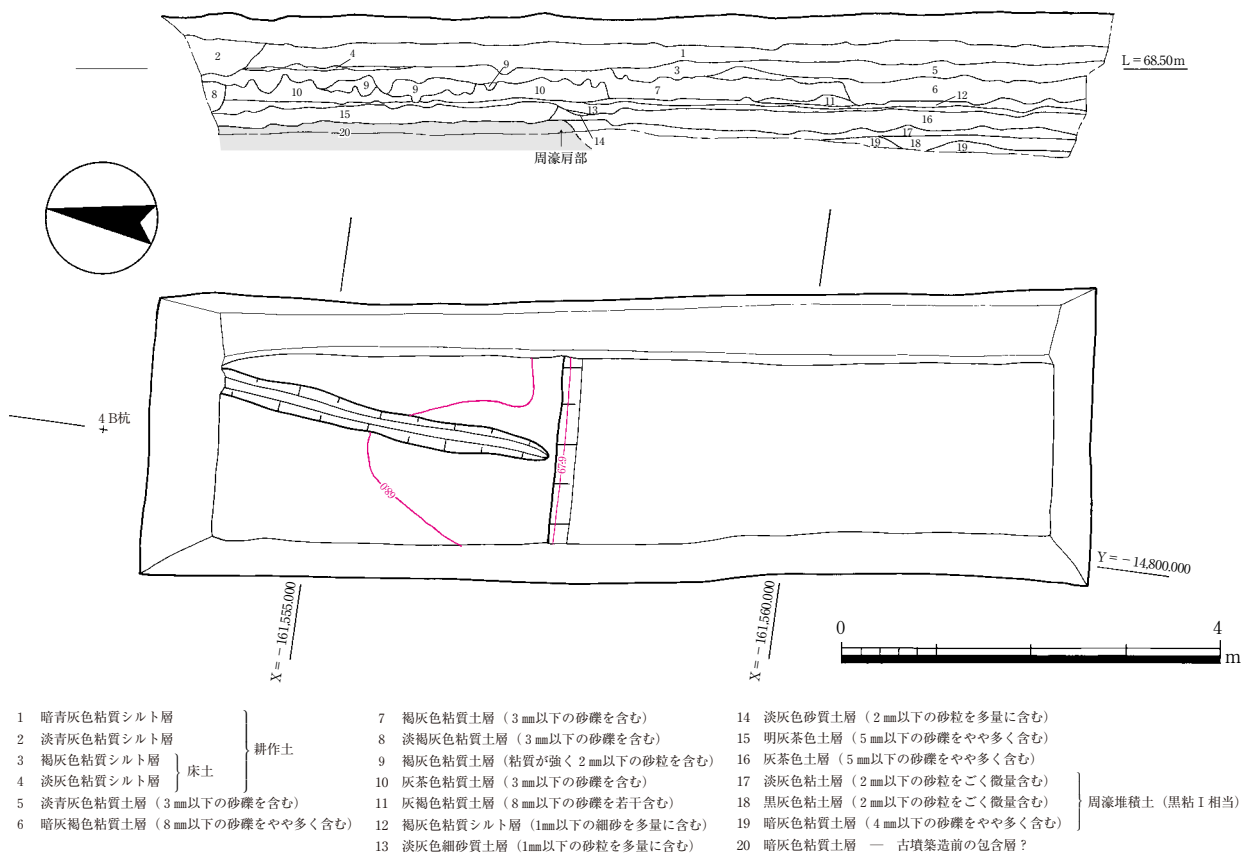


図81 5-4トレンチ平・断面図 (1/80)

ていなかったため、再度1－2トレンチに近い位置での周濠外肩の検出を目的として調査が行われたものである。

本調査区内においては遺跡のベースとなる地山層は確認されておらず、代わりに古墳築造以前の包含層とみられる暗灰色粘質土層（図81－20層）が基盤層として確認されたため、この暗灰色粘質土層上面において遺構の検出を行うこととした。この結果、時期は判然としないが、幅約30cmの南北素掘り小溝1条と周濠の外肩部が検出されている。

さて、周濠の外肩部は調査区北端より約3.5mの地点において検出されたもので、5－3トレンチなどと同様に明瞭な落ち込みが確認されているが、本調査区は今回の調査対象地内においては最も低い地点に位置するためか、周濠埋土の最上層にあたる砂礫層の存在は確認することができなかった。

このことから、本調査区において確認された周濠埋土（図81－17～19層）は黒色粘質土Ⅰに相当するものと考えられたため、周濠内の掘り下げは周濠外肩部を明確にするため、17～19層の上部の一部を掘り下げることにしている。

なお、周濠外肩部から周濠内埋土上面には5－2・3トレンチと同様、多くの足跡状の窪みが検出されている。

## 2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物には覆土中からの中世土器や須恵器小片・埴輪片などがみられたが、遺物の総量は少ないものであった。今回の報告に際して再度見直しを行ったが、図示できるような特筆すべき遺物は認められなかった。

### （5）第5・6トレンチ

#### 1. 調査の成果

5－5トレンチは5－2トレンチの調査において当初推定されていた位置よりも墳丘寄りの地点において周濠外肩部が検出されたことを受け、4－4・4－2トレンチで検出された周濠外肩部との関係を探るために5－2トレンチの東側に設定された幅3.2m、長さ15m、調査面積48㎡の調査区である。

本調査区における遺構面の状況は図82－25～30層にみられるようにシルト或いは粘質土で構成される地山面を確認しており、遺構の検出はこの地山面において行っている。検出された周濠外肩は当初の推定位置よりさらに南に位置する調査区北端から南へ約11mの地点で明瞭な落ち込みを確認している。

この周濠堆積の最上層にあたる埋土は図82－24層に示した暗灰色粗砂層がこれに該当するもので、周濠埋土の掘削はこの粗砂層上面までの掘り下げとし、黒色粘土層Ⅰに相当する上層埋土までの掘削は行っていない。また、周濠外肩部から周濠内埋土上面にかけては他のトレンチと同様、多くの足跡状の窪みが検出されている。

なお、このトレンチにおいて検出された周濠のラインは東壁部分において若干北へと回るこむような形で図示されている。この部分については調査時に作成された遺構平面図などには記録されていなかったものの、図版37・38に示した写真では東壁にかかるかたちで土坑、或いは溝状の落ち込みの存

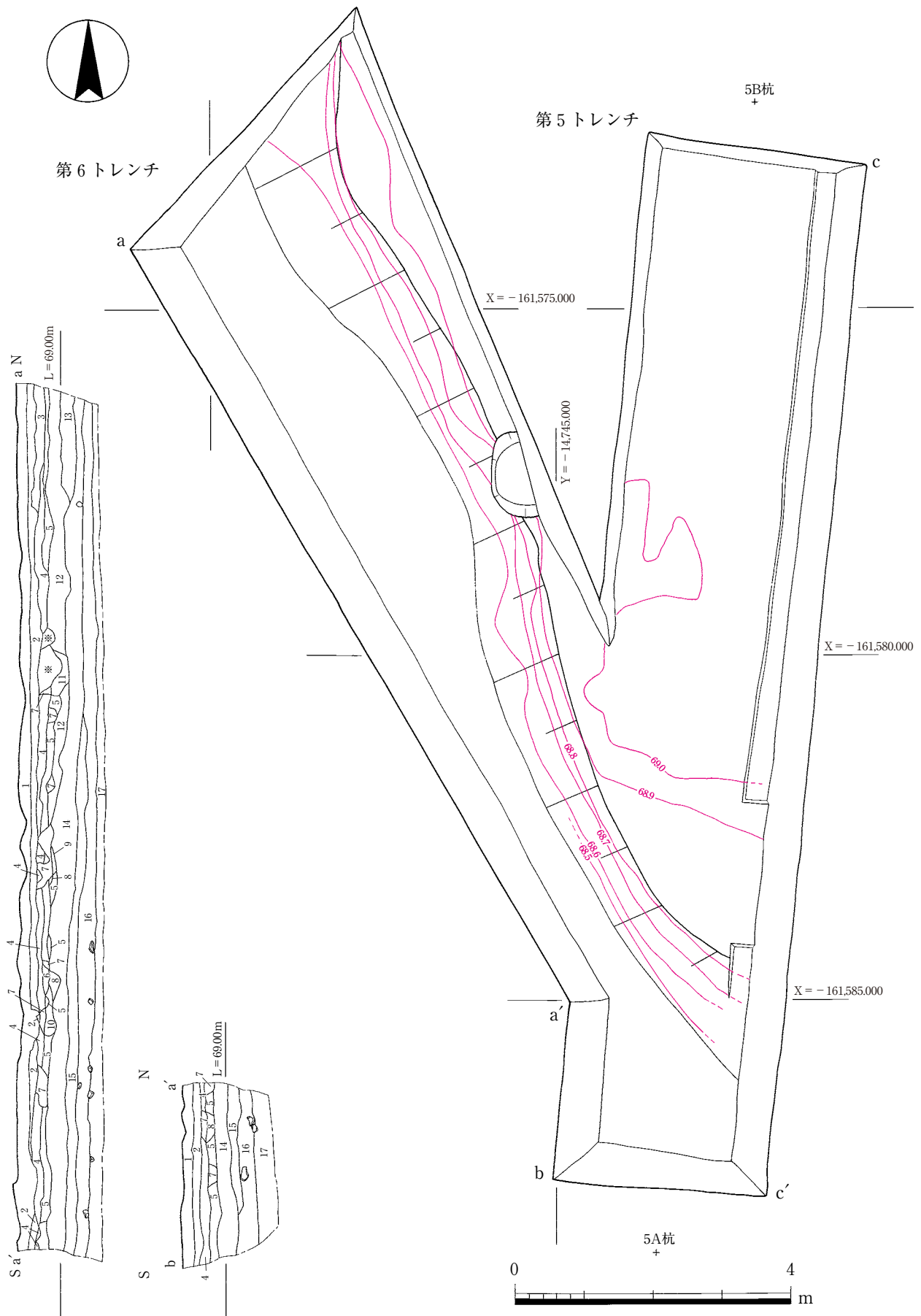


図82-1 5-5・6トレンチ平・断面図 (1/80)



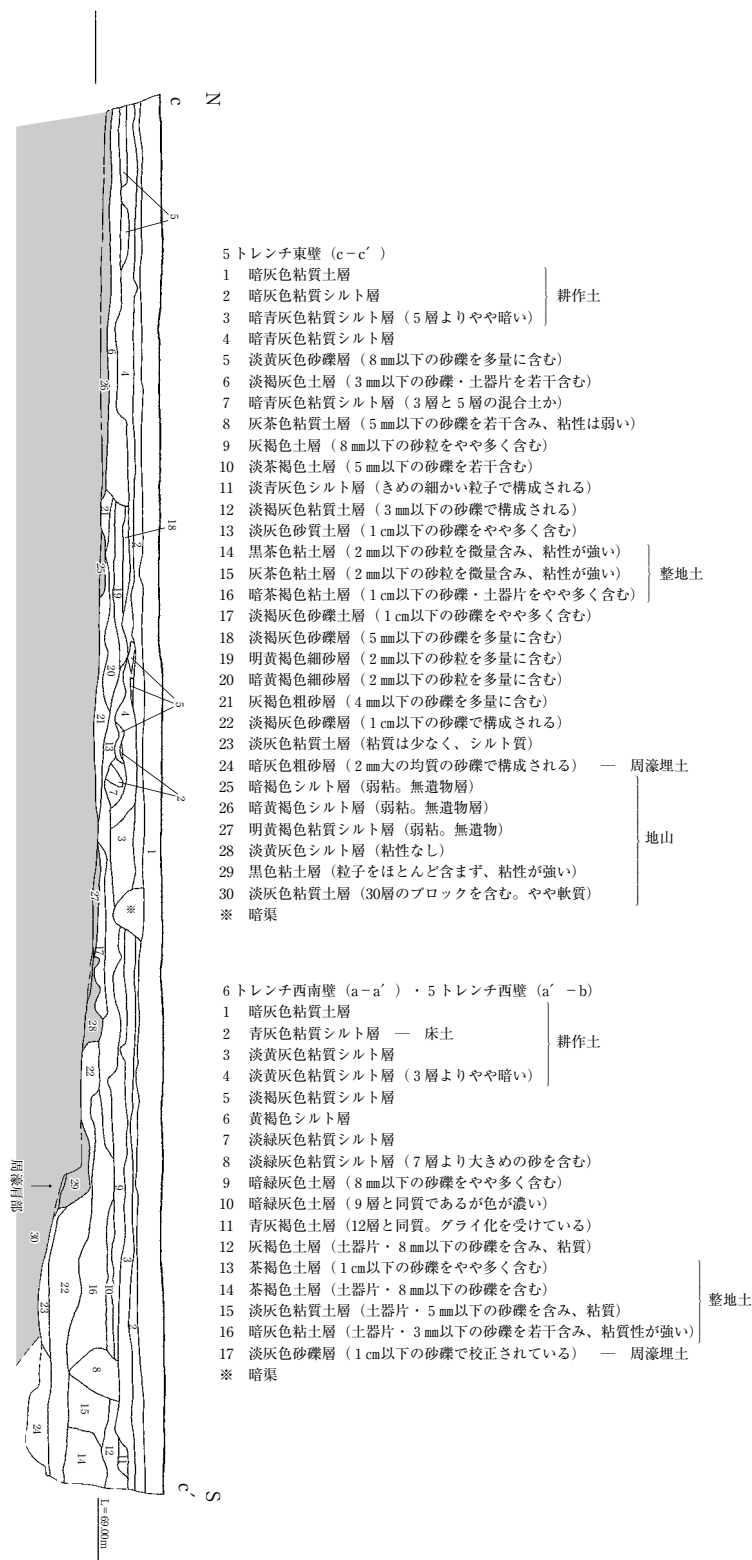


図82-2 5-5・6 トレンチ断面図 (1/80)

在を確認することができるから、東側へとやや乱れる等高線や周濠外肩のラインはこの遺構に影響を受けた結果と考えられる。東壁断面図 (図82) にみられる土層のうち、この遺構の埋土にあたるとみられる土層には22・23層がある。確実なことは不明だが、22層は分層の不備によるものか遺構南側の上がりの確認できないのに対し、23層は24層より上部から堆積した様子が明瞭に見て取れ、ほぼ確実にこの遺構の埋土と想定することができると考えている。

さて、5-5 トレンチの調査において当初の推定位置よりも大きく南にはずれた地点において周濠の肩部が検出されたため、5-2 トレンチとの関係をさらに明らかにするために設定されたのが5-6 トレンチである。5-6 トレンチは幅4m、長さ約10m、調査面積が41㎡の調査区で、5-5 トレンチと接続するかたちで調査区が設定されたため、結果的には5-5 トレンチと一体の調査区となっている。

この調査区では5-5 トレンチ内において先に確認された周濠外肩のラインが自然な形で5-2 トレンチの周濠外肩部へと繋がる事が確認されている。

本調査区における周濠部の堆積状況は最上層埋土となる淡灰色砂



礫層（図82-17層）の上に平安時代以前の土器片を含んだ整地土層（図82-13～16層）が覆う状況が明確に認められた。調査ではこの整地土層を除去し淡灰色砂礫層上面までを露呈させるかたちで掘削を行い、以下の掘り下げは行っていない。

## 2. 出土遺物

本調査区からの遺物は多くないが、各層位から若干の出土があった（図85）。ここに図示できたもののうち多くは5-5トレンチ部分からの出土で、5-6トレンチ部分からの遺物はごく少量である。

5-5トレンチ部から出土したもののうち、16～18は暗灰褐色土から出土した円面硯・灰釉陶器壺・緑釉陶器片で、16は硯面に、17は内面、18は外面に墨の付着が認められた。残念ながら断面図等の調査記録には同一の層名が確認できず、厳密な出土位置を確認することはできていない。19は灰釉陶器鉢で図82-7層からの出土、20～25は床土よりも下部の包含層からの出土で、縄文時代の深鉢や土師器鉢、須恵器蓋・皿、平瓦片などがあり、26は床土より出土の平瓦片、27・28は耕作土直下から出土した土師器鉢や人物埴輪の腕部片とみられるものである。

5-6トレンチ部から出土した遺物には図85-29と図83-2がある。いずれもが図82-12層からの出土で29は須恵器坏、2は凝灰岩片で5-1トレンチより出土した凝灰岩片（図83-1）と同様に表面にはベンガラとみられる赤色顔料の付着が顕著であることや、その材質・形状などの観察からは図83-1と同じく石棺材の一部となるのではないかと考えている。

さて、これら5-5・6トレンチからの出土遺物は縄文時代から古代にいたるまでの多様な時期の様相を示すものの、その主体となるのは古代の遺物であり、概ね9世紀代の平安時代前期を中心とする時期のものが目に付くことは当該期の遺構・遺物の少ない桜井市域においては注目すべきことで、纏向石塚古墳の東方に円面硯や緑釉・灰釉陶器などの特

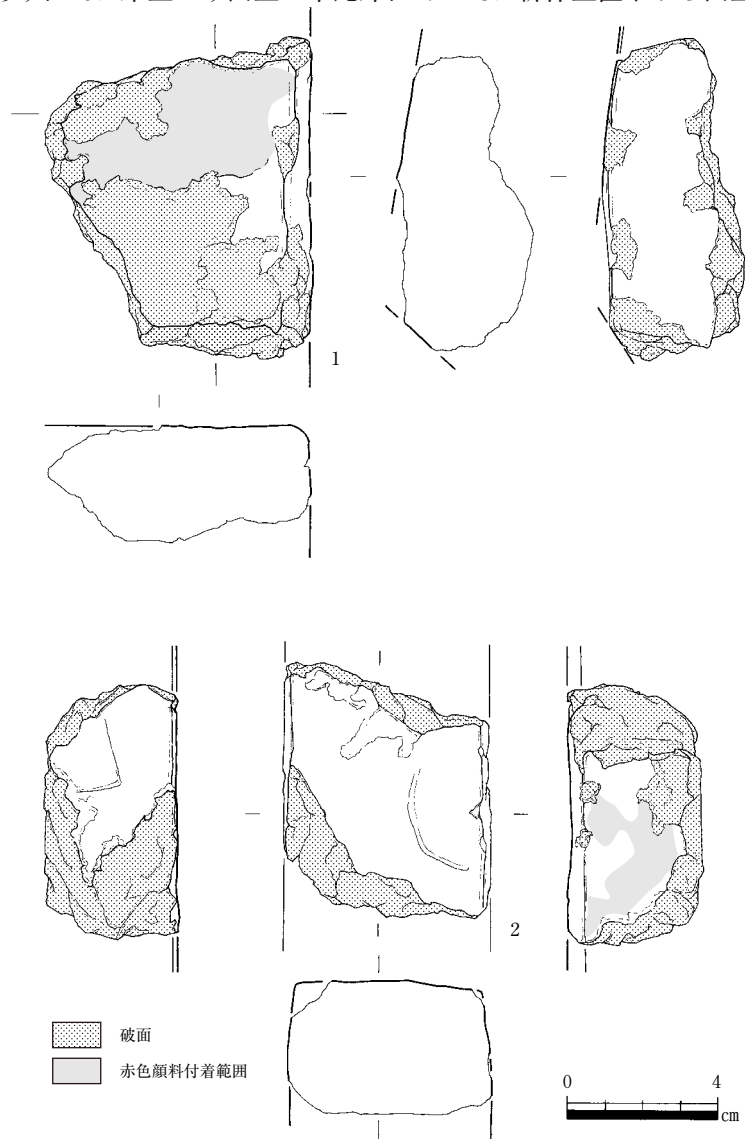


図83 纏向石塚古墳第5次調査出土棺材実測図（1／2）  
第1トレンチ：1 床土 第6トレンチ：2 灰褐色土

筆すべき遺物を持ち得る人々の存在が想定できるものである。

### 第3節 小結—第5次調査の成果—

第5次調査は墳丘の北側を中心に6本のトレンチを設定し、周濠の形状確認を行った。この結果、5-2トレンチから5-4トレンチに至る対象地西側部分ではほぼ推定ラインどおりに周濠の外肩部が検出されたものの、5-1トレンチにおいては周濠外肩が検出されず、当初の想定よりも墳丘に近い部分に5-5・6トレンチを設定し、周濠外肩のラインを検出することに成功している。

これらの調査から明らかになった周濠外肩の復元ラインは5-5・6トレンチ部において想定されていた位置よりも墳丘側で検出されたことと、4-2トレンチで検出されている周濠外肩ラインの調査成果とを勘案することにより、概要報告書の時点では第13章第1節で細述する<sup>3)</sup>ように前方部の側面部において一部が外側へと突出する特異な平面プランを示す結果となったが、このプランについては後の第9次調査において4-2トレンチにおける周濠の検出に誤認があったことが明らかとなり、現在では異なった周濠形状が提示されることとなっている。

しかしながら、一連の調査において後円部北側一帯における周濠形状をほぼ確定するに至ったことは本調査の最も大きな成果であり、また結果的に4-2トレンチにおける調査成果に対する疑義を生みだし、そして第9次調査という再調査の契機となったことも一つの成果と言えよう。

(橋本)

#### 【註記】

- 1) 丹羽恵二・橋爪朝子「第3節 纏向遺跡第144次調査（纏向石塚古墳第9次調査）概要報告」『桜井市 平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2006
- 2) 萩原儀征・寺沢薫『纏向石塚古墳 範囲確認調査（第4次概報）』桜井市教育委員会1989
- 3) 萩原儀征編『纏向石塚古墳第1期整備事業－範囲確認調査（第5次～7次）概報－』（財）大和文化財保存会 桜井市教育委員会1995

表 42 纏向石塚古墳第5次調査出土遺物観察表 (1)

図番号 図版番号	地 区 位 層	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
84—1 124—1	第1トレンチ 淡灰褐土	須恵器 坏蓋		H : (4.3) C : (12.9)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	〈天井部〉 O. 回転ヘラケズリ i. 回転ナデ→仕上げナデ		25Y8/1灰白～ 10Y R7/1灰白	・時計回り
84—2 124—2	第1トレンチ 淡灰褐土	須恵器 坏身		H : (4.5) C : (11.3)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ヘラケズリ i. 回転ナデ→仕上げナデ		O. 10Y R5/1灰 i. 7.5Y6/1灰	・時計回り
84—3 124—3	第1トレンチ 淡灰褐土	須恵器 坏身		H : (4.8) C : (10.1)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ヘラケズリ i. 回転ナデ		O. 10Y R5/1灰 i. 7.5Y6/1灰	・時計回り
84—4 125—4	第1トレンチ 整地層	円筒 埴輪			O. B c種かB d種ヨコハ ケ i. ヨコハケ	9 /cm			7.5Y8/4浅黄橙～ 10Y R8/4浅黄橙	・ヘラ記号あり
84—5 125—5	第1トレンチ 整地層	円筒 埴輪		W : (16.0)		O. タテハケ i. ユビナデ 押捺	O. 板オサエか？ i. ハケメ ユビナデ 押捺		O. 10Y R8/6浅黄橙 i. 7.5Y R8/6浅黄橙	・基底部～2段 目
84—6 125—6	第1トレンチ 整地層	円筒 埴輪		B : (18.0)		O. タテハケ→ B c種ヨコハケ i. ユビナデ	O. タテハケ i. タテユビナデ	8～ 10 /cm	5Y R7/8橙	・基底部～2段 目
84—7 125—7	第1トレンチ 整地層	須恵器 蓋	坏B蓋	C : (17.8)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ				N6/0灰～N5/0灰	
84—8 125—8	第1トレンチ 整地層	土師器 甕		C : (24.2)	O. (口縁部) ヨコナデ (頸部) 押捺 i. ヨコハケ	5 /cm			10Y R8/4浅黄橙	・奈良 (終わり) ～平安くらい ・桶巻造りでは ない。
84—9 124—9	第1トレンチ 整地層	平瓦			凸面. 細目タタキ 凹面. 布目				O. N3/0暗灰 i. N8/0灰白	
84—10 125—10	第1トレンチ 床土	円筒 埴輪		W : (18.0)		O. タテハケ i. ハケメ		6 /cm	5Y R6/6橙	
84—11 125—11	第1トレンチ 床土	円筒 埴輪		W : (19.8)		O. タテハケ→ B cかB d種ヨコハケ i. ユビナデ・押捺		10～ 12 /cm	5Y R6/6橙	

表 43 纏向石塚古墳第5次調査出土遺物観察表 (2)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色	備 考
					口	縁 部	体 部	底 部 (脚部)	
84-12 124-12	第1トレンチ 床土	馬形 埴輪					O. ユビナデ・押捺 i. ユビナデ・押捺	5Y R7/8橙	・馬形埴輪の右 耳と面繋、辻 金具の部分
84-13 124-13	第1トレンチ 床土	須恵器 壺	壺 L	B : (8.2)				N6/0灰～N7/0灰白	・貼付高台
84-14 125-14	第1トレンチ 床土	緑釉陶 器片					O. 回転ナデ i. 押捺→マメツツ不明	10Y R7/3にぶい黄橙 (釉) 3G6.5/5.0わさび	・外面施釉
84-15 125-15	第1トレンチ 耕作土	須恵器 甕			O. 回転ナデ→櫛描波状文 i. 回転ナデ	8/cm		O. N4/0灰 i. N6/0灰	
85-16 124-16	第5トレンチ 暗灰褐色土	須恵器 陶足円 面硯		C : (16.2)	O. 回転ナデ i. ナデ		O. 回転ナデ i. ナデ	N6/0灰	・第5トレンチ 床土と接合 ・長方形透孔約 14ヶ所に墨付着 ・外面に墨付着
85-17 124-17	第5トレンチ 暗灰褐色土	灰釉 陶器 壺	壺 M	W : (9.4)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ		O. 回転ナデ i. 回転ナデ	N5/0灰～2.5Y5/1黄灰、 2.5Y8/1灰白 (釉) 10Y5/1灰 (一部10 Y R6/4にぶい黄褐)	・外面施釉 ・内面に墨付着
85-18 124-18	第5トレンチ 暗灰褐色土	緑釉陶 器片					O. ナデ i. ナデ	10Y R8/2灰白 (釉) 10Y5/2オリープ 灰	・胎土精良 ・外面施釉 ・外面に墨また は煤付着
85-19 124-19	第5トレンチ 淡褐灰色土	灰釉 陶器 鉢		B : (17.8)				N8/0灰白 (釉) 5Y7/1灰白	・外面と底面に 施釉
85-20 125-20	第5トレンチ 包含層	縄文 土器 深鉢		C : (18.0)	O. ヨコナデ i. ヨコナデ		O. ナデ i. タラナデ	O. 10Y R5/2灰黄褐～ 10Y R4/2灰黄褐 i. 10Y R6/4にぶい黄 橙	-
85-21 124-21	第5トレンチ 包含層	底部 (鉢)	Ⅱ-A <sub>2</sub> -・	B : 8.2			O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a	10Y R4/2灰黄褐～ 10Y R3/2黒褐 (黒斑部分はN1.5/黒)	
85-22 125-22	第5トレンチ 包含層	須恵器 蓋	坏B蓋	C : (10.8)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ		O. 回転ナデ i. 回転ナデ	2.5Y7/1灰白	

表 44 纏向石塚古墳第5次調査出土遺物観察表 (3)

図番号 図版番号	地 層 区 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
85—23 125—23	第5トレンチ 包含層	須恵器 蓋	坏B蓋	C : (18.0)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	〈天井部〉 O. 回転ヘラケズリ i. 回転ナデ→仕上げナデ		N7/0灰白～N6/0灰	・内面に墨付着
85—24 124—24	第5トレンチ 包含層 第5トレンチ 灰褐色砂質土	須恵器 皿	皿C	H : (1.9) C : (18.4) B : (14.4)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. ヘラケズリ→ナデ i. 回転ナデ		5Y7/1灰白～N7/0灰白	・第5トレンチ 灰褐色砂質土 と接合
85—25 124—25	第5トレンチ 包含層	平瓦			凸面. 細目タタキ 凹面. 布目				O. 10Y R4/1褐灰 i. 10Y R5/2灰黄褐	・内面は被火の痕が見 られ、炭化物が付着 ・稀巻造りではない。 ・一方の側縁残存
85—26 125—26	第5トレンチ 床土	平瓦			凸面. 細目タタキ 凹面. 布目			0. 7.5Y4/底 (二次焼成を受けた部 分5Y R7/明褐色～7.5Y R6/4 にふい橙) i. 10Y R5/3にふい黄褐 (二次焼成 を受けた部分は5Y R6/6橙)		・二次焼成を受けてい る ・内面に炭化物付着 ・稀巻造りではない。
85—27 124—27	第5トレンチ 耕作土下	底部 (鉢)	Ⅱ - A <sub>2</sub> - ・	B : (7.4)		O. スリナデ I C a i. スリナデ I C a	O. スリナデ I C a i. 押捺A		10Y R4/2灰黄褐	・底面に黒斑
85—28 125—28	第5トレンチ 耕作土下	人物 埴輪 腕				O. ユビナデ・ケズリ i. ユビナデ			7.5Y R8/2灰白～ 7.5Y R7/4にふい橙	
85—29 125—29	第6トレンチ 灰褐色土	須恵器 坏	坏B	H : 5.0 C : 16.85 B : 12.1	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ		N5/0灰	・第6トレンチ砂礫 混じり灰褐色土、第 6トレンチ灰褐色 砂礫土層と接合
図番号 図版番号	地 層 区 位	種 類	全 長 (残 存)	幅 (残 存)	厚 さ (残 存)	重 量	材 質	色 調	備 考	
83—1 125—S1	第1トレンチ 床土	石棺材?	(8.5) cm	(7.0) cm	(3.6) cm	217g	凝灰岩	10YR8/1 灰白	・赤色顔料付着	
83—2 124—S2	第6トレンチ 灰褐色土	石棺材?	(6.7) cm	5.5cm	(3.5) cm	162g	凝灰岩	10YR8/1 灰白	・赤色顔料付着	

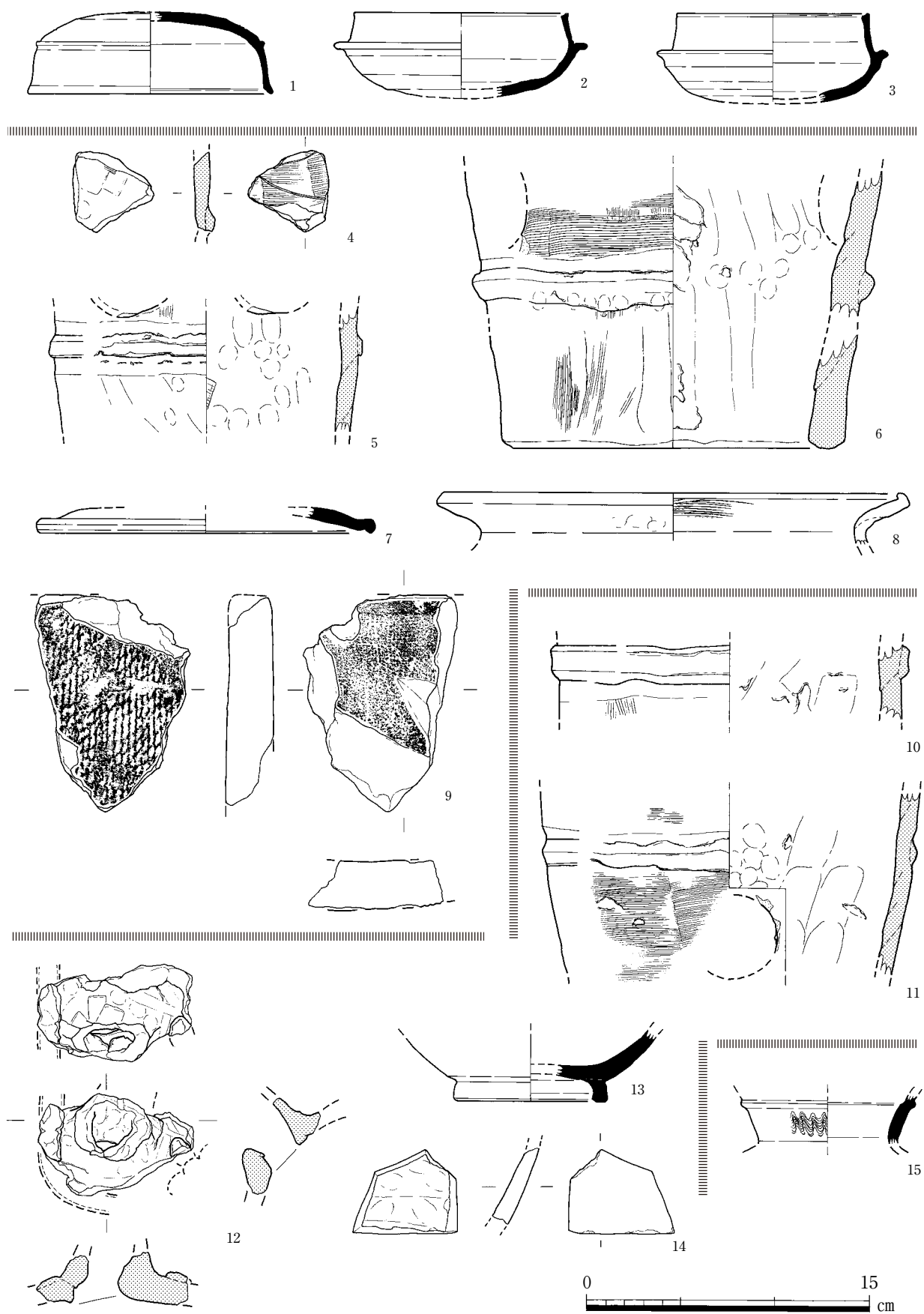


図84 纏向石塚古墳第5次調査出土遺物実測図1 (1 / 3)  
 第1トレンチ：1～3 淡灰褐色土 4～9 整地層 10～14 床土 15 耕作土



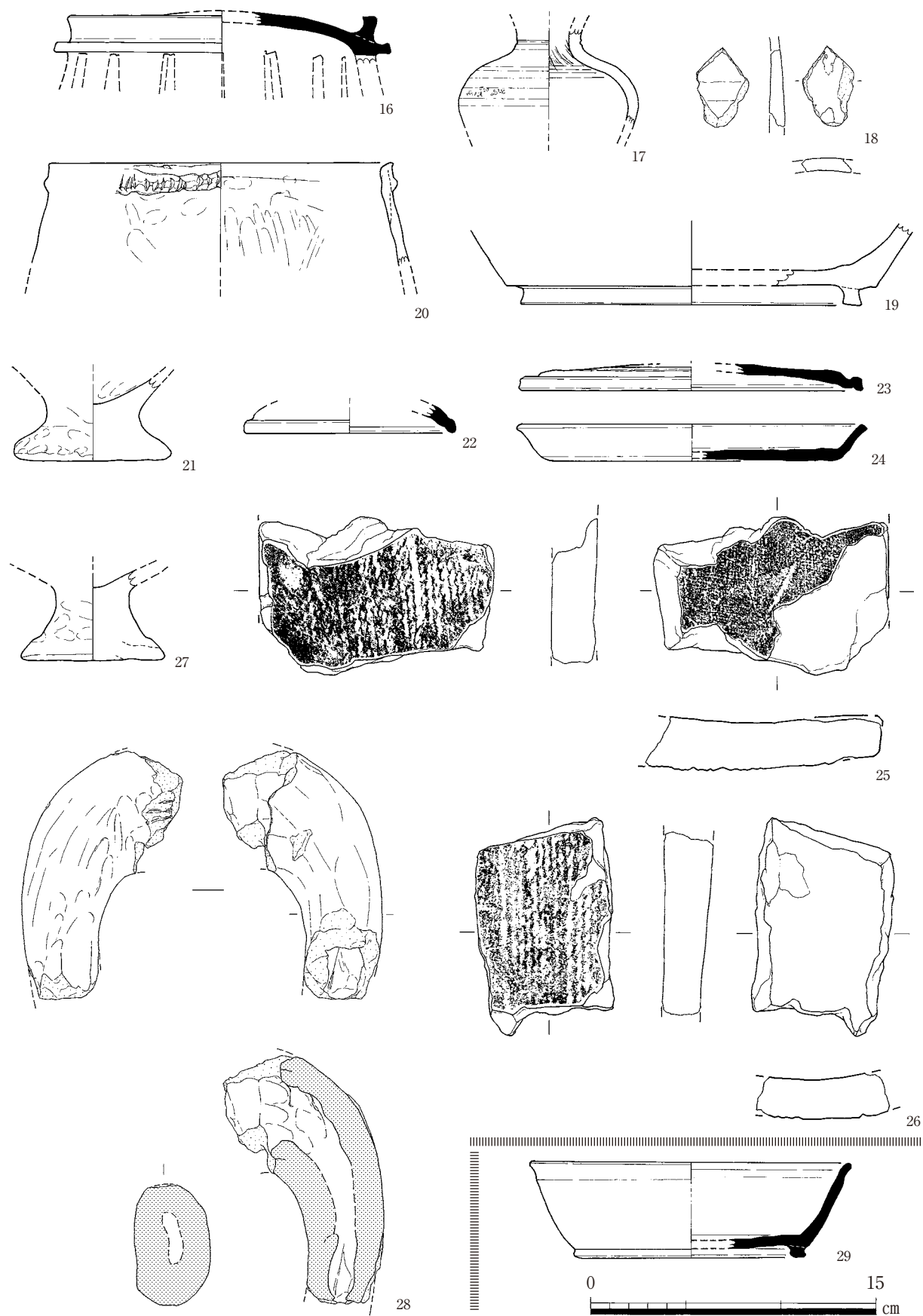


図85 纏向石塚古墳第5次調査出土遺物実測図2 (1 / 3)  
 第5トレンチ：16～18 暗灰褐色土 19 淡褐灰色土 20～25 包含層 26 床土 27・28 耕作土下  
 第6トレンチ：29 灰褐色土

## 第 8 章 纏向石塚古墳第 6 次調査報告

(纏向遺跡第66次調査報告)

### 第 1 節 はじめに

第 6 次調査は古墳の公有化・整備事業の一環として纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、桜井市教育委員会が実施したものである。

本調査の目的となったのは墳丘北側の墳丘ラインの確認である。この墳丘ラインについては第 4 次調査の 4-1・3d・3e トレンチにおいて既に確認調査が行われているが、国土座標に基づいた記録が残されていない 1-2 トレンチと 4-1 トレンチ間の墳丘ラインや 4-1 トレンチと 4-3 e トレンチ間の墳丘の状況など、状況の判然としない部分が幾つか残されていたため、第 5 次調査の 5-1～4 トレンチの墳丘側延長部分に軸線を合わせる形で 6-1～4 の 4 本のトレンチを設定し、確認調査を行ったものである。

調査では墳丘部分は第 4 次調査で確認されている平安時代以降の攪乱土を除去して墳丘上面を露呈させることとし、周濠にかかる部分はこれまでの調査と同様に周濠堆積土上面（暗灰色粘土）までの掘削を基本として調査を行うこととした。

このうち、6-1 トレンチにおいては土層断面の検討のため一部墳丘の断ち割りを行ったところ、墳丘盛土下にて古墳に先行するとみられる溝や土坑の存在が確認されたため、当初の予定を変更して盛土の除去を行い、下層遺構の調査を行っている。

なお、現地調査は平成 4 年 1 月 21 日から平成 4 年 3 月 11 日にかけて行っており、調査面積は 131㎡であった。

### 第 2 節 各トレンチの成果

#### (1) 第 1 トレンチ

##### 1. 調査の成果

先の第 5 次調査において設定された 5-2 トレンチの延長線上に設定した幅約 3 m、長さ約 15 m の調査区で、調査面積は 43㎡であった。

この調査区では墳丘盛土上面を露呈させ墳丘の残存状況の確認と、墳丘肩部と周濠ラインの検出を目的として調査を行っている。

このうち周濠部分の調査ではトレンチ北端から 3.4 m の地点において周濠肩部を検出することができ、以下新しい時期の覆土を除去して周濠堆積の最上層とみられる暗灰色粘土層（図 87-1-44 層）、もしくは淡灰色粘土層（図 87-1-45 層）を一部掘り下げて調査を終了している。一方、墳丘部分の調査は人力によって表土以下の覆土を除去し墳丘盛土の検出に努めたが結果的には明確な盛土は確認することはできず、後述する墳丘下の包含層とみられる土壌の存在を確認することとなった。

なお、図 87-1 に示した等高線の入った平面図は覆土の掘削過程において一端墳丘盛土と判断した

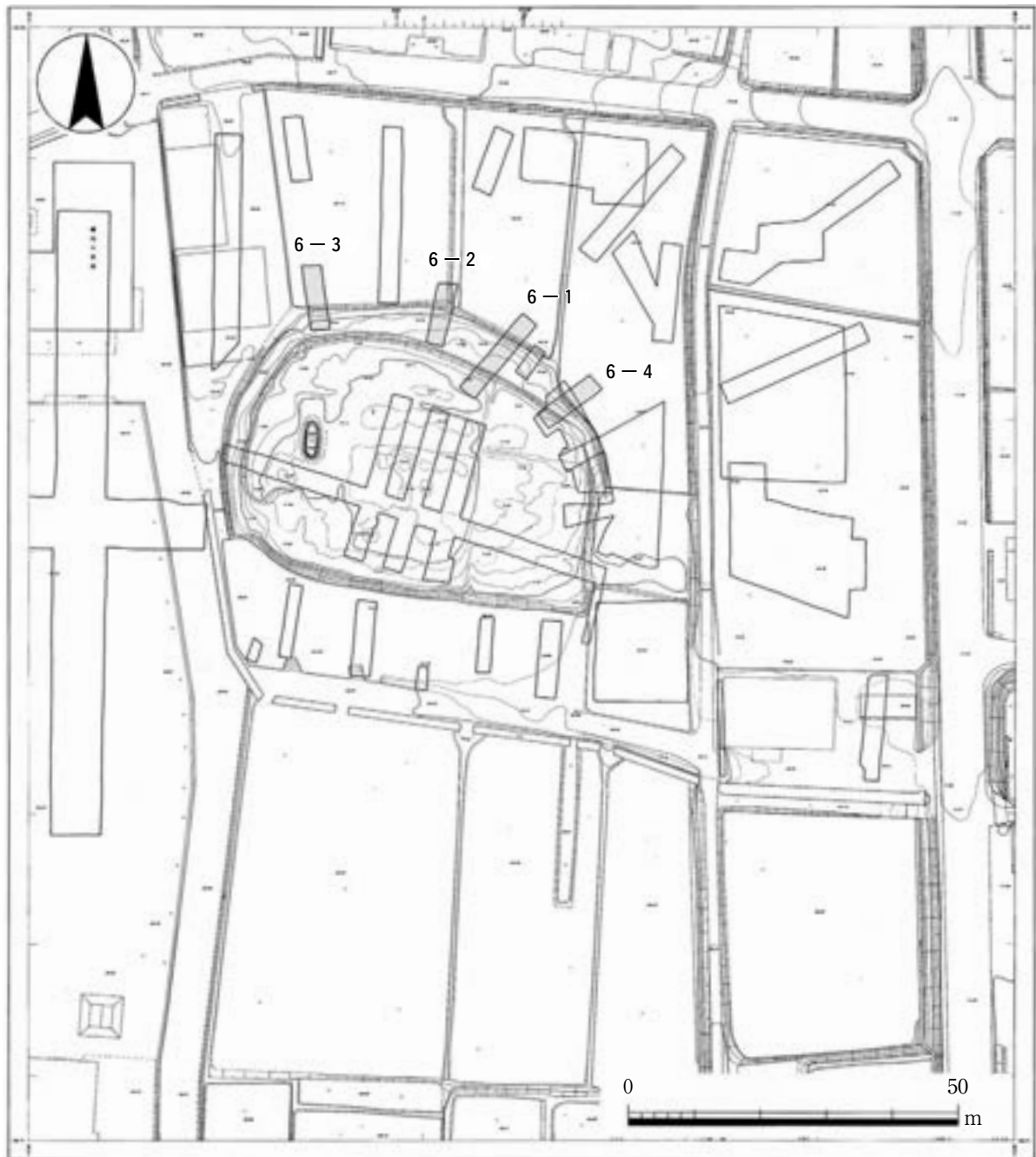


図86 纏向石塚古墳第6次調査地位位置図 (1/1,000)

遺構面において作成したものであるが、結果的には土層の認定に誤りがあり、トレンチ北側部分は地山面、中央部では包含層上面、南端部では覆土内で掘削を止めた状態となっており、残念ながら図示した平面の状況や等高線は統一した面での状況とはなっていない。

この墳丘盛土上面と仮定した面での調査後、土層の状況を確認するために調査区の東部分において断ち割りを行ったところ、6-1 トレンチ部分では後世の削平により墳丘盛土は残されておらず検出した遺構面の認定に誤りがあったことが判明するとともに、纏向石塚古墳の墳丘下に存在する包含層（図87-1-62～73層）とみられる堆積土の存在を確認した。しかしながら、図87-1に示した断面図で

はこの墳丘下包含層とみられる堆積土は、調査区南端部では南へと向かって大きく盛り上がる74～76層の上に被る形となっており断面図の土層註記には記載がないものの、この74～76層を墳丘盛土と考えると62～73層も包含層では無く墳丘盛土ということになり、後述する溝1や土坑1、ピット群などは墳丘構築の最中に掘削された遺構と考えざるを得ないが、遺構の時期やその状況から勘案して、築造途中にこれらの遺構が構築されたと判断するのは難しいと思われる。

一方、74～76層を地山の高まりと考えると遺構の状況に矛盾は生じないものの、これまでの纏向石塚古墳の調査においては墳丘内にこのような地山の高まりは未だ確認されていないし、地山としては右上がりの堆積状況にも不自然さがあること、また色調や土質から考えると地山と判断するのは困難と言わざるを得ない。

このことから、74～76層部分においては何らかの分層の誤りも想定することができるが、本報告では明らかに纏向石塚古墳に先行するとみられる溝や土坑の存在を重視し、62～73層を墳丘下の包含層として取り扱うこととし、調査区南端部の74～76層の性格についてはこれを保留しておく。

さて、この断ち割り部分の調査では先述した古墳に先行するとみられる包含層とその上面から切り込まれたピットなどの遺構の存在が確認されたことを受けて急遽、除去しきれていなかった覆土の掘削を行い、墳丘下包含層の上面を露呈させ下層遺構の検出に努めることとなった。

この結果、墳丘下包含層上面からは図87-2の墳丘下層遺構平面図に示した溝1・土坑1・ピット1～12などの遺構を検出することができた。

以下、個々の遺構についてみていくこととしよう。

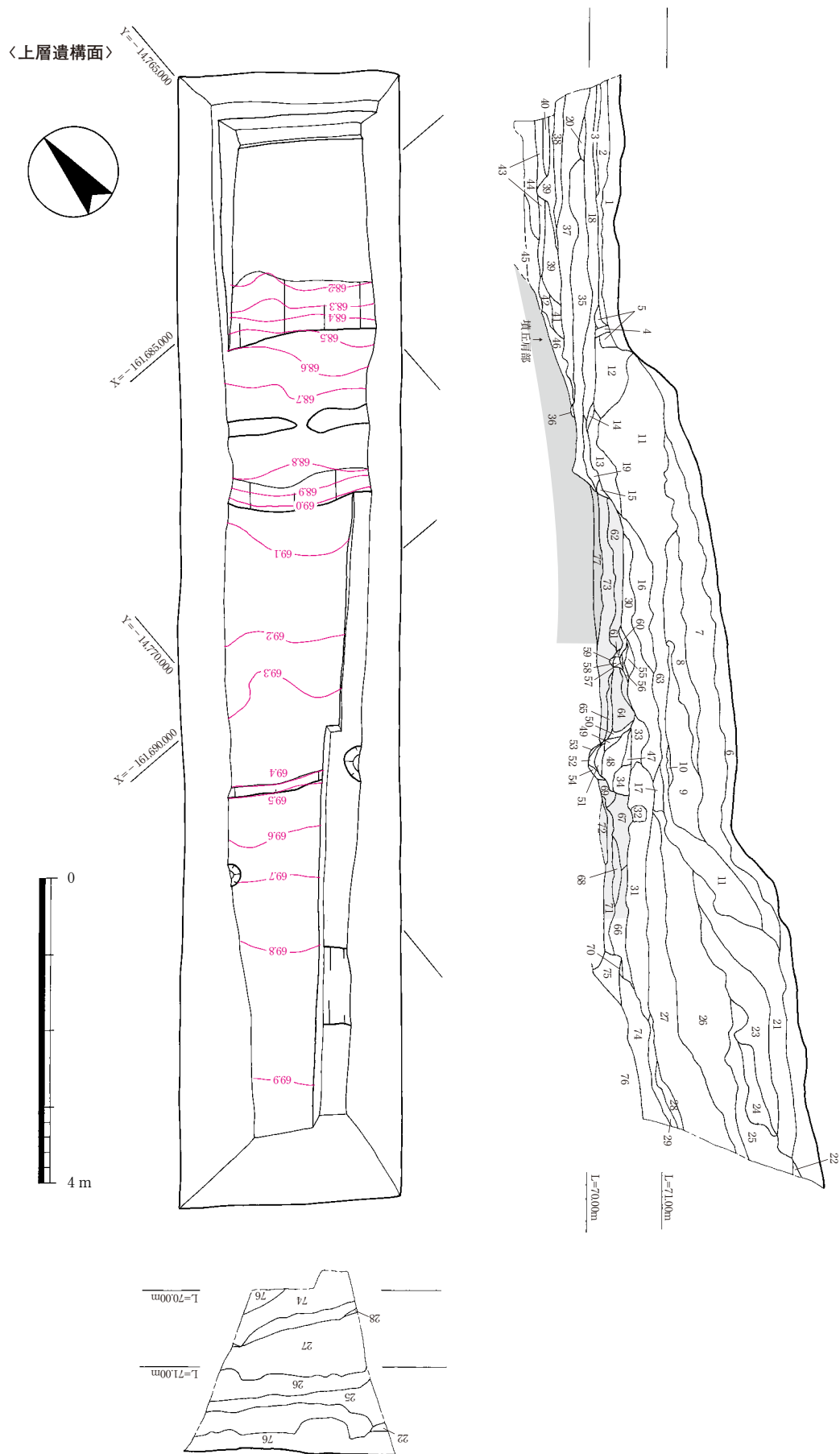
**溝1** 調査区内の西壁際で検出された溝状遺構である。調査時点では先述したように土層の認識に過ちがあり、本来は墳丘下の包含層上面で検出すべき遺構であったが、包含層を大きく掘り下げてしまった時点で遺構の存在に気付いたため、ほぼ地山面が露呈した部分より下部のみ調査を行っている。

検出された溝1は幅20～30cm、深さ5～10cm程度しか残存していなかったが、幸いにしてこの溝1の北端は西壁面にかかるかたちで存在したため、壁面に残された土層の観察からは本来幅約55cm、深さ約40cmの規模を持つものであることが判明している。

また、この溝1は南端部分が後述する土坑1と重複する状況にあった。両遺構の切り合い関係については記録が残されておらず、前後関係は明確ではないが、図87-2に示した土坑の断面には溝の痕跡が確認できないことから溝1が先行する遺構と考えている。

なお、溝1の埋土の記録は図87-2に示したように最下部しか残されていないが、淡茶褐色粘質シルトおよび褐灰色土で構成されていることが判明している。

**土坑1** 調査区内の西壁にかかるかたちで検出された土坑で、遺構の大半は調査区外へ展開するためその全容は明らかではない。この土坑は溝1と同様に本来は墳丘下の包含層上面で検出すべき遺構であったが、やはり包含層を大きく掘り下げてしまった時点で遺構の存在に付き、急遽調査を行ったものである。この結果、検出された土坑1は径1.35m以上、深さは30cm前後しか残されていないが、西壁断面の状況から本来は径1.85m以上、深さ約75cmをはかる比較的規模の大きい遺構であった





6-1 トレンチ東壁・南壁・土坑1

- 1 暗灰色土層
  - 2 灰色土層 (5mm以下の砂を含む。シルト質)
  - 3 淡茶灰色土層 (2mm以下の砂を含む。シルト質)
  - 4 淡茶灰色土層 — 杭跡
  - 5 淡灰色土層 (マンガン粒と4mm以下の砂を含む)
  - 6 暗茶褐色土層
  - 7 暗褐色土層 (8mm以下の砂礫を含む)
  - 8 暗黄褐色土層 (11層より赤みがある。8mm以下の砂礫を含む)
  - 9 暗灰色粘質土層 (8層のブロックと8mm以下の砂礫を含む)
  - 10 淡褐色シルト層 (5mm以下の砂礫と炭化物を含む)
  - 11 暗黄褐色土層 (1cm以下の砂礫を含む)
  - 12 淡褐色土層 (7mm以下の砂礫を含む)
  - 13 淡茶褐色土層 (4mm以下の砂礫を含む。弱粘質)
  - 14 淡茶灰色土層 (4mm以下の砂礫を含む)
  - 15 淡紫灰色土層 (3mm以下の砂礫を含む)
  - 16 暗黄褐色土層 (暗灰色と黄灰色の粘土ブロック、8mm以下の砂礫を含む)
  - 17 淡褐色土層 (5mm以下の砂礫・炭化物・陶器片を含む)
  - 18 灰褐色土層 (5mm以下の砂礫を含む)
  - 19 淡紫灰色シルト層 (マンガン粒・3mm以下の砂を含む)
  - 20 灰褐色砂礫層 (3mm以下の砂を含む)
  - 21 暗黄褐色土層 (11層より色が濃い。1cm以下の砂礫を含む)
  - 22 暗褐色土層 (黒褐色粘土を含む)
  - 23 暗褐色土層 (黒灰色粘土ブロックと淡黄灰色粘土ブロックを含む)
  - 24 暗褐色土層 (黒灰色粘土ブロックと淡黄灰色粘土ブロックが互層状に入る)
  - 25 黒褐色・淡黄褐色粘土ブロック土層 (表土を若干含み、粘土は互層をなす)
  - 26 黒褐色・淡黄褐色粘土ブロック土層 (淡褐色シルトを含み、粘土は互層をなす)
  - 27 黒褐色・淡黄褐色粘土ブロック土層 (淡褐色・暗灰色のシルトを含み、全体的に互層をなす)
  - 28 暗灰色細砂質土層 (1mm以下の細砂・炭化物を含む)
  - 29 灰色砂礫層 (8mm以下の砂礫を多く含む)
  - 30 淡灰褐色土層 (暗灰色粘土ブロック・土器片・炭化物を含み、3mm以下の砂礫を多く含む)
  - 31 紫茶褐色土層 (5mm以下の砂礫・暗灰色粘土ブロック・土器片を含み硬質。層底に鉄分が堆積)
  - 32 淡褐色土層 (3mm以下の砂礫を含む)
  - 33 茶褐色土層 (8mm以下の細砂を含み、硬質)
  - 34 褐灰色土層 (5mm以下の砂礫・土器片・炭化物を含む)
  - 35 褐灰色土層 (5mm以下の砂礫を含む)
  - 36 暗茶灰色土層 (2mm以下の砂を含む)
  - 37 灰色土層 (4mm以下の砂を若干含む)
  - 38 淡茶灰色土層 (3mm以下の砂粒を含み、弱粘質)
  - 39 淡紫灰色粘質土層 (5mm以下の砂礫・土器を含む)
  - 40 淡灰色砂礫層 (5mm以下の砂礫を多量に含む)
  - 41 茶灰色土層 (2mm以下の砂礫を若干含む)
  - 42 淡灰色粘質土層 (1mm以下の細砂を含む)
  - 43 灰色粘質土層 (マンガン粒・5mm以下の砂礫を若干含む)
  - 44 淡灰色粘土層 (3mm以下の砂礫を若干含む)
  - 45 暗灰色粘土層 (1mm以下の細砂をやや多く含む)
  - 46 灰褐色シルト層 (マンガン粒・1mm以下の細砂をごく微量含む)
  - 47 暗褐色土層 (3mm以下の砂礫を含む)
  - 48 褐灰色土層 (3mm以下の砂礫を含む)
  - 49 褐灰色土層 (1mm以下の細砂を多く含む)
  - 50 暗黄褐色土層 (1mm以下の砂礫を多く含み、シルト質)
  - 51 褐灰色土層 (47層より淡い。1mm以下の砂礫を多く含む)
  - 52 灰色細砂層 (1mm以下の砂礫を多く含む)
  - 53 淡茶灰色粘土層 (0.5mm以下の細砂を多く含む)
  - 54 淡紫灰色細砂質土層 (1mm以下の細砂を多く含む)
  - 55 淡褐色シルト層 (マンガン粒・1mm以下の細砂を含む)
  - 56 淡茶灰色土層 (1mm以下の細砂と土器片を含む。シルト質)
  - 57 淡茶灰色砂礫層 (8mm以下の砂礫を多く含む)
  - 58 淡茶灰色粘質土層 (1mm以下の細砂を若干含む。弱粘質)
  - 59 茶灰色シルト層 (0.5mm以下の細砂を多量に含む)
  - 60 茶灰色土層 (3mm以下の砂礫と炭化物を含む。シルト質)
  - 61 茶灰色土層 (0.5mm以下の細砂を若干含む。弱粘質)
  - 62 淡茶灰色土層 (1mm以下の細砂を多量に含む)
  - 63 淡茶灰色シルト層 (55層より色が濃く、0.5mm以下の砂礫を多量に含む)
  - 64 淡茶灰色粘質土層 (0.5mm以下の砂礫を若干含む)
  - 65 淡黄灰色細砂質土層 (1mm以下の細砂を多量に含む)
  - 66 暗灰色シルト層 (0.5mm以下の細砂を多く含み、比較的硬質)
  - 67 淡褐色土層 (5mm以下の砂礫を含む)
  - 68 灰色シルト層 (0.5mm以下の細砂を多く含む)
  - 69 暗褐色土層 (3mm以下の砂礫を多く含む)
  - 70 淡紫灰色シルト層 (0.5mm以下の細砂を多く含む)
  - 71 灰褐色砂質土層 (1mm以下の砂礫を多く含み、炭化物を含む)
  - 72 灰黄褐色土塊 (2mm以下の粗砂を多く含む)
  - 73 淡紫灰色砂質土層 (2mm以下の粗砂を多量に含む)
  - 74 暗褐色砂礫層 (5mm以下の砂礫を多く含む)
  - 75 暗灰色シルト層 (0.5mm以下の均質な細砂を多量に含む)
  - 76 淡灰色砂礫層 (5mm以下の砂礫を多く含む)
  - 77 淡茶色粘土層 (強粘質) 地山
- ※ 番号註記のない土層は、原因に記載なし

〈墳丘下層遺構面〉



現代整地土

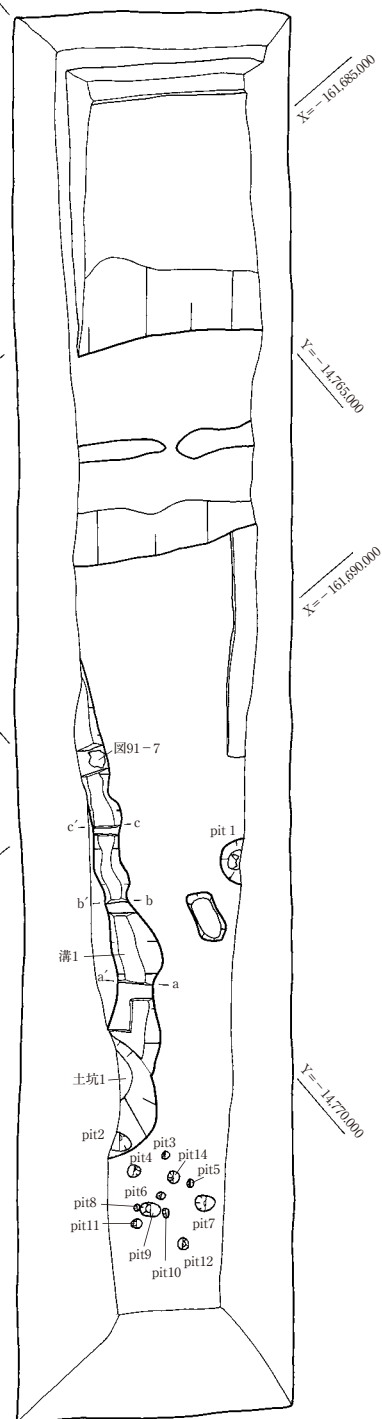
現代整地土

周濠内堆積土

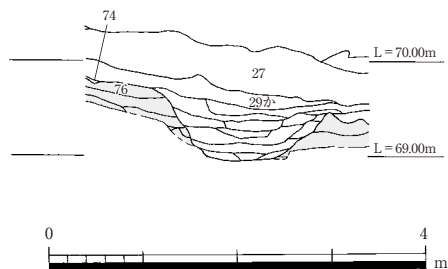
pit1埋土

遺構埋土

古墳築造前の包含層



〈土坑1〉



〈溝1〉

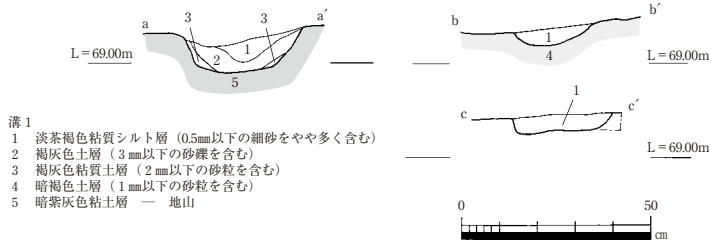


図87-2 6-1 トレンチ平・断面図 (平面：1/80・断面：1/20)



ことが解っている。遺構埋土の状況は比較的均一な水平堆積を示しているが、調査時に作成された実測図には土色や質の記載が欠落しており、残念ながら細かな情報は不明である。

**ピット群** ピットの多くは調査区内の南端部分に集中して検出されている。調査区南端付近のピット群はいずれもが墳丘下包含層上面において検出されたものであるが、殆どは径10～20cm前後の小さなもので、柱痕跡も確認できず建物を構成するか否かは判然としないものであった。

このうち調査区中央部で東壁にかかるかたちで検出されたピット1は溝1や土坑1と同様に本来は墳丘下の包含層上面で検出すべき遺構であったが、やはり包含層を大きく掘り下げてしまった時点で遺構が確認され調査を行ったものである。この結果、検出された遺構は径48cm、深さは12cm前後しか残されていなかったが、東壁断面の状況から本来は径98cm、深さ57cmをはかる土坑とも呼ぶべき大きな遺構であったことが解っている。遺構埋土の状況は大きく分けて図87-1-47～51層の上層と52～54層の下層に分けることができ上層は褐灰色系の土、下層は灰色系の砂や細砂、粘土で構成されていた。

## 2. 出土遺物

第1トレンチからの出土遺物は主に溝1や土坑1などから出土している（図91・92）。1から7は溝1からの出土遺物で多くは弥生形甕である。ラベルに記載された出土層位は淡褐色砂質土と淡茶褐色土との記録があるが、残念ながら土層図には記録が無く詳細な地点は不明であるが出土層位ごとにそれほど時期差のある遺構とは考えられないことから、一括の資料と考えて良いと思われる。概ね庄内期でも古相の資料と考えられるが遺物の量や器種の様相からして細かな時期を限定し得るものではない。8・9は溝1と土坑1の混在資料である。纏向石塚古墳に先行する資料としての価値は高いが、やはり点数や器種の問題から時期を限定し得るものではない。10から24は土坑1からの出土遺物である。このうち10の細頸壺は下層から、他は上層からの出土であった。この土坑からの出土遺物には壺・甕・高坏など比較的多くの器種があり、概ね庄内0式期に属するものかと考えられるが、やはり資料の点数や個々の残存状況からは細かな時期を限定するのは困難である。

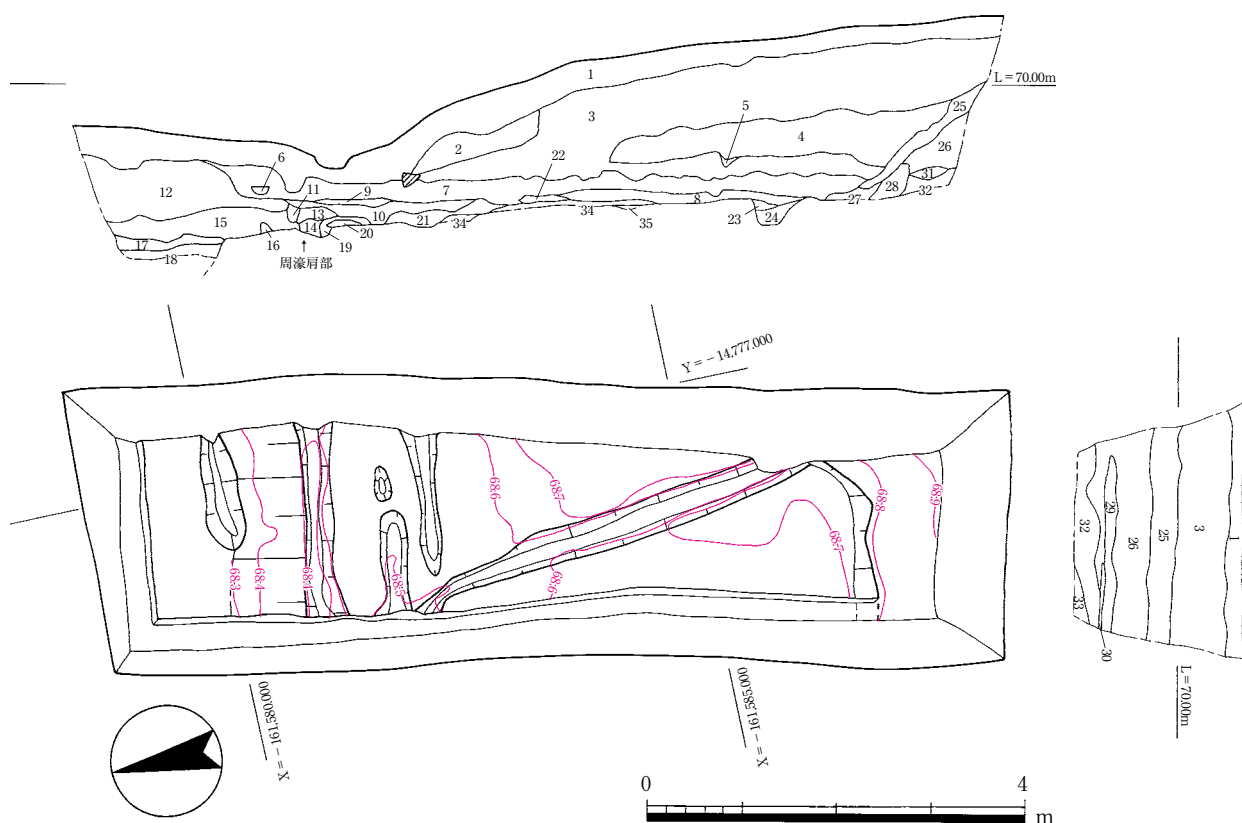
なお、25はピット1からの出土土器で、26から32は暗灰褐色砂礫土からの出土とのラベルが残されていた。このラベルには墳丘盛土との記録も残されていたことやその土色の記録からは図87-1-74層からの出土の可能性が考えられるが、遺物ラベル記載の土色と断面図の土色が必ずしも対応した状態で記録が残されていないこと、また先述したように74層の性格が盛土であるか否かの確認が困難であることから、ここでは墳丘盛土出土との判断は保留することとし、74層出土の可能性を提示するのみに留めておきたい。

### （2）第2トレンチ

#### 1. 調査の成果

後円部墳丘の北側、5-3トレンチの延長線上に設定した幅約3m、長さ約10mの調査区で、調査面積は28㎡であった。

この調査区も第1トレンチと同様に墳丘盛土上面を露呈させ墳丘の残存状況の確認を行うことと、



- |   |         |                                  |
|---|---------|----------------------------------|
| 1 暗灰色土層                                     | 耕作土     | 19 黄茶褐色土層 (5 mm以下の砂礫を含む)         |
| 2 暗黄灰褐色土層 (7 mm以下の砂礫・シルトブロック・粘土ブロックを含む)     |         | 20 灰褐色砂礫層 (1 cm以下の砂礫を含む)         |
| 3 暗茶褐色土層 (7 mm以下の砂礫・シルトブロック・粘土ブロックを含む)      |         | 21 暗茶褐色粘質土層 (3 mm以下の砂礫とマンガン粒を含む) |
| 4 暗茶褐色土層 (7 mm以下の砂礫・シルトブロック・粘土ブロックを含む)      |         | 22 青灰褐色土層 (3 mm以下の砂礫とシルトを含む)     |
| 5 黄茶褐色粘質土層 (3 mm以下の砂礫を含む)                   |         | 23 灰茶褐色シルト層 (3 mm以下の砂礫を含む)       |
| 6 黄褐色粘質土層 — 暗渠                              | 素掘り小溝埋土 | 24 暗灰褐色シルト層 (3 mm以下の砂礫を含む)       |
| 7 灰褐色土層 (マンガン粒を含む)                          |         | 25 黄茶褐色土層 (7 mm以下の砂礫と多量の枝を含む)    |
| 8 黄灰褐色土層 (7 mm以下の砂礫と砂礫ブロックを含む)              |         | 26 暗灰褐色土層 (7 mm以下の砂礫・マンガン粒・炭を含む) |
| 9 灰褐色砂礫層 (7 mm以下の砂礫で構成される。マンガン粒を含む)         |         | 27 青灰褐色土層 (2 mm以下の砂礫を含む)         |
| 10 黄灰褐色砂礫層 (1 cm以下の砂礫で構成される)                |         | 28 黄灰褐色土層 (7 mm以下の砂礫を含む)         |
| 11 灰褐色土層 (3 mm以下の砂礫を含む)                     | 周濠内堆積土  | 29 灰茶褐色土層 (5 mm以下の砂礫・マンガン粒・炭を含む) |
| 12 淡茶褐色土層 (マンガン粒を含む)                        |         | 30 炭化層                           |
| 13 灰茶褐色土層 (3 mm以下の砂礫・シルトブロックを含む)            |         | 31 黄灰褐色シルト層 (2 mm以下の砂礫を含む)       |
| 14 淡灰褐色粘質シルト層 (3 mm以下の砂礫を含み、粘性強い) — 素掘り小溝埋土 |         | 32 暗灰茶褐色粘質土層 (5 mm以下の砂礫を含む)      |
| 15 灰茶褐色土層 (7 mm以下の砂礫を含む)                    |         | 33 黄灰褐色粘質シルト層 (5 mm以下の砂礫を含む)     |
| 16 灰褐色土層 (3 mm以下の砂礫を含む)                     |         | 34 黄灰褐色シルト層 (2 mm以下の砂礫とマンガン粒を含む) |
| 17 暗灰褐色砂礫層 (7 mm以下の砂礫で構成される)                |         | 35 灰茶褐色シルト層                      |
| 18 黄灰褐色シルト層 (3 mm以下の砂礫とマンガン粒を含む)            |         |                                  |

図88 6-2 トレンチ平・断面図 (1/80)

墳丘肩部および周濠ラインの検出を目的として調査を行っている。

このうち周濠部分の調査は、トレンチ北端から2.3mの地点において周濠肩部を検出することができ、以下周濠堆積の最上層となる暗灰褐色砂礫層 (図88-17層) を除去し、黄灰褐色シルト層 (図88-18層) を露呈させた段階で調査を終了している。一方、墳丘部分の調査は人力によって表土以下の覆土を除去し、墳丘盛土の検出に努めたが中近世の削平が著しく、明確な盛土は確認することができなかった。

## 2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物には覆土中からの中世土器や周濠埋土最上層からの土師器・須恵器などの

小片がみられたが、遺物の総量は少ないものであった。また、今回の報告に際して再度見直しを行ったが、図示できるような遺物は認められなかった。

### (3) 第3トレンチ

#### 1. 調査の成果

後円部墳丘の北西側、5-4トレンチの南側延長線上に設定した幅3m、長さ10mの調査区で、調査面積は30㎡であった。

この調査区も他の調査区と同様に墳丘盛土上面を露呈させ墳丘の残存状況の確認を行うことと、墳丘肩部および周濠ラインの検出を目的として調査を行っており、周濠部分の調査ではトレンチ北端から4.5mの地点において周濠肩部を検出することができた。周濠部分の調査は堆積の最上層にあたる灰

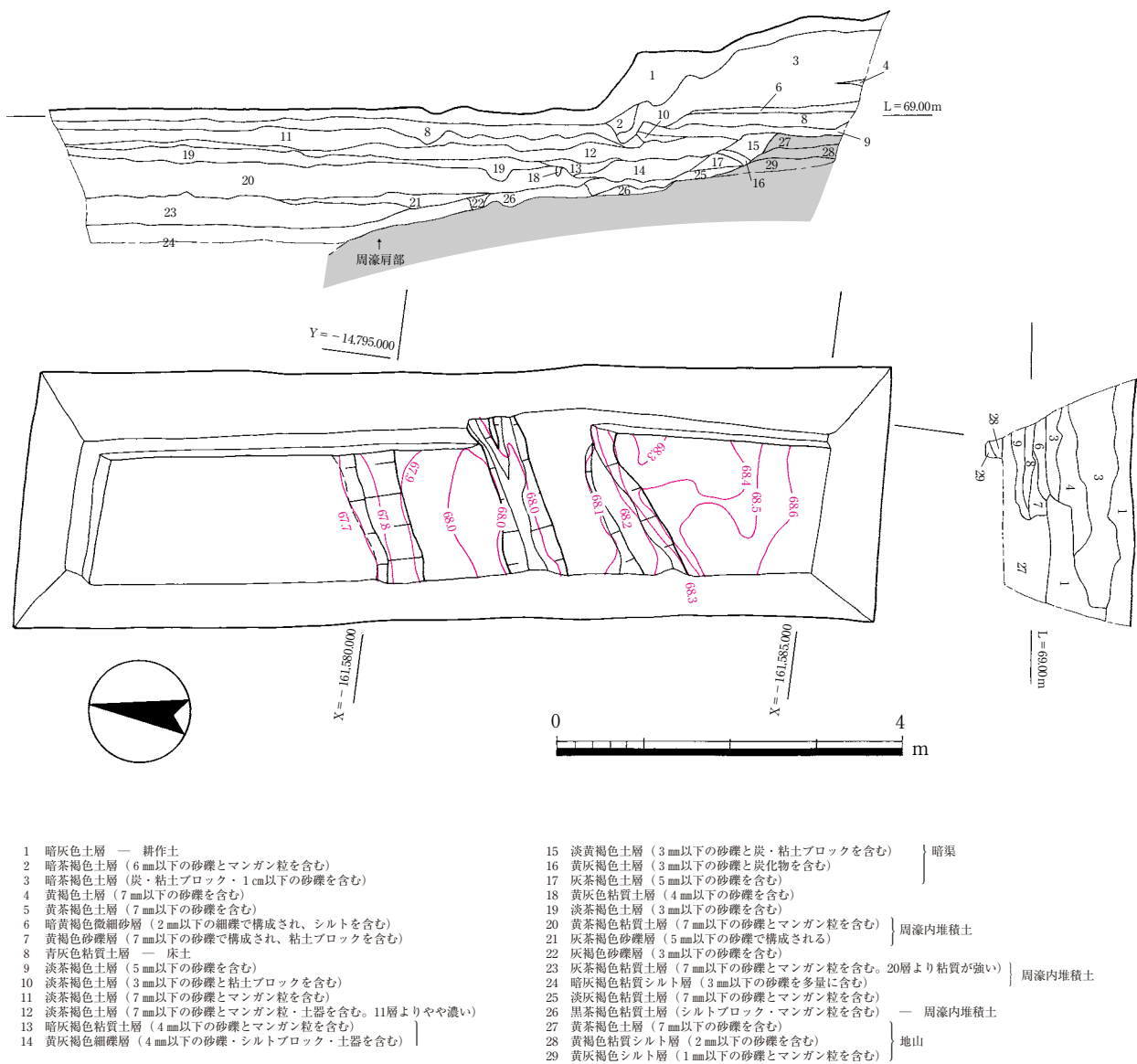


図89 6-3 トレンチ平・断面図 (1/80)

茶褐色粘質土および暗灰褐色粘質シルト層黒茶褐色粘質土層（図89-23・24・26）を除去するに留め、以下の掘り下げは行っていない。墳丘部分の調査は人力によって表土以下の覆土を除去し、墳丘盛土の検出に努めたが6-2トレンチと同様、中近世の削平が著しく、盛土の存在は確認することができなかった。

## 2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物は覆土中から中世土器や土師器・須恵器の小片がみられたが、遺物の総量は非常に少ないものであった。今回の報告に際して再度整理と見直しを行ったが、図示できるような遺物は認めることができなかった。

### （4）第4トレンチ

#### 1. 調査の成果

6-4トレンチは後円部墳丘の北東側、5-1トレンチの南西側延長線上に設定した幅3m、長さ10mの調査区で、調査面積は30㎡であった。

この調査区も他の調査区と同様に墳丘盛土上面を露呈させ墳丘の残存状況の確認を行うことと、墳丘肩部および周濠ラインの検出を目的として調査を行っており、周濠部分の調査ではトレンチ北端から6mの地点において周濠肩部を検出することができたが、検出された周濠肩部は断面の観察から後世の堆積土である49・50層などの攪乱によって削らたとみられ、本来のラインよりは西南方向へやや後退しているものと考えられる。なお、周濠内部の調査は堆積の最上層にあたる図90-55～58層を除去するに留め、以下の掘り下げは行わなかった。

墳丘部分の調査は調査区南端において標高約70mのレベルにおいて墳丘盛土とみられる高まりを確認しているが検出状況から考えて表層部分は後世に大きく改変を受けているものとみられ、図示した遺構図は墳丘本来の姿をあらわすものではない。

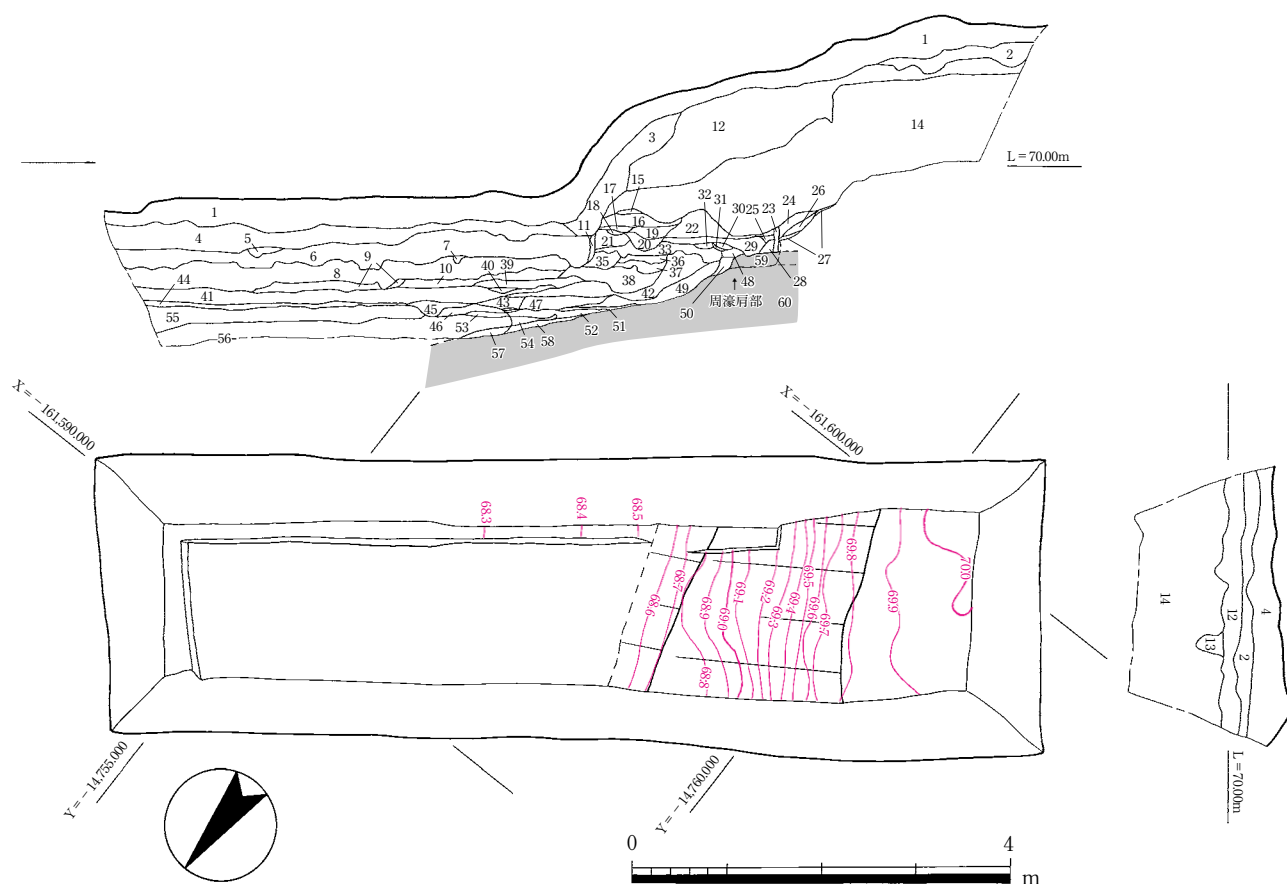
なお、このトレンチにおいては盛土保存を優先し墳丘の断ち割り調査を行わなかったため、残念ながらその構築状況を知ることはできなかったが、第6次調査で設定された他のトレンチでは盛土の残存が全く確認できなかった中で唯一の確認事例となった。

## 2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物は他の調査区と同様に覆土中からの中世土器や古式土師器・須恵器などの小片がみられたが、遺物の総量は少ない。今回の報告に際して再度すべての遺物について見直しを行ったが、図示できるような個体や特筆すべき遺物は認められない。

## 第3節 小結—第6次調査の成果—

第6次調査は墳丘北側の墳丘および周濠の形状確認とその残存状況の確認を目的として4本のトレンチを設定し調査を行った結果、墳丘のラインについてはほぼ当初の推定どおりに検出することができた。それぞれの調査区における墳丘裾の検出レベルを整理しておくと第1トレンチでは標高68.5m、第2トレンチでは68.4m、第3トレンチでは67.8m、第4トレンチでは68.8mと第3トレンチを除いて



- |  |                                    |
|--|------------------------------------|
| 1 表土 — 耕作土                               | 31 褐灰色粘質土層 (1mm以下の細砂を若干含む)         |
| 2 暗赤黄褐色土層 (5mm以下の砂礫を含む)                  | 32 淡黄褐色砂礫層 (5mm以下の砂礫を多く含む)         |
| 3 暗黄灰色土層 (8mm以下の砂礫・土器を含む)                | 33 淡茶灰色土層 (1cm以下の砂礫を多く含む)          |
| 4 淡茶灰色土層 (5mm以下の砂礫を含む)                   | 34 灰色粘質土層 (1mm以下の砂礫をやや多く含む)        |
| 5 淡紫灰色土層 (3mm以下の砂礫・土器片・炭化物を含む)           | 35 茶褐色粘質土層 (2mm以下の粗砂をごく微量含む)       |
| 6 淡紫灰色土層 (5層より色が淡い。3mm以下の砂礫と、土器片・炭化物を含む) | 36 淡茶褐色粗砂層 (2mm以下の粗砂を多く含む)         |
| 7 淡茶灰色土層 (3mm以下の砂礫を含む)                   | 37 褐灰色土層 (2mm以下の砂礫を含む)             |
| 8 茶灰色土層 (8mm以下の砂礫を含む)                    | 38 淡褐灰色土層 (3mm以下の砂礫を含む)            |
| 9 淡黄灰色土層 (3mm以下の砂礫を含む)                   | 39 灰色粘質土層 (1mm以下の砂礫をやや多く含む)        |
| 10 暗茶灰色土層 (4mm以下の砂礫を含む)                  | 40 淡灰色粘質土層 (1mm以下の細砂を若干含む)         |
| 11 褐灰色土層 (3mm以下の砂礫を若干含む)                 | 41 淡紫灰色粘土層 (1mm以下の細砂と、瓦器片・炭化物等を含む) |
| 12 暗赤黄褐色土層 (2層より色が濃い。8mm以下の砂礫を含む)        | 42 灰色粗砂層 (2mm以下の砂を多量に含む)           |
| 13 暗黄褐色土層 (8mm以下の砂礫を含む)                  | 43 暗黄灰色粘質土層 (8mm以下の砂礫をやや多く含む)      |
| 14 淡赤黄褐色土層 (8mm以下の砂礫・土器を含む)              | 44 暗灰色粘土層 (1mm以下の砂礫を若干含む)          |
| 15 淡黄褐色土層 (1mm以下の細砂を若干含む)                | 45 暗灰色粘質土層 (1cm以下の砂礫を若干含む)         |
| 16 淡黄褐色土層 (3mm以下の砂礫をやや多く含む)              | 46 淡緑灰色粘土層 (4mm以下の砂礫・木質を若干含む)      |
| 17 淡赤灰色粘質土層 (1mm以下の細砂を若干含む)              | 47 灰色粘質土層 (5mm以下の砂礫をやや多く含む)        |
| 18 淡赤褐色粘質土層 (1mm以下の細砂を若干含む)              | 48 灰色粘質土層 (1mm以下の砂礫をやや多く含む)        |
| 19 淡黄灰色土層 (5mm以下の砂礫を若干含む)                | 49 暗灰色粘質土層 (0.5mm以下の細砂を若干含む)       |
| 20 褐灰色土層 (8mm以下の砂礫を含む)                   | 50 暗褐色砂礫層 (2mm以下の粗砂を多く含む)          |
| 21 淡茶褐色土層 (8mm以下の砂礫を含む)                  | 51 暗灰色細砂質土層 (1mm以下の細砂を多く含む)        |
| 22 暗橙褐色土層 (8mm以下の砂礫を含む)                  | 52 淡黄灰色細砂層 (1mm以下の細砂を多く含む)         |
| 23 淡赤褐色土層 (1mm以下の砂礫を多く含む)                | 53 淡灰色細砂層 (1mm以下の砂を含む)             |
| 24 淡黄灰色土層 (1mm以下の細砂をやや多く含む)              | 54 淡黄灰色粘質土層 (2mm以下の粗砂を若干含む)        |
| 25 淡茶褐色土層 (3mm以下の砂礫を含む)                  | 55 灰色粘土層 (3mm以下の砂礫を含む)             |
| 26 淡茶褐色粘質土層 (1mm以下の細砂を若干含む)              | 56 淡緑灰色細砂層 (1.5mm以下の細砂を多く含む)       |
| 27 淡茶褐色粘質土層 (26層より粘質強い。1mm以下の細砂を若干含む)    | 57 暗灰色粗砂層 (2mm以下の粗砂を多量に含む)         |
| 28 淡褐灰色土層 (2mm以下の細砂を多く含む)                | 58 淡黄灰色粗砂層 (2mm以下の粗砂を多量に含む)        |
| 29 淡褐灰色砂質土層 (3mm以下の砂礫を含み、硬質)             | 59 淡茶褐色細砂層 (2mm以下の砂を多量に含む)         |
| 30 淡紫灰色粘土層 (0.5mm以下の細砂を若干含む)             | 60 暗褐灰色砂礫層 (3mm以下の砂礫を多く含む)         |

周濠内堆積土  
地山

図90 6-4 トレンチ平・断面図 (1/80)

はほぼ68.6mを中心とした20cm以内のレベルで検出することができた。この中で唯一67.8mと突出して低いレベルで墳丘肩を検出した6-3トレンチでは、明らかに周濠堆積最上層と判断される堆積層



(図89-17・18・20・21・26層)よりも下部において墳丘肩が設定されている。このことは本来周濠肩が来るべき調査区中央部分が新しい時期の暗渠により大きく攪乱を受けていたため、残された墳丘部分における見かけ上の傾斜変換点を周濠肩と判断したことに起因するものだと考えられる。本来の墳丘肩の位置は周濠堆積最上層とのレベル関係から推定すると標高68.4m付近に認めるべきものであろう。

さて、墳丘そのものに目を向けてみると第6次調査においては第4トレンチを除く全ての調査区が後世の著しい改変により、全く墳丘を残さないほど深いレベルまで削平を受け、本来の盛土を失っていることが判明した。今回の調査ではその時期を明らかにすることができなかったが、それは第4次調査のクビレ部周辺や第8次調査の後円部南側で確認されている平安時代の削平よりもさらに新しい時期のものと推定される。

なお、墳丘が大きく削平を受けたことの副産物ではあるが、第1トレンチの調査においては墳丘下に位置する包含層を確認している。纏向石塚古墳の墳丘下には、「弥生時代近畿（唐古45号竪穴上層併行）第5様式期の湿地状の堆積層」の存在が第2次調査の時点で既に指摘されていた<sup>1)</sup>が、今回調査の対象となった墳丘北側部分では湿地帯ではなく安定した遺構面と、その上面で溝や土坑、ピット群などの存在を明らかにすることができた。

これらの遺構の調査を進めることは古墳築造時期の上限を探る上で重要な手がかりとなり得るものである反面、下層遺構群の掘削時期の下限を探るためには広い範囲にわたって残存する墳丘の盛土を除去しなければ調査ができないという問題もある。

今回の調査では幸いにして墳丘を破壊することなく下層遺構の調査が実施できた訳ではあるが、限られた部分での調査にとどまり、古墳の築造時期を限定し得る良好な土器資料にも恵まれなかった。

(橋本)

【註記】

- 1) 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会1976



表 45 纏向石塚古墳第6次調査出土土器観察表 (1)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
91—1 126—1	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土	甕 Y	・—・—・b	C : (14.0)	O. (口唇) スリナデヨコICa・ (頸) スリナデヨコICa・ 押捺A i. スリナデヨコICa			O. 10Y R3/1黒褐 i. 7.5Y R7/3にぶい橙	・溝埋土第1層 (淡茶褐色粘質 シルト) に対 応か
91—2 126—2	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土	甕 Y	・—・—・b	C : (14.0)	マメツツ不明			O. 2.5Y 3/1黒褐 i. 2.5Y 6/3にぶい黄	・溝埋土第1層(淡 茶褐色粘質シル ト) に対応か
91—3 126—3	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土	甕 Y	・—・—・b	C : (14.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 5Y R6/6橙 i. 10Y R6/6にぶい黄橙	・溝埋土第1層 (淡茶褐色粘質 シルト) に対 応か
91—4 126—4	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土	甕 Y	・—・—・c		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5Y R6/3にぶい褐 i. 7.5Y R6/2灰褐	・溝埋土第1層 (淡茶褐色粘質 シルト) に対 応か
91—5 126—5	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土	甕 Y	・—・—・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5Y R6/4にぶい橙 i. 7.5Y R7/4にぶい橙	・溝埋土第1層 (淡茶褐色粘質 シルト) に対 応か
91—6 126—6	第1トレンチ 溝埋土 淡茶褐色土	甕 Y	II—C—・a	C : (14.0)	O. (口唇～口縁) スリナデヨコICa (頸) 押捺A i. スリナデヨコICa	O. 右上がりタタキ i. マメツツ不明	25/CM	O. 10Y R4/1褐灰～ 5Y R6/6橙 i. 7.5Y R7/6橙	・溝埋土第1層 (淡茶褐色粘質 シルト) かつ、そ の上面での出土
91—7 126—7	第1トレンチ 溝埋土 淡茶褐色土	甕 Y	II—C—1a	C : 14.1 W : 15.1	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. タタキ i. スリナデ1A b	20/CM	O. 10Y R6/3にぶい黄橙～ 10Y R5/2灰黄褐 i. 10Y R5/3にぶい黄褐	・埋土第1層(淡 茶褐色粘質シル ト) かつ、その上 面での出土
91—8 126—8	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土 第1トレンチ 土坑1上層 土坑1上層 暗青灰色土	甕 Y	I—C—・a	C : (16.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. 右上がりタタキ→ スリナデナナメ1A a i. マメツツ不明	25/CM 9/cm	O. 7.5Y R7/3にぶい橙 i. 7.5Y R7/2明褐灰	
91—9 126—9	第1トレンチ 溝埋土 淡褐色砂質土 第1トレンチ 土坑1下層 暗青灰色土(炭混じり)	鉢?	II?—A1—・	B : 4.6		O. スリナデ1C a i. スリナデ1A b		10Y R6/3にぶい黄橙(底部 外面は10Y R5/1褐灰)	
91—10 126—10	第1トレンチ 土坑1 下層	壺	S—B—a	C : 5.2 H : 15.6 B : 1.0 W : 15.1	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. ミガキA i. スリナデ1C a		O. 10Y R6/4にぶい黄橙 i. 10Y R5/2灰黄褐	・そのほか、土坑下暗灰 色粘質土、暗青灰色土 (炭混じり)、褐砂色土 の碎片とも接合してい る
91—11 126—11	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	壺	H—B—b	C : (16.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10Y R6/4にぶい黄橙	

表 46 纏向石塚古墳第 6 次調査出土土器観察表 (2)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部		体 部	底 部 (脚部)		
91—12 126—12	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	壺	・ - - - ・	W : 120		O. ミガキAタテ→ ミガキAヨコ i. スリナデヨコI Ca→ 押捺A			O. 2.5Y R7/8橙～ 5Y R7/6橙 i. 7.5Y R7/4にぶい橙	
91—13 126—13	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	底部 (壺?)	3—C—・	B : (36)				O. スリナデI Ca・押捺A i. マメツ不明	O. 10Y R4/1褐灰 i. 7.5Y R7/4にぶい橙	
91—14 126—14	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	甕 Y	II—B—・・	—			30/CM		O. 10Y R5/2灰黄褐～ 10Y R3/1黒褐 i. 10Y R6/2灰黄褐	
91—15 126—15	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	甕 Y	II—・—・a	C : (140)	O. スリナデI Ca・押捺A i. マメツ不明				O. 10Y R5/1褐灰 i. 10Y R5/2灰黄褐	
91—16 126—16	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	甕 Y	II—・—・b	C : (150)	O. スリナデヨコI A a i. スリナデI A a	7/cm 7/cm			10Y R8/1灰白	
91—17 126—17	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	甕 Y	II—・—・b	C : (160)	O. スリナデヨコI Ca i. マメツ不明				O. 10Y R7/4にぶい黄橙 i. 10Y R7/2にぶい黄橙 ～10Y R4/1褐灰	
91—18 126—18	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	甕 Y	I—・—・b	C : (170)	O. スリナデI Ca・押捺A i. スリナデI Ca				O. 10Y R5/2灰黄褐～ 10Y R3/1黒褐 i. 10Y R5/3にぶい黄褐	
91—19 126—19	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	底部 (甕Y)	I—A—・	B : (50)		O. 右上がりタタキ i. スリナデI Ca	30/CM	O. 右上がりタタキ i. ケズリB	O. 10Y R6/3にぶい黄橙～ 2.5Y 6/2灰黄 i. 10Y R3/1黒褐	
91—20 126—20	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	高坏	・ - - - ・	C : (160)	O. ミガキAタテ i. ミガキAタテ				10Y R6/3にぶい黄橙	
91—21 126—21	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	脚台 (高坏)	・ - - - ・	B : (176)				O. スリナデI Ca i. スリナデI A a	10Y R6/4にぶい黄橙	

表 47 纏向石塚古墳第6次調査出土土器観察表 (3)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
91-22 126-22	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	脚台 (高坏)	・-・-・	B : (176)			O. ミガキAタテ i. ミガキAタテ	10Y R6/4にぶい黄橙	
91-23 126-23	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	底部 (鉢?)	2-C-・	B : (36)			O. 押捺A i. スリナデICa	O. 10Y R6/6明黄褐 i. 10Y R6/2灰黄褐	
91-24 126-24	第1トレンチ 土坑1 上層 暗青灰色土	底部 (鉢?)	I-A <sub>2</sub> -・	B : 36		O. スリナデICa i. スリナデICa	O. 押捺A i. スリナデICa	10Y R3/1黒褐	
92-25 126-25	第1トレンチ ピット1	甕 Y	I-B-・	W : (222)		O. 右上がりタタキ→ 一部スリナデIC i. (上半) ケズリB (下半) ケズリA	30/CM	O. 10Y R6/4にぶい黄橙～ 10Y R3/1黒褐 i. 10Y R6/4にぶい黄橙	・胸部下半外面に スス附着
92-26 126-26	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	壺	T-A <sub>1</sub> ?-a	C : (100)	O. ミガキAヨコ→ ミガキAタテ i. ミガキAヨコ			7.5Y R7/4にぶい橙	
92-27 126-27	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	壺	T-A <sub>1</sub> ?-a	C : (180)	O. スリナデヨコIAa i. スリナデIAa	8/cm 8/cm		O. 10Y R5/3にぶい黄褐 i. 10Y R6/3にぶい黄橙	
92-28 126-28	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	壺	H-D?-a	C : (180)	O. スリナデICa i. スリナデICa			O. 10Y R5/2灰黄褐 i. 10Y R5/3にぶい黄褐	
92-29 126-29	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	甕 Y	I-・-・b	C : (160)	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコICa	多/cm		O. 7.5Y R4/1褐灰 i. 7.5Y R7/2明褐灰	
92-30 126-30	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	底部 (甕Y)	2-A-b	B : (40)			O. 右上がりタタキ i. スリナデIAb	30/CM O. 10Y R6/2灰黄褐 i. 10Y R5/2灰黄褐	
92-31 126-31	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	高杯	E <sub>3</sub> -1-B-c	B : (110)		i. ミガキA	O. ミガキAタテ i. スリナデICa	O. 10Y R6/3にぶい黄橙 i. 2.5Y 6/3にぶい黄	
92-32 126-32	第1トレンチ 墳丘盛土? 暗灰褐色砂礫土	脚台 (高坏)	・-・-・	B : (190)			O. ミガキA i. ミガキA (端) スリナデIB	多/cm O. 7.5Y R7/4にぶい黄橙～ 7.5Y R4/1褐灰 i. 7.5Y R6/4にぶい黄橙～ 10Y R5/1褐灰	

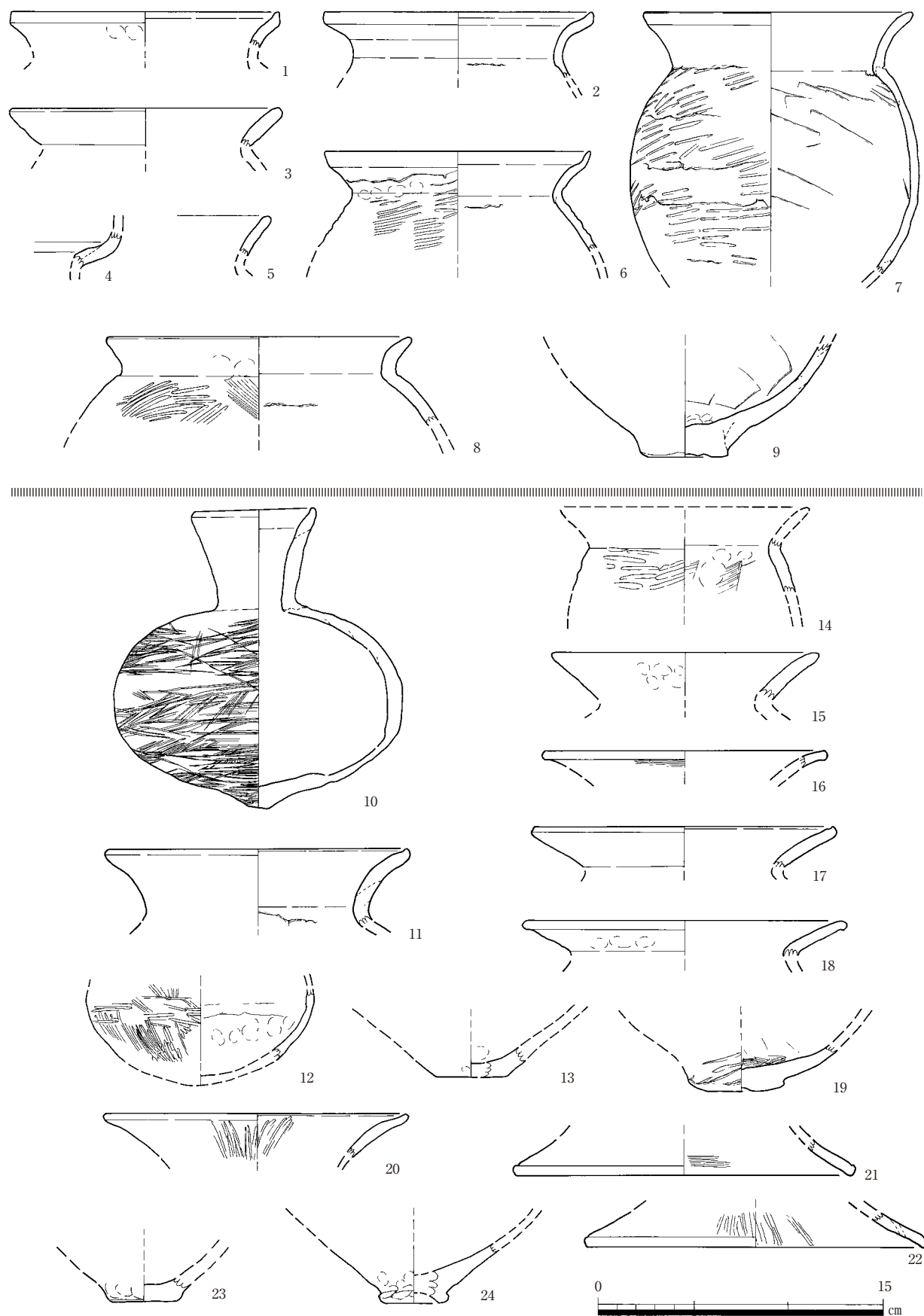


図91 纏向石塚古墳第6次調査出土土器実測図1 (1/3)

第1トレンチ：溝 1～7 溝埋土 8～9 溝・土坑1

土坑1 10下層 11～24上層

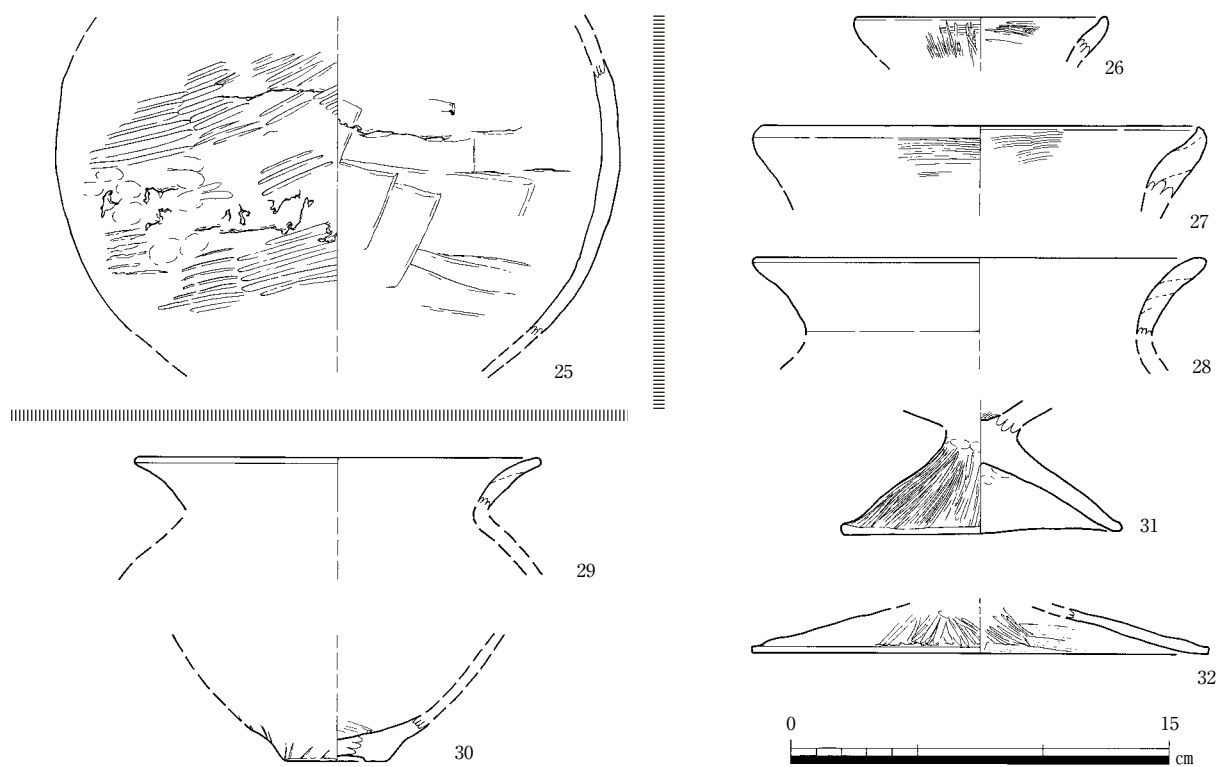


図92 纏向石塚古墳第6次調査出土土器実測図2 (1 / 3)  
第1トレンチ：25ピット1 26～32墳丘盛土？

## 第9章 纏向石塚古墳第7次調査報告

(纏向遺跡第77次調査報告)

### 第1節 はじめに

第7次調査は平成6年2月から開始される古墳の第1期整備工事に先立ち、纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと桜井市教育委員会が実施したものである。

本調査において目的としたのは6-4、4-3 d トレンチで既に確認されている墳丘東側の墳丘ラインの再確認と、周濠北側の外肩部の詳細な構造および周濠より外側の遺構の残存状況の確認であり、

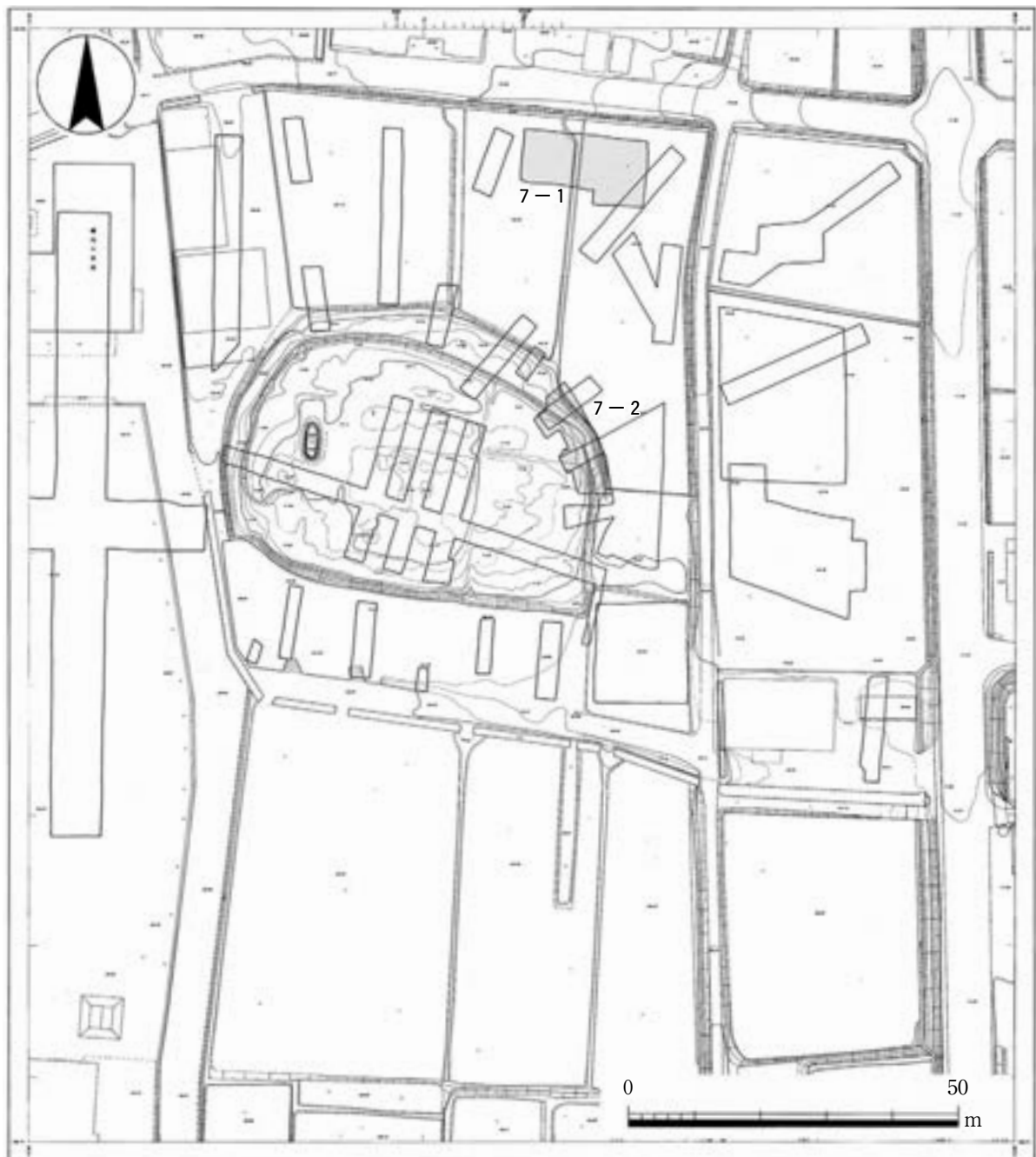


図93 纏向石塚古墳第7次調査地位位置図 (1/1,000)



周濠北側には7－1トレンチを、墳丘東部には7－2トレンチが設定され調査が行われている。

なお、現地調査は平成5年12月2日から平成6年2月20日にかけて行われており、調査面積は7－1トレンチが173㎡、7－2トレンチが97㎡の計270㎡であった。

## 第2節 各トレンチの成果

### (1) 第1トレンチ

#### 1. 調査の成果

5－2・3トレンチの間に設定した幅約8m、長さ約19mの調査区である。調査途中に調査区南西部分で幅2.3m、長さ約8mにわたって調査区の拡張を行っている。

調査区の基本的な層序は現在の耕作土の下に黄茶灰色土（図95－4層）や明黄灰色土（図95－5）などの中近世の耕作土とみられる土壌があり、その下には古墳時代後期の薄い包含層が、そして地山はやや黄味を帯びた灰褐色や褐灰色の粗砂を多く含んだ土壌で形成されていた。

調査はこの地山面までを重機によって掘削し、遺構の検出に努めたが地山面からは第5次調査において多数検出されている足跡状の窪みが調査区東半部において検出された他は上層からの素掘り小溝と時期不詳のピットが数基、古墳時代前期の落ち込み、弥生時代後期の土坑が1基検出されたのみで遺構の密度は極めて低いものであった。

さて、図94に破線で示した周濠ラインの推定線は5－2・3トレンチにおける周濠外肩の検出ラインをもとに本調査区内における周濠ラインの復元を行ったものである。既に報告したように本調査区に隣接する5－2・3トレンチにおいてはそれぞれ周濠の外肩部が明確に検出されており、相互の位置関係から推定するとほぼ確実に7－1トレンチの西南部分に周濠の外肩部が巡るものと考えられるが、調査時に作成された原図や写真類の記録からはその存在を確認することができなかったため、ここでは調査区西南端から約3.5mの地点を通過する形で推定復元線を示しておくこととした。

なお、この周濠ラインの復元にあたっては先述したように5－2・3トレンチでの周濠外肩検出位置を参考としたが、西壁の断面部分においては地山の直上に存在する淡茶褐色礫混じり土（図95－116層）が調査区南端より約4.2mの地点で地山の可能性が考えられる浅黄褐灰色砂礫層（図95－117層）と切り合う形で存在することに着目し、淡茶褐色礫混じり土を周濠堆積最上層と仮定して調査区南端から北へ4.2mの両層が切り合う地点を周濠外肩部の可能性のある地点と推定している。

この淡茶褐色礫混じり土上面のレベルは5－3トレンチにおける周濠検出面である標高68.3mとほぼ一致するものであることや、西壁付近では調査区北端は標高68.5mで南端が68.2mと南へと緩やかな勾配を持って傾斜していることから、若干削平を受けた周濠外肩部の存在を推定したものであるが、5－2・3トレンチ共に周濠への落ち込みは明瞭なものであるのに対し、7－1トレンチ西壁断面南端部では本来周濠内堆積層で形成されなければならない部分が地山と表記されており、周濠へと向かう落ち込みを確認することができない。これについては如何なる理由によるものなのか、もはや説明のしようがないが、ここでは遺構の検出に錯誤があった可能性も含めてその存在は保留しておくこと

とする。

さて、纏向石塚古墳以外の遺構も見えておくこととしよう。先述したように本調査区で検出された遺構には足跡状の窪みや素掘り小溝群、ピット群、落ち込み遺構、土坑などが検出されたのみである。

**素掘り小溝群** 調査区内の中央から東側にかけて10条程度の素掘り小溝が検出されており（図94）、時期は明確ではないが北壁の土層観察からは中世段階のものと考えている。

これらは周辺地区で検出されている素掘り小溝がほぼ方位に則った形で検出されているのに対し、7-1トレンチにおいては南東から北西方向へと曲線を描きながら掘削されている点が特徴的で、第4次調査でも明らかにされたように中世段階まで存続した周濠の窪みを避けて水田耕作が行われた様子を示すものと考えられる。

なお、この素掘り小溝群は調査区東半部では比較的密度が高く検出されているのに対し、西および西南部では平面、断面ともにその存在が確認できない。このことは先述した本調査区内における周濠ラインが調査区の西南部に存在する可能性を予想させるものとして注目される。

**ピット群** 素掘り小溝群と同様、主に調査区の中央から東半分にかけて数基のピットを検出しているが出土遺物は極めて少なく、所属時期を確認することができなかった。ほとんどが径30cm、深さ20～30cm程度の小規模なもので、柱痕などは確認されておらず、平面的にも建物としてのまとまりを確認することはできていない（図94）。

**足跡状遺構** 調査区東半分に集中して検出された人あるいは動物のものとされる足跡状の窪みである（図94）。同様の窪みは第5次調査における2～6トレンチと後円部北側に設定されたすべての調査区において検出されているが、その形成時期は明らかでは無い。窪みが検出されている遺構面は地山面から周濠内上層堆積土上面、周濠外肩部であり、周濠部の堆積状況から勘案すると古墳時代後期から中世までの間のものと考えられるがそれ以上の限定は困難である。

なお、本調査区内の足跡状の窪みからは須恵器高坏の小片が、5-2トレンチの窪みからは須恵器や円筒埴輪などの細片の出土が確認されているが時期の確定につながるようなものではない。

**落ち込み1** 調査区東半部拡張区の西端部で検出された浅い土坑状の落ち込み遺構である（図94）。遺構平面図以外には詳細な記録が残されておらず、深さ25cmの落ち込みということ以外、平面的な形状や埋土の状況などは不明である。しかしながら、この遺構からの出土遺物に付加されていた遺物カードには暗灰色粘質土や淡褐色礫混じり土からの出土との記載があり、断片的ながら埋土の状況をうかがうことができる。

なお、詳細は後述するが出土遺物はすべてが古式土師器であり、遺物の年代観は布留0式期のものと判断されることから遺構の掘削時期もこの頃のものと考えられる。

**土坑1** 調査区中央よりやや北西で検出された遺構で、長径1.2m、短径80cmの楕円形の土坑である（図96）。穴の底面は北側の一部に浅いテラス状の平坦面があるのに対し南部分は一段深いもので、平面プランはほぼ正円形を呈していた。北側のテラス状部分の深さから勘案して、遺構の上部は後世にかなり削平を受けたものとみられ、最も深い部分でも深さは約30cmしか残存していなかった。

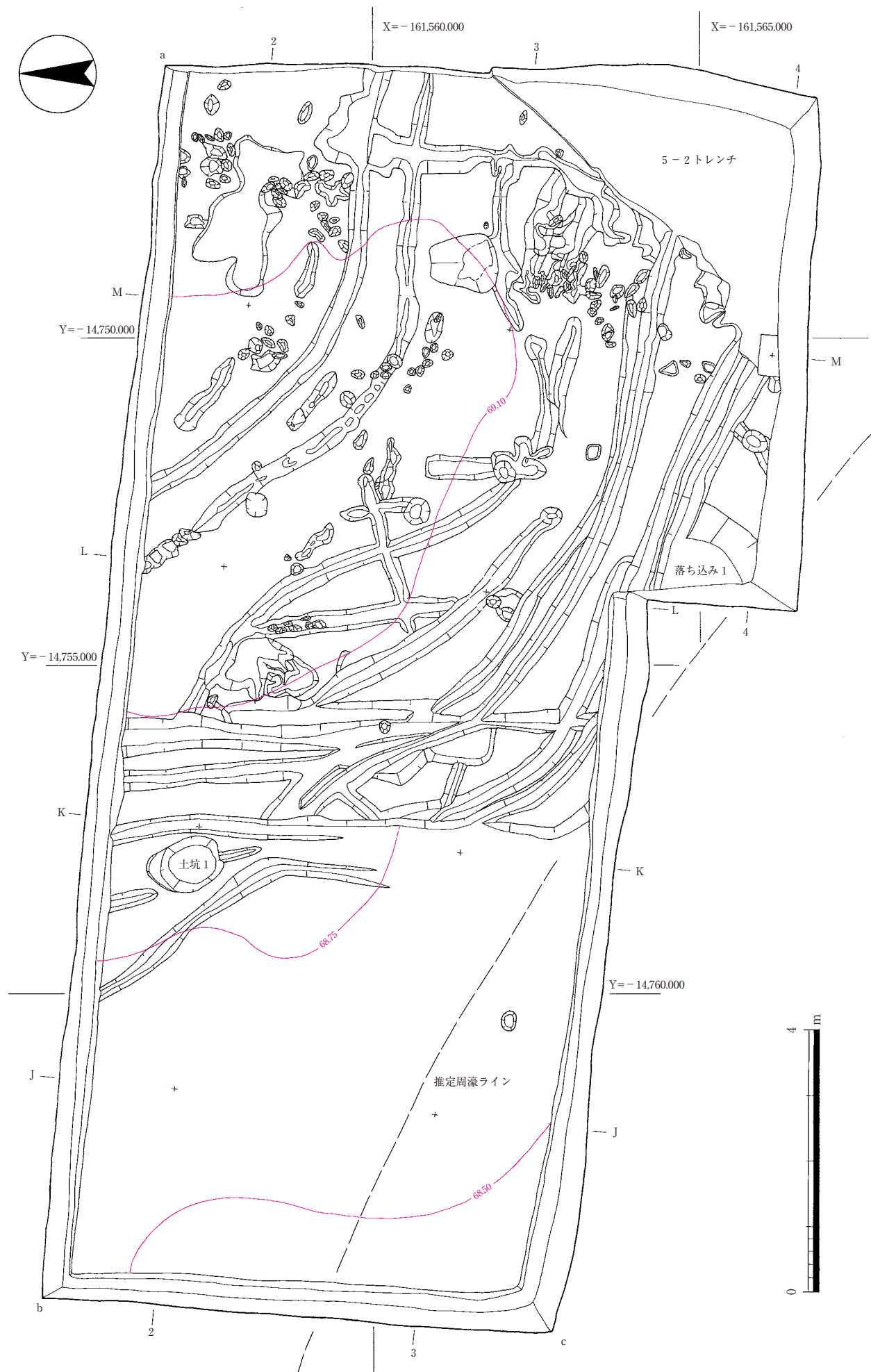


図94 7-1 トレンチ平面図 (1/80)

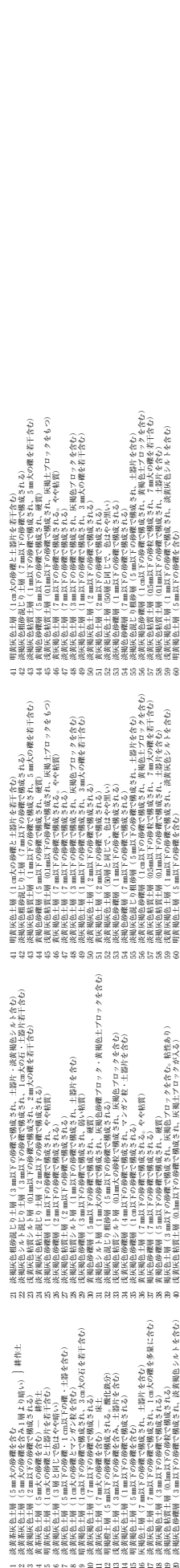


図95 7-1 トレンチ断面図 (1/80)



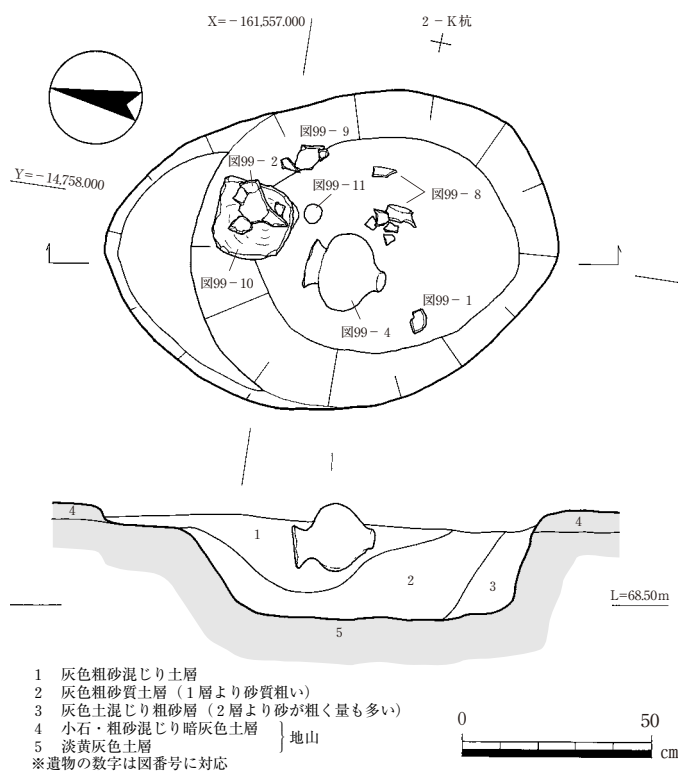


図96 7-1 トレンチ 土坑1 平・断面図 (1/20)

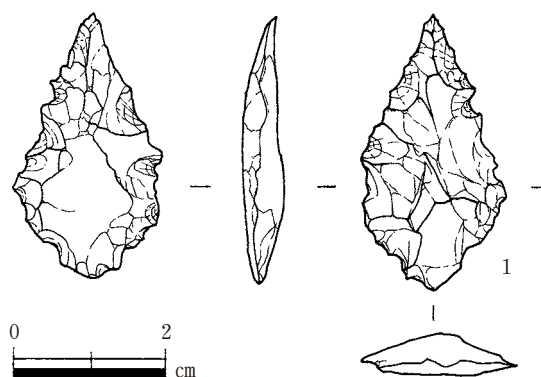


図97 土坑1 出土石鎌実測図 (1/1)

なお、遺構の埋土は灰色粗砂混じり土 (図96-1層)、灰色粗砂質土 (図96-2層)、灰色土混じり粗砂 (図96-3層) の3層で構成されており、遺物の多くは1~2層上面にかけて集中して出土しており、遺構の底面よりはやや浮いた状態で出土している。後述する出土遺物の年代観から弥生時代後期 (V-3~VI-1様式期) 頃のものではないかと考えられる。

## 2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物は土坑1、落ち込み1、足跡状の窪みと覆土からの遺物に大別される。図99-1~11に示したのは土坑1からの出土遺物で広口壺や長頸壺のほか弥生形甕などがあった。この他、直接遺構に伴うものか否かは判然としないが図97に示した石鎌の出土も確認されている。器種の組成や残存状況に限界があり、厳密な時期は断定できないが土器の年代観からは弥生時代後期 (V-3~VI-1様式期) 頃のものではないかと考えている。図100-12~17は落ち込み1からの出土遺物である。この遺構からの出土遺物はあまり多くなかったが、すべての破片が古式土師器で構成されること、15に示したような布留形甕の存在が認められることなどから概ね布留0式期のものと判断している。この他、18は足跡状遺構から出土した須恵器高坏の坏部片で、19から23は床土や耕作土からの出土遺物である。いずれもが直接遺構に伴うものではないが、須恵器の坏蓋・高坏・器台と黒色土器碗の底部などがあった。

### (2) 第2トレンチ

#### 1. 調査の成果

後円部墳丘東側において過去に実施された4-3dトレンチから6-4トレンチに跨って設定された幅約5m、長さ約18mの調査区である (図98)。調査区周辺における後円部の墳形プランの確認はこれまでの調査において概ね終了していたが、現状の墳丘測量からはこの部分が東側へとやや不自然な

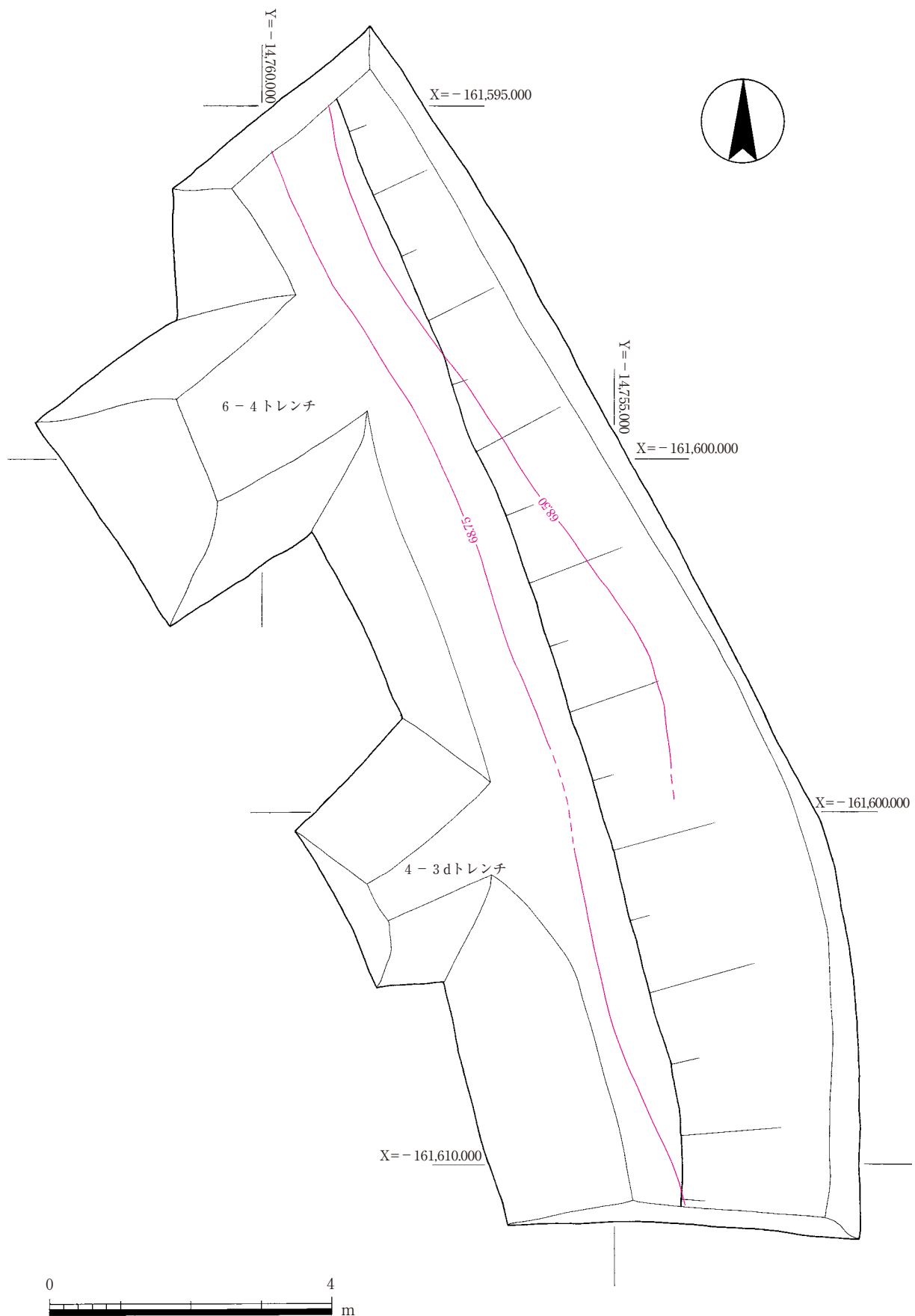


図98 7-2 トレンチ平面図 (1/80)



張り出しが認められたため、過去の調査区も含める形で再度の調査をおこなったものである。

さて、調査は過去に行われた4-3d、6-4トレンチ部分も墳丘側および周濠肩に相当する部分までは再度の掘削を行い、一部過去のトレンチを露呈させてより長いスパンで墳丘の肩部を露呈させたが、地表にみられる東への張り出しは後世の墳丘の取り崩しによるものであることが判明し、標高68.5mの高さにおいて検出された墳丘のラインは従来確認されていたように自然な円弧を描いて延びることが確認された。

なお、このトレンチでは墳丘肩ラインの確認に特化して行ったため、周濠部の掘削は行わず平面検出のみにとどめている。本地点における周濠堆積の状況は先に報告されている第4・6次調査の4-3d、6-4トレンチの項を参照されたい。

## 2. 出土遺物

本調査区からの出土遺物はあまり多くない。図101は墳丘を取り崩した際に覆土に混入したとみられる遺物のうち、土器以外の目立った資料を提示したものである。

1は人物埴輪の手の部分の小片である。過去に行われた第4次調査の第3トレンチからも人物埴輪の手の一部が出土しているし、第5次調査の第5トレンチからは人物埴輪の腕の破片が出土しており、纏向石塚古墳の後円部東側に人物埴輪片が集中して出土している。このことは人物埴輪に限らず、他の円筒埴輪や朝顔形埴輪の出土も同様の傾向にあり、墳丘の東側で確認されている石塚東古墳<sup>2)</sup>に由来する可能性が考えられる。2と3は土馬の破片で、2は頭部から前足部分が、3は体部が残存している。いずれも全体像が判然としないため詳細は不明だが、製作技法からは奈良時代後期～平安時代にかけたものかと思われる。

## 第3節 小結—第7次調査の成果—

第7次調査は周濠外側に展開する遺構の状況と周濠外肩部の形状確認を目的とした7-1トレンチと後円部東側の墳丘形状確認のための7-2トレンチの2本のトレンチを設定し調査を行った。

7-1トレンチの調査では古墳に先行する弥生時代後期の土坑が1基検出されたのみで、纏向石塚古墳と並行する時期の遺構は全く確認されなかったことから、古墳の北側一帯は遺構密度が低く顕著な遺構は存在しないことが確認されている。もう一つの目的であった周濠形状の確認については本来周濠外肩のラインが通過すべき部分でその存在を確認することができなかった。これについては明確な理由を説明することはできなかったが、本報告では想定される周濠外肩ラインの復元と周濠外肩部の位置の推定を行っている。この周濠外肩ラインの復元は先述したように5-2・3トレンチで確認されている周濠外肩ラインを自然な形でつなぐように行ったもので、周濠外肩部の位置の推定は西壁断面の土層の検討からこれを行ったものである。

なお、第2節で図示した周濠外肩の平面ラインと周濠肩部の推定位置には南北に約70cmのずれが生じている。このことは4-4トレンチや5-5・6トレンチ、第9次調査地などで検出された周濠外肩ラインの様子を見ても明らかなように、纏向石塚古墳の周濠外肩のラインはさほど整然としたライ

ンを持つものではなく、部分的には振れを持ちながら古墳の周囲を巡るものであったことによるものと思われる。この他、本来整然としない周濠外肩ラインの振れをさらに大きくした原因と考えられるものには後世の削平がある。一連の調査の結果からは個々のトレンチにおいて検出された周濠外肩部は少なからず上部が削平を受けており、各トレンチの周濠外肩は周濠の内側へと幾分後退しているものと判断される。恐らくはこの周濠外肩部の後退の度合いも削平の深度によってばらつきがあり、周濠外肩ラインに影響を与えているものと判断される。

さて、仮に7-1トレンチ西壁断面での検討が正しいとすれば本来の周濠外肩ラインの復元は図示した推定ラインのように整然と通るようなものではなく、一定の振れを持ちながら周濠肩部の推定位置を通過しながら巡っていたと考えて大きな齟齬はないと考えるが、7-1トレンチの西南隅部一帯からは周濠と認定すべき深い落ち込みが確認されていないことは疑問として残るものである。

そして、後円部墳丘の形状を明らかにするために第4・6次調査の補足調査として行った7-2トレンチの調査からは墳丘ラインが当初の推定線どおり自然な円弧を持って検出されており、調査の対象となった現墳丘の不自然な張り出しは後世に墳丘を取り崩した際の土壌が外側へと掻き出された結果である事が確認されている。

(橋本)

#### 【註記】

- 1) 寺沢薫・森井貞雄「河内地域」『弥生土器の様式と編年—近畿編 I—』木耳社1989
- 2) 丹羽恵二・橋爪朝子「第3節 纏向遺跡第144次調査（纏向石塚古墳第9次調査）概要報告」『桜井市 平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2006

表 48 纏向石塚古墳第7次調査出土遺物観察表 (1)

図番号 図版 番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
99—1 127—1	第1トレンチ 土坑1 下層 灰色混じり粗砂層	底部 (甕Y)	2-C-・	W : (7.4) B : (4.2)		O. スリナデICa i. スリナデICa	O. タタキ→スリナデICa i. スリナデICa	35 ~ 40/CM	O. 5Y R5/4にぶい赤褐～ 7.5Y R6/4にぶい橙 i. 10Y R6/3にぶい黄橙
99—2 127—2	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	壺	Co-A <sub>2</sub> -a	C : (12.4) W : (12.6)	8/cm	O. スリナデIAa i. スリナデIAa	8/cm 8/cm		O. 10Y R8/3浅黄橙 i. 10Y R7/2にぶい黄橙
99—3 128—3	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	壺	H-C-・			O. (口底) スリナデヨコICa (口縁～頸) スリナデタタキIAa i. スリナデICa	O. マメツツ不明 i. スリナデICa		O. 5Y R5/6明赤褐 i. 10Y R5/2灰黄褐
99—4 127—4	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	壺	H-C-・	W : (21.0) B : 4.9	5/cm	O. スリナデIAa→ ミガキAヨコ i. スリナデIAa	7/cm 5/cm	7/cm 5/cm	7.5Y R7/4にぶい橙
99—5 127—5	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	底部 (甕Y)	1-A-c	B : 5.55			O. タタキ→ スリナデICa i. スリナデヨコICa	30/CM	10Y R6/3にぶい黄橙～ 10Y R5/3にぶい黄褐
99—6 128—6	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	底部 (壺)	1-A-c	B : (6.5)			O. スリナデICa i. マメツツ不明		O. 7.5Y R6/4にぶい橙～ 7.5Y R7/6橙 i. 10Y R5/2灰黄褐
99—7 128—7	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	甕 Y	I-B-・・	W : (18.6)		O. タタキ i. (脛) スリナデIAa (脚) スリナデICa	40/CM 7/cm		O. 10Y R5/3にぶい黄褐 ～10Y R4/1褐灰 i. 10Y R5/2灰黄褐
99—8 128—8	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	底部 (甕Y)	2-・-a	B : (5.0)			O. 右上がりタタキ i. ハクリ不明	40/CM	O. 10Y R5/2灰黄褐～ 10Y R4/1褐灰 i. 10Y R6/3にぶい黄橙
99—9 127—9	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	底部 (甕Y)	2-C-c	B : (4.6)			O. 右上がりタタキ→ スリナデICa i. ケズリB	35/CM	10Y R4/1褐灰
99—10 127—10	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	甕 Y	I-A-1・	W : (23.1) B : 5.3		O. (脛) 右上がりタタキ→ スリナデIAa (脚以下) 右上がりタタキ i. スリナデナメIAa	35/CM 7/cm 35/CM 7/cm		O. 10Y R5/2灰黄褐 i. 10Y R6/3にぶい黄橙
99—11 127—11	第1トレンチ 土坑1 上層 灰色粗砂混じり土	底部 (甕Y)	2-C-・	B : (5.6)			O. 右上がりタタキ (底面) ケズリA i. スリナデIAa	20/CM 8/cm	O. 7.5Y R5/3にぶい褐 i. 7.5Y R5/4にぶい褐 ・内面に煮沸痕 のこる ・外面にスス付 着

表 49 纏向石塚古墳第7次調査出土遺物観察表 (2)

図番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部		体 部	底 部 (脚部)		
図版 番号										
100—12	第1トレンチ 3 L区南西角 落ち込み1 暗灰色粘質土	小形丸 底鉢	Ⅱ-A <sub>2</sub> -a	H : 5.95 C : 9.8	O. ミガキAヨコ i. ミガキAヨコ	O. ミガキAヨコ i. ミガキAタテ	O. ケズリA→ミガキAタテ i. ミガキAタテ		O. 7.5Y R 8/6浅黄橙 i. 2.5Y R 6/6橙	
127—12										
100—13	第1トレンチ 拡張部南西角 落ち込み1 淡褐色礫混じり土	脚台 (高坏)		B : (16.0)			O. マメツ不明 i. マメツ不明		5Y R 6/6橙	
128—13										
100—14	第1トレンチ 拡張部南西角 落ち込み1 淡褐色礫混じり土	甕 Y	Ⅱ-・・・a	C : (14.0)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 10Y R 3/1黒褐 i. 10Y R 6/4にぶい黄橙	
128—14										
100—15	第1トレンチ 拡張部南西角 落ち込み1 淡褐色礫混じり土	甕 F	Ⅱ-・・・g <sub>2</sub>	C : (14.0)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 5Y R 5/4にぶい赤褐 i. 7.5Y R 6/4にぶい黄橙	
128—15										
100—16	第1トレンチ 拡張部南西角 落ち込み1 淡褐色礫混じり土	底部 (甕 Y)	3-C-・	B : (3.8)			O. 右上がりタタキ i. スリナデ I A b	20/CM	O. 7.5Y R 6/4にぶい黄橙～ 10Y R 4/2灰黄褐 i. 10Y R 4/1褐灰	
128—16										
100—17	第1トレンチ 拡張部南西角 落ち込み1 淡褐色礫混じり土	底部 (甕 Y)	2-C-a	B : (4.3)			O. 右上がりタタキ i. スリナデ I A b	20/CM	O. 2.5Y 4/1黄灰 i. 10Y R 6/3にぶい黄橙	
128—17										
100—18	第1トレンチ 2 MIX 足跡状遺構 淡灰色混じり粗砂質土	須恵器 高坏			O. 回転ナデ i. 回転ナデ				O. 7.5Y R 4/1褐灰 i. 7.5Y R 5/1褐灰	
128—18										
100—19	第1トレンチ 床土・耕作土	須恵器 坏蓋		C : (10.8)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	(天井部) O. 回転ヘラケズリ i. 回転ナデ		N 6/0灰	
128—19										
100—20	第1トレンチ 床土・耕作土	須恵器 坏蓋		C : (12.8)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ			N 6/0灰	
128—20										
100—21	第1トレンチ 床土・耕作土	須恵器 器台		C : (26.0)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ→櫛描状文 i. 回転ナデ			N 6/0灰	
128—21										
100—22	第1トレンチ 床土・耕作土	須恵器 高坏		B : (12.0)			O. 回転ナデ i. 回転ナデ		5P B 6/1青灰	・円形透孔1ヶ 所残存
128—22										

表 50 纏向石塚古墳第7次調査出土遺物観察表 (3)

図番号 図版 番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
100—23 128—23	第1トレンチ 床土、耕作土	黒色 土器 碗	A類	B : 60			O. ヨコナデ i. ヘラミガキ (放射状)	O. 10Y R8/2灰白～ 25Y 4/1黄灰 i. 25Y 3/1黒褐	
101—24 128—24	第2トレンチ 中近世土	人物 埴輪 手						O. 5Y R7/6橙 i. 10Y R8/2灰白	
101—25 128—25	第2トレンチ 中近世盛土	土馬						5Y R6/6橙	
101—26 128—26	第2トレンチ 中近世土	土馬						5Y R6/6橙～ 7.5Y R6/6橙	

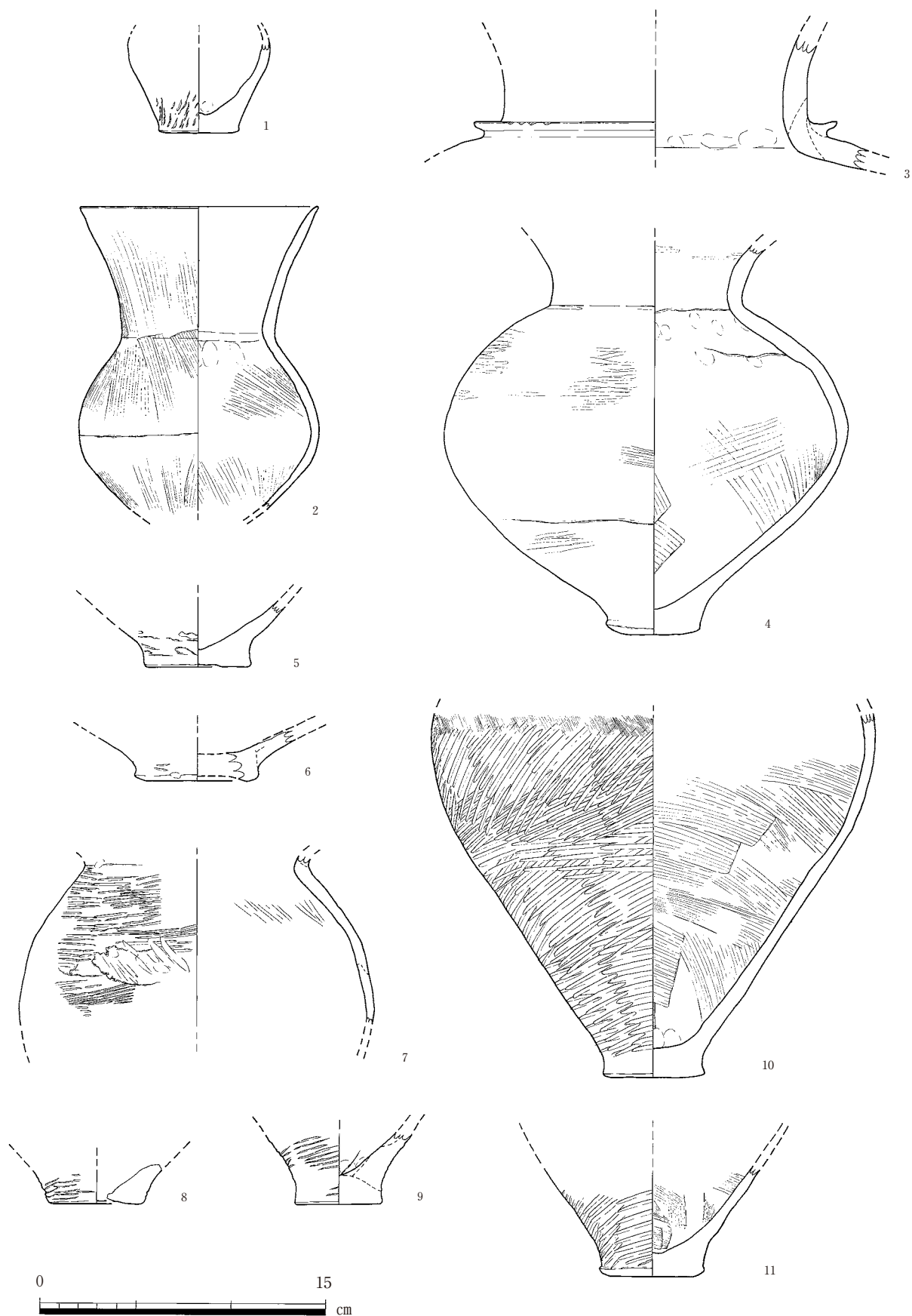


図99 纏向石塚古墳第7次調査出土土器実測図1 (1 / 3)  
第1トレンチ：土坑1 1下層 2～11上層



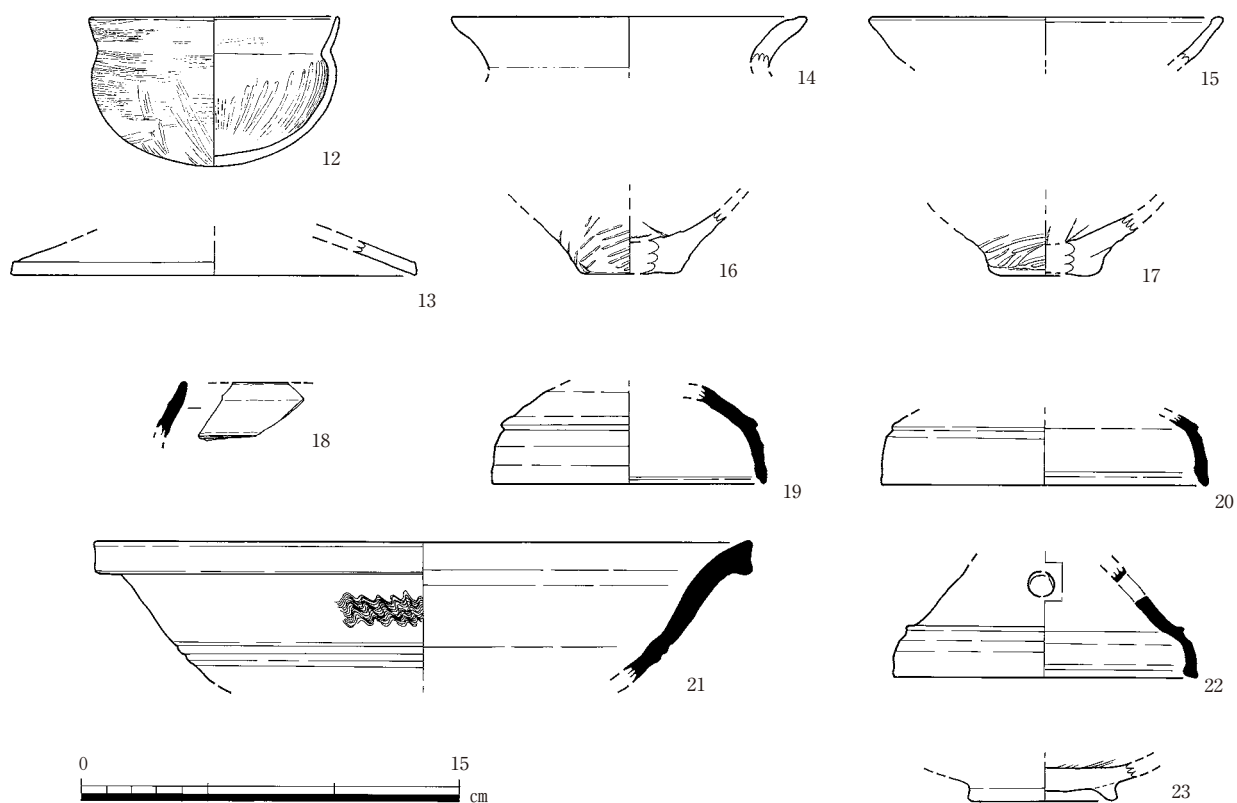


図100 纏向石塚古墳第7次調査出土土器実測図2 (1 / 3)  
 第1トレンチ：落ち込み1 12 暗灰色粘質土 13~17 淡褐灰色礫混じり土  
 18 足跡状遺構 (淡灰色混じり粗砂質土) 19~23 床土・耕作土

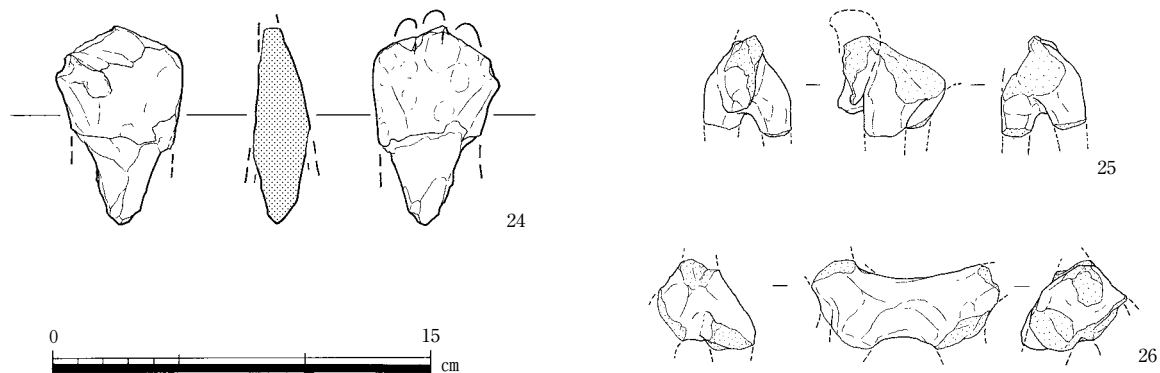


図101 纏向石塚古墳第7次調査出土土器実測図3 (1 / 3)  
 第2トレンチ：24~26 中近世土

## 第10章 纏向石塚古墳第8次調査報告

(纏向遺跡第87次調査報告)

### 第1節 はじめに

第8次調査は墳丘北周濠部分の第1期整備事業の完了を受け、第2期整備事業予定地とされた後円部墳丘を調査の対象として纏向石塚古墳整備計画委員会の指導のもと、桜井市教育委員会が実施したものである。

纏向石塚古墳の後円部は既に第2・4章でも紹介されているように太平洋戦争中に高射砲を据える

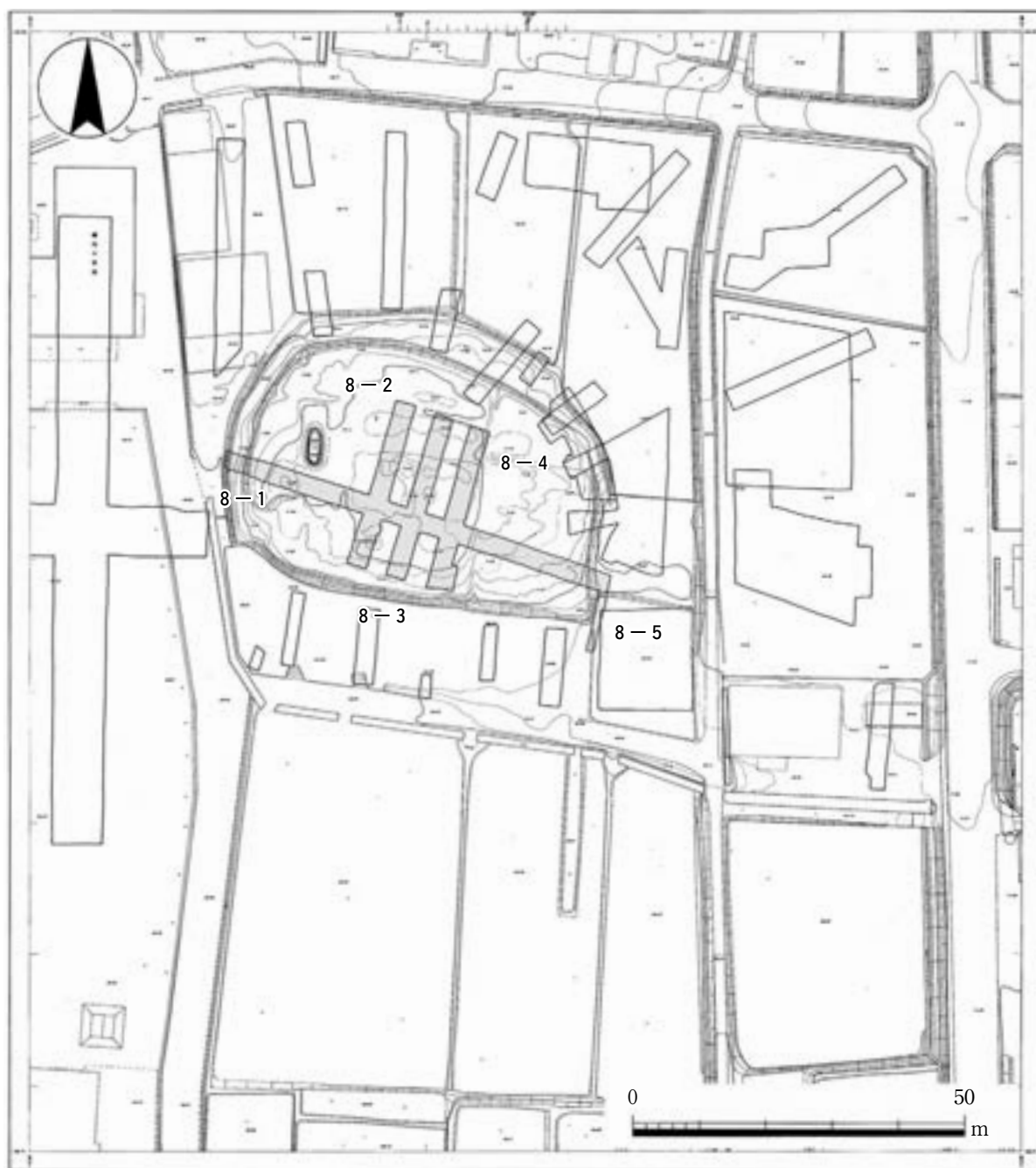


図102 纏向石塚古墳第8次調査地位置図（1／1,000）

ことを目的に大きく削平を受けているが、地元では現在も墳丘上に高射砲のコンクリート製台座が埋まっているとの言い伝えがあったため、高射砲台座の有無確認と戦時中の掘削の影響を探ること、墳丘本来の形状や盛土・外表施設・築造時期などの情報を得ることを目的として調査に着手した。

調査区の設定は墳丘の主軸線にあわせてメイントレンチとなる幅3m、長さ61.5mの8-1トレンチを設定するとともに、この8-1トレンチに直交する形で適時8-2～8-5までの4本のサブトレンチを設定し調査を行った（図102）。

なお、現地調査は平成8年7月30日より開始し、途中1度の中断をはさみ同年11月22日まで実施しており、調査面積は402㎡であった。

## 第2節 調査の成果

### （1）検出された遺構

先述したように墳丘の残存状況の確認を目的として古墳の主軸線上に長さ61.5m、幅3mの第1トレンチを設定し、これに直交する形で長さ26m、幅3mの第2～4トレンチを3m間隔で設定している。各調査区の地区設定にあたっては調査区の中心ライン上に4mピッチで基準杭を打設し、地区割り及び測量・図化の基準としたが、このうち第1トレンチではこの基準杭を東から順に1杭～17杭と命名し、1杭から3杭までの区間がA区、3杭から5杭までの区間がB区と、以下15杭～17杭間のH区までを8m単位で地区設定して適時地区呼称として使用したほか、1トレンチにおける墳丘断ち割り調査時には遺物の取り上げ地区の単位として2～3杭間といった具合に4m間隔でより細かくその出土地区を特定できるように配慮している（図103）。

他の調査区のうち8-2から8-4トレンチでも同じく調査区の中央ライン上に4mピッチで基準杭を打設し、測量・図化の基準としたが、これらのトレンチは中央よりやや南部分を8-1トレンチが東西に貫いているため、この8-1トレンチを境に北側をN地区、南側をS地区として8-2N地区、8-2S地区といった具合にそれぞれ地区割りを設定している。

なお、8-5トレンチは前方部南側の側線の検出と国土座標による成果が残されていなかった3-1トレンチの位置を確認するため補足的に設定した幅1m、長さ9mの小規模な調査区である。

さて、調査は基本的に墳丘盛土上面を露呈させて遺構面の精査を行っている。この結果、浅い所では表土下20cmのレベルで墳丘盛土が確認されたが、懸案の一つであった高射砲関連の遺構についてはこれに係わるコンクリートや基礎など一切検出できず、その存在を示すものは確認されていない。また、墳丘盛土上面において検出された土坑状の穴やピット、溝のほとんどが近現代の耕作などに伴う攪乱によるものであった。このうち中世以前に遡る遺構は8-2～4トレンチのS地区を横断し、8-1トレンチ東端へと繋がる素掘りの溝2条と、8-4S地区から検出された竪穴状の方形落ち込み遺構SX-1001があるだけで、古墳に直接係わる遺構は8-1トレンチ西端で確認されている段築状の段差と、8-1トレンチ東端の後円部と前方部の接点部分で確認された後円部の高まり、そして8-5トレンチで確認された前方部墳丘南側の肩部のみであった。

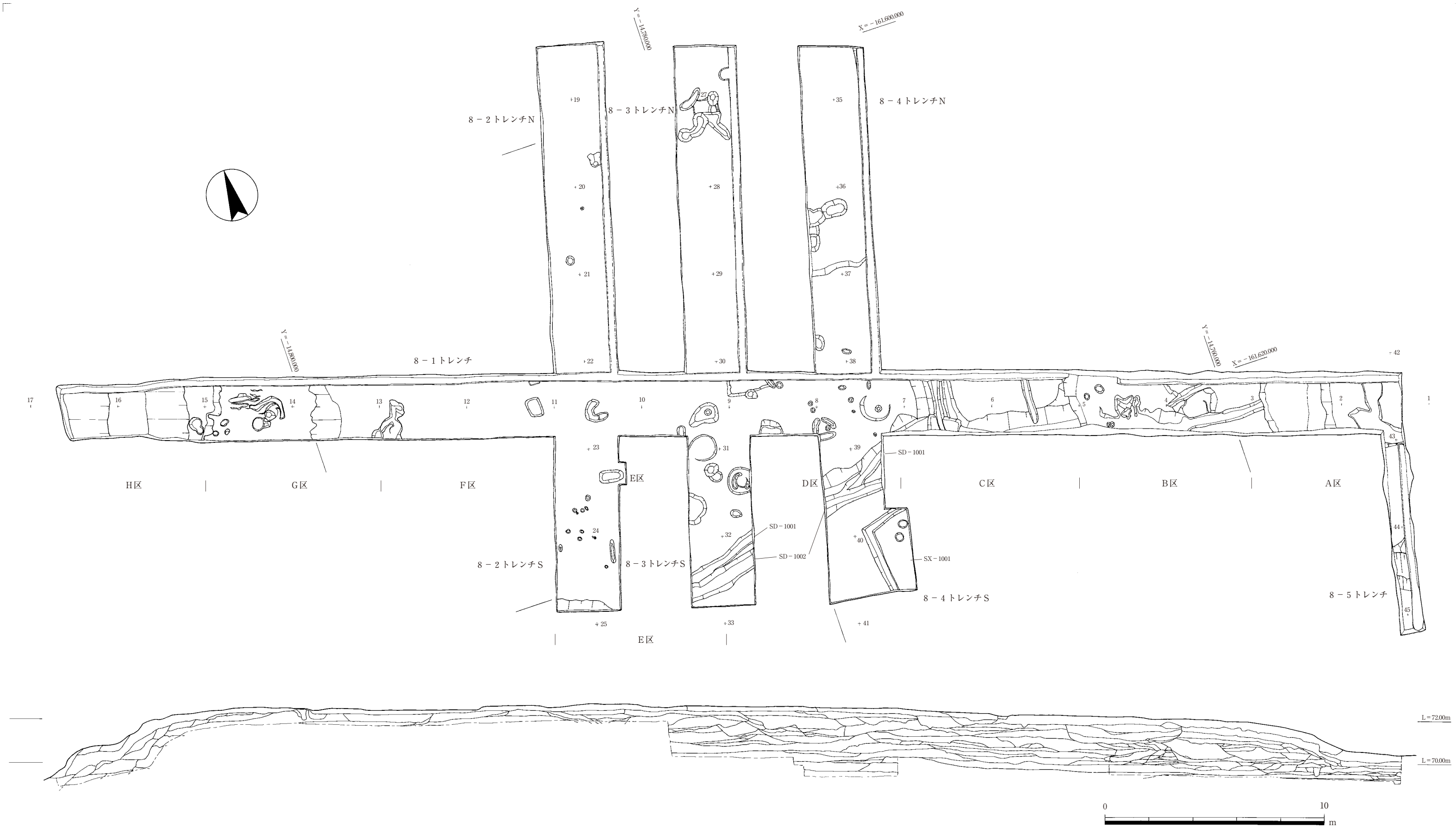


図103 第8次調査地平・断面図 (1 / 160)

以下、遺構の所属時期ごとにまとめて状況を報告することとする。

## 1. 中世の遺構

中世の遺構にはSD-1001・1002の2条の溝と、SX-1001とした落ち込み遺構がある。

**溝遺構**（SD-1001・1002） SD-1001・1002は墳丘の南部分を不整形にカットし、平坦面を作った後に残った墳丘と平坦面の接点部分の区画と排水を目的として掘削されたと考えられるもので、8-2 S区から8-4 S区へと残存する墳丘の南部分を横断し、8-1 トレンチB区で検出されている素掘り溝、もしくは8-1 C区西端の南北方向の素掘り溝へと繋がっていくものと思われる（図103～105）。

現在はこの溝を境に北側は最大で約40cm高くなっているだけであるが、北側の墳丘部分は太平洋戦争時に大きく削平を受けていると判断されることから、この段差は本来さらに大きな切岸状の段差であった可能性も考えられる。また、溝はそれぞれ幅約50cm、深さ20cm程度の素掘りの溝で、埋土はやや粘性のある暗灰色粘質土で構成されていた。

なお、これらの溝遺構からの出土遺物は極めて少なく所属時期を限定できるものは確認できなかったが、墳丘のカットとこの溝によって作り出された平坦面上には後述する14世紀代の落ち込み遺構（SX-1001）があり、これら墳丘の改変もこの頃に行われたものと判断している。

**落ち込み遺構**（SX-1001） 8-4 S区において検出された一辺が3.1m以上×1.7m以上の方形の落ち込み遺構で（図103・104）、調査時は落ち込みの壁面にそって幅40cm前後の溝が検出されたことや、溝の内側が平坦で貼床状のやや粘質のある暗灰褐色砂質土（図107-12層）が認められたことから、竪穴式住居跡となる可能性も考えて一部東側へと調査区の拡張を行ったところ、想定された位置から深さ25cm前後の柱穴となる可能性のあるピットを2基確認することができた。

しかしながら、当初住居跡の床面と考えた暗灰褐色砂質土の直上から14世紀代のものとみられる土師皿や羽釜・焙烙などがまとまって出土したため本遺構が竪穴式住居跡となる可能性は考え難く、現時点では遺構の正確については不明と言わざるを得ない。

## 2. 纏向石塚古墳の墳丘調査

古墳に関連する遺構が確認されているのは先述したように8-1 トレンチ西端で確認されている段築状の段差と、8-1 トレンチ東端の後円部と前方部の接点部分で確認された後円部の高まり、そして8-5 トレンチで確認された前方部墳丘南側の肩部が検出されたのみであり、補足調査として8-1 トレンチにおいて一部墳丘の断ち割り調査を行い、墳丘盛土の構造確認を行っている。

なお、墳丘部分の調査からは埋葬施設に係わるような遺構や遺物は一切確認することができなかった。恐らくは後世の削平により消滅してしまったものと判断される。

**前方部の調査** 纏向石塚古墳の前方部南側のラインは第3次調査で既に確認されているものの、早い時期の調査ということもあり、国土座標での調査ポイントが設定されていなかったため、8-1 トレンチに直交させるかたちで長さ9m、幅1mの8-5 トレンチを設定し、前方部南側の側線の再検出と3-1 トレンチの位置を確定させるために調査を行っている。

この結果、調査区の南端より約3.6mの地点において3-1 トレンチの調査区を確認するとともに、



同じく調査区南端より約3.6mの地点で前方部の肩部を検出することができ（図104）、これらの成果から確認された8-5、4-3 b トレンチ間の前方部の上面幅は11.7mと非常に幅の狭いものであることが判明している。

また、過去に行われた4-3 a・b トレンチで確認されている前方部上の盛土は8-1 トレンチ内でも確認されているものの、8-1 トレンチから8-5 トレンチにかかるあたりで後世の削平により消滅してしまっており（図104）、8-5 トレンチにおいて検出された前方部はほぼ全てが地山のみで構成される状況であった。これは先に報告された3-1 トレンチにおいても同様で、前方部は地山のみ構成され盛土の存在は確認されていない。調査前の地形図をみると3-1 トレンチと4-3 トレンチの間には東西方向の畦畔を伴った明瞭な段差が認められることから、この水田開発に際して前方部南部分の盛土が削平を受けたものと考えられる。

なお、周濠部分の調査については本調査が墳形確認を目的とした調査であることを鑑みて前方部の形状を明確にするために周濠堆積の最上層埋土および上層埋土を一部掘り下げるのみに留め、以下の調査は行っていない（図107）。

**後円部の調査** 後円部墳丘に係わる施設は8-1 トレンチA区の後円部と前方部の接点部分で確認された後円部の高まり、8-1 トレンチH区で確認されている段築状遺構がある。

前方部側の8-1 トレンチA区において検出された後円部の高まりは調査区西端より約3mの地点で検出されているが（図104）、これまでの調査で判明しているように纏向石塚古墳の後円部墳丘は東・南・北側ともに後世の削平を大きく受けており、この高まりが本来の後円部と前方の接点を示すものか否かを断定するのは困難である。

しかしながら4-3 c トレンチで検出されている後円部墳丘との位置関係や後述する墳丘盛土の状況から考えると平面的には後世の削平によってそれほど大きく西側へ後退したものとは考え難く、この地点がほぼ当初の前方部と後円部墳丘の接点であったと判断して良いと思われる。

なお、この後円部の高まりは地山面より93cm分の盛土しか残存しておらず、前方部墳丘上面との比高差もわずかに63cmしかない状態であった。

このように大きく後世の削平を受けた後円部東半に対して、後円部西端では地山面より約4m分の盛土が残されていることが第1・8次調査の成果から判明している。段築状遺構は8-1 トレンチ西端のH区で検出されており、標高70.1mの地点で幅2.3mの平坦面を確認しているが（図105）、後世の削平の影響をどの程度受けているのか、どの程度本来の墳丘面を保っているのかについては判然としない。

しかしながら、明治26年に描かれた『大和國古墳墓取調書』<sup>1)</sup>所収の纏向石塚古墳の絵図（図4）や記録には後円部に3段の畑の存在をみることができることや現在も墳丘の西側に一定の平坦面が残存していること、纏向石塚古墳と同じ3世紀代築造のホケノ山古墳でも当初の段築を利用して畑耕作が行われていたこと、ホケノ山古墳で想定される段築テラス面の幅が最大で5.5m程度と非常に広いものであることなどを考え合わせると、<sup>2)</sup>今回検出された段築状遺構も当初からの様相をほぼ残した存在と





図104 第8次調査地平面図（東半）（1／100）



みて良いように思われる。

**墳丘盛土の調査** 墳丘盛土上面での調査終了後には盛土の状況を確認すべく墳丘の断ち割り調査を実施している。調査を行ったのは8-1トレンチA～E区の北半分、杭1～杭10の間に幅1.5m、長さ33.5mの探査トレンチを設定して調査を行った（図103・106）。

この結果確認された盛土は最も厚いところで約4mあり、周濠の掘削によって地山が掘り下げられた基底部分以外は墳丘の全てが盛土によって築かれていることが判明している。現在の墳丘高は第1次調査で確認された周濠底の墳丘基底部より約5.4mの高さがあるが、『大和國古墳墓取調書』所収の絵図や記録から勘案すると本来の墳丘は基底部より最大で約9.3mはあったものと考えられる。

さて、今回の断ち割り調査からは墳丘盛土内に堤状の盛土の存在を推定することができた。この堤状の盛土は墳丘断ち割り後の断面記録作成時にその存在に気付いたため、平面的な調査は行えなかったが、A区およびB区の2カ所においてその存在を確認している。この2つの堤状盛土は墳丘盛土の構築過程で偶発的に断面に現れただけのもので、平面的には一定の長さを持った堤として存在しない可能性も無いわけではない。しかしながら、堤状遺構の有無は墳丘盛土の構築技法を理解する上で重要な要素となる可能性も鑑み、ここでは便宜的にA区のを堤状遺構1、B区のを堤状遺構2として解説を加えておくこととする（図106）。

堤状遺構1はA区の中央部で確認された盛土遺構で、先述した前方部と後円部の接点部分の見かけの高まりはこの堤によって構成されるものであった。基底部の幅1.6m、高さ60cmの規模を測り、断面の様子からは前方部の盛土となる図106-167・168層の上面に盛られた様子が見え、同一レベルで盛り上げられた下層盛土が後述する低湿地に由来する極めて脆弱な土壌によって構成されるのに対し、堤状遺構は固くしまりの良い暗茶褐色の砂質土を用いて構築されていた。

堤状遺構2は堤1から西へ約6.5mのB区で確認された盛土遺構で基底部幅2.5m、高さ64cmの規模を測る。断面の検討からは後述する下層盛土が地山面より60～70cmほどの高さで水平に盛られた上に構築されたように見え、堤状遺構2は地山ブロックを含んだ暗灰色、暗褐灰色の砂質土を主体としたしまりの良い土壌で構成されていた。

なお、この2つの堤状遺構が墳丘盛土を行うために人為的に構築されたものであるとすれば他にも数個の盛土状遺構が存在する可能性が考えられ、D～E区の標高71.1m～71.7m付近にもその候補となり得る盛土の高まりが2カ所で認められたが、堤1・2ほど明確なものではなかったため、ここではその可能性を指摘しておくのみとしたい。

さて、墳丘盛土はこの2つの堤状の盛土を基準として大きく上下2層に分類することができた（図106）。下層盛土はA区で確認されている堤状遺構1が構築された後に盛られた土壌で、墳丘下で確認された低湿地部の土壌をかき集めたとみられる砂礫を多く含んだ質の悪い粘質土で構成されており、土器片の他に植物遺体が多量に含まれていた。

これに対して上層盛土はB区で確認されている堤状遺構2が構築された後に盛られた土壌であるが、堤状遺構2よりも西側の上層盛土下部は低湿地部からの土壌と微高地に由来する多量の土器を含んだ

しまりの良い砂質土が混在する形で構成されており、堤状遺構 2 より西側の上層盛土上部と堤状遺構 2 より東側の盛土は微高地に由来する土壌と周濠を掘削する際に得られた黄灰色系のシルトや粘土などの地山で構成されていた。

なお、これらの盛土には版築などの盛土技法は確認することができなかったが、総じて砂質土とシルト・粘土を互層に積み上げつつ盛土を叩き締める傾向が確認された。

**墳丘下遺構の調査** 断ち割り調査の際に墳丘盛土の確認作業と合わせて地山となる暗灰色シルト層上面での遺構検出を行っている。この結果、前方部と後円部の接点部分より約 8 m 後円部側へ入った地点で墳丘下に展開する湿地状の落ち込みを検出している（図106）。

この落ち込み遺構は墳丘中央部 D～E 区における断ち割り部分でもその存在が確認されており、現在も地形に見ることができる纏向石塚古墳の南側にある谷（旧河道）が墳丘の下へともぐりこんでいくのか、あるいは別に流路・湿地状の落ち込みが存在するものと考えられる。この墳丘下に存在する落ち込み遺構は既に第 2 次調査の第 4～6 トレンチにおいても確認されているものであり、今回検出された落ち込みと同一の遺構になる可能性が高いと判断されるが、墳丘の南側においてこれまでに実施された 2-1～3 トレンチや 1-1 トレンチ部分ではこの落ち込み遺構が検出されていないことから、広範囲にわたって展開する遺構とは考えていない。

なお、調査面積が矮小であったため、落ち込みの十分な調査はできなかったが、中からは出土遺物の項において後述する弥生時代には溯らない少量の土器片と櫟の自然木・植物遺体・二枚貝・巻貝などが出土している。

## （2）出土遺物

第 8 次調査における出土遺物は大きく分けて墳丘下の湿地状の落ち込み、墳丘盛土、周濠内、落ち込み遺構（SX-1001）の 4 ヶ所からの出土があった。

**墳丘下湿地出土土器** 図示したもののうち図109-1～9 は墳丘下の湿地状の落ち込み遺構からの出土遺物である。このうち小さな破片資料ではあるが 7 に示したのは有段高坏の坏部の小破片と考えており、有段高坏が庄内 0 式期から出現することを考え合わせると、纏向石塚古墳の築造がこれを溯らない事を示すものとして注目される。また、この遺構からの出土土器の中には 6 のように在地に類似した胎土を持つものの、形式から見て近江系の受口状口縁鉢、或いは手焙り形土器の破片となり得る外来系のものも見ることができる。

**墳丘盛土出土土器** 墳丘盛土からの出土土器は「墳丘盛土の調査」の項でも述べたように盛土そのものが墳丘の構築に際して周辺から集められたものであり、ここから出土した土器も直接古墳の築造や埋葬に伴うような性格のものではない。従って出土した土器の全ては破碎された小さな破片資料ばかりであったが、墳丘盛土下層からは 1961 点、上層からは 1655 点と上下層ともにほぼ同量の土器片が出土し、総数にして 3616 点もの土器片が出土している。本報告の作成にあたっては小片でも口縁や底部を有する物は極力図化することとし、431 点の土器を図示することができた。

このうち、図109-10から図113-221に示したのは墳丘盛土下層からの出土土器である。この中には



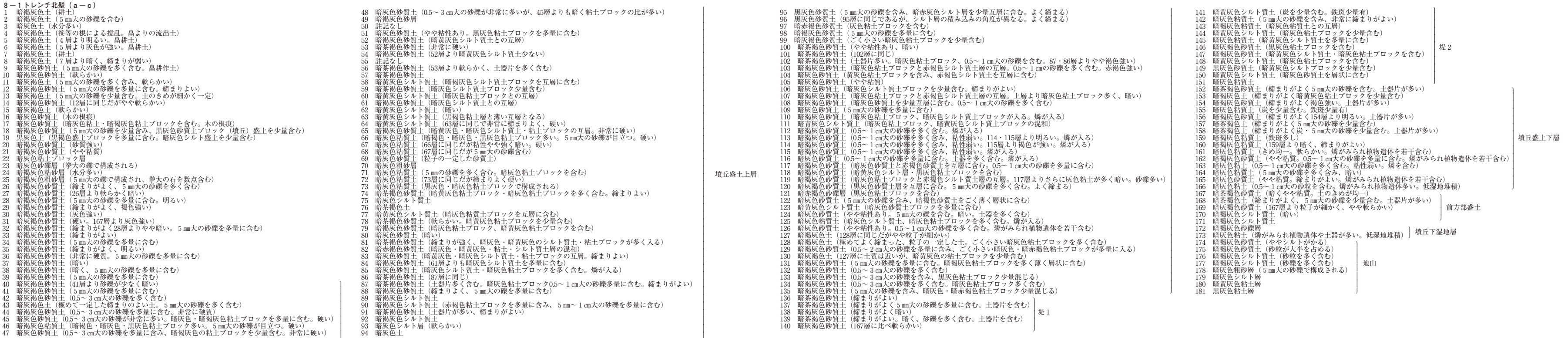


図106 8-1 トレンチ断面図 (1/80)

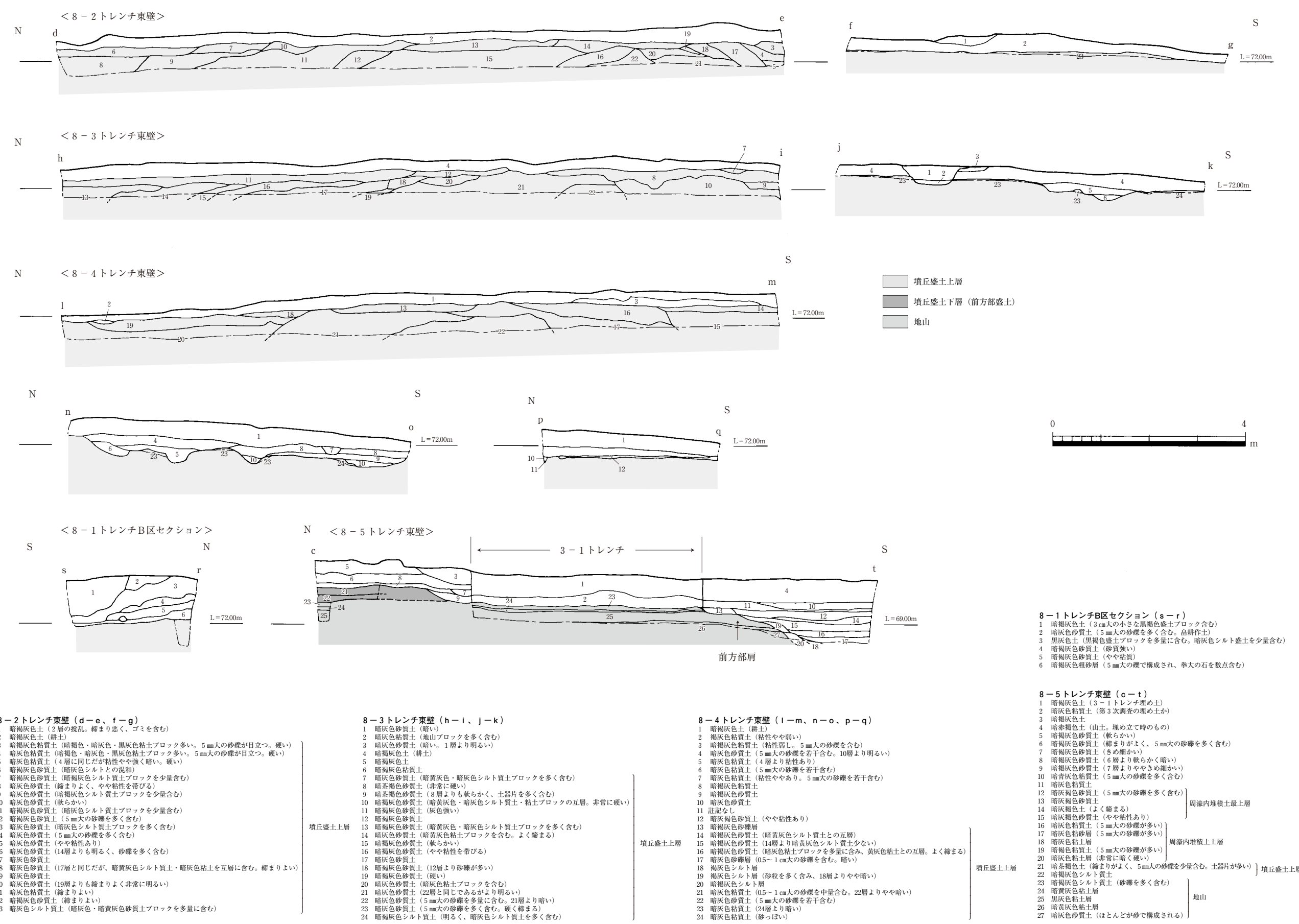


図107 8-2～5 トレンチ断面図 (1／80)



99・100に示した庄内形甕の口縁とみられる細片があり、纏向石塚古墳の築造が庄内形甕出現期である庄内1式期以降に降ることを示すものとして注目すべき資料と言えよう。この他、墳丘盛土下層資料には他地域からの搬入品とみられるものがあり、25などは胎土・形式ともに纏向では見られないもので、北部九州系の複合口縁壺の頸部の可能性があると考えているし、173・221などは搬入元が不明ながら胎土・器形ともに在地のものとは異なるものである。この他、147・148には近江系の甕の口縁があり、174の鉢は器形・胎土などから見て近江の湖東地域からの搬入品と思われる。

図113-222～図118-397が第1トレンチ、図118-398～図119-423が第2トレンチ、図119-424～431は第4トレンチの墳丘盛土上層からの出土土器である。この中には266に示したような在地の弥生形甕とみられるものの中に内面にケズリ調整を施すものがある。墳丘盛土出土土器の中でケズリ調整を持つものはこの1点のみだが、庄内形甕出現後の新しい様相と考えている。この他、墳丘盛土上層資料で他地域からの搬入品とみられるものには搬入元は不明ながら371の高坏や讃岐系の甕とみられる322、吉備系の甕である323などがある。

**落ち込み遺構（SX-1001）出土土器** この遺構からの出土土器は図119-432～436に示した土師皿や焙烙・羽釜などある。いずれもが14世紀代の遺物と考えている。

**周濠内出土土器** 周濠調査の項でも述べたように調査によって掘り下げを行った濠の埋土は断面記録の作成時点で最上層・上層と2つに大別をしているが、周濠埋土掘削の時点ではこの両者からの遺物を分けて取り上げることができなかった。このため図120-437～447の遺物は最上層～上層出土という形でしか図示することができなかった。ここからの出土遺物には概ね9～10世紀代の遺物が数多く含まれており、既にこれまでの調査で確認されている周濠の埋没時期を追認することとなった。

### 第3節 小結―第8次調査の成果―

第8次調査では後円部を中心としたトレンチ調査により、墳丘構造に関する詳細な情報を得ることができた。残念ながら後円部墳丘は太平洋戦争時に大きく削平を受け、埋葬施設はおろか墳丘の大半が失われていたが、後円部西端では段築の名残とみられる平坦面を検出するとともに、墳丘の断ち割り調査によって盛土の詳細な情報が判明するとともに、多量の土器資料が出土している。

また、前方部に設定したトレンチの調査からは初めて国土座標に基づいた前方部南肩部の位置を特定するとともに、国土座標の設置されていなかった3-1トレンチの位置を改めて確認し、墳形復元を行う上で重要な手掛かりを得ることができた。

これらの調査成果の詳細は既に述べてきたのでここではまとめて替えて今回確認された墳丘の情報をもとに削平以前の纏向石塚古墳の様子を復元しておくこととしたい。

先述したように第8次調査によって確認された墳丘盛土の厚さは約4mで、西南に隣接する1-1トレンチの調査で確認された墳丘基底部からは約5.4mの墳丘高が残されていることとなるが、それでも他の纏向遺跡内の前方後円墳と比較すると纏向石塚古墳の墳丘はかなり低い状況にある。

墳丘削平以前の纏向石塚古墳の様子を知る手掛かりは明治26年に野淵龍潜によって纏められた『大

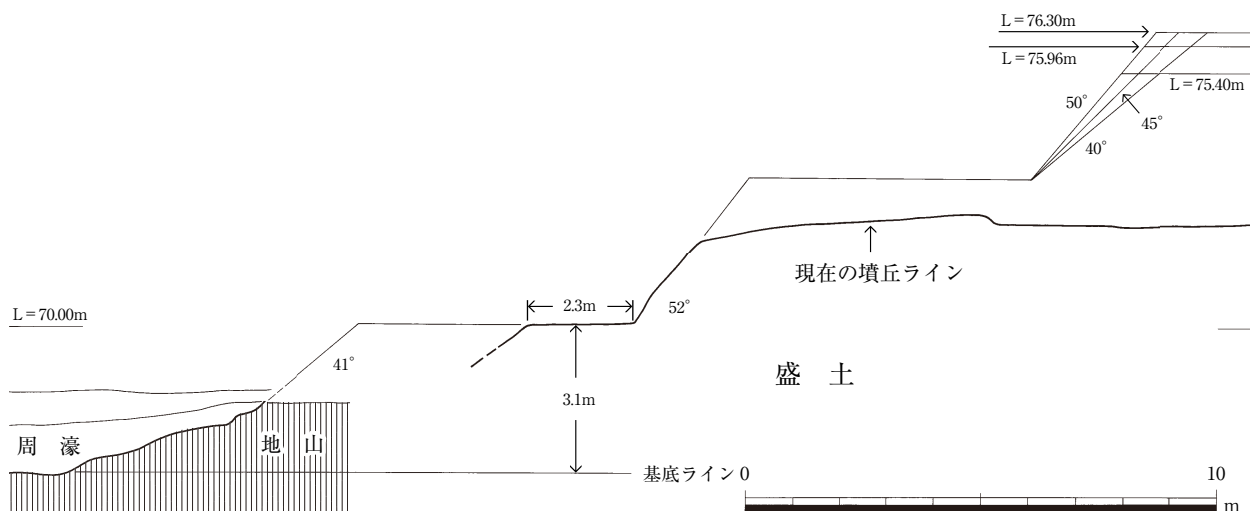


図108 纏向石塚古墳後円部西端での墳丘復元案（1／160）  
（第8次調査第1トレンチと第1次調査第1トレンチとの合成図）

表51 『大和國古墳墓取調書』にみる墳丘高計測の精度

	野淵による計測値	現在の墳丘高	誤 差
纏向石塚古墳	3間半 (6.30m)	3.30m	+ 3 m
矢塚古墳	3間半 (6.30m)	6.5m	- 0.2m
勝山古墳	4間 (7.2m)	6.9m	+ 0.3m
東田大塚古墳	4間5尺 (8.7m)	7.53m	+ 1.17m
ホケノ山古墳	5間5尺 (10.5m)	7.98m	+ 2.5m
茅原大墓古墳	4間5尺 (8.7m)	10m	- 1.3m
柳本大塚古墳	3間半 (6.30m)	6.5m	- 0.2m
石名塚古墳	7間 (12.6m)	10.1m	+ 2.5m

※墳丘高については『大和國古墳墓取調書』は当時の水田面との比高差を記載している。今回比較一覧を作成するにあたっては当時計測されたと考えられる地点での現在の水田面との比高差を測量図より計測した。

和國古墳墓取調書』が唯一の資料であるが、この『大和國古墳墓取調書』所収の纏向石塚古墳の絵図や記録によると後円部と周辺の水田面との比高は3間半（約6.3m）で後円部に畑として利用されている段築状の3段差が確認できる。そこで、第1次調査の周濠部分と第8次調査での調査成果と『大和國古墳墓取調書』の記録をもとに墳丘の復元を行ったのが図108である。<sup>3)</sup>

墳丘高の復元を行うにあたり、唯一の手掛かりである『大和國古墳墓取調書』の記録については測量図上で明治26年当時に計測されたと考えられる周囲の水田の位置を推定し、現在の墳丘との比高差を再度計測することでその精度の確認を行った。その結果は表51に示したとおりで、大字東田地内所

在の古墳では纏向石塚古墳を除くとほぼ1 m内外の誤差でおさまるものであり、数値については概ね実際に近い数値を示していると思われる一方、その他のホケノ山や石名塚古墳などでは2.5mもの誤差が認められるものもある。これは『大和國古墳墓取調書』の作成に際しては古墳所在地ごとにそれぞれ地元の協力を得ながら調書の作成が進められたとのことで、自治会の単位毎に測量の精度に違いがあったのではないかと考えている。

さて、墳頂部の高さについては『大和國古墳墓取調書』の高さの記録が後円部北側の水田面よりの高さを基準としているため、後円部北側に残る3筆の水田のうち最も標高の高い水田から割り出した高さである標高76.96mと、最も低い水田から割り出した標高75.40mの2案とともに、第1次調査において検出された墳丘基底部から第8次調査で検出された段築の第1段目とみられる平坦面までの高さである3.1mの高さを、墳丘が3段築成であったと仮定して均等に割り付けた標高76.30mの3案の高さを提示している。

墳丘の傾斜角度は調査によって確認された纏向石塚古墳の墳丘第1段目の傾斜角度41°と第2段目の傾斜角度である52°、そして同じ纏向遺跡内の出現期前方後円墳であるホケノ山古墳の墳丘の傾斜角度などを参考に40°～50°までの3つの墳丘傾斜角度を図上に表現したが、墳丘高については最大でも90cmの誤差の中でおさまるものであり、削平前の墳丘高は基底部より最大で約9.3mはあったものと考えている。

なお、1-1・8-1トレンチの位置関係から割り出した段築テラス面の幅については最大で約6mの規模に復元を行った。非常に幅の広いテラス面であり、後世の改変の影響も考えなければならないが、第2節の後円部の調査の項でも述べたとおりホケノ山古墳の調査成果では最大で約5.5m程度の規模に復元できる広いテラスを持つ可能性が考えられることから、纏向石塚古墳もこれに近いテラス面を持つ可能性は高いと考えており、敢えて一案を提示することとした。正確な規模や構造については今後の調査を待つこととしたい。

(橋本)

#### 【註記】

1) 野淵龍潜『大和國古墳墓取調書』奈良県1893

2) ホケノ山古墳の第1段目テラス面の幅は後世の攪乱により正確な規模は確認されておらず、報告では3～5mと推定されているが、ここでは報告書に提示された図面や未報告の第1～3次調査成果を合わせて再検討し、第1段目テラス面の幅を最大で約5.5mと推定した。

岡林孝作・水野敏典編『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所2008

3) 纏向石塚古墳の墳丘復元については以下の文献にて私案を提示したことがあるが、1-1・8-1トレンチの位置関係に誤りがあったため、今回の報告を持って最新の復元案とする。

橋本輝彦「纏向古墳群の調査成果と出土土器」『東田大塚古墳』(財)桜井市文化財協会2006

表 52 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (1)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
109—1 130—1	第 1 トレンチ 7—9 杭間 墳丘下湿地 暗灰色粘土層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C : (138)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			2.5Y 6/2 灰黄 ・外面にスス付着	
109—2 130—2	第 1 トレンチ 6—7 杭間 墳丘下湿地	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C : (16.1)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			7.5Y 6/4 にぶい 黄橙 ・外面にスス付着	
109—3 130—3	第 1 トレンチ 7—9 杭間 墳丘下湿地 暗灰色粘土層	甕 Y	I—B—・a	C : (18.3)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			2.5Y 5/2 暗灰黄 ・外面にスス付着	
109—4 130—4	第 1 トレンチ 7—9 杭間 墳丘下湿地 暗灰色粘土層	甕 Y	I—B—・a	C : (19.1)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			10Y R 6/3 にぶい 黄橙 ・外面にスス付着	
109—5 130—5	第 1 トレンチ 7—9 杭間 墳丘下湿地 暗灰色粘土層	底部 (壺)	2—C—a	B : (3.4)			O. 押捺 A → 右上がりタタキ i. スリナデヨコ I A a 50/CM 8/cm	2.5Y 6/1 黄灰	
109—6 130—6	第 1 トレンチ 7—9 杭間 墳丘下湿地 暗灰色粘土層	鉢	近江形鉢	W : (17.2)	O. マメツ不明 → 突帯文 i. スリナデナナメ I A a → 押捺 A 7/cm			O. 7.5Y R 6/4 にぶい 橙～ 7.5Y 2/1 黒 i. 5Y 5/8 明赤褐 ・近江系	
109—7 130—7	第 1 トレンチ 7—9 杭間 墳丘下湿地 暗灰色粘土層	高坏	B—・—・—・	C : (23.4)	O. ミガキ A タテ i. ミガキ A タテ			5Y R 5/4 にぶい 赤褐	
109—8 130—8	第 1 トレンチ 7—9 杭間 墳丘下湿地 暗灰色粘土層	脚台 (高坏)	I—・—・	B : (10.6)			O. スリナデナナメ I A a → ミガキ A タテ i. スリナデヨコ I C a 8/cm	2.5Y 4/1 黄灰	
109—9 130—9	第 1 トレンチ 6—7 杭間 墳丘下湿地 落ち込み内	脚台 (高坏)	I—・—・	B : (12.8)			O. ミガキ A タテ (編) スリナデヨコ I C a i. スリナデナナメ I A a (編) スリナデヨコ I C a 8/cm	10Y R 7/2 にぶい 黄橙	
109—10 129—10	第 1 トレンチ 6—7 杭間 墳丘盛土内下層	壺	C—C <sub>1</sub> —a	C : 6.3	O. スリナデヨコ I C a → ミガキ A タテ i. スリナデヨコ I C a			O. 10Y R 7/3 にぶい 黄橙 i. 7.5Y R 7/3 にぶい 橙	
109—11 130—11	第 1 トレンチ 7—8 杭間 墳丘盛土内下層	壺	H—B—b	C : (9.3)	O. スリナデヨコ I C a i. (口縁) スリナデヨコ I C a (口頸) スリナデヨコ I A b			2.5Y 5/1 黄灰	

表 53 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (2)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
109-12 130-12	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-B-b	C : (104)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 6/3 におい黄橙	
109-13 130-13	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-B-b	C : (116)	O. ミガキAタテ i. ミガキA				O. 10 Y R 6/3 におい黄 i. 25 Y R 5/1 黄灰	
109-14 130-14	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-B-b	C : (133)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				7.5 Y R 6/4 におい橙	
109-15 130-15	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-B-e	C : (157)	O. (口縁)スリナデヨコICa (口頸)押捺A→ スリナデタテIAa i. スリナデヨコIAa	9/cm 6/cm			O. 10 Y R 6/3 におい黄橙 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	
109-16 130-16	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-B-b	C : (154)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 6/4 におい黄橙	
109-17 130-17	第1トレンチ 4-5杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-C-b	C : (152)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		O. 右上がりタタキ i. 押捺A	40/CM	O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐～ 25 Y 7/3 浅黄	
109-18 130-18	第1トレンチ 8-9杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-B-b	C : (160)	O. (口縁)スリナデヨコICa (口頸)スリナデヨコICa→ ミガキAタテ i. (口縁)スリナデヨコICa (口頸)ミガキAヨコ				O. 10 Y R 6/2 灰黄褐 i. 25 Y 6/2 灰黄	
109-19 130-19	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-B-a	C : (177)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		O. スリナデヨコIAa i. 押捺A→スリナデICa	10/cm	10 Y R 6/4 におい黄橙	
109-20 130-20	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-・-b	C : (184)	O. (口縁)スリナデヨコICa (口縁)ミガキAタテ i. ミガキAタテ				7.5 Y R 6/3 におい褐	
109-21 130-21	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-C-e	C : (172)	O. (口縁)スリナデヨコICa →凹線文→凹形浮文 (口縁)ミガキAタテ i. スリナデヨコICa				O. 7.5 Y R 6/4 におい橙 i. 7.5 Y R 4/1 褐灰～ 7.5 Y R 6/1 褐灰	
109-22 130-22	第1トレンチ 4-5杭間 墳丘盛土内下層	壺	C-B <sub>2</sub> -a	C : (168)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				7.5 Y R 6/6 橙	

表 54 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (3)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
109-23 130-23	第1トレンチ 8-9杭間 墳丘盛土内下層	壺	T c-D-b	C : (153)	O. スリナデヨコICa→ スリナデタテIAa i. (口唇)スリナデヨコICa (口頸)スリナデヨコIAb	8/cm			O. 2.5 Y 5/1 黄灰 i. 2.5 Y 5/2 暗灰黄	
109-24 130-24	第1トレンチ 8-9杭間 墳丘盛土内下層	壺	T-C-a	C : (152)	O. (口縁)スリナデヨコICa (口縁)押捺A→ スリナデナナメIAa i. (口唇)スリナデヨコICa (口頸)スリナデヨコIAa	8/cm 5/cm			O. 2.5 Y 5/2 暗灰黄 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐	・外面にスス付着
109-25 130-25	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内下層	壺	—	—	O. マメツ不明 i. マメツ不明				O. 7.5 Y R 7/4 にぶい橙 i. 2.5 Y 7/2 灰黄	・北部九州系？
109-26 130-26	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-・-b	—	O. (口唇)スリナデヨコICa (口頸)ミガキAYoコ i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 i. 10 Y R 7/3 にぶい黄橙	
109-27 130-27	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-・-b	—	O. スリナデヨコICa→ ミガキAタテ i. スリナデヨコICa				10 Y R 6/3 にぶい黄橙	・外面にスス付着
109-28 130-28	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	壺	H-・-b	—	O. (口唇)押捺A→ スリナデヨコICa (口縁)スリナデヨコIAb i. (口唇)スリナデヨコICa (口縁)ミガキAYoコ				10 Y R 6/2 灰黄褐	
109-29 130-29	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内下層	壺	M-A-a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデナナメIAa i. 押捺A→スリナデヨコICa	6/cm		10 Y R 5/2 灰黄褐	・外面にベンガラ塗 布
109-30 130-30	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内下層	底部 (壺)	3-A-c	B : (22)				O. 押捺A→ミガキAタテ i. スリナデヨコIAb	O. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 i. 10 Y R 7/2 にぶい黄橙	
109-31 130-31	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内下層	底部 (壺)	2-C-a	B : 4.4				O. 押捺A i. スリナデIAb	2.5 Y 5/2 暗灰黄～ 2.5 Y 2/1 黒	
109-32 130-32	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内下層	底部 (壺)	2-A-・	B : 3.8				O. ミガキAタテ i. ミガキAタテ	O. 10 Y R 7/2 にぶい黄橙 i. 7.5 Y R 7/3 にぶい橙	
109-33 130-33	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	底部 (壺)	2-A-a	B : 3.7				O. 押捺A→ミガキAタテ i. ケズリB	O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐～ 10 Y R 5/1 褐灰	



表 55 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (4)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
109—34 130—34	第 1 トレンチ 5—6 杭間 墳丘下包含層	底部 (甕)	3—C—b	B : 2.9			O. タタキ→ミガキAヨコ i. 押捺A→スリナデIAb	40/CM	O. 7.5 Y R 6/4 にぶい橙 i. 7.5 Y R 7/4 にぶい橙	
109—35 130—35	第 1 トレンチ 5—6 杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	2—A—a	B : (6.2)			O. 押捺A i. 押捺A		2.5 Y 5/2 暗灰黄	
109—36 130—36	第 1 トレンチ 5—6 杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	2—A—a	B : 2.9			O. 押捺A i. スリナデIAb		10 Y R 5/2 灰黄褐	
109—37 130—37	第 1 トレンチ 8—10 杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	2—C—c	B : 5.6			O. 押捺A→タタキ i. ミガキAヨコ	40/CM	O. 10 Y R 6/2 灰黄褐 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
109—38 130—38	第 1 トレンチ墳丘 盛土内下層	底部 (甕)	1—C—c	B : 5.4			O. 押捺A i. マメツ不明		O. 5 Y R 5/6 明赤褐 i. 10 Y R 6/4 にぶい黄橙	
109—39 130—39	第 1 トレンチ 3—4 杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	2—A—a	B : (2.8)			O. 押捺A i. スリナデICa		10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
109—40 130—40	第 1 トレンチ 4—5 杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	2—A—a	B : (4.7)			O. 押捺A→右上がりタタキ→ ミガキAタテ i. ケズリB	40/CM	O. 2.5 Y 5/2 暗灰黄 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
110—41 130—41	第 1 トレンチ 8—10 杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	2—A—b	B : 2.5		O. 押捺A i. 押捺A			10 Y R 5/2 灰黄褐	
110—42 130—42	第 1 トレンチ 7—9 杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	3—C—c	B : (3.6)			O. 押捺A→ スリナデナナメIAa i. スリナデナナメIAa	10/cm 10/cm	2.5 Y 6/2 灰黄	
110—43 130—43	第 1 トレンチ 8—10 杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	1—C—	B : 4.9			O. 押捺A i. 押捺A		10 Y R 6/2 灰黄褐	
110—44 130—44	第 1 トレンチ 7—8 杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	2—A—a	B : (5.1)			O. 押捺A i. 押捺A		O. 5 Y R 6/6 橙～ 7.5 Y R 6/4 にぶい橙 i. 7.5 Y R 6/4 にぶい橙	

表 56 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (5)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
110-45 130-45	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	2-A-a	B : 4.4			O. 押捺A i. スリナデIA b		O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/3 について黄褐	
110-46 130-46	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	2-A-b	B : 4.2			O. 押捺A i. ケズリB		2.5 Y R 6/2 灰黄～ 2.5 Y 4/1 黄灰	
110-47 130-47	第1トレンチ3- 4杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	3-C-a	B : (3.6)			O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. 2.5 Y 3/1 黒褐 i. 2.5 Y 4.1 黄灰	
110-48 130-48	第1トレンチ 4-5杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	3-C-b	B : (3.9)			O. スリナデIA b i. スリナデタテIA b		O. 2.5 Y 6/2 灰黄 i. 2.5 Y 6/3 について黄	
110-49 130-49	第1トレンチ 8-9杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕)	2-A-a	B : 3.9			O. スリナデタテIA b i. ケズリB		O. 2.5 Y 5/2 暗灰黄～ 2.5 Y 4/1 黄灰 i. 2.5 Y 4/1 黄灰	・外面にスス付着
110-50 131-50	第1トレンチ2- 3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅲ-B-・a	C : (8.6)	O. マメツ不明 i. 押捺A→スリナデヨコIC a	O. マメツ不明 i. 押捺A			10 Y R 3/1 黒褐	
110-51 131-51	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅲ-B-・a	C : (9.4)	O. スリナデヨコIC a i. スリナデヨコIC a	O. スリナデヨコIC a i. スリナデヨコIA b			10 Y R 4/1 褐灰	・外面にスス付着
110-52 131-52	第1トレンチ 3-4杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅲ-B-・a	C : (10.6)	O. スリナデヨコIC a i. スリナデヨコIC a	O. スリナデヨコIC a i. ケズリA			10 Y R 5/3 について黄褐	・外面にスス付着
110-53 131-53	第1トレンチ2- 3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ-B-・a	C : (12.8)	O. 押捺A→マメツ不明 i. 押捺A→マメツ不明				10 Y R 6/4 について黄橙	
110-54 131-54	第1トレンチ2- 3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ-B-・a	C : (12.9)	O. スリナデヨコIC a i. マメツ不明				O. 7.5 Y R 6/4 について橙 i. 10 Y R 6/4 について黄橙	
110-55 131-55	第1トレンチ2- 3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ-B-・a	C : (13.4)	O. スリナデヨコIC a i. マメツ不明				O. 10 Y R 3/2 黒褐 i. 10 Y R 4/2 灰黄褐	・外面にスス付着

表 57 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (6)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色	調	備 考
					口	縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
110-56 131-56	第1トレンチ墳丘 盛土内下層	甕 Y	Ⅱ-B-・a	C : (132)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 4/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐		・外面にスス付着 ・外面頸部にヘラ状 工具痕有
110-57 131-57	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ-B-・a	C : (133)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 4/1 褐灰 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙		・外面にスス付着
110-58 131-58	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ-B-・a	C : (136)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 4/1 褐灰 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐		
110-59 131-59	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ-B-・a	C : (139)	O. タタキ→スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	30/CM			O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐		
110-60 131-60	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ-B-・a	C : (140)	O. 右上がりタタキ i. マメツ不明	20/CM			O. 10 Y R 4/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐		・外面にスス付着
110-61 131-61	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ-B-・a	C : (140)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				10 Y R 6/4 にぶい黄橙		
110-62 131-62	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ-B-・a	C : (146)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				10 Y R 6/4 にぶい黄橙		
110-63 131-63	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ-B-・a	C : (144)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		O. タタキ i. 押捺A	50/CM	7.5 Y R 7/6 橙		
110-64 131-64	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I-B-・a	C : (145)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		O. タタキ i. スリナデICa	30/CM	O. 10 Y R 5/4 にぶい黄褐 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐		
110-65 131-65	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I-B-・a	C : (148)	O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. 右上がりタタキ i. 押捺A→スリナデヨコICa	30/CM	10 Y R 6/4 にぶい黄橙		
110-66 131-66	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I-B-・a	C : (150)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		O. スリナデICa i. 押捺A→スリナデICa		10 Y R 6/3 にぶい黄橙		

表 58 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (7)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
110-67 131-67	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・a	C：(160)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				10 Y R 6/3 におい黄橙	
110-68 131-68	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・a	C：(156)	O. 押拵A→スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I B	多 /cm			7.5 Y R 5/4 におい褐	・外面にスス付着
110-69 131-69	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・a	C：(161)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a		8 /cm		O. 25 Y 5/1 黄灰 i. 25 Y 4/1 黄灰	
110-70 131-70	第1トレンチ 7—9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・a	C：(167)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐～ 10 Y R 4/1 褐灰	・外面にスス付着
110-71 131-71	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・a	C：(165)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			O. マメツ不明 i. ケスリ A	O. 75 Y R 5/4 におい褐 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐	・外面にスス付着
110-72 131-72	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・a	C：(170)	O. スリナデヨコ I C a i. マメツ不明				O. 10 Y R 6/3 におい黄橙 i. 10 Y R 7/3 におい黄橙	
110-73 131-73	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・a	C：(172)	O. スリナデヨコ I A a i. スリナデヨコ I C a	5 /cm			10 Y R 6/4 におい黄橙	
110-74 131-74	第1トレンチ 8—10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・a	C：(170)	O. (口縁)スリナデヨコ I C a (口頭)タタキ i. スリナデヨコ I C a	30/CM			10 Y R 5/2 灰黄褐	
110-75 131-75	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・a	C：(182)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I A a	8 /cm			10 Y R 4/1 褐灰	・外面にスス付着
110-76 131-76	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・a	C：(192)	O. 押拵A→マメツ不明 i. マメツ不明				7.5 Y R 7/6 橙	
110-77 131-77	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・a	C：(190)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				2.5 Y 6/2 灰黄	・外面にスス付着

表 59 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (8)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
111-78 131-78	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅲ—B—・b	C：(108)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa				O. 25 Y 3/2 黒褐～ 25 Y 6/2 灰黄 i. 25 Y 6/2 灰黄	
111-79 131-79	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅲ—B—・b	C：(109)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa				25 Y 5/2 暗灰黄	・外面にスス付着
111-80 131-80	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C：(114)	O. スリナデヨコⅠCa i. マメツ不明				7.5 Y R 6/4 にぶい、橙	
111-81 131-81	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C：(120)	O. スリナデヨコⅠCa i. マメツ不明	O. タタキ i. 押除 A	40/CM		10 Y R 7/4 にぶい、黄橙	
111-82 131-82	第1トレンチ 2— 3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C：(127)	O. マメツ不明 i. スリナデヨコⅠCa				7.5 Y R 8/4 浅黄橙	
111-83 131-83	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C：(133)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa				O. 10 Y R 4/1 褐灰 i. 25 Y 5/1 黄灰	・外面にスス付着
111-84 131-84	第1トレンチ 3—5杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C：(135)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa				10 Y R 4/2 灰黄褐	・外面にスス付着
111-85 131-85	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C：(142)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				O. 10 Y R 3/1 黒褐 i. 10 Y R 6/4 にぶい、黄橙	
111-86 131-86	第1トレンチ 墳丘盛土内下層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C：(140)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. 右にがりタタキ i. スリナデヨコⅠA b	40/CM		5 Y R 6/6 橙	・外面にスス付着
111-87 131-87	第1トレンチ 7—9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・b	C：(151)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa				25 Y 6/1 黄灰	・外面にスス付着
111-88 131-88	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・b	C：(148)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa				25 Y 4/1 黄灰	・外面にスス付着

表 60 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (9)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
111-89 131-89	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・b	C：(160)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				10 Y R 7/4 にぶい黄橙	
111-90 131-90	第1トレンチ 8—10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・b	C：(171)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				2.5 Y 5/1 黄灰	
111-91 131-91	第1トレンチ 2— 3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・b	C：(171)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				10 Y R 6/4 にぶい黄橙	
111-92 131-92	第1トレンチ 2— 3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・b	C：(176)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				O. 10 Y R 6/2 灰黄褐～ 10 Y R 5/1 褐灰 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	
111-93 131-93	第1トレンチ 8—10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・b	C：(175)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 10 Y R 5/1 褐灰 i. (口縁)10 Y R 5/1 褐灰 ・外面にスス付着 i. (口頭)10 Y R 6/1 褐灰	
111-94 131-94	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内下層	甕	I—B—・b	C：(187)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 10 Y R 7/2 にぶい黄橙 ～10 Y R 7/1 灰白 i. 10 Y R 7/2 にぶい黄橙	
111-95 131-95	第1トレンチ 3— 5杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・b	C：(192)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				10 Y R 6/4 にぶい黄橙	
111-96 131-96	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・b	C：(197)	O. 押除A→スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				2.5 Y 4/1 黄灰	
111-97 131-97	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・b	C：(198)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				10 Y R 6/3 にぶい黄橙 ・外面にスス付着	
111-98 131-98	第1トレンチ 2— 3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	I—B—・b	C：(203)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				10 Y R 6/4 にぶい黄橙	
111-99 131-99	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 S	II—C—・d	C：(133)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				O. 2.5 Y 2/1 黒 i. 2.5 Y 7/2 灰黄	



表 61 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (10)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
111-100 131-100	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 S	Ⅱ—C—・・d	C：(132)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				O. 10 Y R 3/2黒褐 i. 10 Y R 5/3 におい黄褐	・外面に黒斑
111-101 131-101	第1トレンチ 8—10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・・・・・a	—	O. スリナデヨコ I C a i. (口唇)スリナデヨコ I C a (口縁)スリナデナメ I A a	6 /cm			O. 10 Y R 5/2灰黄褐 i. 10 Y R 6/2灰黄褐	・外面にスス付着
111-102 131-102	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・・・・・a	—	O. (口唇)スリナデヨコ I C a (口頸)押捺 A i. スリナデヨコ I A b				25 Y 6/2灰黄	
111-103 131-103	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・・・・・a	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a		O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I B	多 /cm	10 Y R 6/3 におい黄橙	・外面にスス付着
111-104 131-104	第1トレンチ 8—10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・・・・・a	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 10 Y R 5/2灰黄褐 i. 10 Y R 6/2灰黄褐	・外面にスス付着
111-105 131-105	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・・・・・a	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 10 Y R 6/2灰黄褐～ N 15/0黒 i. 10 Y R 6/2灰黄褐	
111-106 131-106	第1トレンチ 8—10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・・・・・a	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I B	多 /cm			7.5 Y R 6/2灰褐	・外面にスス付着
111-107 131-107	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・・・・・a	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 5 Y R 7/4 におい橙 i. 10 Y R 6/3 におい黄橙	
111-108 131-108	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・・・・・a	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				7.5 Y R 6/4 におい橙	
111-109 131-109	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・・・・・a	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				25 Y 6/2灰黄～ 25 Y 2/1黒	
111-110 131-110	第1トレンチ 8—10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・・・・・a	—	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				25 Y 6/2灰黄	

表 62 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (11)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
111-111 132-111	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 6/3にぶい黄橙 ・外面にスス付着	
111-112 132-112	第1トレンチ 4-5杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 6/3にぶい黄橙	
111-113 132-113	第1トレンチ 4-5杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 5/3にぶい黄褐 i. 10 Y R 6/3にぶい黄橙	
111-114 132-114	第1トレンチ 7-9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 25 Y 4/1黄灰 i. 25 Y 5/1黄灰	
111-115 132-115	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				7.5 Y R 6/4にぶい橙	
111-116 132-116	第1トレンチ 3-4杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 6/3にぶい黄橙 i. 10 Y R 6/4にぶい黄橙	
111-117 132-117	第1トレンチ 3-4杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. (口縁)スリナデヨコICa (口頭)押捺A→ スリナデヨコICa				7.5 Y R 7/4にぶい橙	
111-118 132-118	第1トレンチ 4-5杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 4/1褐灰	
111-119 132-119	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 6/3にぶい黄橙	
111-120 132-120	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 25 Y 4/1 黄灰 i. 25 Y 5/1 黄灰	
111-121 132-121	第1トレンチ 7-9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 4/1 褐灰 i. 10 Y R 5/3にぶい黄褐 ・外面にスス付着	

表 63 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (12)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
111-122 132-122	第1トレンチ 8-9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
111-123 132-123	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 5/1 褐灰	・外面にスス付着
111-124 132-124	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 5/2 灰黄褐～ 10 Y R 4/2 灰黄褐	・外面にスス付着
111-125 132-125	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 6/4 にぶい黄橙	
111-126 132-126	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 5/2 灰黄褐	
111-127 132-127	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/3 にぶい褐	・外面にスス付着
111-128 132-128	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. (口縁)スリナデヨコIB (口縁)スリナデヨコICa	多/cm		O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐	・外面にスス付着
111-129 132-129	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 4/1 褐灰	
111-130 132-130	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. 押捺A→スリナデヨコICa			10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
112-131 132-131	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 3/1 黒褐	・外面にスス付着
112-132 132-132	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙	

表 64 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (13)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
112—133 132—133	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. マメツ不明 i. マメツ不明				10 Y R 6/4にぶい黄橙	
112—134 132—134	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				(口縁)5 Y R 6/4にぶい (頸)2.5 Y 5/2暗灰黄	
112—135 132—135	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. (口唇)スリナデヨコICa (口頸)スリナデナメIAa	6/cm			O. 10 Y R 5/2灰黄褐～ 2.5 Y 3/1黒褐 i. 10 Y R 5/2灰黄褐	・外面にスス付着
112—136 132—136	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		O. タタキ i. スリナデヨコICa	30/CM	2.5 Y 4/1黄灰～ 2.5 Y 2/1黒	
112—137 132—137	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				2.5 Y 6/2灰黄	・外面にスス付着
112—138 132—138	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				2.5 Y 5/1黄灰	・外面にスス付着
112—139 132—139	第1トレンチ 5—6間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 4/1 褐灰 i. 10 Y R 5/2灰黄褐	
112—140 132—140	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				2.5 Y 5/2暗灰黄	・外面にスス付着
112—141 132—141	第1トレンチ 8—10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAb		O. 7.5 Y R 5/4にぶい褐 i. 7.5 Y R 5/3にぶい褐～ 5 Y R 6/6橙	
112—142 132—142	第1トレンチ 8—10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. (口縁)スリナデヨコICa i. (頸)タタキ スリナデヨコICa	40/CM			O. 10 Y R 5/2灰黄褐 i. 10 Y R 6/3にぶい黄橙	・外面にスス付着
112—143 132—143	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				7.5 Y R 6/4にぶい橙	

表 65 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (14)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
112—144 132—144	第1トレンチ 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. 押捺A→スリナデヨコICa				10 Y R 6/3 におい黄橙	
112—145 132—145	第1トレンチ 8—10杭間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. (口唇)スリナデヨコICa (口縁)スリナデヨコIAb				10 Y R 4/1 褐灰	
112—146 132—146	第1トレンチ 5—6間 墳丘盛土内下層	甕 Y	・―・―・b	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. 左上がりタタキ i. 押捺A	40/CM		10 Y R 7/3 におい黄橙	
112—147 132—147	第1トレンチ 7—9杭間 墳丘盛土内下層	甕	近江形 受口状口縁甕	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 7/1 灰白	・近江系
112—148 132—148	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内下層	甕	近江形 受口状口縁甕	—	O. スリナデヨコICa→ 列点文 i. スリナデヨコICa				10 Y R 5/2 灰黄褐	・近江系
112—149 132—149	第1トレンチ 7—9杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕 Y)	2—C—・	B : 4.1			O. 押捺A→右上がりタタキ i. スリナデICa	40/CM	O. 2.5 Y 6/1 黄灰～ 2.5 Y 6/2 灰黄 i. 2.5 Y 4/1 黄灰	・外面にスス付着
112—150 132—150	第1トレンチ墳丘 盛土内下層	底部 (甕 Y)	2—A—a	B : (4.8)			O. 右上がりタタキ i. スリナデIAb	30/CM	O. 10 Y R 5/3 におい黄褐～ 7.5 Y R 6/4 におい橙 i. 10 Y R 4/2 灰黄褐～ 2.5 Y 2/1 黒	・外面にスス付着
112—151 132—151	第1トレンチ 2—3杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕 Y)	1—C—・	B : 4.2			O. 右上がりタタキ i. マメツ不明	60/CM	7.5 Y R 6/4 におい橙	
112—152 132—152	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕 Y)	2—A—a	B : 3.8		O. 右上がりタタキ→ スリナデICa i. スリナデIAb	30/CM 4/cm	O. 右上がりタタキ i. ケズリB	O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 2.5 Y 5/2 暗灰黄	
112—153 132—153	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕 Y)	3—A—a	B : 4.1			O. 押捺A→タタキ i. 押捺A	30/CM	O. 10 Y R 6/2 灰黄褐 i. 2.5 Y 6/2 灰黄	
112—154 132—154	第1トレンチ 3—4杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕 Y)	2—A—c	B : (4.0)			O. 押捺A→タタキ i. ケズリB	30/CM	O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 6/3 におい黄橙	

表 66 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (15)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
112-155 132-155	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-C-a	B : (4.2)			O. 押捺A→タタキ i. 押捺A→ケズリB	40/CM	O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. N 3/0 暗灰	
112-156 132-156	第1トレンチ 3-4杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-C-b	B : 4.0			O. 押捺A→右上がりタタキ i. スリナデI A b	40/CM	O. 10 Y R 6/4 にぶい黄橙 i. 10 Y R 4/2 灰黄褐	
112-157 132-157	第1トレンチ 8-9杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	1-A-c	B : 4.1			O. 押捺A→右上がりタタキ i. 押捺A→スリナデI A b	50/CM	O. 2.5 Y 5/2 暗灰黄～ 2.5 Y 4/1 黄灰 i. 2.5 Y 4/1 黄灰	
112-158 132-158	第1トレンチ 3杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-A-a	B : 3.6			O. 押捺A→右上がりタタキ i. マメツ不明	40/CM	O. 10 Y R 4/1 褐灰～ 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
112-159 132-159	第1トレンチ 5杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-B-・	B : 3.8			O. 押捺A→タタキ i. ケズリB	60/CM	O. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	・外面にスス付着
112-160 132-160	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-C-・	B : 4.0			O. タタキ i. ケズリB	40/CM	O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐	
112-161 129-161	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-A-・	B : 3.8			O. 右上がりタタキ i. ケズリB	40/CM	O. 10 Y R 4/1 褐灰～ 7.5 Y R 5/3 にぶい褐 i. 10 Y R 4/1 褐灰	
112-162 130-162	第1トレンチ 3-4杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-A-b	B : (4.8)			O. 押捺A→タタキ i. ケズリB	40/CM	O. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 ～7.5 Y R 5/6 明褐 i. 10 Y R 4/1 褐灰	
112-163 132-163	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-A-a	B : (5.0)			O. 押捺A→右上がりタタキ i. 押捺A→ケズリB	40/CM	O. 10 Y R 4/1 褐灰 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙	・外面にスス付着
112-164 132-164	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	3-C-a	B : (4.1)			O. 押捺A→右上がりタタキ i. 押捺A→スリナデI A b	30/CM	O. 2.5 Y 3/1 黒褐 i. 2.5 Y 4/1 黄灰	・外面にスス付着
112-165 132-165	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-B-a	B : (3.6)			O. 押捺A→ スリナデナナメI A a i. 押捺A→ケズリB	4/cm	O. 2.5 Y 5/1 黄灰～ 2.5 Y 4/1 黄灰 i. 2.5 Y 4/1 黄灰	



表 67 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (16)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法					色	調	備 考	
					口	縁	部	体	部				底
112-166 132-166	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	3-C-a	B : (4.7)						O. タタキ i. 押捺A	40/CM	O. 7.5 Y R 6/3 におい褐 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐	
112-167 132-167	第1トレンチ 7-9杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-A-・	B : 5.1						O. 右上がりタタキ i. ケズリB	30/CM	10 Y R 5/2 灰黄褐～ 10 Y R 3/1 黒褐	・外面にスス付着
112-168 132-168	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-A-c	B : 3.9						O. 押捺A→タタキ i. ケズリB	20/CM	2.5 Y 4/1 黄灰	・外面にスス付着
112-169 132-169	第1トレンチ2- 3杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-A-・	B : 4.1						O. 右上がりタタキ i. ケズリB	30/CM	O. 7.5 Y R 5/4 におい褐 i. 10 Y R 6/4 におい黄橙	・二次焼成痕有
112-170 132-170	第1トレンチ 3-4杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	2-C-a	B : (4.2)						O. 押捺A i. ケズリB		O. 10 Y R 4/1 褐灰～ 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/3 におい黄褐	
112-171 132-171	第1トレンチ 3-4杭間 墳丘盛土内下層	底部 (甕Y)	3-C-a	B : (4.2)						O. 右上がりタタキ i. スリナデI A b	30/CM	O. 7.5 Y R 5/4 におい褐 i. 2.5 Y 5/2 暗灰黄	
112-172 133-172	第1トレンチ 3-5杭間 墳丘盛土内下層	鉢	I-E <sub>1</sub> -b	C : (25.2)		O. スリナデヨコI C a i. スリナデヨコI C a						10 Y R 5/2 灰黄褐	
112-173 133-173	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	鉢	I-E <sub>2</sub> -b	C : (25.5)		O. (口唇)板状工具による刺突 (口頸)スリナデヨコI C a i. スリナデヨコI C a			O. スリナデヨコI B i. スリナデヨコI C a	多/cm		7.5 Y R 6/4 におい橙	
112-174 133-174	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	鉢	近江形鉢	C : (16.6)		O. スリナデヨコI C a→ 沈線文→列点文 i. スリナデヨコI C a			O. スリナデナメI A a→ 沈線文→列点文 i. 押捺A→スリナデI C a	6/cm		10 Y R 8/2 灰白	・近江系
112-175 129-175	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	鉢	Ⅲ-E <sub>1</sub> -a	C : (9.1) H : 7.3 W : 7.7 B : 3.1		O. スリナデヨコI C a i. スリナデヨコI C a			O. スリナデI C a i. 押捺A→スリナデI C a			10 Y R 4/1 褐灰	
112-176 133-176	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内下層	鉢	Ⅲ-E <sub>1</sub> -a	C : (8.8)		O. スリナデヨコI C a i. スリナデヨコI C a			O. 右上がりタタキ i. 押捺A		40/CM	7.5 Y R 6/4 におい橙	

表 68 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (17)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
112-177 133-177	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内下層	鉢	・――a	—	O. ミガキAタテ i. ミガキAタテ				O. 10 Y R 6/2 灰黄褐 i. 10 Y R 6/3 について黄橙	
112-178 133-178	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内下層	底部 (鉢)	1-B-b	B : (4.6)			O. 押捺A i. ケズリB		7.5 Y R 6/4 について橙	
112-179 133-179	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	底部 (鉢)	2-B-a	B : (3.8)			O. 押捺A i. 押捺A→ケズリB		O. 10 Y R 6/3 について黄橙 i. 7.5 Y R 6/4 について黄橙	
112-180 133-180	第1トレンチ3- 5杭間 墳丘盛土内下層	底部 (鉢)	2-A-a	B : (4.0)			O. 押捺A i. 押捺A		10 Y R 5/3 について黄褐～ 10 Y R 6/3 について黄橙	
112-181 133-181	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内下層	底部 (鉢)	2-A-・	B : 3.6			O. 押捺A i. スリナデI A b		O. 10 Y R 6/3 について黄橙 i. 10 Y R 6/4 について黄橙	
112-182 133-182	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	有孔 底部	2-C-・	B : 3.3			O. スリナデI C a i. ケズリB		10 Y R 6/2 灰黄褐	・焼成前穿孔
112-183 133-183	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	有孔 底部	2-C-・	B : 3.7			O. 右上がりタタキ i. ケズリB	20/CM	O. 10 Y R 5/1 褐灰～ 5 Y 2/1 黒 i. 2.5 Y 5/1 黄灰	・焼成前穿孔
112-184 133-184	第1トレンチ 8-9杭間 墳丘盛土内下層	有孔 底部	3-C-a	B : (4.0)			O. スリナデI A b i. 押捺A→ケズリB		O. 2.5 Y 6/2 灰黄～ 2.5 Y 4/1 黄灰 i. 2.5 Y 5/1 黄灰	・焼成前穿孔
112-185 133-185	第1トレンチ 1-3杭間 墳丘盛土内下層	有孔 底部	2-C-・	B : 4.0			O. 押捺A i. 押捺A		10 Y R 6/3 について黄橙	・焼成前穿孔
112-186 129-186	第1トレンチ 墳丘盛土内下層	有孔 底部	2-C-・	B : 3.9			O. 押捺A→右上がりタタキ i. 押捺A→スリナデI A b	30/CM	O. 10 Y R 6/4 について黄橙 ～2.5 Y 2/1 黒 i. 10 Y R 5/3 について黄褐	・焼成前穿孔
113-187 133-187	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	高坏	B <sub>5</sub> ――・――	C : (11.4)	O. ミガキAタテ i. マメツ不明				O. 10 Y R 6/4 について黄橙 i. 2.5 Y 6/2 灰黄	

表 69 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (18)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
113—188 133—188	第1トレンチ 3—4杭間 墳丘盛土内下層	高坏	B <sub>3</sub> —・—・—・	C : (126)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			10 Y R 7/4 にぶい黄橙	
113—189 133—189	第1トレンチ墳丘 盛土下層	高坏	B <sub>3</sub> —・—・—・	C : (160)	O. 押除A→スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. 押除A→スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		10 Y R 6/4 にぶい黄橙	
113—190 133—190	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	高坏	E—・—・—・	C : (97)	O. スリナデヨコICa→ ミガキAタテ i. スリナデヨコICa→ ミガキAタテ	O. 押除A→ミガキAタテ i. スリナデヨコICa→ ミガキAタテ		10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
113—191 133—191	第1トレンチ 8—10杭間 墳丘盛土内下層	高坏	E—・—・—・	C : (111)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. ミガキAタテ i. ミガキAタテ		O. 75 Y R 6/4 にぶい橙 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
113—192 133—192	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内下層	高坏	B—・—・—・	C : (274)	O. スリナデヨコICa→ ミガキAヨコ i. ミガキAタテ			25 Y 5/2暗灰黄	
113—193 133—193	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内下層	高坏	E <sub>1</sub> —・—・—・	C : (200)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa→ スリナデナナミAa	6/cm		O. 10 Y R 5/2灰黄褐 i. 10 Y R 6/2灰黄褐	
113—194 133—194	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	高坏	E—・—・—・	—	O. スリナデヨコICa i. ミガキAヨコ	O. ミガキAタテ i. ミガキAヨコ		O. 75 Y R 6/4 にぶい橙～ 75 Y R 4/1 褐灰 i. 75 Y R 6/3 にぶい褐	
113—195 133—195	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内下層	高坏	B—・—・—・	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa →ミガキAタテ			10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
113—196 133—196	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	高坏	B—・—・—・	—	O. スリナデヨコICa→ ミガキA i. マメツ不明			5 Y R 6/6 橙	
113—197 133—197	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	高坏	B—・—・—・	—	O. スリナデヨコICa→ ミガキAタテ i. スリナデヨコICa→ ミガキAタテ			75 Y R 6/4 にぶい橙	
113—198 133—198	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内下層	高坏	B—・—・—・	—	O. スリナデヨコICa→ ミガキAタテ i. スリナデヨコICa→ ミガキAタテ			O. 25 Y 6/2灰黄 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙	

表 70 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (19)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
113-199 133-199	第 1 トレンチ 5-6 杭間 墳丘盛土内下層	高坏	B-・-・-・-	—	O. (口縁)スリナデヨコ I C a i. ミガキ A タテ			O. 10 Y R 5/3 にぶい黄橙 i. 10 Y R 5/2 灰黄橙	
113-200 133-200	第 1 トレンチ 7-8 杭間 墳丘盛土内下層	高坏	B-・-・-・-	—	O. スリナデヨコ I C a → ミガキ A タテ i. スリナデヨコ I C a → ミガキ A タテ			10 Y R 5/2 灰黄橙 ~ 10 Y R 4/1 褐灰	・ 内外面に朱塗布
113-201 133-201	第 1 トレンチ 7-9 杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	1-・-・-	B : (101)			O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a	10 Y R 6/2 灰黄橙	
113-202 133-202	第 1 トレンチ 5-6 杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	4-・-・-	B : (103)			O. スリナデタテ I A a (端)スリナデヨコ I C a i. スリナデナナメ I A a	8 /cm 8 /cm 10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
113-203 133-203	第 1 トレンチ 4-5 杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	4-A-・-	B : (112)			O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I A a (端)スリナデヨコ I C a	4 /cm 10 Y R 4/2 灰黄橙 (端)10 Y R 4/1 褐灰	
113-204 133-204	第 1 トレンチ 8-9 杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	4-・-・-	B : (135)			O. 押捺 A → スリナデヨコ I C a → ミガキ A タテ i. スリナデヨコ I B	2.5 Y 5/2 暗灰黄 多 /cm	
113-205 133-205	第 1 トレンチ 5-6 杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	4-・-・-	B : (204)			O. スリナデヨコ I B → ミガキ A タテ i. マメツ不明	7.5 Y R 6/4 にぶい橙 多 /cm	
113-206 129-206	第 1 トレンチ 7-9 杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	1-B-・c	—	O. 押捺 A → スリナデタテ I A a i. スリナデ I C a	8 /cm	O. ミガキ A タテ i. スリナデヨコ I A a	O. 7.5 Y R 7/4 にぶい橙 ~ 10 Y R 7/4 にぶい黄橙 i. (体)7.5 Y R 7/4 にぶい橙 (脚)10 Y R 5/1 褐灰 8 /cm	
113-207 129-207	第 1 トレンチ 7-9 杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	1-A-・a	—	O. スリナデタテ I A a i. スリナデ I C a	10 /cm	O. ミガキ A タテ i. スリナデヨコ I A b	O. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 ~ 10 Y R 5/2 灰黄橙 i. 10 Y R 4/1 褐灰	
113-208 129-208	第 1 トレンチ 2-3 杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	1-B-・c	—			O. マメツ不明 i. マメツ不明	10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
113-209 129-209	第 1 トレンチ墳丘 盛土下層	脚台 (高坏)	1-B-・c	B : (111)			O. マメツ不明 i. マメツ不明	7.5 Y R 6/6 橙	・ 3 方スカシ

表 71 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (20)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
113-210 129-210	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	4-B-・	—			O. ミガキAタテ i. マメツ不明		10 Y R 5/3 っぽい黄褐	
113-211 129-211	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	1-A-a	—			O. ミガキAタテ i. マメツ不明		10 Y R 5/4 っぽい黄褐	・ 4方スカシ
113-212 129-212	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	1-B-・	—		O. ミガキAタテ i. スリナデI C a	O. ミガキAタテ i. マメツ不明		10 Y R 6/4 っぽい黄橙	
113-213 129-213	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	1-A-a	—			O. 押捺A→ミガキAタテ i. 押捺A→スリナデヨコI A a	不明/cm	2.5 Y 6/2 灰黄	・ 3方スカシ
113-214 129-214	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	4-B-c	—		O. (頭)押捺A→ミガキAタテ i. ミガキA	O. ミガキAタテ i. 押捺A		O. 10 Y R 6/3 っぽい黄橙 i. (5/7.5 Y R 6/4 っぽい橙 (脚)10 Y R 6/3 っぽい黄 橙	・ 3方スカシ
113-215 129-215	第1トレンチ 7-9杭間 墳丘盛土最下層	脚台 (高坏)	2-B-c	—		O. マメツ不明 i. スリナデI C a	O. ミガキAタテ i. 押捺A		2.5 Y 6/2 灰黄	
113-216 133-216	第1トレンチ 8-10杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	4-・-・	—			O. (口唇)スリナデヨコI C a (口縁)ミガキAタテ i. スリナデヨコI C a		10 Y R 6/2 灰黄褐	
113-217 133-217	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内下層	脚台 (高坏)	1-・-・	—			O. スリナデヨコI C a→ ミガキAタテ i. スリナデヨコI C a		7.5 Y R 6/3 っぽい褐～ 10 Y R 4/2 灰黄褐	
113-218 133-218	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	小形 器台	・-C <sub>2</sub> -b	C：(9.6)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				10 Y R 5/4 っぽい黄褐	
113-219 133-219	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内下層	小形 器台	・-C <sub>2</sub> -a	C：(9.8)	O. スリナデヨコI C a i. 押捺A→スリナデヨコI C a				O. 10 Y R 5/3 っぽい黄褐 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐	
113-220 133-220	第1トレンチ 2-3杭間 墳丘盛土内下層	小形 器台	・-C <sub>3</sub> -a	C：(9.6)	O. スリナデヨコI C a i. スリナデヨコI C a				10 Y R 6/4 っぽい黄橙	

表 72 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (21)

図番号 図版番号		地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
						口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
113—221	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内下層	壺 不明	T—A <sub>1</sub> —a	—	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 7/4 にぶい黄橙	
133—221										
113—222	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	壺	C—A <sub>1</sub> —a	C : (16.7)	O. ミガキAタテ i. スリナデヨコICa				5 Y R 6/3 にぶい橙	
133—222										
113—223	第1トレンチ 3—4杭間 墳丘盛土内上層	壺	C—・—a	C : (12.1)	O. ミガキAタテ i. ミガキAタテ				10 Y R 6/4 にぶい黄橙	
133—223										
113—224	第1トレンチ 9—10杭間 墳丘盛土内上層	壺	C—・—a	C : (8.0)	O. スリナデタテIAa→ ミガキAタテ i. スリナデヨコICa	5 /cm			O. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 i. 7.5 Y R 6/4 にぶい橙	
133—224										
113—225	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	壺	㊟—A—b	C : (18.2)	O. マメツズ不明→円形浮文 i. ミガキAタテ				O. 7.5 Y R 5/4 にぶい褐 i. 7.5 Y R 6/4 にぶい橙～ 10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
133—225										
113—226	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	壺	㊟—A <sub>2</sub> —b	C : (17.0)	O. (口唇)スリナデヨコICa (口縁)ミガキAタテ→ 波状文→竹管文 i. ミガキAタテ				2.5 Y 5/2暗灰黄	・口唇部に刻み目有
133—226										
114—227	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	壺	N—A <sub>2</sub> —b	C : (11.9)	O. (口縁)スリナデヨコICa (口唇)押捺A→ スリナデヨコICa i. ミガキAヨコ				10 Y R 4/1 褐灰	
133—227										
114—228	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	壺	H—B—b	C : (13.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
133—228										
114—229	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	壺	H—B—a	C : (13.6)	O. (口唇)スリナデヨコICa (口唇)押捺A→ スリナデタテIAa i. (口唇)スリナデヨコICa (口唇)スリナデヨコIAa	10/cm			7.5 Y R 7/6 橙	
133—229								10/cm		
114—230	第1トレンチ 11—13杭間 墳丘盛土内上層	壺	H—C—a	C : (15.0)	O. 押捺A→スリナデヨコIB i. スリナデヨコIB	多/cm	O. マメツズ明 (スリナデICa?) i. 押捺A→ スリナデナナメICa		O. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 i. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 ～10 Y R 4/1 褐灰	
133—230										
114—231	第1トレンチ 9—10杭間 墳丘盛土内上層	壺	H—C—b	C : (16.0)	O. ミガキAタテ i. スリナデヨコICa				O. 5 Y R 6/6 橙 i. 5 Y R 6/4 にぶい橙～ 5 Y R 6/6 橙	
133—231										



表 73 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (22)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
114-232 133-232	第1トレンチ 4-5杭間 墳丘盛土内上層	壺	H-B-f	C : (166)	O. (口唇)波状文→円形浮文 (口頸)マメツ不明 i. スリナデI A b				O. 7.5 Y R 6/4 におい橙 i. 10 Y R 6/3 におい黄橙	
114-233 133-233	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内上層	壺	H-C-e	C : (164)	O. (口唇)波状文→竹管文 (口頸)ミガキAタテ i. ミガキA→波状文				10 Y R 5/3 におい黄褐	
114-234 134-234	第1トレンチ 9-10杭間 墳丘盛土内上層	壺	H-A-b	C : (174)	O. ミガキAタテ i. マメツ不明				O. 7.5 Y R 6/6 橙 i. 7.5 Y R 7/6 橙	
114-235 134-235	第1トレンチ 13-15杭間 暗茶褐色土 墳丘盛土内上層	壺	H-C-b	C : (186)	O. ミガキAタテ i. マメツ不明				O. 7.5 Y R 6/4 におい橙 i. 10 Y R 7/3 におい黄橙	
114-236 134-236	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内上層	壺	H-B-b	C : (199)	O. スリナデヨコI C a i. マメツ不明				10 Y R 6/3 におい黄橙	
114-237 134-237	第1トレンチ 3-4杭間 墳丘盛土内上層	壺	H-B-b	C : (228)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				7.5 Y R 6/4 におい橙	
114-238 134-238	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内上層	壺	H-・-・	—	O. スリナデヨコI C a i. (口縁)マメツ不明 (頸)押捺A				O. 7.5 Y R 6/6 橙 i. 10 Y R 7/4 におい黄橙	
114-239 134-239	第1トレンチ 9-10杭間 墳丘盛土内上層	底部 (壺)	3-C-a	B : (30)				O. マメツ不明 i. ケズリB	O. 10 Y R 6/2 灰黄褐～ 7.5 Y 2/1 黒 i. 2.5 Y 6/1 黄灰	
114-240 134-240	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内上層	底部 (壺)	2-A-a	B : (4.7)				O. スリナデタテI A a i. スリナデヨコI A b	O. 10 Y R 4/1 褐灰 i. 10 Y R 5/3 におい黄褐	
114-241 134-241	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内上層	底部 (壺)	1-A-・	B : 5.7				O. スリナデI C a i. スリナデナナI A a	O. 10 Y R 6/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	
114-242 134-242	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内上層	底部 (壺)	2-C-・	B : 7.4				O. 押捺A→スリナデタテI A a i. ケズリB	O. 7.5 Y R 7/4 におい橙 i. 10 Y R 7/4 浅黄橙	

表 74 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (23)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
114—243 134—243	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕)	2—C—a	B : 4.6			O. スリナデタテ I A b i. ケズリ B		O. 10 Y R 5/2 灰黄褐～ 5 Y 2/1 黒 i. 7.5 Y R 7/4 にぶい橙	
114—244 134—244	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕)	2—・—・	B : (5.0)			O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. 10 Y R 4/1 褐灰 i. 2.5 Y 3/1 黒褐	
114—245 134—245	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕)	2—C—a	B : (6.1)			O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 i. 10 Y R 5/4 にぶい黄褐	
114—246 134—246	第1トレンチ 7—9杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕)	2—C—・	B : 4.3			O. 押除 A→ スリナデタテ I A b i. スリナデ I A b		O. 10 Y R 5/1 褐灰 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐	・外面にスス付着
114—247 134—247	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕)	2—A—・	B : 2.5			O. ミガキ A タテ i. マメツ不明		O. 7.5 Y R 6/6 橙 i. 10 Y R 6/4 にぶい黄橙	
114—248 134—248	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	II—B—・ a	C : (11.1)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				10 Y R 6/4 にぶい黄橙	
114—249 134—249	第1トレンチ 13—15杭間砂礫 層 墳丘盛土内上層	甕 Y	II—B—・ a	C : (12.0)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
114—250 134—250	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	II—B—・ a	C : (12.6)	O. 押除 A i. マメツ不明				10 Y R 4/2 灰黄褐	
114—251 134—251	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	II—B—・ a	C : (11.9)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a	O. 押除 A→スリナデ I C i. スリナデナメ I A a→ スリナデヨコ I C a	8 /cm		10 Y R 7/4 にぶい黄橙	・外面にスス付着
114—252 134—252	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	II—B—・ a	C : (12.4)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				O. 7.5 Y R 5/4 にぶい褐 i. 10 Y R 5/4 にぶい黄褐	
114—253 134—253	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	II—B—・ a	C : (12.2)	O. 押除 A→スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a	O. タタキ i. 押除 A→スリナデヨコ I A a	40/CM 7 /cm		O. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙	・外面にスス付着

表 75 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (24)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
114-254 134-254	第 1 トレンチ 3-4 杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ-B-・a	C : (128)	O. 右ヒガリタキ→ スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a	30 /cm		O. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 ・外面にスス付着	
115-255 134-255	第 1 トレンチ 8-9 杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅰ-B-・a	C : (130)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			10 Y R 7/2 にぶい黄橙	
115-256 134-256	第 1 トレンチ 8-9 杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅰ-B-・a	C : (132)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			O. 7.5 Y R 5/3 にぶい褐 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	
115-257 134-257	第 1 トレンチ 8-9 杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅰ-B-・a	C : (139)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/1 褐灰 ・外面にスス付着	
115-258 134-258	第 1 トレンチ 6-7 杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅰ-B-・a	C : (143)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			10 Y R 5/3 にぶい黄褐	
115-259 134-259	第 1 トレンチ 13-15 杭間 暗茶褐色土 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅰ-B-・a	C : (145)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			10 Y R 4/2 灰黄褐	
115-260 134-260	第 1 トレンチ 5-6 杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅰ-B-・a	C : (144)	O. 押除 A → スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ A a	7 /cm		7.5 Y R 6/4 にぶい橙	
115-261 134-261	第 1 トレンチ 6-7 杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅰ-B-・a	C : (143)	O. スリナデヨコ I C a i. マメツ不明			O. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 i. 10 Y R 7/4 にぶい黄橙 ・外面にスス付着	
115-262 134-262	第 1 トレンチ 6-7 杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅰ-B-・a	C : (148)	O. スリナデヨコ I C a i. 押除 A → スリナデヨコ I C a			O. 7.5 Y R 5/4 にぶい褐 i. 7.5 Y R 5/4 にぶい褐 ~ 10 Y R 6/2 灰黄褐 ・外面にスス付着	
115-263 134-263	第 1 トレンチ 8-9 杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅰ-B-・a	C : (146)	O. 押除 A → スリナデヨコ I B i. スリナデヨコ I C a	多 /cm		O. 10 Y R 4/1 褐灰 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐 ~ 10 Y R 2/1 黒褐	
115-264 134-264	第 1 トレンチ 5-6 杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅰ-B-・a	C : (148)	O. スリナデヨコ I C a i. マメツ不明			10 Y R 6/4 にぶい黄橙	

表 76 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (25)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
115-265 134-265	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・a	C : (15.9)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. マメツ不明			O. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐色 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐色	・外面にスス付着
115-266 134-266	第1トレンチ 3-5杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・a	C : (15.4)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. スリナデヨコICa i. ケズリA		10 Y R 5/4 にぶい黄褐色	
115-267 134-267	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・a	C : (15.6)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAa	6 /cm		O. 5 Y R 5/4 にぶい赤褐色 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐色	・外面にスス付着
115-268 134-268	第1トレンチ 13-15杭間 暗茶褐色土 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・a	C : (15.4)	O. 押捺A i. 押捺A→スリナデヨコICa			10 Y R 6/4 にぶい黄褐色	
115-269 134-269	第1トレンチ 8-9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・a	C : (15.8)	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコICa	多 /cm		10 Y R 6/3 にぶい黄褐色	・外面にスス付着
115-270 134-270	第1トレンチ 8-9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・a	C : (16.1)	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	9 /cm		2.5 Y 4/1 黄灰	
115-271 134-271	第1トレンチ 9-10杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・a	C : (17.0)	O. スリナデヨコICa i. マメツ不明			O. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐色 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄褐色	・外面にスス付着
115-272 134-272	第1トレンチ 8-9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・a	C : (17.4)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. ケズリA		10 Y R 4/1 褐灰	
115-273 134-273	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・a	C : (18.2)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			O. 10 Y R 6/3 にぶい黄褐色 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐色	
115-274 134-274	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・a	C : (18.0)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			10 Y R 4/1 褐灰	
115-275 134-275	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・a	C : (18.4)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			O. 10 Y R 6/3 にぶい黄褐色 i. 10 Y R 7/3 にぶい黄褐色	

表 77 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (26)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
115—276 134—276	第1トレンチ 13—15杭間 暗茶褐色土 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅲ—B—・b	C : (102)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. 押捺A→スリナデヨコICa			10 Y R 3/1 黒褐	
115—277 134—277	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅲ—B—・b	C : (100)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 25 Y 5/1 黄灰 i. 25 Y 5/2 暗灰黄	・外面にスス付着
115—278 134—278	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C : (114)	O. スリナデヨコICa i. マメツ不明			O. 10 Y R 5/3 におい黄褐 i. 10 Y R 6/4 におい黄橙	
115—279 134—279	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C : (116)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10 Y R 6/2 灰黄褐 i. 10 Y R 6/3 におい黄橙	
115—280 134—280	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C : (118)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 6/3 におい黄橙	
115—281 134—281	第1トレンチ 13—15杭間 暗茶褐色土 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C : (122)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 5/3 におい黄褐	・外面にスス付着
115—282 134—282	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C : (126)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			25 Y 5/2 暗灰黄	・外面にスス付着
115—283 134—283	第1トレンチ 3—4杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C : (130)	O. タタキ→ スリナデヨコICa i. マメツ不明	30/CM		10 Y R 5/3 におい黄褐	
115—284 134—284	第1トレンチ 3—4杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C : (128)	O. スリナデヨコICa i. マメツ不明			7.5 Y R 6/4 におい橙	
115—285 134—285	第1トレンチ 13—15杭間 砂礫層内 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C : (131)	O. タタキ i. スリナデヨコIB	30/CM 多/cm		10 Y R 6/2 灰黄褐	
115—286 134—286	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C : (127)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 7.5 Y R 6/4 におい橙 i. 5 Y R 6/4 におい橙	

表 78 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (27)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
115—287 134—287	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(132)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 6/3 におい黄橙 i. 10 Y R 7/3 におい黄橙	・外面にスス付着
115—288 134—288	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(133)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 5/2 灰黄褐	・外面にスス付着
115—289 134—289	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(135)	O. スリナデヨコICa→タタキ i. スリナデヨコICa	30/CM			7.5 Y R 5/4 におい褐	
115—290 134—290	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(137)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 5/3 におい黄褐 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	・外面にスス付着
115—291 134—291	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(138)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. 押捺A→スリナデヨコICa				O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 7/2 におい黄橙	・外面にスス付着
116—292 134—292	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(142)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 6/3 におい黄橙 i. 2.5 Y 6/3 におい黄	・外面にスス付着
116—293 134—293	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(142)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 6/3 におい黄橙 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐	
116—294 134—294	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(146)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. マメツ不明				O. 7.5 Y 2/1 黒 i. 10 Y R 5/3 におい黄褐	
116—295 135—295	第1トレンチ 13—15杭間 砂礫層内 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(145)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. マメツ不明				10 Y R 6/2 灰黄褐	
116—296 135—296	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(146)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 7.5 Y R 6/4 におい橙 i. 10 Y R 6/4 におい黄橙 ～ 2.5 Y 5/1 黄灰	
116—297 135—297	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(146)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 4/1 褐灰	

表 79 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (28)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
116—298 135—298	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(148)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
116—299 135—299	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(150)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 4/1 褐灰	
116—300 135—300	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(149)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. マメツ不明			10 Y R 6/2 灰黄褐	
116—301 135—301	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(154)	O. スリナデヨコICa i. マメツ不明			O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/1 褐灰	
116—302 135—302	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(152)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 5/3 にぶい黄褐	・外面にスス付着
116—303 135—303	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(154)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 i. 10 Y R 4/1 褐灰	
116—304 135—304	第1トレンチ 11—13杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(154)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			7.5 Y R 6/4 にぶい橙	
116—305 135—305	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(154)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			2.5 Y 6/1 黄灰	
116—306 135—306	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(157)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			10 Y R 5/3 にぶい黄褐	
116—307 135—307	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(158)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 10 Y R 5/2 灰黄褐	
116—308 135—308	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(156)	O. 押捺A→左上がりタタキ→ スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	O. マメツ不明 i. 押捺A→スリナデヨコIAb		O. 7.5 Y R 4/2 灰褐 i. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐	・外面にスス付着



表 80 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (29)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
116—309 135—309	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(15.9)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa→ 左上がりタタキ	O. 右上がりタタキ i. スリナデヨコIAa	40/CM 10/cm		O. 2.5 Y 4/1 黄灰 i. 2.5 Y 3/1 黒褐	
116—310 135—310	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(15.8)	O. スリナデヨコICa i. マメツ不明				10 Y R 5/3 におい黄褐	
116—311 135—311	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(16.0)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				2.5 Y 3/1 黒褐	
116—312 135—312	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(16.8)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. 押捺A→スリナデヨコICa				10 Y R 7/3 におい黄橙	
116—313 135—313	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(16.8)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 7/3 におい黄橙	
116—314 135—314	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(17.4)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐～ 5 Y 2/1 黒	
116—315 135—315	第1トレンチ 3—4杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(17.2)	O. 押捺A i. 押捺A→スリナデヨコIB 多/cm				O. 5 Y R 7/4 におい橙 i. 7.5 Y R 6/3 におい褐	
116—316 135—316	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(17.7)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 6/4 におい黄橙	・外面にスス付着
116—317 135—317	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(17.4)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAa→ スリナデヨコICa		5/cm		10 Y R 4/1 褐灰	・外面にスス付着
116—318 135—318	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(18.0)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 6/3 におい黄橙	
116—319 135—319	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(19.1)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				10 Y R 6/3 におい黄橙	

表 81 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (30)

図番号 図版番号	地 区 位 層	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
1116—320 135—320	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C：(190)	O. 左上がりタタキ→ スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAb	30/CM			O. 7.5 Y R 7/4 におい橙 i. 7.5 Y R 6/4 におい橙	
1116—321 135—321	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	甕 SorY	I—C—・d	C：(125)	O. マメツ不明 i. マメツ不明				10 Y R 4/2 灰黄褐	
1116—322 135—322	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	甕	讃岐形甕	C：(148)	O. スリナデIB i. スリナデIB	多 多/cm	O. (頸)スリナデタテIAa→ スリナデヨコICa (体)スリナデタテICa i. (頸)スリナデヨコICa (体)押捺A→ スリナデタテIAb	7/cm 7/cm	2.5 Y 6/2 灰黄	・讃岐系
1116—323 135—323	第3トレンチN区 南～中央部 墳丘盛土内上層	甕	吉備形甕	C：(194)	O. (口縁)スリナデヨコICa (口頸)スリナデIAa→ スリナデICa i. スリナデヨコICa	8/cm	O. スリナデタテIAa i. ケズリア	8/cm	O. 10 Y R 7/3 におい黄橙 ～10 Y R 4/1 褐灰 i. 7.5 Y R 7/4 におい橙	・吉備系 ・外面にスス附着
1117—324 135—324	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2—C—a	B：(34)				O. 押捺A i. ケズリB	10 Y R 6/2 灰黄褐	
1117—325 135—325	第1トレンチ 3—4杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	1—・—・	B：(40)				O. 押捺A i. マメツ不明	O. 10 Y R 5/3 におい黄褐 i. 10 Y R 3/1 黒褐	
1117—326 135—326	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2—A—a	B：48				O. 押捺A i. マメツ不明	O. 2.5 Y 5/1 黄灰 i. 2.5 Y 6/2 灰黄	
1117—327 135—327	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2—C—a	B：(33)				O. 押捺A i. ケズリB	10 Y R 6/3 におい黄橙	
1117—328 135—328	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2—A—・	B：42				O. 押捺A i. スリナデIAb	O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 6/3 におい黄橙	
1117—329 135—329	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2—・—・	B：(54)				O. 押捺A→右上がりタタキ i. ケズリB	O. 10 Y R 6/3 におい黄橙 i. 2.5 Y 4/1 黄灰	
1117—330 135—330	第1トレンチ 3—4杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	3—C—・	B：31				O. 右上がりタタキ i. スリナデIAb	O. 7.5 Y R 6/4 におい橙 i. 7.5 Y R 6/6 橙	

表 82 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (31)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
117-331 135-331	第1トレンチ 13-15杭間 暗茶褐色土 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-A-a	B : (5.6)			O. 右上がりタタキ i. マメツ不明	30/CM	O. 10 Y R 5/2 灰黄褐～ 10 Y R 2/1 黒 i. 10 Y R 7/3 にぶい黄橙
117-332 135-332	第1トレンチ 4-5杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-A-・	B : 3.8			O. 右上がりタタキ i. スリナデI A b	30/CM	O. 10 Y R 6/4 にぶい黄橙 ～7.5 Y 2/1 黒 i. 10 Y R 6/4 にぶい黄橙
117-333 135-333	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-C-b	B : (4.2)			O. タタキ i. スリナデヨコI A b	30/CM	O. 10 Y R 5/2 灰黄褐～ 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 i. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐
117-334 135-334	第1トレンチ 9-10杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-B-・	B : 3.4			O. 右上がりタタキ i. スリナデI A b	40/CM	O. 10 Y R 5/2 灰黄褐～ 10 Y R 4/1 褐灰 i. 10 Y R 3/1 黒褐
117-335 135-335	第1トレンチ 9-10杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	1-C-・	B : 4.0			O. 右上がりタタキ i. スリナデI A b	30/CM	O. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 i. 10 Y R 3/1 黒褐
117-336 135-336	第1トレンチ13 -15杭間 砂礫層内 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-・-・	B : (3.6)			O. 右上がりタタキ i. マメツ不明	40/CM	O. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 i. 10 Y R 4/2 灰黄褐
117-337 135-337	第1トレンチ 9-10杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	3-C-a	B : 4.1			O. タタキ i. スリナデI A b	40/CM	O. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 i. 10 Y R 3/1 黒褐
117-338 135-338	第1トレンチ 9-10杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-C-a	B : (4.2)			O. タタキ i. マメツ不明	40/CM	O. 2.5 Y 5/2 暗灰黄 i. 2.5 Y 5/1 黄灰
117-339 135-339	第1トレンチ 11-13杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-C-a	B : (2.8)			O. タタキ i. ケズリB	40/CM	7.5 Y R 6/4 にぶい橙
117-340 135-340	第1トレンチ 9-10杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-C-・	B : 3.0			O. 右上がりタタキ i. スリナデI A a	30/CM 8/cm	2.5 Y 6/2 灰黄
117-341 135-341	第1トレンチ 8-9杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-A-・	B : 3.9			O. 右上がりタタキ i. ケズリB	30/CM	O. 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 3/2 黒褐

表 83 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (32)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
117-342 135-342	第1トレンチ 8-9杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-A-・	B : 5.0			O. タタキ i. ケズリB	30/CM	2.5 Y 5/1 黄灰～ 5 Y 3/1 オリーブ黒	
117-343 135-343	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-A-a	B : (3.7)			O. 右上がりタタキ i. スリナデI A b	30/CM	O. 10 Y R 6/2 灰黄褐～ 7.5 Y R 6/4 におい橙 i. 5 Y 3/1 オリーブ黒	
117-344 135-344	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-C-a	B : (4.4)			O. 右上がりタタキ i. スリナデヨコI C a	30/CM	O. 2.5 Y 5/2 暗灰黄 i. 2.5 Y 4/1 黄灰	
117-345 135-345	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-A-・	B : (3.6)			O. 右上がりタタキ i. スリナデI A b	30/CM	2.5 Y 5/2 暗灰黄	
117-346 135-346	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	3-C-・	B : 4.3			O. 押捺A→タタキ i. ケズリB	20/CM	2.5 Y 4/1 黄灰	
117-347 135-347	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-C-a	B : (5.0)			O. 右上がりタタキ i. スリナデI A b	40/CM	O. 2.5 Y R 5/2 暗灰黄 i. 2.5 Y 3/1 黒褐	
117-348 135-348	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-A-・	B : 4.1			O. 押捺A→右上がりタタキ i. マメツ不明	30/CM	O. 10 Y R 3/1 黒褐～ 10 Y R 6/3 におい黄橙 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	・外面に二次焼成痕 有
117-349 135-349	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-C-b	B : (3.6)			O. 右上がりタタキ i. ケズリB	30/CM	O. 5 Y R 5/3 におい赤褐 i. 5 Y 2/1 黒	
117-350 135-350	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	1-C-・	B : 4.5			O. 押捺A→タタキ i. スリナデI A b	20/CM	O. 10 Y R 4/1 褐灰 i. 10 Y R 5/3 におい黄褐	
117-351 135-351	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-C-・	B : (4.4)			O. マメツ不明 i. ケズリB		2.5 Y 5/2 暗灰黄	
117-352 135-352	第1トレンチ 13-15杭間 暗茶褐色土 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2-C-・	B : 4.6			O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. 10 Y R 6/3 におい黄橙 i. 10 Y R 4/1 褐灰	

表 84 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (33)

図番号 図版番号	地 区 位 層	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
117-353 136-353	第 1 トレンチ 7-8 杭間 墳丘盛土内上層	底部 (甕 Y)	2-C-a	B : (4.2)			O. スリナデナナメ I A a i. ケズリ B	8 /cm	O. 10 Y R 6/2 灰黄褐～ 2.5 Y 5/1 黄灰 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐	
117-354 136-354	第 1 トレンチ 6-7 杭間 墳丘盛土内上層	鉢	Ⅲ-E <sub>1</sub> -a	C : (108)		O. タタキ i. スリナデ I C a	40 /CM		7.5 Y R 3/1 黒褐	
117-355 136-355	第 1 トレンチ 5-6 杭間 墳丘盛土内上層	鉢	Ⅲ-F <sub>1</sub> -b	C : (106)		O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a			O. 10 Y R 7/3 にぶい黄橙 i. 7.5 Y R 7/4 にぶい橙	
117-356 136-356	第 1 トレンチ 8-9 杭間 墳丘盛土内上層	鉢	Ⅲ-A <sub>1</sub> -b	C : (122)		O. 押捺 A → スリナデ I C a i. 押捺 A → スリナデ I C a			O. 10 Y R 6/2 灰黄褐～ 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 2.5 Y 6/1 黄灰～ 2.5 Y 5/1 黄灰	・ 片口鉢
117-357 136-357	第 1 トレンチ 9-10 杭間 墳丘盛土内上層	脚台 (鉢)	・ -G-・	C : (97)		O. ミガキ A タテ i. マメツ 不明			10 Y R 7/3 にぶい黄橙	
117-358 136-358	第 1 トレンチ 9-11 杭間 墳丘盛土内上層	底部 (鉢)	2-A-・	B : 4.2			O. マメツ 不明 i. スリナデタテ I A b		O. 7.5 Y R 6/4 にぶい橙～ 10 Y R 5/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	
117-359 136-359	第 1 トレンチ 5-6 杭間 墳丘盛土内上層	脚台 (鉢)	1-B-c	—			O. 押捺 A → i. 押捺 A → スリナデヨコ I A b		O. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	
117-360 136-360	第 1 トレンチ 7-8 杭間 墳丘盛土内上層	底部 (鉢)	1-B-b	B : 4.0		O. スリナデタテ I A b i. スリナデヨコ I A a	8 /cm		10 Y R 5/3 にぶい黄褐	
117-361 136-361	第 1 トレンチ 8-9 杭間 墳丘盛土内上層	有孔 底部	1-B-c	B : (4.0)			O. 押捺 A → i. 押捺 A → スリナデタテ I A a	12 /cm	10 Y R 6/2 灰黄褐	・ 焼成前穿孔
117-362 136-362	第 1 トレンチ 6-7 杭間 墳丘盛土内上層	有孔 底部	3-C-・	B : 3.4			O. マメツ 不明 i. スリナデタテ I A a		10 Y R 5/3 にぶい黄褐	・ 焼成前穿孔
117-363 136-363	第 1 トレンチ 8-9 杭間 墳丘盛土内上層	高坏	E-・ -・ -・ -・	C : (8.8)		O. ミガキ A タテ i. ミガキ A タテ			7.5 Y R 6/4 にぶい橙	

表 85 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (34)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
117-364 136-364	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内上層	高坏	E <sub>1</sub> —・—・—・—・	C : (149)	O. 押除A→ミガキAタテ i. ミガキAタテ			10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
117-365 136-365	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B—・—・—・—・	C : (140)	O. スリナデヨコICa→ ミガキAタテ i. スリナデヨコICa→ ミガキAタテ			O. 10 Y R 7/3 にぶい黄橙 i. 2.5 Y 6/1 黄灰	
117-366 136-366	第1トレンチ 9-10杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B—・—・—・—・	C : (146)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			7.5 Y R 6/6 橙	
117-367 136-367	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>2</sub> —・—・—・—・	C : (146)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y 2/1 黒	
117-368 136-368	第1トレンチ 7-8杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>4</sub> —・—・—・—・	C : (150)	O. スリナデヨコICa→ スリナデナナMI Aa i. スリナデヨコICa→ スリナデナナMI Aa	5 /cm 5 /cm		10 Y R 6/2 灰黄褐	
117-369 136-369	第1トレンチ 9-11杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>3</sub> —・—・—・—・	C : (152)	O. ミガキAタテ i. ミガキAタテ			10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
117-370 136-370	第1トレンチ 5-6杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>3</sub> —・—・—・—・	C : (153)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			7.5 Y R 6/4 にぶい橙	
117-371 136-371	第1トレンチ 13-15杭間 暗茶褐色土 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>2</sub> —・—・—・—・	C : (153)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			O. 7.5 Y R 6/6 橙～ 2.5 Y R 5/6 明赤褐 i. 2.5 Y R 6/6 橙	
118-372 136-372	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土上層	高坏	B <sub>2</sub> —・—・—・—・	C : (160)	O. スリナデヨコICa→ i. ミガキAタテ			10 Y R 5/3 にぶい黄褐	
118-373 136-373	第1トレンチ 6-7杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>3</sub> —・—・—・—・	C : (160)	O. マメツ不明 (スリナデIC a→ミガキA?) i. マメツ不明 (スリナデIC a→ミガキA?)			10 Y R 5/3 にぶい黄褐	
118-374 136-374	第1トレンチ 13-15杭間 暗茶褐色土 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>3</sub> —・—・—・—・	C : (163)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			O. 2.5 Y 4/1 黄灰 i. 5 Y R 6/4 にぶい橙	

表 86 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (35)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
118—375 136—375	第1トレンチ 7—9杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>4</sub> —・—・—・—	—		O. ミガキAタテ i. 押除A→スリナデヨコICa →ミガキAタテ			10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
118—376 136—376	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>3</sub> —・—・—・—	—	O. ミガキAタテ i. ミガキAタテ				10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
118—377 136—377	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>3</sub> —・—・—・—	—		O. ミガキAタテ i. ミガキAタテ			10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
118—378 136—378	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>4</sub> —・—・—・—	—	O. マメツ不明 i. マメツ不明				O. 5 Y R 6/4 にぶい橙 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
118—379 136—379	第1トレンチ 9—10杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>4</sub> —・—・—・—	—	O. ミガキAタテ→ スリナデヨコICa i. ミガキAヨコ				O. 7.5 Y R 7/4 にぶい橙～ 10 Y R 7/4 にぶい黄橙 i. 7.5 Y R 7/4 にぶい橙	
118—380 136—380	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>4</sub> —・—・—・—	—	O. マメツ不明 i. マメツ不明				10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
118—381 136—381	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B—・—・—・—	—	O. スリナデタテIAa i. ミガキA	6/cm			7.5 Y R 6/4 にぶい橙	
118—382 136—382	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B—・—・—・—	—	O. マメツ不明 i. マメツ不明				O. 5 Y R 6/6 橙 i. 7.5 Y R 7/4 にぶい橙	
118—383 136—383	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>3</sub> —・—・—・—	—	O. 押除A→ミガキAタテ i. ミガキAタテ				O. 10 Y R 4/1 褐灰 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	
118—384 129—384	第1トレンチ 8—9杭間 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	1—B—b	—		O. ミガキAタテ i. マメツ不明		O. ミガキAタテ i. マメツ不明	O. 10 Y R 6/2 灰黄褐～ 10 Y R 6/1 褐灰 i. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
118—385 136—385	第1トレンチ 9—10杭間 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	1—A—c	—		O. ミガキAタテ i. ミガキA		O. ミガキAタテ i. マメツ不明	5 Y R 7/6 橙 ・ 3 方スカシ	



表 87 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (36)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
118—386 129—386	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	4—B—・	—		O. スリナデタテ I A a i. ミガキAタテ	5/cm	O. ミガキAタテ i. マメツ不明	7.5 Y R 6/4 にぶい橙	・ 3 方スカシ
118—387 129—387	第1トレンチ 7—8杭間 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	1—B—c	—				O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐	
118—388 129—388	第1トレンチ 9—10杭間 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	3—A—・	—				O. ミガキAタテ i. スリナデヨコ I C a	O. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐	・ 3 方スカシ
118—389 136—389	第1トレンチ 13—15杭間 暗茶褐色土 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	・ —A—a	—				O. マメツ不明 i. マメツ不明	10 Y R 6/4 にぶい黄橙	
118—390 136—390	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	1—A—c	—		O. ミガキA i. ミガキA		O. ミガキA i. 押除A	10 Y R 5/3 にぶい黄褐	
118—391 129—391	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	4—B—c	—		O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. スリナデタテ I A a i. マメツ不明	O. 7.5 Y R 6/6 橙 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	
118—392 129—392	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	1—B—・	—		O. (顔部)スリナデタテ I A a i. マメツ不明	8/cm	O. 押除A→ミガキAタテ i. スリナデ I C a	7.5 Y R 6/4 にぶい橙	
118—393 129—393	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	1—A—・	—		O. マメツ不明 i. ケズリB		O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. 7.5 Y R 6/4 にぶい橙 i. (体)7.5 Y R 6/4 にぶい橙 (脚)5 Y R 7/4 にぶい橙	
118—394 136—394	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	4—・—・	B : (13.1)				O. マメツ不明 i. ミガキAタテ	7.5 Y R 7/6 橙	
118—395 136—395	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	小形 器台	II—C <sub>2</sub> —a	C : (9.3)	O. ミガキA i. ミガキAタテ				7.5 Y R 5/4 にぶい褐	
118—396 136—396	第1トレンチ 6—7杭間 墳丘盛土内上層	小形 器台	・ —C <sub>2</sub> —a	C : (9.6)	O. ミガキA i. ミガキA				7.5 Y R 6/4 にぶい橙	

表 88 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (37)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
118—397 136—397	第1トレンチ 5—6杭間 墳丘盛土内上層	脚台(小 形器台)	Ⅱ—・—・	—		O. マメツ不明 i. ケズリB		O. 押捺A i. 押捺A	10 Y R 6/3 におい黄橙	・外面頸部に爪痕有
118—398 136—398	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	壺	㊦—D <sub>2</sub> —c	C : (202)		O. (口唇)竹管文 (口頸)マメツ不明 i. 液状文			O. 10 Y R 7/2 におい黄橙 i. 10 Y R 7/2 におい黄橙 ～5 Y R 6/6 橙	
118—399 136—399	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	壺	C—・—a	C : (86)	多/cm 多/cm 多/cm	O. スリナデヨコIB→ スリナデタテIB i. スリナデヨコIB→ スリナデタテIB			5 Y R 6/6 橙	
118—400 136—400	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	壺	C—・—a	C : (108)		O. マメツ不明 i. マメツ不明			10 Y R 6/3 におい黄橙	
118—401 136—401	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	壺	H—B—b	C : (143)		O. スリナデヨコICa i. マメツ不明			O. 10 Y R 6/2 灰黄褐 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	
119—402 136—402	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅲ—B—・a	C : (104)		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			O. 75 Y 2/1 黒 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐	
119—403 136—403	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ—B—・a	C : (116)		O. マメツ不明 i. マメツ不明			O. 25 Y 6/2 灰黄～ 25 Y 4/1 黄灰 i. 25 Y 6/2 灰黄	
119—404 136—404	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ—B—・a	C : (118)		O. スリナデヨコICa i. 押捺A→スリナデヨコICa			75 Y R 6/3 におい褐	・外面に二次焼成痕 有
119—405 136—405	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・a	C : (148)	多/cm 多/cm	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコIB			10 Y R 6/3 におい黄橙	・外面にスス付着
119—406 136—406	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	甕 Y	Ⅱ—B—・b	C : (130)	6/cm 多/cm	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコIB i. スリナデヨコICa			O. 75 Y R 7/3 におい橙 i. 10 Y R 4/1 褐灰	
119—407 136—407	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・b	C : (154)		O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa			10 Y R 6/2 灰黄褐	

表 89 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (38)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色	調	備 考
					口	縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
119-408 136-408	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・b	C : (154)	O. 押捺A→スリナデヨコICa i. ママツ不明				10 Y R 5/2 灰黄褐		
119-409 136-409	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・b	C : (158)	O. 押捺A→右上がりタタキ→ スリナデヨコICa i. 押捺A→スリナデヨコICa	30/CM			O. 10 Y R 6/2 灰黄褐 i. 7.5 Y R 7/4 にぶい橙		
119-410 136-410	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	甕 Y	I-B-・b	C : (164)	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa				O. 10 Y R 5/1 褐灰 i. 10 Y R 6/1 褐灰		
119-411 136-411	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	底部 (甕 Y)	3-A-a	B : (36)				O. タタキ i. ママツ不明	O. 7.5 Y R 6/4 にぶい橙 i. 2.5 Y 3/1 黒褐		
119-412 136-412	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	底部 (甕 Y)	3-C-a	B : (47)				O. タタキ i. 押捺 A	O. 10 Y R 6/2 灰黄褐 i. 2.5 Y 6/1 黄灰		
119-413 136-413	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	底部 (甕 Y)	1-A-c	B : (56)			O. 右上がりタタキ i. ママツ不明	O. 押捺A→スリナデヨコIB i. ママツ不明	O. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 i. 10 Y R 4/1 褐灰		
119-414 136-414	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	底部 (甕 Y)	1-A-a	B : (48)				O. スリナデタタキIAb i. ケズリB	10 Y R 7/2 にぶい黄橙		
119-415 136-415	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	底部 (甕 Y)	2-A-a	B : 4.1				O. スリナデタタキIAb i. スリナデIAb	10 Y R 6/3 にぶい黄橙		
119-416 136-416	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	鉢	Ⅲ-A-b	C : (11.0)	O. 押捺A i. 押捺A				10 Y R 6/3 にぶい黄橙		
119-417 137-417	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	底部 (鉢)	1-B-a	B : (3.0)			O. スリナデタタキIAa i. ケズリB	8/cm	O. 押捺A i. 押捺A	5 Y R 6/6 橙	
119-418 137-418	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	小形 器台	・-C <sub>3</sub> -b	C : (11.1)	O. ママツ不明 i. スリナデヨコICa				5 Y R 6/6 橙		

表 90 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (39)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法			色	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)		
119-419 137-419	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>2</sub> —・—・—・	C : (154)	O. スリナデヨコICa I. スリナデヨコICa→ ミガキAタテ			10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
119-420 137-420	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	4—・—・	B : (132)			O. ミガキAタテ i. マメツ不明	O. 5 Y R 6/4 にぶい橙 i. 2.5 Y R 5/1 黄灰	
119-421 137-421	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	4—・—・	B : (141)			O. マメツ不明 i. スリナデヨコICa→ ミガキA	10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
119-422 137-422	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏?)	1—・—・	B : (102)			O. スリナデタテIAa (端)スリナデヨコICa i. 押捺A→スリナデナメIAa (端)スリナデヨコICa→ スリナデナメIAa	10 Y R 6/2 灰黄褐 6/cm 6/cm 6/cm	
119-423 129-423	第2トレンチN区 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	3—B—・	—		O. ミガキA i. ミガキA	O. ミガキA i. マメツ不明	O. 7.5 Y R 5/4 にぶい褐 i. (坏)7.5 Y R 5/4 にぶい褐 (脚)7.5 Y R 7/4 にぶい橙	・ 3方スカシ
119-424 137-424	第4トレンチN区 墳丘盛土内上層	甕 Y	II—B—・a	C : (124)	O. マメツ不明 i. 押捺A			O. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 i. 10 Y R 6/2 灰黄褐	・ 外面にスス付着
119-425 137-425	第4トレンチN区 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・a	C : (132)	O. マメツ不明 i. マメツ不明			10 Y R 6/3 にぶい黄橙	
119-426 137-426	第4トレンチN区 墳丘盛土内上層	甕 Y	I—B—・a	C : (178)	O. 押捺A i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. 押捺A		O. 10 Y R 5/3 にぶい黄褐 i. (口唇)7.5 Y 2/1 黒 (口頸) 10 Y R 5/3 にぶい黄褐	
119-427 137-427	第4トレンチN区 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2—A—・	B : (52)			O. 押捺A→タタキ i. スリナデIAb	10 Y R 5/2 灰黄褐 40/CM	
119-428 137-428	第4トレンチN区 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	2—A—・	B : (43)			O. 右上がりタタキ i. マメツ不明	O. 7.5 Y R 6/4 にぶい橙 i. 10 Y R 5/2 灰黄褐 30/CM	
119-429 137-429	第4トレンチN区 墳丘盛土内上層	底部 (甕Y)	3—A—a	B : (32)			O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. 5 Y R 6/4 にぶい橙 i. 10 Y R 4/1 褐灰	

表 91 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物観察表 (40)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
119—430 137—430	第4トレンチN区 墳丘盛土内上層	高坏	B <sub>4</sub> —・—・—・—・	—	O. マメツ不明 i. ミガキAタテ	O. マメツ不明 i. マメツ不明			10 Y R 7/3 にぶい黄橙	
119—431 129—431	第4トレンチN区 墳丘盛土内上層	脚台 (高坏)	4—B—・	—			O. 押捺A→ミガキAタテ i. 押捺A→スリナデIAa	8/cm	10 Y R 6/3 にぶい黄橙	・3方スカシ
119—432 137—432	第4トレンチS区 SX—1001	土師器 皿		C : (9.2)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ		O. 回転ナデ i. 未調整 (指頭圧痕)		10 Y R 7/4 にぶい黄橙	
119—433 137—433	第4トレンチS区 SX—1001	土師器 皿		C : (9.5)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ		O. 回転ナデ i. 未調整 (指頭圧痕)		7.5 Y R 7/6 橙	
119—434 129—434	第4トレンチS区 SX—1001	土師器 皿		C : 11.7	O. 回転ナデ i. 回転ナデ		O. 回転ナデ i. 未調整 (指頭圧痕)		O. 10 Y R 7/4 にぶい黄橙 ～10 Y R 7/6 明黄褐 i. 10 Y R 7/4 にぶい黄橙	
119—435 137—435	第4トレンチS区 SX—1001	土師器 鍋		C : (230)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ		O. 回転ナデ i. 未調整		7.5 Y R 6/4 にぶい橙	
119—436 137—436	第4トレンチS区 SX—1001	土師器 羽釜		C : (27.8) W : (33.2)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. ナデ (3羽)回転ナデ i. ナデ			O. 10 Y R 8/3 浅黄橙～ 10 Y R 6/2 灰黄褐 i. 10 Y R 8/4 浅黄橙	
120—437 137—437	第5トレンチ 前方部南 周濠埋土最上層～ 上層	土師器 碗	碗A I	C : (13.4)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. ヘラケズリ i. 回転ナデ			5 Y R 6/6 橙～ 10 Y R 7/3 にぶい黄橙	
120—438 137—438	第5トレンチ 前方部南 周濠埋土最上層～ 上層	土師器 碗	碗A I	C : (13.4)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. ヘラケズリ i. 回転ナデ			5 Y R 6/6 橙	
120—439 137—439	第5トレンチ 前方部南 周濠埋土最上層～ 上層	土師器 碗	碗A I	C : (13.7)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 未調整 (指頭圧痕) i. 回転ナデ			O. 10 Y R 7/4 にぶい黄橙 i. 5 Y R 6/6 橙	
120—440 137—440	第5トレンチ 前方部南 周濠埋土最上層～ 上層	土師器 碗	碗A I	C : (14.0)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. ヘラケズリ i. 回転ナデ			O. 5 Y R 6/6 橙 i. 5 Y R 7/6 橙	

表 92 纏向石塚古墳第 8 次調査出土遺物観察表 (41)

図番号 図版番号	地 区 層 位	器 種	形 式	法 量 (復元) cm	調 整 技 法				色 調	備 考
					口 縁 部	体 部	底 部 (脚部)			
120—441 137—441	第5トレンチ 前方部南 周濠埋土最上層～ 上層	土師器 皿	皿AⅡ	C：(162)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. ヘラケズリ i. 回転ナデ			O. 5 Y R 6/6 橙 i. 5 Y R 7/6 橙	
120—442 137—442	第5トレンチ 前方部南 周濠埋土最上層～ 上層	土師器 皿	皿AⅠ	C：(192)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. ヘラケズリ i. 回転ナデ			5 Y R 6/6 橙	
120—443 137—443	第5トレンチ 前方部南 周濠埋土最上層～ 上層	土師器 甕	甕A	C：(236)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 板ナデ			O. 10 Y R 6/3 にぶい黄橙 i. 10 Y R 7/3 にぶい黄橙 ～ 10 Y R 5/2 灰黄褐	
120—444 137—444	第5トレンチ 前方部南 周濠埋土最上層～ 上層	黒色 土器 埴 埴	A類	C：(215)	O. 回転ナデ i. ヘラミガキ	O. ヘラケズリ i. ヘラミガキ	O. ヘラケズリ i. ヘラミガキ→螺旋状暗文		O. 25 Y 6/2 灰黄～ 10 Y R 7/3 にぶい黄橙 i. 5 Y 2/1 黒	
120—445 137—445	第5トレンチ 前方部南 周濠埋土最上層～ 上層	須恵器 坏	坏A	C：(11.9)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ				25 Y 8/1 灰白	
120—446 137—446	第5トレンチ 前方部南 周濠埋土最上層～ 上層	須恵器 蓋	坏B蓋	C：(16.1)	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	O. 回転ナデ i. 回転ナデ	〈天井部〉 O. 未調整 i. 回転ナデ		N 6/0 灰	
120—447 137—447	第5トレンチ 前方部南 周濠埋土最上層～ 上層	須恵器 平瓶				O. 回転ナデ i. 回転ナデ			O. 5 Y 6/1 灰～N 4/0 灰 i. 5 Y 6/1 灰	

図番号 図版番号	地 区 層 位	種 類	全長 (残存)	幅 (残存)	厚さ (残存)	重 量	色 調	備 考
120—448 137—448	第 1 トレンチ 7—8 杭間 墳丘盛土内下層	摺石	95cm	6.6cm	20cm	191 g	2.5 Y 6/1 黄灰 ～ 2.5 Y 5/1 黄灰	・朱付着
120—449 137—449	第 1 トレンチ 墳丘盛土内上層	砥石	(139) cm	(92) cm	3.8cm	856 g	N 8/0 灰白～N 7/0 灰白	・研磨面 3 面

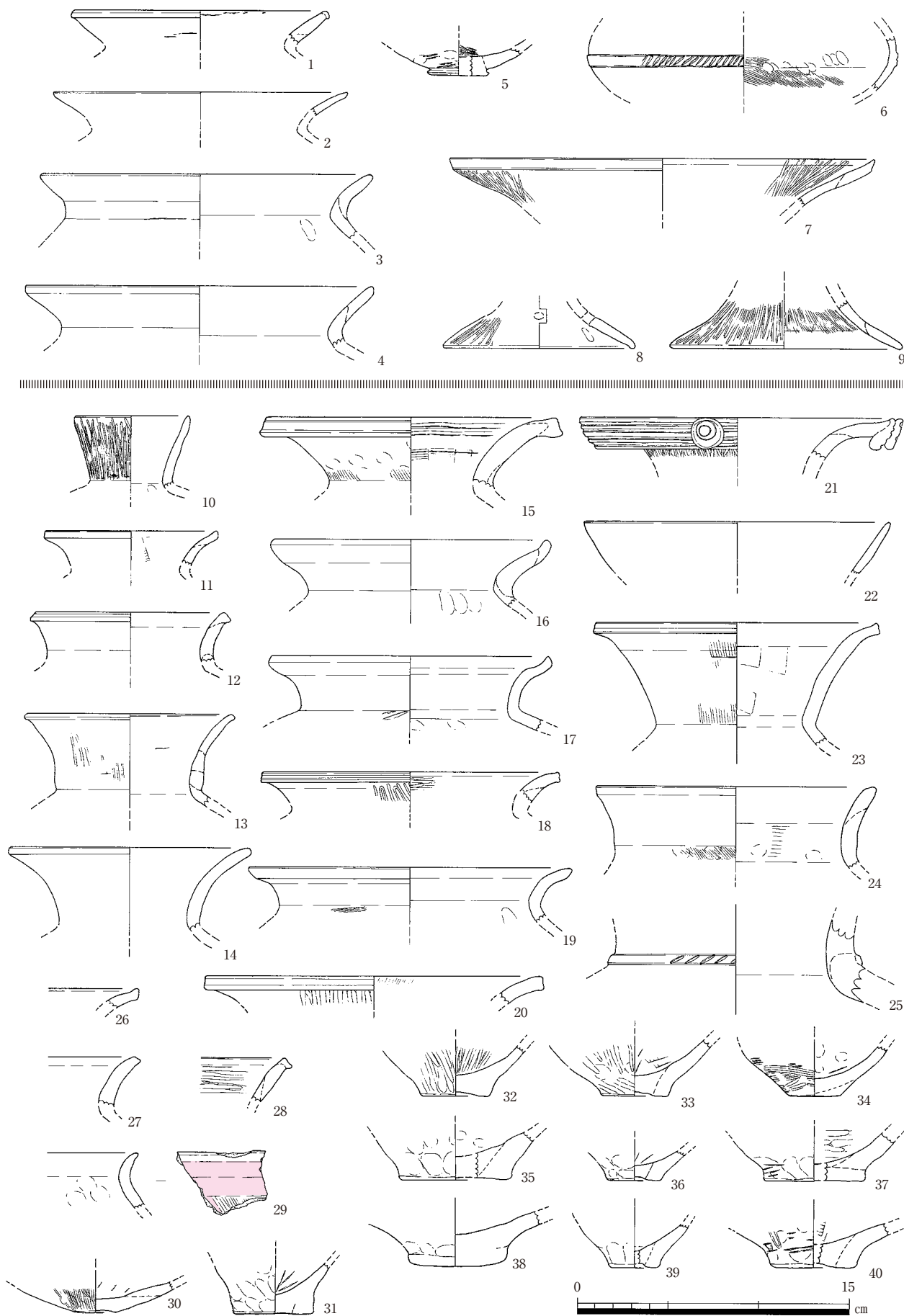


図109 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図1 (1/3)  
 第1トレンチ：1～9 墳丘下湿地 10～40 墳丘盛土内下層



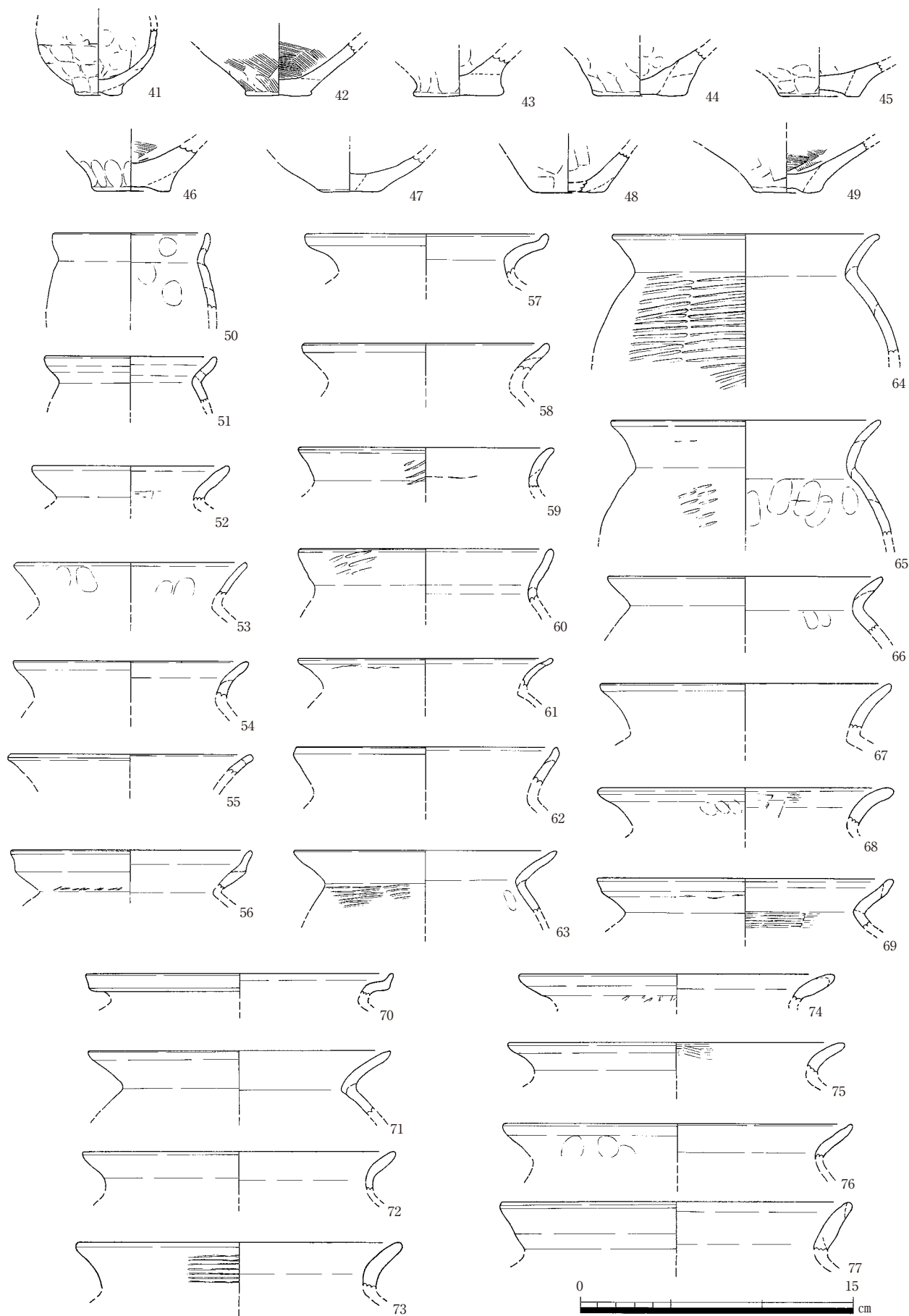


図110 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図2 (1/3)  
第1トレンチ: 41~77 墳丘盛土内下層

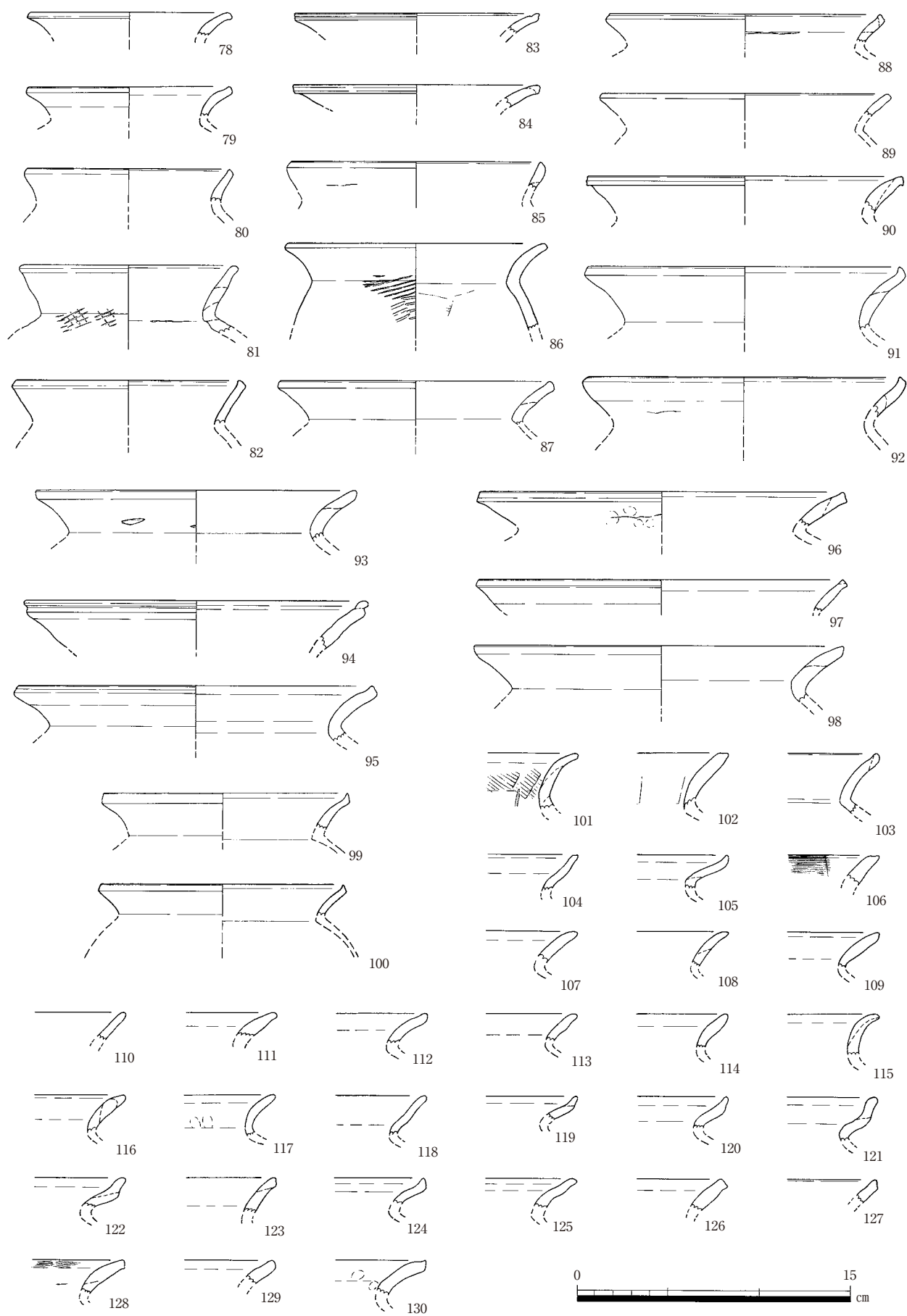


図111 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図3 (1 / 3)  
第1トレンチ：78～130 墳丘盛土内下層

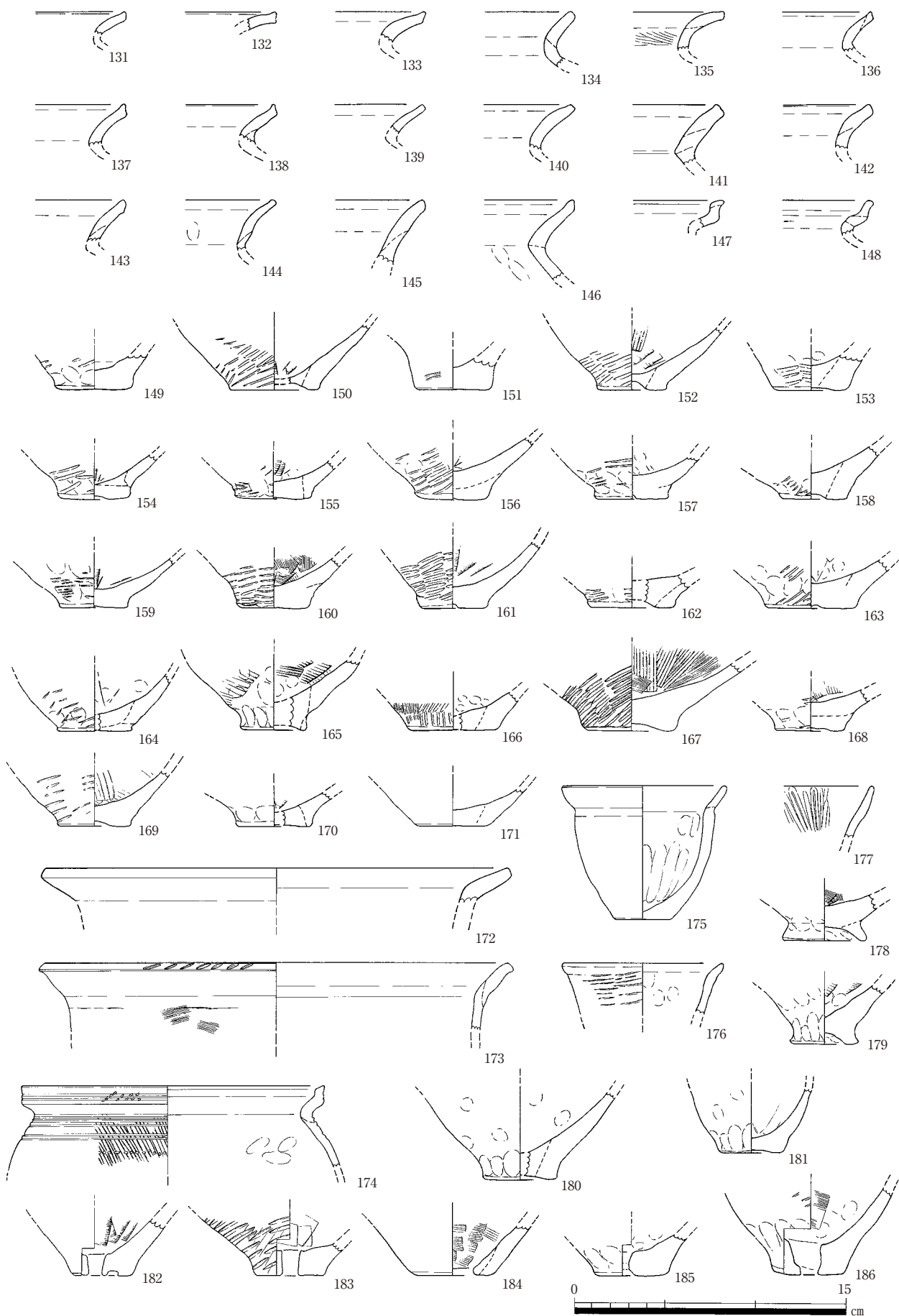


図112 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図4 (1 / 3)  
 第1トレンチ：131~186 墳丘盛土内下層  
 — 280 —

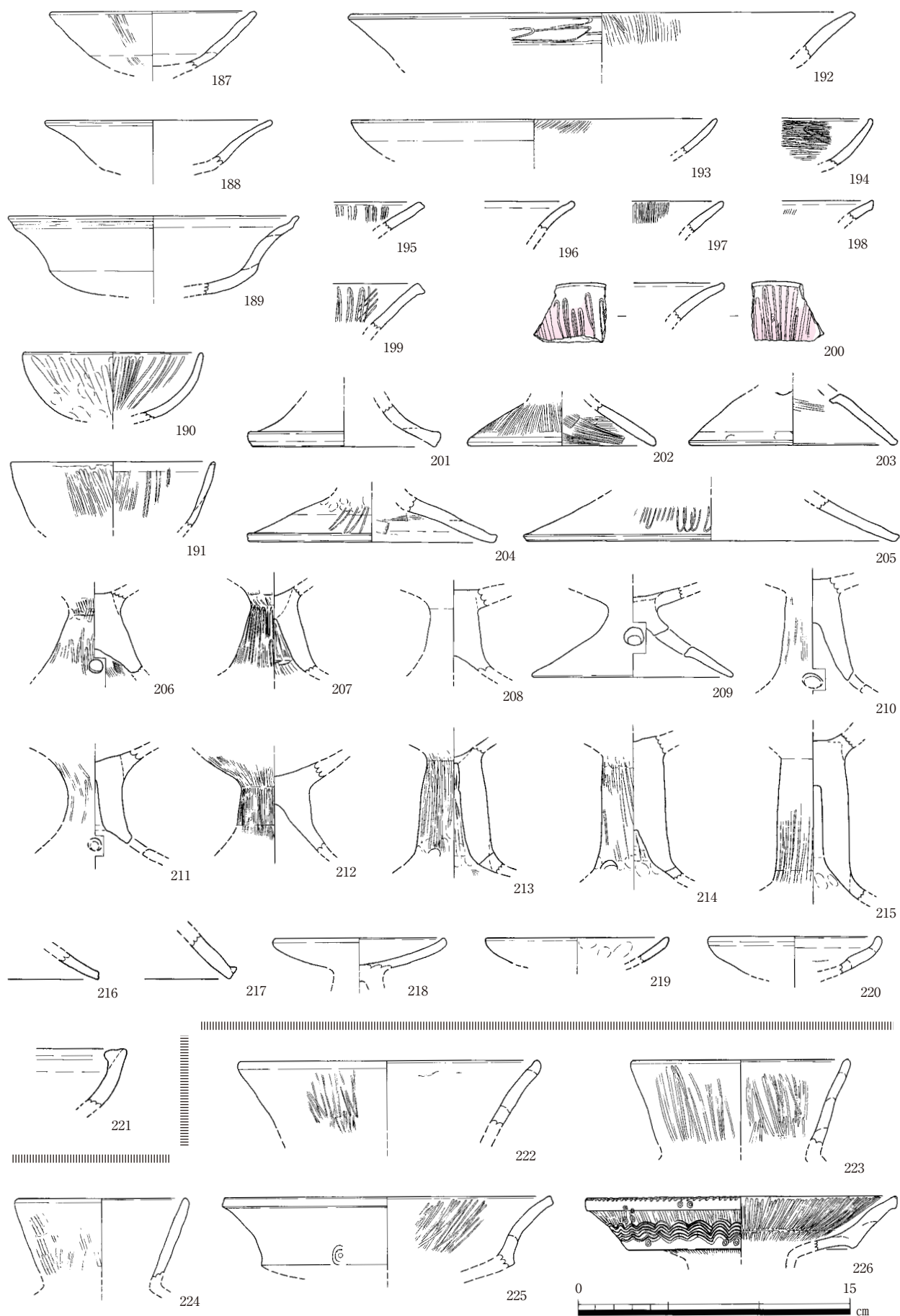


図113 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図5 (1 / 3)  
 第1トレンチ：187～221 墳丘盛土内下層 222～226 墳丘盛土内上層  
 — 281 —

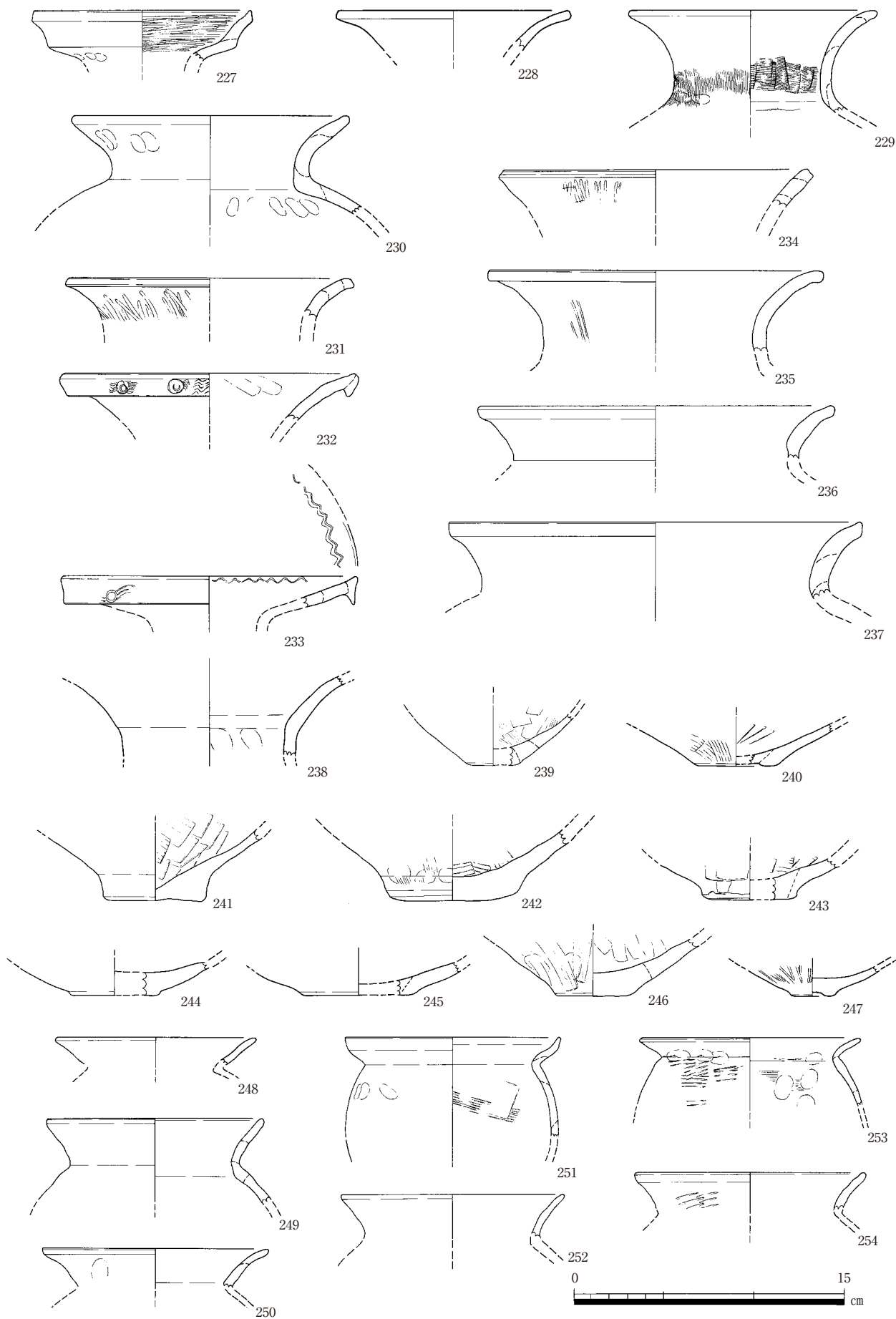


図114 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図6 (1 / 3)  
第1トレンチ：227～254 墳丘盛土内上層

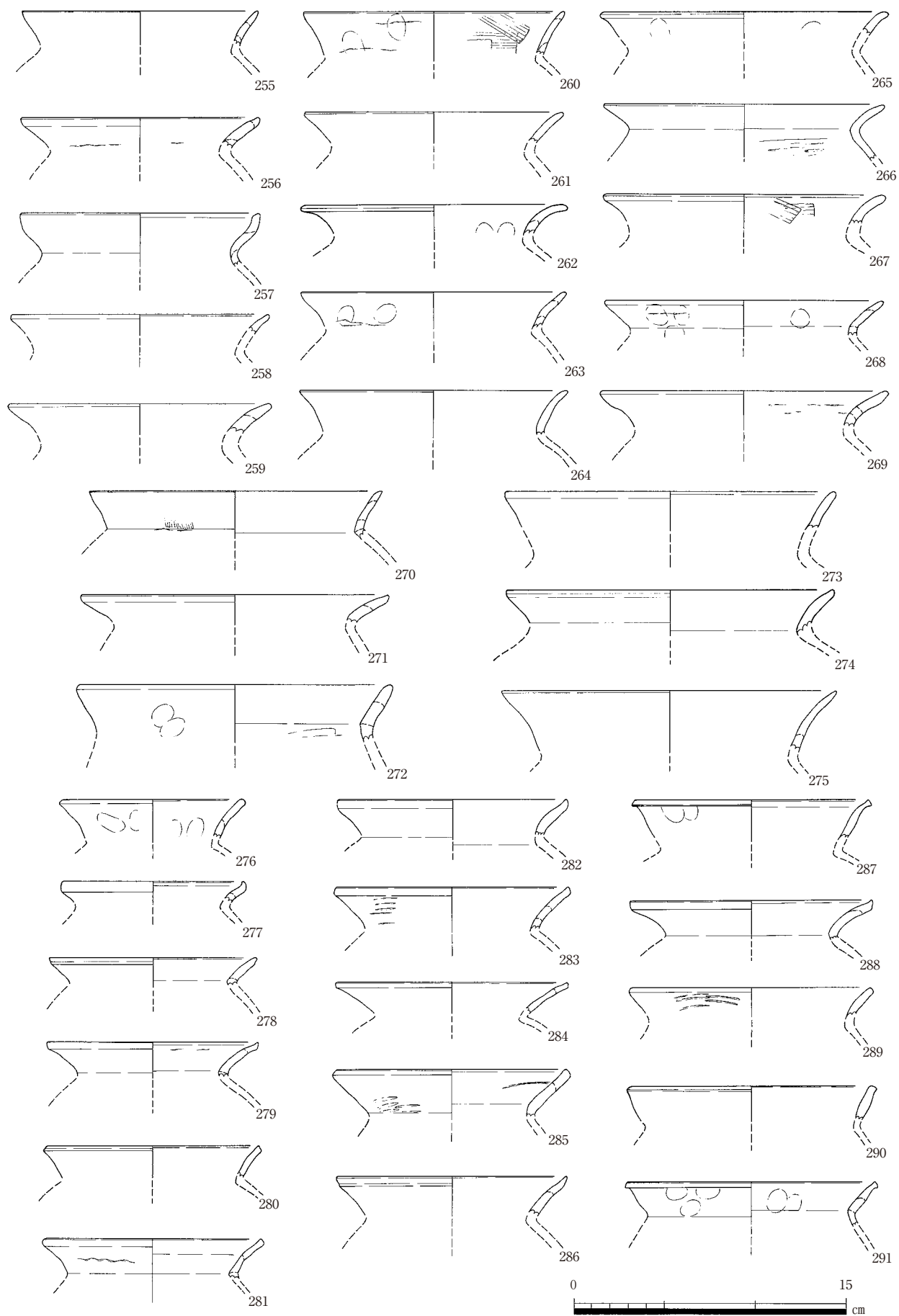


図115 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図7 (1 / 3)  
第1トレンチ：255～291 墳丘盛土内上層

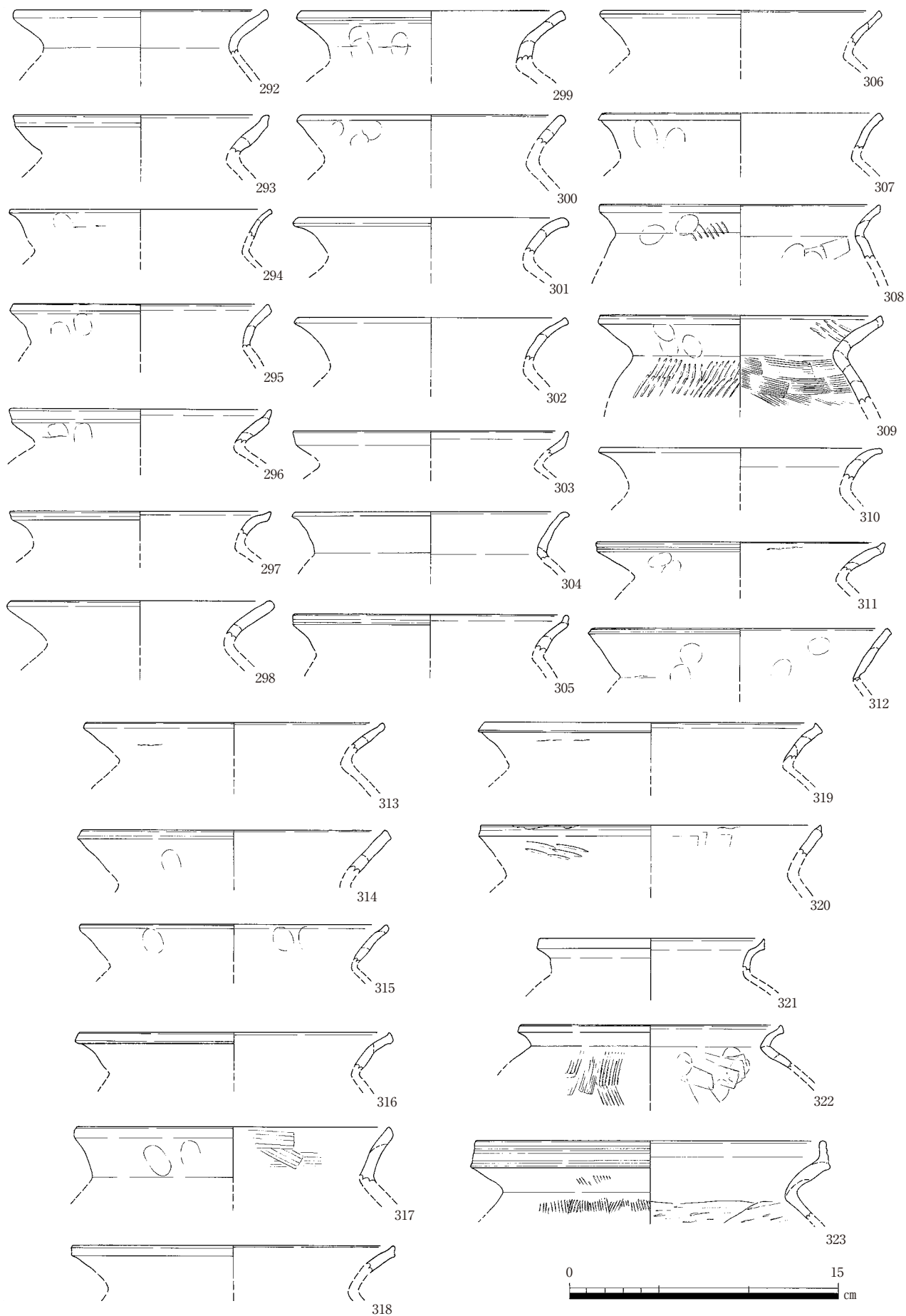


図116 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図8 (1 / 3)  
第1トレンチ：292～323 墳丘盛土内上層



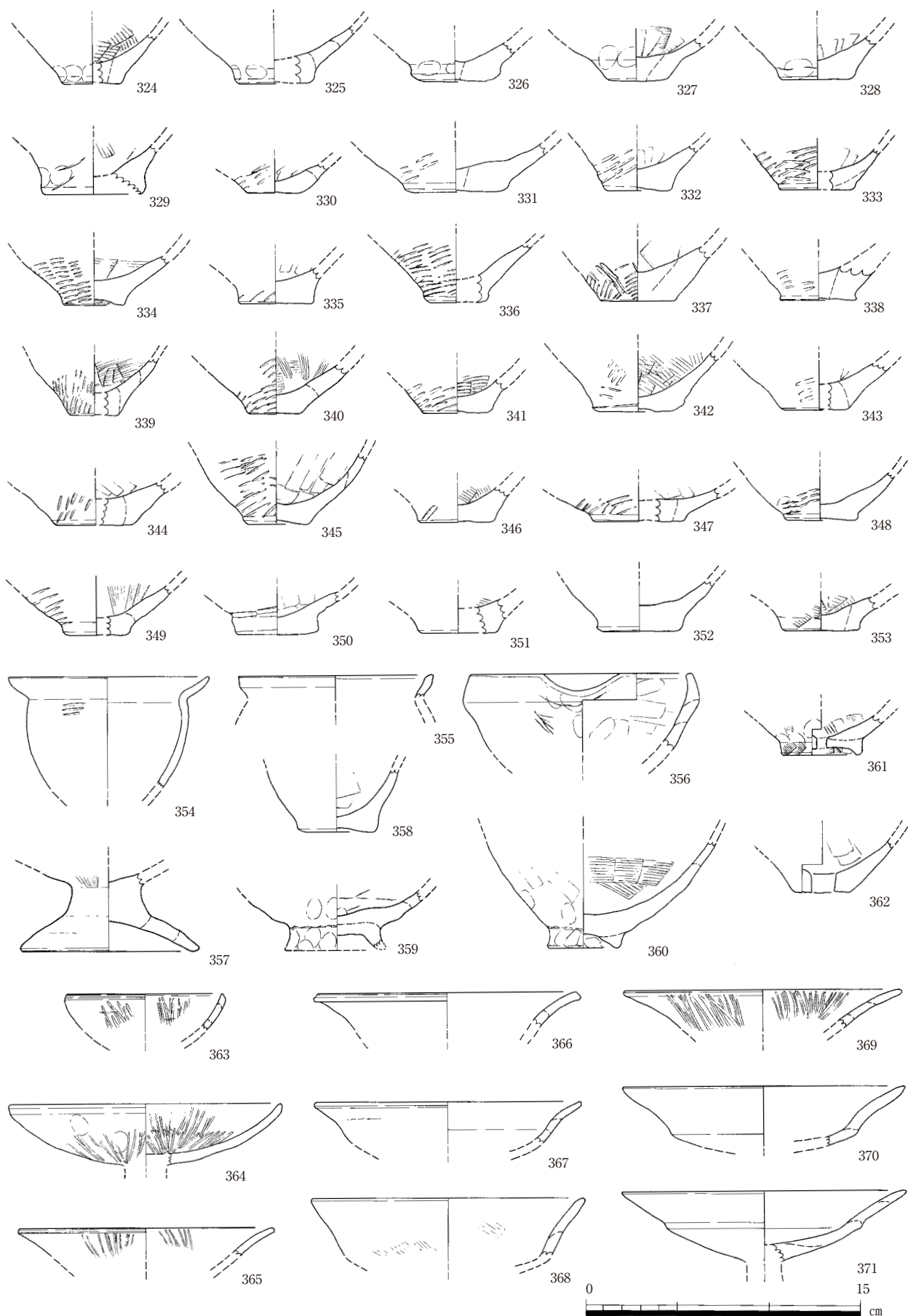


図117 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図9 (1 / 3)  
第1トレンチ：324～371 墳丘盛土内上層

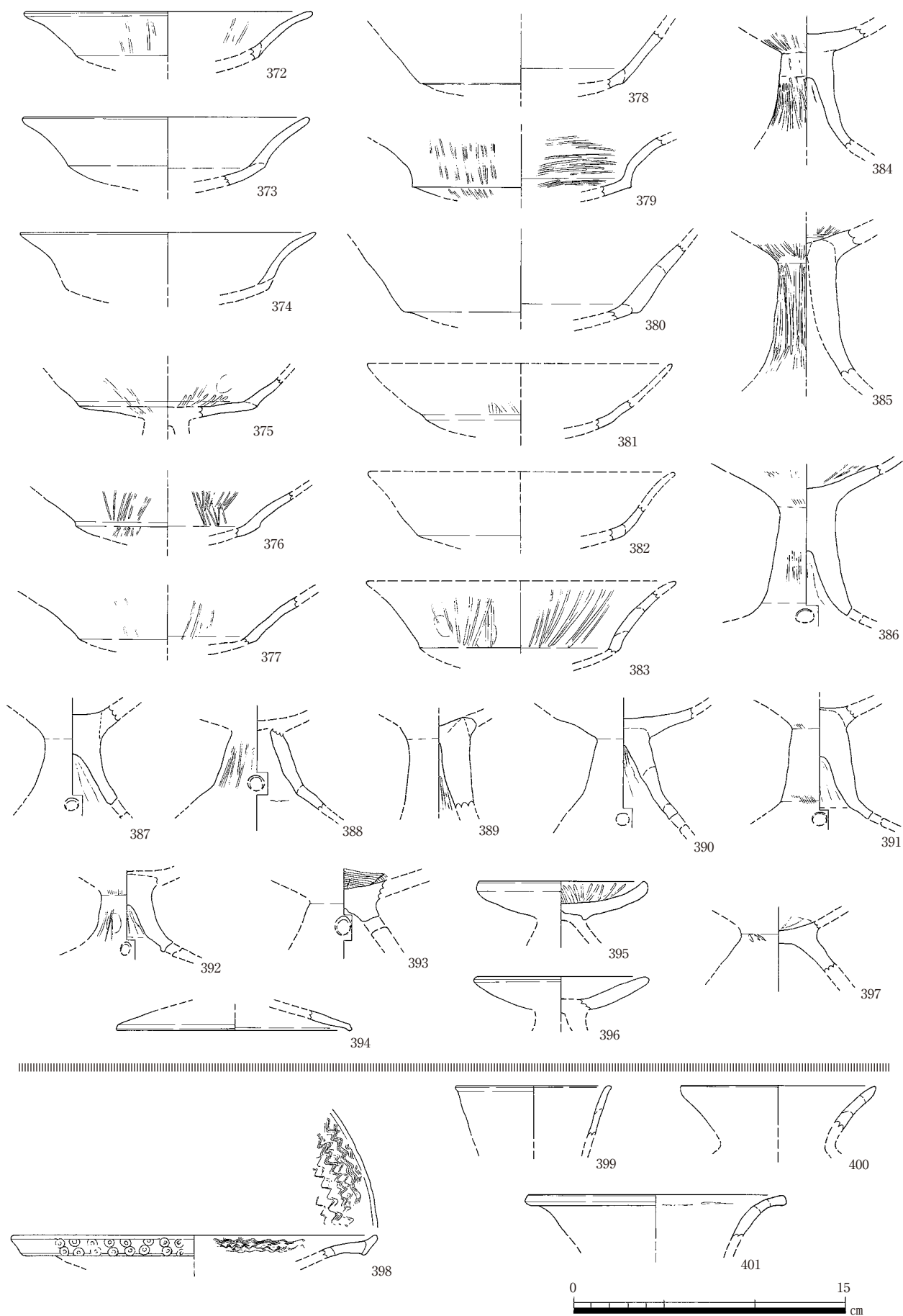


図118 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図10 (1 / 3)  
 第1トレンチ：372～397 墳丘盛土内上層 第2トレンチ：398～401 墳丘盛土内上層

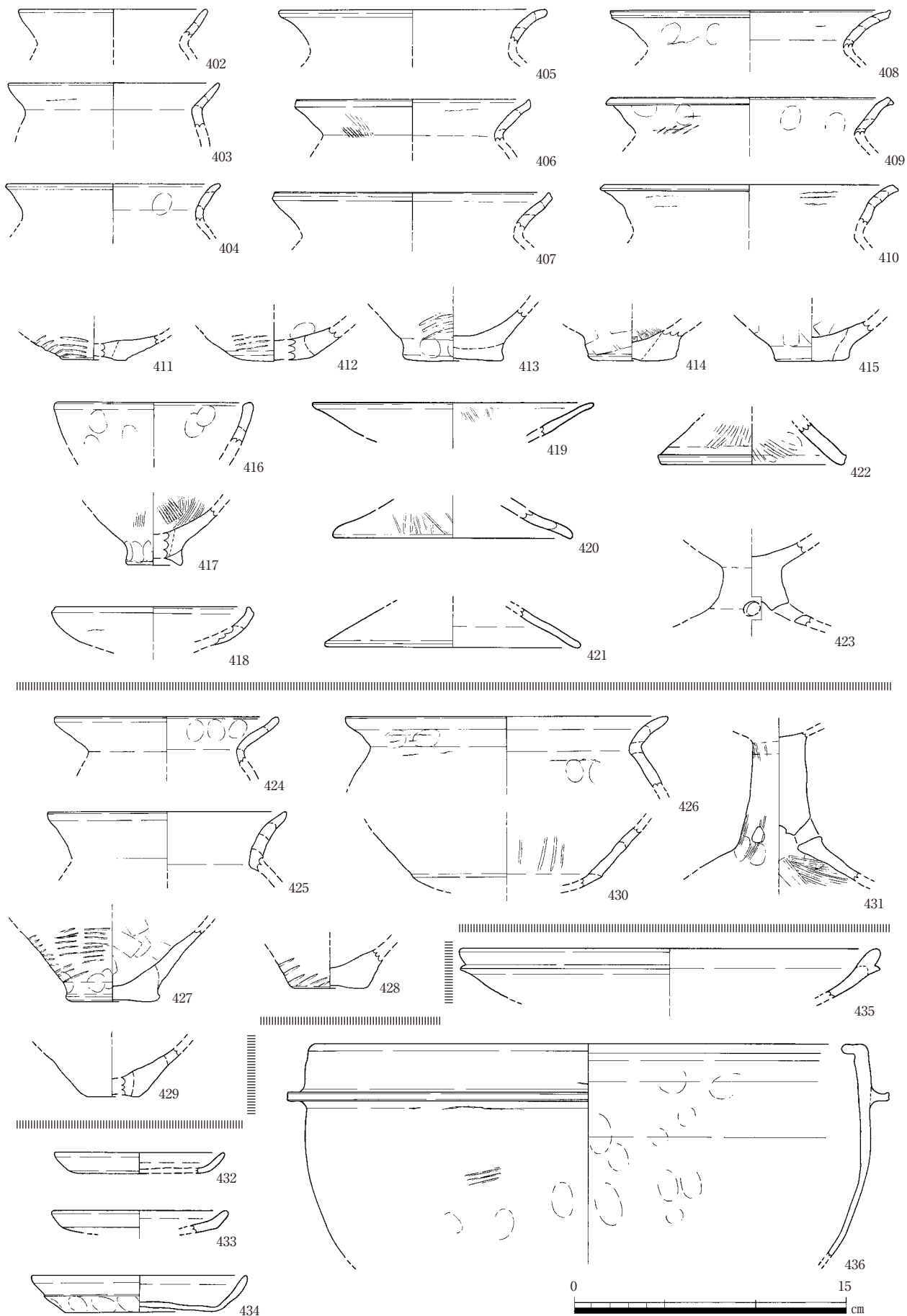


図119 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図11 (1 / 3)  
 第2トレンチ：402～423 墳丘盛土内上層  
 第4トレンチ：424～431 墳丘盛土内上層 432～436 SX-1001  
 — 287 —

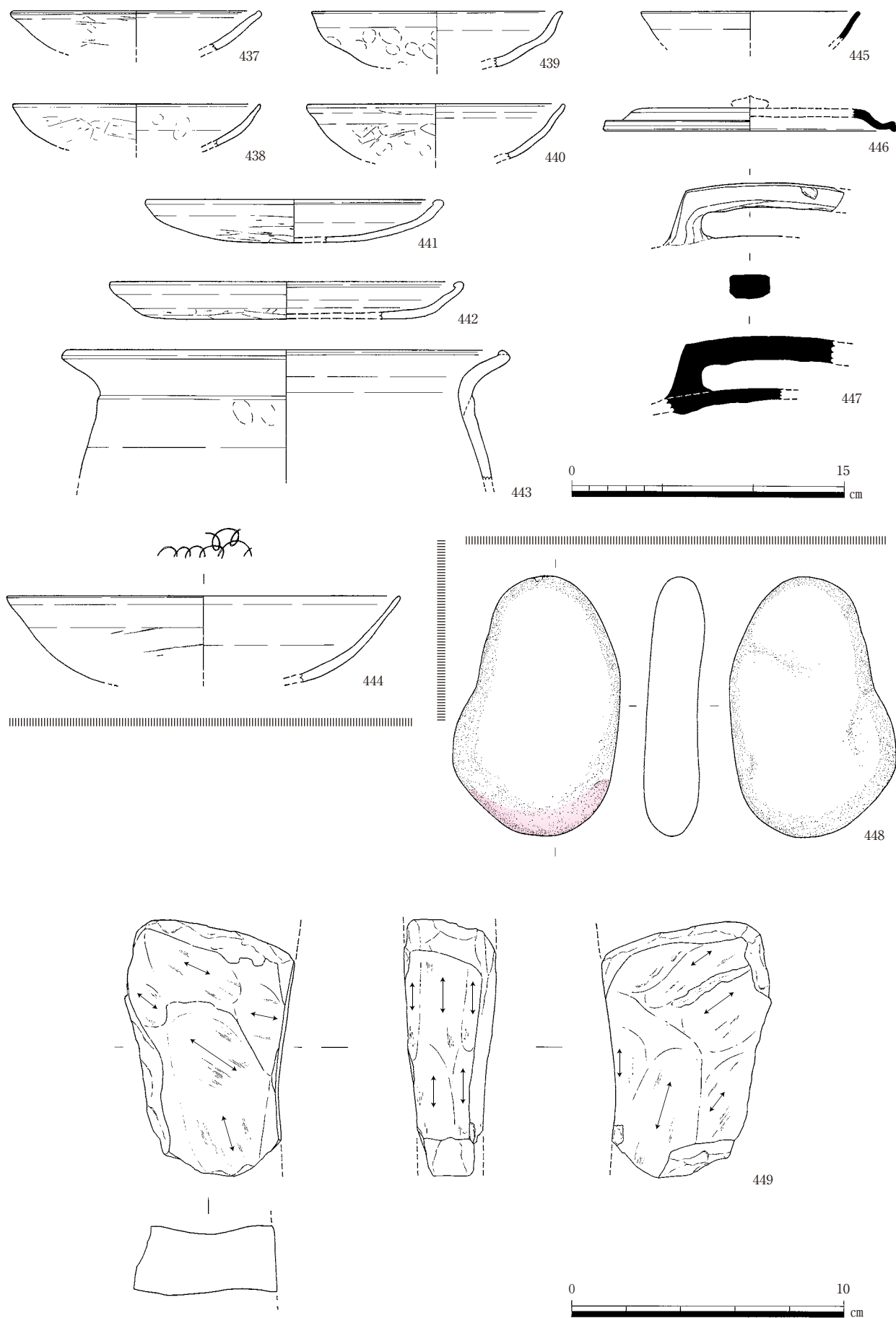


図120 纏向石塚古墳第8次調査出土遺物実測図12 (437~447: 1 / 3、448・449: 1 / 2)  
 第5トレンチ: 437~447 前方部南周濠埋土最上層~上層  
 第1トレンチ: 448 墳丘盛土内下層 449 墳丘盛土内上層

# 第11章 纏向石塚古墳第9次調査報告

(纏向遺跡第144次調査報告)

## 第1節 はじめに

第9次調査は纏向石塚古墳のクビレ部北東側における周濠外肩の形状を確認する目的で行われた。これまで、古墳の周濠の範囲確認調査は、墳丘の調査と併行して行われており、北側を中心にその範囲が確認されている。その中でも、クビレ部北東側付近の周濠の確認調査は、4-2・4トレンチ及び5-1・5・6トレンチで行われている。そのうち、4-2トレンチ及び5-5・6トレンチでは周濠

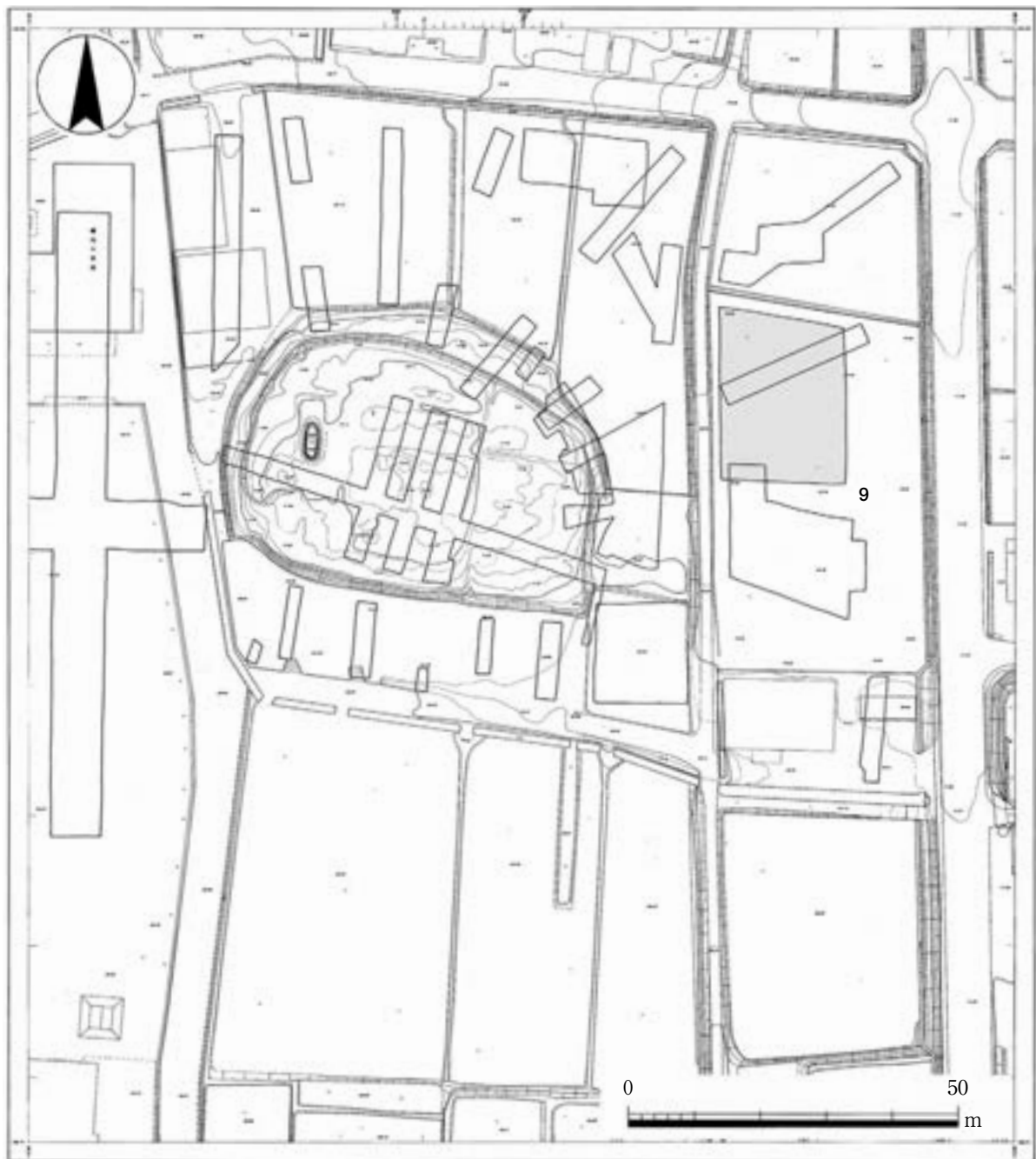


図121 纏向石塚古墳第9次調査地位置図 (1/1,000)

と思われる落ち込みが検出された。これらの調査の成果から復元される周濠の形態は、後円部では墳丘に沿うように円形を描くが、クビレ部付近で外側に張り出す形となる形状が復元された（図156）。このような周濠の形状は類例もなく、非常に特異な形態となった。特に第4次調査では、遺構の保存も考慮され上面検出での確認にとどめられており、そのような状態で、長い期間（おそらく平安時代ごろまで）オープンな状態であった古墳の周濠を、上面検出のみで形態を確定するには、疑問が残ることとなった。

そのような理由で今回の調査は第4次調査の2及び4トレンチの間を面的に調査するように、東西19m及び南北は最大長26mの台形状をした計477㎡のトレンチを設定し、クビレ部付近の周濠の外側の形状を確定することを目標とした。調査期間は平成17年12月27日～平成18年3月31日で、3月25日には現地説明会を催している。

## 第2節 調査の成果

### （1）検出された遺構

調査地は近年まで耕作が行われており、耕土が厚く堆積していた（層厚約70cm）。まず、バックホーによりそれらを除去した。調査区の北東部分では標高70m付近で地山層である灰黄褐色粗粒砂層（図123-73層など）を確認した。この地山層は南西方向に向かって低く傾斜していることもあって、調査区の北西隅、南東隅、中央付近では標高約69.5mの高さになる。この地山層の標高の低くなっていく、調査区の中央付近から南西隅にかけては、中世～平安時代の遺物を含む包含層が、もっとも厚いところで約50cmにわたって堆積していた。包含層は大きく分けて、褐色砂質土（15層など）と褐灰色シルト（31層など）の2層に分けることができ、このうち、この褐灰色シルト層の上面からは平安時代だと思われる遺構が多数検出されたため、遺構検出は褐灰シルト層上面と地山層上面で行った。

遺構検出を計2面で行った結果、本調査では大きく分けて近現代（第二次世界大戦時）、中世～平安時代、古墳時代中期後半、庄内～布留式期に属する遺構を検出した。今回の報告では、纏向石塚古墳に関連すると思われる古墳時代前期（庄内～布留式期）の遺構の報告を中心として、それ以外については、別途、正式報告することとして、概要にとどめたい。

#### 1. 太平洋戦争時の遺構（図124）

調査区北西隅で、現代耕作土を除去時に直径20cm前後の丸太材を使用した打ち込み杭24本が対角長約4.7mの規模をもち、ほぼ正十二角の形状で、規則的に並んだ状態でみつかった。杭の先端は斜めに切断された跡があり、農地として利用する際に耕作の妨げとなる部分を切断したと思われる。調査地周辺では、太平洋戦争末期に天理市の柳本飛行場から兵隊が来て対空用の高射砲陣地を設営したという話が残り<sup>1)</sup>、今回検出した杭は対空砲火用の機銃などのコンクリート製の台座の基礎を支えるものであったと思われる。ただ、これに関連すると思われるコンクリート片などはみつかっておらず、実際にコンクリートが敷設されたかどうかは不明である。なお、高射砲陣地の跡は1-1トレンチでもコンクリートの基礎が確認されており<sup>2)</sup>、纏向石塚古墳の墳頂部も陣地設営のため削平されたといわ



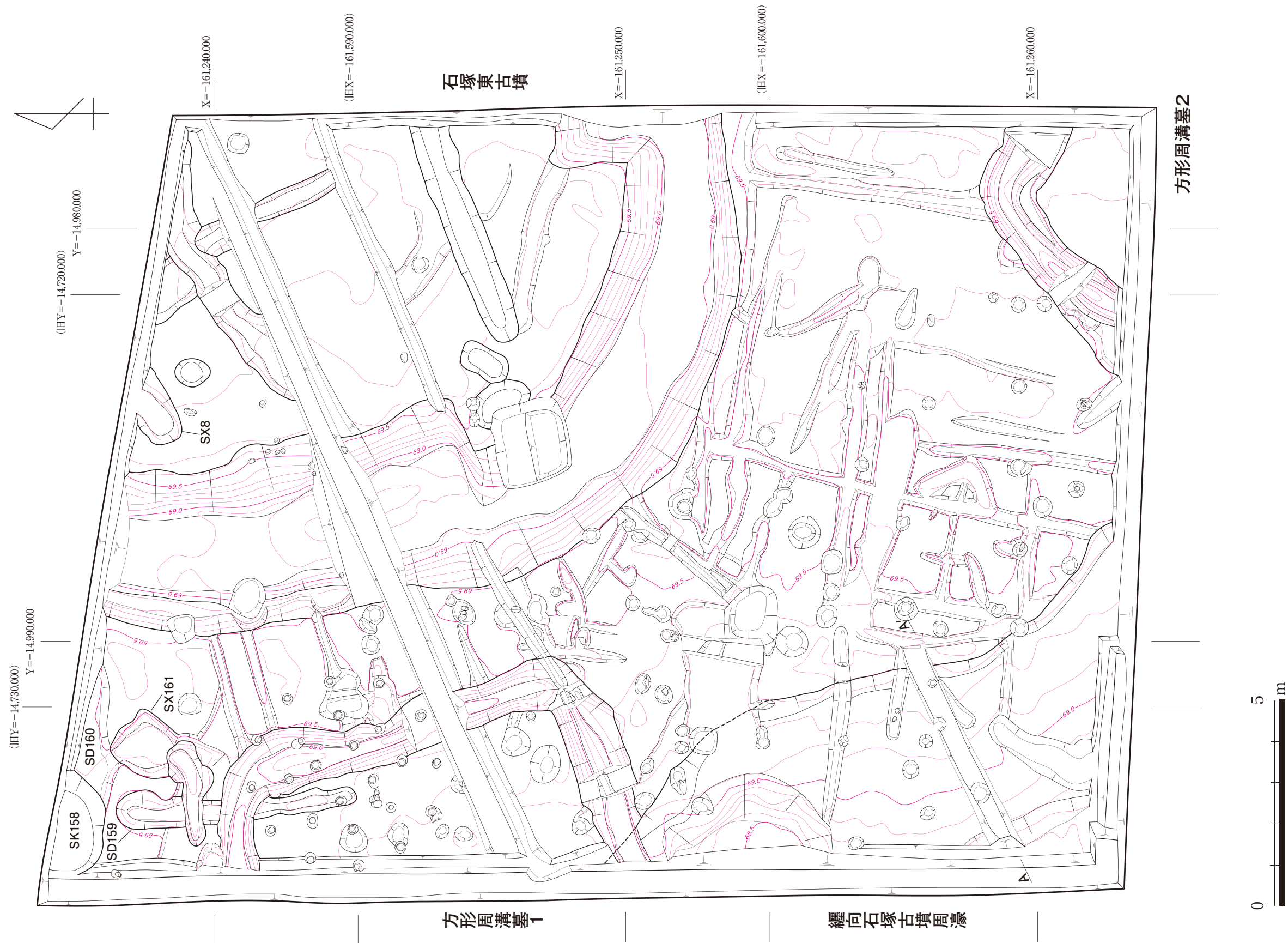
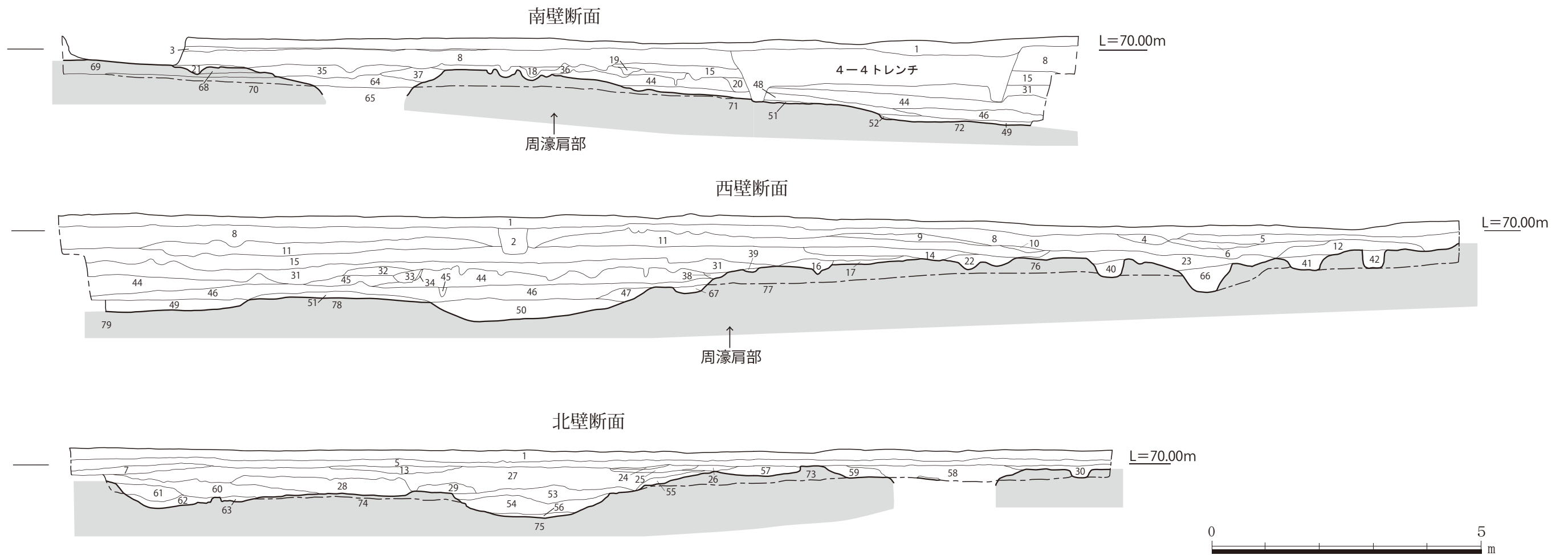


图122 下層遺構平面图 (1/100)





1 暗オリーブ灰 (2.5Y4/1) 土	21 褐灰 (7.5YR4/1) シルト	41 褐灰 (10YR4/1) シルト～粘質土	61 灰褐 (7.5YR4/2) シルト	SK158埋土
2 黄橙 (10YR7/8) シルト～砂質土 (礫少量混じる)	22 におい黄橙 (10YR7/2) シルト～粘質土	42 灰黄褐 (10YR4/1) シルト	62 褐灰 (10YR4/1) シルト～中粒砂	
3 橙 (7.5YR6/8) 土 (鉄分)	23 灰褐 (7.5YR4/2) 砂質土	43 灰黄褐 (10YR5/2) シルト～粘質土	63 におい黄橙 (10YR7/2) ～褐灰 (10YR6/1) シルト～中粒砂	SX161埋土
4 褐灰 (10YR5/1～4/1) シルト～粘質土 (炭が多く混じる)	24 浅黄 (2.5Y7/3) シルト～砂質土	44 暗灰黄 (2.5Y5/2) シルト質砂質土	64 灰褐 (7.5YR4/2) シルト～粘質土	方形周溝墓 2 埋土
5 明黄褐 (10YR7/8) ～褐灰 (10YR6/1) シルト～砂質土	25 灰黄褐 (10YR4/2) シルト～砂質土	45 暗灰黄 (2.5Y5/2) シルト質砂質土	65 灰褐 (7.5YR5/2) シルト	
6 褐灰 (10YR5/1～4/1) シルト～粘質土 (炭が混じる)	26 灰黄褐 (10YR4/2) シルト	46 暗灰黄 (2.5Y5/2) 砂質土	66 褐灰 (10YR4/1) ～灰黄褐 (10YR4/2) シルト中粒砂	方形周溝墓 1 埋土
7 におい褐色 (7.5YR5/4) 砂質土	27 灰黄 (2.5Y7/2) シルト～砂質土 (鉄分沈着)	47 灰 (N4/1) 細～中粒砂	67 黒褐 (10YR3/1) 砂質土 (径～1cm程度の礫混じる)	
8 オリーブ灰 (2.5GY4/1) 土 (鉄分沈着)	28 灰黄褐 (10YR4/2) シルト～砂質土	48 灰 (5Y6/1) シルト～細粒砂 (小礫混じる)	68 におい橙 (7.5YR7/3) 細～中粒砂	地山
9 明黄褐 (7.5YR5/6) 砂質土 (鉄分沈着)	29 褐灰 (7.5YR4/1) 粗粒砂	49 暗青灰 (10BG4/1) シルト～粘質土	69 におい褐 (7.5YR5/3) 中粒砂	
10 黄橙 (7.5YR5/8) 砂質土	30 におい黄 (2.5Y6/4) シルト～細粒砂	50 暗青灰 (10BG4/1) シルト～粘質土	70 灰黄褐 (10YR4/2) ～黒褐 (10YR3/2) シルト～粘土	
11 明黄褐 (7.5YR5/8) 砂質土 (鉄分沈着)	31 褐灰 (10YR4/1) ～灰 (N4/) シルト質砂質土 (炭混じる)	51 黒褐 (10YR3/1) 粘質土に浅黄 (2.5Y7/4) 細粒砂	71 黒褐 (10YR3/1) 粘土 (黄色砂混じる)	
12 明褐 (7.5YR5/8) 砂質土	32 褐灰 (10YR4/1) ～灰黄褐 (10YR5/2) シルト	52 灰白 (2.5GY8/1) 粗粒砂	72 暗青灰 (10BG4/1) シルト～粘質土	
13 灰白 (7.5YR8/2) シルト～砂質土	33 褐灰 (10YR4/1) シルト	53 灰 (N5/) シルト～粘質土	73 灰黄褐粗砂～砂礫層	
14 におい黄 (2.5Y6/4) シルト～砂質土	34 褐灰 (10YR4/1) シルト (灰黄褐シルト混じる)	54 灰 (N5/) 粘土	74 におい黄褐 (10YR4/3) 中粒～粗粒砂	
15 褐 (7.5YR4/4) 砂質土	35 におい黄橙 (10YR7/2) シルト～粘質土	55 灰黄褐 (10YR4/2) 砂に黒褐色ブロック混じる	75 灰黄 (2.5Y7/2) 砂礫層	
16 褐灰 (7.5YR4/1) ～灰褐 (7.5YR4/2) シルト	36 灰黄褐 (10YR5/2) シルト～粘質土	56 灰黄褐 (10YR4/2) 砂	76 灰褐砂礫層	
17 褐灰 (8.5YR4/1) シルト～細粒砂	37 褐灰 (10YR5/1) ～灰黄褐 (10YR5/2) シルト～粘質土	57 褐灰 (10YR4/1) シルト	77 におい黄褐 (10YR4/3) 中粒～粗粒砂	
18 におい黄橙 (10YR7/2) シルト～粘質土	38 褐灰 (7.5YR5/1) シルト～細粒砂	58 におい黄 (2.5Y6/3) シルト～砂質土	78 黒褐 (10YR3/1) シルト～粘土	
19 褐灰 (10YR6/1) シルト (鉄分沈着)	39 褐灰 (7.5YR5/1) シルト～細粒砂	59 淡黄 (2.5Y8/4) シルト～細粒砂	79 浅黄 (5Y7/4) シルト～粘土	
20 褐灰 (10YR5/1) シルト～粘質土	40 褐灰 (10YR4/1) シルト～細粒砂	60 灰黄褐10YR4/2) シルト～砂質土		SD160埋土

図123 調査区断面図 ( 1 / 80 )

れている。

## 2. 中世～平安時代の遺構（図124）

包含層上面では、井戸2基と柱穴約120基、土坑、素掘溝などの遺構を検出している。

井戸2基のうちSE11は、一辺約1.8mの方形の井戸で、深さは検出面から約2.1mある。井戸枠などは残存していなかった。調査区南西に位置するSE163は、約1.5m×1.3mの楕円形の掘形で深さが約1.3mある。井戸の埋土から曲物が出土しているが、掘形の底から50cm浮いた状態で出土しており、井戸枠として機能していたものではない。井戸枠として使用していたものか、もしくは他で不要になったものを廃棄したものと思われる。曲物内やその周辺から土師器皿や横櫛が出土している。土師器皿の中には「吉」とみられる墨書が書かれているものもあった。出土土器から、9世紀後半～10世紀頃のものと思われる。また、11世紀以降のものと考えられる柱穴を約120基検出した。この中から、少なくとも2棟の掘立柱建物と、塀または柵と考えられる柱列を約12m分確認している。柱列は建物の南北軸と平行に設置されており、2棟の掘立柱建物などに伴う柵列の可能性がある。平安時代に属する土器には時期幅があり古墳周辺では長い期間居住していたと思われる。遺構の詳細な時期については別途報告したい。

## 3. 古墳時代中期後半の遺構（図122・125）

調査区北東では、平安時代の包含層を除去した段階で新たに古墳の周濠を確認した。墳丘は完全に削平されていたが、周濠の形状から、円丘に短小な突出部がとりつく帆立貝形古墳であったことがわかった。当該地に「塚東」という小字が残るため石塚東古墳と命名している。なお、第4次調査の第2トレンチで確認された纏向石塚古墳の周濠外肩と推定した落ち込みは、この石塚東古墳の墳丘側の周濠の肩であることが確認された。外肩が認識できなかったのは、地山層である淡黄褐灰色砂質土（図57-21層）までも纏向石塚古墳の周濠埋土と誤認したためだと思われる。<sup>3)</sup>

**石塚東古墳周濠（図125）** 周濠は幅2～4m、深さ0.5～0.8m程度で、周濠からは葺石に使用された石材と円筒埴輪などが多数出土している。石材は墳丘側からの崩落土に多く含まれ原位置を保っているものがないため、基底部には葺石はなく、墳丘1段目テラスより上から葺かれていたと思われる。一方、周濠外側からの流入土からは、円筒埴輪が多量に出土している。この層から出土した円筒埴輪は、完形に復元できる個体が多く、周濠外肩に並べてあったものが転落したものと思われる。周濠は比較的早く埋没したようで、埋土中に古墳時代を下る遺物は確認できていない。なお、墳丘部分にあたる場所では、瓦器が出土するような素掘溝が確認されておらず、周濠が完全に埋没した段階にはおそらく墳丘はまだ存在しており、大規模な削平は中世以降にうけたものと考えられる。

周濠から出土した遺物として、埴輪、須恵器・土師器などの土器類、木製品があげられる。円筒埴輪が大半を占めており、とくに前方部周濠の外側から転落したものは残存状況が非常に良い。その他では、朝顔形埴輪が確認できるが、形象埴輪と思われるものはみられなかった。土器はわずかであるが、須恵器、土師器が出土している。そのうち、甕がほぼ完形で出土しており、田辺編年のTK23～47型式期<sup>4)</sup>にあたるものとみている。木製品は用途不明の木片も含め多数出土したが、古墳に樹立した



図124 包含層上面検出遺構 (1 / 140)

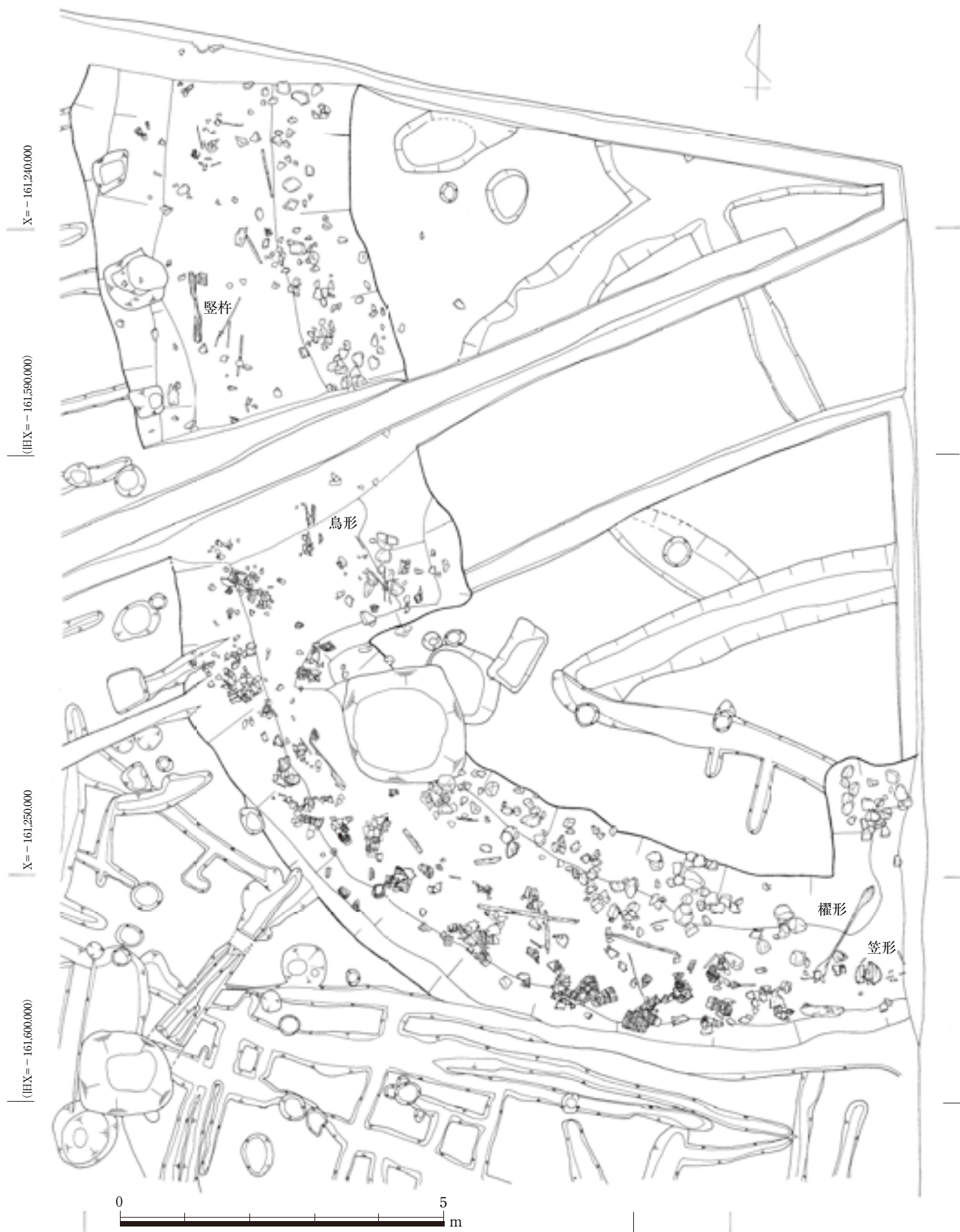


図125 石塚東古墳周濠遺物出土状況 (1/80)



と考えられるものとして笠形木製品と鳥形木製品が各1点ある。このほか、堅杵、櫛形や棒状の木製品などが出土している。5-1トレンチで石塚東古墳に関連する遺構が検出されていないことから、全長19m程度の墳丘が復元できる。纏向遺跡内では、近年の発掘調査により5世紀後半以降の古墳の様子が少しずつ明らかになってきたが、今回みつかった石塚東古墳のように帆立貝形の墳丘形態や葺石を備える古墳は今まで確認されておらず、当時この地域でつくられた古墳の一樣相を新たに示したといえるだろう。詳細な内容については別途報告を行いたい。

#### 4. 庄内～布留式期の遺構（図122・126～130）

3世紀代の遺構として当初の目的であった纏向石塚古墳の周濠をはじめとし、方形周溝墓と思われる溝や、土坑などが検出されている。主な遺構について詳述する。

**纏向石塚古墳周濠** 調査区の南西隅で南西方向に傾斜する落ち込みを長さ16mにわたって検出している。深さは検出面から調査区内の最深部まで約95cmを測る。全体的になだらかな傾斜で、傾斜の角度は約 $8^{\circ}$ ～ $10^{\circ}$ である。落ち込みの底は今回の調査区よりさらに西側にあるため、落ち込みの東側の傾斜面を検出したにすぎない。落ち込みの埋土は大きく3層に分かれ、上から順に暗灰黄シルト質砂質土（上層 図126-1層）及び暗灰黄砂質土（中層 2層）、黒褐粘質土（下層 3層）となる。上・中層からは平安時代と思われる土師器皿の小片が、下層からは須恵器の小片が出土している。しかしながら、いずれも数が少なく図化できないような破片のため堆積時期を明確に示すものではないが、おそらく、平安時代以降の堆積と思われる上・中層は過去の調査で検出されている最上層～上層に該当すると思われる。良好な遺物には恵まれなかったが、落ち込みの外肩に明確な傾斜変換点があることや、4-4トレンチと5-5トレンチで検出されている周濠外側のラインをほぼ直線的に結んだ箇所<sup>6)</sup>に該当していることなどから、纏向石塚古墳の周濠の外肩にあたるものと認めて良いと思われる。そうした場合、纏向石塚古墳の周濠の形状は後円部では墳丘に沿うようにつくられ、クビレ部から前方部に向かって直線的に細くなる馬蹄形に近い形に復元することができる。

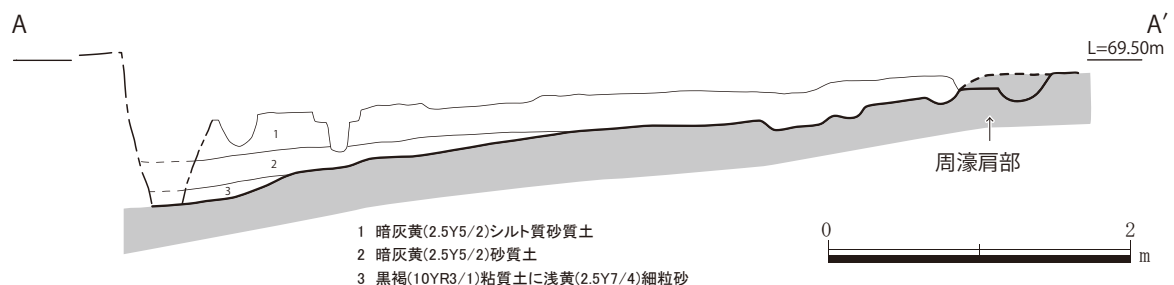


図126 纏向石塚古墳周濠横断面（1/50）

**方形周溝墓1** 調査区北西部で、「コ」の字状に溝を検出した。東辺は長さ約9m分、北辺約1.5m分、南辺約4m分検出した。南辺及び北辺の溝はさらに西へ続くようである。溝が方形に周ることが想定されることから、この溝は方形周溝墓に伴うものと思われる。そうした場合、墳丘規模は一辺約7.8

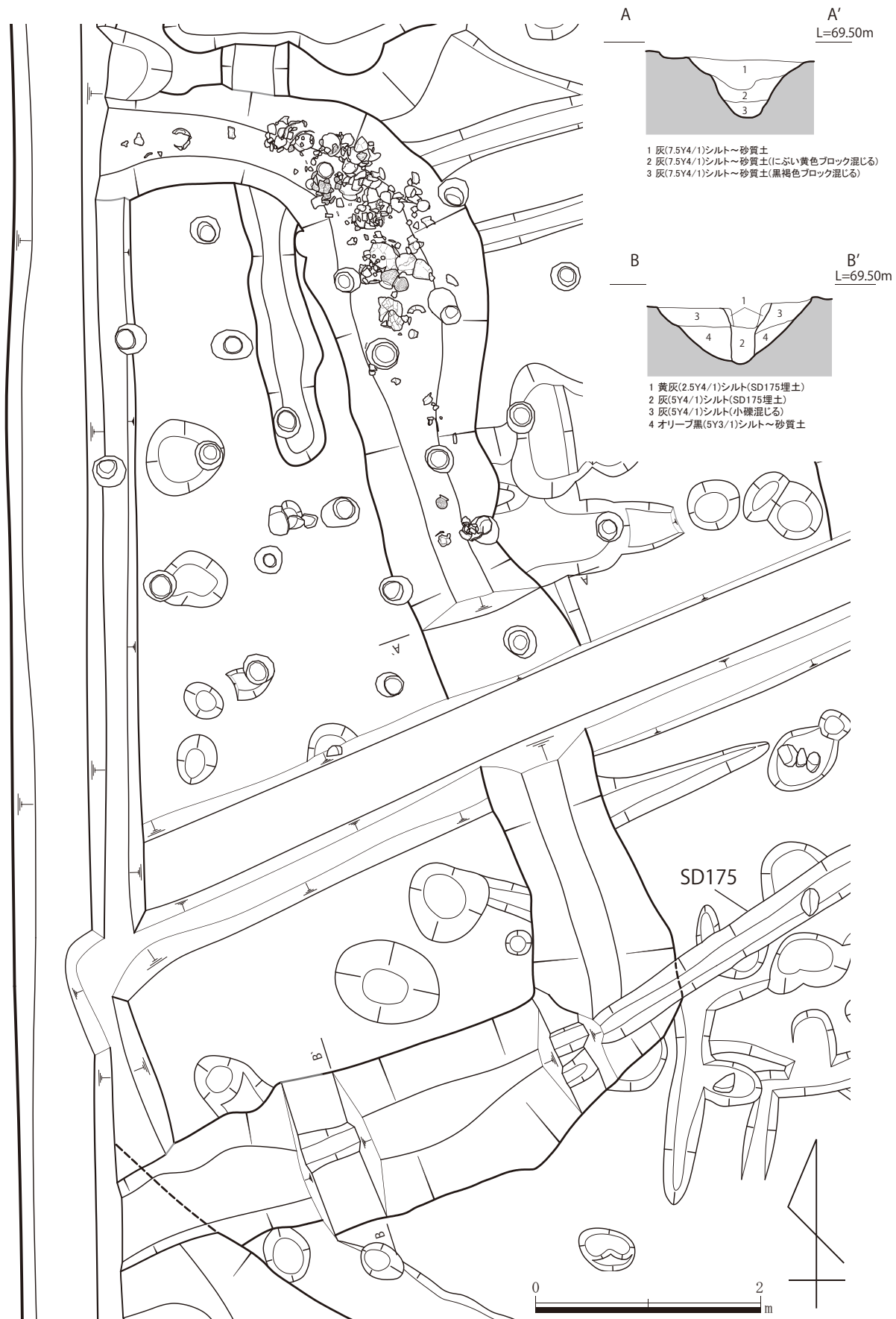


図127 方形周溝墓1 平面図及び断面図 (1/50)

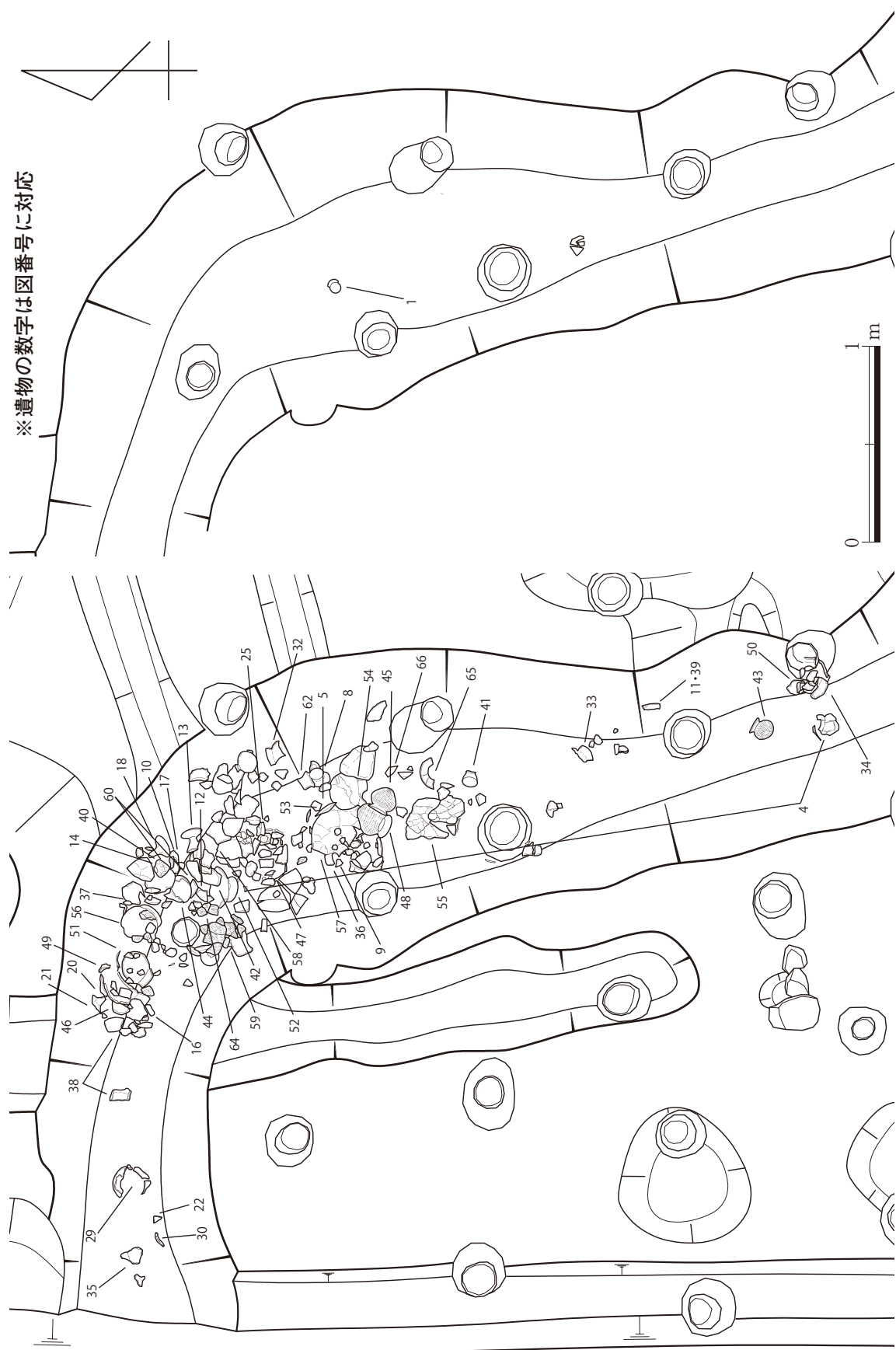


図128 方形周溝墓1 遺物出土状況 (1/30)



mに復元できる。溝の規模は、幅0.9～1.8m、深さ0.3～0.4mである。北東隅付近の溝内から集中して土器が出土しているのが特徴的である。この土器群は、溝の検出面とほぼ同レベルから出土しはじめることから溝の上部は後世にある程度削平を受けているものと考えられる。溝の埋土は東辺で3層、南辺で2層に分層できるが、東辺の上層と中層は明確に区別できないところもあり、出土した土器も上・中層（図127-1・2）に集中していることから、上・中層の堆積時期の差などは考慮しなくてよいと思われる。一方、下層からの土器は非常に少ないことから、溝掘削後、下層が堆積したのち、土器が溝内に投棄されたのであろう。上・中層の土器群と下層の土器とのレベル差は10cm程度ある。北東隅以外では、東辺の溝の中ほどに土器が少しみられるくらいで、南東隅付近や南辺の溝では破片を含めて遺物はほとんど出土していない。

出土した器種は、甕・壺が中心で、その他、器台・高坏・鉢などが出土している。高坏や器台の脚付の器種は北東隅の土器群の中でも北半にやや集中している。溝内から出土した土器は後述するように庄内3式期頃と思われ、溝の最終堆積もその時期であろう。また、南辺の溝の西側約1m分は纏向石塚古墳の周濠と思われる落ち込みの一部と重複しているが、落ち込みの上層が平安時代以降の堆積土のため、南辺の溝が当然のことながら落ち込みに切られる形となっている。

**方形周溝墓2** 調査区東南隅で「L」字状に溝を検出した。検出した長さは、西北辺約6.5m、北東辺約2.4m分である。溝の規模は、幅1.4m前後、深さは検出面から50～70cmである。埋土は灰褐色シルトとほぼ同じ土質であるが、上下2層に分層できる。遺物はこの下層上面から上層にかけて出土しており、溝がある程度埋没した後で土器が投棄されたものと考えられる。西北の溝内からは、口縁を打ち欠いている甕の胴部が出土している。溝がL字状に曲がることや遺物の出土状況などから方形周溝墓と思われる。今回の調査区の南側で行われた4-4トレンチで、この溝の続きが検出されていないため、最大でも1辺5m前後の墳丘をもつ方形周溝墓と推測される。

**その他の遺構** その他、土坑や溝状の遺構が多数見つかった。その中でも調査区北東隅付近からは、比較的、出土遺物に恵まれた古墳時代前期を中心とした遺構が検出されている。SK158は直径1.4m、深さは検出面から約40cmの円形の土坑である。この土坑の上には、SD160が存在しており、かなり上部は削平を受けたものと考えられる。埋土は上・下層の2つに分層することができ、上層の北半から、甕及び壺などの土器が比較的まとまって出土している。

SD159は幅0.4～0.8m、長さ約6m、深さ30cmの溝状の遺構である。中央付近では方形周溝墓1の北辺の溝が通るが、遺構の切り合い及び出土土器からもSD159の方が新しい。溝の北端からは北近畿系と思われる高坏（図138-83）が出土している。また、溝の中ほどからも土器破片が集中して出土している。

SX161は長さ1.5m以上、最大幅約1.5m、深さ約40cmの不定形な溝状の遺構である。南北両側は溝状の遺構（いずれも時期不明）に削平されており、本来の規模は不明である。埋土の上層（図130-1・2層）から甕、壺、鉢などの土器の小片が出土している。

上記に挙げた遺構以外では、平安時代の包含層がない北西周辺のものに特に所属時期を決めがたい。

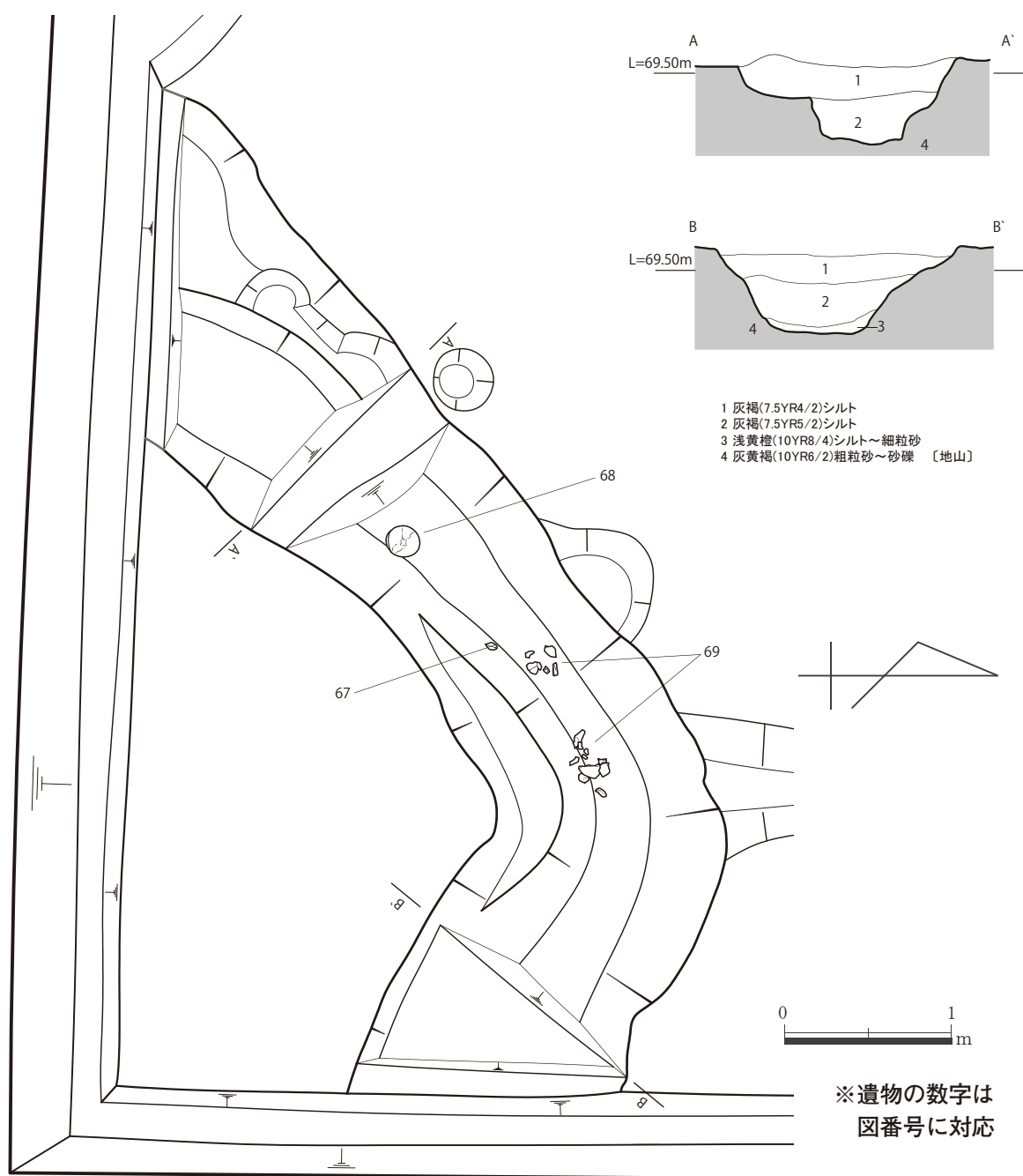


図129 方形周溝墓 2 遺物出土状況及び断面図 (1 / 40)

先述したように石塚東古墳の墳丘部分からは瓦器などが出土する中世の素掘溝とするものがみられないことから、石塚東古墳の墳丘が中世以降まで存在していたことも想定が可能である。そうした場合、墳丘部にある溝状の遺構などは、庄内～布留式期までさかのぼる可能性は残されるが、遺物がほとんど出土しなかったため時期は不明である。唯一、遺構の形状は不明であるが、SX8 (図122) から小片が出土しており、図137で図示している。

## (2) 出土遺物

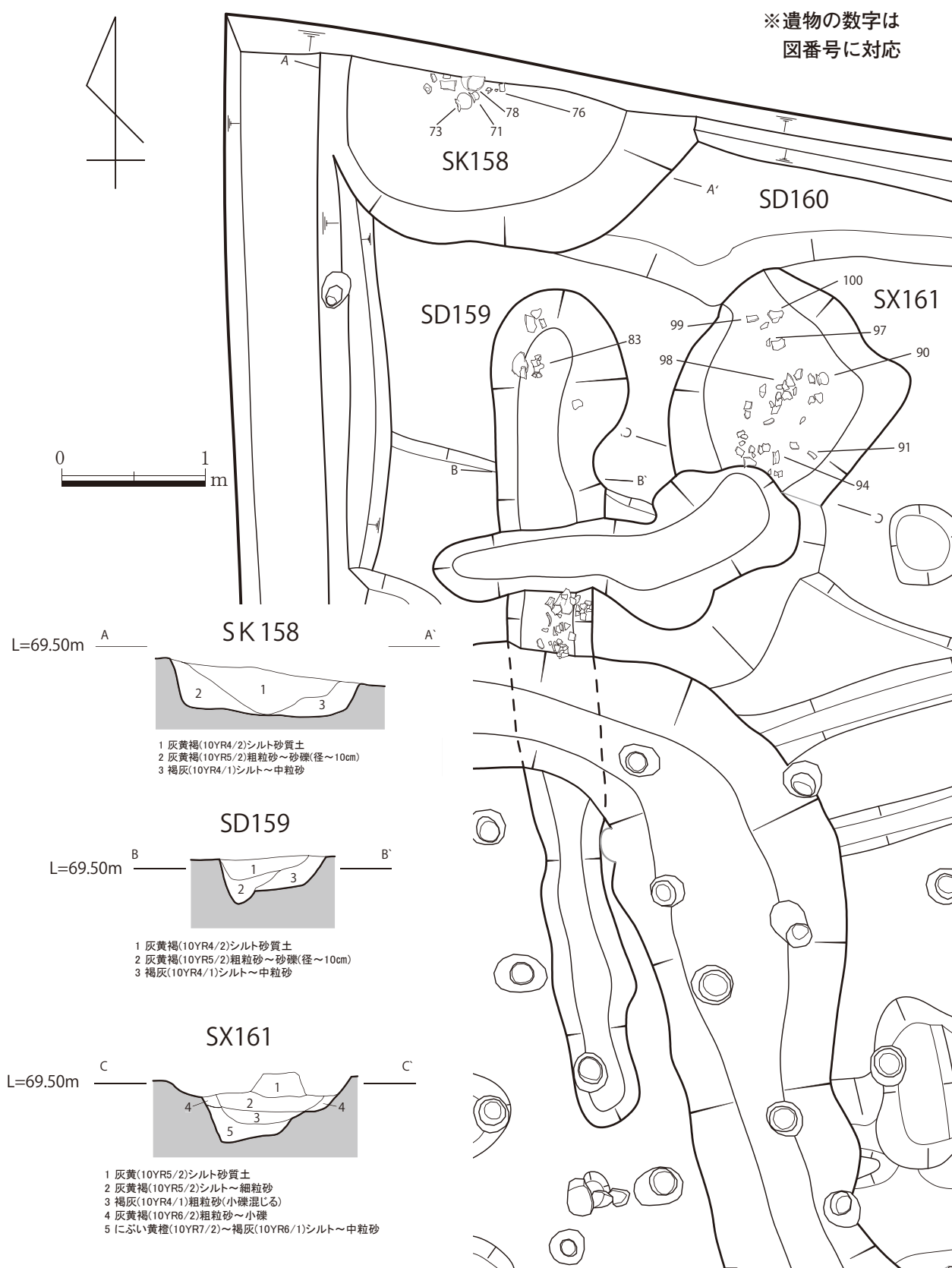


図130 SD159・SX161・SK158 平面図及び断面図 (1 / 40)

第9次調査ではコンテナケース約70箱の遺物が出土しているが、大半は古墳時代中期末ごろの石塚東古墳の円筒埴輪が占めている。今回報告する庄内～布留式期では方形周溝墓1からの出土量が一番多く、その概要を以下に述べていきたい。なお、各個体の詳細な法量、調整等は観察表（表93～101）を参照していただきたい。

**方形周溝墓1** 方形周溝墓1から出土した土器の大半は上・中層である。層位の状況や出土状況からも特に区別する必要はないと考える。下層からは遺物はほとんどなく、図示できたのは鉢1の1点のみである。その鉢1は内面の底部から口縁付近まで朱が一面に付着しており、朱が中に入れられたことが推察できる。上・中層から出土したもののうち、完形に近いものは5・8・11・13・14・17・20・21・42・43・45・47・48・56・57・64などである。しかしながら、溝の上部が後世に削平されたことを考慮しても、破片が多いことや、不自然にその一部を欠いている土器も多くみられることから、すべてのものが完形の状態で溝に廃棄されたわけではないと思われる。器種としては、鉢、壺、器台、高坏、甕など多様なものが出土しており、その中でも、甕が一番多い割合を占める。鉢は、小型で丸底の小形丸底鉢と呼ばれるもの1～4と、へこみ底をもつ鉢5、脚付の鉢6などがある。大型品の範疇に入るものは63と64である。5は口径18.1cmで小型品と大型品の間隔的な存在で、内外面に丁寧なミガキが施されているのが特徴である。壺は、器高が15cmに満たない小型のものから、30cmを越えるものも含まれる。その中でも61は複合口縁をもつもので、口縁部のみしか残存していないため全容は不明だが、大型のものになるであろう。比較的大型の壺の中では59が全体の約80%残存している。小形器台は4点図示している。すべて器高が10cmに満たない小型のものである。4点のうち13のみが受部と脚部の接合部を孔で貫通させている。高坏は坏部が塊状のもの15、口縁部が外反するもの16、直線的なもの17・20・21などが出土しており、法量も器高が10cm程度のものから15cmを越えるものなど多様である。甕の大半は庄内形甕が占める。その他、弥生時代の第五様式の影響が残っているもの（42・57など）、東海系の影響を受けているもの（39～41）などがみられる。

方形周溝墓1から出土した土器は庄内式期のものが中心であり、その形態から新相段階のものだと思われる。ただし、甕のうち25は、口唇部がg手法で布留形甕の可能性が高く、新しい様相がみられる。ただ、図示していない破片資料でも、布留形の胴部破片は見られないことや、25が小片で溝の埋土の最上部から出土していることなどから、調査の過程で上部の層の堆積土を完全に除去できなかった可能性も残される。拙い調査手法により断定はできないが、一つの小片を根拠にするよりかは、全体の土器の様相から方形周溝墓の出土土器は、布留形甕を含まない庄内3式期頃と理解した方がよいと思われる。

**方形周溝墓2** 方形周溝墓1と比べ、出土遺物は非常に少ない。図示できるものは甕3点である。甕69は吉備系のもので、約80%残存している。体部の形状は肩がほとんど張らず、球形に近くなっている。68は、体部はほぼ完存しているが、口縁部はほとんど欠いている。外面は、刷毛目調整が行われたあと体部下半はケズリ調整をおこなうことや、体部の最大径が中心よりやや下半よりにあるなど在地でつくられる土器とは特徴が異なる。このように、出土量が少ないながらも特徴的な土器がみられ

る。在地の土器が少なく時期の判断は難しいが、69の特徴などから、布留0式期併行のものと考えられる。

**その他の遺構から出土した土器** 方形周溝墓以外では、調査区の北西隅で検出した遺構からの出土土器が比較的多い。S D158から出土した土器のうち71・73は完形に近い形で出土している。72は瓢形壺の形状をしており、東海系の影響をうけたものであろうか。底部に凹みがあり脚部を接合した跡がある。その他、高坏、壺、器台の破片が出土しているが、いずれも小片である。布留形甕がみられることから、布留0式期のものと思われる。

S D159から出土した土器は全体的に小片が多い中で、83のみ全体の90%残存している。83は脚台付の高杯で、北近畿やその周辺の影響が考えられるものである。その他では小片であるが東海系の甕の口縁などが出土している。小片が多いため時期の判別は難しいが、布留形甕などが含まれ布留0式期だと思われる。

S X161から出土したものでは90がほぼ完形に復元できたほかは小片が多い。甕は布留形甕が主体となる。その他の遺構では、出土量が極端に少なく遺構の時期判定としてはこころもとないが、本調査でよく見られる円筒埴輪や平安時代のものが出土していないS X8やS D160などが古墳時代前期に属する可能性がある。いずれも布留式期に属する遺物が出土している。

このように今回の調査では、庄内3式期の土器が出土している方形周溝墓1以外は、布留式期に属する遺物が中心となる。

### 第3節 小結—第9次調査の成果—

今回の調査では、太平洋戦争中のものから古墳時代前期まで、それぞれの時代で、予想外の大きな成果を得る事ができた。本報告ではその中でも当初の目的であった纏向石塚古墳の周濠に関わる落ち込みとそれに近接する方形周溝墓についてまとめることにしたい。

**纏向石塚古墳周濠** 今回検出した纏向石塚古墳の周濠外肩の平面形と過去の調査成果と合わせて考えると、馬蹄形に近い形に復元できた(図157)。今回検出した周濠の最深部は標高68.7m付近で、4-4トレンチで検出されているクビレ部付近の周濠底(標高67.3m)と、約1.2mの比高差がある。今回調査範囲とした周濠外肩の傾斜角が10°前後の非常に緩やかなものであるが、この比高差を考えると墳丘に近づくに従って、傾斜がきついものとなりさらに周濠の落ち込みは明確なものになると思われる。纏向石塚古墳の周濠は、おそらく墳丘盛土のための土取りや墳丘範囲の明確化の要素が強く<sup>7)</sup>、箸墓古墳の周堤などにみられるような周濠そのものを整備するといった意識は低いと思われる。ただ、後円部に大規模な周濠を持ち、前方部を区画溝的な周濠で陸部と切断していることや、馬蹄形に近い形を整えているということは前段階のものより、後の大型前方後円墳がもつ整備された「周濠」に近づくものと位置づけることができよう<sup>8)</sup>。各地域の発生期の前方後円墳を比較する場合、これまでどちらかといえば墳丘の形状中心に研究が進んできたわけだが、今後、周濠の形状や構造も含めて検討する必要があるだろう。



**方形周溝墓** もう一つの成果として、纏向石塚古墳に近接した形で、方形周溝墓だと考える遺構が2基検出されている。特に、方形周溝墓1からは庄内3式期だと思われる多量の土器が出土している。纏向石塚古墳の周濠と重複しているため、その先後関係をつかめれば纏向石塚古墳の上限がおさえられる可能性があった。しかしながら、前述したように平安時代頃まで落ち込みとして存在していた事を示す纏向石塚古墳周濠の最上層が、方形周溝墓の溝の上に堆積しているという結果を得ただけで、築造当初の前後関係は土層の堆積状況からは判断できなかつた<sup>10)</sup>。一方、方形周溝墓2に関しては4-4トレンチからその溝が検出されていないことなどから、周濠とは重ならない。方形周溝墓の主軸の方向を見れば、周濠の外肩のラインと平行しており、周濠を意識して築造されたようにみえる。また、出土土器は布留0式期と思われ、このことから纏向石塚古墳の築造後に構築された可能性が高い。

これまで方形周溝墓をはじめとした小規模墳墓は、纏向遺跡の居住域である微高地の縁辺部を中心に検出されたものが多く、遺跡そのものの外縁部に築かれている前方後円墳と墓域が異なることが指摘されてきた。一方、前方後円墳に近接して築かれた小規模墳墓の例は東田大塚古墳周濠肩部の土器棺墓などで、この二者の立地のあり方の違いは前方後円墳の被葬者との関係の違いを表しているのだと考えられている<sup>11)</sup>。今回の調査では、全長100mに近い規模の古墳に隣接した形で方形周溝墓が初めて検出されたが、そのうち、方形周溝墓2に関しては纏向石塚古墳よりも後出する可能性が高く、古墳の被葬者に対して従属的な性格を考えることも可能であろう。一方、方形周溝墓1に関してはその先後関係の結果によって、纏向石塚古墳の被葬者との関係は異なる可能性があり、慎重な評価が必要になるであろう。これらの遺構の状況は、纏向石塚古墳の築造年代を含めて大きな課題である。

(丹羽)

【註記】

1) 以下の文献によれば、調査地周辺に12センチ高角砲6門あったと記されている。

高野真幸「太平洋戦争と天理」『山辺の歴史と文化』天理大学文学部編 2006

2) 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会 1976

3) 本書第6章を参照。

4) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

5) 近隣の5世紀後半以降の古墳として、ヤナイタ古墳群、トリイノ前古墳、勝山東古墳、高塚古墳群、堀川古墳などがあげられる。

橋本輝彦『纏向へいこう!』桜井市立埋蔵文化財センター 2003

6) 本書第6章を参照。

7) これまでの調査において確認されているように、後円部と周濠の前方部の幅や深さの規模が異なっている。これらは、後円部に比べ、前方部は低いため、後円部と前方部では、大きく盛土量が異なるものが原因であろう。周濠掘削する上で、一瀬氏がいうように、後円部と前方部の集合は、異なった原理で掘られているのかもしれない。おそらく、クビレ部付近で、周濠の規模が変化すると思われる。

一瀬和夫「前方後円形墳丘の周溝掘削パターンと区画性－前方後円形成立に関する覚え書き－」『古代学研究』112 古代学研究会1986

一瀬和夫「周濠」『古墳時代の研究』第7巻 雄山閣 1992

8) 福辻氏の指摘するように今回検出された落ち込みや纏向石塚古墳でこれまで確認された「周濠」は「土取り」の跡であって、一瀬氏(註7)文献)の定義されたような「周濠」が未成立の段階のもので、「周濠」と呼ぶのは適切ではない可能性がある。既往の調査と混乱が生じないように、便宜的に周濠という表現を用いる。今後、定義の問題を含めて検討したい。

福辻淳「纏向遺跡第142次発掘調査報告」『桜井市平成16年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会 2005

- 10) 方形周溝墓 1 の規模（1 辺 8 m 前後）を考えると、南西側の墳丘は明らかに纏向石塚古墳の周濠内に復元することになる。方形周溝墓 1 の築造が古墳より後出するものであるならば、周濠に造り付けるように築造され、その平面形もいびつなものであったと想定しなければならず、素直にみれば纏向石塚古墳の周濠を掘削する際に削平されたと考えられる。断面で検証できない以上、早急な結論は差し控えるべきだが、方形周溝墓 1 の扱いは、纏向石塚古墳の築造年代を検討する上でも、一つの重要な要素となる。
- 11) 橋本輝彦「纏向遺跡の墳墓について～小規模な埋葬施設の検討から」『東田大塚古墳』（財）桜井市文化財協会 2006



表 93 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (1)

図番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調整技法				色調	備考		
					口縁部		体部				底部（脚部）	
図版 番号												
131-1 138-1	方形周溝墓 1 北東隅下層	小形丸 底鉢	I - A <sub>1</sub> - a	C : 98	O. スリナデナヨコ I B i. スリナデナヨコ I B	多 /cm 多 /cm	O. スリナデナメ I A a i. ケズリ A	8 /cm	O. スリナデナメ I A a i. スリナデナメ I A a	8 /cm 10 /cm	O. 75Y R6/6橙 ～75Y R6/4にぶい橙 i. 5Y R6/6橙	・ 外面にスス付 着 ・ 内面に朱塗布
131-2 138-2	方形周溝墓 1 南溝	小形丸 底鉢	I - A <sub>2</sub> - a	C : (96) H : 75	O. スリナデナメ I A a i. スリナデナヨコ I C a	10 /cm	O. スリナデナメ I A a i. 押捺 A → スリナデ I A b	10 /cm	O. 左上がりタタキ → スリナデナメ I A a i. 押捺 A → スリナデ I A b	40 /CM 5 /cm	O. 75Y R5/3にぶい褐 ～N3暗灰 i. 75Y R5/3にぶい褐	
131-3 146-3	方形周溝墓 1 東溝	小形丸 底鉢	II - A <sub>1</sub> - b	C : (90)	O. スリナデナヨコ I C a i. スリナデナヨコ I C a		O. マメツ不明 i. ケズリ A				O. 10Y R4/2灰黄褐 i. 10Y R3/1黒褐	
131-4 138-4	方形周溝墓 1 東溝	小形丸 底鉢	II - A <sub>1</sub> - a	C : 10.4 H : 56	O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. ミガキ A ヨコ i. マメツ不明		O. ケズリ A i. マメツ不明		O. 75Y R7/4にぶい橙 ～5Y R6/6橙 i. 75Y R7/4にぶい橙	
131-5 138-5	方形周溝墓 2 北東隅	鉢	II - E <sub>2</sub> - a	C : 18.1 H : 89 B : 25	O. スリナデナヨコ I C a → ミガキ A ヨコ i. ミガキ A ヨコ		O. スリナデナメ I A a → i. スリナデナメ I A a → ミガキ A ヨコ	5 /cm 8 /cm	O. ミガキ A タテ i. ミガキ A タテ		75Y R7/6橙	
131-6 138-6	方形周溝墓 1 東溝	底部 (鉢)	I - B - ・	B : 50			O. 押捺 A i. 押捺 A → スリナデ I A b		O. 押捺 A i. 押捺 A		O. 10Y R6/3にぶい黄橙 ～N3暗灰 i. 10Y R6/2灰黄褐	
131-7 146-7	方形周溝墓 1 東溝	底部 (甕 Y)	3 - C - ・	B : 30					O. スリナデナメ I A a i. スリナデナメ I A b	8 /cm	10Y R4/2灰黄褐	・ 外面にスス付 着
131-8 138-8	方形周溝墓 1 北東隅	壺	T - A <sub>2</sub> - a	C : 98 H : 11.1 W : 13.5	O. スリナデナヨコ I C a → ミガキ A タテ i. スリナデナヨコ I A a → ミガキ A ヨコ	5 /cm	O. (唇) スリナデナメ I A b (脚) スリナデ I C i. スリナデナヨコ I C a		O. スリナデ I C a i. 押捺 A → スリナデ I C a		O. 10Y R7/4にぶい黄橙 ～5Y R5/6明赤褐 → N2 黒 i. 10Y R7/4にぶい黄橙	
131-9 138-9	方形周溝墓 1 北東隅	壺	T - A <sub>1</sub> - a	C : (66) W : (136)	O. スリナデナヨコ I C i. スリナデナヨコ I C a		O. ミガキ A i. 押捺 A → スリナデ I C a		O. 押捺 A → マメツ不明 i. 押捺 A → スリナデ I C a		O. 10Y R7/3にぶい黄橙 ～5Y R5/6明赤褐 ～N2 黒 i. 75Y R6/4にぶい橙 ～75Y R4/2灰褐	
131-10 138-10	方形周溝墓 1 北東隅	壺	C - ・ - ・	W : 163			O. マメツ不明 i. スリナデナメ I C a		O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. 5Y R5/4にぶい赤褐 ～5Y R6/4にぶい橙 i. N4/灰	・ 外面にスス付 着
131-11 138-11	方形周溝墓 1 東溝	小形器 台	II - C <sub>3</sub> - a	C : 90 H : 82 B : 10.2	O. ミガキ A ヨコ i. ミガキ A ヨコ		O. ケズリ A → ミガキ A ヨコ i. ミガキ A ヨコ		O. (上半) ケズリ A タテ → ミガキ A ヨコ (下半) ミガキ A ヨコ i. スリナデナヨコ I A a	10 /cm	O. 5Y R5/6明赤褐 i. 75Y R6/3にぶい褐	・ 4方スカシ

表 94 纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物観察表 (2)

図番号 図版 番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) c m	調整技法				色調	備考
					口縁部	体部	底部 (脚部)			
131-12 138-12	方形周溝墓 1 北東隅	脚台 (小形器 台)	Ⅱ - ・ - ・	B : 12.0			O. ミガキ A ヨコ i. スリナデヨコ I C a		O. 5Y R 5/4 にぶい赤褐 ~ N3/暗灰 i. 5Y R 5/4 にぶい赤褐	
131-13 138-13	方形周溝墓 1 北東隅	小形 器台	I - C <sub>2</sub> - b	C : 10.2 H : 9.1 B : 10.6	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. マメツ不明		5Y R 5/6 明赤褐 ~ 5Y R 6/3 にぶい橙	・ 3 方スカシ
131-14 138-14	方形周溝墓 1 北東隅	小形 器台	Ⅱ - C <sub>3</sub> - a	C : 8.9 H : 8.6 B : 13.0	O. ミガキ A i. マメツ不明	O. ミガキ A i. マメツ不明	O. ミガキ A ヨコ i. スリナデヨコ I A a	9 / cm	5Y R 5/4 にぶい赤褐	・ 4 方スカシ
131-15 146-15	方形周溝墓 1 東溝	高坏		C : (12.8)	O. スリナデヨコ I C a → i. ミガキ A ヨコ	O. ミガキ A タテ i. ミガキ A タテ			5Y R 5/6 明赤褐 ~ 10Y R 6/3 にぶい黄橙 ~ 7.5 Y R 5/2 灰褐	
131-16 146-16	方形周溝墓 1 北東隅	高坏	B <sub>4</sub> - ・ - ・ - ・	C : (21.0)	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. マメツ不明			10Y R 7/4 にぶい黄橙	
131-17 138-17	方形周溝墓 1 北東隅	高坏	B <sub>4</sub> - 1 - A - c	C : 14.0 H : 11.2 B : 9.4	O. スリナデタテ I A a → i. ミガキ A ヨコ → ミガキ A タテ i. スリナデヨコ I B → ミガキ A タテ	O. ケズリ A i. ミガキ A タテ	O. (上半) ケズリ A → ミガキ A ヨコ (下半) スリナデタテ I A a → ミガキ A タテ i. スリナデヨコ I A a	10 / cm 10 / cm	5Y R 5/6 明赤褐	・ 2 方スカシ
131-18 138-18	方形周溝墓 1 北東隅	脚台 (高坏)	1 - A - c	B : 14.4			O. (上半) ケズリ A → スリナデタテ I A a → ミガキ A ヨコ (下半) ミガキ A タテ i. スリナデヨコ I A a	10 / cm 10 / cm	5Y R 6/6 橙	
131-19 138-19	方形周溝墓 1 北東隅	脚台 (高坏)	4 - B - a	—			O. ケズリ A → マメツ不明 i. マメツ不明		O. 7.5Y R 5/4 にぶい褐 i. 7.5Y R 6/4 にぶい橙	
131-20 138-20	方形周溝墓 1 北東隅	高坏	B <sub>5</sub> - 2 - A - c	C : 17.3 H : 11.4 B : 11.7	O. スリナデタテ I A a i. ミガキ A タテ	O. スリナデタテ I A a i. ミガキ A タテ	O. (上半) ケズリ A → ミガキ A ヨコ (下半) スリナデタテ I A a → ミガキ A タテ i. スリナデヨコ I A a	6 / cm 10 / cm	7.5Y R 6/4 にぶい橙 ~ 5Y R 6/6 橙 ~ N3/暗灰	・ 2 方スカシ
131-21 139-21	方形周溝墓 1 北東隅	高坏	B <sub>5</sub> - 4 - A - ・	C : 22.8 H : 16.4 B : 14.2	O. ミガキ A タテ i. ミガキ A タテ	O. ミガキ A タテ i. スリナデ I C a	O. (上半) ケズリ A → ミガキ A ヨコ (下半) ミガキ A タテ (端) スリナデナナメ I A a i. スリナデ I A a		O. 5Y R 6/6 橙 i. (坏) 10Y R 6/4 にぶい黄橙 ~ 2.5 Y 3/1 黒褐 (脚) 5Y R 6/6 橙	・ 3 方スカシ
132-22 146-22	方形周溝墓 1 北溝	甕	近江形 受口状口縁甕	C : (13.0)	O. (口唇) スリナデヨコ I C a (口頸) 右上がりタタキ → スリナデタテ I A a i. マメツ不明				7.5Y R 5/3 にぶい褐	・ 近江系

表 95 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (3)

図番号 図版 番号	地区 周位 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調整技法			色調	備考
					口縁部		体部		
132—23 146—23	方形周溝墓Ⅰ	甕 SY	Ⅱ－C－b	C：(126)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. マメツ不明 i. ケズリA		O. 10Y R6/3にぶい黄橙 i. 10Y R6/4にぶい黄橙	
132—24 146—24	方形周溝墓Ⅰ 東溝	壺	T－A <sub>1</sub> －b	C：(164)	O. (口唇) 刻目 スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. ハクリ不明 i. ケズリA→ スリナデヨコⅠCa		5Y R5/4にぶい赤褐 ～5Y R5/6明赤褐	
132—25 146—25	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 F	Ⅰ－C－5g	C：(168)	O. マメツ不明 i. スリナデヨコⅠCa	O. スリナデタテⅠAa i. ケズリA	8/cm	7.5Y R7/3にぶい橙 ～7.5Y R7/4にぶい橙	
132—26 146—26	方形周溝墓Ⅰ 東溝	甕 Y	Ⅰ－・－・b	C：(194)	O. スリナデヨコⅠCa i. マメツ不明	O. 不明 i. マメツ不明		O. 10Y R6/3にぶい黄橙 i. 7.5Y R6/4にぶい橙	
132—27 146—27	方形周溝墓Ⅰ 東溝	甕 SY	Ⅱ－C－・・d	C：(156)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠAb	O. タタキ i. ケズリA	40/CM	O. 10Y R6/1褐灰 ～N4灰 i. 10Y R6/2灰黄褐 ～10Y R6/3にぶい黄橙	
132—28 146—28	方形周溝墓Ⅰ 東溝	甕 SY	Ⅱ－C－・・d	C：(140)	O. スリナデヨコⅠB i. スリナデヨコⅠCa	O. タタキ i. ケズリA	40/CM	7.5Y R6/4にぶい橙	
132—29 139—29	方形周溝墓Ⅰ 東溝	甕 SY	Ⅱ－C－5e <sub>1</sub>	C：160	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. マメツ不明 i. ケズリA		7.5Y R6/4にぶい橙	
132—30 146—30	方形周溝墓Ⅰ 北溝	甕 Y	Ⅰ－C－・・a	C：(162)	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	50/CM	O. 7.5Y R7/6橙 ～7.5Y R7/3にぶい橙 i. 10Y R7/2にぶい黄橙	
132—31 146—31	方形周溝墓Ⅰ 東溝	甕 SY	Ⅰ－C－5e <sub>1</sub>	C：(156)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. スリナデタテⅠAa→ スリナデヨコⅠAa i. ケズリA	6/cm 6/cm	7.5Y R7/6橙	
132—32 139—32	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	Ⅰ－C－・・d	C：(150)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. 左上がりタタキ→ スリナデタテⅠCa i. ケズリA	40/CM	O. 7.5Y R6/3にぶい褐 ～7.5Y R4/2灰褐 i. 7.5Y R6/4にぶい橙	・外面にスス付 着
132—33 146—33	方形周溝墓Ⅰ 東溝	甕 SY	Ⅱ－C－・・a	C：(130)	O. スリナデヨコⅠCa i. マメツ不明	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	40/CM	10Y R6/3にぶい黄橙	

表 96 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (4)

図番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) c m	調整技法				色調	備考	
					口縁部		体部				底部 (脚部)
132—34 139—34	方形周溝墓1 東溝	甕 SK	I－C－・d	C：(17.4)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa		O. 右上がりタタキ i. ケズリA	60/CM		O. 7.5Y R5/3にぶい褐 ～7.5Y R5/4にぶい褐 i. 7.5Y R6/3にぶい褐	
132—35 139—35	方形周溝墓2 北溝	甕 SY	I－C－・d	C：(15.8)	O. 左上がりタタキ→ スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	30/CM	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	30/CM		O. 7.5Y R7/4にぶい橙 ～5Y 5/1灰 i. 10Y R6/2灰黄褐 ～5Y 5/1灰	
132—36 146—36	方形周溝墓1 東溝	甕 SY	I－C－・a	C：(17.6)	O. 左上がりタタキ→ スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	40/CM	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	40/CM		O. 7.5Y R5/4にぶい褐 i. 10Y R6/2灰黄褐 ～N3/暗灰	
132—37 139—37	方形周溝墓1 北東隅	甕 SY	Ⅱ－C－・e <sub>1</sub>	C：(14.8)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa		O. 左上がりタタキ i. ケズリA	40/CM		7.5Y R6/4にぶい橙 ～7.5Y R4/1褐灰 ～5Y R5/2灰褐	・外面にスス付 着
132—38 139—38	方形周溝墓1 北東隅	甕 Y	I－C－5e <sub>1</sub>	C：13.4	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠAa	7/cm	O. スリナデタテⅠAa i. ケズリA	5/cm		7.5Y R6/4にぶい橙 ～7.5Y R4/1褐灰	・外面にスス付 着
132—39 139—39	方形周溝墓1 東溝	甕	I－C－・d	C：(13.2)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa		O. スリナデタテⅠAa i. 押捺A→ケズリA			O. 7.5Y R6/3にぶい褐 ～7.5Y R3/1暗褐 i. 7.5Y R6/3にぶい褐	・外面にスス付 着
132—40 139—40	方形周溝墓1 北東隅	脚台 (甕)	東海形 S字口縁甕	—					O. スリナデタテⅠAa i. (甕) スリナデナナメⅠAa (脚) 押捺A	4/cm 6/cm O. 7.5Y R7/4にぶい橙 ～10Y R7/2にぶい黄橙 ～10Y R2/2灰黄褐 i. 10Y R6/2灰黄褐 ～10Y R5/2灰黄褐	・東海系
132—41 139—41	方形周溝墓1 北東隅	脚台 (甕)	東海形 S字口縁甕	B：7.6					O. スリナデタテⅠAa i. 押捺A	5/cm O. 5Y R6/4にぶい橙 ～7.5Y R4/3褐 i. 10Y R6/2灰黄褐	・東海系
133—42 139—42	方形周溝墓1 北東隅	甕 Y	Ⅲ－C－1a	C：12.6 H：9.6 B：3.6	O. スリナデタテⅠAa→ スリナデヨコⅠCa→ i. スリナデヨコⅠAa→ スリナデヨコⅠCa	4/cm 4/cm	O. 右上がりタタキ→ スリナデⅠCa i. ケズリA	30/CM		O. 7.5Y R6/4にぶい橙 ～7.5Y R4/1褐灰 i. 7.5Y R6/4にぶい橙	
133—43 139—43	方形周溝墓1 東溝	甕 SY	Ⅲ－C－1d	C：11.7 H：11.9 W：12.3	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデナナメⅠAb		O. 左上がりタタキ i. ケズリA	50/CM		O. 5Y R6/6橙～N2/黒 i. 5Y R6/6橙	
133—44 139—44	方形周溝墓1 北東隅	甕 SY	Ⅱ－C－4・	W：15.4			O. 右上がりタタキ→ スリナデタテⅠAa i. ケズリA	8/cm		O. 5Y R5/4にぶい赤褐 ～5Y R4/1褐灰 i. 5Y R6/4にぶい橙 ～5Y R4/1褐灰	・外面にスス付 着

表 97 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (5)

図番号 図版 番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) c m	調整技法				色調	備考	
					口縁部		体部				底部 (脚部)
133—45 140—45	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	Ⅱ-C-Ⅰc	C : 14.5 H : 15.4 W : 15.4	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	30/CM	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	30/CM	O. 10Y R5/1褐灰 ～10Y R4/3にぶい黄褐 (底) 10Y R3/3暗褐 i. 2.5Y 4/1黄灰 ～2.5Y 3/1黒褐	・ 体部に1ヶ 所穿孔有 焼成後穿孔 (外 →内)
133—46 140—46	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	Ⅱ-C-4e <sub>1</sub>	C : (14.2) H : 16.1 W : 16.1	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. 左上がりタタキ→ スリナデタテⅠAa i. ケズリA	40/CM 4/cm	O. 左上がりタタキ→ スリナデタテⅠAa i. 抑捺A→ケズリA	40/CM 4/cm	O. 7.5Y R6/4にぶい橙 ～10Y R6/3にぶい黄橙 i. 7.5Y R6/4にぶい橙	
133—47 140—47	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	Ⅱ-C-Ⅰd	C : 13.8 H : 16.4 W : 16.0	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	40/CM	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	40/CM	O. 5Y R6/6橙～N3/暗灰 i. 5Y R6/6橙	・ 外面にスス付 着
133—48 140—48	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	Ⅱ-C-Ⅰe <sub>1</sub>	C : 14.2 H : 16.7 W : 16.4	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	30/CM	O. 左上がりタタキ→ スリナデタテⅠAa i. ケズリA	30/CM 4/cm	O. 2.5Y 6/3にぶい黄 ～7.5Y R6/4にぶい (底) N2/黒 i. 7.5Y R6/4にぶい橙 ～10Y R6/2灰黄褐	
133—49 140—49	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	Ⅲ-C-Ⅰd	C : 15.6 H : 17.0 W : 18.6	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	40/CM	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	40/CM	O. 2.5Y 6/2灰黄 i. 10Y R7/3にぶい黄橙	
133—50 140—50	方形周溝墓Ⅰ 東溝	甕 SY	Ⅱ-C-Ⅰe <sub>1</sub>	C : (13.4) H : 16.4 W : 17.3	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. 左上がり矢羽状タタキ i. ケズリA		O. タタキ→ スリナデタテⅠAa i. ケズリA→スリナデⅠCa	40/CM 8/cm	O. 10Y R6/2灰黄褐 ～10Y R5/2灰黄褐 ～N2/黒 i. 10Y R6/3にぶい黄橙	・ 外面にスス付 着
133—51 141—51	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	Ⅰ-C-e <sub>1</sub>	C : (16.0) W : (21.2)	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	40/CM			O. 7.5Y R6/6橙 ～5Y R6/6橙 i. 7.5Y R6/4にぶい橙 ～10Y R7/4にぶい黄橙	・ 外面にスス付 着
133—52 141—52	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	Ⅰ-C-・a	C : 17.0 W : 22.1	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa → スリナデヨコⅠCa	O. 左上がりタタキ→ スリナデタテⅠAa i. ケズリA	40/CM 4/cm			10Y R7/3にぶい黄橙	・ 外面にスス付 着
134—53 141—53	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	Ⅰ-C-Ⅰb	C : 14.0 H : 20.4 W : 19.6	O. スリナデヨコⅠCa i. マスツ不明	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	40/CM	O. 右上がりタタキ→ スリナデタテⅠAa i. ケズリA	40/CM 5/cm	O. 7.5Y R7/4にぶい橙 ～7.5Y R6/2灰褐 ～7.5Y R3/1黒褐 i. 7.5Y R6/3にぶい褐	・ 外面にスス付 着
134—54 141—54	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	Ⅰ-C-4d	C : 15.6 H : 21.9 W : 20.1	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. 左上がりタタキ i. ケズリA	50/CM	O. 左上がりタタキ→ スリナデタテⅠAa i. ケズリA	50/CM 5/cm	O. 10Y R7/2にぶい黄橙 ～10Y R7/3にぶい黄橙 ～N2/黒 i. 10Y R7/3にぶい黄橙	・ 外面にスス付 着
134—55 141—55	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	Ⅰ-C-4e <sub>1</sub>	C : 15.3 H : 20.6 W : 20.2	O. スリナデヨコⅠCa i. スリナデヨコⅠCa	O. 右上がりタタキ i. ケズリA	40/CM	O. 右上がりタタキ→ スリナデⅠCa i. ケズリA	40/CM	O. 7.5Y R7/3にぶい橙 ～10Y R6/6にぶい黄橙 i. 10Y R7/2にぶい黄橙	

表 98 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物観察表 (6)

図番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) cm	調整技法				色調	備考	
					口縁部		体部				底部 (脚部)
134-56 141-56	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	I-C-1e <sub>1</sub>	C : 17.6 H : 23.6 W : 23.0	O. 左上がりタタキ→ スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa	40/CM	O. (肩) 左上がりタタキ→ (胴) 左上がりタタキ→ スリナデタテIAa i. ケズリA	O. 左上がりタタキ→ スリナデタテIAa i. ケズリA	40/CM 9/cm	O. 5YR6/6橙 ～7.5YR5/4にぶい橙 i. 10YR6/3にぶい黄橙 ～10YR5/3にぶい黄褐	・ 外面にスス付 着
134-57 142-57	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 Y	I-C-3a	C : 17.4 H : 26.6 W : 23.6 B : 5.2	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコIB	多/cm 多/cm	O. (肩) 右上がりタタキ→ スリナデICa (胴) 右上がりタタキ→ スリナデタテIAa i. (肩) ケズリA→スリナデICa (胴) ケズリA	O. 右上がりタタキ i. ケズリA	30/CM 30/CM 4/cm	10YR5/3にぶい黄褐	・ 外面にスス付 着
134-58 142-58	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	甕 SY	I-C-5e <sub>1</sub>	C : (14.5) H : 19.8 W : 19.6	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコICa		O. スリナデICa i. ケズリA	O. スリナデICa i. 押捺A		O. 10YR6/3にぶい黄橙 ～5YR6/4にぶい橙 i. 10YR6/3にぶい黄橙	・ 外面にスス付 着 ・ 外面肩部に刺 突文有
135-59 142-59	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	壺	TC-D-a	C : 14.8 H : 30.6 W : 27.2 B : 5.1	O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. ミガキAタテ i. マメツ不明	O. ミガキAタテ i. マメツ不明		O. 7.5YR6/4にぶい橙 ～N3/暗灰 i. 7.5YR6/4にぶい橙	
135-60 143-60	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	壺	TC-C-a	C : (14.0) W : (30.9)	O. スリナデヨコIB i. スリナデヨコIB	多/cm 多/cm	O. スリナデタテIAa i. (肩) スリナデヨコICa (胴) ケズリA		7/cm	O. 10YR5/3にぶい黄褐 i. N2/黒～N4/灰	
135-61 142-61	方形周溝墓Ⅰ 北溝	壺	N-F <sub>2</sub> -b	C : (27.2)	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコICa i. (口縁) スリナデヨコICa→ スリナデヨコIAa (変) スリナデヨコIAa	7/cm 4/cm 7/cm				O. 2.5Y6/3にぶい黄 ～2.5Y5/2暗灰黄 i. 2.5Y2/1黒	
136-62 143-62	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	壺	T-A <sub>2</sub> -a	C : 11.4 W : (20.1)	O. ミガキAヨコ i. マメツ不明		O. (肩) ミガキAヨコ (胴) マメツ不明 i. ケズリA			O. 7.5YR7/4にぶい橙 i. 7.5YR7/4にぶい橙 ～10YR7/2にぶい黄橙	
136-63 146-63	方形周溝墓Ⅰ 東溝	鉢	I-E <sub>2</sub> -b	C : (25.0)	O. マメツ不明 i. スリナデヨコIAa→ スリナデヨコICa	7/cm	O. 左上がりタタキ i. スリナデヨコIAa→ スリナデヨコICa		40/CM 7/cm	10YR3/2黒褐	
136-64 143-64	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	鉢	I-E <sub>1</sub> -b	C : 24.4 H : 15.2 B : 6.2	O. スリナデヨコICa i. スリナデヨコIAa	5/cm	O. スリナデタテIAa→ ヨコIAa→ ミガキAタテ i. スリナデヨコIAb	O. 押捺A→ スリナデタテIAa i. スリナデナメIAa→ マメツ不明	5/cm 5/cm	O. 10YR7/3にぶい黄橙 ～10YR6/3にぶい黄橙 i. 10YR7/3にぶい黄橙 ～10YR6/3にぶい黄橙	・ 片口鉢
136-65 143-65	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	壺	H-C-b	C : (16.8)	O. スリナデタテIAa→ スリナデヨコICa i. マメツ不明	8/cm	O. スリナデタテIAa i. 押捺A→マメツ不明			O. 7.5YR6/4にぶい橙 i. 5YR6/4にぶい橙 ～N3/暗灰	
136-66 143-66	方形周溝墓Ⅰ 北東隅	底部 (壺)	2-C-b	B : 8.4			O. ケズリA i. スリナデタテIAa		9/cm	O. 5YR6/4にぶい橙 ～10YR6/2灰黄褐 ～2.5Y3/1黒褐 i. 10YR4/1褐灰	

表 99 纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物観察表 (7)

図番号 図版 番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) c m	調整技法				色調	備考
					口縁部		体部	底部 (脚部)		
136-67 143-67	方形周溝墓 2	壺	H - C - a	C : (14.8)	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. 押捺 A			O. 75Y R 8/4浅黄橙 i. 10Y R 8/6黄橙	
136-68 144-68	方形周溝墓 2	壺		W : 21.0		O. (明) スリナデタテ I A a → スリナデタテ I A b (脚) スリナデタテ I A a → スリナデタテ I A b i. ケズリ A	8 /cm 8 /cm		O. 10Y R 7/2にぶい黄橙 ～N2/黒 i. 10Y R 7/2にぶい黄橙 ～N4/灰	
136-69 144-69	方形周溝墓 2	甕	吉備形甕	C : 14.8 H : 25.0 W : 22.5	O. 櫛状スリナデヨコ I A a i. スリナデヨコ I C a	O. (明) スリナデタテ I A a (脚) スリナデナメ I A a →スリナデ I C a i. ケズリ A	8 /cm 8 /cm	O. スリナデナメ I A a → スリナデ I C a i. 押捺 A →ケズリ A	10Y R 6/3にぶい黄橙	・ 吉備系 ・ 外面に スス付 着
137-70 146-70	SK158	脚台 (小形器台)	Ⅱ - - - -	B : (9.1)				O. ミガキ A タテ i. マメツ不明	O. 75Y R 7/4にぶい橙 i. 75Y R 8/6浅黄橙	・ スカシ有 (個 数不明)
137-71 144-71	SK158	小形丸 底鉢	Ⅱ - A <sub>2</sub> - a	C : 10.8 W : 6.7	O. ミガキ A ヨコ i. ミガキ A ヨコ	O. ミガキ A ヨコ i. 押捺 A →ミガキ A ヨコ		O. ケズリ A i. スリナデヨコ I A b → ミガキ A ヨコ	O. 75Y R 6/4にぶい橙 ～N3暗灰 i. 75Y R 6/4にぶい橙	
137-72 144-72	SK158	壺	東海形瓢形壺	W : 12.9		O. (上半) スリナデタテ I A a (下半) スリナデナメ I A a i. ケズリ A →スリナデ I C a	10 /cm 10 /cm		O. 75Y R 6/4にぶい橙 ～N3暗灰 i. 75Y R 6/4にぶい橙	・ 東海系
137-73 144-73	SK158	甕 F	Ⅲ - C - 5 e <sub>1</sub>	C : 10.2 H : 11.4 W : 12.4	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a	O. スリナデタテ I A a i. ケズリ A	10 /cm	O. スリナデタテ I A a i. 押捺 A →ケズリ A	O. 10Y R 6/3にぶい黄橙 ～75Y R 6/4にぶい橙 ～N3暗灰 i. 10Y R 6/3にぶい黄橙 ～10Y R 6/4にぶい黄橙	・ 2 ヶ所穿孔? 有 焼成後穿孔 (外 →内)
137-74 144-74	SK158	高坏	B <sub>5</sub> - - - -	—	O. ミガキ A ヨコ i. マメツ不明	O. ミガキ A ヨコ i. マメツ不明			75Y R 6/6橙	
137-75 146-75	SK158	甕 F	I - C - 5 f	C : (17.2)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				10Y R 7/4にぶい黄橙	
137-76 144-76	SK158	甕 F	Ⅱ - C - 5 e <sub>1</sub>	C : 13.0 W : 17.1	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a	O. スリナデナメ I A a i. ケズリ A	10 /cm		75Y R 7/4にぶい橙 ～75Y R 6/4にぶい橙	
137-77 146-77	SK158	底部 (壺)	3 - A - c	B : (5.3)		O. ケズリ A i. スリナデ I A b			O. 75Y R 5/4にぶい褐 i. 10Y R 6/4にぶい黄褐	



表 100 纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物観察表 (8)

図番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) c m	調整技法				色調	備考
					口縁部		体部			
図版 番号										
137—78	SK158	甕 F	I—C—5 e <sub>1</sub>	C : 17.0 W : 24.8	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a	O. スリナデタテ I A a→ スリナデヨコ I A a i. ケズリ A	8/cm 8/cm		O. 5Y R6/4にぶい橙 ～10Y R6/3にぶい黄橙 i. 5Y R6/4にぶい橙	
145—78										
137—79	SX8	小形丸 底鉢	II—A <sub>2</sub> —a	C : (9.3)	O. マメツ不明 i. スリナデヨコ I B	O. マメツ不明 i. 押捺A→マメツ不明			O. 5Y R5/6明赤褐 i. 5Y R6/6橙	
146—79										
137—80	SX8	甕 F	II—C—5 e <sub>1</sub>	C : (12.6)	O. マメツ不明 i. スリナデヨコ I C a	O. マメツ不明 i. ケズリ A			7.5Y R6/6橙	
146—80										
137—81	SX8	甕 F	II—C—5 g <sub>1</sub>	C : (13.7)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a	O. マメツ不明 i. ケズリ A			O. 7.5Y R6/4にぶい橙 i. 7.5Y R6/6橙	
146—81										
137—82	SD160	高坏	B <sub>5</sub> —・—・—・	C : (23.0)	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. マメツ不明			10Y R7/3にぶい黄橙	
144—82										
138—83	SD159	高坏	北近畿形? 高坏	C : (7.9) H : 13.3 B : 9.8	O. マメツ不明 i. (上半) スリナデヨコ I A b (下半) スリナデヨコ I A a	O. マメツ不明 i. マメツ不明		8/cm	O. 10Y R6/3にぶい草橙 i. 10Y R5/3にぶい黄褐 ～10Y R5/1褐灰	・北近畿系?
145—83										
138—84	SD159	底部 (鉢)	I—B—・	B : 4.0					10Y R6/4にぶい黄橙	
145—84										
138—85	SD159	甕	東海形 S字口縁甕	C : (18.0)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a	O. 櫛状スリナデナナメ I A a i. マメツ不明	6/cm		O. 10Y R6/2灰黄褐 ～10Y R4/2灰黄褐 i. 2.5Y 6/2灰黄	・東海系
146—85										
138—86	SD159	甕 F	I—C—5 g <sub>1</sub>	C : (16.0)	O. マメツ不明 i. マメツ不明	O. マメツ不明 i. マメツ不明			7.5Y R6/4にぶい橙	
146—86										
138—87	SD159	甕 Y	I—C—・—a	C : (16.0)	O. スリナデヨコ I C a→ スリナデタテ I A a i. スリナデヨコ I C a	O. 右上がりタタキ→ スリナデタテ I A a i. ケズリ A	40/CM 10/cm		O. 10Y R4/3にぶい黄褐 ～10Y R3/1黒褐 i. 7.5Y R5/4にぶい褐 ～7.5Y R4/1褐灰	・外面にスス付 着
146—87										
138—88	SD159	甕 Y	I—C—5 b	C : (21.0)	O. スリナデヨコ I C a i. マメツ不明	O. スリナデタテ I A a i. ケズリ A	6/cm		O. 10Y R8/4透黄橙 i. 10Y R7/6明黄褐	
145—88										

表 101 纏向石塚古墳第 9 次調査出土遺物観察表 (9)

図番号 図版 番号	地区 層位	器種	形式	法量 (復元) c m	調整技法				色調	備考
					口縁部		体部			
138—89 145—89	SD159	甕 Y (F)	I - C - ・ b	C : (218)	O. スリナデヨコ I C a → i. スリナデヨコ I A a → スリナデヨコ I C a	5 /cm	O. スリナデタテ・ナナメ I A a i. ケズリ A	5 /cm	7.5Y R6/4にぶい橙	
138—90 145—90	SX161	小形丸 底鉢	II - A <sub>1</sub> - e <sub>1</sub>	C : 88 H : 74 W : 93	O. スリナデヨコ I C a → ミガキ A ヨコ i. マメツ不明		O. スリナデヨコ I C a → ミガキ A ヨコ i. スリナデヨコ I C a		7.5Y R6/4にぶい橙 ～7.5Y R6/6橙	
138—91 146—91	SX161	壺	T - B - b	C : (94)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I A b				10Y R6/4にぶい黄橙	
138—92 146—92	SX161	甕 F	II - C - 5 f	C : (121)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a		O. マメツ不明 i. ケズリ A		O. 10Y R6/4にぶい黄橙 i. 7.5Y R7/4にぶい橙	
138—93 146—93	SX161	甕 F	I - C - 5 g <sub>2</sub>	C : (151)	O. マメツ不明 i. スリナデヨコ I C a		O. マメツ不明 i. ケズリ A		O. 7.5Y R7/6橙 ～7.5Y R6/6橙 i. 7.5Y R7/6橙	
138—94 145—94	SX161	甕 F	II - C - 5 g <sub>1</sub>	C : (138)	O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. マメツ不明 i. ケズリ A		7.5Y R6/4にぶい橙	
138—95 146—95	SX161	甕 F	II - C - 5 e <sub>1</sub>	C : (119)	O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. マメツ不明 i. ケズリ A		O. 5Y R6/6橙 i. 7.5Y R6/4にぶい橙 ～7.5Y R7/4にぶい橙	
138—96 146—96	SX161	甕 F	I - C - 5 f	C : (158)	O. マメツ不明 i. スリナデヨコ I C a		O. マメツ不明 i. ケズリ A		O. 7.5Y R6/6橙 i. 10Y R5/2灰黄褐	
138—97 146—97	SX161	甕 F	I - C - 5 f	C : (162)	O. マメツ不明 i. マメツ不明		O. マメツ不明 i. ケズリ A		O. 10Y R7/4にぶい黄橙 i. 10Y R8/4浅黄橙	
138—98 145—98	SX161	甕 F	I - C - 5 e <sub>1</sub>	C : (148)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a		O. マメツ不明 i. ケズリ A		5Y R6/6橙	
138—99 146—99	SX161	鉢	I - F <sub>1</sub> - b	C : (274)	O. スリナデヨコ I C a → スリナデタテ I A a i. スリナデヨコ I A a	7 /cm 7 /cm	O. タタキ→ スリナデタテ I A a i. スリナデナナメ I A b	30 /CM 7 /cm	O. 7.5Y R7/4にぶい橙 ～2.5Y 5/1黄灰 i. 2.5Y 6/1黄灰 ～2.5Y 3/1黒褐	
138—100 146—100	SX161	壺	N - F <sub>2</sub> - b	C : (270)	O. スリナデヨコ I C a i. スリナデヨコ I C a				O. 10Y R7/4にぶい黄橙 i. 7.5Y R5/2灰褐	

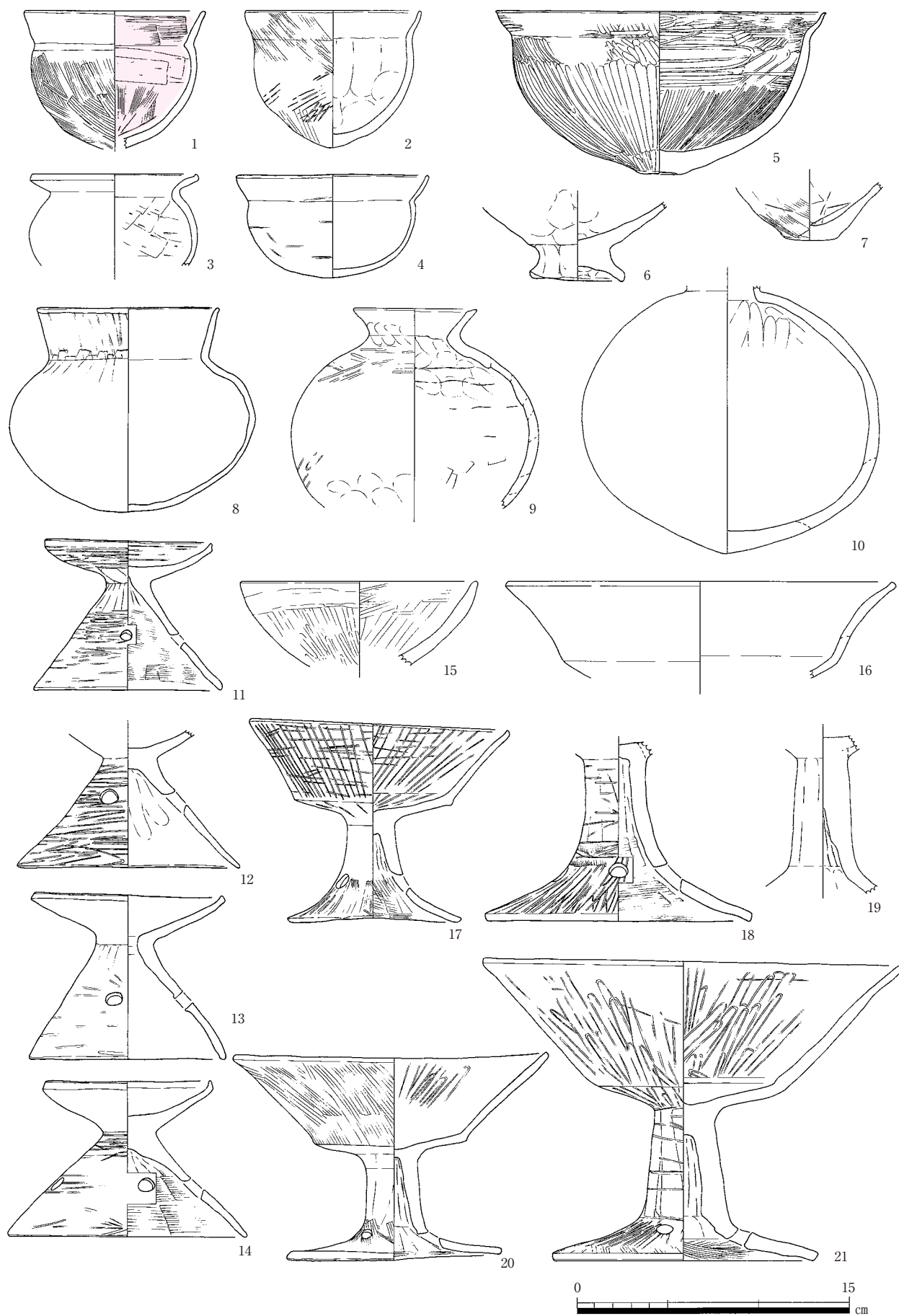


図131 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物実測図1 (1 / 3)  
1～21：方形周溝墓1

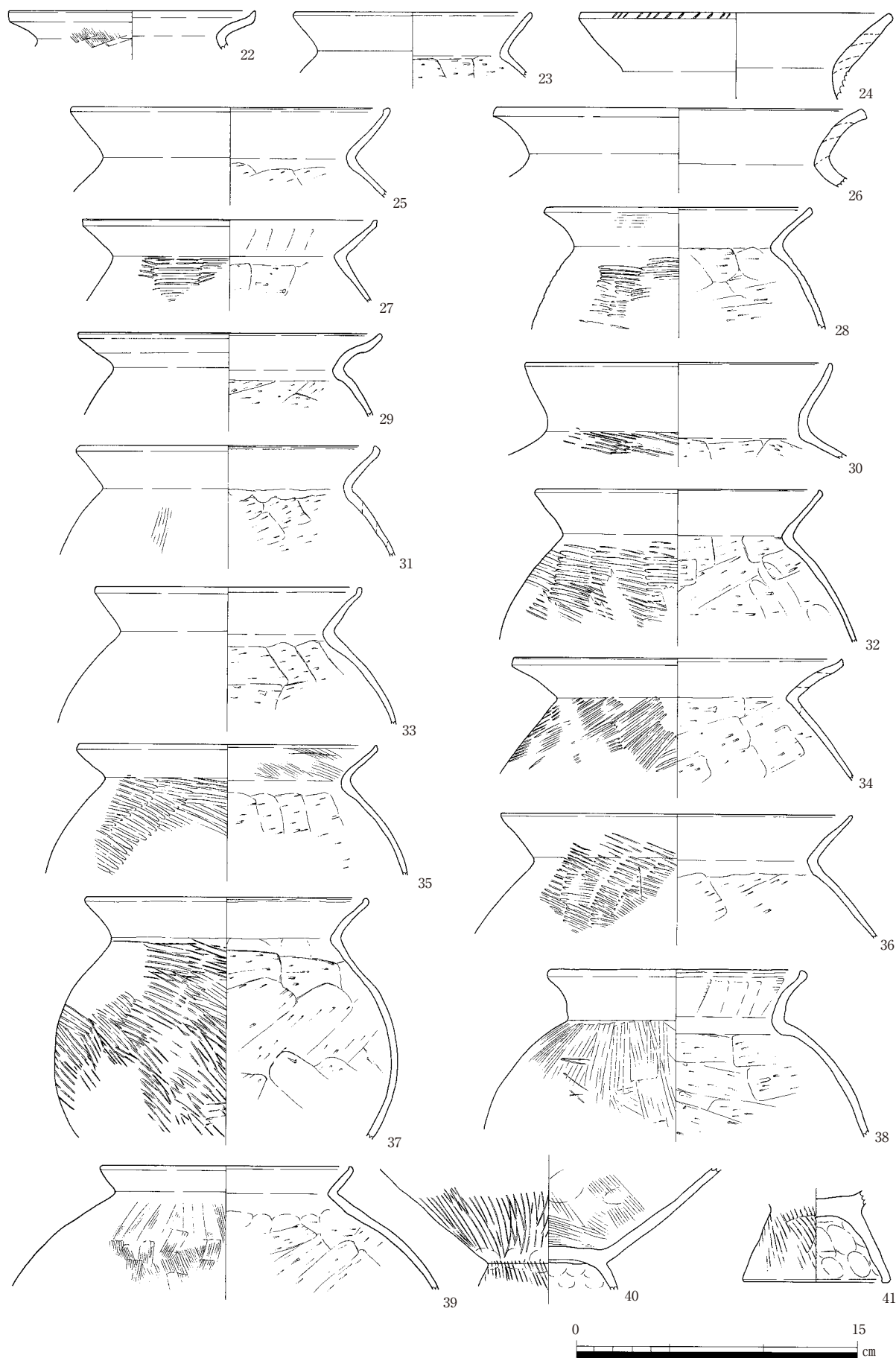


図132 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物実測図2 (1 / 3)  
22~41: 方形周溝墓1

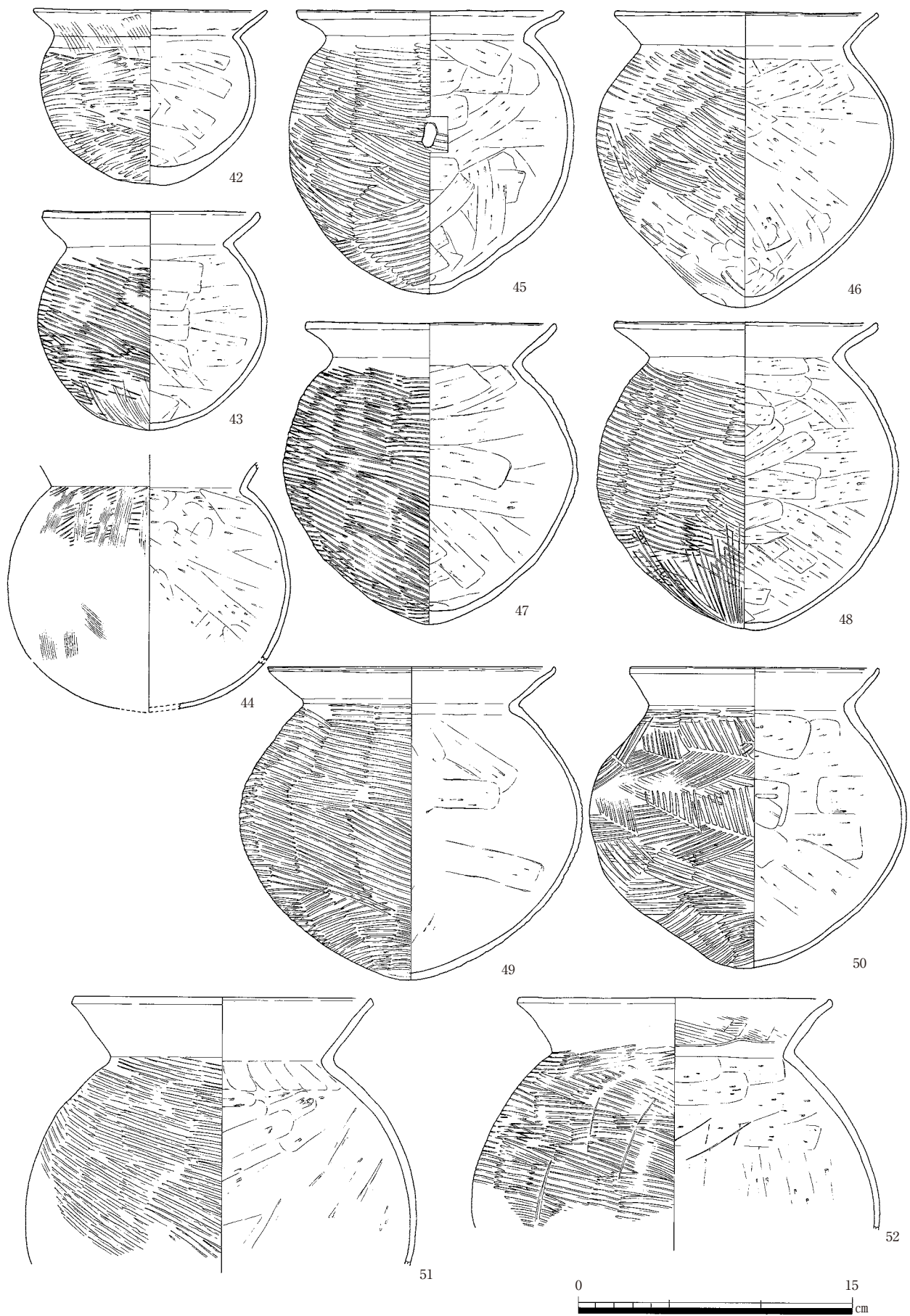


図133 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物実測図3 (1 / 3)  
42~52: 方形周溝墓1

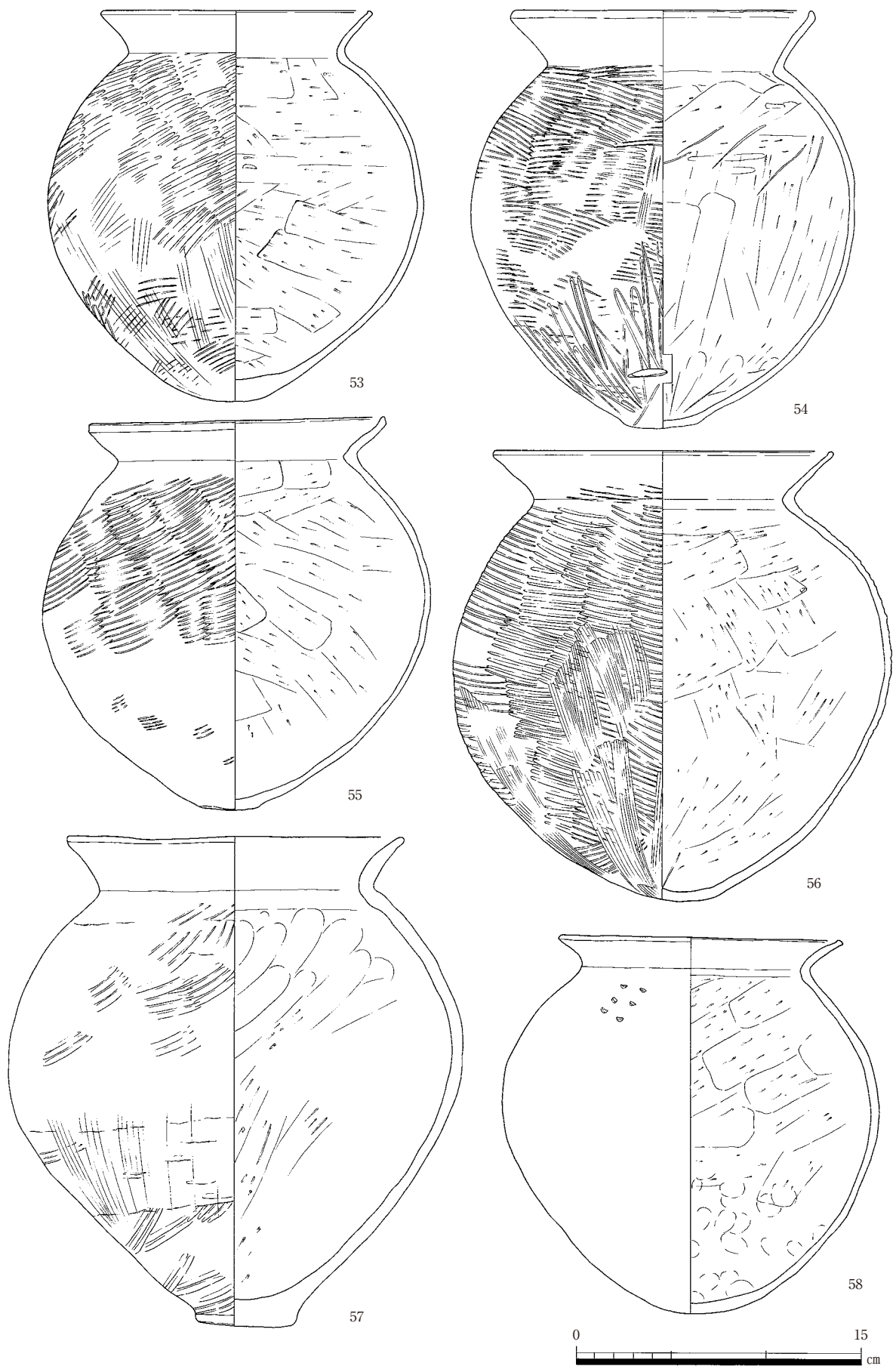


図134 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物実測図4 (1 / 3)  
53~58: 方形周溝墓1



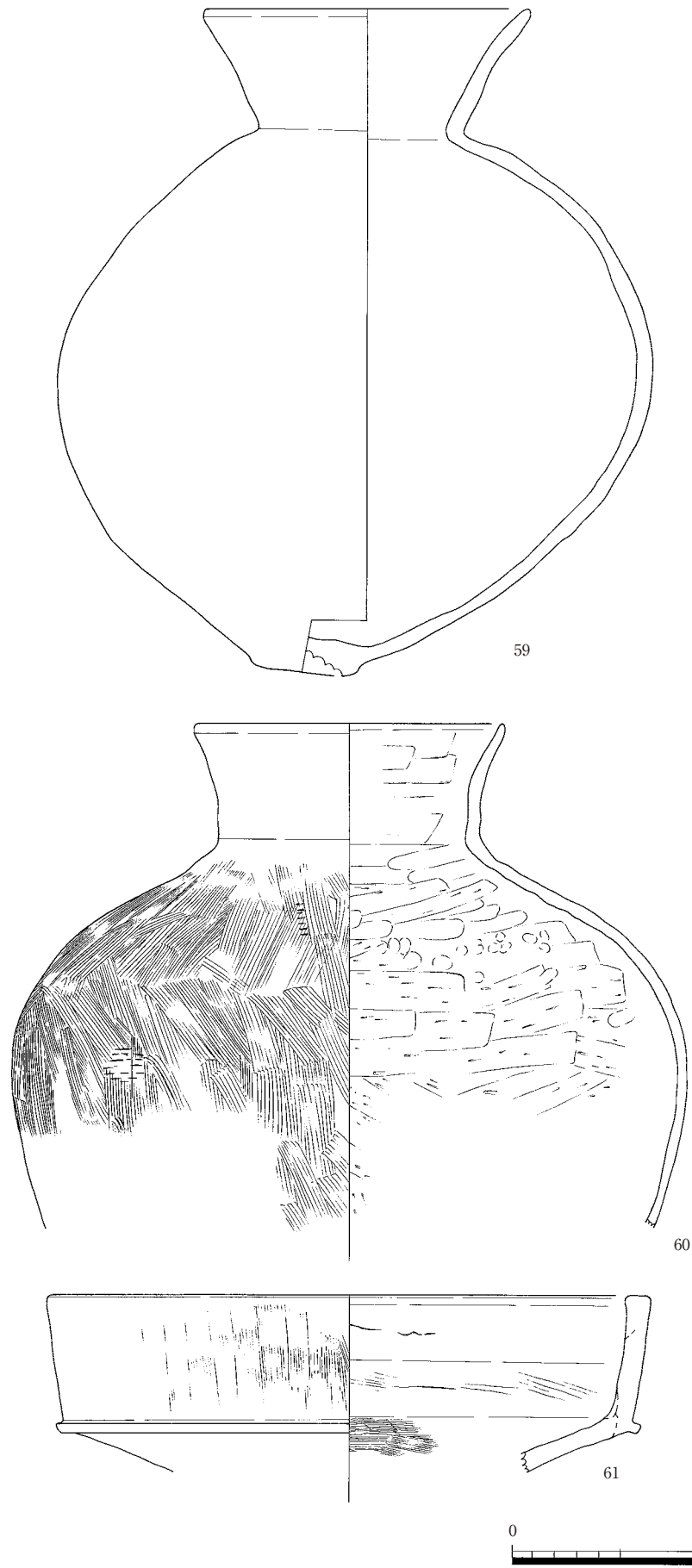


図135 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物実測図5 (1 / 3)  
 59~61: 方形周溝墓1



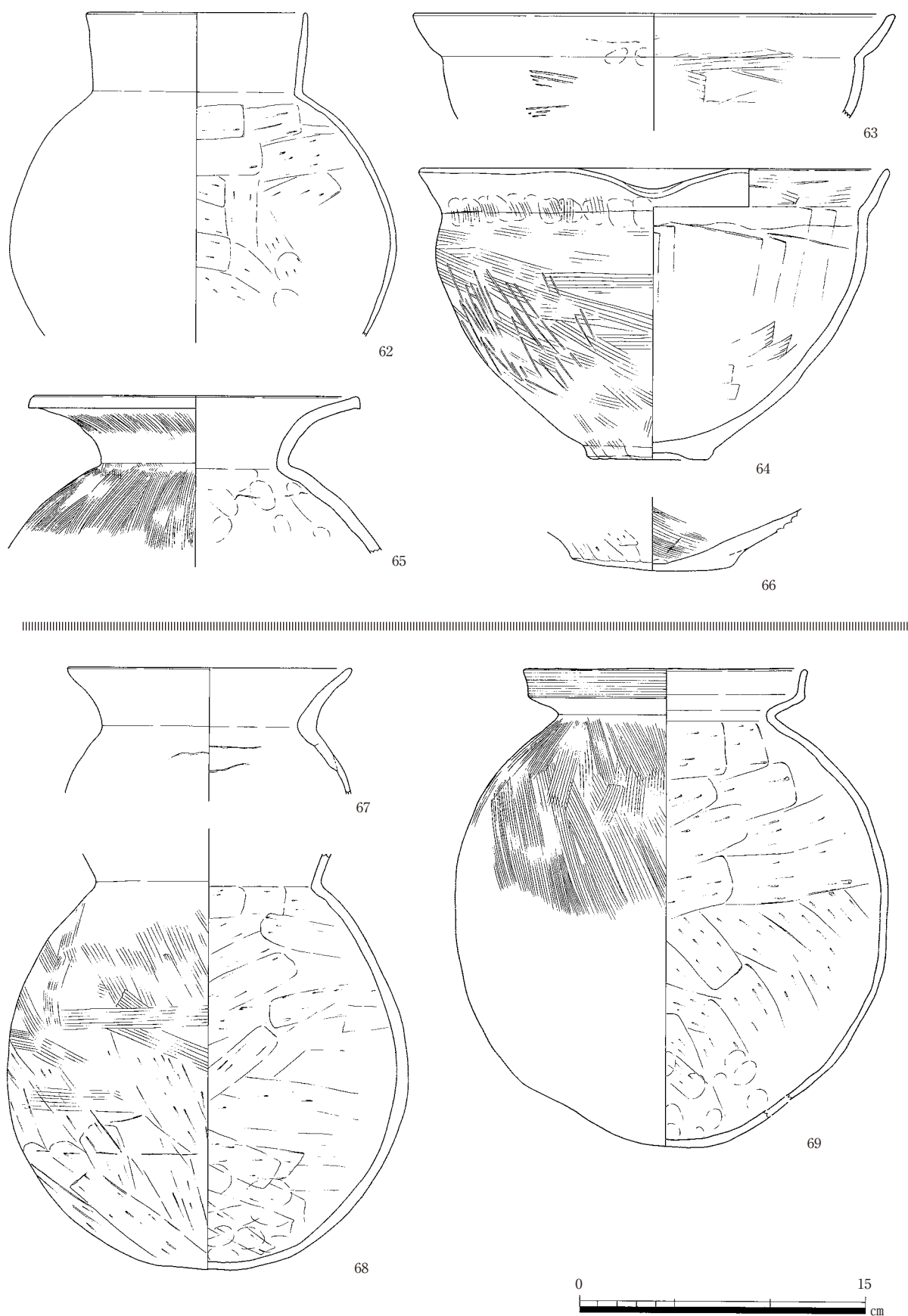


図136 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物実測図6 (1 / 3)  
 62~66: 方形周溝墓1 67~69: 方形周溝墓2

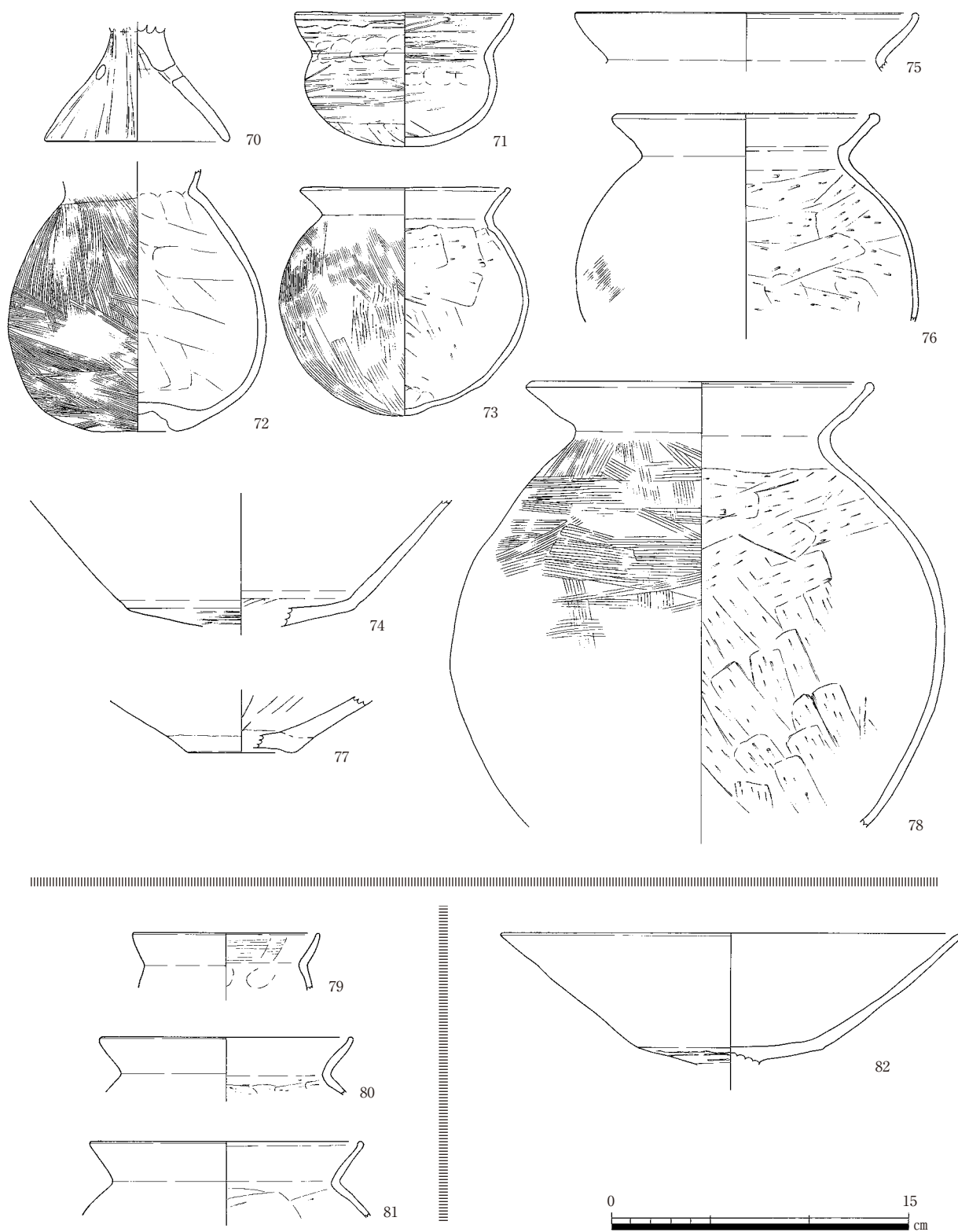


図137 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物実測図7 (1/3)  
 70~78 SK158 79~81 SX 8 82 SD160

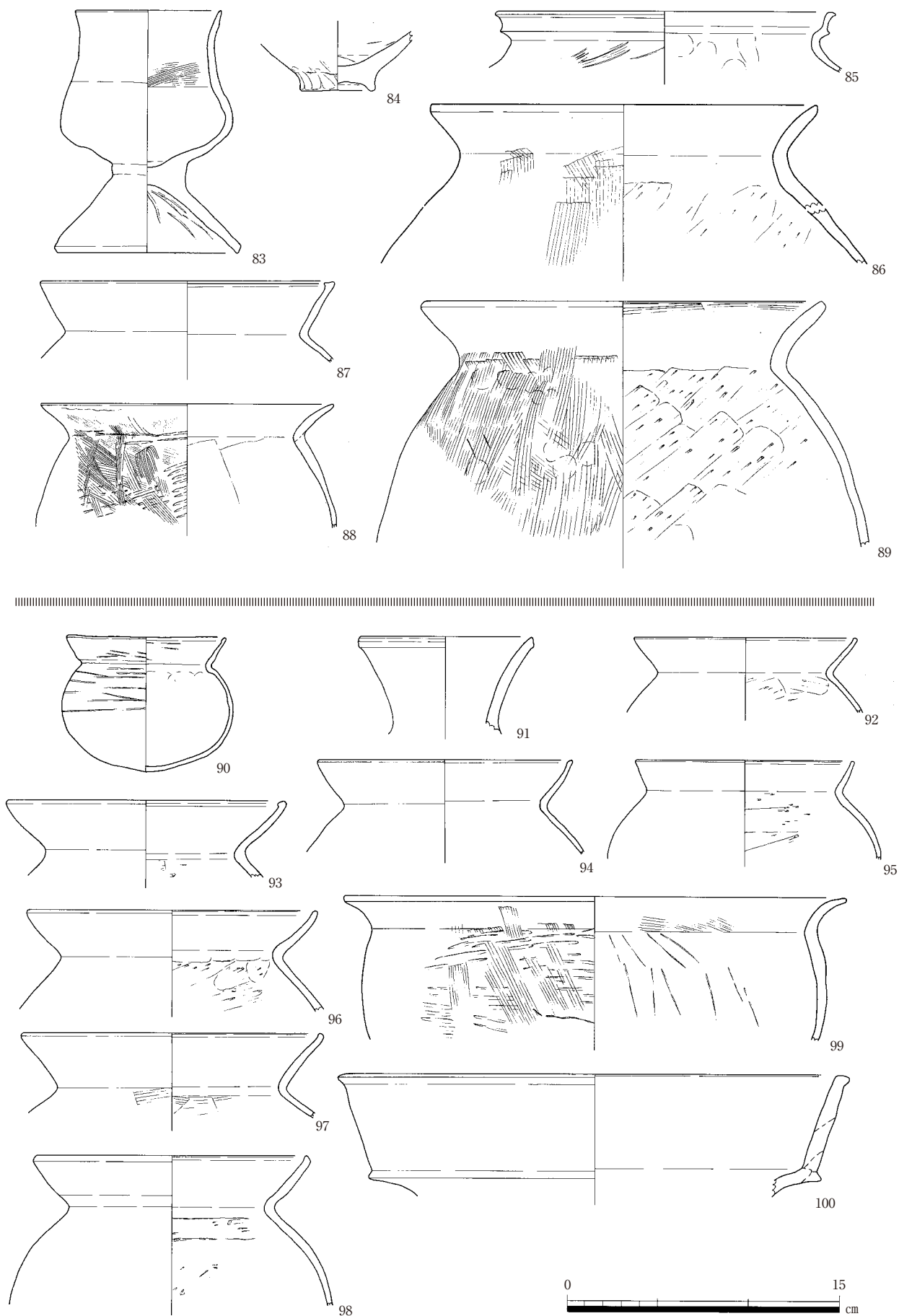


図138 纏向石塚古墳第9次調査出土遺物実測図8 (1 / 3)  
83~89 SD159 90~100 SX161

# 墳古塚石向纏

書 告 報 查 掘 發

編 析 分



## 第12章 分析結果

### 第1節 纏向石塚古墳第4次調査周濠内堆積物の植生および環境の復原

奈良教育大学 金原正明

奈良教育大学古文化財科学研究室

#### (1) はじめに

纏向石塚古墳第4次調査の周濠内堆積物の花粉分析と珪藻分析を行い、植生と環境の復原を行った。また、纏向石塚古墳周濠内下部に腐植の集積した堆積物があり、その生因についての検討を加えた。

#### (2) 試料と周濠内堆積物の様相

試料は調査区の北壁から整地層を除いて、ほぼ10cmおよび5cm毎に23試料を採取した(図141)。

周濠内堆積物は、各層における層相の著しい変化はなく、水平方向に一樣な堆積物が発達し、垂直方向には徐々に漸移する。総じて層理面の発達が悪く、葉理は顕著でない。纏向石塚古墳の周濠内堆積物は、穏やかな水域で堆積し、現地堆積性の強い堆積物とみなされる。次に断面観察および分析途中に観察された堆積物(試料)の特徴を記す。

下位より植物腐植土層下部(試料17~23)は、植物の腐植の堆積であるが固く、木本質の泥炭であり、エノキの材や核、スギの葉、クマノミズキ核、ヒサカキの材の大型植物遺体が多量に含まれていた。植物腐植土層上部(試料13~16)では、砂礫も少量含む比較的軟らかい腐植の堆積であり、カヤツリグサ科果実、セリ科果実の草本の遺体を多く含む。やや分解の進んだ草本質の泥炭である。

黒粘Ic層下部(試料10~12)は、砂が混じる黒泥化を受けた草本質泥炭からなり、カヤツリグサ科、セリ科の果実などが含まれる。本層は上位に向かって泥炭から泥質へと漸移する。黒粘Ic層上部(試料6~9)は、砂混じり粘土であり、カヤツリグサ科、セリ科の果実が少量含まれる。黒粘Ib層(試料2~5)は、砂混じりの粘土質シルトで有機質が分解しており、土壤生成作用を受ける。

暗褐色砂質土・整地層II(試料1)は、砂、シルトを主とするパサパサした土壤状の堆積物である。

#### (3) 花粉分析

##### 1. 方法

花粉遺体の分離は、水酸化カリウム処理・0.5mmの篩による篩別・沈澱による砂粒の除去・フッ化水素酸処理・アセトリシス処理の順に各物理化学処理を施し、行った。石炭酸フクシンで染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作製し、直ちに検鏡した。

花粉の同定は各分類群の形態的特徴を現生花粉標本と対比することによって行ったほとんどの分類群は属レベルで、他は種または科レベルであった。2つ以上の属または科にまたがる分類群はハイフンで結んで表記した。

花粉粒の計数は300個以上行い、他に花粉生産量の極めて少ない虫媒花や自花受粉花の植物の花粉を検出するため約2万から3万個の花粉粒を検鏡した。

各分類群は花粉総数を基数とする百分率を求めた。

## 2. 結果

### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉38、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉33、シダ植物孢子2形態の計77である。これらの学名と和名および粒数を表102に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図139に示す。なお、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。

分析の結果、同定した分類群を次に示す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ－シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、サクラ属、アカメガシワ、サンショウ属、キハダ属、ウルシ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ノブドウ、ブドウ属、ヒサカキ属、ミズキ属、カキ属、モクセイ科、ニワトコ属－ガマズミ属、マンサク科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属、ガマ属－ミクリ属、ヒルムシロ科、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ワレモコウ属、フウロソウ属、ツリフネソウ属、ミズユキノシタ属、セリ科、オオバコ属、アカネ科、ゴキヅル、キュウリ属、ミゾカクシ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

### 2) 花粉群集の特徴

分析の結果から特徴的な花粉の消長をもとに、下位からM I P－I帯からIV帯の4帯に分帯した。以下に分帯ごとの特徴を記載する。なお、スギ、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属－ムクノキ、ミズキ属、イネ科、カヤツリグサ科、オモダカ属、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節は、同一種類の花粉粒が複数個の塊で産出することがあった。

・M I P－I a帯（試料21から試料23）

樹木花粉の割合が草本花粉と比べて非常に高く80%を超える。コナラ属アカガシ亜属、スギ、エノキ属－ムクノキが10%以上の出現率を示し、次いでミズキ属、ニレ属－ケヤキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が約5～10%の出現率を示す。他にコナラ属コナラ亜属、クマシデ属－アサダ、クリ－シイ属、カバノキ属、ウルシ属、ニシキギ科、モクセイ科の樹木が伴われる。草本花粉はイネ科、カ



ヤツリグサ科が5%前後の出現率を示すのみであるが、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節などが伴われる。タデ属サナエタデ節にニワトコ属－ガマズミ属、ウコギ科が出現する。

・M I P－I b帯（試料17から試料20）

樹木花粉の構成は、前帯と変化しないが、スギが増加傾向を示し最上部で約35%にも達する。コナラ属アカガシ亜属やミズキ属は弱い減少傾向を示す。草本花粉はイネ科、カヤツリグサ科が5%前後の出現率を示すのみである。前帯の要素に加えてクワ科－イラクサ科、アカザ科－ヒユ科が連続して出現する。

・M I P－II a帯（試料14から試料16）

I・II帯に比べてエノキ属－ムクノキ、ミズキ属、ニレ属－ケヤキの樹木花粉の出現率が著しく低下し、イネ属型を伴うカヤツリグサ科、イネ科の草本花粉がやや急増する。スギは急減する。ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、ミズアオイ属の水生植物の草本花粉が出現する。

・M I P－II b帯（試料11から試料13）

イネ属型を伴うイネ科が上位に向かって増加し、カヤツリグサ科は減少する。草本花粉がやや高率となる。

・M I P－II c帯（試料2から試料10）

イネ科が著しく優占する。水田雑草の性格を持つオモダカ属、ミズアオイ属が安定して出現する。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が10%前後で安定して出現する。特に落葉広葉樹は低率または姿を消す。

#### （4）花粉分析から推定される植生と環境

周囲の植生と環境の移り変わりを推定復原する際に原地堆積性の強い堆積物であることを考慮に入れ、層位的に増減の著しい分類群、同一種類の花粉粒が複数個の塊でたびたび産出する分類群、風媒花の植物に比べて花粉生産量が極めて少なく運搬経路の異なる虫媒花や自花受粉花の植物でありながら連続的に出現する分類群、大型植物遺体の産出する分類群は、堆積域に影響しえる近接した周囲に分布するとみなすことができる。

M I P－I帯からIV帯で、出現率のうで主要素となり大きな増減のないコナラ属アカガシ亜属とイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、そして増減するものの著しく低率とはならないスギは、地域的に主要な森林要素であったとみなされる。他にモミ属、ツガ属、コウヤマキ、コナラ属コナラ亜属は各試料において出現し、周辺地域の普遍的な森林要素と考えられる。周辺地域には針葉樹の混ざる照葉樹林が分布していたと推定される。

##### 1）植物腐植土層下部下位（M I P－I a帯、試料21から試料23）の時期

エノキ（エノキ属－ムクノキは種実と木材からエノキとみなされる）、クマノミズキ（ミズキ属は種実からクマノミズキとみなされる）、ニレ属－ケヤキ、コナラ属アカガシ亜属の樹木が周濠に近接して生育していた。他にコナラ属コナラ亜属、クマシデ属－アサダ、クリーシイ属、カバノキ属、ウルシ属、ニシキギ科、モクセイ科の樹木も周囲に生育していた。堆積物も木本質泥炭であり、周囲は樹木

が極めて多い状態であった。エノキ、クマノミズキ、ニレ属－ケヤキにコナラ属アカガシ亜属、そしてコナラ属コナラ亜属、ウルシ属などが構成要素であり、近現代の二次林とは要素が異なるが、本古墳が造られた後の二次林化した様相を反映していると考えられる。草本ではミズアオイ属やタデ属サナエタデ節が生育するが、水生植物が少なく、周濠はそれらが生育しえる浅い水域や湿地状の環境が少なく、比較的深い水域を呈していたと推定される。また、周囲から植物遺体以外の堆積粒子の供給は非常に少なく安定した環境であり、腐植土層は築造当初ではなく周囲が二次林化した後の堆積物と考えられる

## 2) 植物腐植土層下部上位 (M I P－I b帯、試料17から試料20) の時期

植物腐植土層下部上位の時期は、引き続き周囲は樹木の多い環境であった。エノキ、クマノミズキ、ニレ属－ケヤキの樹木は周濠に近接して生育していたとみられる。スギが上位に向かい特徴的に増加する。不自然で、人為的な保護などの要因などが考えられる。周濠も引き続き池状の水域を持っていたと推定される。ヒトが活発に活動する所や農耕地に生育するアカザ科－ヒユ科、クワ科－イラクサ科が連続して検出され、周囲でヒトによる何らかの改変が行われている。

## 3) 植物腐植土層上部中下位 (M I P－II a帯、試料14から試料16) の時期

周囲のエノキ、クマノミズキ、ニレ属－ケヤキ、スギの樹木が急激に減少する。伐採などの人為的要因が考えられる。カヤツリグサ科を主にイネ科の草本が多くなる。他にイネ属型、水生植物のオモダカ属、ミズアオイ属、ガマ属－ミクリ属が分布する。これら水生植物の繁茂から周濠は浅い水域から湿地の環境になり浅くなった。この変化は花粉群集の組成が急に変化し、堆積間隙や浸食による時間間隙を考えなければならないが、ここでは周囲における人為的な活動およびそれ周濠の環境への影響のためと推定される。周囲の樹木が著しく伐採され、周囲では水田が拡大しだし、周濠の水位は浅くなる。

## 4) 植物腐植土層上部上位から黒粘 I c層下部下位 (M I P－II b帯、試料11から試料13) の時期

上位に向かってイネ属型を含むイネ科が増加し、カヤツリグサ科が減少する。周囲では水田が拡大し、周濠に近接して水田が営まれる。黒粘 I c層下部は泥炭質の堆積物が水位の低下によってうける黒泥化が観察される。

## 5) 黒粘 I c層下部上位、黒粘 I c層上部、黒粘 I b層 (IV帯期、試料2から試料12) の時期

イネ科、イネ属型が増加し、カヤツリグサ科が減少する。それに伴い、オモダカ属とミズアオイ属の水田雑草の性格を持つ水生植物が比較的連続して出現し生育する。周囲が水田化され、周濠内にも水田雑草が増加したためか、周濠自体水田化した可能性もある。また、黒粘 I c下部層は泥炭質の堆積物が水位の低下によってうける黒泥化が観察され、水位の低下がみられ、周濠内は湿地状の環境がより多くなったと推定される。樹木は近隣にはほぼ生育せず、周辺の山地丘陵に地域的な森林としてコナラ属アカガシ亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が分布していた。

## (5) 珪藻分析

### 1. 方法

次の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。1) 試料から1 cm<sup>3</sup>を採量、2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置、3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗(5~6回)、4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥、5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製、6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600~1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。

## 2. 結果

### 1) 分類群

珪藻総数を基数とする百分率を算定した主要ダイアグラムを図140に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe (1974) などの記載により、陸生珪藻は小杉 (1986) により、環境指標種群と淡水生種は安藤 (1990) を参照した。以下に検出された主要珪藻を記す。

*Achnanthes lanceolata*, *Amphora copulata*, *Cymbella naviculiformis*, *Diploneis* spp., *Fragilaria construens*, *Gomphonema parvulum*, *Navicula americana*, *Navicula capitata*, *Navicula confervacea*, *Navicula difficillima*, *Navicula elginensis*, *Navicula gregaria*, *Navicula lapidosa*, *Navicula mutica*, *Navicula pupula*, *Navicula viridula* v. *rostellata*, *Nitzschia* spp., *Stauroneis lauenburgiana*, *Stauroneis phoenicenteron*, *Stauroneis smithii*

### 2) 珪藻群集の特徴

珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より5帯の珪藻分帯を設定し、分帯ごとに特徴を記載する。

#### ・M I D - I a帯 (試料21から試料23)

*Achnanthes lanceolata*, *Gomphonema parvulum*, *Navicula lapidosa* などの真・好流水性種が多く、*Navicula gregaria* などの流水不定性種が伴われる。

#### ・M I D - I b帯 (試料17から試料20)

真・好流水性種の *Achnanthes lanceolata* が優占し *Gomphonema parvulum* などが伴われる。

#### ・M I D - II 帯 (試料12から試料16)

*Achnanthes lanceolata* は減少するものの、*Navicula viridula* v. *rostellata* や *Navicula elginensis* の出現率が高くなり、真・好流水性種の占める割合は高い。*Navicula elginensis* は沼沢湿地付着生環境指標種群である。

#### ・M I D - III 帯 (試料6から試料11)

真・好流水性種の *Navicula elginensis* や真・好止水性種の *Stauroneis phoenicenteron* の沼沢湿地付着生環境指標種群と *Navicula confervacea* などの陸生珪藻が増加する。

#### ・M I D - IV 帯 (試料1から試料5)

各試料とも珪藻の密度が少ない。試料3では真・好流水性種の *Navicula elginensis* や真・好止水性種の *Stauroneis phoenicenteron* の沼沢湿地付着生環境指標種群と *Navicula mutica* などの陸生珪藻が

出現する。

### 3. 珪藻分析から推定される堆積環境

#### 1) 植物腐植土層下部 (M I D - I 帯、試料17から試料23) の時期

真・好流水性種が優占し、流れる帯水域が示唆される。その上部 (M I D - I b 帯、試料17から試料20) では、*Achnanthes lanceolata* が極めて優占し、特に湧水など比較的清水性の流水が滞水しつつ流れていた。

#### 2) 植物腐植土上部層から黒粘 I c 層下部最下位 (M I D - II 帯、試料12から試料16) の時期

真・好流水性種が優占し、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Navicula elginensis* が多くなることから、周濠は滞水しながら流れ、浅くなり、水生植物が繁茂するようになった。*Achnanthes lanceolata* は減少することから、やや水質の悪化が示唆される。

#### 3) 黒粘 I c 下部層中上部から黒粘 I c 層上部 (M I D - III 帯、試料6から試料11) の時期

真・好流水性種と真・好止水性種とも沼沢湿地付着生環境指標種群が多く、陸生珪藻が増加する。浅い淀みながら流れる水生植物の繁茂する帯水域が示唆され、湿地状ないし湿った程度の環境が上位に向かい拡大した。水田に多い *Amphora copulata* もやや多い。

#### 4) 黒粘 I b 層および整地層 II 最下位 (M I D - IV 帯、試料1から試料5) の時期

各層準とも珪藻の密度が少なく、珪藻の生育しにくい頻繁に乾湿を繰り返すような不安定な環境が堆積速度の速い環境が推定される。試料3からは湿った環境を主に浅く淀みながら流れ水生植物の繁茂する帯水域が示され、相対的に乾燥化する。

### (6) 考察とまとめ

植物腐植土層下位では、当初よりエノキ、クマノミズキ、ニレ属-ケヤキ、コナラ属アカガシ亜属の樹木が周濠に近接して生育し、周辺は二次林化していた。腐植土層は植物遺体以外の構成要素がほとんどなく、古墳が築造された後に二次林化し安定した時期の堆積であることが考えられる。エノキやクマノミズキは種実が多く含まれており、これらの樹木が種実を生産するほど大きくなった、少なくとも古墳が築造されてから数年以上経てからの堆積と考えられる。この時期は周濠が深く滞水しながら湧水等による清水が流れていた。

植物腐植土層上部の時期になると、花粉も珪藻もその構成と組成は植物腐植土下部層とは連続性がなく大きく変化する。エノキ、クマノミズキ、ニレ属-ケヤキの樹木は人為的に伐採されたと考えられ、スギも減少し、植生が一変する。周濠は浅くなりカヤツリグサ科を主にイネ科の草本、水生植物のオモダカ属、ミズアオイ属、ガマ属-ミクリ属が生育し、やや水質の悪化も示唆される。周囲では水田が拡大しだす。

植物腐植土層上部上位から黒粘 I c 層下部にかけては、イネ科とイネ属型が水田雑草を伴い増加し、周囲で水田が拡大し周濠に近接して分布し、周濠内もカヤツリグサ科が減少しイネ科を中心に水生植物が生育し変化する。黒粘 I c 層下部の中位になると、周濠は淀みながら流れ水生植物の繁茂する浅い帯水域になる。上位に向って湿地状ないし湿った程度の環境が拡大する。黒粘 I c 層は黒泥化を受けてお

り、水位の低下が示唆される。黒粘 I c 層下部の上位以浅の時期は、周囲が大きく水田化され、周濠自体が水田であってもよいほどイネ属型を含むイネ科が多く、水田雑草も生育する。黒粘 I b 層になると、珪藻密度が減少し、乾燥化するか堆積速度が速くなる。

なお、各層準で一定以上の比率を示すコナラ属アカガシ亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科は、周辺地域の山地丘陵に分布する地域的な森林要素であり、コナラ属アカガシ亜属を主にスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の混じる照葉樹林が分布していた。

以上のように 4 次調査の周濠堆積物の分析からは、周濠が深く流水性の水域であり深く滞水していたことや、築造後の二次林化とその後の周辺の水田化の様相が示唆された。

#### 【参考文献】

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82－102.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248－262.

Hustedt, F. (1937 = 1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131－506.

Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.

K. Krammer・H. Lange－Bertalot（1986－1991）Bacillariophyceae・1－4.

Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p. 35－47.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p. 73－88.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第1号，植生史研究会，p. 29－44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. 1－20.



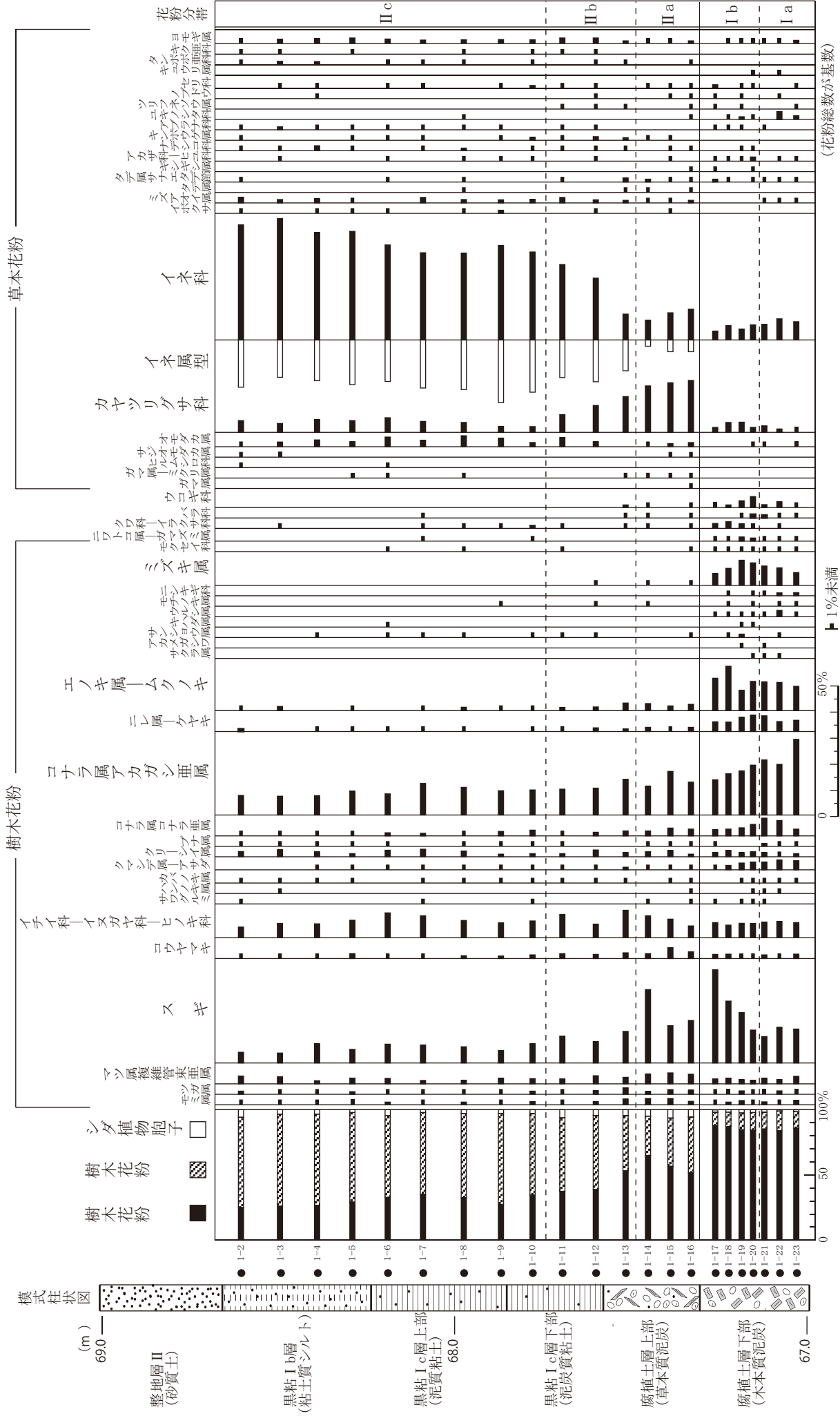


図139 纏向石塚古墳第4次調査における主要花粉ダイアグラム

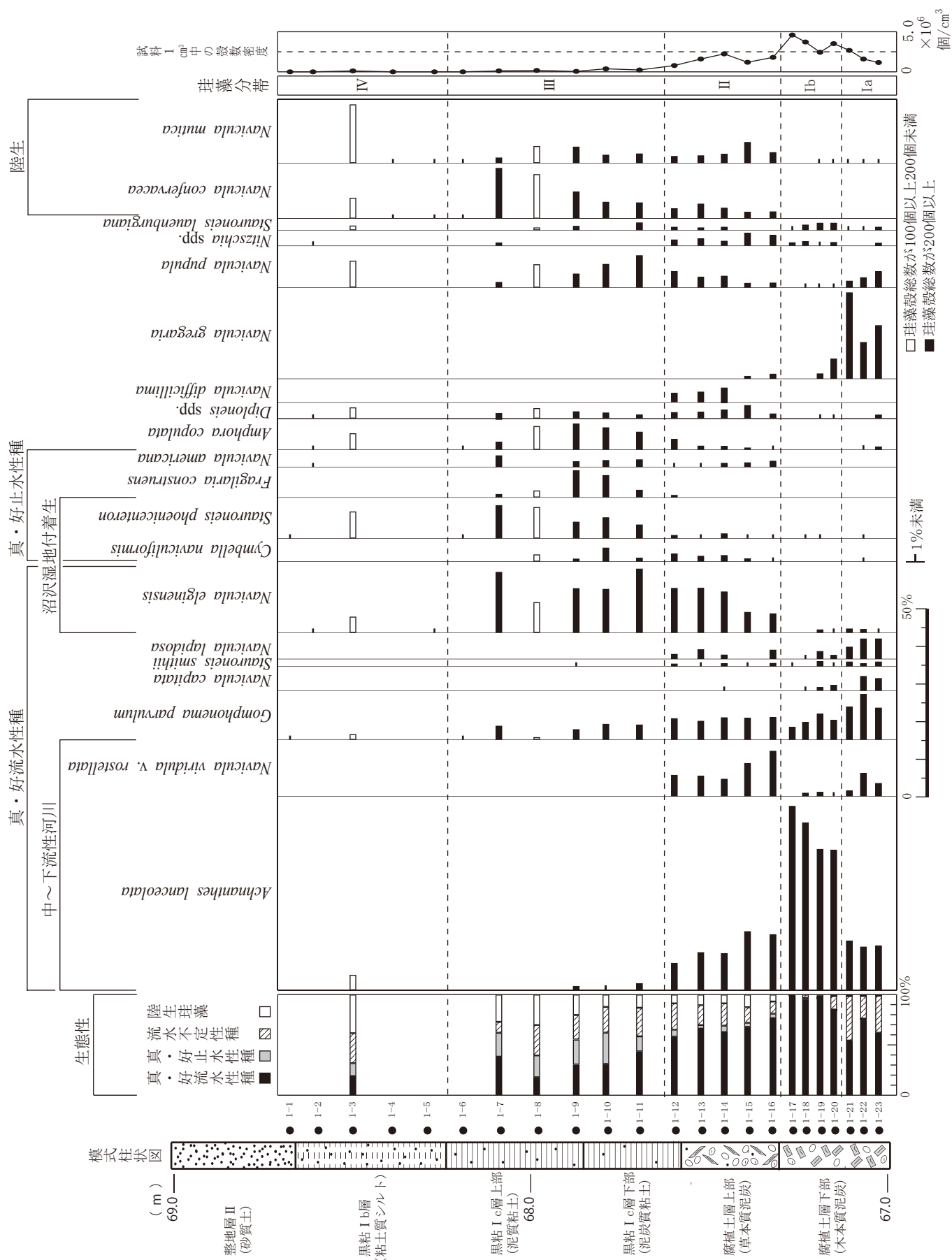


図140 縄向石塚古墳第4次調査における主要珪藻ダイアグラム



表102 纏向石塚古墳第4次調査における花粉分析結果

学名	和名	1-2	1-3	1-4	1-5	1-6	1-7	1-8	1-9	1-10	1-11	1-12	1-13	1-14	1-15	1-16	1-17	1-18	1-19	1-20	1-21	1-22	1-23
Arboreal pollen	樹木花粉																						
<i>Podocarpus</i>	マキ属	2		1					1		1	1								1			
<i>Abies</i>	モミ属	4	2	2	1	5	3	6	3	6	3	5	7	9	8	5	3	4	6	1		2	6
<i>Tsuga</i>	ツガ属	6	4	3	6	3	3	1	2	6	1	6	8	4	6	6	2	2	5	4		5	2
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属椎維管束亜属	15	12	5	13	11	6	9	13	10	9	13	8	14	14	14	7	9	6	6		6	10
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	21	17	32	30	37	33	39	29	37	50	35	38	104	48	62	135	99	74	54	37	51	45
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	2	4	2	11	3	1	7	6	7	9	7	7	7	14	10	6	7	2	3		2	6
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	21	24	23	39	49	40	41	34	32	43	22	33	31	24	17	22	20	21	23	25	23	20
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属															1							
<i>Juglans</i>	クルミ属				1							1		1									
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ	1					1			1				1		2	1		1	1	3		
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		1																	1		1	
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	1	2	1		1	3	1	1	3	2	2		1	2			2	2	2	2	2
<i>Corylus</i>	ハシバミ属		1	1																			
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ			1	1	1	1	5	1	2	4	4	3	3	2	3	1	7	10	13	11	14	12
<i>Castanea crenata</i> - <i>Castanopsis</i>	クリ-シイ属	10	12	8	7	13	14	14	6	6	6	11	5	7	8	4	6	10	6	8	6	2	4
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	2	1	3	2		2	3	1	2				2	2	1	1				2	3
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	4	1	2	5	6	5	5	10	11	4	6	6	7	10	10	9	11	12	19	25	22	9
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	38	32	32	53	42	58	66	56	48	48	44	43	41	56	48	51	66	65	82	77	72	100
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	5		2	1	3	1	1		1	2	6	3	6	3	6	14	15	21	27	22	14	15
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	3	7		1		1	8	1	4	6	6	9	10	6	9	47	71	30	48	41	40	32
<i>Prunus</i>	サクランボ属																			3		1	
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ																		1				
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属			1		1	2	1		1	1	1				1		1	5			1	
<i>Phellodendron</i>	キハダ属					1													1	1			
<i>Rhus</i>	ウルシ属																	1	2	3	3	9	2
<i>Ilex</i>	モチノキ属									1				1					1			1	1
Celastraceae	ニシキギ科																		1		1	3	4
<i>Acer</i>	カエデ属											1					1		1				
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ									1						1			1				1
<i>Sapindus</i>	ムクロジ属																1			1			
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ			1																			
<i>Vitis</i>	ブドウ属			1								1			1	2	1		1			1	
<i>Eurya</i>	ヒサカキ属															1		1					
<i>Cornus</i>	ミズキ属											1		2		1	17	27	37	37	27	25	17
<i>Diospyros</i>	カキ属	1																		1			
Oleaceae	モクセイ科					1		1			1					2	1	1	2	2	2	3	2
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属						1			1							1	1	6	5		3	2
Hamamelidaceae	マンサク科																						
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉																						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		1				3	2	5	6	1		2	1		2	7	11	7	2		1	
Saxifragaceae	ユキノシタ科							1								1		1	4	2		11	5
Rosaceae	バラ科						1						1	1		1			1	6		2	2
Araliaceae	ウコギ科												3	1		2	1	4	10	18	4	8	3
Nonarboreal pollen	草本花粉																						
<i>Typha latifolia</i>	ガマ															2							
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属				2	1		1					1	1	1	1							
Potamogetonaceae	ヒルムシロ科				1																		
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属	1	1													1	2						
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	3	8	11	11	19	12	26	20	8	17	8			1	4	6			1	3		1
Gramineae	イネ科	224	208	177	241	188	160	208	217	169	140	101	31	28	35	45	13	23	16	25	22	30	24
<i>Oryza type</i>	イネ属型	92	64	67	99	82	88	119	144	100	70	68	37	9	15	17							
Cyperaceae	カヤツリグサ科	23	15	21	26	29	20	24	14	11	33	44	43	66	64	76	7	16	15	8	9	5	1
<i>Eriocaulon</i>	ホシクサ属												2										
<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ	1		2	1	1		1	7			1				1							
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	11	6	7	5		10	8	7	7	10	5	3	1	3	4						1	1
<i>Polygonum</i>	タデ属							2					2	1		2							
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1				1		2			3		5	4	1	3	4	2		4	1	1	2
<i>Rumex</i>	ギンギン属															1	1			1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒコ科		1			1		1	3	2		1				1	3	1	2	7		2	3
Caryophyllaceae	ナデシコ科	4	3	8	4		2	6		1	1	1	2		2	1			1	1			
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属	1			1	1	1		1	6	2	6	3	1	1								
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属																1						
Cruciferae	アブラナ科	2	5	3	3	3	1	1	2		2	2					1	1	2				
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属																						
<i>Geranium</i>	フウロソウ属																			1			
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属									2		1		2		1	1		3				1
<i>Ludwigia</i>	ミズユキノシタ属												1										
Umbelliferae	セリ科		1	1		1	1		1	5	1	2		2	2	1	5		2	2			1
<i>Plantago</i>	オオバコ属																						
Rubiaceae	アカネ科																	1					
<i>Actinostemma lobatum</i>	ゴキソル																				3		2
<i>Cucumis</i>	キュウリ属																				1		2
<i>Lobelia</i>	ミゾカクシ属																1						
Lactucoideae	タンポポ亜科	2	6	5		2	3	4		2		2	1			1							
Asteroidae	キク亜科	3	1		1			1		1	1	1											
<i>Xanthium</i>	オナモミ属																				2		1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	4	7	8	12	9	6	9	9	7	10	9	3	3	1	4		2	2	2		1	4
Fern spore	シダ植物胞子																						
Monolate type spore	単条溝胞子	14	9	10	6	21	8	12	14	12	29	18	10	17	21	18	7	7	10	8	7	4	4
Trilate type spore	三条溝胞子	17	7	5	7	4	3	7	3	3	3	2	5	2	2	4				1			
Arboreal pollen	樹木花粉	135	120	120	173	178	171	209	167	176	193	174	172	250	204	208	332	356	319	348	310	307	295
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		1				4	3	5	6	1		6	3		6	8	16	22	28	6	22	10
Nonarboreal pollen	草本花粉	373	326	310	406	339	304	413	427	319	291	252	136	117	132	165	38	45	43	53	47	43	40
Total pollen	花粉総数	508	447	430	579	517	479	625	599	501	485	426	314	370	336	379	378	417	384	429	365	372	345
Unknown pollen	未同定花粉	6	1	5	4	7	4		1	5	3	2		4	2	13	6	1	7	7		5	7
Fern spore	シダ植物胞子	31	16	15	13	25	11	19	17	15	32	20	15										

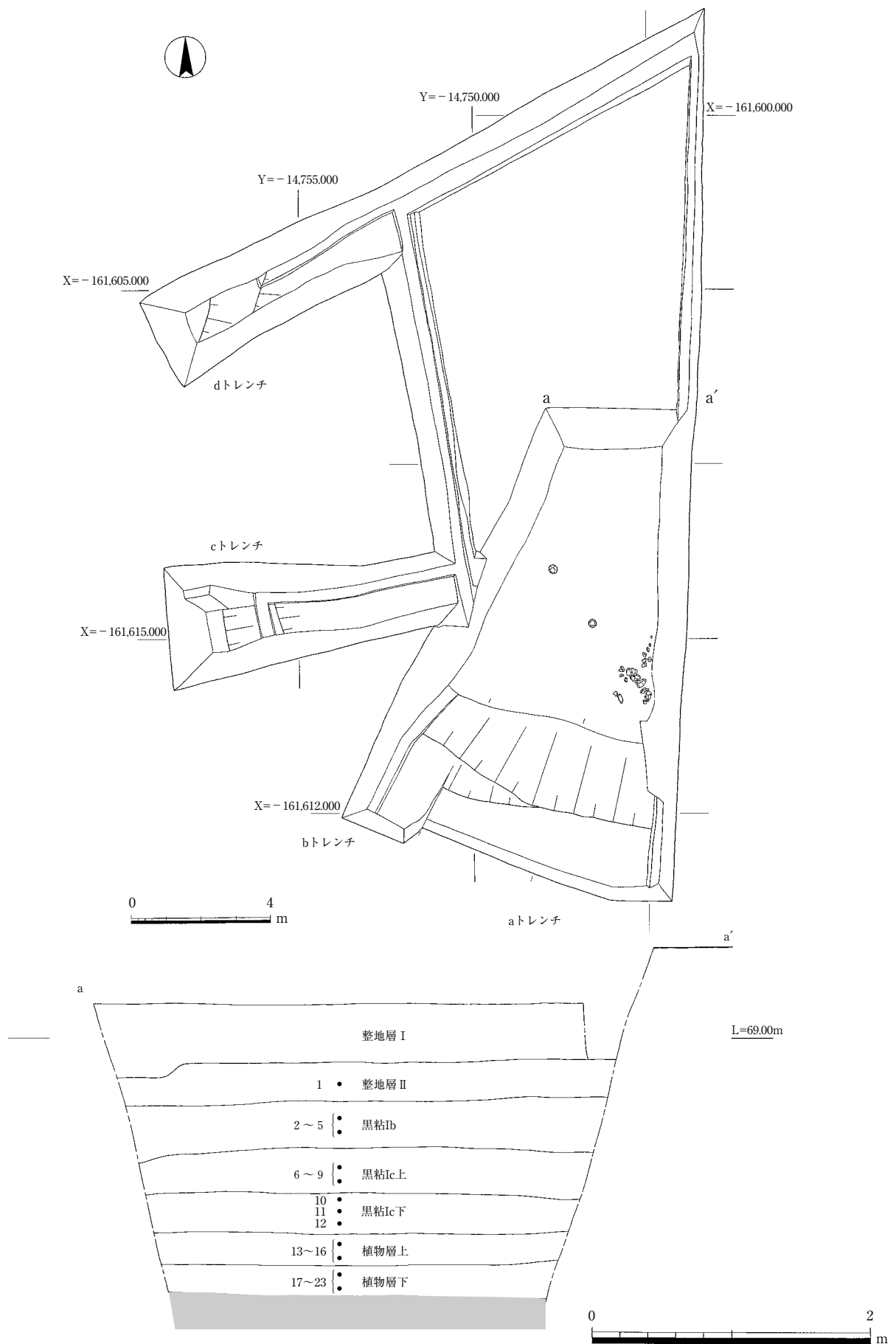
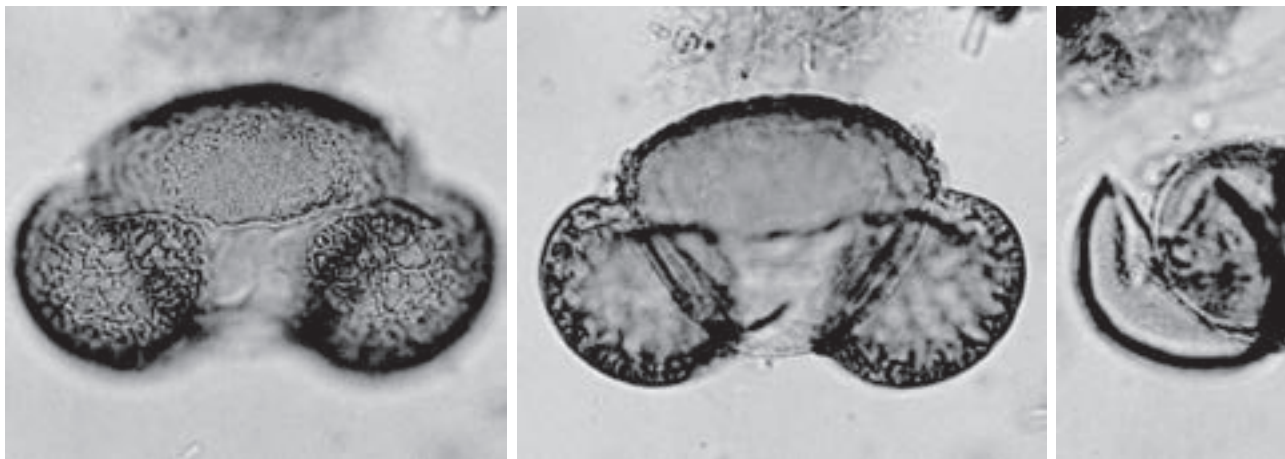


図141 第4次調査サンプル採取地点図（平面：1／160・断面：1／40）

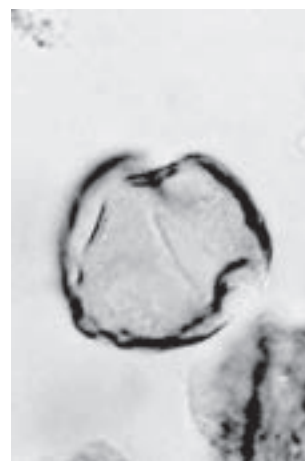
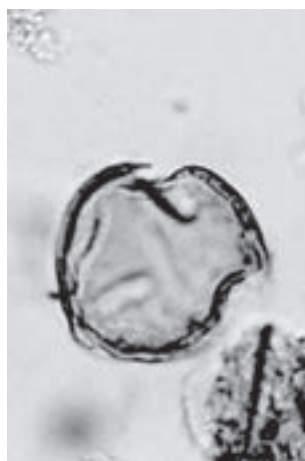
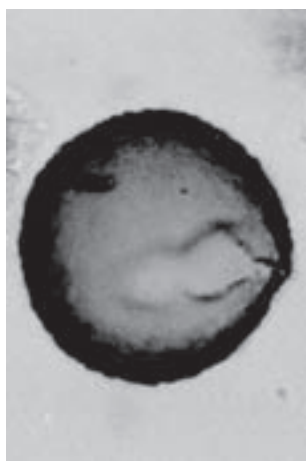
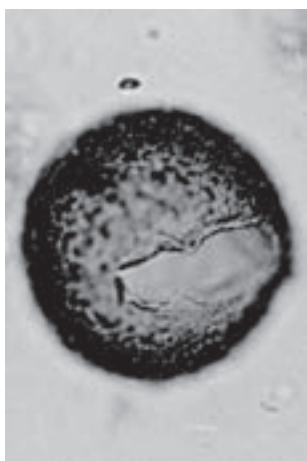
写真17 纏向石塚古墳周濠内堆積物の花粉写真 1



1

2

3

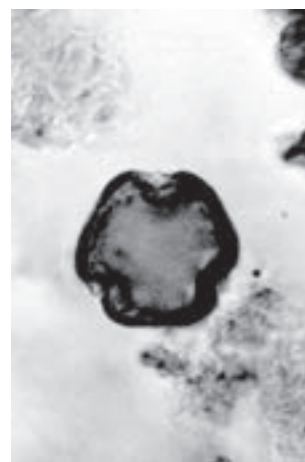
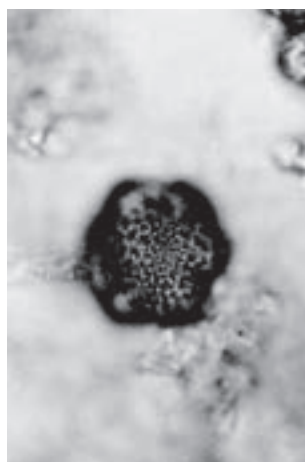
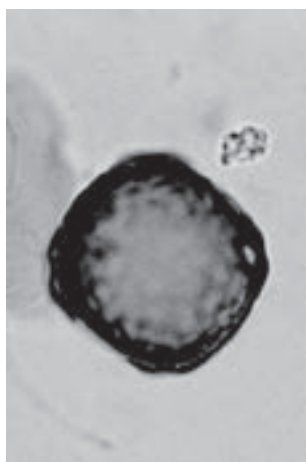
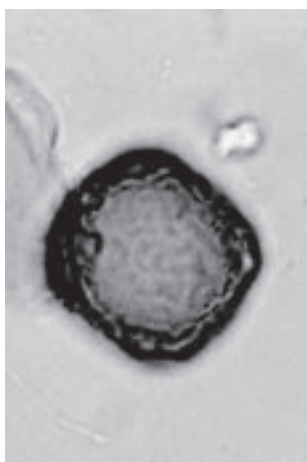


4

5

6

7

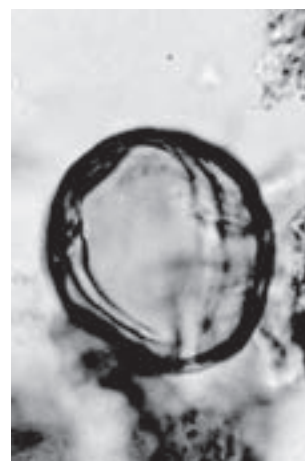
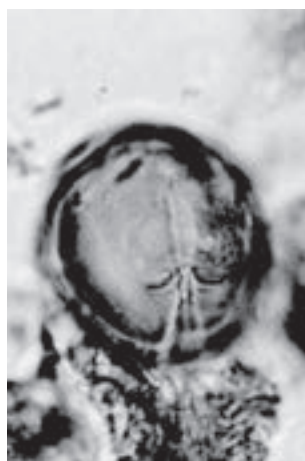
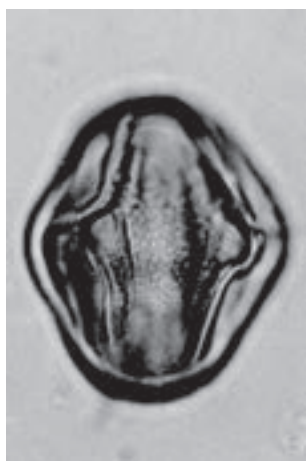


8

9

10

11



12

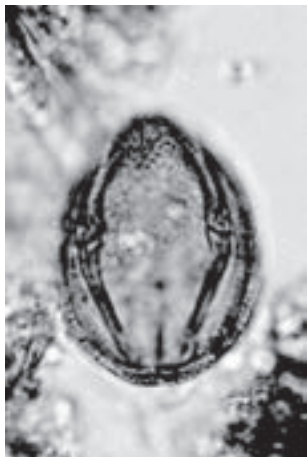
13

14

15

— 10  $\mu$  m

写真18 縄向石塚古墳周濠内堆積物の花粉写真 2



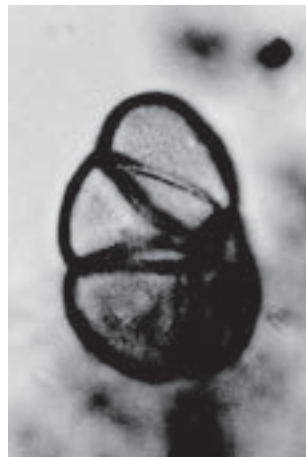
16



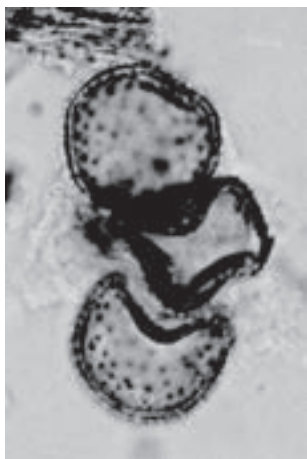
17



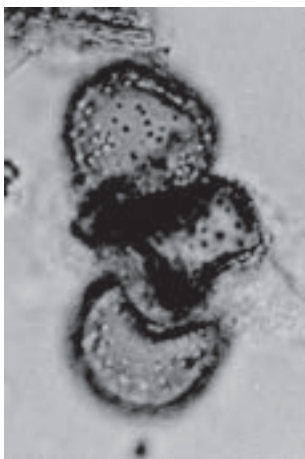
18



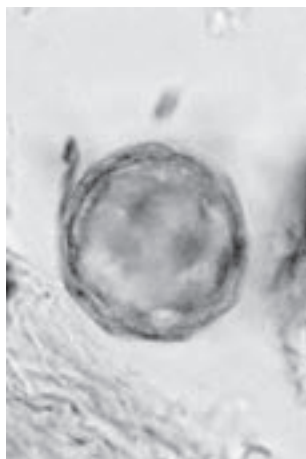
19



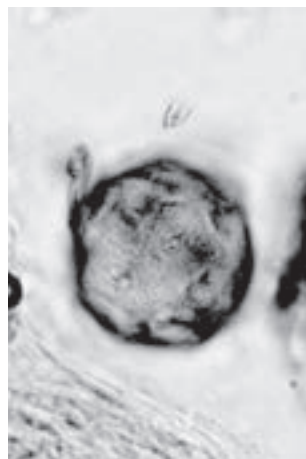
20



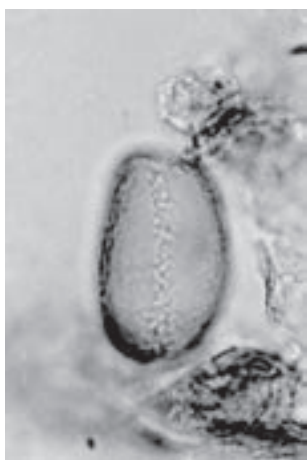
21



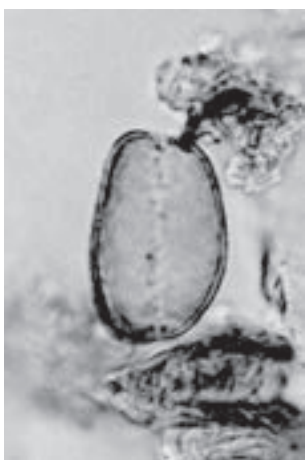
22



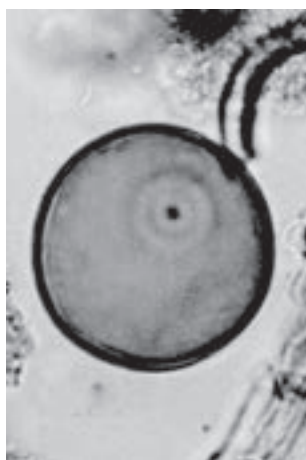
23



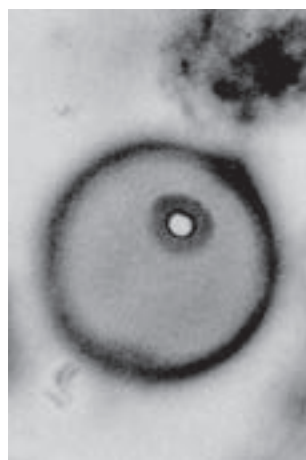
24



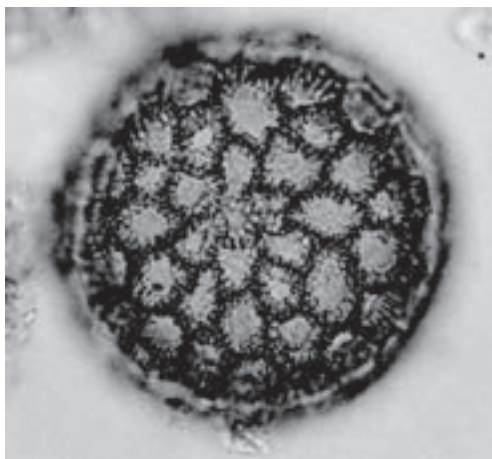
25



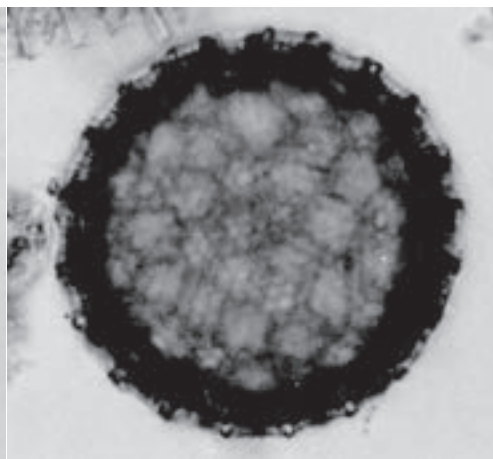
26



27



28



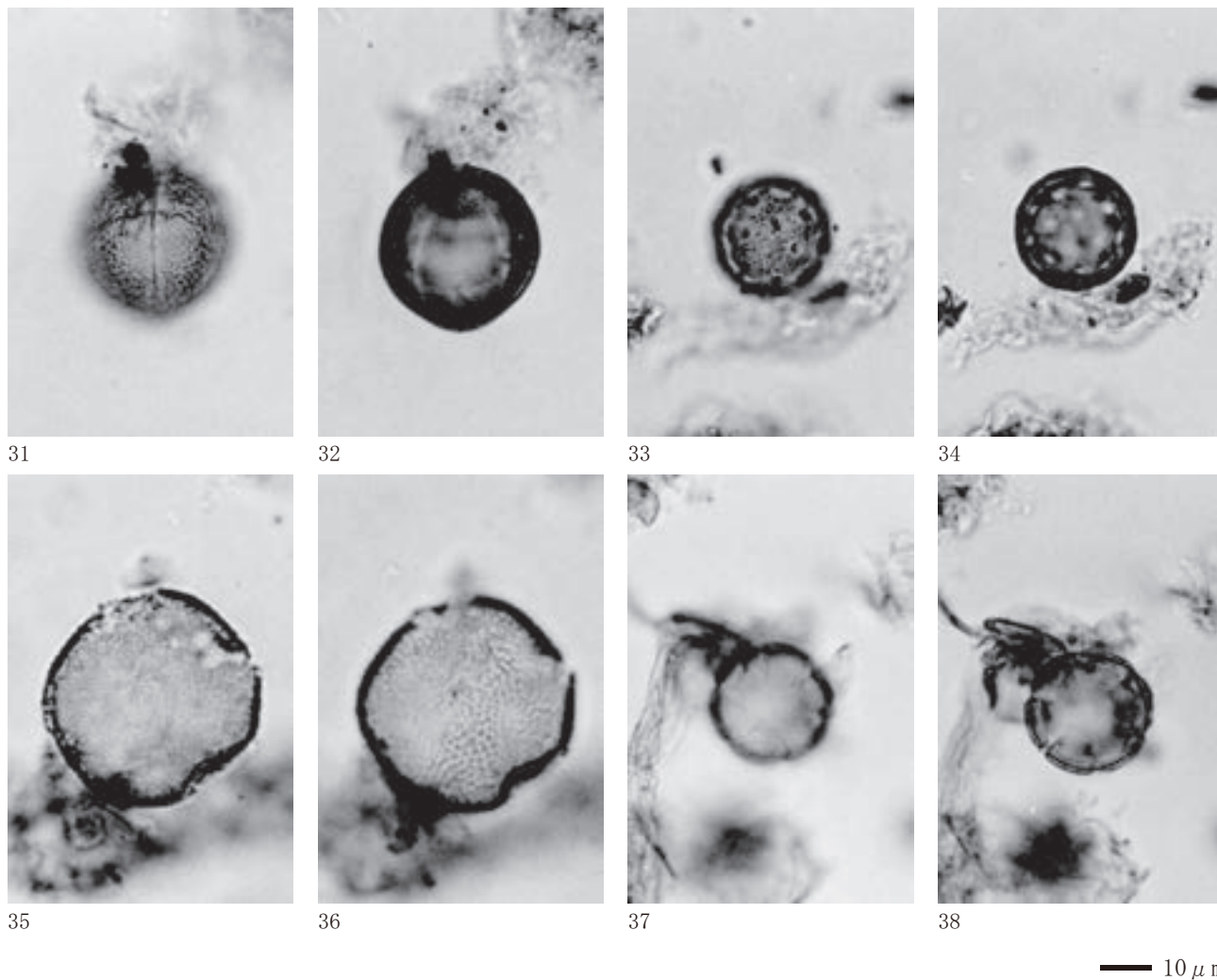
29



30

— 10  $\mu$  m





纏向石塚古墳周濠内堆積物の花粉写真

- |              |              |             |
|--------------|--------------|-------------|
| 1 マツ属複維管束亜属  | 16 ノブドウ      | 31 タデ属      |
| 2 同上         | 17 同上        | 32 同上       |
| 3 スギ         | 18 ガマ        | 33 アカザ科ーヒユ科 |
| 4 コウヤマキ      | 19 同上        | 34 同上       |
| 5 同上         | 20 オモダカ属     | 35 タガラシ     |
| 6 コナラ属アカガシ亜属 | 21 同上        | 36 同上       |
| 7 同上         | 22 サジオモダカ属   | 37 アカネ科     |
| 8 ニレ属ーケヤキ    | 23 同上        | 38 同上       |
| 9 同上         | 24 ミズアオイ属    |             |
| 10 ニシキギ科     | 25 同上        |             |
| 11 同上        | 26 イネ属型      |             |
| 12 ミズキ属      | 27 同上        |             |
| 13 同上        | 28 タデ属サナエタデ節 |             |
| 14 カキ属       | 29 同上        |             |
| 15 同上        | 30 ツリフネソウ属   |             |

## 第2節 纏向石塚古墳第8次調査における環境考古学分析

奈良教育大学 金原正明  
古環境研究所

### (1) 試料と方法

第8次調査では、築造前の堆積層から墳丘盛土が採取され、纏向石塚古墳の築造前の植生と環境の復原を行った。分析試料は、第8次調査第1トレンチ（北面）より採取された155層上～173層の試料10点、第5トレンチより採取された12層～17層の試料5点、以上計15点である（図106・148）。

花粉分析はリン酸三ナトリウム処理、篩別処理、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理を施しプレパラート作成した。珪藻分析は、以下の手順で、過酸化水素水処理を加えた後、プレパラート作成した。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe（1974）等の記載により、陸生珪藻は小杉（1986）により、淡水生種は安藤（1990）による。

### (2) 結果

#### 1. 第1トレンチ（北面）（試料8～10）：墳丘盛土最下層

いずれの試料でも花粉密度が極めて低く、試料10、試料9では検出されない。試料8では樹木花粉のカバノキ属、草本花粉のイネ科、アカザ科－ヒユ科、セリ亜科がわずかに出現する。珪藻はいずれの試料も密度が極めて低く、試料9では陸生珪藻の*Pinnularia subcapitata*がわずかに出現する。試料8では陸生珪藻の*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*などがわずかに出現する。

墳丘盛土最下層は、花粉・珪藻はほとんど含まれていず、乾燥した環境で生成された堆積物と考えられる。

#### 2. 第1トレンチ（北面）（試料7～1）築造前から盛土

試料7～試料6では花粉密度が低い。樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、約65%～55%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科などが出現する。樹木花粉ではスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ属アカガシ亜属などが出現する。試料7では鞭虫卵、マンソン裂頭条虫卵が、試料6では肝吸虫卵がわずかに検出される。試料5～試料4では花粉密度が極めて低くなり、ほとんど検出されなくなる。試料3～試料1では、試料7～試料6と類似した出現傾向を示す。樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、約60～55%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、タンポポ亜科などが出現する。試料1ではゴマ？がわずかに検出される。樹木花粉ではスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複雑管束亜属などが出現する。試料3では回虫卵、肝吸虫卵がわずかに検出され、石細胞も検出される。

珪藻は、試料7～試料4では密度が極めて低く、ほとんど検出されない。試料3では、陸生珪藻の占める割合が約90%を占め、残りを流水不定性種などが占める。陸生珪藻では*Navicula mutica*が高率に出現し、次いで*Hantzschia amphioxys*が多く出現し、*Amphora montana*、*Navicula contenta*

などが伴われる。流水不定性種では*Nitzschia palea*、*Navicula spp.*などが低率に出現する。中－貧塩性種（汽－淡水生種）では*Achnanthes brevipes*がわずかに出現する。試料2ではほとんど検出されなくなる。試料1では陸生珪藻の占める割合が約80%を占め、残りを流水不定性種、好流水性種などが占める。陸生珪藻では*Navicula mutica*が高率に出現し、*Pinnularia borealis*、*Hantzschia amphioxys*などが伴われる。流水不定性種では*Nitzschia palea*、*Navicula spp.*などが低率に出現する。好流水性種では*Gomphonema parvulum*や、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Cocconeis placentula*がわずかに出現する。海水藻場環境指標種群の*Cocconeis scutellum*が検出される。

### 3. 第5トレンチ（試料15～11）

試料15～試料13では類似した出現傾向を示し、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、約50～65%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、上位にむかって増加傾向を示す。カヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われ、オモダカ属、ミズアオイ属などが出現する。樹木花粉ではスギ、コナラ属アカガシ亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、シイ属などが出現する。試料12～試料11では花粉密度が極めて低くなり、ほとんど検出されなくなる。

珪藻は、試料15～試料13では珪藻密度が低く、ほとんど検出されない。試料12では陸生珪藻が約50%を占め、流水不定性種、真・好流水性種が残り二分する。陸生珪藻では*Hantzschia amphioxys*を主に、*Amphora montana*、*Navicula mutica*、*Navicula confervacea*などが伴われる。流水不定性種では*Amphora copulata*、*Nitzschia palea*などが出現する。真・好流水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の*Navicula elginensis*、中～下流性河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*、好流水性種の*Gomphonema parvulum*、真流水性種の*Surirella angusta*などが出現する。試料11では珪藻密度が低くなり、陸生珪藻の占める割合が約60%になり、真・好流水性種の占める割合が減少する。陸生珪藻では*Navicula confervacea*、*Pinnularia schroederii*が増加する。

#### （3）考察とまとめ

第1トレンチ（北面）墳丘盛土最下層（試料8～試料10）は、乾燥した環境で生成された堆積物と推定される。第1トレンチ（北面）築造前から盛土（試料7～試料1）にかけては、イネ科を主にヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科の乾燥を好む草本が分布し、珪藻も生育しにくいやや乾燥した人為改変地の分布が示唆される。周辺の丘陵等の森林にはスギを主にイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の針葉樹が多く照葉樹は大きく減少している。試料1では、海水藻場環境指標種群の*Cocconeis scutellum*が検出され、塩から由来したものであり、塩の存在と使用が考えられる。

第5トレンチの試料13・試料14・試料15では、イネ科を中心に草本が分布し、イネ属型、水田雑草のオモダカ属などが生育し、水田も広がっていた。森林では優占種がなく、アカガシ亜属やシイ属の照葉樹、スギやイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の針葉樹が分布し、照葉樹が減少している。上部試料11・試料12では陸生珪藻を主に流水不定性種、真・好流水性種が多様に生育し、不安定な水田などの環境が考えられる。

以上から、築造前はイネ科を主にヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科の乾燥



を好む草本が分布し、珪藻も生育しにくいやや乾燥した人為改変地が広がっていたと考えられる。

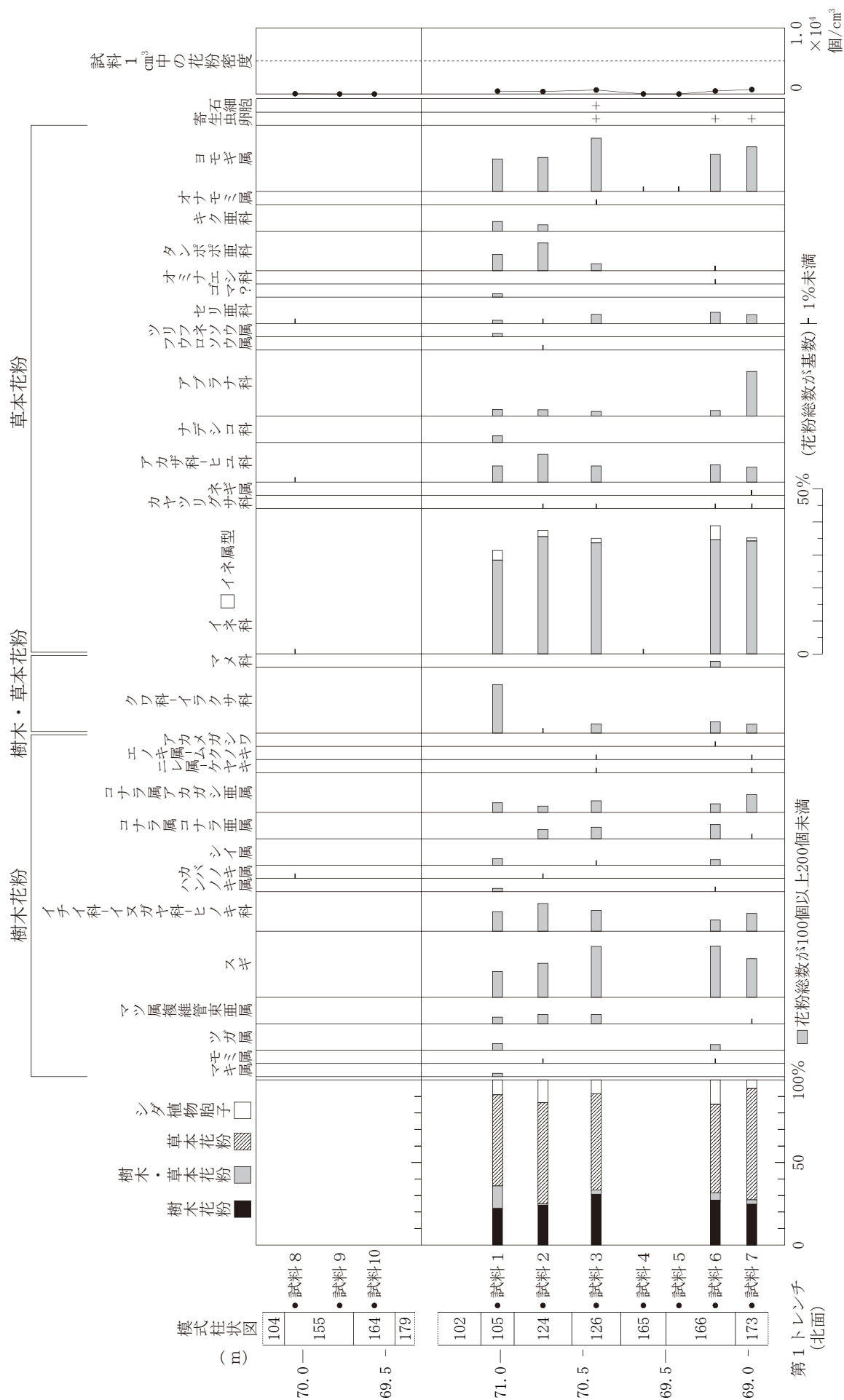
【参考文献】

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として.第四紀研究,13,p.187－193.

Lowe,R.L.（1974）Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh－water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標种群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42， p.73－88.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第1号，植生史研究会，p.29－44.



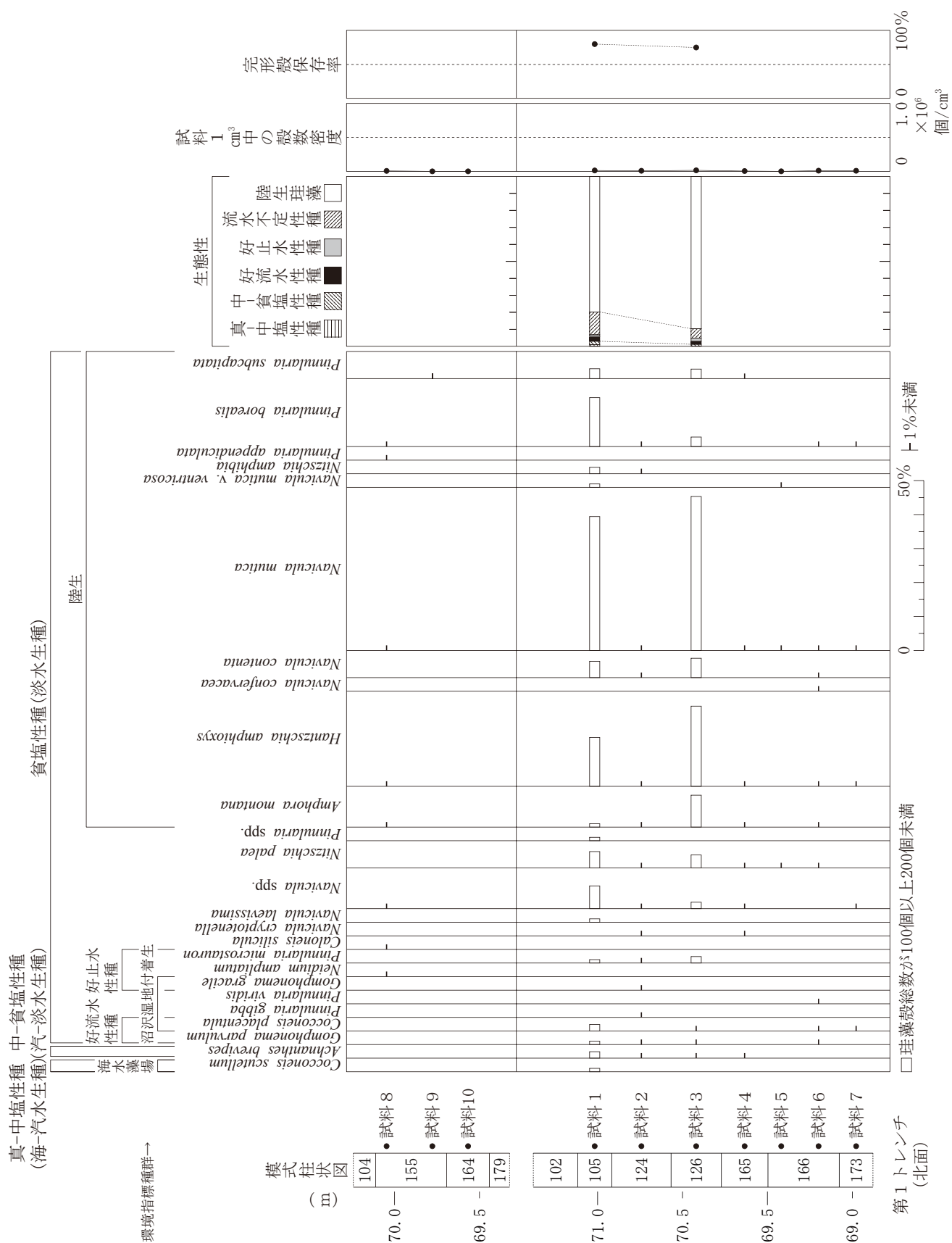
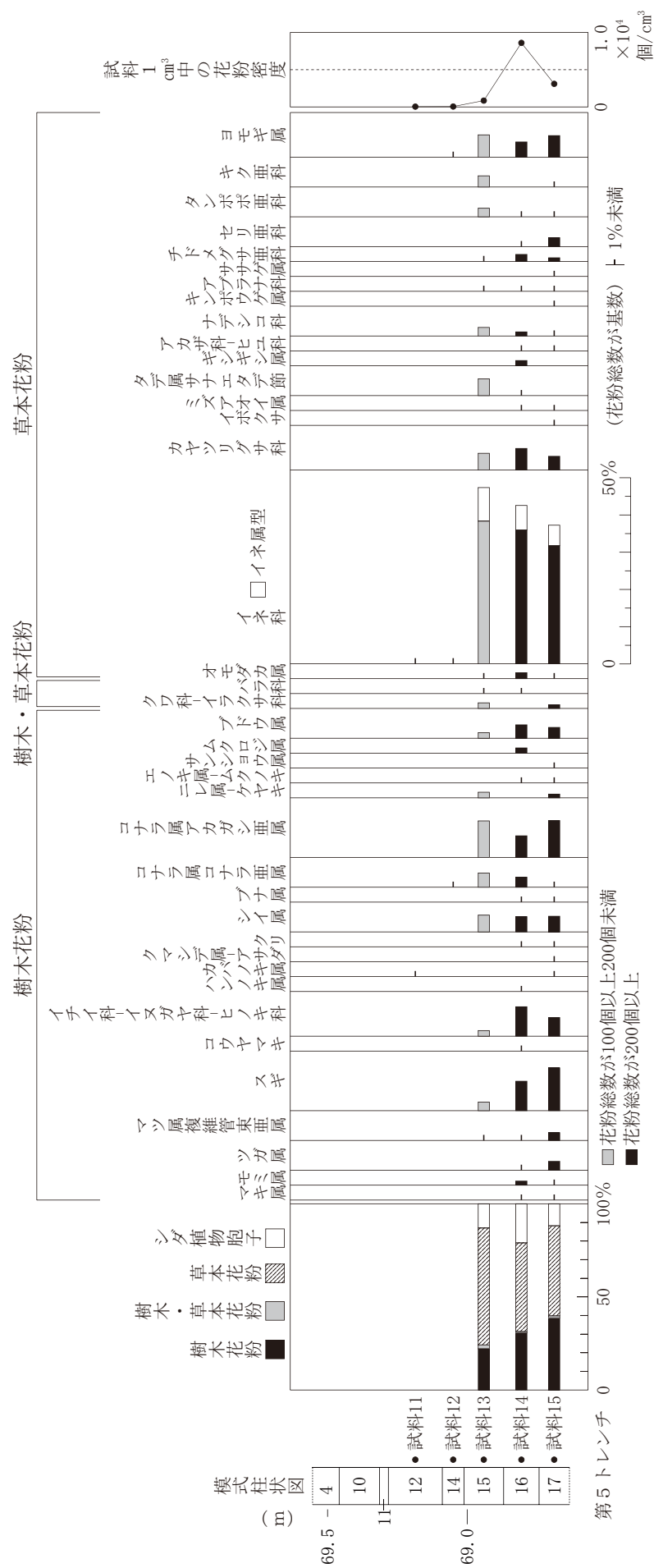


図143 纏向石塚古墳第8次調査の第1トレンチ (北面) における主要珪藻ダイアグラム



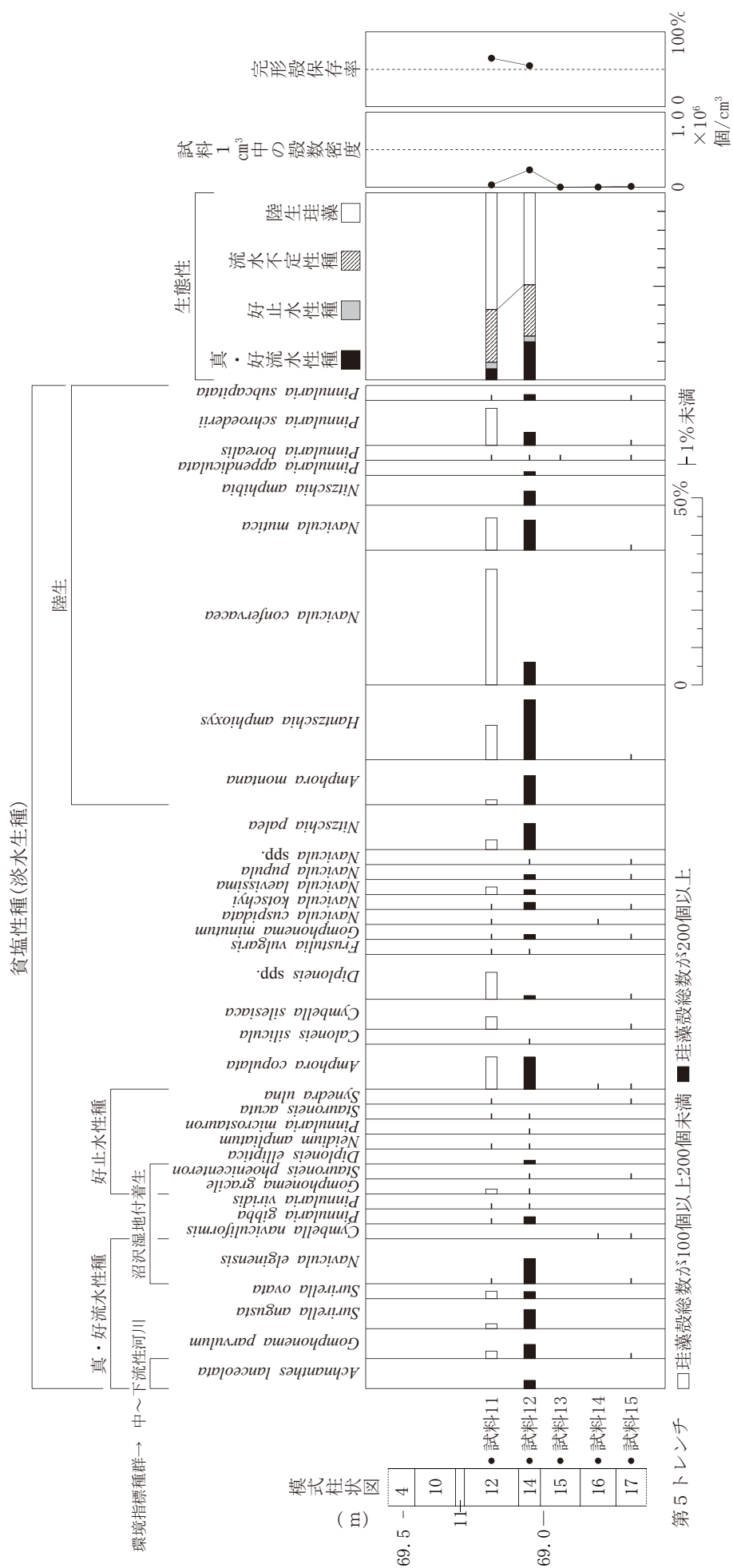


図145 纏向石塚古墳第8次調査の第5トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム

表103 纏向石塚古墳第8次調査における花粉分析結果

分類群		第1トレンチ (北面)										第5トレンチ				
学名	和名	8	9	10	2	1	4	5	6	7	3	11	12	13	14	15
Arboreal pollen	樹木花粉															
<i>Podocarpus</i>	マキ属					1								2		2
<i>Abies</i>	モミ属				1				1					4		3
<i>Tsuga</i>	ツガ属					2			2					3		9
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属				3	2				1	4		1	3		8
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ				11	8			18	13	22		3	29		44
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ													2		
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科				9	6			4	6	9		2	29		19
<i>Alnus</i>	ハンノキ属					1			1					1		
<i>Betula</i>	カバノキ属	1			1							1				2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ															2
<i>Castanea crenata</i>	クリ													2		1
<i>Castanopsis</i>	シイ属					2			2		1		6	15		16
<i>Fagus</i>	ブナ属													2		2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属				3				5	1	5	1	5	10		3
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属				2	3			3	6	5		13	21		38
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ										1	1	2			4
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ									1	1			1		2
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ								1							
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属															2
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ															
<i>Vitis</i>	ブドウ属													2	13	11
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉															
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科				1	15			4	3	4		2			4
Rosaceae	バラ科												1	3		
Leguminosae	マメ科								2							
Nonarboreal pollen	草本花粉															
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属													1	6	2
Gramineae	イネ科	2			38	29	1		40	38	48	5	3	51	131	121
<i>Oryza type</i>	イネ属型				2	3			5	1	2	1	4	12	24	21
Cyperaceae	カヤツリグサ科				1				1	1	1			6	21	14
<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ															2
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属													1		2
<i>Allium</i>	ネギ属									1						
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節												6	1		
<i>Rumex</i>	ギンギン属													5		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1			9	5			6	5	7			1		2
Caryophyllaceae	ナデシコ科					2							3	4		2
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属															2
Cruciferae	アブラナ科				2	2			2	15	2		1	1		2
<i>Vigna</i>	ササゲ属															1
<i>Geranium</i>	フウロソウ属				1											
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属					1										
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科												1	7		4
Apioidae	セリ亜科	2			1	1			4	3	4			1		9
<i>Sesamum indicum?</i>	ゴマ?					1										
Valerianaceae	オミナエシ科								1							
Lactucoideae	タンポポ亜科				9	5			1		3		3	2		2
Asteroidae	キク亜科				2	3							4			2
<i>Xanthium</i>	オナモミ属										1					
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属				11	10	1	1	13	15	23		1	8	15	22
Fern spore	シダ植物孢子															
Monolate type spore	単条溝孢子	2			16	7		2	16	5	10	2	5	1	26	32
Trilate type spore	三条溝孢子				1	3		1	4	1	3	1	1	19	71	19
Arboreal pollen	樹木花粉	1	0	0	30	25	0	0	37	29	48	1	1	34	137	168
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	1	15	0	0	6	3	4	0	0	3	3	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	5	0	0	76	62	2	1	73	79	91	6	8	96	220	210
Total pollen	花粉総数	6	0	0	107	102	2	1	116	111	143	7	9	133	360	382
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	4.2	0.0	0.0	3.8	4.4	1.4	0.6	4.6	6.8	6.1	4.2	5.4	8.5	8.6	3.1
		×10 <sup>-2</sup>			×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-3</sup>	×10 <sup>-3</sup>
Unknown pollen	未同定花粉	1	0	0	6	7	0	0	6	4	3	0	0	8	2	13
Fern spore	シダ植物孢子	2	0	0	17	10	0	3	20	6	13	3	6	20	97	51
Helminth eggs	寄生虫卵															
<i>Ascaris(lumbricoides)</i>	回虫卵										1					
<i>Trichuris(trichiura)</i>	鞭虫卵									1						
<i>Clonorchis sinensis</i>	肝吸虫卵								1		1					
<i>Diphyllobothrium mansoni</i>	マンソン裂頭条虫卵										1					
Total	計	0	0	0	0	0	0	0	1	2	2	0	0	0	0	0
Helminth eggs frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	1.2	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
									×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-2</sup>					
Stone cell	石細胞										(+)					
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)		(++)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(++)		(+)			

表104 纏向石塚古墳第8次調査における珪藻分析結果

分類群	第1トレンチ (北面)										第5トレンチ				
	8	9	10	2	1	4	5	6	7	3	11	12	13	14	15
貧塩性種 (淡水生種)															
<i>Achnanthes lanceolata</i>												7			
<i>Amphora copulata</i>											13	27		1	2
<i>Amphora fontinalis</i>															1
<i>Amphora montana</i>	1			2	1	1		2		10	2	24			
<i>Amphora</i> spp.												1			
<i>Caloneis silicula</i>	1											2			
<i>Cocconeis placentula</i>					2			1	1	1					
<i>Cymbella naviculiformis</i>														1	1
<i>Cymbella silesiaca</i>											5				1
<i>Cymbella tumida</i>											1				
<i>Denticula</i> spp.												1			
<i>Diploneis elliptica</i>												3			
<i>Diploneis</i> spp.											11	3			2
<i>Diploneis yatukaensis</i>												1			
<i>Fragilaria pinnata</i>												1			
<i>Frustulia vulgaris</i>											1	1			
<i>Gomphonema gracile</i>				1							2	1			
<i>Gomphonema minutum</i>											1	4			1
<i>Gomphonema parvulum</i>				2	1			1		1	3	12			2
<i>Gomphonema pseudoaugur</i>											1				
<i>Gomphonema</i> spp.												1			
<i>Hantzschia amphioxys</i>	7			12	15	6		18	17	25	14	50			4
<i>Meridion circulare</i> v. <i>constrictum</i>															1
<i>Navicula confervacea</i>								2			47	19			
<i>Navicula contenta</i>				1	5			4		6		1			
<i>Navicula cryptotenella</i>				2		1						1			
<i>Navicula cuspidata</i>											1			1	
<i>Navicula elginensis</i>											1	21			4
<i>Navicula kotschyi</i>											1	6			1
<i>Navicula laevisissima</i>					1						3	4			
<i>Navicula mutica</i>	14			8	41	8	1	14	18	48	13	25			17
<i>Navicula mutica</i> v. <i>ventricosa</i>					1		1					1			
<i>Navicula pupula</i>												4			1
<i>Navicula</i> spp.	1			2	7	1			3	2		2			1
<i>Neidium ampliatum</i>	2										1	1			
<i>Nitzschia amphibia</i>				1	2							12			
<i>Nitzschia levidensis</i>															1
<i>Nitzschia palea</i>				3	5	1	1	1		4	4	22			
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>											1				
<i>Pinnularia appendiculata</i>	2											3			
<i>Pinnularia borealis</i>	4			3	15			2	2	3	1	1	1		2
<i>Pinnularia brevicostata</i>												1			
<i>Pinnularia gibba</i>				1							1	6			
<i>Pinnularia microstauron</i>				1	1					2		2			
<i>Pinnularia schroederii</i>											15	11			1
<i>Pinnularia</i> spp.					1										
<i>Pinnularia subcapitata</i>			1		3	3				3	1	5			2
<i>Pinnularia viridis</i>								1			1	2			
<i>Stauroneis acuta</i>											1	1			
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>												1			4
<i>Surirella angusta</i>											2	16			
<i>Surirella ovata</i>											3	6			
<i>Synedra ulna</i>											1				1
中-貧塩性種 (汽-淡水生種)				1	2	1				1					
<i>Achnanthes brevipes</i>															
真-中塩性種 (海-汽水生種)															
<i>Cocconeis scutellum</i>					1										
合 計	32	1	0	40	104	22	3	46	41	106	152	313	1	3	50
未同定	2	0	0	2	3	1	0	6	2	13	0	11	0	0	1
破片	17	2	0	10	30	7	1	14	12	35	90	238	4	2	46
試料 1 cm <sup>3</sup> 中の殻数密度	6.8	2.0	0.0	8.4	1.3	4.6	6.0	1.0	8.6	1.5	3.0	2.3	2.0	6.0	1.0
	$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-2}$		$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-5}$	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-4}$
完形殻保存率 (%)	-	-	-	-	78.1	-	-	-	-	77.3	62.8	57.7	-	-	-



### 第3節 纏向石塚古墳第9次調査における環境考古学分析

奈良教育大学 金原正明

古環境研究所

#### (1) 試料について

第9次調査方形周溝墓1の土層より採取された試料1～3の3点、方形周溝墓2の土層より採取された試料1～3の3点、纏向石塚古墳周濠の南壁土層より採取された試料11～21の5点、西壁土層より採取された試料17～22の4点、以上計30点である（図148）。

花粉分析はリン酸三ナトリウム処理、篩別処理、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理を施しプレパラート作成した。珪藻分析は、以下の手順で、過酸化水素水処理を加えた後、プレパラート作成した。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe（1974）等の記載により、陸生珪藻は小杉（1986）により、淡水生種は安藤（1990）による。

#### (2) 結果

##### 1. 方形周溝墓の溝

###### 1) 方形周溝墓1の土層（試料3～1）

いずれの試料でも花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。試料1では樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科、草本花粉のセリ亜科、キク亜科がわずかに出現する。いずれの試料も珪藻密度が極めて低く、試料2では陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、試料1では陸生珪藻の*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula confervacea*などがわずかに出現する。

###### 2) 方形周溝墓2の土層（試料3～1）

いずれの試料でも花粉密度が極めて低く、試料2では草本花粉のイネ科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科がわずかに出現する。試料1では草本花粉のイネ科がわずかに出現する。いずれの試料でも珪藻密度が極めて低く、試料3では検出されない。試料2では陸生珪藻の*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*、試料1では陸生珪藻の*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*、好流水性種の*Surirella ovata*がわずかに出現する。

方形周溝墓の溝はいずれも花粉と珪藻がほとんど検出されず、これらが分解ないし生育できない乾燥した環境が示唆され、空堀状であった。

##### 2. 纏向石塚古墳周濠の南壁土層（試料21～11）

いずれの試料でも花粉密度が極めて低く、イネ科が各試料から検出され、樹木ではイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が検出される。

試料21～試料17では珪藻密度が極めて低く、ほとんど検出されない。試料11では珪藻密度がやや高くなり、陸生珪藻が約40%を占め、流水不定性種が約30%、真・好流水性種約25%を占める。陸生珪藻では*Amphora montana*を主に、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Pinnularia subcapitata*などが出現する。流水不定性種では*Nitzschia palea*、*Amphora montana*、*Diploneis* spp.、*Navicula laevisissima*などが出現する。真・好流水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の*Navicula elginensis*

を主に、好流水性種の*Gomphonema parvulum*、*Surirella ovata*、真流水性種の*Surirella angusta*などが出現する。

周囲の植生はイネ科を主に草本が多く、樹木ではイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が多かった。試料21～11の層準では珪藻がほとんど検出されず、珪藻の生育できない乾燥した環境または堆積速度の速い環境が推定される。試料11の層準では、陸生珪藻がやや多く、流水不定性種、真・好止水性種が出現し、流水の影響のある水域から湿った環境が示唆される。不安定な環境であり、水田の環境も含まれる。

### 3. 纏向石塚古墳周濠の西壁土層（試料22～17）

いずれの試料でも花粉密度が極めて低く、試料21、22では草本花粉のイネ科（イネ属型を含む）がやや多い。

試料22では陸生珪藻が約60%を占め、流水不定性種が約30%を占める。陸生珪藻では*Navicula mutica*、*Pinnularia subcapitata*、*Navicula confervacea*、*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*などが多様に出現する。流水不定性種では*Nitzschia palea*、*Diploneis spp.*などが出現する。真・好流水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の*Navicula elginensis*、好流水性種の*Surirella ovata*などが出現する。

試料21では珪藻密度が極めて低くなり、ほとんど検出されなくなる。

試料20、試料17では、陸生珪藻と流水不定性種が約45%ずつを占める。陸生珪藻では*Navicula confervacea*、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia subcapitata*などが出現する。流水不定性種では*Amphora copulata*、*Diploneis spp.*を主に、*Navicula laevisissima*などが出現する。真・好流水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の*Navicula elginensis*、好流水性種の*Gomphonema parvulum*、*Surirella ovata*、好止水性種では*Diploneis elliptica*などが低率に出現する。

花粉はほとんど検出されないがイネ科が多く、周囲の植生はイネ科を主に草本が多いと推定される。珪藻密度が低く、出現しない試料もあるが、各試料では陸生珪藻が優占し、流水不定性種が伴われ、上部の試料20、試料17では真・好流水性種、真・好止水性種がやや多くなり沼沢湿地付着生環境指標種群がやや増加する。このことから、湿った環境から不安定な水域が推定され、上部の試料20、試料17の層準では、流水、止水の環境も混じる水草も生育する不安定な水域から湿地の環境が示唆される。いずれも不安定な環境であり、水田の環境も含まれる。

#### （3）考察およびまとめ

1. 方形周溝墓の溝は方形周溝墓1の土層、方形周溝墓2の土層とも、いずれも花粉と珪藻がほとんど検出されず、分解ないし生育できない乾燥した環境が示唆され、空堀状であったとみなされる。
2. 纏向石塚古墳周濠南壁土層では、試料21～11の層準は珪藻の生育できない乾燥した環境または堆積速度の速い環境であり、試料11の層準は流水の影響のある水域から湿った不安定な環境であり、水田の環境も含まれる。周囲の植生はイネ科を主に草本が多く、樹木ではイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が多かった。

3. 纏向石塚古墳周濠西壁土層の各土層は、湿った環境から不安定な水域が推定され、上部では流水、止水の環境も混じる水草も生育する不安定な水域から湿地の環境が示唆され、水田の環境も含まれる。花粉はほとんど検出されないがイネ科が多く、周囲の植生はイネ科を主に草本が多いと推定される。

【参考文献】

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として.第四紀研究,13,p.187－193.

Lowe,R.L.（1974）Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh－water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標种群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73－88.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第1号，植生史研究会，p.29－44.

貧塩性種 (淡水生種)

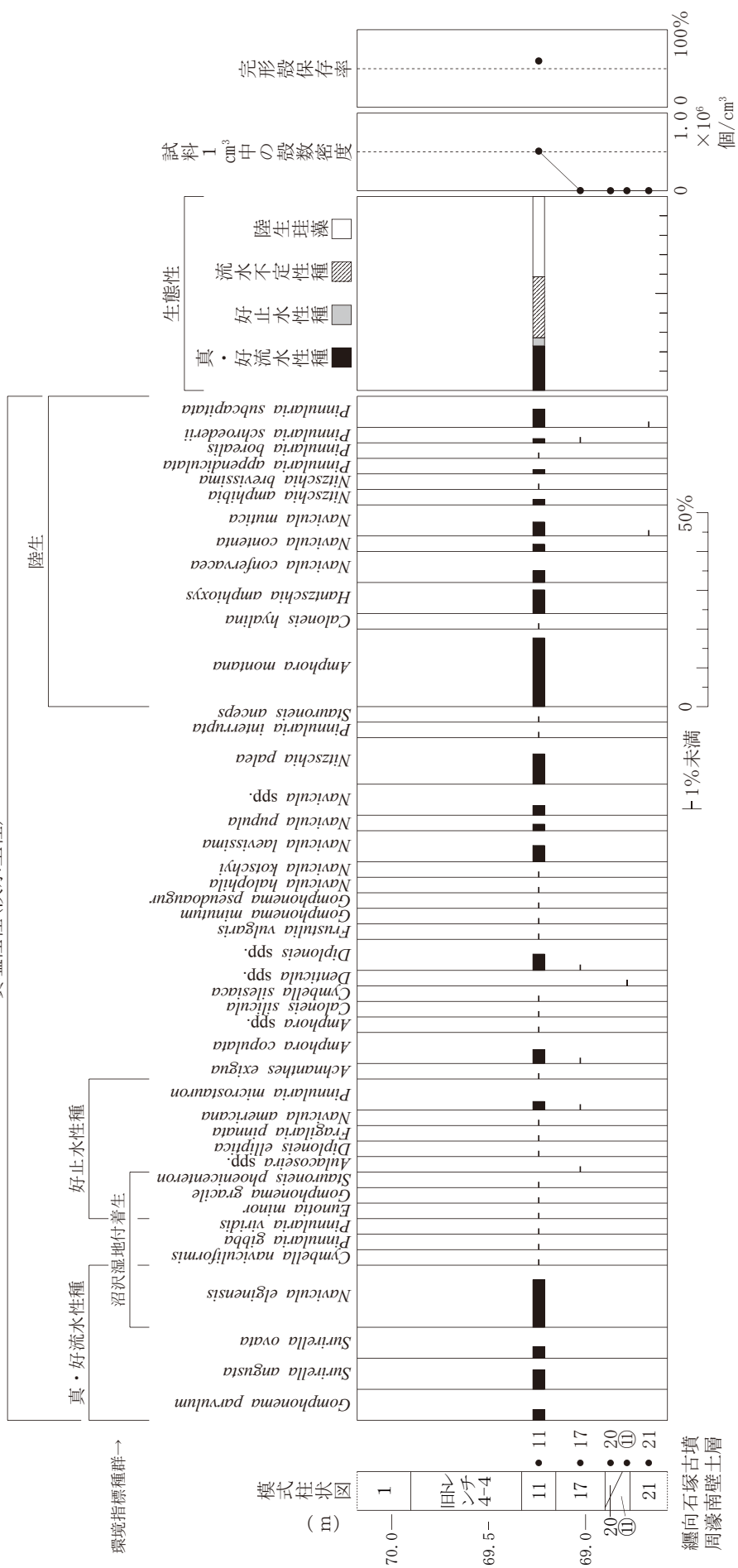


図146 縹向石塚古墳第 9 次調査における主要珪藻ダイアグラム 1

貧塩性種 (淡水生種)

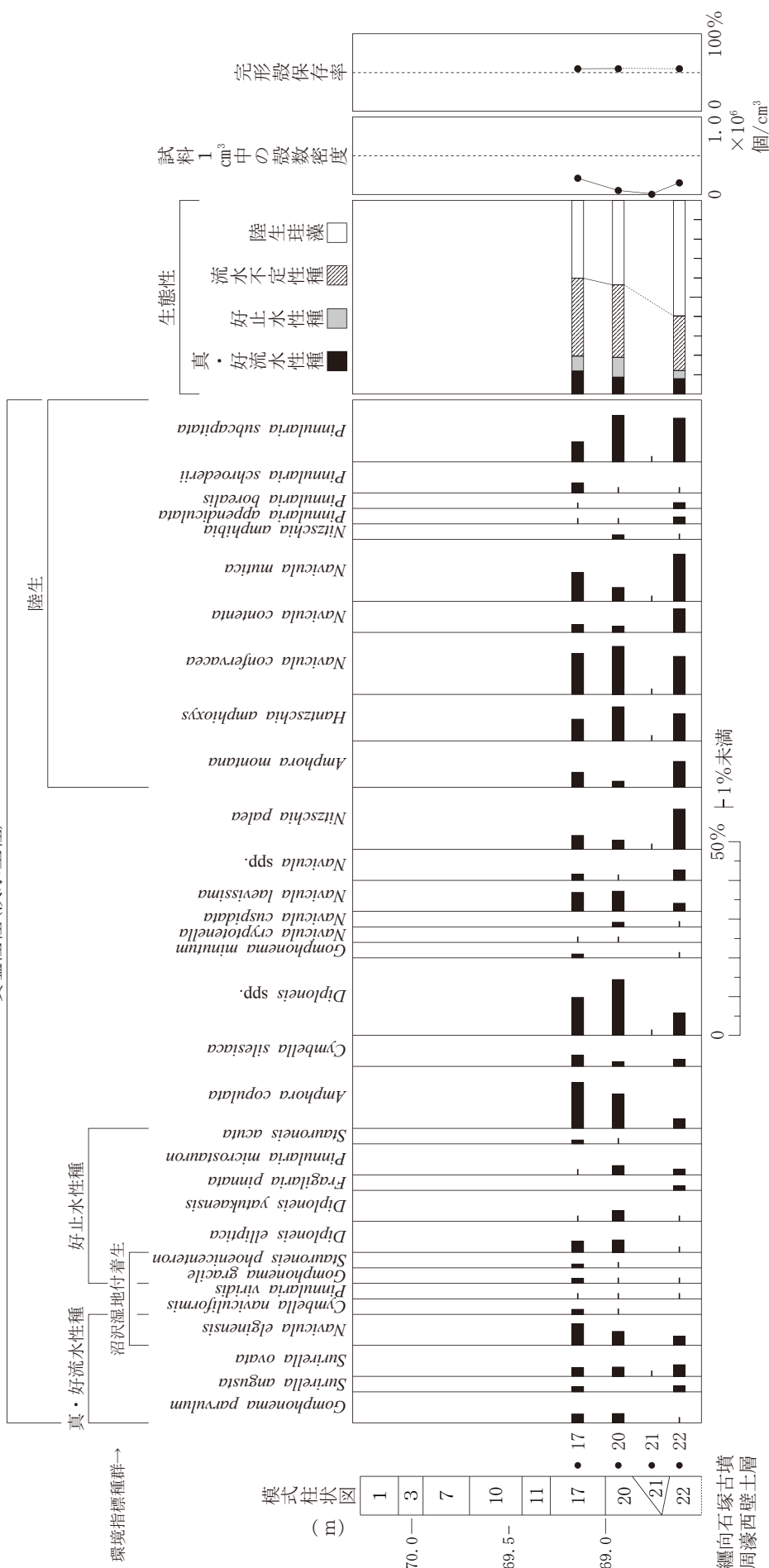


図147 縹向石塚古墳第9次調査における主要珪藻ダイアグラム2

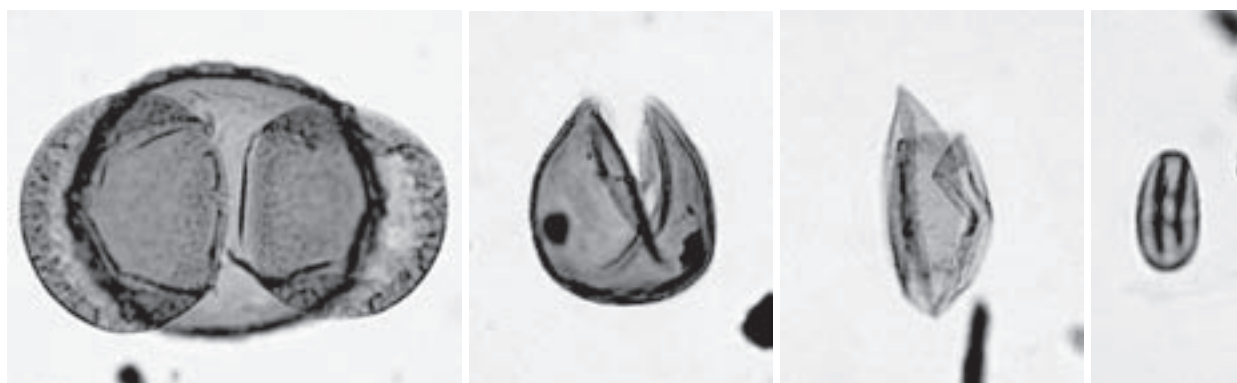
表105 纏向石塚古墳第9次調査における花粉分析結果

分類群		方形周溝墓						纏向石塚古墳周濠									
		1 土層			2 土層			南壁土層					西壁土層				
学名	和名	1	2	3	1	2	3	11	⑪	17	20	21	17	20	21	22	
Arboreal pollen	樹木花粉																
<i>Abies</i>	モミ属													1			
<i>Tsuga</i>	ツガ属															1	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ								1							1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科								1		2	1	3				
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ										1						
<i>Castanopsis</i>	シイ属												2		1	1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属															2	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属										1				2	1	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ														1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉																
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1										1				3	
Nonarboreal pollen	草本花粉																
Gramineae	イネ科				1	2		1	11	16	1	6		1	13	17	
<i>Oryza type</i>	イネ属型								1	2	1				1	2	
Cyperaceae	カヤツリグサ科							1		2	1				1	2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科					2					1						
Cruciferae	アブラナ科					2					1	1			3	3	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科											1				2	
Apiioideae	セリ亜科	1													1	1	
<i>Plantago</i>	オオバコ属											1					
Lactucoideae	タンポボ亜科					1									1	1	
Asteroidaeae	キク亜科	1															
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属											3					
Fern spore	シダ植物胞子																
Monolate type spore	単条溝胞子		2	2	2	8		1	1	4			1	1	2	3	
Trilate type spore	三条溝胞子		1	1	1						1				2		
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	0	0	0	0	0	2	4	1	5	0	1	4	6	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	
Nonarboreal pollen	草本花粉	2	0	0	1	7	0	2	12	21	6	10	0	1	20	28	
Total pollen	花粉総数	3	0	0	1	7	0	2	14	25	8	15	0	2	24	37	
Pollen frequencies of 1cm <sup>2</sup>	試料1cm <sup>2</sup> 中の花粉密度	3.0	0.0	0.0	1.2	5.6	0.0	1.4	1.1	1.5	4.8	9.6	0.0	1.4	1.4	2.2	
		×10			×10	×10		×10	×10 <sup>2</sup>	×10 <sup>2</sup>	×10	×10		×10	×10 <sup>2</sup>	×10 <sup>2</sup>	
Unknown pollen	未同定花粉	2	0	0	1	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	
Fern spore	シダ植物胞子	0	3	3	3	8	0	1	1	4	1	0	1	1	4	3	
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(+)	(+)			(+)								(+)	

表106 纏向石塚古墳第9次調査における珪藻分析結果

分類群	方形周溝墓						纏向石塚古墳周濠								
	1 土層			2 土層			南壁土層					西壁土層			
	1	2	3	1	2	3	11	⑪	17	20	21	17	20	21	22
貧塩性種（淡水生種）															
<i>Achnanthes exigua</i>							1								
<i>Achnanthes lanceolata</i>	1														
<i>Amphora copulata</i>							13		1			36	22		8
<i>Amphora fontinalis</i>															1
<i>Amphora montana</i>					1		64					12	4		22
<i>Amphora</i> spp.							3								
<i>Aulacoseira</i> spp.									1						
<i>Caloneis hyalina</i>							1								
<i>Caloneis silicula</i>							3								
<i>Cymbella naviculiformis</i>							3					4	2		
<i>Cymbella silesiaca</i>							3					9	3		6
<i>Denticula</i> spp.								1							
<i>Diploneis elliptica</i>							1					9	8		2
<i>Diploneis</i> spp.							15		4			30	36	1	19
<i>Diploneis yatukaensis</i>												2	7		1
<i>Eunotia bilunaris</i>													1		
<i>Eunotia minor</i>							1					1			
<i>Fragilaria capucina</i>													1		1
<i>Fragilaria pinnata</i>							1								4
<i>Frustulia vulgaris</i>							1								3
<i>Gomphonema acuminatum</i>															1
<i>Gomphonema gracile</i>							1					4	1		1
<i>Gomphonema minutum</i>							1					3			1
<i>Gomphonema parvulum</i>							10					7	6		2
<i>Gomphonema pseudoaugur</i>							1					1			
<i>Gomphonema</i> spp.												1			
<i>Gyrosigma</i> spp.												1			
<i>Hantzschia amphioxys</i>	5	1		1	1		22					17	22	2	23
<i>Navicula accomoda</i>												1			
<i>Navicula americana</i>							2					1	1		
<i>Navicula confervacea</i>	1						11					32	31	3	32
<i>Navicula contenta</i>							7					6	4		20
<i>Navicula cryptocephala</i>															1
<i>Navicula cryptotenella</i>												2	2		
<i>Navicula cuspidata</i>													3		3
<i>Navicula elginensis</i>							44					17	9		8
<i>Navicula gallica</i>															1
<i>Navicula halophila</i>							3								
<i>Navicula kotschy</i>							2					1			1
<i>Navicula laevis</i>							15					15	13		7
<i>Navicula mutica</i>	14			30	21		13			1		23	9	2	40
<i>Navicula mutica</i> v. <i>ventricosa</i>												1			
<i>Navicula placenta</i>												1			
<i>Navicula pupula</i>							6					1	2		
<i>Navicula</i> spp.							9					5	2		9
<i>Neidium affine</i>													1		1
<i>Nitzschia amphibia</i>							5						3		2
<i>Nitzschia brevissima</i>							1								1
<i>Nitzschia palea</i>	1				1		28					11	6	1	34
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>												1			
<i>Pinnularia appendiculata</i>							4					2	1		6
<i>Pinnularia borealis</i>					1		1					1			5
<i>Pinnularia gibba</i>							1								
<i>Pinnularia hemiptera</i>												1			
<i>Pinnularia interrupta</i>							3								
<i>Pinnularia microstauron</i>							8		1			1	6		5
<i>Pinnularia schroederii</i>							4		1			8	2		2
<i>Pinnularia subcapitata</i>							17				1	16	30	2	37
<i>Pinnularia viridis</i>							1					2	2		2
<i>Stauroneis acuta</i>												3	1		
<i>Stauroneis anceps</i>					1		1					1	1		1
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>							1					3	2		
<i>Stauroneis smithii</i>												1			
<i>Surirella angusta</i>				1			18					4			5
<i>Surirella ovata</i>							11					7	6	1	10
<i>Synedra ulna</i>												1			
合 計	22	1	0	32	26	0	361	1	8	0	2	306	250	12	328
未同定	1	0	0	0	1	0	12	0	0	0	1	11	8	0	11
破片	15	1	0	7	7	0	253	1	15	1	11	274	233	18	303
試料 1 cm <sup>3</sup> 中の殻数密度	4.6	2.0	0.0	6.4	5.4	0.0	5.1	2.0	1.6	0.0	6.0	2.1	5.2	2.4	1.5
	×10 <sup>-3</sup>	×10 <sup>-2</sup>		×10 <sup>-3</sup>	×10 <sup>-3</sup>		×10 <sup>-5</sup>	×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-3</sup>		×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-5</sup>	×10 <sup>-4</sup>	×10 <sup>-3</sup>	×10 <sup>-5</sup>
完形殻保存率（%）	-	-	-	-	-	-	59.6	-	-	-	-	53.6	52.5	-	52.8



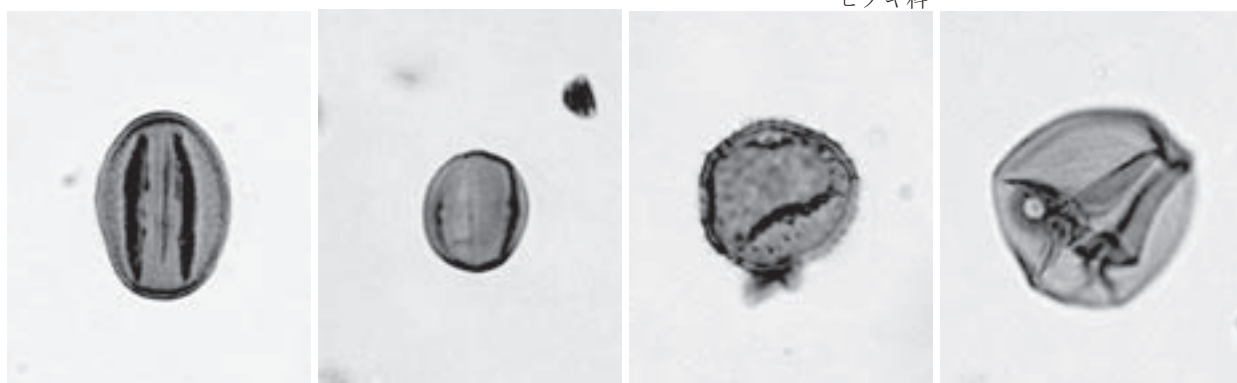


1 マツ属複維管束亜属

2 スギ

3 イチイ科-イヌガヤ科  
-ヒノキ科

4 シイ属

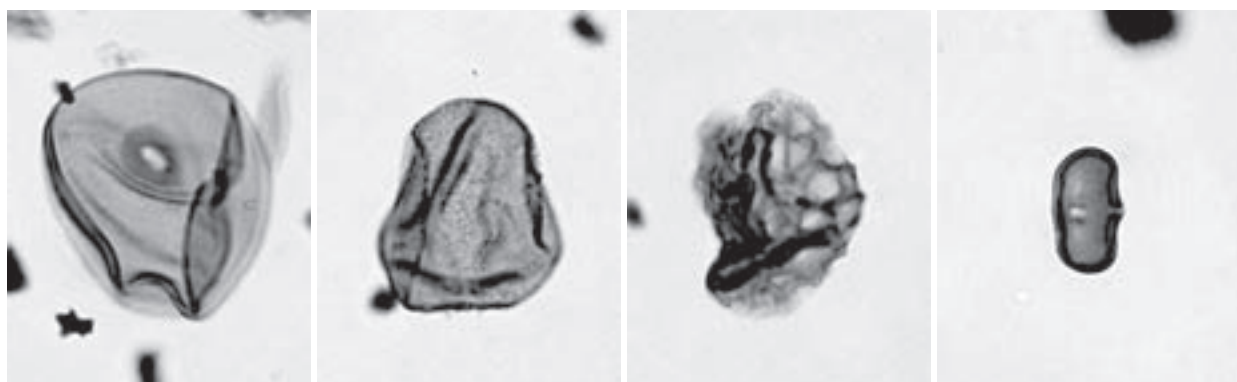


5 コナラ属アカガシ亜属

6 ブドウ属

7 オモダカ属

8 イネ科

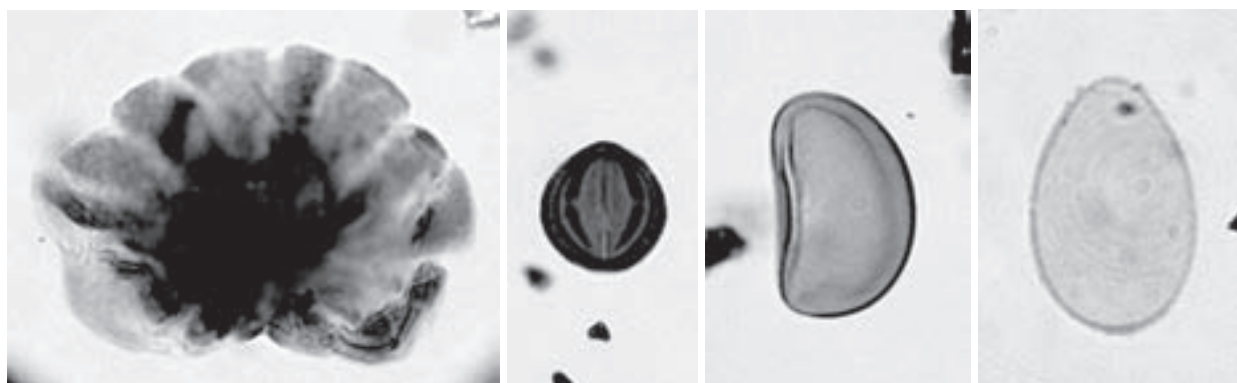


9 イネ属型

10 カヤツリグサ科

11 ササゲ属

12 セリ亜科



13 ゴマ (?)

14 ヨモギ属

15 シダ植物単条溝孢子 16 肝吸虫卵

1-15 — 10  $\mu$  m

16 — 10  $\mu$  m



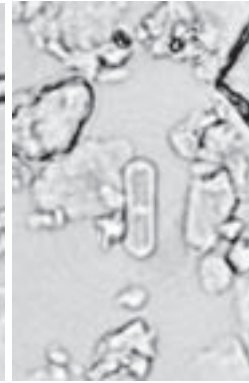
1 *Amphora copulata*



2 *Amphora montana*



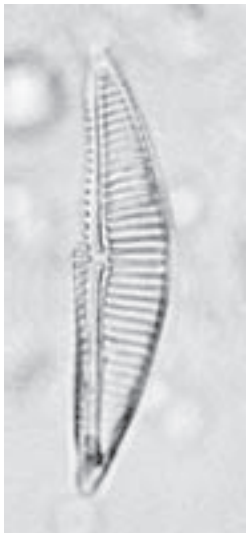
3 *Navicula confervacea*



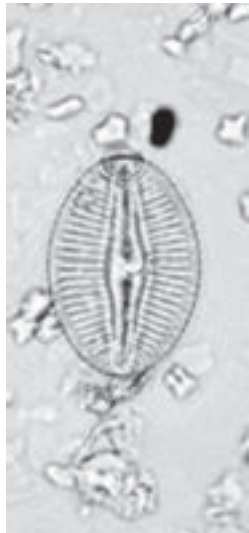
4 *Navicula contenta*



5 *Navicula mutica*



6 *Cymbella silesiaca*



7 *Diploneis elliptica*



8 *Gomphonema parvulum*



9 *Navicula elginensis*



10 *Nitzschia palea*



11 *Hantzschia amphioxys*



12 *Pinnularia borealis*



13 *Pinnularia schroederii*



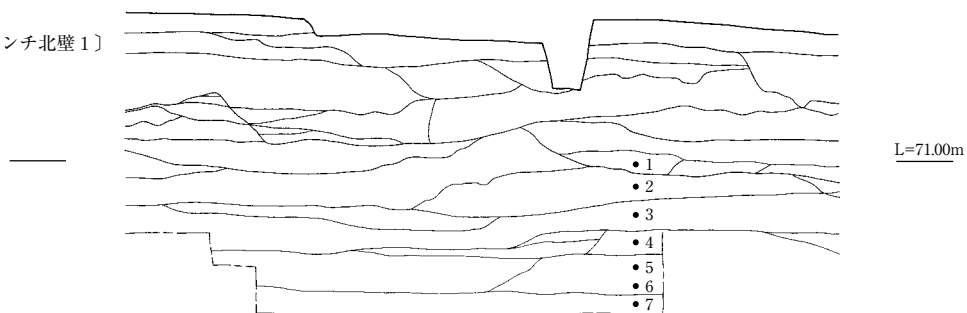
14 *Pinnularia subcapitata*



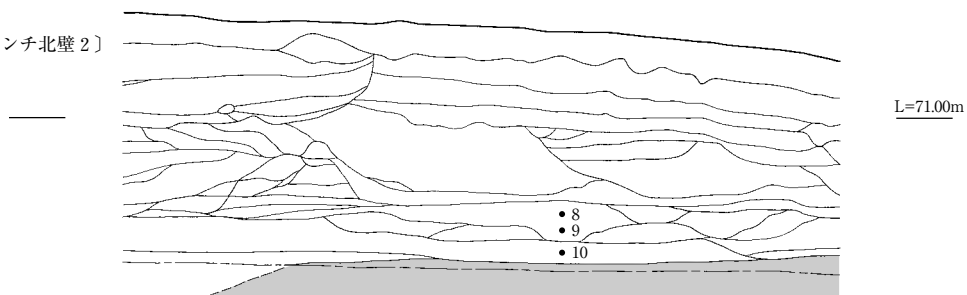
15 *Surirella ovata*

— 10  $\mu$  m

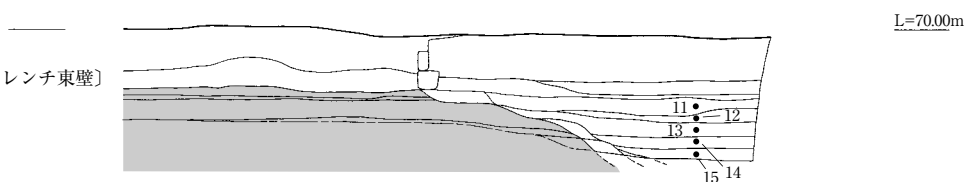
〔8-1 トレンチ北壁 1〕



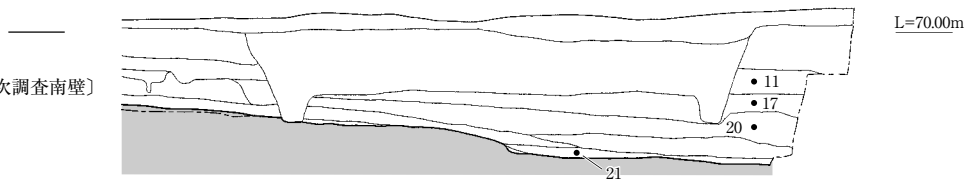
〔8-1 トレンチ北壁 2〕



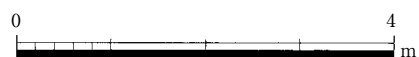
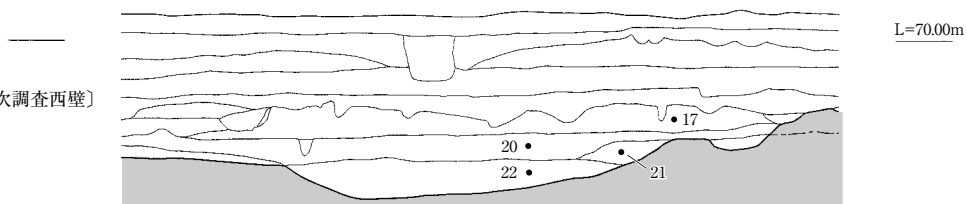
〔8-5 トレンチ東壁〕



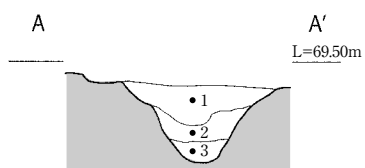
〔9次調査南壁〕



〔9次調査西壁〕



〔9次調査方形周溝墓 1〕



〔9次調査方形周溝墓 2〕

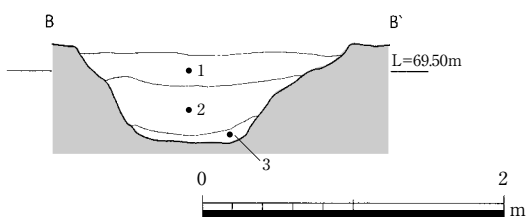


図148 第8・9次調査サンプル採取地点図 (1/80・1/50)

## 第4節 纏向石塚古墳第4次調査出土木製品の年輪年代

奈良文化財研究所 光谷拓実

### (1) はじめに

奈良県桜井市纏向石塚古墳は、1971年の第1次調査において出現期の古墳の可能性が指摘されて以来、箸墓古墳に先行する古墳として注目されてきた。

1989年に実施された発掘調査は第4次を数える。この調査は、古墳の形状を確かめるためにおこなわれたものである。調査の結果、全長92m～96mの前方後円墳と確認された。前方部前面が突き出したような特異な形をした周濠を含めると、その全長は120mにもなる。

### (2) 分析結果

この調査では、周濠内から杭、柱、板材、農具、槽、組物、削屑等などの木製品が出土した。このなかから、図75-25に示された板材（長さ約30cm、幅約60cm、厚さ約2cm前後）を選定し年代測定をおこなった。材種はヒノキで、試料の形状は辺材型（残存辺材幅約2cm）である。この年輪パターンとヒノキの暦年標準パターンとの照合の結果、試料の年輪年代は177年と確定した。この年輪年代は比較的伐採年に近いとみてよい。ここでもう少し原木の伐採年の推定にこだわってみよう。樹齢200年～300年以上の木曾ヒノキを例にとると平均的な辺材幅は約3.0cmである。仮に、この試料の辺材幅が平均的な幅をもっていたとしたら、さらにその外側に1cmあったことになる。この試料の残存辺材部に刻まれている年輪層数は36層、この中の平均年輪幅は0.58mm、この年輪幅でもって最終形成年輪まで推移したとすると、18年輪が形成されていたことになる。この試料の年輪年代は177年、これに削除されたであろう約18年輪を足すと195年となる。この年代値はあくまでも年輪年代を基に、あとは推算した数値をあてはめただけであるから、正確さに欠けるが、この試料の原木は西暦200年前後に伐採されたものと思われる。この板材がどういう経緯で周濠内に埋まったのか不明であるが、この古墳の築造年代を考える上で無視できない年代情報といえよう。なお、この時の発掘所見によると古墳築造の年代は、共伴した土器の年代からほぼ3世紀後半頃のものと推定されている。

### (3) まとめ

年輪年代法が古墳の年代を明らかにする上で有効な年代決定法であることには、異論はなからう。しかし、土器や埴輪などに比べて、樹皮型、辺材型の木製品の出土量が少ないために、今もって弥生・古墳時代の暦年の解明にいたっていない。今後、編年研究の指標となる土器や埴輪などと共伴して樹皮型や辺材型の木製品が出土し、事例を増やしていけば問題解決に向けて大きく前進することになる。

#### 【註記】

1) 桜井市教育委員会『纏向石塚古墳 範囲確認調査（第4次）概報』1989

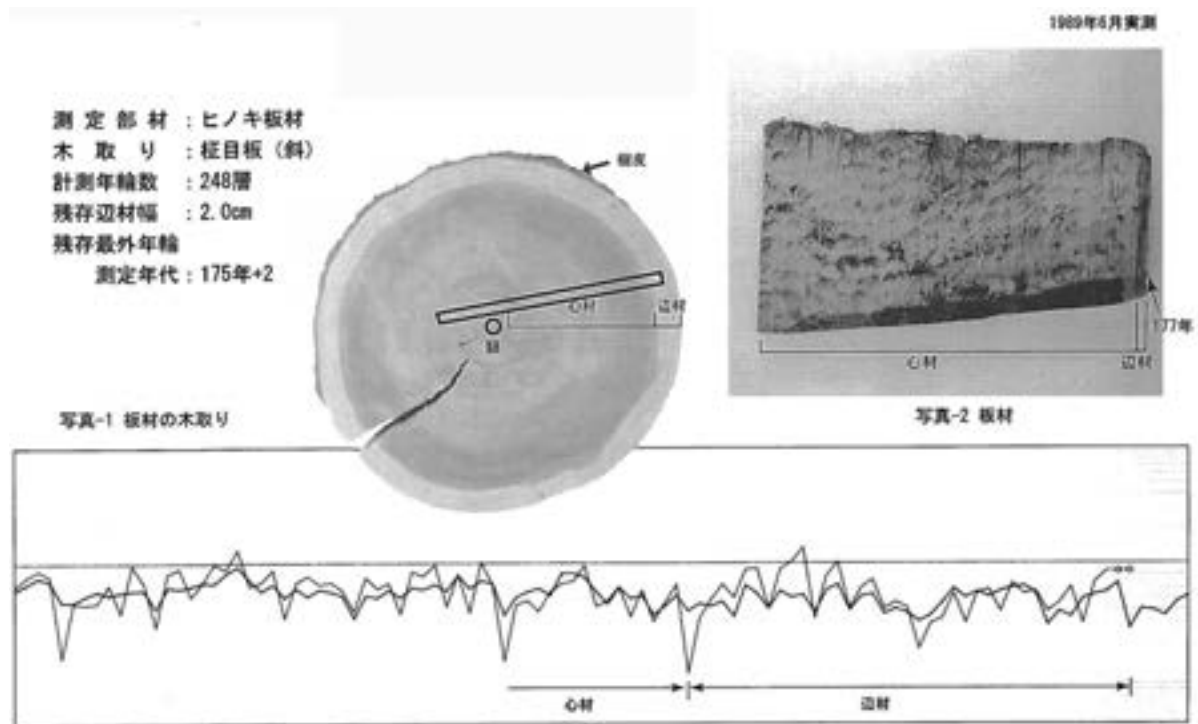


図149 纏向石塚古墳出土板材の年輪年代調査結果

## 第5節 纏向石塚古墳第4次調査出土の岩石について

橿原考古学研究所共同研究員 奥田 尚

纏向石塚古墳クビレ部北側の周濠最下層から出土した石は約半数が亜角～亜円の斑礫岩、他に亜角～亜円の黒雲母花崗岩、角～亜角のアプライト、1個のみ亜円の片麻状黒雲母花崗岩である。

周濠底の地山や箸墓古墳北側の池底には同様のアプライト質花崗岩の砂礫がみられる。また、東方の山地にも同様の岩石が分布する。アプライトや黒雲母花崗岩は東方山地のアプライト質黒雲母花崗岩の岩相の一部に酷似する。礫形からみれば、角が僅かにとれていることから谷川等に流出した礫であるといえる。山地近くの谷川で採取したものであろうか。斑礫岩は亜角～亜円であることから川に流出した礫である。巻向川や初瀬川に同様の礫が多く見られる。片麻状黒雲母花崗岩は東方の山地で、西へ礫を流出する範囲には分布しない。初瀬川等に見られることから、初瀬川の川原石を採取したのであろう。観察できた礫は二十数個であるが、近くの谷や河川の川原石を採取したと推定され、遠くから運んだと言えるものはない。



## 第6節 纏向石塚古墳におけるレーダー探査

日本無線株式会社

### (1) はじめに

本調査は、奈良県桜井市太田「纏向石塚古墳」に於いて、墳頂部付近の内部状況を地中探査レーダー法により地表から調査したもので、以下の調査原理、調査方法、調査結果について報告する。

### (2) 調査原理

地中探査レーダーの原理は、現在広く用いられている一般のレーダーと基本的には同じである。すなわち、図150に示すように、電磁波を送信アンテナから地中に向けて放射して、その電磁波が土と電氣的性質の異なる物質、たとえば埋設管、空洞、地下水などの表面で反射され再び地表に出て、地表近くに置いた受信アンテナに到達するまでの時間から、反射物体までの距離を知り、アンテナを地表面に沿って移動することにより、水平面上の位置を知る。

地中レーダーは、地下の浅い部分を高分解能で探査することを目的としているため、パルス幅がきわめて狭く（数ナノ秒、ナノ： $10^{-9}$ ）なければならない。このようなパルス幅のバースト波はキャリア周波数が1GHz以上になり、地表面での反射や地中での減衰が大きくなるので、地中探査レーダーではキャリアを含まないインパルス波を送信波として用いる。パルス幅数ナノ秒のインパルス波は、DC～数百MHzにわたって周波数成分を持つので、地中探査レーダー用のアンテナは特殊な広帯域アンテナを使用し、また、電波を地中にのみ放射し空中へは放射しないように特殊なシールドが施されている。

地中での電波の速度は空気中より遅く、近似的に次式で表される。

$$V = C_0 / \sqrt{\epsilon \gamma}$$

$C_0$ ：空気中の電波の速度、 $\epsilon \gamma$ ：土の非誘電率

従って、地中の反射物体までの距離Dは、送信時刻から反射波の受信時刻までの時間差Tから次式で求められる。

$$D = 0.5 V T$$

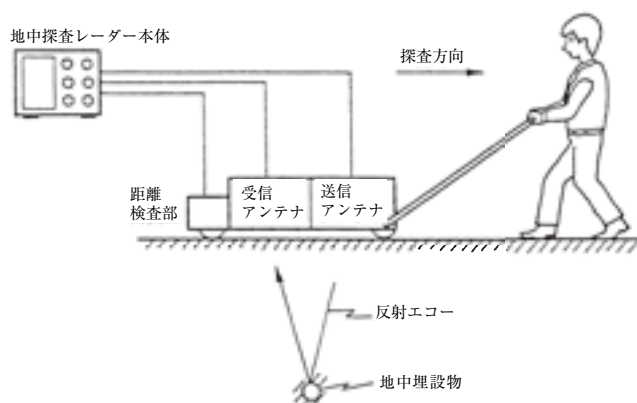


図150 地中探査レーダーの方法

### (3) 調査方法

墳頂部付近について、以下に示すように①～⑤のブロックに分け、東西方向に約33m、南北方向に約22mの範囲を地表から深さ2mの位置まで内部探査を行った。

ブロック-① : 1m間隔で東西(1H-1~15)に14mの範囲を探索し、南北(1V-1~15)に14mの範囲を探索した。

ブロック-② : 1m間隔で東西(2H-1~15)に14mの範囲を探索し、南北(2V-1~14)に13mの範囲を探索した。

ブロック-③ : 1m間隔で東西(3H-1~8)に7mの範囲を探索し、南北(3V-1~13)までの12mの範囲を探索した。

ブロック-④ : 1mの間隔で東西(4H-1~7)に6mの範囲を探索し、南北(4V-1~15)までの14mの範囲を探索した。

ブロック-⑤ : 1mの間隔で南北(5V-1~5)の4mの範囲を探索した。

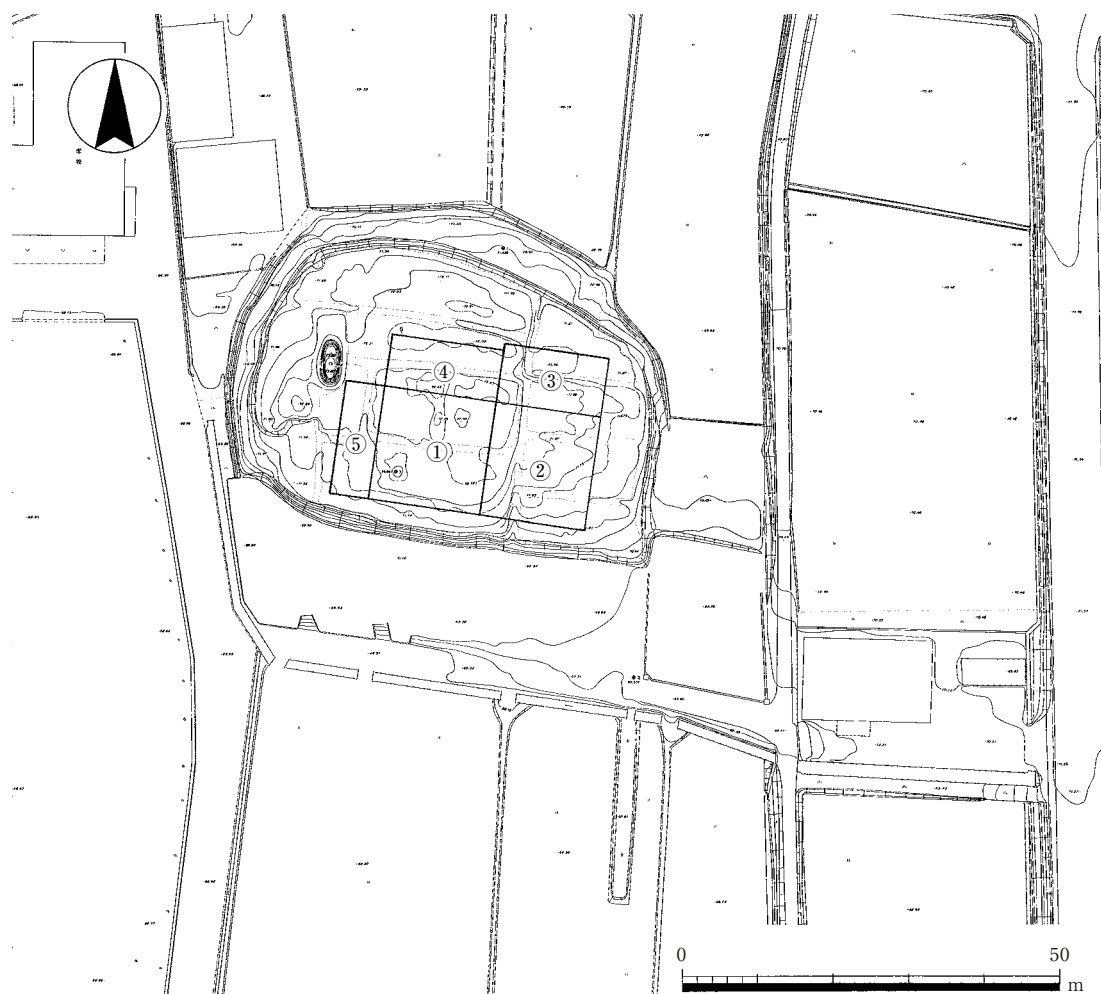


図151 調査区区割図 (1/1,000)



#### (4) 調査結果

今回の調査から墳頂部内部には図152の部位に地層の変化に伴う、レーダー反射波形および異物からのレーダー反射波形が数種類のパターンで検出されている。

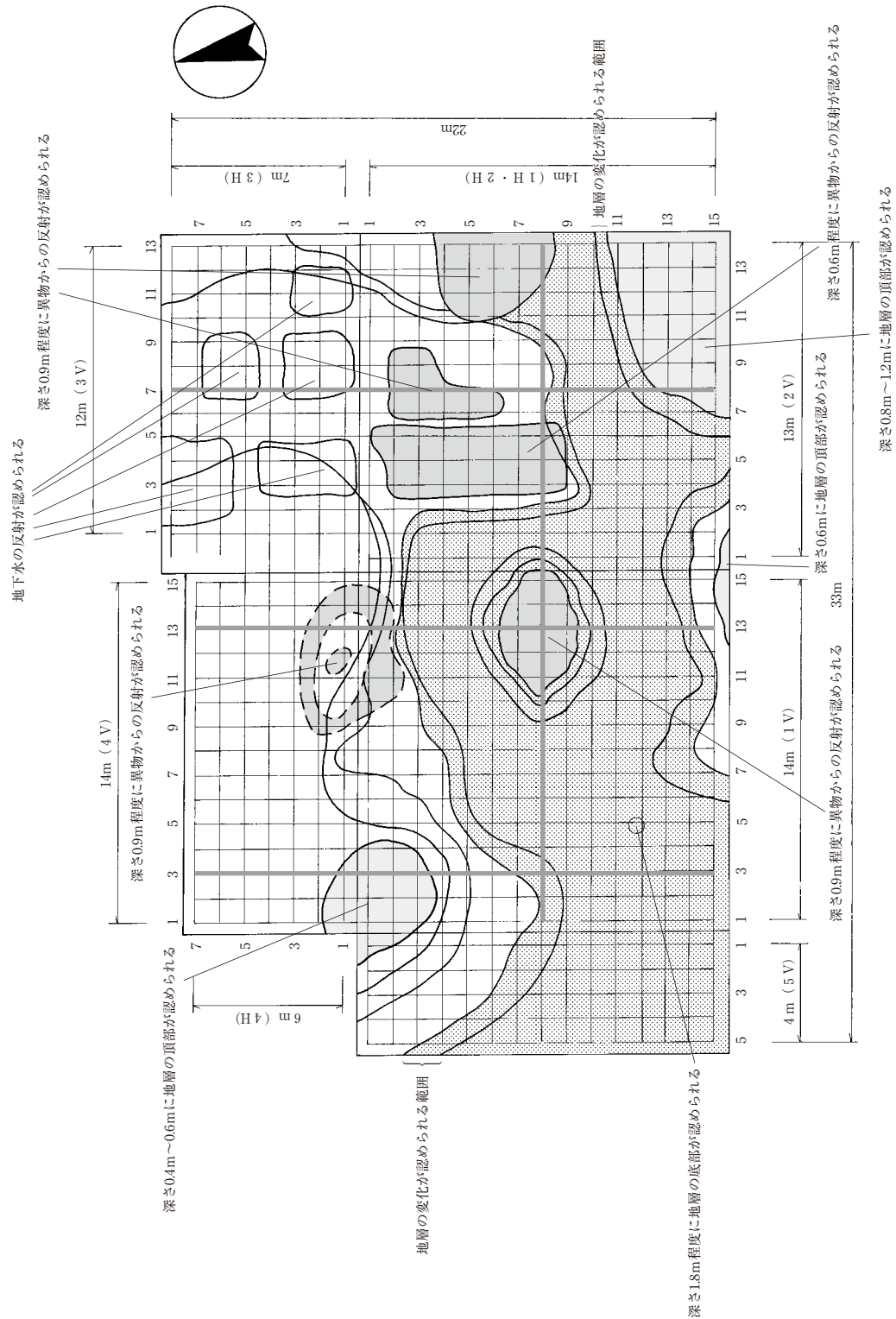
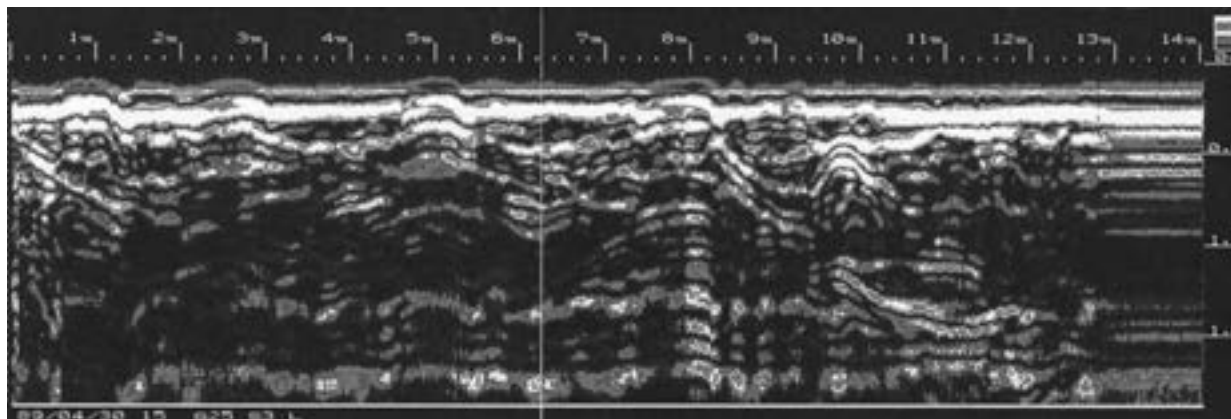


図152 レーダー探査の結果

W

&lt;1H-8ライン&gt;

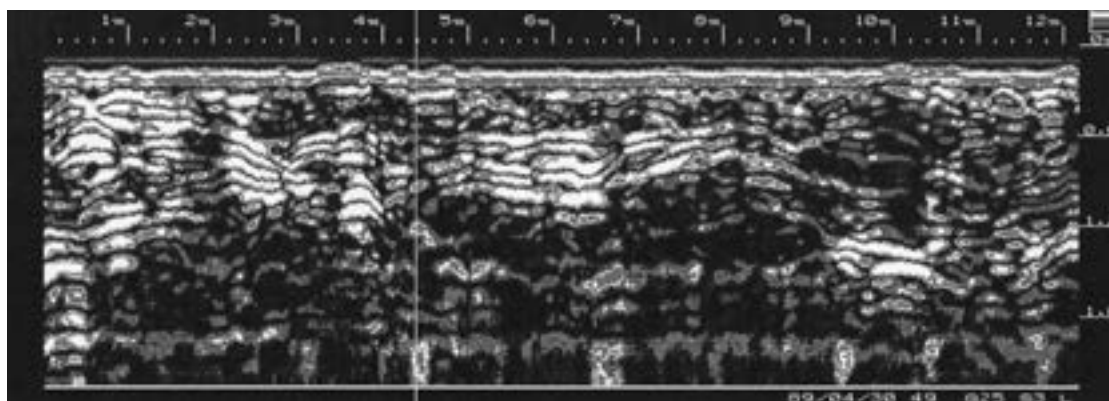
E



W

&lt;2H-8ライン&gt;

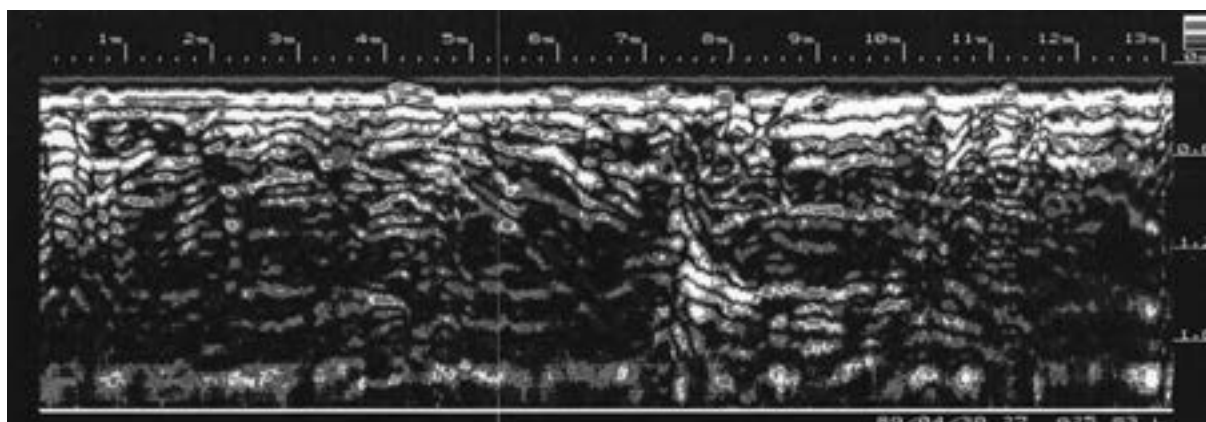
E



N

&lt;1V-3ライン&gt;

S



S

&lt;4V-3ライン&gt;

N

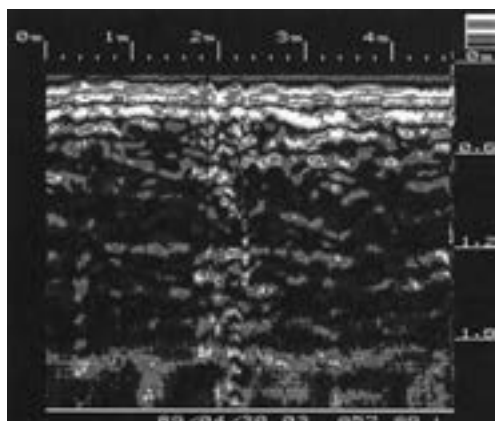
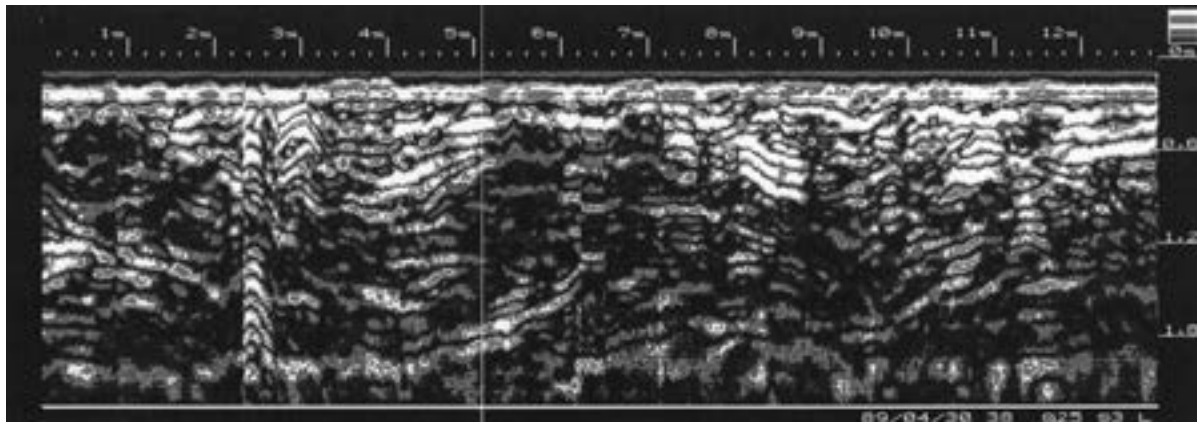


図153 レーダーによる内部探査画像1

N

&lt; 1 V-13ライン &gt;

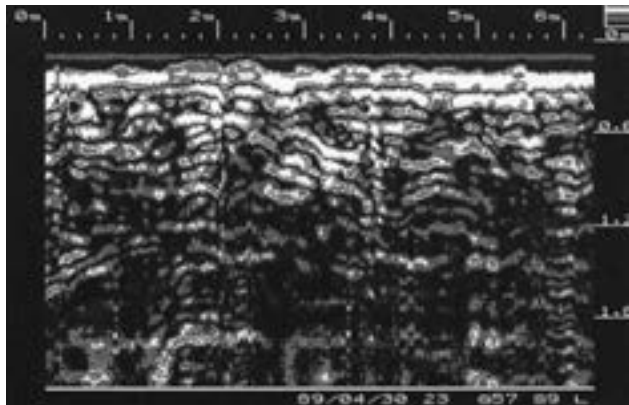
S



S

&lt; 4 V-13ライン &gt;

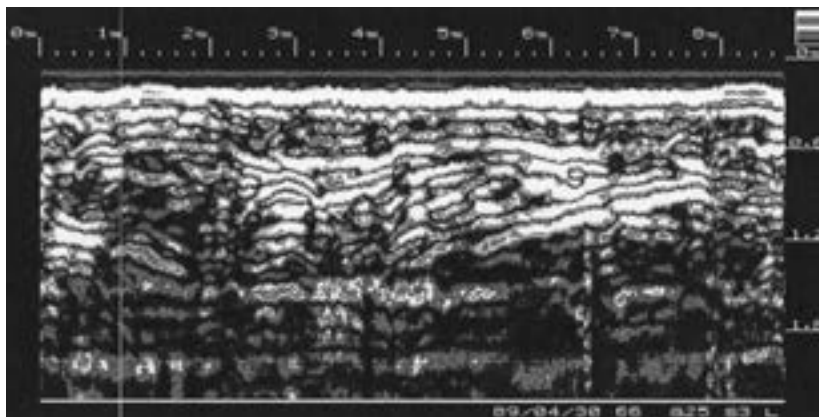
N



N

&lt; 2 V-8ライン &gt;

S



S

&lt; 3 V-7ライン &gt;

N

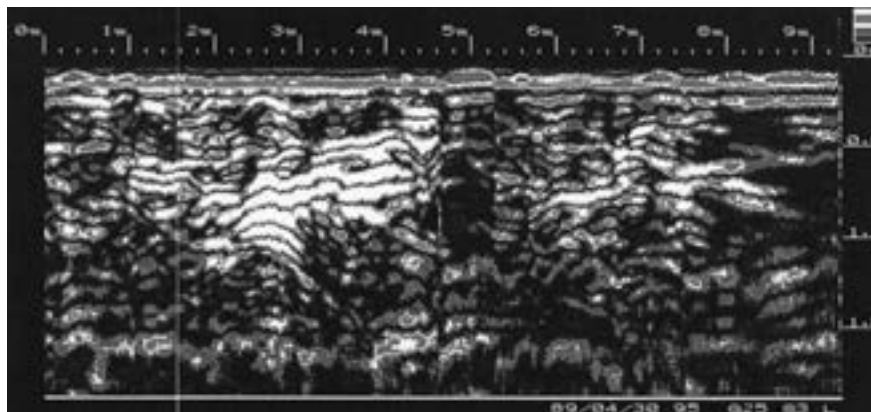


図154 レーダーによる内部探査画像 2

# 墳古塚石向纏

発掘調査報告書

総括編





## 第13章 纏向石塚古墳の墳形復元

### 第1節 纏向石塚古墳の墳形復元の変遷

纏向石塚古墳の調査は昭和46年以来、平成18年3月までの間に断続的に9次にわたる範囲確認調査が実施され、のべ3,752㎡の調査が行われている。古墳の墳形は当初考えられていた径70～80mの円墳から全長約96mの前方後円墳へと35年の間に大きく変化することとなり、過去に行われた調査ではその都度復元案が提示されているが、広く使用されている復元案は必ずしも最新の情報に基づいたものではなく、現時点で確認されている正確な墳丘復元図が認識されている状況にはない。ここでは煩雑となった纏向石塚古墳の墳形についてその復元案の変遷を整理しておくこととする。

#### 【纏向石塚古墳第1次調査（纏向遺跡第6次）】

この調査では後円部西側に設定された1-1トレンチから検出された南北約50m、幅約20mの孤状に巡る落ち込みの確認により、古墳の周囲に周濠が存在することが確認されている。また、この周濠の延長部分の様相を探るため墳丘の西北部分に設定されたのが1-2トレンチである。この1-2トレンチからもやはり古墳北西部の墳丘肩部と周濠の外肩部が検出されており、周濠外肩部の形状を根拠として推定された墳形は径70m～80mの円墳<sup>1,2)</sup>であった。

なお、周濠部分の調査は上面検出を基本とし、部分的にしか内部の調査は行われていないがそれでも1-1トレンチからは土器資料のほか、鋤や有頭棒など多くの木製品や鶏形木製品が出土し、注目を浴びるとともに出土土器の年代観から庄内0式期（原報告では纏向1式期）の築造と推定され、3世紀代に遡る列島内最古の古墳となる可能性が指摘されている。

#### 【纏向石塚古墳第2次調査（纏向遺跡第8次）】

2-1から2-3トレンチにおいて墳丘の基底や端部、そして周濠の存在が確認されている。この調査では墳形は第1次調査で考えられていた規模よりもやや小さな南北60m～75m、東西60mの扁円形を呈することが判明し、また墳丘東側の水田区画の検討により東へ張り出す前方部を持つ可能性が指摘されるに至っている<sup>1)</sup>。

なお、この調査からの出土遺物には墳丘下の包含層や周濠埋土内から得られた土器の他、周濠埋土の下層からは加工された丸太材や鋤・鍬などの多くの木製品があり、中でも特殊な遺物として目を引くものに孤文円板がある。

#### 【纏向石塚古墳第3次調査（纏向遺跡第10次）】

この調査では、周濠が墳丘に沿って弧を描くと推定されていた3-1トレンチにおいて前方部の南側面とこれに沿う周濠が検出され纏向石塚古墳が東南方向に前方部を持った前方後円墳となる事が確認されている<sup>3)</sup>。

また調査区は矮小ながら、3-2トレンチでは幅約6m、深さ約50cmの溝の存在が確認されている。この溝は前方部前面を区画するための施設と考えられ、前方部前面は規模の小さな区画溝によって区切られていたことが確認されている。

この調査からの出土遺物には土器資料の他に、3-1トレンチの前方部南側面の周濠からは柱材・板材・異形木製品などが建築材を中心としたとみられる多くの木製品が出土している。

#### 【纏向石塚古墳第4次調査（纏向遺跡第55次）】

前方部及び後円部の北半を中心にトレンチが設定され、前方部からクビレ部、そして後円部にかけての墳丘と周濠の様子が明らかにされている<sup>4)</sup>。

この調査によって明らかにされた纏向石塚古墳の墳丘は全長約93 m、後円部は横長の扁楕円形を呈し、最大で径約64m、短径で約61mに復元されるとともに、前方部は長さ約32m、クビレ部幅約15m～16m、前方部前面幅約32mに復元が行われ、はじめて古墳の詳細な復元プランが描かれることとなっている（図155）。さて、この調査からの出土遺物には墳丘盛土内からの遺物と周濠内、前方部北東隅周濠部分において検出された導水溝からの遺物の3者がある。調査の性格上、墳丘・周濠ともに部分的な掘り下げしか行われていないが4-3 d トレンチからは盛土に伴う土器が、4-3 a トレンチからは周濠堆積の下層部分より土器の他に柱材・鋤・鍬・横槌・槽・板材など多量の木製品が、4-4 トレンチの周濠堆積内や導水溝からは土器の出土があった。

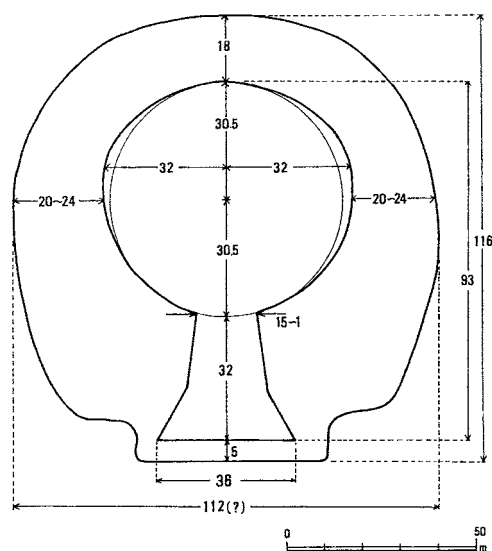


図155 墳形復元案（4次 1／2,000）

#### 【纏向石塚古墳第5次調査（纏向遺跡第62次）】

第5次調査においては5-2トレンチから5-4トレンチに至る対象地西側部分ではほぼ推定ラインどおりに周濠外肩が検出されたものの、5-1トレンチにおいては周濠外肩が検出されず、5-2トレンチと4-2トレンチ間の周濠の形状が判然としない状況となったため、急遽5-1トレンチよりも墳丘に近い部分に5-5トレンチを設定し、周濠外肩のラインを検出することに成功している。

なお、この周濠外肩ラインをより明確に捉えるために周濠外肩に沿ってトレンチを拡張したのが5-6トレンチであり、第5次調査では結果的に6本のトレンチを設定することとなっている。

これらの調査から明らかになった周濠外肩の復元ラインは5-5・6トレンチ部において想定されていた位置よりも墳丘側で検出されたことと、4-2トレンチで検出されている周濠外肩ラインの調査成果を勘案することにより、前方部の側面部分において一部が外側へと突出する特異な平面プランが示されることとなった<sup>5)</sup>（図156）。

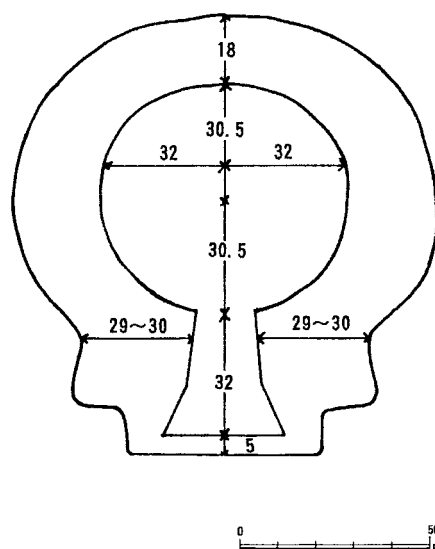


図156 墳形復元案（5次 1／2,000）



### 【纏向石塚古墳第9次調査（纏向遺跡第144次）】

この調査が行われたのは平成元年に検出された前方部の北側、かつて4-2トレンチが設定され周濠外肩のラインが検出されている水田部分で、かつて4-2トレンチで確認された周濠外肩ラインは5世紀末築造の石塚東古墳の周濠肩が誤って検出されたものであることが判明している。

この調査により検出された纏向石塚古墳の周濠位置はかつて認定されていた地点よりもさらに西側、より墳丘に近い部分に位置している。調査成果から確認された纏向石塚古墳の周濠形状は4-4トレンチと5-5トレンチで検出されている周濠ラインをほぼ直線的に結んだ形となり、後円部では墳丘に沿うようにつくられ、クビレ部付近から前方部に向かって直線的に窄まっていくいわゆる馬蹄形に近い形状に復元が行われている（図157）。

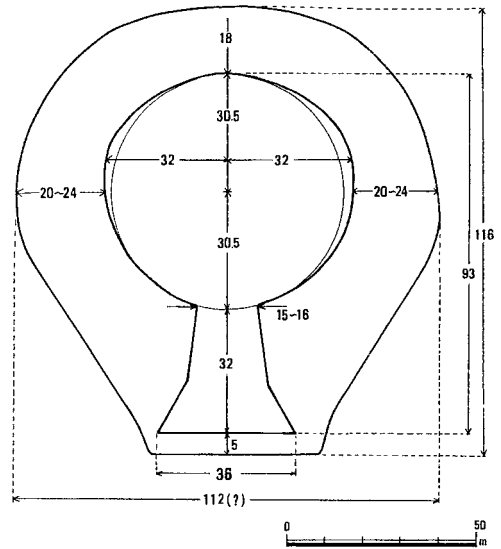


図157 墳形復元案（9次 1/2,000）

以上、35年の間に行われてきた調査の中でその時々示された墳丘や周濠形状の復元案の変遷を概観し、当初径70～80mの円墳と考えられていた纏向石塚古墳がどのような調査の過程を経て現在の復元形状に至ったのかを簡単に整理してきた。

これらの成果をもとに纏向石塚古墳は矢塚古墳・ホケノ山古墳などとともに「纏向型前方後円墳」の典型例として古墳の出現をめぐる論争の中で重要な位置を占めることとなっている。次節ではこれまでの調査結果に基づいて現時点で想定される古墳の復元案を提示しておくこととする。

## 第2節 纏向石塚古墳の平面プラン

図158にはこれまでの調査により検出された墳丘・周濠の肩部やそれに対応する下端線の全てを示し、図159ではこれらの情報をもとに作成した墳丘の検出プランを提示しているが、第1～2次調査地の記録は国土座標に基づいた正確な位置の特定が困難な状況であることに加え、調査の多くが墳丘基底部あるいは周濠底部までの確認を行ったものではなく、各調査において検出された墳丘・周濠外肩部を基に復元されたものであるため、墳丘・周濠が検出されたレベルやその残存度によって認定される墳端や周濠外肩の位置が変動することとなってしまう、墳丘プラン図として適切とはいえないことをお断りしておく。

それでは図158に示した遺構の検出状況図を基に現時点で考え得る纏向石塚古墳の墳丘形状を今一度確認しておくこととしよう。図158によると調査によって検出された墳丘肩部における見かけ上の全長は約94mだが、これは全長としては適切な数値では無い。古墳の中軸線上では調査によって墳丘の基底部が確認されているわけでは無いが、後円部・前方部側ともに他の地点で確認されている基底部の

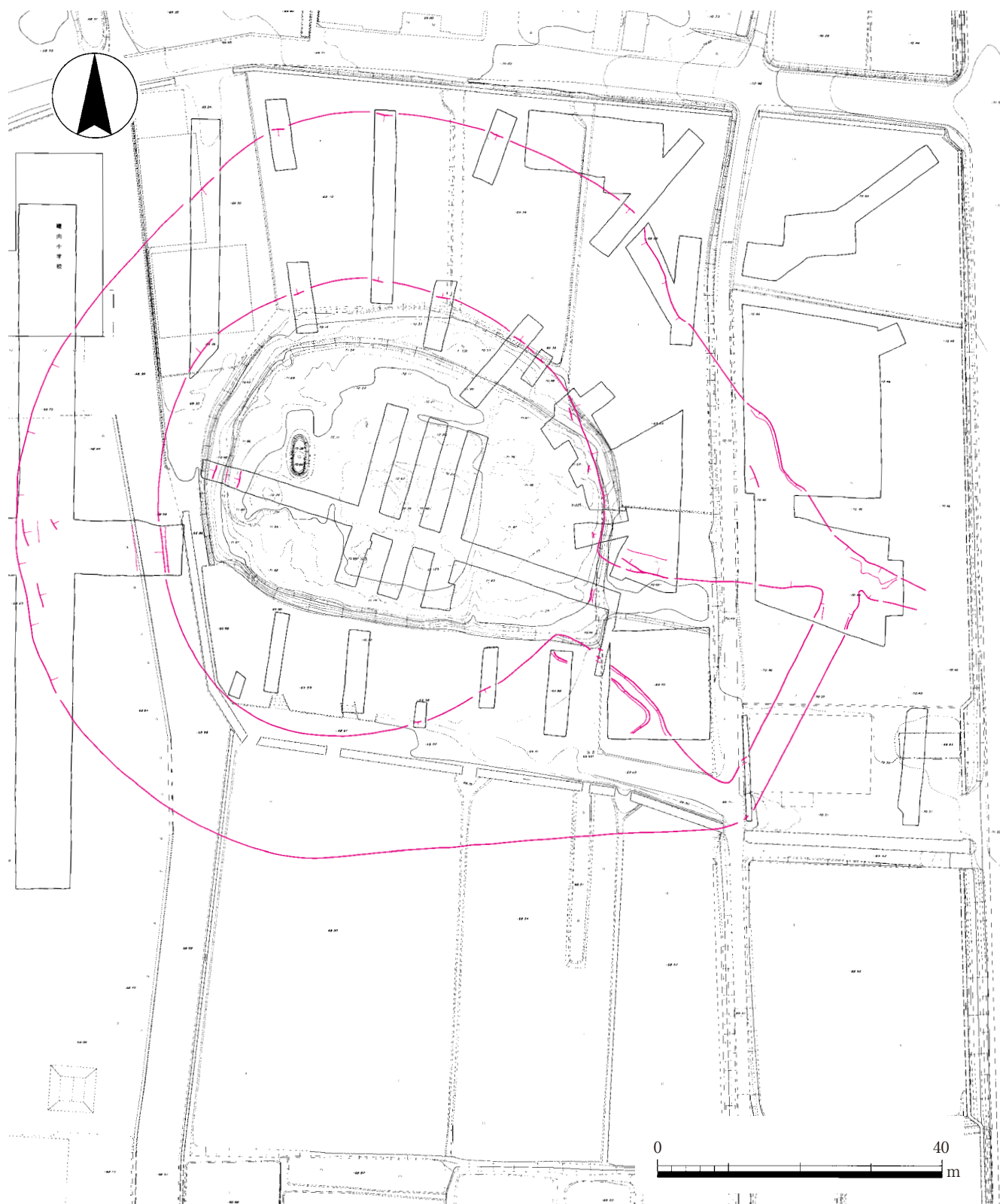


図158 墳丘および周濠の検出状況（1／800）

様子を基に未検出の基底部位置を勘案すると全長は約99mに復元することができる。なお、これに前方部前面周濠幅の約4.5m、後円部周濠幅の約18mを加えると周濠部分を含めた規模は約116m、主軸に直交する部分の周濠外肩間の距離は約105mとなる。

後円部はこれまでも指摘されているように平面的には南へと張り出したややいびつな扁球形を示している。直径は検出された墳丘肩部では主軸に直交する部分で約65mとなるが、基底部での規模を想定するためにはこれに基底部までの距離が加わることとなり、推定では約73mとなる。一方、主軸ライン上では墳丘肩部で約64m、前方部との取りつき部分をどう考えるかによって数値は異なるが、後円部・前方部側ともに基底部までの距離を勘案すると約72mの規模となり、平面的にはややいびつな形状を呈するのに対し、軸線上での数値はほぼ似通った数値を示している。

また、前方部長は墳丘肩部で約30m、基底部の位置を勘案すると27～28m程度になるものと推定される。クビレ部幅は検出された墳丘上面では約12m、基底部間では約18mに復元され、推定される基底部を含めた前方部前面の幅は約31mとなる。

次に周濠の様子も見ておくこととしよう。第9次調査でも指摘されたように前方部側でやや窄まり、前方部前面が狭い形状を呈するものの、周濠の平面プランは馬蹄形に近い平面プランを持つことが判明した。残念ながら墳丘南側部分については調査が行われておらず、周濠外肩部は墳丘北側の成果をもって復元を行うしかないが、第2・3次調査では明らかに滞水状態を示す周濠堆積層の存在が確認されており、築造時の周濠は南側に存在する旧河道に向かって解放されるものではなく、全周するものであった様子がうかがえる。このような状況から周濠の幅は決して一定のものとはなっていないが先述した主軸線上の後円部側では幅約18m、主軸に直交する部分では約24mの規模を有していた。

最後にやや煩雑になるが第1～2次調査地の記録が国土座標に基づいた正確な位置ではないという大きな問題が残るものの、現時点で確認できる墳丘の築造企画についても整理しておくこととする。

墳丘の築造企画を考える前提として、先に見てきた墳丘裾部で導き出された墳丘規模の数値を使用して考えるのは適切ではない。墳丘の設計や築造時の縄張り等は当時の地表面において企画が設定されたはずであるから、検出された墳丘基底部より得られた数値をもって築造企画を考えるのではなく、本来は周濠掘削前の遺構面のレベルで検討を行うべきと考えるが、残念ながら一連の調査では3世紀段階の地表面は確認されていないため、ここでは旧地表面に最も近いと考えられる地山面周辺のレベルで確認作業を行うこととする。

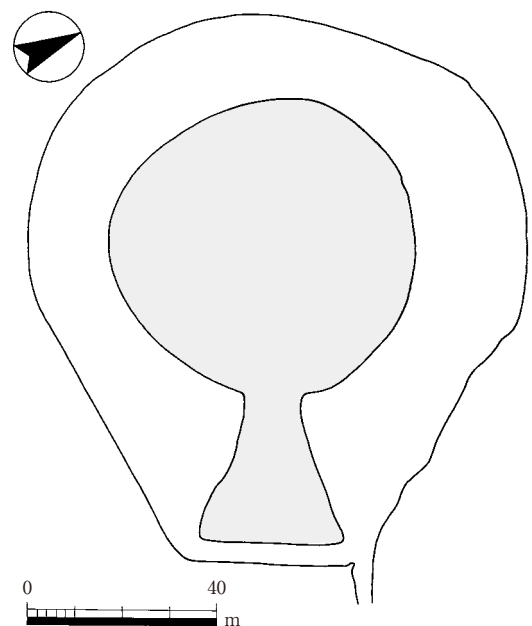


図159 纏向石塚古墳の平面プラン（1／1,600）  
※墳丘・周濠ともに検出された肩部にもとづく

この考えに基づいて墳丘の企画を復元すると後円部径は約64～65m、前方部長は約30mの全長約94mの規模で本来の設計が行われたものと判断され、ここに後円部側で約4m、前方部側で約1m分の周濠掘削分の墳丘斜面が加わることにより、墳丘基底部で全長99mの纏向石塚古墳が完成されたものと考えられる。

(橋本)

【註記】

- 1) 石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会1976
- 2) 石野博信「奈良県纏向遺跡の調査」『古代学研究65』古代学研究会1972
- 3) 久野邦雄・寺沢薫「石塚古墳の調査」『奈良県遺跡調査概報1976年度』奈良県立橿原考古学研究所1977
- 4) 萩原儀征・寺沢薫「纏向石塚古墳 範囲確認調査（第4次概報）」桜井市教育委員会1989
- 5) 萩原儀征編『纏向石塚古墳第1期整備事業－範囲確認調査（第5次～7次）概報－』（財）大和文化財保存会 桜井市教育委員会1995
- 6) 丹羽恵二・橋爪朝子「第3節 纏向遺跡第144次調査（纏向石塚古墳第9次調査）概要報告」『桜井市 平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会2006

## 第14章 纏向石塚古墳の築造時期をめぐって

### 第1節 纏向石塚古墳の築造時期

一連の調査により纏向石塚古墳の墳丘形状についてはほぼその全容が解明できたと言えるが、今後に残された課題も多い。特に古墳の築造時期をめぐっては3世紀代におさまる年代観についてはほぼ異論がないものの、未だ厳密な時期を示す決定的な資料や状況に恵まれず、各担当者間でも意見の統一をみていないのが実情である。今のところ各次数の担当者によって提示されている纏向石塚古墳の年代観は石野博信氏の纏向2類初頭＝纏向1式新相とする考えと、橋本輝彦の庄内1式期<sup>1)</sup>、寺沢薫氏の庄内3式期の3者がある。これについては既に多くの文献において論争が繰り広げられており、細述は避けるが後節で石野・寺沢各氏の築造時期に対する考え方を再度整理していただいているのでこれを参照されたい。(橋本)

#### 【註記】

1) 橋本による纏向石塚古墳の築造年代に関する考えは以下の文献などによる。

橋本輝彦『纏向石塚古墳第8次調査の概要（纏向遺跡第87次）』桜井市教育委員会1996

橋本輝彦「纏向古墳群の発生期古墳出土土器について」『庄内式土器研究』XIV 庄内式土器研究会 1997

橋本輝彦「第9章、纏向古墳群の調査成果と出土土器」『東田大塚古墳』（財）桜井市文化財協会 2006

### 第2節 纏向石塚古墳の相対年代

纏向石塚古墳を築造した相対的年代は、纏向2類初頭<sup>1)</sup>（＝旧纏向1式新）である。その根拠は主として桜井市立埋蔵文化財センターによって1996年に行われ、1997年に概要報告があった纏向石塚古墳第8次調査の成果による。

2000年、私は同報告をもとに「奈良県纏向石塚古墳、墳丘盛土内の土器群に対する評価」（『古代学研究』150）をまとめ、2005年『大和・纏向遺跡』（学生社）に再録した。その要点は次の通りである。

私は、纏向石塚古墳の墳丘盛土から出土した3600点余の土器片の中に庄内型甕は一点も含まれていないと認識している。墳丘盛土内土器でもっとも新しいのは纏向1式新相の5点である。私は、このことを根拠の一つとして纏向石塚古墳の築造を庄内型甕成立（纏向2式）以前の纏向1式新相段階と考えている。

3600片の中に庄内型甕がない以上、庄内型甕成立以前の盛土築成と考えているが、一片の内面削り甕と庄内式的な要素をもった甕口縁片2点（図160）は注意を要する。

2点の土器片は、頸部までも残っていない小片で、なお、内外とも器面は剥落していて時期比定は難しい。私はやはり纏向1式新相（第五様式末）とみるが、口縁端部の新しい要素を重視すれば、纏向1式と同2式の境界線上におくのが妥当かもしれない。少なくとも

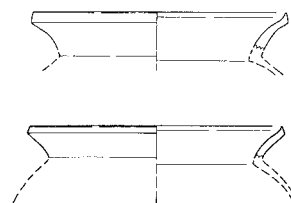


図160 纏向石塚古墳第8次調査  
墳丘盛土内下層出土土器（1／4）  
註2文献より



も庄内型甕の典型例とは言えない。

纏向石塚古墳の周辺数百メートルには纏向1～5類（弥生五様式末、庄内式、布留1式）の土器片が分布している。もし、纏向石塚古墳が纏向3～5類（庄内2・3式、布留0式）の築造であったとすれば、墳丘内にだれでも識別できるいわゆる庄内甕胴部片が1点もないのは何故か。墳丘内に3600点余の土器片が含まれているので、居住地外から採土したとは考えられない。なお、私自身、「纏向検討会」のとき3600点余の土器片をすべて手にとって観察したことは勿論である。

私は、1976年刊行の報告書『纏向』で纏向石塚古墳の築造年代を次のように述べた。

周濠内の「完形土器（3点）の時期は纏向1式期であり、破片の中には少量の同2・3式期のものがある。従って、同周濠、ひいては古墳築造の時期は纏向1式期である可能性が高い」（512頁）。

周濠全体が植物層に覆われる5世紀後半までは、周濠はオープンであったため纏向2・3式の土器片が混入する余地があった、と考えた。

1996年に行われた墳丘内土器片3600点余に庄内甕胴部破片が1点も含まれていないことによって上記の想定が補強された。

（石野）

#### 【註記】

- 1) 石野博信・豊岡卓之『纏向』第5版補遺 奈良県立橿原考古学研究所1999

なお、纏向1～5類と旧纏向1～4式の併行関係は、石野博信『邪馬台国の考古学』吉川弘文館2001より転載し、文末に示した。

- 2) 橋本輝彦「纏向石塚古墳第8次調査の概要（纏向遺跡第87次）」『平成8年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会1997

表107 2～4世紀の纏向様式土器編年と古墳（大和）

旧編年	新編年	土器の特色	古 墳					
180	1 式	(古)	1 類 (前)	最後の長頸壺と小形長頸壺の流行	卑弥呼即位			
		(新)	(後)					
210	(古)	2 類	(前)	小形器台・小形丸底鉢の登場	纏向石塚古墳			
			(中)	庄内大和形甕の登場				
	2 式	(中)	3 類	(前)	ホケノ山古墳	纏向勝山古墳？		
				(中)			庄内大和形甕の増加	
				(後)			高坏の坏底面の水平化	卑弥呼遺使
				(新)			(前)	小形器台の定式化 外面ハケ調整の庄内大和形甕
250	(古)	4 類	(中)	口縁端部の肥厚した布留式甕の登場	東田大塚・纏向矢塚古墳	卑弥呼死		
	(新)		(後)	箸中山古墳	台与遺使			
280	4 式	(古)	5 類	(+)	小形精製土器セットの完成	桜井茶臼山古墳		
				(前・後)		下池山古墳		
				(中・前)		黒塚古墳		
				(中・後)				
340	(古)	(+)	奈良盆地での小若江北式段階	椿井大塚山古墳				
	(新)		小形精製土器セットが失われる段階(布留式設定資料段階)					

(石野・豊岡卓之作成)

### 第3節 纏向石塚古墳の築造時期について

#### (1)

最初に、私の纏向石塚古墳の築造時期についての理解の変化を簡単にまとめ、纏向石塚古墳築造時期に関わる従前の論争史での関わり方を明確にしておきたい。考古学的解釈は常に発掘調査によって更新される新資料によって変更を余儀なくされる性格のものであるが、こと纏向石塚古墳に関しては各研究者間でもこの行為が等閑視できないと思うからである。

私が榎原考古学研究所に入所した夏に参加した1976年の第3次調査の頃は、纏向石塚古墳は「纏向1式」の築造であることを信じて疑わなかった。その成果はすでに本報告に詳しいが、結論的には上下層の差を一次的祭祀と二次的祭祀の結果と考えた。しかしこの判断は、とくに第2次調査における南側周濠での黒粘Ⅱの土器群が纏向1式であるとされてきた前提に縛られた解釈であって、すでに概報段階から黒粘Ⅱと砂礫層の分離不可能な一括木製品のプライマリーな存在状況には正直不安を持っていた。その後纏向石塚古墳の発掘調査は長い空白期間があり、新たな展開は1989年の第4次調査を待たねばならなかった。

しかしこの間に、私にとっては纏向石塚古墳の築造時期を見直す根本的な進展があった。1980年の田原本町矢部遺跡の発掘調査で庄内Ⅱ式と布留Ⅰ式の間を埋める良好な一括資料に直面した私は、その土器群の甕に布留形、庄内形、そして弥生（第五様式）形が共存することを確認し、その整理作業と報告書をまとめるなかで、これらの土器群に対して「布留0式」の様式名を与えた<sup>2)</sup>。つまり、纏向石塚古墳第3次調査周濠の土器は弥生（第五様式）形と庄内形をも含めて一括として取り扱うことも可能だという認識である。この認識は纏向遺跡の歴史的評価を行った論文に、纏向石塚古墳の築造時期を纏向2式として反映させることになる<sup>4)</sup>。

そもそもそのように考えた根底には、第1次調査西側周濠下層土器群の報告（以下、『纏向』と略称する<sup>5)</sup>）への疑義があった。その土器群のなかにはすでに布留形甕が含まれて報告されており、その存在が気になっていたからである<sup>6)</sup>。このときから私は纏向石塚古墳の周濠最下層・下層土器群は布留0式段階までを射程に入れて再検討すべきだと考えるようになった。しかし、纏向型前方後円墳論をはじめて公にした1988年でも私は、纏向石塚古墳を纏向古墳群中最古としながらも「庄内2式ないし3式」に終始している<sup>7)</sup>。第1次調査の西側周濠下層土器群の布留形甕の存在に考えあぐねつつ、第2・3次調査の結果に呪縛されていた時である。

こうしたなか、1989年4月、第4次調査（クビレ部北側周濠）がおこなわれた。調査内容はすでにふれたとおりであるが、ここで決定的な出土状況に遭遇する。黒粘Ⅱをまったく欠き、南側周濠と同様の内容をもつプライマリーな遺物群が最下層の青黒色シルト層と植物腐植土下層から布留0式土器群（後述する古相）を伴って検出されたのである。さらに古墳築造時に設置された導水溝からは布留形甕を欠く土器群（庄内3式と認定）が出土し、築造そのものは庄内3式との感触を得ることになった<sup>8)</sup>。さらに墳丘盛土内からも庄内式段階の高坏などを検出し、築造が纏向1式（＝庄内0式）に遡る可能性は皆無と確信した。私にとっての纏向石塚古墳築造時期の枠組みはこのときほぼ決定し同年10



月に刊行された第4次調査の概報で明記されることになる。<sup>9)</sup>

1992年4月には石野博信氏の退職を記念して纏向遺跡の検討がなされた。当然そのなかで纏向石塚古墳の築造時期についても議論がなされ、私はそれまでの周濠出土土器を層位ごとに整理し、築造は「布留0式以前、庄内3式の可能性濃厚」との考えを改めて整理して発表した。<sup>10)</sup>

さらに、1995年に担当した箸墓古墳前方部北側斜面と周濠の調査では良好な布留0式の土器群を層位的に検出し、布留0式の新旧の様相差を提起した。これによって纏向石塚古墳周濠出土土器群は改めて布留0式古相と位置づけることになった。これを受けて2000年には一般概説書に纏向古墳群の築造序列を予測した。<sup>11)</sup>そこでは勝山古墳・矢塚古墳（庄内2式期）→纏向石塚古墳・ホケノ山古墳（庄内3式期）の序列を考えたが、現在ではこれら四古墳の築造順を決める積極的な根拠は乏しく、ほぼ大枠で庄内3式の横並びで考えるにいたっている。ただし、うちいずれかが庄内2式期に遡る可能性までを全否定はしない。

## (2)

纏向石塚古墳の築造時期については未だに決着をみない。この間、わずかに石野博信氏と私の間で応酬があったのみである。まず、纏向石塚古墳纏向1式期築造説に対する私の批判的見解（註9・10など）についての石野氏の批判的短文（石野A論文と呼称）、<sup>12)</sup>それを受けて私の反論、<sup>13)</sup>さらにこの短文に対しての石野氏の手厳しい批判（石野B論文と呼称）<sup>14)</sup>という形で進んだ。その後、議論は等閑に付されてきたが、<sup>15)</sup>私自身は前方後円墳出現論を展開するなかで再度この問題を取りあげ、石野論を詳細に検討、批判するなかで纏向石塚古墳の築造時期についての持論を展開した。<sup>16)</sup>ここでは、その論点のみを概説することとして、詳細については前掲書を参照いただければ幸いである。

纏向石塚古墳の築造時期に関して石野氏との論点となった4点の内容と氏の主張、私の見解は以下の通りである。

**1. 纏向石塚古墳第2次調査クビレ部南周濠内下層（黒粘Ⅱ）の完形土器3点は纏向1式であり、共存する纏向2・3式土器は後の混入である。**

もしこの土器3点（正確には4点）だけで無理矢理に所属様式を言えといわれれば私も「纏向1式」の可能性が大きいと言うだろう。「可能性」とするのは、広口壺（5・6）、底部指頭痕をもつ小形鉢（8）、極小形弥生形甕（7）だけでは様式確定の確実な決定権がないからである。

そこで私は、周濠「下層」の出土土器全体を様式決定の対象にしたのである。第3次調査クビレ部周濠、第4次調査クビレ部北周濠、そして第1次調査の「下層」も含めてである。私は議論の核心の一つは、周濠「下層」と一括された堆積層のなかでの各層の上下関係が、石野氏が想定するように土器様式ひいては年代差に反映するかどうかであると思っている。

というのも、第3次調査クビレ部南周濠の砂礫層からほぼ完形の庄内形甕1点が出土しているからである。しかしクビレ部南周濠の黒粘Ⅱの上には砂礫層が薄く堆積し、さらにその上には植物層が覆うのは、第1次調査西周濠内の堆積状況もほぼ同様であり、<sup>17)</sup>この資料を提示するまでもなく、『纏向』第1次調査西周濠内出土の図111上段には「黒粘」、「砂2」、「灰砂」などの層から出土した「下層」の

土器が並載されている。これらの資料は当然、植物層より下の黒粘Ⅱと粗砂層群の土器群とみるべきであろうから、そこにある明らかな庄内形甕（7～9：しかも口縁部形態からすると新相）や私のいう庄内影響甕（6）は無視できない。また、16は庄内様式通有の有段口縁高坏であるから、すでに黒粘Ⅱが「纏向1式」の可能性は絶無であって、庄内式の最古相だとの主張も成り立たないと思っている。それだけではない。何度も言うように、この「下層」には布留形甕（10・11）までもが含まれていることだ。

しかし石野氏はB論文で、西周濠の纏向1式土器片と2・3式土器片との比率は45片：17片で、後者がオープンであった周濠への後の混入であることはすでに『纏向』段階で説明済みであるとされた。議論の第二の核心がここにある。

考古学理論の原理原則では共存（Association）の時期決定は最も新しい型式によってなされる。たとえ古墳の周濠や井戸といった開口時間が長いと予測される特殊な遺構の最下層という条件があるとはいえ、新しい型式群を後の混入という解釈をとるのであればそれなりの根拠が必要ではないか。さらにはこの「共存（Association）」の内容じたいが、時間的に古い様式群（纏向1式）と新しい様式群（纏向2・3式）に確実に分離できるという保証のない決定権を欠く型式資料であるのだからなおさらなのである。石野氏は、この問題はすでに木下氏との過去の論争<sup>18)</sup>で回答済みだという。しかしそこでの回答は、纏向石塚古墳の個別土器と層位との関係や型式把握、出土状況の検討といった纏向石塚古墳に特化した議論ではなく、層位か型式かといった観念的な議論に終始している。

ふたたび論点を戻そう。問題はクビレ部南周濠「最下層」の黒粘Ⅱの土器群をもって「纏向1式」を主張するのか、それとも黒粘Ⅱが欠落する周濠の「最下層」資料をも含めて総合的に判断するかであろう。ただしすでに述べたように、前者の場合でも「纏向1式」の可能性はなく、庄内式（それも古相の可能性は小さい）である。その上で、後者の立場をとる私の主張はこうである。纏向石塚古墳のクビレ部南周濠から西周濠にかけての最下層は黒粘Ⅱであるのに対して、クビレ部北周濠から東縁部の最下層は青黒色シルト層ないしは植物層である。にもかかわらず木製品や土器が集中して投棄されている。クビレ部南周濠や西周濠では植物腐植土層出土の遺物はほとんどない。クビレ部南周濠とは全く異なった遺物出土状況である。しかしこのことは、まとまった廃棄行為が層ごとに時間を追って行われたものでないことをも同時に物語ることになる。

つまり、たとえ最下層の堆積土は異なっても、クビレ部北周濠の「最下層」からは建築部材（柱、垂木、板材など）や農具（鋤、鍬、横鋤など）、祭祀的性格の考えられる木製品、赤色顔料の付着した削り屑などが土器とともに大量に、そして機能・行為面としてプライマリーな状態で検出されたと評価されるべき資料であり、その検出状況はクビレ部南周濠と何ら変わらないのである。畢竟、クビレ部の南北両側周濠への遺物の投棄という点では「廃棄行為の同時性」を示した資料というほかはないのである。私は層位に差があろうとも、濠底の最下層にあってこのようなプライマリーな出土状況を示しているのであれば、当然、廃棄の一括同時性はまず尊重されねばならないと考える。その時期はとなれば、当然この一括性のなかで唯一様式論として矛盾なく解釈可能な「布留0式古相」と

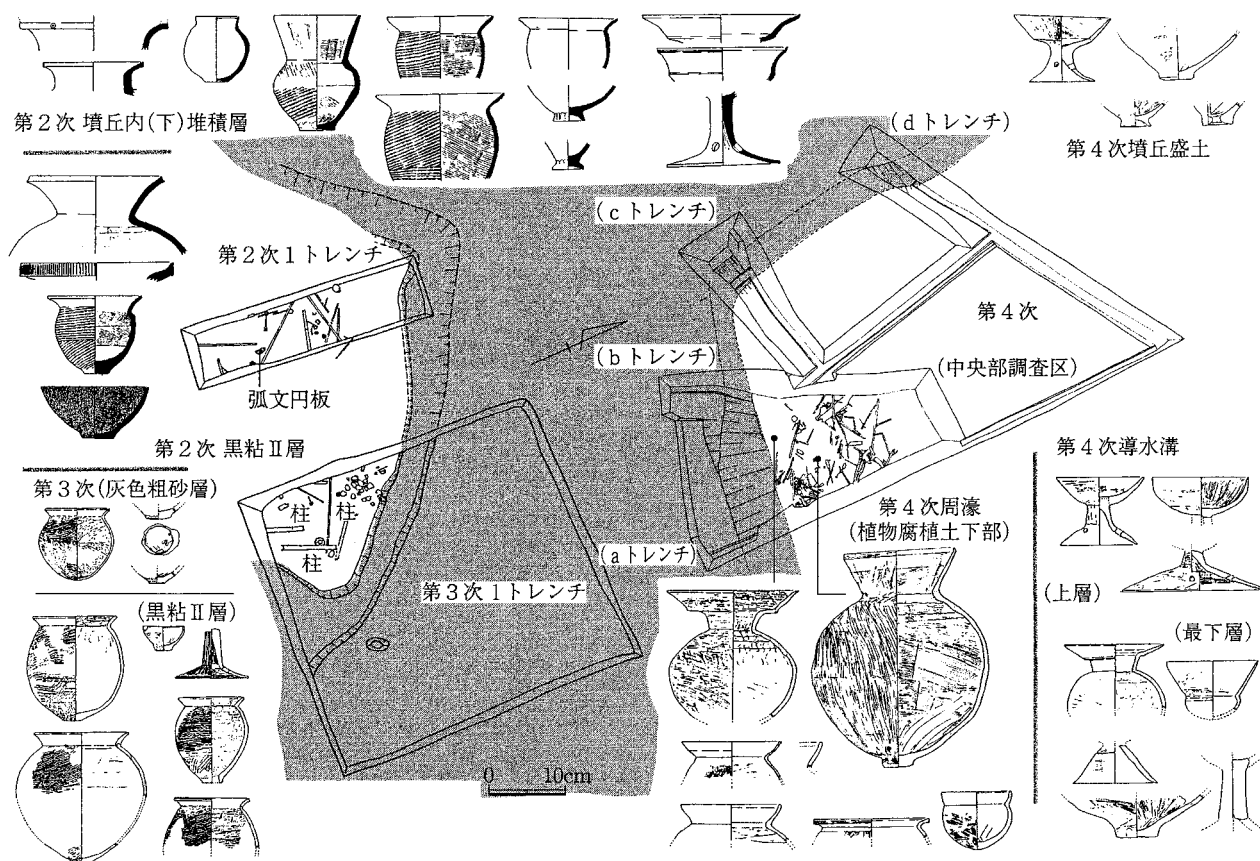


図161 纏向石塚古墳クビレ部の遺物出土状況と出土土器  
(石野・関川編1976、萩原・寺沢編1986等々から寺沢作成)

判断せざるをえないのである。

ところがもし前者の立場にたつのであれば、墳丘を築造した「纏向1式」(くどいようだがこの場合も庄内式とすべき)に、建築部材や祭祀的木製品などとともに土器を南クビレ部から西側周濠にかけてのみに投棄し、その後継続的な投棄ないし流入は全くなく、あらためて数十年後の布留0式期になってふたたび、まったく同じような組成の遺物群の投棄行為が今度はクビレ部北周濠にのみなされたということになる。しかしこうした推定は非現実的であるし、その二回の行為と廃棄場所の差が何に起因しているのかを説明することは簡単ではない。赤色顔料の付着した削り屑多数が、北側と南側双方の遺物群のなかに同等に認められる事実も、両者を時間的に切り離しては考えがたいことを示している。

また本報告書でも記載したように、第3次調査クビレ部南周濠の建築部材は濠底から少し浮いた状態で、しかも上端は砂礫層にまでおよんで東から斜めに投棄されている。周濠堆積をパックする結果となったと判断された植物層下の「下層」においては、その所属層位を絶対視することが危険であることの証左でもあろう。私が纏向石塚古墳の周濠への遺物群の投棄行為は一時的、一体的なものであり、その時期は布留0式古相だとする理由は以上の通りである。

## 2. 周濠出土の弧文円板の文様構成は楯築古墳の弧帯石の文様に直続する。

石野氏は『纏向』の宇佐晋一・斎藤和夫氏の弧帯文の年代観を主張する、弧文円板文様から楯築墳



丘墓の弧帯石（旋帯文）へというシェーマは、「文様論として否定されたとは思えない」と述べた。共伴遺物も纏向1式と鬼川市3式の間は、「一形式をはさむほど大きくない」から、いぜん宇佐・斎藤論は成立するとの立場である。また、弧帯文の変遷は弥生中期末以降、一系的とはいき切れないという豊岡論<sup>19)</sup>の方が説得力があるともいう。

唐古・鍵遺跡第13次調査SD-02出土の第Ⅳ-3ないし4様式の高坏坏部や、大阪府亀井遺跡SD-3010出土の第Ⅴ-1様式の壺肩部に付せられた原弧帯文様の存在から、吉備での弧帯文の一系的出現と変遷に疑問を呈した豊岡論<sup>20)</sup>の骨子は十分評価に値する。しかしそのことが弧文円板の文様が「纏向1式」段階のヤマトでいち早く成立したことの根拠にはならない。なぜなら、原弧帯文様と纏向石塚古墳の弧文円板文様との間には、時間的にも、型式学的にも隔差が大きすぎ、系列的にどのように繋がるのか中間資料がなく全く不分明であるからである。はたまた楯築墳丘墓の弧帯石文様の出現に系譜的にどのように関わるのかもまったく不明なのである。

さらにいえば、この文様が一つの完結した流れとして器物に定着し、真っ先に王のなかの王たる墓に特殊器台として樹立されたのは楯築墳丘墓であることは疑いない事実であるのだから、それとの比較をまず検討しなければならないはずである。だが少なくとも現在、豊岡氏をも含めて纏向石塚古墳の弧文円板文様が楯築墳丘墓弧帯石文様の源流になるとの文様論上の認識などない。

ちなみに私は、弧帯文様の本質と基本理念は銅鐸が有していた二元的世界の統合という観点にあるのであって、弧文と直線文という二元的要素を一体化させる方法が複雑化（①二元的別世界構成→②二元的世界の並列的構成→③二元的世界の同化と複合化→④その複雑化→⑤その退化）する方向こそが弧帯文の型式変化の実態であるとの立場から、強いていえば、③④段階であるいわゆる向木見型の段階こそが文様としての確立期かつ盛行期であり、多様化のピークであると考えている<sup>21)</sup>。

したがって弧帯文の文様系譜を複数系化し、いかに系列を細分化して従来の編年案を再編しようとも、纏向石塚古墳の弧文円板の文様構成段階は、特殊器台でいえばいわゆる向木見型の段階に対応するものであって、立坂型のなかでも最古型式となる楯築墳丘墓の弧帯石文様との間には、土器でいうと細別二様式は介在するほどの時間的隔差があるものと理解している。弧文円板の文様型式から纏向1式（あるいは庄内式古相をも）を導き出すことも現状では不可能に近い。

### 3. 第8次調査の墳丘内の3600点の土器片には庄内式は全く含まれず、大半は第五様式系土器と纏向1式土器であるから築造は纏向1式である。<sup>22)</sup>

石野氏はB論文で、「1片の内面ヘラ削り甕」と「庄内形甕口縁片2点」の存在を認められたものの、それらは「庄内型甕の典型ではなく」「庄内甕になりたがっている5様式甕<sup>23)</sup>」であって、「纏向1式と2式の境界線上」の土器であるとする。そのうえで「なぜ墳丘内盛土に古墳周辺に多量に含まれている纏向2式（庄内式古相）から布留1式土器がないのか。仮りに寺沢氏の指摘通り、庄内型甕口縁部片2点があったとしても、なぜ3600点のうちのたった2点なのか。なぜ、小片でも識別の容易な庄内型甕の胴部破片が全くないのか。納得できる説明をして頂きたい」という。この点ではどうやら第8次調査担当者の橋本輝彦氏も共通した理解のようである。

しかしこれは無理な注文である。墳丘盛土がどのような方法と経緯で採掘され、纏向石塚古墳に盛り上げられたのが考古学的に明らかにされていない以上回答のしようがない。「古墳周辺に多量に含まれている纏向2式（庄内式古相）から布留1式土器」というが、周辺の当該期の遺構は不分明であるし、それは必ずや削平されて多量に混入されなければならない状況にあったのかの証明すらできないからである。

強いて回答を迫られるのであれば、私などはむしろ想像を逞しくして、纏向石塚古墳第8次調査出土土器の速報（以下、『8次速報』と呼称）において、<sup>24)</sup>「墳丘下湿地層出土」とされた土器9点のうちのNo.43（本報告書の第8次調査土器実測図109-7）の土器が、図示どおり有段高坏口縁であるなら庄内式古相の可能性があるという点を除けば、そのほかは纏向1式の可能性があり、そのような土器を含んだ遺構や土層の土砂が周濠の掘削に伴ってまとまって墳丘に供給され、圧倒的多数の纏向1式らしき土器片が墳丘内から出土する理由と考えられることになる。

ところで地点は変わるが、ホケノ山古墳でも報告書に図示された墳丘内出土土器片49点中、「纏向2類」と認定されたのは内面ヘラ削りを施したという突出平底甕底部1点であり、他はすべて「纏向1類」とされる<sup>25)</sup>。私はこの編年案には与しないが、要は48点は一般的には纏向1式（≡庄内0式）の標準的特徴を示すと考えられている土器群なのである。しかも内面ヘラ削りとされた1点の甕底部の内面調整は、じつは板状工具による搔き取り手法（いわゆる「クモの巣状刷毛目」の手法による「搔き目」）であって弥生後期土器に顕著にみられ、庄内式以降の削り技法とは本質的に異なるものである。

さらに図示された盗掘坑、攪乱坑、表土出土の土器片のうち中近世土器を除く118点中、内面ヘラ削りを施した甕は胴部破片2点（1点は外面羽状タタキ成形）が認められるだけである。そのほとんどが弥生土器第Ⅵ様式から庄内0式と考えられるものである。庄内式と考えられる加飾二重口縁壺数点が含まれるが、これらは築造時に伴うものかもしれない資料である。つまり、庄内3式の築造（布留0式論者であればなおさら）が明らかなホケノ山古墳の場合も墳丘内の土器は圧倒的な数量が「纏向1式（≡庄内0式）」と認識される土器でしめられるのである。これは一つの現象でしかないが、この状況は真摯に受け止める必要がある。

ただ私はこうした考古学的現象が、墳丘内のすべての土器の所属時期までを正確には示していないと思っている。ホケノ山古墳の場合、わずか2点の庄内形甕破片が存在することは、認定の困難な広口壺、高坏、弥生形甕、小形鉢等々の破片のなかにも実は一定量の庄内式様式を構成する土器片が含まれているはずだと思うからである。庄内式古相の土器群とはそうした様式的構成を少なからず内包するものであり、確実性のある庄内形甕のみでその量を推し量ることはできない。纏向石塚古墳墳丘の庄内式以降の土器片は本当に3600点中3点なのだろうか。じつはここに、膨大な資料から絶対性のある資料のみをピックアップして、残りすべては纏向1式だとする思考と統計のマジックがある。こうした統計的議論をする時には目線を変えて検討する謙虚さも必要である。

すでに『8次速報』において掲載された土器だけでも、No.5（本報告書の第8次調査土器実測図115-266：以下、カッコ内の番号は本報告書第8次調査での実測図番号を示す）はすでに指摘済みの内面

ヘラ削りの庄内形甕ないしは庄内式影響弥生形甕であるが、No.4、7、17、25（115-282、115-288、111-87、111-91）などは庄内形甕あるいはその影響弥生形甕の可能性もあろうし、No.15（109-16）と21（110-63）などは庄内式でも新しい段階の影響弥生形甕の可能性すらある。No.10（116-323）の吉備形甕も型式的にはオノ町Ⅱ式相当と考えるべきであり、私案では庄内式新相に併行するもの<sup>26)</sup>と考えている。纏向1式併行の可能性はほとんどあるまい。No.31（111-189）の高坏もS字状に近い摘み上げ口縁と鉢状の形態から庄内式のものではないか。頸部の細くしまったNo.3（113-226）や肥厚して垂下するNo.13（109-21）の加飾二重口縁壺も畿内形系譜ではないので、畿内の弥生的伝統系譜下にある纏向1式の二重口縁壺ではなく庄内式段階とみるのが妥当であろう。弥生形甕や小形鉢、直口壺、広口壺にいたっては型式認定は不可能なはずである。

つまりもし庄内式の可能性を最大にとるのであれば、『8次速報』の纏向石塚古墳墳丘内出土土器38点中13点は庄内式ということになる。それに対して、あえて意地悪くいうならば、纏向1式の可能性を強く主張せねばなければならない土器片はNo.9（118-373）の高坏くらいだということもできるのである。纏向石塚古墳の場合は破片3600点中とはいっても図示可能な（された）墳丘内出土土器片はわずかに36点（ほかに2点の庄内形甕口縁部破片あり）であり、図示された破片の残存度はホケノ山古墳の場合と大差ないのである。

本報告書には、第8次調査の纏向石塚古墳墳丘内出土土器と古墳築造直前の下層包含層出土土器が網羅されている。確かに甕に関していえば、弥生形甕が圧倒的に多い。『纏向』報告書の時点で認識されたセリエーションからすれば、「纏向1式」と認定されるのも無理なからぬことかもしれない。しかし最も先進的な都市遺跡と考えられる纏向遺跡でさえ、庄内式段階に（布留0式段階でも）弥生（第五様式）形甕が一定の比率で伴出することはその後の調査でも紛れもない事実である。すでにこれらの出土土器を瞥見したときからの感覚で言えば、さらには逆にそうした目で図示された土器を見るのであれば、庄内式古相の可能性のある候補はさらに浮かび上がってくるに違いない<sup>27)</sup>。

そこで繰り返し主張しているのが、既往の調査で出土した墳丘盛土内の3点の高坏（『纏向』報告図111-10・11と第4次調査図60-1）である。前者は第8次調査で指摘した高坏（111-189）に近く、明瞭に摘み上げた口縁と顕著な稜線に特徴があり、後者は直線的に大きく外傾して立ち上がる口縁部に庄内式古相以降の特徴がある。とくに前二者に対しては「古墳築造直前の弥生時代後期（第5様式）の包含層」との認識（記載）もあり、もはや墳丘内（あるいは墳丘下）出土土器だけから判断しても古墳築造が纏向1式に遡る可能性はなく、遡っても庄内1式（纏向2式）であり、土器の組成からみれば少なくとも庄内2式までは射程に入れるべき土器群とすることができるのである。

### （3）

最後に、纏向石塚古墳の築造時期を考えるうえできわめて重要かつ興味深い第9次（纏向遺跡第144次）調査の成果についてふれておきたい。第9次調査は周濠の前方部の東外側ラインを確定させることが目的で実施されたが、470㎡というまとまった調査区内で2基の方形周溝墓と1基の古墳周濠（石塚東古墳）が発見された<sup>28)</sup>。石塚東古墳の墳形は不明だが周濠内出土の埴輪から5世紀後半代の築造で



あることが判明した。注目すべきは2基の方形周溝墓である。方形周溝墓2の周溝は北西辺6.5mが検出されたが、第4次調査第4トレンチで周溝が検出されていないことから纏向石塚古墳前方部周濠外側ラインに沿って収斂する一辺7.8m程度の方形周溝墓が復元できる。つまり、方形周溝墓2が纏向石塚古墳周濠に規制されて築造されたことは明らかであろう。周溝内の出土土器からその築造が布留0式期と考えられていることと矛盾はない。

ところが方形周溝墓1は一辺（東辺）約8mの方形周溝墓で、南辺は明らかに纏向石塚古墳周濠に重複する。周溝内の出土土器から庄内3式期と考えられているが、残念なことに周溝内堆積層は纏向石塚古墳周濠上層の中世堆積層によって切られており、構築の前後関係を堆積層の重複関係で確認することはできなかった。方形墓が前方後円墳や前方後方墳の築造後、周辺にとりつくように築造される例は枚挙にいとまない。しかしその逆もまた存在する。私はこの場合、①方形周溝墓1の周溝方向が、後築された方形周溝墓2のように纏向石塚古墳周濠外側ラインの形状に規制されていない、②一辺8mで復元した場合、墳丘（台状部）じたいの多くの部分が纏向石塚古墳周濠に重複してしまい、後築の場合、開口状態にある纏向石塚古墳周濠に周溝が開削されるという不自然さに違和感を禁じ得ないことから、纏向石塚古墳築造以前の築造の可能性が高いと考えている。

この想定が正しければ、纏向石塚古墳の築造が庄内3式であるとの主張は決定的となる資料であろう。しかし百歩譲って方形周溝墓1の築造が纏向石塚古墳構築後であった場合でも大きな時間差を想定することは難しい。多くの事例をみれば、盟主的前方後円（方）墳の周囲への方形墓のとりつきは土器様式でいえば同様式か一様式差であることがほとんどであるからである。

以上、周濠内各所の出土遺物の出土状況や評価、墳丘内（下）出土土器の評価、周辺遺構をも含めた各遺構の評価、いずれの観点からも纏向石塚古墳の築造が纏向1式（庄内0式）期に遡る可能性は絶無であり、庄内式古相（庄内1・2式）の可能性もきわめて低いものと考えざるを得ないという結論に達した。そうであるならば、やはり導水（溝）遺構出土の土器群の様相（庄内3式の可能性）が築造時期を最も直接的に表徴している土器群とみることができ、総合的な検討からも築造時期は庄内3式期<sup>28)</sup>と考えることが妥当といわざるを得ないのである。（寺沢）

#### 【註記】

- 1) 久野邦雄・寺沢薫編「纏向遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1976年度』奈良県立橿原考古学研究所 1977
- 2) 寺沢薫編「田原本町矢部遺跡発掘調査概報・薬王寺・十六面地区試掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報 1980年度』奈良県立橿原考古学研究所 1982
- 3) 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊）奈良県立橿原考古学研究所 1986
- 4) 寺沢薫「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』第四 吉川弘文館 1984
- 5) 石野博信・関川尚功編『纏向』桜井市教育委員会 1976
- 6) その当時、この点について石野博信、関川尚功から、周濠は植物層が形成される布留式段階まで開放されていたことから、「混入、沈殿した」混淆資料との理解を教示されたように記憶している。
- 7) 寺沢薫「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』（同志社大学考古学シリーズⅣ）同志社大学考古学研究室 1988、「大和における現状と纏向型前方後円墳の出現と拡散の意義」『定型化する古墳以前の墓制－第三分冊発表要旨－』（第24回埋蔵



文化財研究集会) 埋蔵文化財研究会 1988

- 8) 私は石野氏が誤解されたように、纏向石塚古墳の築造時期を布留0式に固定したことは一度としてない。
- 9) 萩原儀征・寺沢薫編『纏向石塚古墳範囲確認調査(第4次)概報』桜井市教育委員会 1989
- 10) 寺沢 薫「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊) 奈良県立橿原考古学研究所 1986、寺沢薫編『纏向遺跡をめぐって―「石野博信さんと語る会」座談会資料―』奈良県立橿原考古学研究所 1992
- 11) 寺沢薫『王権誕生』(日本の歴史02巻)講談社 2000
- 12) 石野博信「3・4世紀の大和と朝日谷2号墳」『朝日谷2号墳―前期古墳を探る―』松山市立考古館 1997(『朝日谷2号墳』報告書 松山市教育委員会 1998年に再録)、石野博信「やっぱり纏向石塚古墳は古かった」『青陵』第101号 橿原考古学研究所 1999
- 13) 寺沢薫「纏向石塚古墳築造年代のゆくえ」『東アジアの古代文化』第100号 1999
- 14) 石野博信「奈良県纏向石塚古墳、墳丘盛土内の土器群に対する評価」『古代学研究』第150号 2000
- 15) この間には、第8次調査の墳丘内土器の評価をめぐっての石野氏と鷺崎弘明氏との論争をも生じた。圧倒的多数の「纏向1式」土器の存在を主張する石野氏に対して、1片でも新しい土器が伴出すれば、新しい土器を以て時期決定を下すというのが考古学のセオリーだとする鷺崎弘明氏の主張は、やはりよほどの条件提示がない限りは鷺崎弘明氏の方に分がある。しかし、総括的な築造時期の議論とはなり得なかった。
- 16) 寺沢薫「第二部第四章 前方後円墳出現論」『王権と都市の形成史論』吉川弘文館 2011
- 17) ただし、西側周溝では粗砂層は黒色粘土層Ⅱの上ではなく、間層として図示されている。黒色粘土層Ⅱと粗砂層が必ずしも大きな時間差をもつものではない可能性がある。
- 18) 木下正史「書評『纏向』」『考古学雑誌』第64巻第1号 1978、石野博信「奈良県纏向石塚古墳と纏向式土器の評価―木下正史氏の批判に答える―」『考古学雑誌』第64巻第4号 1979
- 19) 豊岡卓之「都月形埴輪の紋様変遷」『古墳のための年代学―近畿の古式土師器と初期埴輪―』(平成11年度秋季特別展図録) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1999
- 20) 豊岡卓之「弧帯文の性格とその分布」『考古学と移住・移動』(同志社大学考古学シリーズⅡ) 同志社大学考古学研究室 1985
- 21) 『青銅器のマツリと政治社会』第三部第二章参照(初出は寺沢薫「首長霊観念の創出と前方後円墳祭祀の本質―日本の王権の原像―」『古代王権の誕生』Ⅰ(東アジア編)所収 角川書店 2003)
- 22) 註15の前論(1999)で纏向石塚古墳墳丘盛土内出土の土器片を3400点としたのは註14の石野A論文(1999)の記載そのままによったものであるが、オリジナルである註28の橋本報文(1997)の3600点を採用する。なお、註16の石野B論文(2000)では3600点と修正されている。
- 23) きわめて細片である2点の甕口縁部破片で所属型式を云々することは難しい問題を孕んでいるが、内面に明確な稜を持つほどの外反「く」字口縁に跳ね上げ口唇を持ち、内面へう削りを施す甕を庄内形甕とせず、あくまで纏向1式の「庄内甕になりたがっている5様式甕」と認識することは、そのプロセスが明示されない以上納得のいく説明とは思えない。この特徴的な甕を第五様式(における弥生形甕:寺沢補)甕の範疇でとらえることは少なくとも、現在到達している「形式」および概念を根底から崩壊させることにもなりかねない。
- 24) 橋本輝彦「纏向遺跡の発生期古墳出土の土器について」『庄内土器研究』XIV 1997
- 25) 北山峰生「墳丘盛土内出土土器・その他」(後出『ホケノ山古墳の研究』所収)
- 26) 柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美『川入・上東』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書16) 岡山県教育委員会 1977。胴部を欠く資料であるが、「く」字状に外反する頸部に内傾あるいは直立して立ち上がり、わずかに肥厚して下垂する付加状口縁が一般的な上東鬼川市Ⅲ式やオノ町Ⅰ式に比べて、本資料の口縁部は頸部からスムーズに内傾気味に短く立ち上がり、外面の退化した浅く二条の凹線文、口唇部を丸くおさめる点などは新しい要素である。しかし反面、亀川上層式のように口縁の屈曲部の肥厚がまったくなくなり、口頸部内面に二段の稜線を有してその下段以下を削る手法ではないことや、下田所式以降に一般的な口縁部外面の櫛状化が見られないなどの点から、オノ町Ⅱ式に比定することが妥当である。私の編年観では遡っても庄内2式に併行する時期である。
- 27) 小稿は、第8次調査の纏向石塚古墳墳丘内および墳丘下層出土土器を実見した段階で成稿したもので、本報告書の第8次調査の報文や観察表をもとに逐一議論した結果ではない。本報告書報文における観察結果や評価との齟齬があれば、それはすべて寺沢の責任であり、その評価についての差違については別の議論が必要になろう。
- 28) 丹羽恵二編「纏向遺跡第144次調査(纏向石塚古墳第9次調査)概要報告」『平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜

井市教育委員会 2006、および本報告書第11章を参照のこと。

- 29) 2006年3月25日の第9次調査の現地説明会資料（桜井市教育委員会）には、纏向石塚古墳の築造年代について、西側周濠の出土土器を評価する考え方（庄内0式：3世紀初頭）、盛土内土器を評価する考え方（庄内1式：3世紀前半）、導水（溝）遺構出土土器を評価する考え方（庄内3式：3世紀中頃）の三説を紹介している。しかしこの現状認識は正確ではない。本項でも展開したように、纏向石塚古墳の築造年代論は特定遺構の出土土器の評価や重視に特化したものであってはならない。上記三ヶ所の遺構に南・北クビレ部周濠出土の土器を含め、個々の資料に対する各自の方法的立場を明示したうえで、その考古学的な評価、解釈、脈絡を矛盾なく説明できる交点に築造時期はおのずと浮かび上がってくるはずであろう。

## あとがき

纏向石塚古墳の史跡指定を契機として報告書の刊行を志してからはや7年もの時間が経ちました。当初の4年間は予算的な裏付けもない状況での整理作業で、当時臨時職員であった橋爪朝子さんと作業を開始したのが平成17年、爾来多くの寄り道をしながら、そして日常の業務の合間を縫いながら細々とした作業を続けてきましたが、最終的には報告書刊行の期限であった平成23年度から桜井市にお越し頂いた（第3・4次調査の担当で本報告の執筆者の一人でもある）寺沢薫先生のご指導と叱咤・激励のお陰でようやく本書をものにすることができました。

実際のところ、本書の作成にかかる記録類の整理や図面の浄書の多くは早い段階に橋爪さんによって形にされていましたが、いざ原稿の執筆に着手してみると古い時代の調査ということも手伝って記録類に多くの不備や齟齬がみられる場合があり、その都度記録の確認や再整理、そして図面や原稿の手直しを行わなければならないというかなりの困難が伴いました。

この多くの問題を解決するにあたり、共に一つずつ記録を確認し、修正作業に対応してくれたのは平成20年度で退職した橋爪さんの後を継いで整理に参加してくれた木場佳子さんです。木場さんには入稿期日が迫り、追い込みに入ってから連日深夜にまで及ぶ作業に従事していただき、編集作業の多くを手伝ってもらいました。

また、本書の作成にあたっては、金原正明先生には短期間にもかかわらず土壌の分析と原稿の執筆を快く受けて頂きましたし、奥田尚先生、光谷拓実先生には別稿より原稿の転載をお許し頂きました。そして、石野博信先生には古墳の築造時期についての原稿をお寄せ頂きました。お陰を持ちまして本書の内容をより充実したものとすることができました。

さて、纏向石塚古墳の調査は本書の刊行を持って一区切りが付きましたが、残された課題は多いと考えています。古墳の墳形確認については墳丘南部分の周濠外肩部の様子が未だ判明していませんし、築造時期の確定も今後の大きな宿題です。そして、何よりも気がかりなのは肝心の古墳そのものが財政的な事情から第1期の整備工事が完了した段階で整備事業が停止したままとなっていることで、これについては今後時期を見てさらに保存と活用の道を探らなければならない最も重要な課題だと考えています。

最後になりましたが、本書には既に報告がなされていた第1・2次調査の資料や、奈良県立橿原考古学研究所によって調査が行われた第3次調査の報告も合わせて掲載させて頂くことができました。資料の掲載や再整理を快く承諾して頂きました石野博信・関川尚功先生、そして奈良県立橿原考古学研究所の菅谷文則先生に記して御礼申し上げます。

この多くの皆様のお陰で世に出た本書が、少しでも今後の研究に資するものとなることを祈りつつ筆を置くこととします。

（平成24年3月 橋本記す）



# 報告書抄録

書 名	奈良県桜井市 史跡纏向古墳群 纏向石塚古墳 発掘調査報告書		
副 書 名			
巻 次			
シ リ ー ズ 名	桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書		
シ リ ー ズ 番 号	第38集		
著 者 名	石野博信 久野邦雄 辻俊和 清水眞一 奥田尚 光谷拓実 寺沢薫 金原正明 橋本輝彦 丹羽恵二		
編 集 名	橋本輝彦（主編）寺沢薫 丹羽恵二 木場佳子		
編 集 機 関	桜井市教育委員会文化財課		
所 在 地	〒633－0074 奈良県桜井市芝58番地 2 TEL0744－42－6005 FAX0744－42－1366		
発 行 年 月 日	平成24年3月30日		

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
纏向石塚古墳 第1次調査	桜井市太田 248－2他	292061	11D－0484	34° 32′ 46″	135° 50′ 10″	1971.12.06～ 1972.03.18	1,028㎡	小学校の移 転新築
纏向石塚古墳 第2次調査	桜井市太田 246－1他					1975.05.15～ 1975.06.04	122㎡	資材倉庫・ 家屋建設
纏向石塚古墳 第3次調査	桜井市太田 242－1他					1976.07.12～ 1976.08.12	272㎡	農業用倉庫 建築
纏向石塚古墳 第4次調査	桜井市太田 253－1他					1989.04.17～ 1989.06.17	700㎡	範囲確認
纏向石塚古墳 第5次調査	桜井市太田 253－1他					1991.09.17～ 1991.11.17	350㎡	範囲確認
纏向石塚古墳 第6次調査	桜井市太田 258他					1992.01.21～ 1992.03.11	131㎡	範囲確認
纏向石塚古墳 第7次調査	桜井市太田 254－1他					1993.12.02～ 1994.02.20	270㎡	範囲確認
纏向石塚古墳 第8次調査	桜井市太田 259他					1996.07.30～ 1996.11.22	402㎡	範囲確認
纏向石塚古墳 第9次調査	桜井市太田 271－1他					2005.12.27～ 2006.03.31	477㎡	範囲確認

所収遺跡名	種 別	主な遺構	主な遺物	特記事項
纏向石塚古墳	古墳	前方後円墳の墳丘および 周濠・方形周溝墓など	古式土師器、木製品など	3世紀代築造の出現期古 墳の範囲確認調査



桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書 第38集

奈良県桜井市 史跡纏向古墳群

纏向石塚古墳 発掘調査報告書

発 行 桜井市教育委員会文化財課

〒633-0074 奈良県桜井市芝58番地の2

TEL 0744-42-6005

FAX 0744-42-1366

発行年月日 平成24年 3 月30日

印 刷 株式会社 明 新 社

〒630-8141 奈良市南京終町 3 丁目464番地



